

【完結】 深紅の協奏曲 ～ディアボロが幻想入り～ 【IF投稿中】

みりん@は一めるん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幾たびの経験を経て、『彼』はここへ流れ着く。

それは偶然か、あるいは必然か。その意図を手繰り寄せた者は。

ここに流れるのは、誰のためでもない。ただ二人のための協奏曲。

・ ジョジョの奇妙な東方Projectより転載です。

<http://jbbbs.livedoor.jp/otaku/11393/>

<http://www28.atwiki.jp/shinatu/ki/pages/1.html>

したらばに投降後、ある程度時間をおいて加筆修正したものをWIKIに保存しており、こちらにはそれを転載しております。

・ タイトルに幻想入りを明記してほしいと意見あったため、変更しました。

・ 16／4／23、最終話投稿。 完結しました。 随時編集はしていかかも。

・ 16／6／14、IFストーリー―地霊編を投稿開始。

目次

— 前奏曲は今も続いている	1
— 前奏曲は今も続いている	2
— 前奏曲は今も続いている	3
— 星の奏鳴曲	1
— 星の奏鳴曲	2
— IIと二と7で奏でる輪舞曲	1
— IIと二と7で奏でる輪舞曲	2
— IIと二と7で奏でる輪舞曲	3
— IIと二と7で奏でる輪舞曲	4
番外 — BGM 4 命蓮寺	
— 風に流れる諧謔曲のように	1
— 風に流れる諧謔曲のように	2
— 風に流れる諧謔曲のように	3
— 嘘と真の三重奏	1
— 嘘と真の三重奏	2
— 嘘と真の三重奏	3
— 嘘と真の三重奏	4
番外 — BGM 3 香霖堂	
— 飛べよ、踊れよ、円舞曲と共に	1
— 飛べよ、踊れよ、円舞曲と共に	2
— 飛べよ、踊れよ、円舞曲と共に	3
— 飛べよ、踊れよ、円舞曲と共に	4
— 真実へ向かうための行進曲	1

263 246 236 229 219 203 182 168 157 148 134 121 107 97 81 70 60 47 29 22 13 7 1

— 眞実へ向かうための行進曲	2	—	277
— 眞実へ向かうための行進曲	3	—	293
— 眞実へ向かうための行進曲	4	—	308
— スカーレットクイーンの迷宮	1	—	322
番外 — BGM 2 三枚の写真	—	—	330
— スカーレットクイーンの迷宮	2	—	343
— スカーレットクイーンの迷宮	3	—	352
— スカーレットクイーンの迷宮	4	—	361
— スカーレットクイーンの迷宮	5	—	375
— 深紅の協奏曲	1	—	391
— 深紅の協奏曲	2	—	401
— 深紅の協奏曲	3	—	411
— 深紅の協奏曲	4	—	425
— ここから始まる幻想曲	—	—	440
— それでももしもが存在するなら	—	—	—
— 無意識に奏でられる即興曲	1	—	445
— 無意識に奏でられる即興曲	2	—	450
— 無意識に奏でられる即興曲	3	—	462
— ただ一人に送られた詠嘆曲	1	—	471
— ただ一人に送られた詠嘆曲	2	—	481
— ただ一人に送られた詠嘆曲	3	—	493
— 21世紀の精神異常者	—	—	503
— 独奏、王に届くこと願い	1	—	524
— 独奏、王に届くこと願い	2	—	536
— 独奏、王に届くこと願い	3	—	545

――前奏曲は今も続いている 1――

――おいッ！ そのの、あぶねえぞ！！

何度も味わった。

――うわあああ！！ 俺は悪くない！ こいつがッ、急にッ！！

何度も抵抗した。

――早く避難するんだッ！ 逃げ遅れるッ！！

すべてが無駄に終わった。

――邪魔するんじゃないやねえええっ！！ そこだげやああああ！！

精神が壊れてしまえばどれほど楽であっただろうか。

――何だ、何か巻き込んだのか……？ ――ッ！！

それはできなかった。

――今更一人二人どうということなからうよ

鎮魂歌はいつまでも続き、終わることはない。

――悪いね。ここはそういう『決まり』なの

そんなバカなことが……オレには、起きている。

オレは、数えることができないほど『死んだ』。オレはあと何度『死

ぬ』のだろうか？

帝王であつたはずの。他はすべてオレ以下だつたというのに。

——逃げなくてもいいよ。どうせ死ぬんだから

『ヤツ』がオレより上の器だつたということなのだろうか？ オレは帝王になるにふさわしい身分ではなかったということなのだろうか？

なんだつていい。今はこの輪廻を止めてほしい。
もう死ぬのは。

——、。、そこから先は知りませんけどね。」

「はっ！(！)は……」

急速に意識が覚醒する。まただ。再び殺される。

どうなるかわかっているのに、つい周りを確認してしまう。避けられないとわかっているのに、どうしても避ける方法を探してしまう。

場所は、森。可能性として大きいのは大型動物、自然災害、そして、人間が何かと勘違いして殺してくること。

「おや……誰か、いるのですか？」
声がかけられ、素早く後ろを振り向く。そこにいたのは『奇妙』と形容するしかない女性。

見たことのない衣装。黄をメインとした、黒の混じった髪色。左手に携える美しい輝きを放つ明かり。

それよりも今の彼に対して大きな意味を持つもの。

右手に携える、女性よりも大きな、鉾。

「人間が、こんなところに……どうしたのですか？」

女性が男に手を差し伸べる。しかし……

「やめろおおお!! オレのそばに近寄るなああー！！！！」

彼女を拒絶する、男の絶叫が森に響く。

「やめろ、近寄るんじゃないッ！ オレを、オレを殺さないでくれッ
!!」

「どうしたのですか!? 私はあなたに危害を加えるつもりではありません
せん!!」

男は拒絶を続け、彼女から離れ続ける。女性は声をかけるが、その
必死な形相、あと一步を踏み込めずにいた。

「オレは、ぐ、うう……」

「だ、大丈夫ですか!? 何か、悪いところでも……」

男は急にうなだれ、地に倒れ伏す。女性は、あわてて介抱に走る。

男の体に傷はない。何故かはわからないが、気を失ったようだ。その
形相は、逃れられぬ恐怖を受け入れたくない、しかし何度も受け入
れてしまっている。これほどの苦痛を受けている悲壮な表情は女性
——寅丸星——もほとんど見たことはなかった。

男は倒れる前、わずかに、呟いた。

「死にたくない……ド……」

「ううん……あれ、ここは……」

和風の一室で、少年が目覚めます。

「ここは……どこだろう? ぼくは確かコロツセオでブチャラティを
……」

少年——ヴィネガー・ドツピオー——は自分にあつたことを思い出す。ボ
スからの指令、セツコの襲撃、ブチャラティを誘導してから、それか
ら……

「それから、えーつと……うう、頭が……」

「おや、気が付いたようだね」

襖が開き、その奥から少女の声が聞こえた。ネズミの耳を付けた彼女―ナズーリン―は吸い飲みと薬を乗せた盆を持って布団へ近づく。

「容態はどうだい？ 森の中で倒れていたと聞いたが。外傷はこれと
いってなかったがね」

ナズーリンはドツピオの傍らに座り、彼の顔色を見る。問題ないと判断したのか吸い飲みの中身を湯呑みに移す。

だが、その説明はドツピオを混乱させるには十分だった。

「森の中？ え、そんなはずはないだろ。ローマの周辺に森なんてないし、そもそもぼくがいたのはコロッセオだぞ。何かあったなら、ケガだつて……あ、あれれ？」

と、自分の体を触ってみるが、確かに外傷はない。ブチャラティに引きずられた時の僅かな擦過傷も、メタリカによる喉の傷も。

その様子をふむ、と見続けるナズーリン。しばらくすると、合点がいったかのように口を開いた。

「ははあ、なるほど。これが噂の外来人つて者か。この辺りでは見慣れない風貌もしているし、何より雰囲気が違う。よかったね、命蓮寺の近くで発見されて」

「……？ は、はあ……」

一人で合点がいつても。声には出さないがドツピオの表情にはありありと浮かんでいた。それを読み取って、ナズーリンは続ける。

「どういう経緯かは知らないが、君は元の世界から幻想郷に入り込んだんだ。詳しい説明は体が元通りになってからでいいんじゃないかな」

「……??」

飲むといい、と先ほど移し替えた湯呑みをドツピオに差し出す。

それを飲んで一息つくくと、ぱたぱたと外から駆ける音が聞こえる。

「ナズーリン、彼は目覚めたのですか？」

星が部屋へと駆けつける。その顔は、純粹に彼を心配する表情だった

た。

「ああ、先ほどね。それにしてもご主人、そんなに病人の前で騒がしくないでくれ。彼にも悪いし、ご主人にも悪い」

「うっ、でもですね、私の前で急に倒れてしまったので、心配で心配で……」

「えーっと、あのう」

二人で話が進んでしまい、蚊帳の外になってしまったドツピオが声をかける。

「ぼくにも現状がわからないのですが、とにかく何かを助けていただけだいたようでありがとうございます。けど、なんだかよくわからないけど自分の体は大丈夫そうなので。ぼくもこんなところで留まっている場合じゃあないんです」

その言葉に、二人は疑問の表情を浮かべた。

「体は大丈夫って、まだ戻っていないじゃあないか」

「ええ。それに、その姿のままでは力も出ないのでは？ もっとも、そんな力を外来人は持つっていると驚きましたが……」

「……え？ それは、どういう……」

ドツピオには話が分からない。だが、二人は先を見ていたからこそ理解できている。その調子で続けようとした。

「だって、あなたが倒れ気を失ってからあなたの体が小さく」とうるうるるるるるるん「え？」

星の言葉の途中で、ドツピオは奇妙な声を上げる。

「あ、電話………すみません、今の電話ぼく宛だと思うんですけど………とうるるるるるるるん」

「……何を言っているんだ君は？ ここに電話はないし、というか今君が「とうるるるるるるるん」……おい、話をまじめにしてもらえないか？」

「いや、大真面目ですよ………とにかく、電話とってもらえますか？」

ドツピオが体を起こし、『電話』を指さす。

その先は、ナズーリンの尻尾の先にぶら下がっている籠の中………一

匹の子ネズミだった。

―前奏曲は今も続いている 2―

ナズーリンは一步下がり、訝しげな目をしてドツピオを睨む。

自分の手下を急に電話呼ばわりするわ、そもそも急に言動は怪しくなるわで相手に献身したくはなくなる。

「何を言っているか本当にわからない……イカれていたのか？ 本当は」

「ぼくは至って真面目ですって……うう、電話を……取らせてくださいよ」

ドツピオは布団から這い上がり、ナズーリンに一步近づく。頭を押さえて苦悶の表情をわずかに浮かべながら、ナズーリンの背後に手を伸ばそうとする。

「意地悪言わないでください、本当にすぐ終わると思いますから……大事な電話なんです、きつと」

「大事も何も、そもそも電話ではないといっているだろう！ さつきから怪しいぞ、君は」

「そ、そうですよ。それに、まだ何か辛いところが残っている様子。布団に戻った方が……」

後ろから近寄り、彼を宥めようと肩に手を置いた星。

その刹那、

鈍い音とともに星の顔面に、鋭い裏拳がめり込まれた。

「ぶげえっ!?!」

「どうしてさつきから邪魔ばかりするんだアーーッ!! 素直によこせッそれで済む話だろッ!?!」

「ご主人!? おまえ、よくも!」

突然ドツピオは怒号を上げ、ナズーリンにとびかかる。

ナズーリンはさらに後ろへ飛び退き、懐から一枚のカードを取り出す。

「視符『ナズーリンペンデュラム』! ペンデュラムよ、私をガードしろッ!」

スペルカードを使用し、首から下げられていたペンデュラムが光を

放ち、巨大化分散する。分散したそれらはナズーリンの周りを取り囲み回転、辺りの家具を弾きながらも身を守ろうと動き始める。

突然で怒りに任せているとはいえ、初めて見た動く物体に足を止めぬ者はそうそういない。突破しようにも破壊は難しい代物だ。かいくぐるにしても、不可思議不規則に動く物体。

あらゆる点で、初見で突破できるものではない！

ナズーリンの自信のある術の一つであり、どうやってこの者を押さえようかと思いを巡らせたその時、ナズーリンは再び驚きを見ることになる。

ドツピオは迷わず直進してきた。

初めて見る謎の物体なぞ気にも留めず、不可思議に動く物体に触れることなく。

「な、なんだと……!?」

驚愕している間にも、ドツピオは距離を詰めていく。

「どうしてこうアホばっかりなんだこの世はツ!! なぜ無駄に他に干渉したかと思えばこちらの願いを融通しようとしなさい!

おとなしく素直に聞いておけば傷も負わずに済むというのによオオオーーツ!!」

「な、なんなんだお前は……! 先ほどとは違う、凄みを感じる、何者なんだ!?!」

ペンデュラムを越えられ、もはやナズーリンを守るものは何も無い。急に飛び掛かってくるとは思わず、ロッドを構えていなかった。

眼前まで迫るドツピオの気迫に押され、もはや成す術なく縮こまるしかなかった。

ドツピオの目的はあくまで後ろの『電話』、ナズーリンの後ろを狙い、その拳を振るう。

何とか身を振じらせそれを回避しようとする。

しかし、それもまた失敗した。

拳は確かに尻尾の籠を外した。

だが、その拳に伴う何か―目に見えない何か―が後ろの子ネズミだ

けをつかむ。

「取ったッ!!」

そのまま距離を取ろうと離れようとし、まだナズーリンの周りを回るペンデュラムにぶつかり、部屋を転がるドツピオ。

ナズーリンもいつまでも縮こまっておられず、吹き飛んだのを確認するとスペルを解除し素早く星のもとに寄る。

「大丈夫か、ご主人!？」

「え、ええ……大丈夫です。あまりに突然でしたのでそのまま入ってしまいました……これでは毘沙門天の弟子の名折れです」

ドツピオを注視しながら星のもとに立つナズーリン。

鼻を押さえ、立ち上がる星。そこにはくつきりと拳の痕が入っている。

「にしても、不思議です。ただの子供の一撃であれば私にここまでダメージを与えることなどできないはずなのですが……」

「ああ、私も不思議に感じる。ペンデュラムの回避行動、ダニーを取る時の何か、そしてペンデュラムを食らった後のダメージ」

部屋の隅に転がったドツピオ。だが大きなダメージは見えない。

ペンデュラムの攻撃を『素手』で『ガード』したのだろうか？ 否、

魔力を込めたペンデュラムのガードは強固であり、ぶつかったとしたならそれなりにダメージはあるはずだ。

「外来人というのはみんなああいうものなのか？ あの緑の巫女も大した能力を持っていたし」

「それはないと思います。あの子は現人神。あの風祝の場合は持っている方が普通と考えた方がいいでしょう。しかし、あの少年にはそういった物は感じ取れませんでした……」

「ハアー、ハアー、手間をかけさせやがる……でも、『電話』は手に入れた」

『ぶつつ びーびーっ』

「おい、やめろ！ ダニーに手荒な真似をしないでくれ！」

子ネズミを鷲掴みし、耳元に当てる。相当の力が込められているの

か、き、と子ネズミは小さなうめき声をあげる。

ネズミ質ができてしまったこの状況で、二人はドツピオにかかることができなくなっていた。

「もしもし、ボスですか？ 今、オレはいつたいてどこで何しているんでしょうかッ!? こう聞くのも変ですけど!」

『……………うううう』

「もしもし、ボス!? どうしたんですか！ 返事をしてください!」
様子がおかしい。

いつもなら的確に指示を飛ばしてくれるはずの、信頼している相手。

今それと電話がつながっているはず。なのに、聞こえてくるのは苦しそうなうめきのみ。

「ボス、どうしたんですか!! オレには『今』がよくわかりません！ 指示をッ!」

『……………事を荒立てるな……………それと、上と、二人で話したい……………そう、伝えろ』

「え、それはどういう……………?」
がちやり。

その言葉で、電話は切れた。

「もしもし!!? ボス? ボスッ!!」

意味が、分からなかった。指示が短すぎるし、結局何が何やらわからない。

それでも、一つの方向が見えた。ボスの判断は今までに一度も間違いを犯したことはない。

ドツピオは子ネズミを開放し、両手を頭の後ろで組む。子ネズミはちい、と小さな声を上げ、ナズーリンのもとに駆け寄っていった。

「ああ、ダニー！ 大丈夫だったかい？ すまないな、守れなくて……………」

「大げさな……………して、どうするつもりですか、あなたは」

状況が変わったことにより、警戒しながらも星がドツピオに歩み寄る。

ドツピオは、ボスの指示通り、素直な謝罪を始める。

「強引な手を使い、申し訳ありませんでした。ボスからもどやされちやいましたよ。ええと、ナズーリンさんでしたっけ？ 無理にあなただの電話取ったりしてすいません」

「……電話じゃあない。ダニーという名前を持っている、立派な私の部下だよ。とにかく、一体何者なんだ君は……おとなしくしていたかと思えば急変して暴力的になったり」

「えーつと……それはあなたが電話を貸してくれなかったからであつて……」

「……はあ、もういい。無事に戻ってきたわけだしね」

ナズーリンはお手上げというように肩をすくめ、ため息をつく。

「もう一度聞きますが、どうするのですか……いつまでもあなたではアレですね。私は寅丸星。こちらはナズーリンです。あなたの名前は？」

星も相手が落ち着いたからか警戒を解き、ドツピオに尋ねる。

「ぼくの名前はドツピオです。ヴィネガー・ドツピオ。それと、願いがあるんですが……ここで一番上の人って誰ですか？ できれば、その人と二人で話したいんですけど」

穏やかに名乗り、自分の目的を告げる。

「上の人って……聖のことかい。だが君みたいな乱暴なやつ、聖の前に連れて行っていいものか」

「そのような言い方はいけませんよナズーリン。大丈夫ですよ、聖なら受け入れてくれるでしょう。私が保証しますよ」

ナズーリンは渋い顔をしていたが、星は快く承諾する。

「あ、ありがとうございます。……僕が言うのもなんですけど、ずいぶんあっさり受け入れてくれるんですね」

ドツピオはあっさり受け入れられたことに対して、少し拍子抜けした顔をした。

その顔を見て、星はくすりと笑う。

「まあ、そういう『決まり』みたいなものですから。じゃあ、案内しましょうか。こちらへどうぞ。ナズーリンは部屋を片付けておいても

「ええですか？」

「うーん、私は不安だよ……」

星はドツピオを案内し、ナズーリンは頭をかきながら片づけの準備を始める。

妖獣である二人はわかっている。

『電話』の相手は存在しない。

二人とも狩猟を行う獣の妖怪であり、その五感は普通の人間を遥かに凌駕している。

その二人の耳に『電話』の話し声は全く聞こえなかった。

その姿はドツピオの一人芝居に見えた。

そして、二人は見ている。

森で倒れていたあの男。星が介抱し、呼ばれたナズーリンが到着した時に起きた現象。

それは言うなれば変態。成人男性がするすると少年の姿に変わっていったことを。

それをわかったうえで、敢えて星は彼を聖に紹介することにしたのだ。

真意はわからない。相手の熱意や感情を読み取ったか。それとも。

「幻想郷？ 幻想入り？」

「そうです。ここではあなたたちの住んでいたところが外の世界と称されるように、こちら側の世界は境界によって隔絶されています。

隔絶されたこちら側の世界を『幻想郷』と呼ぶのです。日本の中にあります。まあ中国とか亜米利加など、国名みたいな考え方で結構ですよ。

そして、幻想郷に入る場合、外の世界では神隠しに逢うなど、『急に行方が分からなくなってしまった』状態になっている、ということですよ」

「……うーん、にわかには信じがたいですけど……」

「ですが、あなたの残っている記憶とその前後のつじつまが合いませんからね。何らかの影響で気を失い、そのうちにこちらに来てしまったと考えるしか……」

そのあたりは、現状では推理のしようがありませんから」

「そうなんですよね。とてもじゃあないけどイタリアから日本に、だなんて唐突すぎるし。あと、時間も気になりますけど……」

「そこもなんですが、こちらとそちらでの年号の数え方が違うので、私にはうまく説明ができないんですよね。あなたと同じ、幻想入りした山の巫女や

人里のハクタク、他にも知識人はいくらか居ますので、そういった方々に聞くのがよろしいかと」

聖と呼ばれる、この寺のトップの元へ向かう途中、ドツピオは星からこの世界についての説明を聞く。

それはざっくりしたものではあるが、ある程度の納得は得ることができた。

結局は「分からないところはほかの人に聞け」ではあったが。

「それから、一番の違いは私たち妖怪の存在ですね。欧風に言えば悪魔とか精霊なんかに近いんでしょうか。

物語や伝承に残る、人ならざる者。恐れられていたり信じられてい

たりはするが、存在していないと思われているもの。そういったものが実際にいるのが

ここ『幻想郷』なのです。もつとも、この言い方はあなた達側からの言い方となります。実際に私たちは存在しているのですからね」「うん、まあ……確かに奇妙な力はさつき体感させられてしまいましたけれど。けどそれも嘘くさいように感じてしまうなあ。

もしここが日本の寺の中じゃあなかったら言われても全く信じませんよ。ただのコスプレ集団と笑われて終わりです」

「こす……う？　ま、奇妙な力といっても、そちらにもあるわけですからね。未知に対したものは多かれ少なかれ畏怖の感情を抱くものですが、あなたはあっさり受け入れているようですよ」

「いやあ、そんなことは……ぼくだって、ボスがいなかったら頭がおかしくなっちゃってたでしょうよ」

軽い談笑をしているかのように、二人は話せるようになっていた。ドツピオが幻想郷に来る前に既に体感していた奇妙な冒険と、星の手柄が成せる技なのかもしれない。

「と、着きましたよ。ここが命蓮寺の本堂で、聖のいる場所です」

そこには、質素であったが、荘厳にも感じられる本堂があった。

それを見たドツピオも、おもわず「ふわあ……」とため息を漏らす。

「さ、この奥です」

星が先を行き、ドツピオを促す。呆けていたドツピオはそれに慌ててついて行った。

本堂に入つてすぐに、三度奇妙な人間が現れる。

グラデーシヨンのかかった髪色、彼女の周りに浮かぶ巻物。

「ようこそいらっしゃいました」

凜とした声で尼僧―聖白蓮―が話す。

「あなたが近くの森で倒れていたという、ええと、ドツピオさんですか？」

「あ、はい」

「先ほど目覚めまして、一悶着ありました後に聖と話がしたい、このこ

とでお連れしました。二人きりで、ということでしたので私はこれで」

聖との受け答え後、星は本堂から下がる。

「改めまして、私が命蓮寺の住職、聖白蓮です。ドツピオさん、お加減はいかがですか?」

「ああ、その、もう問題はない、と思います。この通り、怪我している所はないので」

言いながら、体のあちこちを触って自分の体を大丈夫だとアピールする。確かに、肉体には傷一つなくなっていた。

「そうですか、それはよかったです。さて、聞いたところあなたは外からきたとのこと。そして、私と二人で話したいと聞いておりますが……

どういったご用件でしょうか?」

「ええと、そのう……」

ドツピオの頭の中で、どうしよう、という言葉が浮かんでいた。ボスは二人で話したい、と言つてはいたがここにはボスがない。

間を持ったそうと話を聞くにしても、ある程度のことは途中で星から聞いてしまった。

「それは、どうし、よう……あ、れ」

急に体全体に倦怠感が現れる。

それと共に急激な疲労。一体どうしたのか、そう思う前に体が立位を保てなくなり、膝をつくようにして倒れこむ。

その様子を、聖は当然のように見つめていた。

「あなたが二つの姿を持っている、ということの報告はすでに上がっています。そして、何らかがきっかけで性格が別人のように豹変する……

そして、存在しないはずのあなたの『ボス』。それは、これから話されることですか?」

淡々と今までにあったことをドツピオに告げる白蓮。

対するドツピオは、いや『少年だったもの』は倒れ伏したまま、語った。

「……いいや、それは話すことは、できない。だが、推測は自由にしてくれて構わない」

その体は先ほどまでの少年の体とは別物であり。がつしりとした成人の体に変わっていた。

しかし、その風貌は非常に弱々しく、顔を上げるのが精いっぱいと言わんばかりに弱り切っているように見えた。身体には全く異変がないにもかかわらず。

「だが、こちらからは聞きたいことがある……わたしを助けたのは、お前なのか？ あるいは、お前たちなのか？」

「……あなたの助けた、がどこまでかかるかはわかりませんが、私たちはあなたが森の中で倒れていたから、助けました。ただ、それだけです」

「それは、何故だ」

白蓮の答えに、今度は成人―ディアボロー―が逆に問う。

弱々しく、今にも折れてしまいそうにも感じるその風貌からは考えもつかないほどの鋭い目線。

「困っているものを助けるのは当然のことです。それが人間であろうと妖怪であろうと。あなたは来たばかりで何もわからないでしょうが、森の中で一人で寝るのは自殺行為。」

それは外でも変わらないはずです。むしろ、幻想郷であるからこそもっと恐ろしいことに見舞われるでしょう。そんなあなたを見捨てることはできません」

白蓮は特に怯まず、凜とした対応で返す。

「……そう、か……親切なことだな」

「命蓮寺は老若男女、人間も妖怪もすべて受け入れています」

「……わたしは、助けを請うた。そして、それは確かに受け入れられた、ようだ……しかし、それはまだ確定したわけではない。少し間が空いただけで、再び襲われるのではないか……」

今、それがわたしにとっての恐怖なのだ。……お前は、わたしを、こ

のようなものでも救うのか？」

「当然ですよ。命蓮寺はある程度邪な心を持っていないければ誰でも受け入れますので」

ディアボロの弱々しい訴えを、白蓮はこともなく受け入れる。

相手はかつて、イタリアの裏組織を掌握し、人々を墮落させた張本人。『吐き気を催す邪悪』とも評された人間であることを知ってか知らずか。

「……グラッツェ」

その言葉を口にしたのは、本来の意味で口にしたのはいつ以来だったであろうか。

「わたしはもう戻る……この状態を維持するのは厳しいのだ。長くはこのままではいられない。最後にもう一つ頼みたいのだが……ドツピオの中にわたしがいるのは誰が知っている？」

「現在はあなたを発見した星と介抱したナズーリン、それと私の3人のはずです」

「……はず？」

「この幻想郷ではどこに目や耳があるかわかりませんので……私たちが発見する前に誰かが見ていた可能性は0ではありません。少なくとも、この寺の中では知っているのは3人だけということですよ」

最後の質問に、不安が残る答えが返ってきてしまったが、それでも今はどうすることはできない。

「そうか……わかった。自分の中で押さえておきたい情報ほど他には知られたくないものだ……このことは、他のものに他言無用で願いたい。もちろん、ドツピオにもだ。……わたしは短時間で3つも無理な願いを言っているな」

ディアボロは自嘲気味に笑う。帝王まで上り詰めたはずの男が、組織のトップとはいえ女に頭を下げて願いを乞う。これほど無様な姿がかつてあっただろうか。

しかし、ディアボロはこれをよい機会と考えていた。

まだ詳しくわかってはいないが、レクイエムの効果は今はない。レ

クイエムの輪廻にとらわれている間、これほど長い時間生を感じられたことはなかった。

あの時、確かに声を聴いた。その声の持ち主は彼女ではなかったが、それでもきつかけとなったことに違いはないだろう。

ここは、未知の世界ゆえに自分を知るものが少ない。マイナスからの出発点であったので僅かに知られてしまったのが苦ではあるが、そもそもドツピオが得た情報を聞く限りではただの人間以上に恐ろしい者たちが存在する世界らしい。

その中で3人、しかもお人よしのような3人に知られただけであればまだリカバリーは効くだろう。

自分はほとんど再起不能の状態だ。だが、ドツピオは生きていた。ドツピオに貸し与えた『キングクリムゾン』は生きている。先のネズミとの戦いを見る限り、『エピタフ』も使えるようだ。

本来の使い手である自分が使えず、駒であるドツピオが使えることは理解がつかないが、これは回復したら自分にも使えるだろうという再起の手掛かりと考える。

——いつかは、自分も蘇ろう。結果を定め、その過程を歩むのだ

——そして、返り咲くのだ。あの忌まわしき力に対抗する何かを『ここ』で掴む

まだ機会は失われていなかった。神も仏も信じていないディアボロだったが、ここは信じる者が救われる、といったところかとも考えた。

「……わかりました。では、あなたがあの少年と同一であることも秘密にしておきましょう。そして、もし他に見ているものがいたとしたなら、それをあなたに伝えましょう。でも決して、その者を殺してはなりませんよ」

「!? な、何を……」

最後の思わぬ一言に、ディアボロは思わず反応してしまう。

何故わかった。表情に表れてしまったか。それともこいつは知っているのか？

白蓮は、穏やかな表情のまま続ける。

「人間は私が封印される前から何も変わってはいない。必死に隠れたがるその姿はまさしく大罪人のそれです。何故その少年と入れ替わりあなたが出てくるかはわかりませんが、何らかの能力を用いて彼を隠れ蓑として使っているのでしょうか。」

今は確かに弱ってはいるものの、元に戻ればあなたはその力を再び行使するでしょう。そうなれば、いずれ必ずあなたにも報いが舞う。悪因悪果を私の前で許すわけにはいきません」

「……そうか。そのこと、深く覚えておこう」

その短いやり取りの後に、ディアボロは再びドツピオに戻る。

ドツピオはしばし茫然としていたが、すぐに座りなおして、白蓮と対面する。

「ボスは、来てくれたみたいですね。そして、あなたと話をして帰って行った……そうですか？」

「ええ。いろいろあなたにも伝えておいてほしい、と言伝をもらっています。せっかちな方でしたね。お茶の用意をする暇もなかったですよ」

「あー、ボスも忙しい人ですからね。こっちに来ても、それは変わってないってことでしょうか」

先ほどの剣呑な雰囲気とは変わり、穏やかな雰囲気で話し合う。

白蓮は先ほどの会話は伝えず、幻想郷のより詳しい情報を直接に聞きたかった、と伝えて、実際にドツピオに説明する。

詳しい幻想郷の地理、博麗大結界、その管理をする巫女、そして。

「そして、幻想郷では物事を解決するルールとして、スペルカードルールというものを多く使っています」

「スペルカード？」

「そうです。人間と妖怪では力の差がありますからね。普通の力比べであれば妖怪は人間に負けることはないでしょう。そういったこと

のないようにするルール、ということですよ。

要は、自分の得意技を弾幕という形で表現し、その美しさを競うというルールです。このルールが幻想郷の妖怪や少女たちの間で非常に流行しています。かくいう私も大好きですよ、これ」

「だ、弾幕、ですか……でもそれって当たったら痛いんじゃないか……」

「ですから基本的には避けるルールです。それを避けあって撃ち合い、より美しいほうが勝ちというスポーツといった見方もできます。不慮の事故は少なくはないですが」

「うええ」

「ですが、近年では弾幕と織り交せて直接拳やらなんやらを混ぜあうものもあります。そういったものにも気を付けてくださいね」

「……くださいねって……」

大丈夫なのかそれ。

そう思ったが、大丈夫ですよ。と言われたような気がする。

「いろいろ話していたら、そろそろ夕餉の時間ですね。今日はおなかいっぱい食べて、これからどうするかはゆっくりと考えてください」

「そうですね。いろいろありがとうございます」

「部屋は先ほどまで休んでいた部屋を使ってください。私はまだしばらくここにいますので」

白蓮の見真似で一礼し、ドツピオは貸し与えられた部屋に戻ることにした。

幻想郷。どこか不思議で、どこかが一緒に、どこかがずれているこの世界。

何故自分がここにいるのだろうか？ ブチャラティチームとの戦いはどうなっているのか？ そもそも戻る方法はあるのだろうか？

そして、ボスはここに現れたともいう。それは一緒にここにきてしまったともいうことだ。

自分はボスを絶対的に信頼しているが、その上でおかしいものはおかしいとも考えられる冷静さを持っているつもりだ。

ボスの正体を探る、というわけではないが、今ボスはどのような状態なのだろう。どういふつもりなのだろう。

もう少し、ボスと話がしたい。

「まずは、電話かな……もうあんまりあの子の電話は使えないかもしれないし、まずは連絡手段をとらないと」

じっくり考えた結果は、電話を手に入れること、情報収集を行うこと。

人里へ向かうことに決めた。

「人里、ですか」

翌日の朝食の時に、命蓮寺の皆に今後の方針を告げた。

「はい。昨日いろいろお話は頂いたのですが、やはり自分の目で見て回りたいことと、ボスとの連絡のためにも自分用の電話を確保しておきたくて。ナズーリンから電話を借りるのもちよつと」

「……ダニーのことをまだ電話という気が君は」

ナズーリンの呆れた声と共に、尻尾のネズミが抗議を上げるかのようになんかな鳴き声を上げる。

「いや、あの時は電話とネズミを間違えたけど、ナズーリンが電話を持ってるのは確かなんだろう？ でも、他人の電話の借りっぱなしもよくないかなって」

「ああ、そうかい。その点は勝手に言ってくれ」

「ま、そういうのなら人里に行ってみるのもいいだろうね。その電話、とやらは幻想郷では見ないから香霖堂さんのところの方がいいと思うけど」

食事をしながら命蓮寺の船長―村紗水蜜―が口をはさむ。

「電話って、なんか電波？ を飛ばす携帯信号機でしょう？ 電気なんて使っているところなんてここじゃあほとんどないから人里にあるのやら」

「マミゾウの受け売りだけだね、と水蜜。」

「あれ、そうなんです？ ……困るなあ。その香霖堂っていうのはどこにあるんです？」

「人里から離れた、魔法の森の近くよ。場所も離れてるただの人間が一人で行くのは危険なところね。といっても、幻想郷でただの人間がふらついて安全なところは少ないけど」

ドツピオの問いに、命蓮寺のもう一人の尼僧―雲居一輪―が返す。

「どちらにしろ、あなた一人で行かせるのは危ないから。私、人里に用事があるから一緒に行きましょう」

「おや、一輪お願いできますか？」

「ええ。檀家の方とか、新規の方とか買い出しとか。いろいろと溜まってきたので」

「あ、新しい柄杓ほしい私」

「一輪、私も服の補修とかの生地を溜めておいてもらいたいのですが」

水蜜の言葉を皮切りに、他の者も希望を述べる。

ワイワイ騒いで、ドツピオは軽く置いてかれてると感じたとき、白蓮がパン、と手を叩く。

「というわけで、それならばあなたも一輪の用事のついでに人里の方へ一緒に行くのがいいでしょう。雲山も一緒に行くのでしょうか？」

「もちろん。私一人で荷物を全部持てないかもしれないかもしれませんがね」

「じゃあなおさら安全ですね。雲山なら飛べない者と共に飛翔するのもお得ですし」

「(……この人たちって、自然と置いてけぼりにして、自然に巻き込んでいくなあ)」

ドツピオは朝食のご飯をフォークでくわえながら、幻想郷の雰囲気を感じていた。箸は慣れていなかったので使っていない。

朝食後、ドツピオは一輪に『いろいろ準備があるから』と、境内前で待つように言われた。

灯籠の元で座り込みながら、よく晴れた青い空を眺める。ローマに来る前、任務でサルディニア島に来ていた。その時に見た美しい空と変わりはしない。

ローマの街中ではどうしても自動車などが走り、空気の汚染がある。対して観光地ではそういったものは少ないから空が綺麗だ。そういう風に言われてはいるが、それを実際に確かめているものはインテリのやつらだけで。

しかし、『元の世界』とは違って『幻想郷』では文明の発達が追いついていらず、機械類はないとも聞く。空も綺麗で空気もおいしいこの現状は、やはり汚染がないから、ということだろうか？

近くでは「じやつせつじやつせぎさーいど」と、掃除をしている妖怪―幽谷響子―が妙な歌を口ずさんでいる。

ふと、右手に宿る力で、近くの小石を持ち上げてみる。

ひよい、とそれを持ち上げ、目の前に投げる。投げられた小石は放物線を描き、ポトリと落ちた。

あの時、リゾットとの戦いでボスから与えられた能力、キング・クリムゾンの能力の一部。真の能力は『予知』ではあるが。

ボスは与えたと言っていたが、これは分け与えられる能力なのか？それとも貸し与える能力なのか？

もし貸し与える能力だしたら。……自分がいつまでも持つていては。

「お待たせ」

ドツピオが考えた矢先に、一輪が身支度を整えやってきた。先ほどの白を基調とした僧服に、赤い宝玉と袈裟をかけている。

そして、その後ろには大の大人が数人入っても問題ないような大きな袋が引きずられている。

「……その、それは一体？」

「いろいろ質問出てきそうだけど、百聞は一見にしかず。雲山！」

一輪の掛け声とともに、彼女を中心としたあたりの空気が一瞬で集まり、固まったような感覚。

それと共に、巨大な雲の妖怪―雲山―が現れる。

「う、うわおっ!？」

完全に意表を突かれたドツピオがたたらを踏み、その場にへたり込む。

間近で妖怪らしい妖怪を見たドツピオは、驚きのあまりに声が出なかった。

「ふふっ、面白い反応を示すのね。こんなので驚いてたらここではやっていけないよ」

「……え、あ、はい。でも、幻想郷って妖怪とか悪魔とかいるとか言われたけれども、ここににいる人たちって、みんな僕らと同じに見えるし」

「あー、まあそうね。そういうののほうが多いかな。まあ、これからはもうちよつと妖怪っぽいのが出てくるわ、多分」

「……………」

話を続ける一輪の傍らで、その雲の妖怪はうんうん、と頷く。

そして、その手をゆつくりとドツピオに差し出す。人間のサイズには大きい、それでも威圧をするつもりはない様子だった。圧倒する大きさではあるが。

「よろしく頼む、ですって。雲山はこの見た目にこの成りだけど存外恥ずかしがり屋でね。直接話すことは少ないと思うけど」

「……………」

「ど、どうも。よろしくお願いします」

雲山の指を握る形で、握手を交わす。本来触れない雲は、表面こそ綿のようだが想像よりも固く感じられた。

「さて、行きましようか。空を飛ぶのは初めて、よね？ 外では大きな船で飛ぶって聞くし」

「飛ぶ？ まあ、飛行機くらいには仕事で何度か乗りましたけど」

「そんな生半可なものじゃないよ。初めてだから優しくしてあげてね、雲山！」

「……………」

「え？ あ、わ、わ」

承知、と言わんばかりにドツピオの体をその大きな両手でやんわりと包み、持ち上げる。

エレベーターが上に上がるような上昇感がドツピオを包む。その上昇感はぐんぐんと高まり、あつという間に巨大な命蓮寺を指先で隠せるほどにまで舞い上がった。

「うわあああああ!? こ、これ、どうなってるんだ!？」

「幻想郷で地に足つけてるのは何も無い人間か妖怪くらいよ。道もなだらかじゃないなら、飛んだ方が早いでしょう?」

「……………落としやせんよ」

怯えているドツピオの傍らから、空気の振動かと思うような細かい声だが、確かに声が聞こえた。

そちらを向くと、優しい笑顔をした髭親父の顔。

「さ、人里までそんな遠くないわ。さっさと行きましょう」

「お、おわあああ、動く、動いてるよおおお!!」

「いつてらっしやーい!!!」

慌てふためくドツピオは、ヤマビコ特有の大声で押し出された。

飛んで数分。最初は動くたびに騒いでいたドツピオも慣れてきたのか、周りを見渡すくらいに余裕はできていた。

それでも、普段の彼女らのスピードからすれば、相当ゆっくりと飛んでいる。

「……にしても、あなたずいぶんと臆病なのね。この速さなら下を歩いているのと変わらないわ」

「そんなこと言われても、僕らの方では生身で飛ぶなんてことないし、僕は絶叫系アトラクションとかでもビビって乗らないタイプだし」

「雲山をおもちやと思われても困るんだけど」

のんびり会話をしながら、空中遊覧を楽しむドツピオと一輪。

その時間は、空を裂く鋭い音で終わりを告げた。

スピードを乗せた小さな玉は、進行方向から飛んできて、一輪と雲山の体の付近をかすめて飛んでいく。

「な、何? 何が起きたんだ?」

「ただの弾幕、妖精のちよっかいよ。見て、あれ」

急な攻撃に驚くドツピオと、それをいつも通りの様子で受け取り、先を指さす一輪。

その先には数匹の妖精たちが、好奇心に満ちた目でこちらを見ていた。

「さあひまわりちゃん! あなたの弾幕に任せるわよ!」

「ええ!」

「あの大きなふわふわを削って綿あめにしてしまっわ!」

一様に楽しそうに、ひまわり妖精の弾幕が始まりに、一斉に妖精たちがこちらに詰め寄る。

「ど、どうするのさこれ?」

「大方見慣れない大きいものに興奮しているだけだろうし」
焦るドツピオに対して、冷静に、懐からカードを取り出す一輪。

「一回休みになってもらう!! 鉄拳「問答無用の妖怪拳」ツ!!」
スペルカードを掲げて宣言する。それと共に雲山がさらに巨大化する。

そして、一輪の動きとシンクロするように腕を振り上げ、
「南無三ツ!!」

勢いよく拳が振り下ろされる。それと共に雲山の巨大な拳も振り下ろされる。

恐ろしい勢いと共に振り下ろされ、あたりに轟、と風圧が押し寄せ

る。
「「きゃー」」

妖精たちはその拳を正面から喰らい、あつさりと弾けて消えてしまった。

「二丁上がり、と。全く妖精たちはみんなあなんだから」

何事もなかったかのように、風で乱れた髪を整え佇まいを直す。

ドツピオは、驚きのあまりにただその場で呆けるだけだった。

「……す、すっげえー」

「こんなのここじゃあ普通だつてば」

漏れ出た一言に対し、笑いながら返す一輪。

「妖精は大体悪戯するだけのかわいい子たちなんだけど。中には好戦的だったり、興奮のあまりに攻撃する子たちもいるのよね。」

大体話しても無駄だし、そういう時は静かになつてもらうか追い払うのが簡単よ」

「……あれ、追い払うっていうか、死んじやうと思うんだけど。あんなの喰らつて」

「あれくらい、勢いだけで君が当たつても死にはしないよ。もつとも、妖精は死なないんだけどね。生き物というより自然の発露だし」

「あ、死んでないの? ……いやいやいや! それ変でしょ!」

「うーん、別に変でもなんでもないけど。外と違って、非常識が常識になつてるからね。郷に入つては郷に従え」

「……やっぱり、とんでもないところに来ちゃってるなあ」

ドツピオは、自分の境遇への不安と、ボスが共にここにいるはずと
いうことへの安堵と、そのボスへの心配。

けれどボスなら何とかしてくれるだろうという願望。ごちやまぜ
の気持ちのままその先を見ていた。

幻想郷は、基本的には「こちら側」と変わりはない。

ただし、空から見える景色は大きく変わる。

現在の地球の陸上、およそ1割から2割が緑のある自然や、人間の手の入っていない地域らしい。残る地域は人工物でできた森か、もしくは砂漠だ。

命蓮寺から離れて数十分、地上にある景色のほとんどは、手の入っていない自然の空間だった。木々がところどころに立ち、その周りを小動物がうろついている。

傍らにはほんの少し人の手の入った道が続いている。空を飛んでいる自分たちと同じ方向に伸びているその道は、命蓮寺までの道でありその他の場所へ繋がる道がないのだろう。

それは、他の所に人の居る場所がない、ということを示すこと。

自分たちの世界では想像できないほどの人の少なさを、ドツピオは空から大地を見ることで感じ取れた。あのような立派な寺から人里まで何もいない、などそうそうない。

「見えてきたよ、幻想郷で一番人間の集まるところが」

一輪の一言で、きよろきよろしていたドツピオは彼女の指差す方向を見る。そこには小さな集落があった。

遠くからでは確認のしようがないが、それでも大した人口とは思えない。

「あの規模で、一番なんですか？ ずいぶん少ないんだなあ」

「うーん、まあ外を知っているのなら少ないでしょうね。私もいろいろある前には外にいたけど、都とかなら人はいたからなあ。」

それで考えると少なくとも感じられるかな。でもね」

一輪が右手の輪を掲げて合図を送ると、雲山が少しずつ地面へと下降していく。

「今はこんなものだし、ずっとこんなものだと思うよ。幻想郷の管理者も、人里の管理者も私たちと同じようなものだからね」

地面近くまで雲山が降りると一輪は事もなげに着陸する。そして、

ドツピオに向かつて「降りた降りた」と催促をする。

遅れてドツピオが地面に降りると、一輪は再び右手の輪を掲げる。すると、ポン、と小さな音を立てて雲山は一輪より二回り大きいくらいのサイズとなった。

人の入りそうな大きな袋を背に抱え、それでも里の中を邪魔しない程度のサイズ。

「同じようなもの、つてのはどういうことですか?」

先の一輪の言葉に、ドツピオは疑問を示す。

「人間の里、つていうのだから人間が暮らしているんでしょう? それならその管理者、里長とでもいえないのかな。その人は人間なんじゃあないんですか?」

「うん、人間だけじゃないよ。妖怪もいる」

疑問に対し、さも当然というようにすっぱりと答える一輪。

「さっきの言い方が間違えたかな。幻想郷の管理者と人里の管理者は同じ。けど実際の人里をまとめ上げているのは一人ではなくて、みんなでやってる感じかな」。

その中には人間が大好きで人間のために尽くしている妖怪だっているし、特に深く考えているわけでもなくやってる人間だっている」

「……」

「人間だ妖怪だであまり区分する必要はないんじゃない? もちろん、それは命蓮寺の教えも含まれてるから全ての人妖がそういう意見じゃないけど」

ドツピオはその言葉を静かに聞いていた。

その考えは、自分たちの考えとあまりにかけ離れているから。

人間同士であっても、人種、身分、貧富、思想……差別の種には枚挙に暇がない。力のあるものは、ないものを徹底的に蹂躪できる。その気になれば。

命蓮寺で出会った者は皆妖怪だったが、どこか優しい「お人よし」のような雰囲気もあったが、それでも普通の人間よりかは強大であるだろう。

対峙をしたのはナズーリンだけだが、あのような少女でも、男性をやすやすと弾き飛ばす力を行使できる。はたから見ればそんな彼女よりも強力な力を行使できそうな星や一輪であれば、人間などたやすく征服できるだろうに。

力の差があるから、という理由でそれを失くすための決闘ルール、弾幕ごっこ。それを制定したのは博麗の巫女、すなわち人間だという。

……なぜ、強者が弱者の要望を受け入れたのだろう。何故、それが当然と認識されているのだろう。

「……ちよつと、ドツピオ？　行くわよ、どうしたの？」

「え……ああ、すいません」

意識はしていなかったが、つい考え込んでしまったらしく、一輪はドツピオのことを変な目で見つめている。

それに促されるよう、少しバツの悪い顔を繕いながら、二人で里に足を踏み入れた。

最初の感想は、まさしく日本映画の時代劇……にすこし20世紀の洋装を混ぜた舞台、だろうか。

こういった年代を舞台にした日本のマンガを見たような気がする、とドツピオは感じた。

そして、里の中には人間はいる。が、そこには少なくないほどに人間以外もいた。

先に撃墜されたような、透き通った羽の生えた妖精が、その見た目と同じくらいであろう少年に追いかけられている。

背中に先ほどの妖精とは違う、鳥のような羽を生やした少女が、変な歌を口ずさみながら買い物をしている。

頭に自分の頭ほどの長さの角を生やした幼子が、昼間から開いている酒屋で酒を飲んでいる。

その隣には、胸の青い瞳から青いコードが体に巻きついていて、奇妙な少女が座っている。

通りには女性の3人組が何やら話している。二人は幻想郷では見

慣れた奇抜な衣装であるが、一人は下半身が絵に描いたような幽霊のそれとなっている。

明らかな人外が里の中に居り、それを気にした様子もなく、むしろ和気藹々と付き合っているのが里の人間。

それは幻想郷のどこかから漂っている「気楽さ」のようなものを物語っているようだった。

「ね。人間の里とはいつでも妖怪もちよろちよろいるし、私たちだって人間との共生関係は切りたくても切れないわ。切らないけど」

「そうですね。……なんだか、拍子抜けしちゃうな」

「ん？ どういうこと？」

「あ……いえ、別に何でもないです」

自分でも、ついて出た言葉が理解できなかった。自分は一体何を考えていたのだろうか？

白蓮や星から説明のあった通り、幻想郷は妖怪こそいれど人間との争いもなく、あれば弾幕ごっこで解決する。平和な世界なのだ。

「まずは道具屋で頼んでたものを詰めてもらいましょうかね。こつちよ」

「わかりました」

そんな街の中を、雲山を人型サイズまで小さくしたとはいえ、傍らに付き添わせながらどんどんと進む一輪。

確かにその姿は元の世界では異様だし、ドツピオが見れば絶対に驚く自信がある。

けれど里の人間たちは特に気にした様子もなく、むしろ雲山を珍しがって遠巻きに見る子ども、近くによる子ども。「聖様はお元気ですかね？」と話しかけてくる老人。「また今度響子を借りてくからねー」と話しかけ、こちらの返答を待たずに去る鳥の羽を生やした妖怪。

人里では、まさしく「普通」の光景というのを、嫌でも感じ取れた。

「着いた着いた。ココが第一目的地と」

一輪に連れられて足を運ぶこと十数分。里の中央ほどに位置するそれなりに大きな建物についた。

軒先にはいくつもの生活用品が並び、幾人もの客が商品を眺め手に取っている。

暖簾には「霧雨道具店」と書かれていた。

「霧雨さーん、いますかー?」

雲山を店の前に待たせ、店の奥に声をかける。

それなりの大きさの店に、客はまあまあいるが、あたりにそれに反応する店員はいない。

「あれ?・霧雨の旦那さーん?」

一輪はもう一度声を上げた。すると奥から「はい」と、小さな声が聞こえる。

とてとてと次第に大きくなる足音が終わるとともに、奥の閉じられた戸から、霧雨道具店の屋号の入った前掛けを付けた、黒服の少女が現れる。

「お待ちせしました、何分他の者が寝込んでましてね。ご用件は……」

店員がそこまで言いかけ、はたと止まる。それを見た一輪も同じくきよとんとした顔をその店員に向ける。

「お前は妖怪寺の尼僧じゃあないか。どうしてこんなところに?」

「そういうあなたは黒白じゃない。あなたこそ何やっているのよ」

「何やっている」と聞いてくるか。見てわからないのか? 仕事だよ仕事」

その黒白店員―霧雨魔理沙―は前掛けをパタパタと振って強調する。

「どうやらここをやつらが全員風邪だか何だかで寝込んでいるみたいでな。店を閉めちまえばそれでいいんだが今日明日に大事なお客様が来るらしい。」

その対応をするために雇われたのがこの魔理沙さんだったが「それがわたしらだったと。来ることわかってるんじゃない」

わざわざ大仰に身振り手振りを交えて話す魔理沙に対し、一輪は特に表情を変えず。わずかに呆れたような調子で続ける。

「あなたみたいな人間がそうやすやすと依頼を受けるだなんて心外だね。何か妙なことを企んでるんじゃないの？」

「それこそ心外つてやつだ。霧雨魔法店はどんな仕事だって引き受けるし、報酬も良心的だ。両親からの報酬だけに」

「……あの、この子、一輪の知り合い？」

再び置いてかれるドツピオが会話に入る。魔理沙はその手振りを止め会話に入ってきた少年に目を止める。

「何だ？ 命蓮寺の新しい坊主か？ ずいぶん人間くさいな」

「人間です」

「昨日ウチの近くで見つかつてね。見捨てるわけにもいかないし、彼自身もいろいろやる気はあるのよ」

「命蓮寺の近く？ 外来人がか？」

一輪の言葉に反応し、ドツピオの顔面にずいと自分の顔を近づける魔理沙。驚き引くドツピオだが、それはすぐに詰められる。

まじまじと相手の顔を見つめる。粗を探しているかのようなその行動に、最初こそ驚いたが次第に不満な感情が浮かび上がってくる。

「な、なんだよ人の顔をじろじろと」

「興味本位、いや学術的見地からだ。場所が場所でもあるしな。なんだお前、仏にでも神頼みしたのか？」

なおも問い詰めるような魔理沙の態度。疑問を口にしたところで、その外も中もふわふわとした頭に金輪が下される。

「やめなさいよ、嫌がつてんじゃない。まったく相変わらずねあんたは」

手痛い拳骨の後に一輪がつぶやく。一輪が合図を送ると雲山が店頭に大きな袋を広げ始める。

「とりあえず霧雨の店員さん、注文の物を詰めてもらえるかしら？ これ、リストと代金ね」

「へーへー。いつもご贖員にー。……げ、こんなにあつたのか。裏に

あるやつ全部それか」

一輪が出した手紙を見るやいなや、表情に嫌そうな感情が浮かぶ。

そしてドツピオを見ると、にこやかな表情を浮かべた。その表情は魔理沙を知るものであるなら、いつも浮かべている『いつもの』顔である。

「なあ」

「店員なら自分で仕事やりなさいよ。なに客を使おうとしているの」

あつさり釘を刺されたが、その表情は変わらない。

「さつき言っただろ。ここの従業員はみんなお休みだし、雇われ店員のか弱い乙女一人でこの量の運搬をしたら壊れちまう。それに、その間お店は開けっ放しになっちまうだろう？」

それは店にとっても客にとってもマイナスだ。手伝ってくれたらういんういんの関係だぜ」

「もつともらしい」と言っちゃって……」

あきれ顔を浮かべる一輪。どうやら何度もこういうことは言われている様子に見える。

「それなら、僕が手伝いますよ」

ドツピオはおずおずと口をはさむ。二人の顔は一樣に先の感情を強める。

「お、手伝ってもらえるか？ 助かるぜ、勇気ある男は頼りになる。私の周りは『えのき』みたいな男ばかりだからな」

「ちよつと、あつちは楽しみたいだけなんだから手伝うことないわよ？ ゆっくり待ってればいいのに」

「いや、善意で手伝いたいわけじゃあないんだ。ここの道具とかからもこの世界の状態は読み取れるし、何より魔理沙……だっけ？ にも聞いてみたいことがある。学術的見地から、だ」

命蓮寺の、皆が集まってからは出したことのない顔つき。それは、力ないとはいえギャングの一員であったからこそ、やると決めたらそれを通しつくす決意の表情。

それを見た一輪は少し驚きの目をするが、すぐにため息をついた。

「そんなにやりたいなら別にいいけど。……変な子」

「ああ、わかった。手伝ってくれたのなら礼に何でも答えてやる。自分から学ぶ意欲のあるやつは大歓迎だ。魔理沙先生が丁寧に教えてやる」

にこやかな表情で、顔の前に指を立て、何かを持ち上げる動作をする。が、それが何も持ちあがらないことに気付くと慌てて戻した。

魔理沙は「そっぴいやは今は帽子取ってたんだっ」恥ずかしそうにそう呟いて、少し顔を伏せた。

「じゃあドツピオ。私他の所回ってくるから。2、3時間ほどしたら戻ってくるわ。変なことさせないでよ魔理沙」

「させないっての。それじゃあ他の方。しばらく空けますんで代金はこちらに置いていってくださいな」

一輪が店から離れ、魔理沙は他の客に軽く説明すると、袋を引きずりドツピオを連れて裏へ回る。

「で、聞きたいことってなんだ？ えっと」

「ドツピオだよ。僕の名前はドツピオ」

「自己紹介どうも。霧雨魔理沙だ。普通の魔法使いだし、この店の者とはたまたま姓が同じだけの無関係」

進みながらも、特に振り返ることなく自己紹介を交わす。

「で、聞きたいことってなんだ、ドツピオ」

「ああ。……えーつと、まず。電話つてこの道具屋に売ってるかい？」

「電話？ 通信機か？」

そういうと、前掛けの裏をぐそぐそ探る。やがて一つの人形を取り出すとドツピオに見せた。

精巧に作られた女の子の人形で、金色の髪に赤を基調とした衣装を纏っている。

「売り物じゃあないけど持ってるぜ。こんなものが欲しいのか？」

「ああ、欲しいんだけど……それをくれるの？ 貴重品だと聞いたけ

ど」

「まあ貴重品といふかなんというか。以前使ったやつで今は使つてないからな。それに頼めばいくらでももらえるし。」

本来は一輪が手伝うべきなんだが、率先して引き受けたお前に対する礼だ」

「ありがとう、助かるよ。……でも、変わったデザインだね」

その人形を受け取ったドツピオが、いじくりながら感想を漏らす。

確かに、それは本物の人間を正確に小さくしたようなよくできた人形だが、それがあまりにもリアルである。

美しさの中に、わずかな不気味さも感じられるほどの。そして、男が持つには少々気恥ずかしいものがある。

「作り手がこだわり派だからな。あいつの家の中にもそういうのがごまんとある。さすがに通信機能を持った奴は私がもらったものくらいらしいが」

「へえー。その人つてすごいんだね」

「まあまあかな。偏屈で愛想悪いし、性格面でも難ありだ」

「……ところでこれ、どう使うの？」

「声をかければ相手に伝わってるよ。もつとも相手が聞こえてるかは返事が来るまではわからないが。たぶん、こつちが子機であつちが持っている親機を起動させないと通信できない仕組みっぽい。」

わたしが悪戯にかけまくったら繋がらなくなったからな」

それについては後で頼んでおいてやる、と締めくくったところで裏についた。

そこには様々な道具類が並んでいる。いくつか壊れ物も入っており、袋に入れる順番なども考えておく必要がある。

確かに、これを一人でやるには骨が折れそうだ。

「さて、さっさと手を付けよう。力仕事はお前に任せるから、指示通りに入れてくれ」

「わかった」

「それじゃあ、まずはその大きな束から入れてくれ。赤いひもで結ば

れてる奴な。青いのは香だから……」

荷物の搬入を始めてから2時間が過ぎたあたりで、ようやく詰め終った。

こんもりとたまった袋は、結果的にドツピオと同じくらいの高さまでなる。これを車もなしに運ぶのは到底無理だと思える量だ。

だが、先に見た雲山の膂力なら余裕だろう。

魔理沙がどこからか筒を取り出すと、湯呑みに入れて飲みだす。一口飲んだところで、もう一つ湯呑みを取り出しドツピオに手渡した。

「助かった。一人じゃ終わらないと思った」

「それはこっちのセリフだよ。こんなのを運べるくらいなら、一輪も手伝ってくればいいのに」

「全くだ」

中身を飲み干し、ドツピオも苦労の一言を出す。

「ねえ、魔理沙」

「ん？ なんだ」

「妖怪って、どんなものなんだい？ 人間より力はあるし、種類も多い。狡猾に人間を出し抜き、喰らう……そういうものだと思っただけだ」

ドツピオは人里に来てからの疑問を人間である魔理沙にぶつけてみた。

命蓮寺の者たち、簡単な気持ちで攻撃してくる妖精、妖怪に支配されている人間の里。

自分の知識とはどこか違っており、妖怪である星や一輪からしか話が聞けていない。それを同じ人間からならどういう答えが返ってくるか。

「そういう解釈で大体間違っていないぜ」

ある意味、予想どうりの言葉が返ってきた。

「で、それがどうかしたのか？」

「うん。どうも、ここに来る前の僕の思っていたものと実際の幻想郷の妖怪たち、とても同じ物じゃあないと思えてね。

とてもじゃあないが、そんな恐ろしい存在には見えないなと思って。魔理沙は、妖怪が怖くはないのかい？」

「全く怖くないな」

さも当然のように、魔理沙は答えを返す。

店の裏の傍らにある木箱に腰を掛けると、手のひらを上に向けて空へと掲げる。その手のひらから、緑色をした円錐状のエネルギーが上空に打ち出された。

「もちろん里の人間の大半にとっては恐怖の対象もあるだろうが、私の本業は妖怪退治だ。そんなやつが相手を怖がつてちゃあどうしようもないだろう？ 客足も遠のいてしまう。

それに、今はスペルカードによる決闘が主流だ。お前は何か勘違いしているようだが、無秩序に妖怪が人間を襲ったり、その逆もない」

言葉と共に、胸元から一枚のカードを取り出す。「恋符 『マスタースパーク』」と書かれた札は、魔理沙の手の中で光を反射し輝いていた。

「何を考えているかはしらないが、そんなに気に掛けることはないぜ。妖怪は危険で変な奴しかいないが、ああ、さつきみたいな意味ではなくてな。変わってるという意味での危険な奴だ。

それでもこちらと仲良くしようとするヤツもいるし、人生の先輩として色々教えてくれる奴もいる。覚えておきな。ここは幻想郷だ」

そう言つて魔理沙は胸元に再びカードをしまうと、表の方へ向かった。準備でしばらく開けっ放しなので、そのままというわけにもいかないのだろう。

ドツピオは少し考えに耽つた後に、自分も、と表の方へ向かう。

証言は一つだけだが、やはり恐ろしいもので、で一括りにしてよいもの……なのだろう。魔理沙は退治が仕事、と言っていたのだから、それらを恐怖する者がいる。

妖怪退治を一人でやっている、とは思えない。小さいとはいえ人里

ほどの規模をあのような少女一人で回りきれることも守り切れることもできないだろう。

幻想の調律者、博麗の巫女。その者も絡んではいるだろう。当然と言えは当然だが。

電話は手に入った。が、どうやらまだ使うことはできないとのことだ。ためしに耳に当ててみるが、何も音は聞こえない。……自分の知っている電話とは違うので評価も難しいが。

とりあえず、表で一輪の帰りを待つことにしよう。まだ、魔理沙には聞いてみたいことがいくつもあるのだから。

表の方では、期待している知識人が商売に回っている元気な声が聞こえている。

「全くどうかしてるぜ！ 仕事は他に押し付けて自分はのんびり過ごしてきたってのか？」

店頭に戻ってきたあたりで、魔理沙は一人の男性に声を上げて詰め寄っていた。

背が高く、眼鏡をかけた線の細い男性だ。

「別にのんびり過ごしたわけでもないし、君が僕の代わりまで務めるといったから任せただよ。だからそれを信じて納得のいくまで自分の用事を済ませていたんだよ」

「務めてって、あんな言い方されたら普通はすぐに帰ってくると思うぜ、誰だつて。それなのに延々と！」

やたら強く言い合っているが、魔理沙が一方的に怒っており男性はそれを宥めている様子に見える。が、あまり効果は見られていない。

というより男性の宥めるのがどうにもうまくいっていないというか、うまいとは言えない。

「魔理沙、何怒っているんだい？」

「ああ、ドツピオ。まったく酷い男が目の前にいるんだ。嫌がる乙女を無理やり仕事場に駆り立て自分は引きこもってよくわからん物を

書き連ね。

それで来たたら来たで何の反省もない！ 乙女心どころか常識知らずもいいところだ」

「全く散々だな。君のためにもなるということだというのに。……君も、どうやら魔理沙に巻き込まれたようだね。大変だったろう」

男性がドツピオを見て、状況を察したように話すが、表情等からは、魔理沙の言うことが正しいというのであれば遅れてきたということに対する謝罪は見えない。おそらく遅れてきた、というのは魔理沙の言いがかりなのだろう。

そんなドツピオを、男性が見つけると、声をかけてきた。

「君は？……と、自分から名乗らないのもなんだね。僕は森近霖之助。魔法の森の近くに香霖堂を構えている。どうやら魔理沙に付き合わされてしまったようだね」

「いえ、そういうわけじゃあないんですけど……僕はドツピオです。ヴィネガー・ドツピオ」

「香霖、こいつは自分から仕事を手伝ってくれる今どき珍しい殊勝なやつだ。香霖とは正反対だよ」

「やれやれ、大した言い分をするものだね」

男性―森近霖之助―が肩を竦め、ため息をつく。そして手下げしていた袋から2冊の本を取り出すと、魔理沙に渡した。

「ほら、これは僕からの報酬だよ。約束通りの本と、その和訳に使えそうな辞典だ。二つセットで入ってくるのは珍しいことなんだから、本当は自分で使いたいものなんだが……」

「いいだろ、もともと私が借りようとしていたものだ。使い終わったら返してもいいっていう約束をしてもよかったんだぞ？ とにかくこれはもうぜ」

言うや否や、魔理沙はエプロンを霖之助の方に渡したと思うと、白いエプロンを身に着けた。そして、物語に出てきそうな黒い三角帽子を身に着ける。

おとぎ話に出てくるような、魔女の姿。魔理沙が少女だからそういった威厳は見えないが、周りを整えたらまさしくそれに見えるだろう

う。

霖之助からもらった本を帽子の中に無理やり詰め込むと、何も無い空間に手を伸ばす。するとそこから小さな光が放ち、光が収まると一つの箒が出てきた。

「とりあえず代わりが来たから私は終わりだ。さつさと行かせてもらうぜ」

「え、どこか行っちゃうの？」

「ああ。私の仕事は香霖が来たから終わりだからな。今はもらった本を読み解く仕事ができただ。さつそく次の仕事に取り掛からなくちゃあいけない。……ああ、そういうえばアリスに声をかけてほしいんだったつけ？」

ドツピオの問いに、魔理沙は口早く捲し立てる。それほど手に入れた本を読みたいのか、と思えるほどに。

「とりあえず、途中で見かけたら声をかけておくよ。もしくは奴は今神社にいるかもしれない。一輪が帰ってきたらそいつに頼んで直接声をかけてきな。お前の疑問も解決できるかもしれないぜ」

そこまで話すと、箒にまたがり空に浮かぶ。家の屋根など軽々と越え、その姿はみるみる小さくなっていく。そしてある程度小さくなると、勢いよく加速し、彼方へ消えていった。

嵐が通り過ぎたような状態にも感じたが、呆けているドツピオをよそに、周りはいつも通りの光景、と言わんばかりに気にせず過ごしていた。

「ドツピオ、お待たせ。こっちは割と早く終わったわ。……あれ、魔理

沙は？」

「ええと、あっちのほうに」

ドツピオは魔理沙の飛んだ方向を指さす。それを見て一輪は怪訝な顔をするが、店員が霖之助に代わっているのを見ると、納得した顔になった。

「交代が来たから自分はさっさと、ねえ。性格を考えれば納得はできるけど、やっぱりその性根正さないと駄目ね」

「それは僕からもお願いするよ。と言つても、急に変わったら気持ち悪いのもあるけどね」

「確かに」

二人で少し笑いあう。そして、思い出したように一輪は二人に向かい尋ねる。

「そういえばドツピオ、電話探してるんじゃないかな？ せっかく香霖堂さん居るんだから聞いてみたら？」

「あ、それは解決しましたよ。ほら、魔理沙からもらったんで」

「おや、魔理沙がそんなことを。珍しいね。……ああ、それは温泉騒ぎのとき、人形師に作ってもらったやつか」

「……あいつ、優しいところもあるのねえ。」

「でも、まだ動かないみたいなんですよ。えーっと、アリス？ って人に電源入れてもらわないと使えないらしくて」

「え、そうなの？ そういうものなの？」

「みたいです。で、神社にいるかもしれない、とか言ってたんですけど。神社って、ここの近くにあるんですか？」

「神社……山の上ではないだろうね、きつと。博麗神社だろう、魔理沙が示したのは」

「まあ近くにはあるよ。けど、一人じゃいけないだろうね。うーん、ドツピオもそこまで言われたのなら行きたいよね？」

「はい。電話を手に入れたら次はそこに行ってみたかったですし」

一輪はうーん、と首を傾げ考え込む。

「……」

「うん、まあそれでいいか」

雲山が一輪に何か耳打ちしたかと思うと、自分の体の一部をちぎりと、ドツピオに渡す。

その感触は雲山が最初に握手を求めた時に感じた、あの妙な感触だった。

「これは？」

「雲山の一部。これにキーワードを言えばあなた一人分くらいは乗れる大きさになるわ。で、簡単な命令くらいはできるからそれを使えば一人でやりたいこともできるでしょ。」

博麗神社に行きたいと言えばその方向まで飛ぶし、あっちに行きたいと思えば行けるし。あんまり精度はよくないからそのあたり注意してもらえば大丈夫でしょう。キーワードは『見抜け』よ」

「へえー。そんなこともできるんだね」

「身に着けたのよ。あ、他の人に言われて間違えて変わったりはしないから安心してね。雲山はそんなことで間違えたりはしないから」

「それじゃあ、私は荷物もあるから先に命蓮寺に戻ってるわ。夜にならないうちに帰ってこれそうなら帰ってきなさい。もし夜になりそうなら神社に泊めてもらいなさいな。」

昼間ならそうそう襲われたりはしないだろうけど、逢魔ヶ時を過ぎたらわからないからね」

「え、何？ おう、まっ。」

「夕方前から、日が落ちる時までだね。字で書いた時に分かるように、魔物に逢う時。」

今まで明るかったところも薄暗くなり、今まで付き合っていた者の顔も見づらくなった時、そこに潜む内なる魔物が、今まで付き合っていた者から出てくる。

人は夕暮れにかかるると別れ家路につくのは習慣だけではない。本能でそれを——」

「香霖堂さん、今はそういうのいいので」

これからのことを相談していた中に割り入った霖之助を押し切り、一輪は雲山と共に飛び去って行った。

あの大量の荷物は雲山は軽々と持ち上げ、何も苦と感ぜずに一輪の後をついていく。

「話を遮られてしまったが、結論だけ言えば彼女と同じ、危険な時間だ。僕もその時間は無闇ないごこぎに巻き込まれないよう外出を控える。」

外来人の君は妖怪にとっては格好の的だ。気を付けていくんだよ」

「ええ、ありがとうございます」

霖之助に見送られ、霧雨道具店を後にする。

少し広いところに出て、先ほど受け取った雲山の一部を手のひらに載せ、

「見抜け」

と告げると、鼻先で畳半畳ほどの大きさになった。

驚き尻餅をつくドツピオ。周りも音はないものの急に現れたものを見て、ざわめき立つ。

割と恥ずかしい状態だということに気付いたドツピオは、バツの悪そうな顔をしながらそれに乗り込む。つかまるところはないが、手その中に突っ込むと少しの安定感があった。そこを握ることにする。

「……博麗神社まで向かえ」

ドツピオがそう命令すると、それは確かに浮かび上がり、東の方角へ飛翔を始めた。

急に動くが、自分の意思で発進のタイミングをできたので、最初の時のように慌てふためくことはなかった。

そして、あまり早すぎるのは慣れていないことを雲山が知っていたからか、ややゆっくりとしたスピードで飛翔していった。

魔理沙は空を飛びながら、先の少年のことを考えていた。

命蓮寺の近くで見つけた、外来人。保護した命蓮寺のものがそういつていた。あいつらは好き好んで嘘をつく部類ではない。……一人、いや二人いたか。

とにかく、一輪はそういう面では信用できる。そして隠し事も上手ではない。つまり、隠す内容ではないということだ。本当のことなのだろう。

そこが私には奇妙だった。

多くの外来人は結界の薄いところからやってくる。結局外から来るといふことは、ややも曖昧になった結界の綻びに、蚊帳の綻びから入ってくる蚊のように入ってくるということ。

結界の薄いところと言えば、無縁塚から再思の道にかけて。それと、結界の端っこ、博麗神社。なんかよくわからんがそういう構造らしい。

それはどちらも、命蓮寺の近くではない。大体命蓮寺は人里から一番近い施設であり結界の力はかなり強く守られている。外来人がそのあたりで発見されたことはそうそうない。私はそういったニユースには敏感な方だ。外の事知りたいし。

「……奇妙な奴だな」

外来人の多くは外で生きる意味を失くした者で、幻想郷を見て奮起するものはいないわけではないらしいが。

一日であそこまで気概の入った顔つきになるだろうか？ 確かに平時はふにやふにやした顔つきだったが。

「まあいいや。後で考えようそんなこと。えーっと、香霖の本は……妖蛆の秘密。もう一つは外の辞典。翻訳の役に立つからかな」

とりあえず家に帰ったらお茶を入れよう。ああ、楽しみだ。

—IIと二と7で奏でる輪舞曲 1—

ドツピオを乗せた雲は、ゆっくりと人里から東へ向かう。

落ち着いたペースに慣れたドツピオはいつまでも掴まっているような体制から、上に胡坐をかいて座る体制になっていた。

一輪と空の旅を楽しんでいた時も辺りをきよろきよろと見まわしていたが、ひとりで見るとそれはまた別の世界を見ているようだった。

あの時は雲山がいたからか、強襲してきた妖精以外は積極的に近寄ってはこなかったが、今は警戒するものがないのか小鳥がドツピオの周りを飛んでいる。

思ったより人懐っこいのかな、と思ったドツピオが小鳥に手を伸ばすと、そのまま離れて飛んでいく。

「なんか餌とかあれば近寄ってくるものかなあ」

そうぽつりと口に出すが、それで出てくるものは何もない。

しばらくすると、森の合間から長い石段が続き、その先に鳥居、そのさらに奥に神社が見えてきた。

命蓮寺と比べると規模は小さいが、どこか靈験を感じられるような佇まいをしている。

「あれが、博麗神社ってところか」

ドツピオが認識した所で、雲は緩やかに、鳥居前まで下降する。

神社の境内は広く、閑散としていた。人里は当然として、命蓮寺にも何名かの住職が住み、少ないながらもぎやかな雰囲気を感じられた。

だが、今神社には二人の人間しか見えない。一人は境内の掃き掃除をしており、もう一人は奥の賽銭箱の隣に腰掛け、本を読んでいる。

特に会話をするわけでもなく、まるで先ほどまで誰もいなかったかのような空気さえも感じられるほど静かであった。

鳥居前まで来ると、雲は自然と姿を消す。まるで、役割を果たした

かのように。

ドツピオが境内に足をつけると掃き掃除をしていた少女が、気づいたように声をかけてきた。

「おや、いらつしやいませ。博麗神社へようこそ。参拝ですか？」

少女が手を止め、来訪者に話しかける。

その姿は、話に聞いていた博麗の巫女とよく似ていた。

「あ、えーっと。そういうわけじゃあないんですけど。アリス、って人いますか？」

「アリスさんですか？」

目的を告げると、少し不服そうな顔を浮かべた。

「わざわざここにきてアリスさんだなんて。誰かから聞いたんです？」

参拝じゃないんですか？」

「え、魔理沙から聞いたんだけど、アリスなら神社にいるって」

「あー、そうなんですか」

魔理沙から聞いたことを告げると、納得がいくような顔になる。

そして、本殿とは別にある、外れの小さな社を指さして少女は、

「どちらにしろ、ここへ来たならまずは神様への挨拶が大事です。あちらで参拝の方をお願いします」

につこりと笑ってそう告げる。

「あれ、そっちの大きい方じゃないんですか？」

ドツピオの当然の疑問にも、笑みを浮かべたまま、

「ええ。博麗なんて見かけや名前だけで仕事もしないし妖怪退治もまじめじゃないしロクなことはありません。けれど守矢は信者のフロローもたつぷりありますし、どんな方にでも大丈夫ですよ！」

……と、鼻につくほど自信たつぷりに話した。

「……は？」

「さあさ、まずは形からでも大丈夫です。すぐに終わりますよ」

呆れかえるドツピオに対し、その少女はドツピオの手を取ると、ぐいぐいと外れの社の方まで引く。

その手を振り払うことは簡単ではあるが、相手は少女というのもある。それに、悪意からの行動などではない。迷惑ではあるが。

どうしようか迷っていると、本殿のほうからまた別の少女の怒鳴り声が聞こえてきた。

「ちよつと早苗！ なに私のさいs、参拝客取ってるのよ!!」

本堂の方から現れた、紅白の色を服の基調とした少女―博麗霊夢―は、全身から怒った感情を露わにしていた。

それに対して蒼白の色を服の基調とした少女―東風谷早苗―は。

「おや、霊夢さん。まだ約束の時間は過ぎてませんよ？ 私は誠実で立派に神社の巫女として仕事をしています。感謝されこそすれ、怒られる道理はありませんねえ」

と、やれやれといったように肩を竦めながら嫌味を含めた余裕を露骨に表現して話す。

「どこがよ！ あんた自分の分社に露骨に引き込んでるじゃない！ 誰だか知らないけど、その人はウチに参拝に来たんでしょ!？」

その挑発ともとれる発言に、さらに怒りの感情を巻き上げながら霊夢は早苗に詰め寄る。

早苗は手を引いていたドツピオを霊夢から守るように間に立ち、「すぐ終わらせますから」と一言彼に告げる。

「いーえ。彼はどうやらアリスさんに会いに来たみたいです。博麗神社はあくまで場所であり、目的ではないみたいですよ？ それなら私は神社の仕事として彼に営業するのは当然のことです」

「だから、神社の仕事はウチの仕事でしょ!! あんたの所に引き込むのは約束が違うんじゃない!？」

「あらら、神社って博麗神社を指していたんですか？ てつきり神社は二つあるからウチの事だと思っていました。負けた時の約束事は『私、疲れちゃったから神社の仕事やっておいてね』でしたっけ？ 博麗、だなんて一言もついてなかったもので」

「私の代わりに仕事するんだから私の神社に決まってるでしょうが!!」

すぐ終わる、とは言ったものの。早苗は明らかに霊夢を挑発している様子であり、その霊夢も頭に血が上っているのか、あつさりとそれ

に乗っている様子である。

幻想郷の女性は大体相手のことを無視して自分たちだけで会話している。命蓮寺でもそうだったし、魔理沙も若干その気があったようにも感じられる。

話している内容はあくまでドツピオ自身に対する事柄なのだが、話の内容はだいぶ逸れてきているようだった。

「とにかく！　そういう人を騙すような手口でやるっていうならその人はあんたのところに行かせるつもりはないわよ！」

「何言ってるかわかりませんね、私は霊夢さんとの約束通りに仕事をやっているだけです。自分で言ったことを撤回するんですかー？」

「勝手な解釈が問題になってるんでしようが！　その調子を続けるんだったらここから出てってもらおうよ！」

「霊夢さんツ!!」

今まで余裕ぶった口調だった早苗が、霊夢の発言をきっかけに強い口調で言葉を返す。

手に持っていた箒を投げ出し、御幣を取り出すとその先を霊夢に向ける。

「自分で出した約束を自分で破るだなんて、巫女の、いえ人間として風上にも置けません！　無理にでも従わせるといっているのであればこの東風谷早苗、その決闘を受け入れましょう!!」

御幣を持った右手に、左手には1枚のスペルカードを取り出し、決闘の宣言を受け入れる。

霊夢も同じくスペルカードを1枚持ち、早苗に向かってそれを突きつける。

「誰も決闘を申し込むだなんていつてなかったけど、つまるところもう一度やりあいたかっただけってことね。いいわ、今度は頭が上がりないほどにしてあげるわ！」

その言葉と共に、二人は高く飛翔した。

霊夢は、人間は地に足をつけるだけではない。もともと空をも飛べるのだと言わんばかりの自然さで。

早苗は、逆巻く風をその身に受け。それでも、他所にはそよ風を受

ける程度の優しさで。

「霊符『夢想封印』」

「秘術『グレイソーマタージ』」

互いがスペルを宣言し、そろそろ夕暮れにも差し掛かる空には青だけではない、とりどりの色がひしめき合った。

まるで、夢に出てくるような。いや、夢にも出てこないだろう。

これほど美しい光景を、ドツピオは見たことがない。本や映像でも、こう表現するものはなかなか存在しない。

ルネサンス期の絵画作品にも、まさか少女たちが弾幕を用いた、美しさを競う決闘を表現した作品はないだろう。

霊夢は空を我が物とし、軽やかに舞う。自由を体現したその姿、まるで夢の世界にいるかのよう。

幾重にも連なる早苗の弾幕をわざとなのか、それとも無意識なのか。当たるか当たらないかの瀬戸際の小さな動きで回避する。

投げつける御札は霊夢の巫力か、自然と相手である早苗に対して向かっていく。上へ下へ適当に投げても、自然と相手に向かっていくのだ。

早苗は風を従え、優美に踊る。奇跡と見まがうその姿、まさに神が舞い降りたよう。

どこまでも追尾してくる霊夢の弾幕を理解し、確実に。ひきつけては直前に大きく動き、回避する。

御幣を振る度に出てくる星形が早苗の力か、一直線に向かうものと、拡散し、広く散らばり霊夢の動きを制限する。

もちろん二人は争っている。お互いの意見を通すために。

もちろん二人は敵対している。今は相手を倒さなければ、みじめな思いをするのは自分だとわかっているからだ。

それでも、二人は笑っていた。

「あー、うん。やっぱりこうなるよね」

結局自分の事には目を向けずに『弾幕ごっこ』を始めた早苗に対して、ドツピオは呆れた顔を浮かべた。

「すぐ終わらせる」とは言っていたが、このごっこ遊び、すぐに終わりそうにはない。なぜなら、どちらも実力が拮抗しているのだろう。わずかな被弾は見られるが決定的な一撃が入らないからだ。

まだ牽制の段階であり、決着をつけるのはまだ先なのか。とどめの一撃と言わんばかりのものはまだ一輪のものしか見たことがない。でそのあたりは想像で補完するしかないのだが。

弾幕は周りを傷つけることはないが、当たった時には軽い衝撃音を出して散る。それがどれほどのものかはわからないが、人体に当たったらある程度の痛みはあるのかもしれない。

飛んでくる流れ弾を体を動かして避ける。が、どうやらおとなしく座って待っているわけにはいかない程度の頻度だ。

どうやって待とうか考えたときに、ふと賽銭箱の隣の少女を思い出す。彼女はどうかやって身を防いでいるのだろうか？

そちらに目をやると、少女は相変わらず本を読んだままである。その前には小さな人形が浮遊しており、手を交差した状態で佇んでいる。

その視線に気づいたのか、本から目を上げドツピオを見ると、小さく手招きをした。

こつちへ来なさい。そういった意図を読み取り、ドツピオは小走りで駆け寄っていく。

その途中、少女の方に早苗の星が飛んでいく。危ない、と感じたその時には、小さな人形の目前で何かにぶつかり消え失せた。

「そつちで見てるのは危ないわよ。二人ともあんまり周りを気に掛けずに戦ってる。怪我をしたくないならこの子の後ろにいなさい」

賽銭箱の隣まで来ると、その少女は右手を少し掲げるとわずかに指を動かす。すると本殿の奥から小さな人形が、ティーポットとカップ2つを持ってやってくる。

それを少女の隣に置くと、その人形は先ほどから浮遊していた人形

の隣に並び、同じように手を交差させる。

近くで見ると、うつすらと赤い陣のようなものを出している。どうやらこれで弾幕を防いでいるようだった。

その少女―アリス・マーガトロイド―はポットから紅茶を注ぎ、ドツピオにも渡す。

東洋の雰囲気似合わぬ物が出て少々驚いたが、今まで見た幻想郷の住人と違い、彼女は西洋の人間のように見える。

紅茶の味は、ドツピオにも飲み慣れた、確かな欧風の風味だった。

「二人とも、いつもまああんな感じよ。周りを気にすることなく自分の事ばかり。まあ、それはこの誰にでも言えることなのだけれど」

「ええ。僕もそういうところなんだなあとここに来てから何度もそう思いました」

「でしようね」

柔らかな物腰で話しかける。

先ほどから人形を操り、その人形の姿は先に魔理沙から電話としてもらった人形とよく似ている。

そう思ったのを見越したのか、先にアリスが口を開いた。

「私があなたが用があると探していたアリスよ。私に何の用かしら、外来者さん？」

「……あれ、外来人だなんて言いましたっけ？」

「さつきから見れば誰でもわかるわよ。ここに不慣れすぎるし若干浮いた感じがするもの。それに、そんな変わった服装見たことないわ」

そういわれてドツピオは自分の姿を見直す。確かに人里も和装が基本であり、洋服を着ている者は少なかった。

ジーンズに切りこみの入ったトップスの服装……確かに、ここでは変わった服装だろう。

「そういう君も洋装じゃあないか。似合っていないというわけじゃないけど」

「まあ、趣味の範囲ね。紅魔館の人たちとかは西洋の妖怪なんだし」
「紅魔館?」

「西の方にある霧の湖。そのほとりに立っているどこもかしこも真っ赤な洋館よ。有名どころを知らない辺りも外来人だからってことかしら?」

くすくすと笑うアリス。馬鹿にされているかのように感じるその笑みに、少し不快な表情をドツピオは浮かべた。

「ごめんなさい、そういう意味で言ったわけじゃないんだっただけでも」

それに気づいたか、すぐに謝罪の言葉を述べた。

「実は、魔理沙から電話をもらったのだけれども、そのスイッチというか、電源が入っていないみたいで。入れるためには作った本人ができるだろうって」

「え、えーと。どういうこと?」

ドツピオが大体魔理沙から聞いたことを説明するが、アリスは困惑した表情を浮かべて聞き直す。

もらった人形を取り出して、アリスに見せながらも一度説明する。

「えっと。人里で魔理沙からこれをもたらったんだ。これは、電話というか、通信機なんだよね」

「そうね。確かに私が魔理沙にあげたものだわ。……どうしてあいつは誰かに渡すかな」

「今は使っていないから、って言ってくれたけど」

ありのままに伝えると、アリスはこめかみを押さえて顔を伏せる。

「何やっているの……キノコの食べすぎで味噌にキノコでも生えたのかしら」

「どういうこと?」

「これはもともと私と魔理沙で会話するために作ったものだから、他の人が使えるように作ってないわ。持ち主のわずかな魔力を燃料として起動するものなの。わかりやすく言えば、魔理沙にしか使えない

の」

「えっ」

アリスから告げられた言葉に、ドツピオは驚きの声を上げる。

「魔理沙の言っていたことと違うじゃないか。魔理沙は今使えないのは私が悪戯に使ったからか、アリスが使えなくしたって」

「それも間違っていないだけだね。たく、あのパワー馬鹿。説明する気がないのか、気づける繊細な技術もないのか……。それ、貸してもらって？」

ここにはいない対象に悪態を吐きながら、人形を貸すようにアリスは手を差し出す。

何をするかはわからないが、元々の持ち主のようだし断る理由はない。それを素直に手渡す。

少しそれを弄ると、裁縫道具を取り出した。

同時に人形を一体浮かべ、ドツピオの頭に近づける。

「髪の毛一本もらうわよ」

言うと同時にぷつり、とドツピオの頭皮から髪の毛を抜いた。

「何するのさ」

「あなたに合わせて作り直すの。人の髪は手軽に採取できる固有識別の付箋だからね」

そういうと、人形から抜いた髪の毛を受け取り、通信人形の背中を裁縫道具で開いた。

そして、慣れた手つきで丁寧に髪の毛を埋め込んでいく。

じ、とアリスは人形を見つめると、表情を変えずにドツピオの方を向き、同じように眺める。

少しの気味の悪さを感じると、再び人形の方に向きなおした。そして、繊細な手つきで人形の服を、髪を、表情を造り替えていく。

「……上手、なんだね」

作業に集中し始めたのか、一言話しかけても返事は帰って来ず、作業の手も止めない。

境内の方では、まだ二人は闘いを続けている。

「そろそろ勝負を決めてやるわ！ 霊符『夢想封印』ッ!!」

「それはこちらのセリフです！ 秘術『グレイソーマタージ』ッ!!」

互いが符を眼前に構え、高く掲げてその力を開放する。

霊夢からは多数多色の輝く光弾が現れ、それらが意思を持ったかのように早苗へ向かっていく。

早苗からは巨大な蒼い星形が現れ、自分を覆い隠すように展開。ゆっくりと回転しながら霊夢の方へ向かっていく。

複雑に動く光弾は、星の中心近くに存在する早苗目がけ向かい、彼女の秘術によって展開された結界によって消滅していく。

その力を受け切ったからか、結界は霊夢に到達する前に力を失い掻き消えた。

「私の夢想封印をかき消すだなんて……ふうん、やるようになったじゃない」

「いつまでもあなたのようにぼやぼやしている私ではありません。時代は常に進んでいるのです！」

霊夢の評価に対して早苗が啖呵を切ると、再び符を構え、その力を行使する。

「我が洩矢に遠く伝わる秘術よ、一子相伝のその力よ！ 今その奇跡の行使のために形どれッ!!」

先より熱が籠もっているのか。更に蒼白強めいた星形が出現し、回転を強めて霊夢に向かう。

「だけどそんな大きいだけのもの、避けられないとでも——」

両手を交差させ、霊夢が何か行動をとろうとしていたその瞬間。「えっ」

霊夢の右手が不自然に高く掲げられ、その行動が中断される。

その一瞬の空白。それが決定的な一瞬となり霊夢の回避するといふ選択肢を消した。

徐々に回転と進行の速度を高めていく巨大な星は、円になるかと思ふ速度となって、無防備な霊夢にそのまま被弾する。

「うあああああーっ！」

「決着！ 決着です!!」

今まで弾を掠めてはいたものの、全くその身には受けていなかった。

その体に巨大な弾幕が衝突し、重力の通りに地面に落ちていく。それを見たドツピオはその姿を見て危険と判断し、慌てて駆け寄ろうとした。

だが、地面ぎりぎりでは体はふわりと重力に逆らい、衝突することはない。伸びたままではあるが。

「心配ないわよ、それくらいで怪我するような落ち方をする霊夢じゃないわ。というか、そこまで危険なものじゃないわよ弾幕は」

特に視線を合わせず、手も作業に掛けたままアリスがドツピオに話しかける。

「いや、そんなこといわれても……あの状態で落ちてるなら初めて見たなら危険に思うよ。誰だって」

「そう? ……まあそれが普通か」

おそらく本当に何も心配していないだろう。子供が外でサッカーをやっていたとして、大人は大きな怪我をするとは思わない。それと同じように。

そういえば一輪も妖精を攻撃することに、いくらいずれ復活する存在だとして、全く抵抗はなかった。

追いつきづらいが、やはりそれが幻想郷の常識らしい。

現に、早苗は満足そうな顔でゆったりと飛翔を止めて、霊夢に近寄っていく。

「今回は私の勝ちですねえ。いやあ、最後に大きなチャンスができたので助かりましたよ」

空中で伸びている霊夢を抱き起すと、霊夢も気を取り直したように、地面に足を着き、そのままへたりと座り込む。意外とダメージはあったようだ。

受けた体を擦りながら、早苗の方をジロ、と睨む。

「いたたあ……あんた、私に何した? ……いや、アリス?」

先ほど勝手に動いた右手を触りながら、次にアリスを睨みつける。当の本人はその意に介さずドツピオのために人形を作る作業を続けている。

代わりにそれに答えるように、早苗はアリスの方に近づいて、楽しそうに手を振りながら言った。

「アリスさーん、今度一緒に人里にできたスイーツ食べに行きましょうねー！霧の湖付近で妖精が適当に育てたけどそれでも形が綺麗なイチゴとか太陽の花の隣側で毒人形と花の大妖が丁寧に育て上げたヨモギなどをふんだんに使ったその甘さは私が初めて食べた小豆大福のような味の各種大福5個入りセット。そして幸せが訪れる、とかあ〜」

やたら能書きが長く、すらすらと呪文のように唱えたその名前を告げて、アリスの手を取り満面の笑みで言う。

アリスもいったん作業の手を止め、まんざらでもない様子で笑みを返す。

「ちよつと、ねえちよつと。いやおかしいでしょ。あれ、誰の仕業よアリス」

「言っただでしょう？時代は常に進んでいるのです。稼ぎに入ってボム増やすのと変わりませんよ」

「やっぱりあんたら二人か！」

霊夢が右手から、光の反射でようやく見えるほどの細い糸を出す。

それを地面に放るともともと見えづらかったその糸は、最初から存在しなかったかのように立ち消えた。

アリスはそんな霊夢を見ると、少し小馬鹿にしたように笑いながら、

「どうしてもって言われてね？お礼もくれるっていうし、あんたが先に気付いたらそれまで。全部早苗のせいにするつもりだったわ」

「確かに私から持ちかけた話ですからアリスさんを責めるのはお門違い。ですけどまさか最後まで気づかないなんて。これはアリスさんを褒めるべきなんですかねー？」

「むむー、ズルして負かされたのね。酷い話だわ」

口調こそ不服そうだが、表情や態度では割と悔しがっている様子は見えない。

体についた汚れを払いながら、少し伸びをしながら霊夢も戻ってくる。

「まあいいや、お客様を待たせてることだし。早めの決着でよかったのかも」

そう、動こうとして出鼻をくじかれたドツピオに話しかけた。

「ふーん、外の世界から来た人ねえ。なるほど、凡夫だわ」

「ちよつと霊夢、そういう言い方はないんじゃない?」

「でも実際そうじゃない。おつとりしてて、なーんか特徴ない感じ」

「うーん……そういわれても僕はあまり否定できないかな。ここの人たちと比べれば随分おとなしいと思うもの。もつとも、これくらいが外では普通なんだからね」

「そうですね。私の周りの男子もそんな感じだったと思います。んー、いわゆる草食系男子といえますか」

「僧職系?」

「霊夢さん、違います。私たちは神職系です」

『戦いを終えた後は、後腐れなく杯を交わす。これも幻想郷の常識。楽しく騒げればそれでいいじゃない?』

自分が負け、さらにそれは二人がかりと罨という卑怯とも思われる手段でありながらも、霊夢は特に気にした様子を見せずにそう言いかけた。

直接対峙した早苗、罨を仕掛けたアリス。そして観客であり、来客でもあるドツピオ。皆を本殿へ誘い、茶を勧めた。

痛みもあるだろうし、勝負の熱つぽさから禍根もありそうなものなのだが。

ドツピオはそうも感じたが、アリスがドツピオのために作業をしていることを見ると早苗は率先して霊夢の茶の用意を手伝いに行った。

その様子だけを見れば、先まで戦っていた敵同士とは思えない。聖が言っていたスポーツ感覚というのも、目の当たりにすれば納得はいく。

「ま、そんな普通の人がすぐに居着けてよかったわ。もしどこかで倒れてしまったのなら寝覚めが悪いもの」

「あら、霊夢が人の心配するなんて珍しいわね。雨でも降らしたいならパチクリーに頼んだ方が早いんじゃない?」

「倒した妖怪を退治しなくちゃいけないでしょ？　眠るのが遅くなれば起きるのも遅くなっちゃうじゃない」

「外の人の前でそんな物騒な話やめてくださいよ。霊夢さんは仮にも一応管理者なんですから。自覚が足りないとはよく言ったものです」

「……まあ、今のところ危険な所には行っていないし、危険な時間には動いてないからね。僕には幻想郷が危険な場所もあるとは思えないよ」

お茶を飲みながら他愛ない話を弾ませ、お茶請けである煎餅を齧る。

霊夢達との対話を楽しんでいると、会話に入りながらも手を休めていなかったアリスが顔を上げる。

「できたわ。うん。……うん、上出来！」

アリスの手の中には、先ほどまでは確かに少女を模した人形だったものが、今は手のひら大の大きさにデフォルメされた、ドツピオの姿を模した人形となっていた。

前の人形と等身こそは変わっていないが、傍から見れば元は少女人形だったとは思わないだろう。

顔のそばかす、特徴ある前髪、胸と腹部の見える衣服。まさしく本人であるだろうと思えるほど精巧に作られていた。

人形は二体作られ、そのうちの一つをドツピオに手渡す。

「ドツピオ。あなたの霊性や魔力量、人間性に合わせて調整してあるわ。これを使えばどこでだってあなたの声を届けることができる。このアリス・マーガトロイド。自信の傑作よ」

「ありがとう。助かるよ。へえ、見れば見るほどそっくりだ。ホント、上手なんだね」

「わあ、かわいい！　アリスさんって、本当何でもできますよね！　前作ってもらった諏訪子様のお人形もケロちゃんみたいで可愛いし」

「ほー、よくできてるわね」

その姿が公開され、思い思いの感想を述べる。

デフォルメされているとはいえ自分の姿をした人形を褒められて

いることに、すこし恥ずかしさを覚えながらドツピオはその人形を見つめる。

「で、どうするのそんなの」

霊夢が何も知らないからこそ当然ともいえる言葉を口に出す。

事情を聴いていたのはアリスだけであり、霊夢と早苗はその間弾幕ごっこを興じていたため、詳しい内容を知らない。

「僕はいつでも連絡を取れる状況にしておきたい人がいてね。あちら側は連絡できる状態ではあるんだけど、僕の方が何も持っていないからできないくって」

「ふーん」

特に怪しまれないように。それでも疑われないように。

自然と身についているその隠匿は、ここでも平然と行われる。

何も知らないドツピオは、ボスの事を伝えずに目的を話した。

「さっそくだけど、かけてみてもいいかい?」

「性能テストは当然ね。基本構造は魔理沙に渡したのと同じだから問題ないと思うわ」

アリスの言葉を受け、ドツピオは自分を模した人形を耳元に寄せる。

「そういえばさ、私も紫からそんなもらったけどどういう構造なの、それ」

「私が解析した限りでは自分と同一に近い存在に音声・映像を送受・共有しているシステムみたいね。あの人形はただの人形じゃなくて、限りなくドツピオに近いものなの。」

ほら、藁人形あるじゃない? あれと同じようなものよ。あれも藁人形に相手の情報の一部を埋め込んで相手と共有させ、そこに打ち込んだ想いを同調させる。

それを人形同士で行わせているわけね。ドツピオに直接通じていないのはさつきも言った通り、ドツピオに近い、けれどドツピオではない物だから。

糸を介して情報を伝えるのは私でもできるし、藁人形の呪いの儀式のように手筈を踏めば何の力もない者でも行えるけど。

ちなみに、それらの力の原動力はドツピオからもらっているわ。さつきの調整はそのためね。誰からでもその原動力の収取ができれば汎用性はさらに高まるのだけれど。

……悔しいけど、私一人じゃここまでできないからね。できなくはないけど、ポンと出すことなんてできない」

「なるほど、わからん。よくわからないけどその割には簡単にできたわね？ あと、人形攻撃したらドツピオに攻撃したってことになるの？」

「まあ、それは元々あるものを改変するだけだったからね。ゼロから作るの難しいけど、複製体なら難しくはない。

後者はね、藁人形に声をかけても相手に声は届かないでしょ？ こちらは感覚の共有。こちらは音声と映像だけね」

『とうるるるるるるるるるるん』

「なるほど……携帯電話がなくてもそういうものがあるんですね。これはもう河童の技術もいらないんじゃないですかね」

『とうるるるるるるるるるるん』

「それとこれは技術体系がそもそも違うから。私もよくわからないままて言うのもあれだけど。……ドツピオ？」

テストをしているドツピオをよそこに会話を始めていた三人の言葉が止み、視線が一つに集中する。

そこには、人形を耳に当て、通話を試みているドツピオがいる。

傍から見れば奇妙なその声と共に。

『とうるるるるるるるるるるん』

『とうるるるるるるるるるるん』

ドツピオが通話音を発すると共に、アリスの傍らに置いてある人形からドツピオの声がする。

『とうるるるるるるるるるるん』

『とうるるるるるるるるるるん』

「ど、とうるるるるるるるるるるん、？」

ドツピオが通話音を発するのを、何故か早苗は真似る。

『とうるるるるるるるるるるん』

『とうるるるるるるるるるるん』

「……え、何。なんなのこれ」

ドツピオが通話音を発して、霊夢はそれを訝しげに見つめる。

『とうるるるるるるるるるるん』

『とうるるるるるるるるるるん』

「………」

三人は皆、その光景を何も言わずに見つめていた。何も言えずに見つめていた。

「とうるるるるるるるるるるん、ぶつっ」

『とうるるるるるるるるるるん、ぶつっ』

六度目の通話音を発した後、ドツピオは人形を耳から離し笑みを浮かべながらアリスの方へ向く。

「こりやすごいよ。音もクリアだし、通信状態もしっかりしている。申し訳ないけど僕たちが使っている電話の方がすごいと思っていたけどその考えを改めなきゃいけない。

ありがとう、アリス！」

「……え、あ、まあ」

アリスはその笑顔に対して、やや引きつりながらも平静を保とうとしていたが、どうしても先の違和感を拭いきれない。

「今はあちら側が留守なのか取れないのか、出なかつたけど。まあいつもは忙しい人だからね。今の着信でこちらがいつでも電話できるようになったことが伝わってればいいんだけど」

「ああ、うん。たぶん伝わってるわよ。なんでかわからないけどきつとそう」

霊夢もうれしそうなドツピオの姿を見るが、何がどううれしくなったのかよく理解できないといった表情を浮かべる。

「ところで、さっきのあれなんですか？」

真顔で早苗はその疑問をぶつけた。その質問に対しドツピオは「えっ？」

と不思議そうな顔を上げる。

無理もない。彼からすれば『特に変わりのないこと』であるから。

「さっきのとうるるるるんって。ただ声をかけるだけで通ってるみたいですよ？　こちらのお人形からもとうるるんとうるるん聞こえましたし。」

テストのパフォーマンスだからって、そこまで大仰にやらなくても」

「……??　ああ、まあわかったよ。次からはもう少し小さくやるね」
「そういう意味じゃあなくて。音量じゃなくてコール音の真似の事ですってば」

「変かな？　電話をかけてるんだからコール音くらいするじゃないか」

「しませんよ!!」

要領を得ないドツピオの発言に、早苗は大声を上げて返す。

「電話口の方からとうるるるんって音が鳴るのは普通に認めますけど自分の口でそんなこと言う人なんていませんでしたよ!!　てかそれ電話じゃないですからいらないうでしよう!」

私の電話からそんな声でしたら気持ち悪くて切っちゃいますよ!

許されませんよ!!」

「ちよ、ちよ、待って、何に怒ってるの!」

「変なことを変って言うって何が悪いんですか!」

「落ち着きなさいよ、早苗。別に個人のやり方なんだからどうでもいいでしょう?　私もおかしいとは思っけど」

「そーよ。別に誰かに迷惑かけてるわけじゃあないんだから。紫とかがあんな風に使ったら鬼縛陣だけど」

怒る早苗に対して、霊夢とアリスの二人が抑える。

ドツピオは未だに何に対して怒っているのかはわからず、早苗も「二人がそういうなら……」と折れる。

まだ不服そうではあるが、霊夢の「誰かに迷惑かけてるわけじゃない」という言葉が、彼女を留めたようだ。

「……なんだかんだで。しっかり通話はできてるみたいだから問題はないわ。これ二つ、あなたに渡しておくから。その話したい人に渡し

ておけばいつでも話はできるわ」

「どうもありがとう。……ところで、これ元は魔理沙とアリスが会話するためのものだったんだらう？　今更言うのもなんだけど、もらっちゃっていいのかい？」

「あいつに渡してたらうるさいままだったから最近では使わなかったし、返してもらいたくなったらそのまま返してもらおうわ。」

もしくは、紫からもらったオリジナルは手元にもあるし、また一から作り直すのも手だしね」

「わかった。ありがとう」

外を見ると日はすっかり傾いており、空からは暗闇が差し込み山の合間から僅かな夕日が見えるのみとなっていた。

「話し込んでたらもうこんなに暗くなっちゃいましたね。そろそろ帰らないと神奈子様にも怒られちゃう」

「そーね。こんなに暗くなったら神社も閉店の時間よ。帰れるやつはさっさと帰りなさい」

「まあこれ以上ここに居る理由もないしね。早苗、あの話は帰りながらでもいいかしら？　最悪、守矢神社で厄介になるかもしれないけど」

「二柱とも話さないと少しこんがらがりそうですからね。それは構いませんよ」

「ドツピオ、あなたはどうするの？」

早苗とアリスはそのまま帰宅する話をしている。

対してドツピオは少し考える時間になってしまった。

幻想郷では夜は危険である。なぜなら妖怪の時間だから。もし帰れるなら命蓮寺に帰ってくればいいけど、帰れなさそうなら神社に泊めてもらいなさい。

人里を発つ前に一輪が伝えてくれたことだ。

……が、短い時間だがここで過ごしていて、少し気になることがあった。

「えーっと、唐突に聞くけどさ。この神社って、君以外に誰かいない

の？」

「？ 私一人だけど」

霊夢一人。

それを考えると、二人で過ごすのはすごく気恥ずかしい気もする。

「それがどうかしたの？」

「ああ、そのう」

しどろもどろするドツピオを見て、早苗は唇の端を吊り上げ、顔を歪ませる。

「ああ、なるほど。良かったですね霊夢さん。あなたのような人でもそういう風に思ってくれる人がいて」

「は？」

「いや、そういう意味じゃないよ！」

早苗の指摘に霊夢は理解不能といった表情を浮かべるが、その指摘をされ、ドツピオは逆に慌て始める。

「違うんですか？ そのキョドリ方からてつきりそういう意味かと思っただですけど」

「全然そういうのないからー！」

「その焦り具合から特定余裕ですね。話には聞いていたけど霊夢さんってあんまり浮いた話が上がらなかったので。これを機に霊夢さんにも彩りある暮らしが生まれるといいですね」

「ちよつと！ その既成事実を作ろうと僕が行動しているような仮定はやめてくれ！」

「一体何の話をしようとしてるのよあんたら」

勝手に霊夢を中心にして盛り上がる二人に、渦中の人物が割って入る。

普段は気にはしないものの、先の会話で意識が集中してしまい、彼女を見るドツピオの顔は、少し赤みが差している。

同じくらいの年齢、普段見ない異国の姿。自国と違う丸みを帯びた雰囲気。

ここに来てから騒ぎが続いたために落ち着いて見られなかったが、

意識してみると彼女は女性としては非常に高水準である。つまりかわいなのだ。

もちろんそれはここで今までであった者たちも同じなのだが、二人きりで泊まろうとすること、そしてそれを囃し立てることによって尚更彼女にとつてのその意識が集中される。

「霊夢さん、力の無い外来人の方を夜中にほっぴり出しますか？」

「しないわね」

「じゃあそんな外来人さんは安全に帰る当てが無い。どうしますか？」

「まあ、家に泊めるわね」

早苗の質問に対し、霊夢は淡々と答える。そして、ある程度早苗の予想どうりの答えが返ってきているのか、にんまりと微笑みながら次の質問に移る。

「それが同じくらいの男の子でも？」

「何かそれが関係あるの？」

「あなたのことが少なからずと好意的に解釈している男の子でも？」

「別に気にしないけど」

「……今日の前にいる男でも？」

「一人で帰らせるわけにはいかないでしょうが」

本心から『心底気にしていない』というのが感じ取れるほどに、表情も言葉の調子も変えずに答える。

「……僕の考えすぎかなあ。というよりは、もしかしたらあつちはこういうった出来事に慣れきってるのかもしれない」

その様子にドッピオは自分が馬鹿みたいに気にしていることを考え直す。

が、あまりに気にしない霊夢の様子を見た早苗は、

「……草食系女子」

「肉くらいたまには食べるわよ!!」

うるんげな目線をしながらほつりと蔑みの言葉を呟くことくらいしかできなかった。

「早苗、霊夢なんて元々そんな奴よ。いつまでも相手にしていないでそろそろ帰りましょう」

「そうします」

「なんか言い方が気に入らないから、次はもっといい物持ってきてね」
「はいはい」

本殿前まで二人を見送る。

アリスと早苗は別れの言葉を告げると、自然に飛翔して西の方へ帰ってゆく。

ドツピオと霊夢でそれを見送ると、再び中へ入っていく。

「んで、泊まってくんではしょ?」

「え、ああ。お願いしてもいいかな」

「構わないわ。実際いろいろ泊まっていくし、中には勝手に泊まって寝ていく奴もいるくらいだから。そういったことしなだけで、あなた達の方がマシよ」

ね? と霊夢はドツピオに相槌を求める。

「宿泊施設じゃあないんだしね。そんな勝手なことではできないよ」

「外の人はまともで助かるわー。とりあえずごはんの準備してくるから、さっきの所で待ってて」

「あ、何か手伝おうか?」

「お客さんにそんなことはさせられないわ。大丈夫だから座っててね。……あ、嫌いなものがあってもちゃんと食べてね。捨てるのもつたないから」

そう告げると、霊夢は台所へ向かっていく。

その言葉に甘え、ドツピオは別れ、居間に戻っていく。

「だーかーらー、こうよ、こう」

「同じようにしているよ。だけど……」

「ちよつと違うんだってば、筆の持ち方をして、そこに挿すだけでも大
体できるのに」

「日本の筆なんて持ったことないよ。ペンと同じ持ち方でやってるん
だけど、霊夢は違うって言うてくるし」

「ちゃんと持ってれば先っぽが交差したりしないわよ。それと、上の
箸だけ動かすようにするの」

夕食が並ぶ卓を挟み、霊夢とドツピオは箸の持ち方について言い
争っている。

事の発端としては、ドツピオが『箸を使えないからスプーンなどは
ないか』と発したことである。

「まったく、外の人っていうのは箸を使わないのかなあ。それとも箸
自体がもう外にないの?」

「アジア圏で使われてるものだから、僕たちが使い慣れてないだけだ
よ。……もうさ、ご飯も冷めちゃうし、少しくらい変でもいいだろう
?」

「別にかまわないんだけど、見ててイライラするのよ。そんなたどた
どしく使われちゃあさ」

初めは『うちにはお玉くらいしかないからそれ使いなさいよ』と言
われ、不恰好ながらも使っていた。

だが、何度も食事をとりこぼし、床に落ちた物を手で取っている内
に、霊夢が『そんなにこぼしちやあもつたないでしょ!』と怒り出
した。

それから、10分ほどこうしてやり取りを続けているわけである。

「何度も言うけどね、食べ物一つ一つに神様やらお百姓さんやらの心
が詰まっているのよ? それを無視している行為は私の前ではさせた
くないもの」

「ならば、ほら、あれで出してくれれば。おにぎりみたいにさ」

「怠けない!!」

「あ、うん。ごめん」

何度も指摘はされているのだが今まで使い慣れていない物を急に使いこなすのは難しい。

それ故にドツピオは何度も失敗してその度に暗にそのことを伝えようとしているのだが、それが霊夢には全く伝わらない。

……そもそも霊夢は『なんとなく何でもできてしまう天才』だからなのだが。

「まったく……こぼさないようにさ、せめて食器を口に近づけるとか、そういう努力とかしなさいよ」

「いや、それはそれで行儀悪いよね?」

「まあそうだけど。ポロポロこぼすよりかは許容できる。まだ見慣れた方だからね」

「見慣れた、って?」

「今日はいないけど、私の神社を根城にしてよく飯をたかってくる奴がいるのよ。飯だけじゃなくて酒もたかってくし鬱陶しいったらありやしない。

まあ、そいつで見慣れちゃってるから」

いいことじゃあないけどね、と最後に締め、自分の分を食べ始める霊夢。

ドツピオも挑戦は続ける。おかずの里芋の煮つけを掴もうとするが、もともと掴みづらい球状の上に、ぬめりもついている。

味自体は悪くなかったので食べたいのだが、大碗に入っているためにこれを口元まで持つていくわけにもいかない。

何度かやってみるがうまく掴めず、箸の一本で里芋を刺して食べようとするが、

「刺し箸しない!」

すっかり見られ、注意が続く。

時間はかかったが、食事は無事に食べ終えた。

霊夢は『寢床を用意するからあなたは食器洗つといて』と、奥の部屋に入つていった。

炊事場について、やはり自分の知っている物とは違っていたが、どうやらここでは水桶に漬けながら拭い取るだけのようだ。

文化レベルの違いには驚かされ続けているが、大きく困るほどでもないから今のところは問題ない。

「洗い終わったー？ 布団敷いたわよー」

洗い終えた食器、汚れた水などはどうするのか、周りを見回しながら考えていたところに奥から霊夢の声が聞こえる。

「洗い終わった食器とかはどうすればいいんだーい？」

「そのまま漬けておいてー」

返事に従い、それをそのままにしておいて奥の寢所へ向かう。

「こつちにドツピオの分敷いておいたから、あなたはここでね。私は隣で寝てるから」

そこにはすでに寢間着に着替えている霊夢が、客間の真ん中に布団を敷いて用意をしていた。

寢所ではさすがに霊夢もわかつていたのか、霊夢の布団はまた奥の部屋に敷いてある。

「うん。すこしほっとした」

「？ よくわかんないけど、私の所に入ろうとしたら封印されるからね」

「え？」

「それじゃ、おやすみなさい」

一方的に告げると、霊夢は自分の寢所に戻り、襖を閉める。

妙に不穏な一言があったが……もともとそういうことを気に掛けていたところもあつたので、逆に安心できる結果となつた。

「……体感的にはまだ早く感じるけど、もう寝ようかな。今日もいろいろなことがあつたし」

命蓮寺でも夜になったらすぐに皆床についていた。神社でもそれは変わらない。

電灯が社会に設置されるようになってからは人間は夜を忘れていった。

しかしこの古き伝統の残る幻想郷ではそのようなことはない。明確な時間に支配されず、自らの行動を日々の移ろいにゆだねている。

「今日も、いろいろ起きたからなあ」

雲のような、雲ではない物に触れた、

初めて生身で空を飛んだ。

スタンドでもできないような、大規模な空中戦に巻き込まれた。

魔法使いと一対一で話し合った。

空飛ぶ少女たちの決闘を見た。

ボスに仕えてから表社会ではありえないことは何度か体験したことはあるが、現実を起こりえないようなことを、魔法でもなければ体験できないようなことを味わうことになるとは思わなかった。

布団に入って数分で、その興奮から冷めた体は休息を求めているようだった。

「明日は……どうしようかな……」

おぼろげに働いていた思考は、ゆっくりと速度を落としていった。

夜。

辺りが静寂に包まれ、蟲の生きる音だけがわずかに響く。

もう少し耳を凝らしてみれば、夜を舞台とする生き物たちの声が聞こえるだろう。

博麗神社は、今日は静かな夜だった。

明りの無い部屋で、一人、布団から起きだす。

外とつながる薄い障子は、僅かな月明かりを部屋に送り込んでいく。

「……すか……か……か……」

耳を寄せなくとも、周りに吸収するものがないから。自然と隣の部屋の巫女の寝息が入ってくる。

それを確認すると、ゆっくりと『男』は立ち上がる。

その姿は、今まで目覚めることなく、足腰が萎えた者がゆっくりと立ち上がるかのような不安を感じさせるほどに弱々しい。

それでも前に進もうとする意志は、明かりに照らされた顔から感じられる。

障子を開け、外に出る。

体格の変化によりきつくなつた上着を部屋に脱ぎ去る。

ディアボロは、ゆっくりと表に向かい歩き出した。

「……………」

その足は博麗神社の境内前、そして鳥居を潜り、麓へ続く石段の前に着く。

夜風が、ディアボロの髪を揺らした。

「幻想郷、か」

博麗神社からは幻想郷が一望できる。

それを知っていたわけではないが、ここに自然と足を運んでいた。

その風景は夜闇に包まれて何があるかはわからない。自分たちの世界ではすでに観ることが難しくなっている、自然の闇。

「……………なるほど、幻想の世界、か」

そう一人呟き、石段に腰を下ろす。

空に輝く星空を見ながら、月と星だけが自分を照らしていることを確認した。

「そして、幻想に生きる人間たち……………か」

彼女たちからすれば、きつとここは現実なのだろう。ドツピオの体で味わった、幻想の体験も、彼女たちには普通の事だろう。

しかしあくまで自分は、ディアボロとはこの人間ではない、『現実』の人間で、『現実』に生きていた人間だ。

それでも、現実では足を踏み入れてしまっていた。他の人間は持た

ず、選ばれた者たちだけが持ちうる能力。

「この世界を知ってしまったのなら、私たちのような者は一体なんなのだろうか」

誰に話すわけでもなく、星空に向かいそう呟く。

ここにきて何人かの能力を見てきた。だが、それはスタンドでも表現できなくはない能力である。

単純な攻撃であれば。巫女がやっていた、陰陽玉と札の投擲。スタンドで投げつけることで表せる。

魔理沙の行った、緑の光の玉。自分の界限では見なかったが、遠距離攻撃型のスタンドがそういった攻撃ができると聞いている。

さすがに空を自在に飛び回ることとはできないが……スタンドで自らの体を持ち上げ、それを表現できなくはない。

もしかしたら、まだ見ぬスタンド使いには空を飛ぶ能力を持つものがあるかもしれない。

「この力の行き着く先が、この世界……ということもあり得なくはないのか……？」

発掘してから、あの戦いに至るまで。自分は矢とスタンドの関係を特に調べようとも思わなかった。

もしそのことを自分の組織でも調べ上げ、到達していたなら即座にポルポの矢を自らに使用していただろう。

力の行き着く先。鎮魂歌の力によって自分は敗北し永劫の苦しみを背負わされた。

そのことがわからなくなるほど呆けているわけではない。ただ、攻撃を受けたその先にスタンドを超える力を持つ者が多様にいる世界に行き着いた。

この事実が、このありえない可能性を否定させずに頭の片隅で響いている。

「ここに来るまでに、三度命の危機を味わった」

指折り、その体験を数えていく。

ひとつ。寅丸星との会合。

ひとつ。一輪との道中に襲われた、妖精たち。

ひとつ。ここで行われた少女たちの決闘。

ドツピオでは感じなかっただろうが、自分の体験から死に繋がる、と感じた情景を思い返す。

「それでも、今私はここにいます」
時間にして48時間ほど。鎮魂歌の中では1時間と経たずに命を落としていた。

命蓮寺にいたときはまだ続いているのかとも感じたが、ここまで生きていることを考えると、危機は去ったという気持ちが出ている。

「一体、どういうことなんだ……？ 何故、ここに導かれたのだ……？」

疑問は尽きない。

あの時に死んだはずのドツピオは、再び自分のために動いている。どうでもいいと切り捨てたはずなのに。今際の時にも頭の片隅にもお前の存在を思わなかったのに。

スタンドを使いこなしている。ドツピオの状態では自分は『感じる』ことしかできないが、それでも今の自分よりかは使いこなしている。

主導の意識が、ほとんど入れ替わっている。今の自分は朦朧としてドツピオについていくことしかできない。だが、ドツピオは自らの足で、私のために行動している。

今までは自分の都合でドツピオを動かしていた。だが今では彼が私の為に動いている。似ているようで、意味合いは大きく異なる。

きゅーん。

何かの鳴き声かと思うと、石段、ディアボロから少し降りたところの傍らに一匹の狐が居り、じっとこちらを見ている。

そのことに気が付き、視線が合うと、狐はさっと草むらに姿を消した。

「狐……か」

全てはそこで撮った写真からだった。

もしあの写真がなければ、自らが再び出向くこともなかったかもしれない。

もつとも、あの時点で手札のカードはほぼ全て切られていた。奴らを止めるためには、最終的には自分が行かなくては止めきれなかったとも今となっては思う。

止めきれなかった。そう、自分は強力な親衛隊もいて、切らざるを得なかったジョーカーを使って。もう一人の裏切者たちと立ち会っても奴らは一人も欠けなかった。

全てを切り抜けることができた奴らと強力な部隊を率いても敗北した自分との違いはなんだったのか。

……認めたくはない事実が、そこにはある。

「ドツピオよ……何故かはわからんが、ここにいてくれて感謝するぞ……」

過去の自分は自発的に眠ることすら恐怖であった。いつ命が狙われるかもわからず、親衛隊も、いつ裏切るかもわからない。

地位を与えなかったとはいえ決して少なくない報酬を与えていた暗殺チームも、欲望に負け裏切ってきた。

いくら自分の王たる力があるとはいえ、彼らには負けれないと言いつて切れない。それほど優秀な者たちだ。それは逆に裏切られた時には即座に寝首をかきに来ることだ。

それを防ぐ隠れ蓑。自分というものを完全に隠すことのできる者。

それがドツピオであり、同時に自分の体を護る癒し手でもあった。

肉体は共有しており、その安寧は欠かすことはできない。いくら強靱な体でも、安息の時間は取らねば自壊してしまう。

ドツピオで眠れば、自分ということが明かされることなくゆっくりと休むことができる。

ただの隠れ蓑という役割だけでなく、自分の休息の代役という役割もあった。

今、この姿でここに立てるのもその役割があったからこそだ。

「それすらも切り捨てたから、私は敗北したのかもしれない」

顔を伏せ、自嘲気味に笑う。誰も聞いてもいないのに、口に出して。まるで、自分に言い聞かせるように。

このような後ろ向きな姿勢は自分でも体感したことがない。

感傷的な気持ちなのも、立ち上がったばかりの自分だからか。それともこの幻想的な風景から、本能的に想起されているのか。

どしゃ

突然、背後から何かが落ちた物音が聞こえる。

その音は、今まで思いに耽っていたディアボロを現実に引き戻し、体を硬直させるに十分すぎる音だった。

体が急に冷え込む。心拍数が上がる。それに伴い、呼吸も激しくなってくる。

首筋を伝う汗が、後ろの何かをより強く意識させる。

かつての栄光の代償、鎮魂歌の力。それによって味わわされた永遠の呪い。

『背後から何かに襲われて死亡する』その体験は何度も何度も繰り返されている。

突然現れたその存在に、体が恐怖で支配される。

『幻想郷ではスペルカードによる決闘が流行っている』命蓮寺の僧はそう言っていた。

それはあくまで流行であり、それを良しとしない者もいるのではないか。

もし後ろにいるのが博麗の巫女であればどれほど気が楽か。

彼女だったら、まず声をかけ地を歩いてくるだろう。後ろに突然着地するなんてことはない。

何か、例えば木の枝が落ちただけであれば。

しかし、後ろから、確実ににじり寄ってくるその気配は到底無生物

のそれではない。

「ハア、ツ、アッ」

振り向いて確認できればどれほど楽なことか。

それも、鎮魂歌の経験が呪縛する。

今まで振り向いたその先に、問題が解決することがあったか。

ない。

例外なく自分は死ぬ。

いつしか目を強く瞑り何もわからずに死のうとするようにもなつていった。

(……やはり、死ぬのか)

今までほんの僅かな希望を持たせ、立ち上がろうとしたところを折りに来る。

ただの鎮魂歌の気まぐれの時間だったのか。

(、そうだ、エピタフを——)

いつしか、予知を見ることも恐れていった。

予知は絶対であり、それは必ず起こり得ること。それを消し飛ばすことができるのが王たる力。

だが、それが行えないのなら、予知はただただ残酷な未来を映すものでしかない。

そのうち、それすらも見えないようになっていった。

だが、今なら。ドツピオは自分が分け与えた能力を使っていた。あれは元々自分の肉体、自分の精神で生まれたもの。

それを分け与えた者が使いこなしているのだから自分が使えない道理はない。

……はずだが、その淡い希望すらも打ち砕かれたとしたら。それが思考をも縛り付ける。

足音は、石で敷き詰められた道を固い靴で歩くかのような、カツカツと高い音を立てて近づき始める。

今まで音を消して近づこうとしていたが、それをやめて速度を上げる。

(体を動かせ、振り向け、そして対処しろ……でなければ、ここに存在

する『意味』がなくなる)

胸が締め付けられるように苦しい。手足は血流が行き着いていないかのように冷え切っている。

それでも、今この場で死ぬわけにはいかない。

意を決し、座っていた体を立ち上げらせ、その気配が伝わる背後へ振り向く――

「んわーーーーーっっっ!!!」

「そこにいたのは、大きな瞳と舌がついた紫色の傘。

その持ち手であろう少女の大きな声と共に、それが顔前に突き出される。

恐怖の中で振り向いたディアボロは、

「なっ」

「……あっ」

大きくバランスを崩し、後方へ崩れる。

後ろには長く続く石段。その長さは、明かりの無い夜では把握しきれない。

体が大きくのけぞり、世界が逆転する。目の前に手を伸ばすが、掴まるべき所が何も無い。

自身の長い髪が目の前を流れていくようになびいている。

ほんの一瞬、そこから見ようと思えなかった予知が映っている。

それは今と寸分変わらぬ、石段から転がり落ちる自分の姿であった。

自らの体が宙に浮かび、自然落下する感覚。

今までに何度も、何度も味わった光景だが、その感覚は初めてである。

それが『ゴールドエクスペリエンス・レクイエム』。死ぬという真実に到達することは決してない。

死を体験した時、それは精神の記憶に残るが肉体の記憶には残らない。

それは味わった苦痛は覚えているが、その後の繰り返しでは肉体は『初めてそれを受けた』様に体感する。

一度死んだ後には、その時の苦痛も苦しみも無くなっている。ただ『確かに苦痛を受けたという記憶』のみが存在する。

……ゆえに精神は破綻せずに今まで保たれている。それこそが究極の苦痛であるのだが。

「ぐっ」

背面に強い衝撃を受け、全身に痛みが走る。口から体の中全ての空気が吐き出される。

同時に体が跳ね上がり再び、ほんのわずかな浮遊の感覚。重力を無視したかのように、頭が地面に、両脚が空の方へ向かう。

それも一瞬、頭から石段に体を打ち付けられ、転がり落ちていく。

「(嫌だ 死にたくない 誰か)」

もう 死ぬのは。

無意識に体を守ろうと腕で頭を覆う。膝を折り曲げ、胴体を守る。

今までに何度も行い、それでも守りきれなかった。だから、いつしか忘れた本能的な防衛反応。

『取って当然』だった行動を、それでもすることができず何度も命を

失った過去。

それを払拭するかのごとく、ディアボロは生きようとしていた。それでも、落下を体験していく中。終わりがわからぬその状態。生き延びるとも思っていた意志も一瞬で冷えていく。

そもそもそう思っていたのは時間にしてどれだけだったのか。石段を転がり落ち、頭が揺さぶられるその状況ではとても考えられない。

一瞬、何かに体を引っ張られる感覚。

それが何かわかることもなく、体を引っ張られて勢いよく転がる力に勝つことも適わず、ディアボロは闇に消えていった。

意識も、その姿も。

……

……

……

「……………う、むう……………」

どれほど経ったのか。それとも、『次の』時間なのか。いや、生き延びたのか。

辺りは暗く、僅かに星の明りが周辺を照らすのみ。

体を、頭部を打ち付けた衝撃でまだはつきりとしていない意識の中、何とか状況の確認を行う。

一寸先ほどしか見えぬ暗闇。それでも、どうやら転がり落ちてきた石段が近場に見える。

自分の体。全身に痛みを感じる。想定内。だが、動けなくなるほどではない。

「……………何……………だと」

動ける。それはつまり、怪我の度合いは少ないということになる。そして、死んだという事実はない。

石段の上に目をやる。その先は暗闇で登頂までは見えない。体を起き上がらせる。ゆっくり、起こそうとするがどうやらそこまでの力はないようだ。

地面に手を着き、体を起こそうとする。とにもかくにも、動かなければどうしようもない。

ぐにいい、と何か柔らかいものに手を着いた。それが何か、と考える前に、

「あうっ！」

甲高い、この場に不似合いな少女の悲鳴が上がる。

思わず地面を見ると、まさしく自分の下には声を上げたであろう少女がいた。

「……へへ、ねえ。こういう状況でも、そこ触られるのはさすがに恥ずかしいかな……」

仰向けに転がっている少女の胸にディアボロは手を着いた形になっている。

それより、少女を下敷きにしたことに対して驚き、その場を下がる。

少し離れて少女の様子を見る。

薄い水色の衣装はボロボロになっており、随所に血が滲んでいる。

右眼は衣装と同じ薄い水色をしているが、左眼は充血したかのよう
に赤い。そして、頭部からの出血からか、血液で汚れ顔色も蒼白。

四肢もあらゆる方向に曲がっており、ただ下敷きにしただけではない、それ以外の要因で怪我していることを簡単に理解させる。

傍らには、紫色の傘。

「お前、まさか、上で私を突き落した……」

「違うよー……私は驚かしただけで、勝手に落ちたのはあなただよ……」

声を交わせばわかる、その少女は確かに落とされる前に聞いた声。

理由はわからない。だが、結果だけを見ればその過程は推察でき

る。

自分も怪我をしているが、それよりも大きな怪我をしている少女。あの場において、自分に対して対応した行動を取れる者。

「……お前が」

「？」

「お前が、私を助けたのか？ ……自分の身をも、犠牲にして」
「うん」

動かぬ体で、それでも笑みを浮かべながら少女―多々良小傘―は返答する。

その返事は肯定。自分で危害を加え、その身で相手を助けたこと。

「……何故だ」

「え？ 助けたこと？」

「そうだ。何故私を助けた。自分で驚かして、自分で助けた。それも、そこまで自分の体を負傷させて……理解できない」

「えー、じゃあ死んでもよかったの？」

「そういうわけじゃあないが……見ろ」

ふらつきながらもディアボロは一度立ち上がり、改めて小傘の近くで屈みこむ。

そして、小傘の細い腕をおもむろに掴む。

「いっ!!? いだだだっ!!」

痛いと言いつつも、それを振り払うことはしない。否、できない。

掴まれた腕も、その逆腕も同じように折れ曲がっており常人であれば苦痛で動かすことすらできないだろう。それは妖怪でも同じようだ。

「ちよ、何するのさー!」

「自分の体を捨ててまで、私を助けたんだ。お前は。お前のおかげで私は軽傷で済んだが……わかるだろう、自分が満身創痍なことを」

「そうだけどさー。……人間よりかは、丈夫だよ?」

相手が自分の心配をしてきている。そう取ったのであろうか。

にこやかな笑みは消えず、明るい声で返ってくる。

だが、それが不可解であり、差し向けられるその感情は理解できない。それは同時に不愉快にも感じる。

「それを、私は何故だと聞いているんだ。自分で危害を加えた人間を、相手以上に被害を被る方法でしか助けられないとわかっていて……」

「……どうしてそんなことに固執するのかわからないけどさ。ただ、何ていうのかな」

「助けたかったから、じゃあダメなのかな？」

「……何だと？」

「だからさ、つい思わず助けたくなくなっちゃったんだよ。もちろん理由はあるんだよ」

責め立てるディアボロに対して、やはり笑みは残したまま小傘は話す。

「私はさ、驚かすことくらいしかできない妖怪でさ。でも、それすらもあんまり上手じゃなくって、いつも失敗してばかり。

今日もだーれも驚かせずに過ごしてて、ひもじいままだったの。

それでね、ここにふらってやってきたところにさ。あなたがぼんんって居たじゃない。

だから驚かそうとして後ろに降りたの。その時にどしゃって、大きな音立てちゃったじゃない？

ああ、また失敗しちゃったな、って思ったんだけど、あなたそれですつごく驚いてるんだもん！」

本当にうれしそうに、本当に楽しそうに。自分の体の事なんて忘れてるかのよう胸の内を話す小傘。

饒舌に話すその姿を、ディアボロはただ黙って見下ろしていた。

「きつと、あなたその時に『死ぬほど』驚いたでしょ？ 私分かるの、そういうの。」

あ、言っただけで、私人を驚かすのが生きがいで、生きるためにも必要なの。

でも、さっき言った通りあんまり上手じゃないからさ……そういう

反応をもらえたのが嬉しくって、楽しくなっちゃって。

だからまた、後ろから大きな声で驚かしちゃった！」

そこまで話すと、その時を思い出したか、一際的笑顔を浮かべる。

屈みこんでいたディアボロは、気づけばそこに腰を下ろして彼女の話を集中していた。

「でさでさ、そうしたらあなたさ、またまた驚かされちゃったでしょ？」

もう、この幻想郷でそんなに驚く人なんていないと思っていたのに。2回よ、2回。

……で、その驚きと共にあなたは落ちた。私は、驚かすのが目的であって、その後の事なんて本当にどうでもよかったんだけどさ」

「……………」

「でも……なんでだろうね？　こんなに驚いてくれたことへの感謝の気持ちがあったのか。

私自身悪戯心で人を襲うことはあっても怪我させたことはほとんどないのに、結果的に怪我させてしまうことによる後ろめたさなのか。

よくわからないけれど……体が勝手に動いてたんだ。あは、やっぱり理由なんてないのかな」

自分にとつてとても楽しい体験を話して、満足したかのような表情を小傘はディアボロに返す。

その姿は、いいことをした、楽しかったことがあった。その経験を共有しようと話す子供のような。

そんな無邪気さを感じられた。

「……その程度で、ほんのその程度でお前は動けるんだな」
「えっ？」

ディアボロは小傘に語るわけでもなく呟く。

「今、お前に再び驚かされているよ。この世界の価値観なのか、それとも自分が狂っているのか……そんな理由で、自身の命をかける行動を取れる存在がいることにな」

今までただ感情なく、理解に努めようとしていた温かみの無い視線から、感情のこもった、語りかけるような表情で話しかける。

「えっ、どういうこと？ さっきも言ったけど、別に私にとっては死ぬようなことじゃないし」

小傘は戸惑い、先に話した同じことを繰り返す。

「それでもだ。自身の身体を張るということは相当に難しいことなんだよ、私達の『常識』、特に我々ではな……」

「……どうしたの、急に」

「……さあな、何故だろうな」

感傷なのか。精神と肉体が傷ついているから。

感謝なのか。死にかけていた命が救われたことから。

ほんの少しのこととはいえ、ほんの些細なこととはいえ、自らの想いを他人に話すことなど。

他者に自分を知られることを恐れた。それは、自分が絶頂の地位にいるための最低条件。自らを知るのは自らのみで良い。

それでいいと思っていた。それがいいと思っていた。はずなのに。

「くくく……はははははっ」

「ほんとにどうしたの？ 頭でも打ってた？」

何故だか澄んだ気持ちになってゆく。幻想の気風に触れたことによつて、今までの固まっていた何かが解きほぐされていくような。

それは完全にほぐれたわけではないこともわかっているが、それでも快感には変わりなかった。

それに気づけない小傘は不思議そうな表情を浮かべるが、ふと、何かに気付いたように石段の上を見る。

「あ……なんか来る。ばれたかな」

「何？ ……そうか、あんなに大きな音を出してしまえば気づかない方がおかしいだろうな」

もちろんディアボロには何も見えてはいないし聞こえていない。だが、想像でならこの状況でただ一人近づいてくることを想定できる人間がいる。

小傘もそれを考えたのか。離れに転がっている紫色の傘を見つめると、それがひとりでに浮かび上がり小傘の元へ来る。

「よいしょっと……いででで」

痛みが残っているであろう体でその傘を持つ。小傘の傷ついた体にと違い、傘は無傷であった。

無傷の傘が開き、小傘の体はそれにぶら下がるような形で浮かび上がる。

その様は打ち捨てられた遺体が意思なく宙を浮かんでいるようであった。

「傍から見れば、その姿は存外に恐怖を感じる。お前が普段驚かせない者どもも驚くかもしれないな」

「おお、それは名案だわ。まさしく怪我の功名。でも、こんな夜中に人間とあつてるのがわかったら退治されちゃうからね。」

今のままじゃ本当に封印されちゃう」

くわばらくわばら、と唱えながら小傘は虚空へ飛び、消えていく。

見た目愛らしい少女の分、全身見てわかるほどの骨折と傷による流血、打ち身などによる損傷。そしてくわばらくわばらと唱えて宙を漂う姿。

自分が味わい、見事に引つかかったとはいえ逆に自分以外ではそうそうかからないようなやり方を自慢げに話していた姿と、自分の惨状を人に言われるまで省みぬ姿。

なるほど、驚かすことが下手と自分で称するほどの事はあるな。ディアボロはそう感じた。

まさか、こんなところでこんな奴らに逢うとは思っていなかった。

無償、と厳密にいうわけではないが自分に見返りがないのに自らの体を捨てて行動をできる者。

そういう意味では命蓮寺の者たちも大した奴らではあった。昔から続く、他人の教えでしか道を決められず、他者を辿ることではしかで

きぬ者たち。

宗教という自ら思考をすることを放棄した者たち。それらの教えに従ったからか、それとも単純な善意からか。

功德を積むことによるための行為であるならまだ理解できる。もし後者であるのなら……そのような甘い考えに吐き気を催すかもしれない。

それで助かっている自分がいるのだが。

そしてまた、同じような者に出会った。その者は同じく、無償で自らの体を捨てることのできる者。

まだ精神が幼いから。そういう言葉で片付けることもできるであろう様子ではあったが妖怪の類だ、実際に存在した年月とが意見が一致するとは思えない。

年齢と同じく、人間の尺度で考えているから自分では想定できない予想外の行動を取るのだろうか？

それとも、単純に国民性の問題から、周りの環境から。そういった要素からだろうか？

ここは自分がいた世界ではない。

違う世界を見せるために、鎮魂歌はここへ自分を連れてきたのか。

違う世界を見せつけ、今までの自分の行為を悔い改めろと言いたいのか。

……永劫の死の輪廻の果てに、その罪を認めれば、免罪をするともいうのか。

「……よもや、そんな理由ではないだろうがな」

考えていても、分からないことが多い。

確かなことは、それでも今はまだ生きている。

「……これは、『試練』か」

かつて自分によく言い聞かせていたことだ。

「まだ驕り、その器に到達していなかったのに、帝王を自負し始めたこと。」

誇りに執着し、引き際を見誤ったこと。

その場の結果に満足し、矢の先の力を見抜けず放置し、吐き気を催すような『正義』の上っ面に敗北したこと。

……全ては、過去の未熟たる自分の行い」

もちろんそうだと確信できるものはない。この考えすら、次の瞬間には否定されるかもしれない。

それでも、掴んだ一縷の希望。

手放すわけには、いかない。

「ちよつとちよつと……夜中に叫び声が出たかと思えば、いったいどういこと？」

乱れた寝巻のまま、申し訳程度に御幣と陰陽玉を携え、石段の上から霊夢が舞い降りてくる。

先ほどまで小傘と会話していた場所には、寝室に上着を脱ぎ捨てていなくなっていた、ドツピオがその場で眠っている。

「ねえ、ドツピオ。大丈夫？　ちよつと、起きてよ」

「……うーん、ん……」

霊夢の呼びかけに対し、寝ぼけた声でしか反応できない。

怪我で気絶しているわけでもなく、起きない眠りについたわけでもない。その点は確認できた。

そうとわかれば。

「ちよつと！　起きなさい!!　ドツピオ、ねえ！　ねえつたら!!」

寝ている体を引き起こし、ひたすらに体をゆする。

ぐらぐらと揺すられ、穏やかに眠っていたドツピオもさすがに目を覚ました。

「んあ……あれ、霊夢？　もう朝……じゃないね」

「何寝ぼけてるの、というかなんであんなところまで来てんのよ。寝相が悪いんだったら先に言ってよね」

「え……え、(´▽｀)どっ？」

「神社の下の方」

「……は？」

言われてから辺りを見回し、改めて自分の異常に気付く。

眠っていたはずの布団もない、部屋もない。ついでに上着も来ていない。

さすがに夜中、風が吹けば肌寒さも感じる。

「へくしっ！ え、どうなってるんだこれ」

「私が聞きたいわよそんなの。わかんないの？ あと、誰か大きな声あげてたけどそういうのも見てないの？」

「いや、何も聞いてないけど……何か聞こえたの？」

「叫び声が聞こえたのよ、聞き覚えのある声で。誰だったかは思い出せないけどさ。何かかと思っただけで見てみたらいなくなってるし……ん？」

そういうと、霊夢は少しドツピオを見つめ、さらに目を細めて顔を近づける。

今更霊夢に見つめられても特に思うこともないが、突然の変調に不思議に思い、何か尋ねようとした時、

「あんた、何か憑かれてる？」

「えっ？」

そう言うや否や、ドツピオの額に向かって、御幣を叩き込む。

ガツ、と小気味良い音を立て額に炸裂した。

突然頭を殴られ、理解が追いつかない。声を上げるのも、怒るのもせず、ただ痛み始める額を擦ることくらいしかできない。

「あ、え？ いった、何するんだよ、疲れてるって一体……」

「んー、何となく何か起きてると思っただけ。本当に何か起きてたんだったらもう大丈夫だと思っただけ」

「……それなら、先に何か言っただけからやってくれよ。いてて、これコブになりそうだあ」

「言ったじゃない、憑かれてるって。それ冷やしてからまた寝なおしませよ。夜に活動する人間は取って食べたりしてもいいって妖怪に言ったことあるから」

そういうとドツピオに向かい手を差し出す。

「全く……なんなんだよ一体。いてて、頭痛が……」

「変な時間にこんなところに転がってるから、頭でも打った？ どつちにしる安静が必要そうね」

ドツピオも手を取り立ち上がる。足取りもおぼつかないわけではない、むしろしつかり歩けるようだ。

裸足だから少々気持ちが悪いが……石段を上がっていく。

「飛ばないの？」

「え？ ああ、そうだね。えーつと、『見抜け』」

横をスツと飛んでいく霊夢が声をかける。

それを見てから、思い出したかのように雲山の一部を起動する。

合言葉と共に、そこに一人一人乗れる分、博麗神社にたどり着いた時と変わらないサイズで展開される。

「何それ？ 柔らかくて寝心地よさそうね」

「簡易ベッドじゃないんだけど。あと、僕はこれ使わないと飛ばないから」

「あ、飛べるようになったから神社に来たのかと思ったけどやっぱり飛ばないのか」

「道具使用だね」

雲に乗り、軽い会話を交わす。

その内に石段は登り切り、再び神社にたどり着いた。

同時刻。

広い空間。四方は障子で閉めきられており薄い紙からさす月明かりのみが照らし出している。

床一面は畳が敷かれており、それ以外には何一つ存在しない。

その空間の中心で一人、結跏趺坐の姿勢で瞑想をする者がいる。

「……切られたか。さすがは巫女というべきか」

眉をひそめ、大層不快そうな声をあげる。その様は、隠しきれない怒りがにじみ出ているようだった。

「……何が『試練』だ、思い上がりも甚だしい。全てはこちらの慈悲でしかないものを」

そこまで口走り、はつとした表情で思いとどまる。

自らの口を擦り、先ほど口走った言葉を思い返す。

一瞬の間の逡巡、彼女―八雲藍―は自らの左手の小指をつかみ、
（ごきり）

反対の方向へと折り曲げる。

「（何を知った気になっっているのだ、私は。僅かな概要しか知らされておらず、ただ式として忠実に仕事をすればいいだけのこと。）

自らの考えを混同しながら仕事に当たるなど愚の骨頂。橙でさえもやりはしないだろう」

自戒の意を込め、指から走る痛みを確認する。そして再びその指をつかみ、
（ごきり）

元の形へと戻す。

骨は一度壊れ、またそれを動かしたときにこそ一番の痛みが走る。部位は僅かでも、それは壮絶である。

顔を歪めながらも反省の意を込め、再び瞑想の型を取り集中する。

「（……そもそも私は最初から反対だったのだ。いかに斯様な状態であれど素性を知ればこの幻想郷とは相容れぬ者。）

いくら全てを受け入れるとはいえ、調律をする、長である立場ならば――」

一度の雑念が、二重三重と彼女の思考を取り囲む。

始まった思考の塊は、実力ある彼女でも容易には取り去れない。

「（今は命令として奴を見張ってはいたが……少年の方はともかく、主人格は命蓮寺の僧にもあっさりと見破られている。）

この世界、小賢しい悪程度なら可愛いものだが純粹なる邪悪は必要ない。今までも刈り取ってこられたのではないか」

慣れた手つきで同調の儀式を行い、それでも頭の中は思考は止まらない。

完成した、と思つて発動しようともどこか間違えたのか、正しくは起動しない。

「藍、どうしたのかしら？ そんな簡単な数式を間違えるだなんて」

この部屋に入った気配はない。近寄る足音も聞こえない。衣服の衣擦れすらも聞こえない。

最初から存在していたかのように、いや、最初はそこにいたが物質として存在しておらず、徐々にその存在を露わにしたかのように。

唐突と呼ぶには幼稚すぎるほどの自然さで、その少女は現れた。

「!! 紫様、まだ起きて……いえ、お恥ずかしいところをお見せしました」

その少女——八雲紫——を認識した藍は、すぐさまそちらに向き直し、跪いて頭を垂れる。

「いいのよ、気取らなくて。それよりもどう、『彼』は」

「……現在は霊夢によつて接続が切れ、改めて繋ぎ直すところですよ。さすがに霊夢が近くにいる状態での遠隔操作で繋ぎ直すのは厳しいかと」

「違う、そうじゃないわ。言つたでしょ？ 気取らなくてよいと」

全てを見透かすような瞳。

困惑する藍の表情を見ることを楽しんでいるかのようにも見える無垢さをも感じる。

発言は期待されている。でも、二度同じことを聞きたくはない。

長い主従関係から見出した結論。

「……私は何度だって言いますが、彼をこの世界に存在させることは反対です。この世界の雰囲気には合いません」

「ふふ、そうはいうけどちゃんとお願いを聞いて、情報を逐一私に伝えるてるじゃない」

「私は紫様の全てを受け入れます。そこに自身の意思は関係ありません。嫌でもやりますよ」

「まあ藍つたら、それじゃあ私があなたを嫌々働かせているみたい

じやない。そんな風にとられるだなんて、私悲しい……よよよ」

「……それ、幽々子様の真似ですか？ 失礼ながら、似合いません」

「部下にすごいはつきり似合わないって言われた、上司やめたい」

先までの雰囲気と違い、小芝居のようなやり取りを続ける。

「あら、その指はどうしたの？」

紫がそれに気が付くと、す、と一歩踏み出す。

一歩では近づけない距離ではあったが、空間を滑るかのように近づき、屈んでいる藍に合わせて自らも屈む。

「お許しください紫様。私の自分勝手な邪念であなた様の命を行うことに僅かでも疑問を抱いてしまったことを。これは、その罰です」

「まったく……あなたも頭が固いわね。そういう遊びの部分をわざと取ってあるっていうのに、その容量を全部橙に注ぎ込んでるんだから」

「あなた様の世界のためなら何でもする。それが大本ですからそれに反するようなことは私自身が許せません。橙はいいんです、私の世界なので」

藍の左手を取り、そつと折れた指をなでる。

特に何かしたわけでもないはずなのに、痛みは消え、元の姿に戻っていた。

「クレイジーダイアモンドッ!!」

「あ、……申し訳、ごぎいません」

「突っ込みナシ？」

「いつもの事かなと」

紫は小声で「やれやれですわ」と呟いた後、藍の前に立ちあがる。屈みこんだときは合っていた視線も、紫が立ち上がれば藍は見上げることはしない。

そんな頭に、小さな手をぽ、と置く。

「いい？ あなたはあなたのやり方でやりなさい。気に食わないことも百の承知。それでもあなたに託したいのです。」

指示は再び送ります。その後、私の右腕としての、あなたの意見を聞かせなさい」

「はっ」

「分かった？ よろしい。では、私はこれで」

そこまで言うと、紫は後ろに一步下がる。それと同時に紫の足もとにスキマが広がり、するりと彼女の体を飲み込む。

瞬間、そこには先ほどまでと同じ、藍一人しかいない空間に戻った。

「……紫様の言うとおりだ。私は頭が固すぎるのかもしれない」

自らの眉間に手をやり、すこし緊張を解きほぐす。

「(その結果、主の考えを疑うことになるとは……やれやれ、まったく私も未熟者だな。奴を笑ってられん)」

三度、瞑想の姿勢に入る。先も紫に告げたとおり、今監視の目をつけても霊夢に気付かれる可能性は高い。

少々見えづらくはなるが、狐や鳥ではないものに式を取り付けた方がよいかもしれない。

「(さて……何なら気づかれずに済むか)」

再び儀式に入る。今度は、間違えることがおかしいと思えるほどスムーズに取り仕切ることができた。

番外 — BGM 4 命蓮寺 —

命蓮寺、夕刻。

「Yo, I'm feelin' tha VOOOO in
my brain.

I ain't my usual self tonight.

Walk in tha beautiful rain,

Tha world rotates around me.

...Here's a little story must

be told:...

「血統の妙」

「血統の業」

「ただいま」

「おや、お帰り一輪。」「いえー！ るっきんとーざいーびあいず！

あつぎやかなたいどたいあーがい！

かいならさったバツタちゅーさつ！」

「ああ、人里の方でドツ「ヘイユージャスマイセーブマイワールダイ
!?!」

「そまるじゆかいたいきのおもさにむーんらい どちらまたいずまつた
ばいー！

げんかくさいあみーさしこむむーんびーむー！」

「神社に？ こんな時間「ソユキキャンデイスガイ！」

「よう！ はっすつていすとうれめでいー！」

「まあ雲「イエー！」

「おつのつれーうーれいがーでいー！」

「ウーイエースガーデイ！」

「え、聞こえ「がーでいー！」

「ガーデイー！」

「……止め「いえっさーがーでいー！

はっすつていすとうれめでいー！」

「イエー！」

「おっのつれーうーれいがーでいー！」

「ウーイエースガーディ！」

「っ、私は初めから成功していたのだああああ!!!」

「うるさいッ!!」

「うりいー!?!」

響子は、殴られていた。

「響子く? それからミスティア? 別にやるなどは言っていないよね、私らは。けれど節度つてもものがあるよね?」

「あうー、だって、もうすぐライブが……ひやうっ」

「言・い・わ・け・す・る・の・は・この口かつ」

参道の真ん中で、正座している響子と夜雀の少女―ミスティア・ローレライ―。それを見下ろす形で一輪が立っている。

最近命蓮寺でよくみられるようになった風景でもある。

掃除の合間に大声を出す。ヤマビコである彼女にとつては普通の事ではあるので皆そこまで気に留めないのだが、度が過ぎると別である。

最近ではミスティアと共に『鳥獣伎楽』と呼ばれるバンドを組んでおり、人妖問わずそれなりの人気があるのだが。

「命蓮寺の戒律の一つ! 『太陽の下で声を出せ!』」

「ふあ、ふあいおうおひはへほえをはへ!!!」

「声が大きい!」

「ふ、ふいはふえーん!」

響子の頬をぐいぐいと引っ張りながら、叱り声を出す一輪。

「日中の人が少ないときとかならまだわかる! 声を出すことはいいことだ! でも、こんな夜中に大声出す奴があるかつ!」

「はいはい、私夜雀、夜中が舞台よ営業よろ♪」

「じゃあウチの敷地内でやらない!」

「ぶみっ」

途中で口をはさむミスティアにすかさず拳骨を叩き込む。

手が離れたことで頬の痛みから解放された響子は、その箇所をなでながら表情を落とす。ついでに、耳と尻尾も垂れ下がる。

「一輪、そろそろいいんじゃないか？ 夜雀はともかく、響子はすっかり反省した顔をしているよ。」

それに、君がそうやって叱っている間に雲山はやるべきことをやってくれたみたいだし」

そのやりとりに、最初に会話していた相手であるナズーリンが立ち入る。

一輪が帰ってきたとき、雲山が多量に抱えていた荷物はすっかり無くなり、手のひらには綺麗に小さくたたまれた風呂敷が乗っていた。

「……全く、同属に甘いんだから。悪いことをしているなら叱るのは先輩の役割なのよ？」

「別に同属だからってわけじゃないよ。単純に次の仕事があるんじゃないか、と言いたいだけさ」

「……まあ、ね。聖に報告したり晩御飯作るの手伝ったりあるけどね。今日の当番、村紗だっけ？」

「ああ、カレーだよ」

「肉じゃがの肉抜きだけどね」
今日も水蜜は『ウチの海ではこればかり食べてたからねー！ これは得意料理なのよ』と機嫌のよい顔で提供してくれるのだろう。

本人曰くちやんとスパイスや肉も使いたいが、宗教上の理由で使えないからこうなつたと。

出すたびに笑顔で語る彼女の姿を思い出し、くすりと笑みを浮かべ、響子とミスティアの方にもう一度向き直す。

「今回はこれで終わりだけど、次にまた同じことやったらもつと酷くやるからね？ いくら言ってもあんたらはやってるんだから。」

……またそのあたりの掃除が終わってないんだつたらその続きやりなさい。終わってるんなら食事においで。あなたは どうする？」

「うーん、あそこで騒ぐと今度こそ星さんに羽むしられそうだから、」

私は帰るよ」

「あー、かもね。星は怒らせると命蓮寺一怖いから」

「そのご主人を一番世話焼いているのは私だがね」

「あはははっ、そーだねそーだね!!」

寺の中で体格もよく位も高い。怒ると一番怖いのが、そんな彼女を後ろから呆れ顔をしながら支えている、一番体が小さく位も低い者。

一見するとわかりづらい構成であり、初めて響子がそれを見たとき、おかしくて笑ってしまったほどである。むろんその後こっぴどく怒られたのだが。

そのやり取りは皆で笑うのに定番のネタともなっている。その話をして『やめてくださいよ』と拗ねたような表情をする星を見てまた笑うまでが一連の流れである。

「それじゃあまたねー! 次は一週間後ね!」

「はいはいはい! ばいばい!」

大きく手を振り、友人の帰宅を見送る。

ミスティアが羽ばたき、辺りに少しの風を送る。それは残った4人の髪と髭を揺らした。

その風に乗る、ふわりと木の葉が1枚散り落ちる。

……この辺りにある木とは違う葉が1枚。

「ナズはどうする? 今日もしろいろやつてもらったし、夕飯位馳走するよ?」

「いや、昼まで同伴させてもらったし、探し物の仕事があるのを思い出した。今日はこの場で失礼させてもらうよ、またご主人が何かしない限りは」

「そう? それならいいけど」

その葉を見つめながら、一輪の申し出を断る。

「そういえば、さつき有耶無耶になってしまったがドツピオはどうしたんだい?」

「ああ、彼なら神社の方に向かったわ。なんだか人形遣いに逢いたいとかで」

「……こんな遅くに? まさか、一人でじゃあないだろうね?」

「心配なく。雲山を小分けで渡してあるわ。まだ神社までなら暗くならないうちに着けるし、何かあったら私たちにはわかる。そのままほっぽりだしはしないよ」

「……………」

質問に対して答え、その言葉にっこりと笑顔で返す。この頑固親父は意外とかわいい笑顔を出す。

「そうか、それならば安心だ。特に気に病むこともない。それじゃあ、一輪、雲山。また」

「それじゃ、気を付けてね」

「安心してくれ。ネズミは襲われないように進化してきた個体なんだ。気を付けなくても感づくことができるくらいにね」

ナズーリンも、3人に見送られ帰路に着く。

尻尾にぶら下がっている籠の中から、ちう、と小さな声が残った3人に届いた。

命蓮寺から離れ、魔法の森を越え、その裏にある誰も来ないような簡素な地。

もし人が来るのであれば、その誰も来ないが故にそこに叩かれた者たちにわざわざ参る酔狂な者か。それとも幻想郷にはない、外の世界を見るためか。

無縁塚。

そこに最近作られた、小さな掘建て小屋。

ナズーリンはその前に降り着くと、そこにいた先客に声をかける。

「やあ、意外と早く見つけられたんだね」

朗報が得られる。そう思っているナズーリンの表情に対して、その先客はそれとは逆、すまなそうな表情をしていた。

「いんや、見つけられなかった」

そう言っつて、小さな小屋の前に座り手持ちの酒瓶を自棄になったかのように、ふがいない自分を責めるかのように呷る。

「ごくん、ごくと2度喉を鳴らして彼女―ニツ岩マミゾウ―は話を

続ける。

「狸どもや簡単な付喪神たちも使って探したんじやがな。最近に外の世界から来た人間はこれっぽっちもみつかつたらん。

死体としても、な」

「……そう、か。うーん、そうなのか」

考え込むようにして視線を落とすナズーリン。煙管に火を入れ、大きく吸い込むマミゾウ。

「まあ、二つ目の予想通りじゃな。件のヤツは本当に一人芝居をしている。念話などの能力ではなく精神分裂などでそういうことをするようになったのかもしれない。

今時の子供にはそういう輩は多くなったんだ。不憫なことよ」

「……それで簡単に事が着くならそれでもいいんだけど。どうにもあいつは信用できない」

マミゾウは気にすることなくいうが、それでもナズーリンの表情は変わらない。

「……まあいいだろう。とにかく、私の頼みを聞いてくれてありがとう。少なくとも寺の者達にはこういったことは頼めないからあなたの様な者がいてくれて助かる」

深々と頭を下げ、それと共に尻尾の籠にいるネズミもそれを真似て頭を下げる。

「おいおい、神の使いともあろうものがそんな簡単に頭を下げていいんか？ それに儂はお前さんの出す報酬に釣られてやったようなものじゃ、気にすることはない」

驚いたかのような、おどけたような声で、マミゾウは返す。表情も、少し笑っているようだ。

「そうは言うがね、礼を失するようでは神格にも影響が出るものだ。それに今は寺によくいる小間使いの立ち位置、それ相応の振る舞いをよくやっているからね。

あくまで私は使いの者。ご主人を立てることが第一だ」

「なるほどな。大した従者じゃ、主も幸せなことだろうよ」

「ああ、幸せだろうね、相応に。私というものがついてるからな」

家の中に進み、棚においてある包みを取る。カサカサと手のひら大の包みを開き、中の物を見せる。

「いつまでも家の外で話していてすまない。だが、我が家には二人も居座る間もないからそのまま軒下で失礼する。」

報酬の物だ、受け取ってくれ」

「おお、待つとつたぞ！　ここでこれが食べられるとは思ってなかったからのう！」

包みから取り出されたのは乳白色の直方体の塊。独特の香りを放つ、少し柔らかめの物体。

「命蓮寺……というかは私特製の醍醐だ。一般に出回るほどの量は作れないし、もしたくさん作れても精度は落ちる。そもそも製法は私と星、聖くらいしか知らないし」

「能書きはいらんよ、儂とてわかっておる。しかし、旨そうなチーズよ、酒が進みそうじゃ！」

「醍醐だよ」

乳から精製される食べ物であり、繰り返し精製することによって旨味は凝縮し、最後に一番おいしいものとなる。

仏教の教えにも醍醐味という言葉で引用されており、有名でもある。

が、大量生産にも向かず、長期保存も難しい。ちよつとおいしい物程度なら誰に頼んでもすぐに作れるだろうが、これほどの上物は早々にはできないだろう。

「では約束どおりにこいつはもらっていくぞ。もし気に入るような味だったらまた頼むかもしれん」

「構わないさ。あなたへの貸しはこれ一つでは足りないと思っっている。それにこの事を言いふらすような人物ではないともね。できたら伝えるさ」

「ほう、ならばその時を楽しみにしておこう！　ほれ、お前さんも飲むといい。量は少ないが、楽しもうじゃあないか！」

「おや、いいのかい？　あなた一人で楽しむ程度にしか作っていないというのに。この特製品は赤色が足りなくて嫌がるグルメな私たち

でも喜んで食べる代物だよ？」

「構わん構わん。もうこれは儂の物じゃ、ならどう使おうと儂の勝手じゃろう？」

「それでいいなら、ご同伴させていただくよう」

「マミゾウの隣に、少し大きめの石を持ってきてそれを椅子替わりにする。」

酒もマミゾウが持ってきたそれしかない、小さな宴会の始まりだった。

「ん？ でもお前さんは酒を飲んで大丈夫なのか？」

「人からの贈り物、無下にはできぬ」

「ああ、なるほど、それならしょうがあるまい」

「もし、そこ行く狸さん」

「あん？ ……おや、そういうあなたは狸さん」

「あらあら。お褒めいただき光栄ですわ」

「そりやどーも。で、何用じゃ？ あいさつ回りならとうに済ませたと思っただが」

「ええ。その節はどうも。此度は少し尋ねたいことがあります」

「そうかそうか。なら何でも聞くがええ、化け方か？ 脅かし方か？

それとも狐のしつけ方か？」

「最後のは聞いておきたいですが……どれも違うものです。外の事について……一つ二つ、聞きたいことが」

「外のお？ 童が聞けならわかるが、お前さんが尋ねることなんてあるかいな」

「……人間を超越した能力を持つ人間。ご存じありません？」

「……は？」

「人間を超越しているのです。人間をやめているかもしれないませんが。それでも妖怪などという区分をされるわけでもない。そんな、人

間を」

「おいおい、何を言うかと思えば。それらを区別したのが幻想郷だろう？　それを」

「質問に質問で返すのが外の常識なのですか？」

「……」

「答えたくない、では困るのです。知っていればその先を聞きたい気持ちもあります。今質問しているのは知っているかないのか。どうぞ、答えを」

「驚いた。幻想郷は虚仮と威勢でまかり通るようになっていると感じたが」

「答えを」

「たく。儂が直接見たり聞いたりしたわけだから知らんよ。だが、地元から少し離れた地にそういうことができるという者たちが居ったという噂じゃ。」

曰く、遠く離れたものを一瞬で引き寄せる。瞬間移動ができる。壊れたと思つたものがいつの間にか治つておる。

そんな噂。もつとも、十何年も前だから確証はないがな」

「そう、ですか。教えていただき感謝します」

「あ、そ。別にこれくらい、そんな殺気立つて聞くことではないだろうに」

「いいえ、みだりに外との行き来をすることはここではあつてはならないこと。その中でどうしても、どうしても聞きたいこと、調べておきたいことがあるば……」

出すべきものは、出せる時に出しておくのです。ダンスの肥やしはいらない物でしょう？」

「それには同意じゃが。なんぞ、焦っておるのか？　そつちが聞いたんだから、こつちが聞いてもいいじゃろ」

「そうですわね。臣下を守る貴族の務め、かしら？」

「うーわ。うーわ。げー。なんじゃそら」

「今の言葉だけは、他言有用でいいですよ。先に聞いたことは……忘れてください」

「そこも強制だったら張り倒してるところだわ。……『あの出来事』が、それに関連付けられるとでも?」

「うふふ。そろそろお鍋にかけて火が気になります」

「そりやそうだろ」

「……まさか、な」

「? 何か言ったかい、ママゾウ」

「んう? 何も言っとらんぞ」

何も無いだろう。二重人格の妄想行動に違いはあるまい。

けれど、もし何か知っていることと繋がりがあるなら。

あるいは。

「……ありや、酒切れたか。もともとこれっぽちしかないし、潮時かな」

「宗教家の手前、家には酒を置かないんでね。持ち込みがないならこれで終わりだ」

もらった醍醐も食べ切り、小さな宴会は物がなくなり日が落ちると共に終幕した。

―風に流れる諧謔曲のように 1―

「ドツピオー、朝よ、起きなさい」

まどろんだ頭に、少女の声が響く。

まだ重たい瞼を開きながら周りを見る。

昨日の眠りについた床と同じ場所。違う点は、隣の部屋を仕切る襖が開いており、そこから霊夢が声をかけているところ。

その霊夢は着替えを済ませ、いつもの脇巫女装束を着、部屋の布団も片付いている。

「んー、もう朝か」

「何寝ぼけてるの、もう朝よ」

「昨日あんなことがあったからか……寝足りない感じが……」

布団の上で寝ぼけた目を擦っていると、霊夢は手を叩いて急かしてくる。

「日が昇ったらちゃんと起きる。顔でも洗ってきて目え覚ましてきなさいよ」

ドツピオにタオルを渡すと、掛布団を取り去りそれをたたみ始める。

結局急かされるままに起こされ、部屋を後にせざるを得なくなつた。

「顔洗ったら朝ごはん、準備できてるから来てね」

「ふあー、うん、わかった」

襖をあけ、外の光がより強く差し込んでくる。

雲一つない青い空、小さく鳥の鳴き声が聞こえてくる。まるで変わらぬ朝が来たことを感謝するかのように。

幻想郷は、今日は快晴だった。

「ああ、ようやく来たわね。さ、食べましょ」

洗顔を終え、居間に来ると朝食の準備を終えて待っていたのだろう。頬杖をついた状態の霊夢がいた。

ご飯とみそ汁、そして漬物。簡素な朝食が霊夢の前に並んでいる。

その反対側には、握り飯が3つとみそ汁。

「こつちが、ぼくの分？」

「また大変そうにしているの見てるのもやだから、おにぎりにしておいたわ。中身はたくあん」

「助かるよ、ありがとう」

さっそく席に着き、霊夢と対面する。

「いただきます」

一礼。

出来立ての温かい握り飯をほおぼる。塩加減がよい塩梅となっており、口の中で咀嚼をするたびに米の甘みと塩の辛さが混ざり合い、絶妙なハーモニーを生み出す。

しばらく食べ勧めると、中から固めのたくあんが出てきた。しばらく柔らかい感触だったところに歯ごたえある感触を感じ、食事という行為に楽しみを感じさせる。

おいしい。

「そういえばさ、今日はどうするの？」

「へ？ どうって？」

「昨日の話聞く限り、目的はアリスだったんでしょ？ それで済んだんだから、ここにはもう用事がないんだし」

急に問いかけられ、素っ頓狂な声が出てしまう。

が、確かに言われた通り。昨日目的は達してしまい、ここに留まる理由はない。

「とはいえ、どこかに行くっていうのもないんだよなあ……」

「あら、そうなの？」

自分から振っておいて特に気にする様子もなく、食事を続ける霊夢。

だが、ドツピオは改めて現在の状況を顧みて、少々困っていた。

「こういう時は大体指示をもらっていたんだけど、ここに来てからは電話がないんだもんなあ……まずはそれを届けなさいと」

「そういえばそんなこと言ってたわね、昨日なんか繋がってたみたい

「だけど」

「うん。きつと渡したい相手はぼくの事を探してるだろうし、ぼくも探したいし、けど……」

幻想郷の地理はドツピオは詳しくない。おそらくボスも詳しくはないだろう。

無闇に動き回っても見つけだすことが難しくなるだけかもしれない。

「昨日人里で命蓮寺の人たちと一緒にいたってこと、すぐみんなに知れるかな？　ここってそんなに人口多いわけじゃあないんだろう？」

「まあ多くないし、人里はあそこだけなんだし。広まるんじゃないの？　割とみんな退屈してるからね。刺激が欲しいのは多いよ、ここは」

知識としては知っているが興味はない。そうとも取れるような返し。

やや不親切ではあるが、おそらくそれが彼女の素なのだろう。昨日の会話からわかることだ。

「それなら、命蓮寺に一回戻ってみようかな。その話を聞いてくる人もいるかもしれないし、戻らずに黙ってどこかに行くのもあれだし」

「ふーん、それなら気を付けてね」

「……霊夢って、優しいんだか冷たいんだかわからないね」

「あら、私は人間の味方よ、いつだって」

そう言いながら、食後の茶を啜る。

ドツピオも少し遅れて食べ終わり、同じく茶を啜る。

「「ごちそうさまでした」」

一礼。

食後、外に出て命蓮寺に向かう準備をする。

といってもそれほど荷物が増えたわけではない。アリスからもらった人形二つ。それもそもそも人里で魔理沙からもらった物。

強いてあげるとするならば、ここで過ごした1日という記憶だけ。

「それじゃあ霊夢。行ってくるね、ありがとう」

「別にいいわよ。次はお賽銭持ってきてね」

箒を携え、参道を掃除しようという構えで霊夢はドツピオを見送る。

しかし、昨日も経緯は知らないが早苗に任せていた。本当にやるかは疑問である。

『見抜け』

合言葉と共に、ドツピオの足元に雲が展開される。

それに乗り込み、次の命令を下せば出発だ。

その直前に、思い出したかのように霊夢に向かって伝える。

「そうだ霊夢、もしここにぼくを訪ねてる人が来たらここに留まるように伝えてもらっていいかい？　そして、ぼくにそれを伝えてもらいたいんだ」

「えー？　あなたが会いたいとか言ってた人よね、それ。あなたの行先を伝えればそれでいいじゃない」

「それもそうと言えばそうんだけど、ぼくはその人の部下なんだ。その人に足を運ばせることはできないよ、緊急とはいったって」

「はいはい。他の所でもそうするつもり？」

「うん、そのつもり。どこかに通信機の片割れを預けたいって気持ちもあるけど、偶然会ったときとかを考えるとどうしても手放せないんだよね」

「ふーん、まああなたがそれでいいならいいんだけど」
「？」

最後に妙な返しをされたが、とにかく伝えたいことは伝えた。約束を破ったり忘れたりされることはきつとないだろう。

それに、ボスはこれを伝えなくてもそれを行ってくれる。何となくだが、確証がある。

「命蓮寺へ向かえ」

「野良妖怪に襲われないよう気を付けんのよー」

適当な見送りの声と共に、再びドツピオは空の旅を始める。
もう浮かび上がる瞬間の浮遊感に戸惑うことはない。

人間、意外と気にしなくなるものだな。そうドツピオは感じられた。

雲は何を思うわけでもなく進む。それはあたかも現実であった車のように。

もつとも、車は乗員の意思によって精密に動かすことができるもの。

対してこの雲はあくまで他の者の一部であり、命令を聞いて運ぶだけの物。

そんな非情な薄っぺらい物に命を預けて飛んでいる。

もしこんなものが空にたくさん浮かんでいたらどうなのだろう。『障害物を避けて目的地へ向かえ』と命令すればぶつかることなく動くことはできるだろうか。

それとも乗員に関係なく動き、振り落されてしまうのか。あえなくぶつかり、自由落下の空の旅を迎えることになるだろうか。

「……こつちと違って、あつちは区画されてるし、防御力あるからなあ」

何事も、大きすぎるものは統制せねばならない。

今のように自分一人で空を飛んでいるのであれば何も問題はないのだが、もしこれが現実の車と同じほどの量走っていれば、幻想郷の空は何ともつまらないものになってしまうだろう。

妖怪は基本的に浮遊できるらしいが、人間はそうではない。どうやら限られた人間たちだけが空を飛べる。

……修練次第なのか、先天的な能力なのかは知らないが。これはこの統制者が定めたのだろうか。

「……どうでもいいといえばどうでもいいことなんだけど」

何故ここに来たかはわからないし、いつまでここに留まればよいかもわからない。

外に出るには博麗の巫女、霊夢に頼めばできるとのことだが……そ

んな所にいながらも肝心のボスからの連絡もない。

あちらが連絡できないのだから、しようがない。どうにかしてボスに会うことが先決。

今すべきことは、各所に自分がいることを伝え、自分という痕跡をボスに気付いてもらうこと。

自分の最善は、ボスのために尽くすこと。それなのだ。

「……………」

目視で命蓮寺が見える距離まで来た。

だが、その方向から、何か小さく悲鳴のような声が聞こえる。

近づくにつれ、その声はより鮮明に聞こえてくるようになる。

すっかり彼女と会話をしたことはないが、その声量で記憶には残りやすいその声。

「だーかーらー、私は難しいことを聞いてるわけじゃあないの。ここに外来人が来ているはずだから会わせてって言うてるだけ。オーケー?」

「わかってるよ、でもそんな人はいないんだってば!!」

「いないはずないでしょうよー。最近外来人が来たのってここなんですよー? 人里であんな堂々とアピールしておいていないとは言わせないよ?」

「そうなんだけど、とにかくいないんだってばー!!」

「あーあ。ヤマビコに聞いても無駄かなー、こりや。いないんだってばの繰り返し」

「嘘も言っていないし無駄も言っていないよ! いないんだってば!」

命蓮寺の参道では、二人の少女が言い争っていた。

といっても、一方が大声を出しているだけであり、片一方は肩を竦めて呆れたような表情をしている。

長い髪をツインテールにまとめ、頭には頭巾を乗せている。薄いピンクのブラウスにチェックのミニスカート。

目を引くのは歯が通常より相当長く、一本だけの下駄。

確かに昨日まで命蓮寺にはいなかった人物である。

「つーか声ばっかりでかくて頭が痛くなりそうなんですけどー。もう少し小さく喋れないの?」

「あー、そうやってヤマビコを馬鹿にする! そんなに言うて私だつて怒るよ!!」

「別に馬鹿にしてるつもりはないわよー、事実言ってるだけだし」

変わらず大きな声で話し続ける響子に対し、相手はそれをさもうつとおしがる様子。

遠目からでもわかるその状態、それを見ても自動操縦、引き返すことはできない。

「……嫌なタイミングだな」

できることならこっさり行きたいが、飛び降りたりしたら、雲山を回収できなくなるかもしれない。もしくはこちらに戻ってくるか。

まだそれを試していない以上、予想外の動きをして逆に怪しまれるのはごめんである。

そのままゆっくり、流れをみることにした。

「そうは言うけど声に籠もった感情は隠せないよ! それを返す私なんだからわかるんだからね!

今は朝だから大きな声で挨拶よ!! 『大声「チャージドクライ」』 ツ !!

「おー? なんだかわからないけどやり合うつもり? いいよ、全力でやってみなよ」

響子が少し下がり、両手を口に添えると大きく息を吸い込む。

相手は特に動くわけではなく、互いの親指と人差し指を組み合わせて長方形を作り、そこから響子を除いている。

「距離、被写体、んー、こんなところか」

「~~~~~ツツ!! ヤツツホー~~~~!!」

限界まで吸い込んだ息を、自慢の音量と共に吐き出す。

それと共に響子自身から多数の弾幕と、薄い膜で覆われたような空間が展開される。

薄い膜の空間は響子自身から相手の少女を取り囲み、弾幕は無作為に飛んでいくがその中で反射を繰り返し、乱雑に相手を狙う。

「この中に入ったが最後、逃げられると思わないでね!」

「はー、逃げる気なんてさらさらありませんでしー」

少女は小さな動きでそれを避けつつ、腰にぶら下げていたポーチから何かを取り出す。

その何かを響子に向け、

「ハイ、一枚」

「わわっ!」

そこからまばゆい光が放たれ、辺りの弾幕をかき消す。

それに戸惑い響子の集中が切れたからか、膜の結界が破れ、あたりに弾幕が飛び散る。

「……あれは、カメラ? にしては随分……」

遠目に見ていたドツピオが呟く。昼間だから必要ないと思うが、あの光り方はまさしく写真撮影のそれだ。

手にしている物の形はカメラとは随分ほど遠いが。あれでは、どちらかというと電話に近い。

「ううー、何今の……」

「ん、記念に一枚ね。ところで、それで終わりなの?」

確かに響子に何か起きた感じには見えないし、そもそも相手は弾を一つも出していない。

その割には、その一枚を撮られただけで、ずいぶんとへこんでいるように見える。

そうこうしている内に、雲が地面に着き、小さくなってゆく。

仕方なく、ドツピオはそこに降り立つことにした。

「あ、お、おかえり……」

「あ、うん、ただいま」

恥ずかしいところを見られたからか、それとも返す余裕がなくなっているのか弱々しい声で呟く響子。

できれば避けたかったが、あちらから話しかけられてしまったためにどうしようもできず、とりあえず返すドツピオ。

「あー、見ない顔ね。あ、もしかしてこれが外来人？　ならヤマビコの言ってた意味が通るわ。ったく、主語くらいちゃんとつけるっつーに」

そうぼやきつつ、ドツピオの方に少女―姫海棠はたて―が振り返る。

先ほどのカメラと思わしき物を手に持ちながら、てくてくと歩いて近づいてくる。

「……君は？」

「先に言っておくけど、別に悪いことはしてないよ？　あつちがいきなり仕掛けてきてんだから」

「まあ、それはそのくらいから見ていたからわかるよ。勝負に勝った負けた、それだけだろ？」

「そーいうこと。変に寺側じゃなくていいね。組織っていうのは大体身内をかばうものだから。

誰だつて顔してるし、名前を聞く前に名乗っておこうか。私は姫海棠はたて。あなたからすれば見てわかりづらいだろうけど、天狗よ」

「天狗……？　まあいいや。ドツピオ」

気さくに話しかけてくるが、それでも正当防衛を傘に相手を傷つけることをためらわないタイプだろう。

少し警戒した様子でドツピオは返す。

「私は花果子念報っていう新聞記事を書いているの。で、何かニュースになりそうなことないかと外を回ってたんだけどさ。なんか新しい外来人が来たつていうじゃない？」

大体外の人つていうのはみんな興味があつてね。いい記事になることが多いのさ。で、最近ここに来たつていうから尋ねてきた、つてところ」

「そうかい。けれど、ぼくは記事にされることに興味はないな。それに……」

断りに言葉を言いかけて、少し考える。

何か書かれるのは、あまりに目立つから断りたいが、新聞に搜索に

ついで書いてもらえるのならありがたいのではないか。

……だが、まだその新聞とやらを見ていない。

「何？」

「あ、いや……」

「ん？ 記事にされたくないっていうなら私はあいつと違ってそんなに押す気はないけどさ。だったら情報提供だけでももらえない？」

こっちの思惑を外に、はたてはドツピオの前まで来ると、馴れ馴れしく右肩を抱いて顔を近づける。

状況が状況なら悪い思いはしないのだが、先からの印象しかない今の彼にはうっとおしいことこの上ない。

「何するんだ、離してよ」

「まあまあ、これなんだけどさ」

余った左手ではたては手にした手帖から、三枚の写真を見せる。

「ここ最近で何枚か撮れた写真。少なくとも人里、もしくは幻想郷で人間風情が住めそうなところにいるところには見たことない人間。

だから外来人だと思うんだよねー。けれど特に見られた話なし。

同じ外来人でしょ？ 何か知らない？」

その写真には、全てに同じ人物が映っていた。

派手な髪色、隆々とした見栄えする肉体、それに似合わぬ、恐怖と絶望に彩られた表情。

見せられた写真の全てに、その男は写っていた。

「!! ……こ、これ、は」

「ん、やっぱり見覚えある？」

ドツピオにはその男を見た覚えはない。記憶の片隅にもない。

けれど、何か『知ってはいけない』と思えるその姿。

急に頭が重たくなり、左手でそれを支える。

「どつたの？」

「これ……いつ、撮ったんだ」

「最近、一週間以内かね。感覚はそんなに空いてることはなかったけど」

一週間。おかしい、幻想郷に来たのは二日前、だったはず。それまで、誰も知らない、はずだ。あの命蓮寺の僧の言葉では。

「他に、何かないのか」

「何かって、さっきからどうしたの急に、気分悪いの？」

手帖を下ろし、気分悪そうにうつむいているドツピオの顔をはたてが覗き込む。

「うるせえッ!! 質問しているのはこっちだッ!! ごちやごちや言つてんじやねーぜ!!」

豹変。

突然に怒鳴り声をあげ、同時に迫るはたての顔にドツピオの右拳が飛んでくる。

覗き込まれた顔に合わせた、顔面の急所を狙った一撃。

「人が心配してるっていうのに。そういう返しはないんじゃない？」

その拳が空を切る。

当てるはずだった勢いに任せて、体が捻じれる。

その隙に揺らいだ左腕を掴まれ、背中まで捻じり上げる。

同時に立位の中心である足の膝を押され、さらに姿勢が崩れる。

「ぐおっ!?!」

「いっちょあがり」

左腕を捻じられたまま、後頭部を強く押されて地面に倒れ伏す。頭はそのまま強く抑えられて顔を上げることすらままならない。

「(こいつ、あの一瞬で背後に……!-)」

「ド、ドッピオー!」

「動くなよ、ヤマビロ」

先ほどまでの緩い声と違い、相手を射竦める様な低い声で話しかける。

それは、小動物ならば容易く狩り取れる猛禽、それ以上を思わせるような雰囲気。

「ひっ……」

「さつきもそうだけど、あくまであつちが先に仕掛けてきてるんだから、私に非はないよ。これから何が起きようと」

「何をツ、離せ、このメスが！」

残った右腕を動かそうとするが、左腕を固められていて大きく動かせない。

その動きを見て、はたての手が頭から離されて、右腕を押さえつけられる。

同時に、背中に一点の圧力がかけられる。一本歯の下駄による、踏み押さえ。

「弾幕ごっこはお嫌い？ ならそちらに合わせてあげるよ。ルールは何か必要？ とりあえず、戦闘不能と感じたら負けでいいかな」

ごきんっ

「っ、があああああああつ!!!」

「ドッピオーツ!!」

言うと同時に、足の踏み付けを強くし左腕を強く上に引き上げる。

鈍い骨のずれる音と共に、ドッピオの左腕は「伸びてはいけないうイン」以上に伸びきる。

そこまですを見届けるとその手を放して場を離れ、ドッピオを開放する。

腕は、糸の切れた操り人形のように力なく崩れ落ちた。

「とりあえず一本。大丈夫、外しただけだから戻そうと思えばすぐ戻せるよ」

「がっ、ぐ、おおおおおおおおおつ!!!」

離れたところで、悠々と語るが、その眼にはまだ敵対意識は消えていない。口では言うが、まだ危害を加えようとしている眼だ。

それでも、自分から視線が外れたからか目の前に知り合いが『弾幕ごっこで敗北した時以上の危害』が加えられたことによる心配からか。

響子はドッピオに縋り付く。

「大丈夫、ねえ!? ねえ、わわ、どうしよう……」

「くくく!! うるせえ、耳元でギャンギャン言っでんじゃねーぞ……！」

左肩を中心に、全身に痛みが走る。歯を食いしばらなければたまらず涙が、泣き声が出てきそうな、平時活動するうえで全く感じる事のない激痛。

そんな状態だからと言って、今は無様に敵に背を見せてよい状況か？

否。

自分の知らない何かと、周りが知らない何かを知っている。それが何かは全く心当たりがないが、とにかく重要なことだ。

ボスならそう言うだろう。何故だか知らないが確信がある。

そんな思いが、心配から行動した響子を退ける。

「えっ……? で、でも」

「粹がつてんじやないよ、少年。力の差は圧倒的なんだから素直に謝った方がいいよー。今なら謝罪の言葉一つで許してあげる。私は根に持つタイプじゃないんだ」

手を唇に当て、それでも姿勢は変えずにドツピオを見つめ続けるはたて。

一瞬で力の差を理解してしまい、それでも勝てない相手に立ち向かうおうとしている彼を、止めるかどうかと悩む響子。

ドツピオは、よろめきながらも、はたてを強く睨みつける。

「(……!! マジか、でも、『予知』は絶対だ……! それに、この『予知』は!!)」

右手で髪をかき上げ、一見視界を取り戻すようにも見えるその仕事草。

だが、それこそが彼をただの少年との違いを見せつける所作。力なくぶら下がるだけとなった左腕を掴む。先ほどの痛みが、刺激でより強い苦痛となって押し寄せる。

「イグウアアアアア!!」

「!!」

「……、こいつ」

捻じられ外れた左肩を、無理やりに引き上げ、戻す。

痛みは最高潮を迎え、そしてまた骨の鳴る音共に薄れていく。

痛みは残る。だが耐えられないほどでもない。

「前には喉に入れられたハサミを取り出したこともあったか……チクシヨオ、つくづく痛みには慣れてくるぜ」

「ね、ねえ、どうするの？ 無茶だよ、無茶しすぎだよ！」

「もうお前は問題に入って無い、ここからはオレの問題なんだ。ここまでやられてるんだ、もう悔りはしない」

「……やれやれだわ、天狗も舐められたものね。それとも何も知らないからこそ？ 記事にはならなそうだけど、そのまま売り物を捨てるのももつたいないね」

カメラをポーチにしまい、腕を組んで相手を見据える。

未だ痛みの残る左腕で、前髪をもう一度かき上げる。

その髪の毛の流れから、映し出される『エピタフ』。

それは、前向きに戦おうとする自分の姿とそれを受け入れる相手の姿。戦いは、『腕を痛みを耐えてでも戻す』予知を見た瞬間から決まっていた。

「て、寺では殺生は禁止だよ……っ？」

―風に流れる諧謔曲のように 2―

「外でドンパチ聞こえらると思つたら……これは一体どういうこと？」

堂の入り口から、水蜜が顔を出し外を眺める。

朝の平穏な時間が響子の声で破られたかと思つたら、今では昨日人里へ、神社へと向かったドツピオが天狗と相手をしている。

あの人間が幻想郷の中の者だったとしたなら適当に観戦を決め込むつもりだったが、外の人間ではそうはいかない。

「私も成り行きはよくわからないけど……ドツピオが組み伏せられて、怪我してそうなどころまでは見た」

同じく、一輪が割烹着を身に着け、箒を持ったまま現れる。だが、片方の手にはいつもの金輪を握つて。

「ふーん。どつちにしろ、ここで騒ぐんならとつちめないとね」

水蜜が腰に下げてる柄杓を手に取り、余つた左手を大きく前に振るう。振るわれた手には、本来は海で船を繋ぎとめる錨が現れた。

それを事もなげに掲げ、一輪の方に向かい、

「行きましょ、一輪。抜錨ッ」

飛び出そうとした水蜜を遮る一本の鉾。

見れば、外には先に出ていた星の姿。

「この勝負、私に判断を預けてもらえないでしょうか」

後ろに居る二人には顔を見せないまま、凜とした声だけを見せる。

星は生真面目であり、冗談の類は自分から話さない。ふざけているわけではなく、本気なのだろう。

「何言つてんの、あの子はただの子供でしょ!? 天狗相手にふざけたことを言つてられないのはあなたでもわかるでしょー!」

「いいえ」

水蜜が怒声を返すが、それに対しても同じように毅然とした態度で返す。

「……どういうこと? 妙な所はあるなと思うけど基本は小心者よ。

とてもじゃないけど、変わった力を持っているとは思えない」

一輪も態度は違えど心持ちは同じなのだろう。臨戦態勢のまま星

に問い返す。

「……それについては、今は話せません。もしかしたら、これからも話すことはできないかもしれませんが。私から言えることはここまでです」

遠回しにしか伝えられない。それが、彼女の付ける偽り。

星は白蓮から聞いている。彼の力を話さないでほしいと。特に、彼ではない姿の事を。

直接それとは関係ないかもしれない。が、星とナズーリンだけが知っている。妖怪の体を十分に傷つけることのできる威力を出せる攻撃力、妖力の籠もったペンデュラムに耐えうる防御力。

その二つを知っているナズーリンは大層彼を不審がり、今も信用していない。姿を見せてないから本当に信用していないかはわからないが、長い付き合いだからそういう思考は大体わかる。

もちろんそういう思考に至るのもわかる。多大な力を隠したがるのは、簡単に言ってしまうえば素性を知られたくない者。

無償で命を救いだしてくれた相手にさえも話したがらないのは、それが知られることが致命的だから。……それは、知られることが死に繋がることだから。

それはすなわち悪。自己ではなく社会にて悪と呼ばれるもの。罪として認識され、可能であれば断罪されるほどのもの。

それを貫き通すべきと考えるものなら、逆にそれを高く掲げるであろう。誇示するように。周知に知らしめるように。

……それをしない彼が今、せざるを得ない状況になっている。

「だからこそ、私は今ここで彼を見極めたいのです。もちろん、どんな結末でも手を出さないといいわけではありません。寺に被害が出るようであるなら、私が出ます」

それを言われると、二人は構えを解き、武装を収める。寺の最高権力が出るのならば、自分たちは手出しは無用だろう。

そして、彼女からすれば『お願い』であるが、それは『命令』とほぼ変わらない。

「……もう。周りの評判もあるんだから、早いところ決めちゃってね」

「すみません、村紗、一輪。ご迷惑をかけます」

それでも、自分たちも気になるからか、戻ろうとはしない。入り口では変わらず星が外を見つめ、その陰から二人は窺う形となっていた。

「先ほども言ったけれども」

はたてが口を開き、余裕ぶってしゃべりだす。

「ここでは基本的には弾幕ごっこで事を収めることが多い。だけどあなたはどうかやらそれができないように見える」

「……それで？」

「ゆえに、あなたの定めた規律に則ってあげましょう。あまり無茶なことを言うなら問答無用に行くけれど」

「なんだ？ ずいぶんな気前じゃあないか。一体どういうつもりだ？」

「あたりまえじゃない。こつちがその気ならあなたの手の届かない空から適当に弾打ち込むだけで終わるのよ？ そんなことをしたって、あなたの気が折れることはない。」

あくまで同じ土俵に立ち、そのうえで叩き潰す。相手に敗北感を味わわせるにはそれが一番よ。『自分の得意な手ですらあいつには勝てない』そんなあなたの顔を観なければ気は済まないわ」

「……舐めているかと思うが、それは元々こちら側。でもよォー、もうさつきみたいにはならないってこと、すぐにわからせてやるよ」

特に構えはしない。だが今は彼にだけがわかるキングクリムゾンの腕。それは確かにドツピオの右腕に、まるでぶれて見える何かのように発現している。

彼自身はあくまで慎重に、はたてに歩み寄る。だが他からみれば特に策なく間合いを詰めているようにしか見えない。

「はん。特に気に掛ける様子なし、か。……その調子、すぐに砕いてあげるよ」

はたては再び肩を竦め呆れるようなポーズをとる。

そして、ゆつくりと近づいてくるドツピオに向かい、彼女にとって普通の速さで詰め寄る。

距離にして6、7歩あるその距離。

「!! くっっー」

ドツピオの右側から、拳が顔面に向かって飛んでくる。

緩い出だしからの、素早く間合いを詰めた一撃。緩急をつけた移動、その後の攻撃が眼前に迫っている。

ドツピオはその攻撃を右手で受け止め、その威力を利用し自分もわざと後ろに下がるように飛び、距離を開く。

「あーれ、今のは見えないと思ってたんだけどなあ」

拳を振り切った後に、顔を上げへらへらした表情を見せつけるかのように言う。

「それに、よく止めれたねー。結構勢いつけてたから相当衝撃あつたと思うんだけど」

ドツピオは右手に痺れる感覚を確かに感じていた。だが、それはまだまだ余裕のある感覚。

……安堵と共に、先の見えぬ恐怖も感じた。

やはり、強い。

五割ほども出していないだろう敵の力。今ならまだ受けきれれるだろうが、それがどんどんすばやくなっていったら。

他のスタンド使いと違い、自分にあるものは片腕だけ。生身の腕では今の一撃をまともに受けてしまえば即崩壊だろう。

「ほらほら、ほおっとしてる暇ないんじゃない?」

はたてが止まらず攻勢をたたみかける。

その素早い手勢を、ひたすらに防御し続けていく。

「ぐっっー」

一撃、腹部に拳が刺さる。

それによって丸まる体をはたてが追撃しようとするが、ドツピオは

それを予知しており、素早く転がって回避する。

『予知』は絶対だ。

たとえばその予知が攻撃を喰らうという『予知』なら、もうその結果は決定していること。

自分にできることは、痛みに耐える覚悟と、その次に取る最善の行動の準備。

予知を見たことよって、取るべき行動をとる。その通りに動いたから予知通りの結果となる。

予知には、それを見たことよってそれに逆らうような行動をとっても、その結果となるだろう。

『絶対的な予知』とは真実だ。それが好転を映すまでは、耐えるべきだ。

「……最初の威勢はどうしたのさ？ 一向に仕掛けてこないねえ。何か、機会でも窺ってるの？」

額を腕で拭き、汗をぬぐい取るジエスチャーを取るはたて。ただ動いているだけであり、余裕があることを十二分に表わしている。

事実、構えを解き相手を直視せずに行うそれは、戦闘であればわざわざ隙を見せているだけである。

「……ハア、ハア、……」

ドツピオは答ええない。ただ、荒れた呼吸を整えるだけ。

もし予知がなかったら、まともに立ち合うことすらできないだろう。

相手が自動車であれば、自分は三輪車に乗っているような。まさしく子ども扱いされている。

それを埋める自分の能力、相手に知られていないからこそその謎。それが、今対峙出来ている要因。

次の攻撃はどう出るか。再びなびく髪に視線をやる。

「……!! おい、やめろッ!!」

まだ行動には出していない。だから、止めるように声を出せば止まるかもしれない。

否、止まるはずがない。『予知』はすでに結果を出している。

私は、自分に割り入ってくれた彼に少なからずの恩を感じていた。その時はわからなかったけど、もしかしたらあれ以上に虐げられていた可能性があったから。

少し臆病な気もある自分だが、そこに入ってくれた人を助けるのは仁というか人道ではないか。妖怪だけど。

彼は今、とても苦戦している。反撃に出れず、ただただいたぶられて
いるだけ。

めんどくさいとはいうこともあるけども、寺の教えはわかっている。今は彼を助けることはいいことのはずだ。

手に持った箒に力を入れる。

「……!! おい、やめろッ!!」

彼が、ドツピオが声を荒げる。

私に言っているんだろう。今この場でそんな声をかけられる対象は私しかないから。

どうしてそんなことをするんだろう。そんなことをすれば相手に
気付かれてしまうのに。

けれど、それでもいい。2対1なら、この天狗にも勝てるかもしれない。なんだかんだ言ってるけど、酷いことやってるのはあつちなんだから!

「ん~~~~~!!」

「ん?」

振りかぶった箒を渾身の力を込めて相手の頭に目がけて振り下ろす。

黒白お得意の箒プレイだ。それに、後ろに目があるわけじゃあないんだし、避けられないに決まってる!

背後から箒を振り上げ、響子のはたてに襲いかかる。

その後の様を、ドツピオは分かっている。

だから、止めたのだ。ダメだとわかっている、声は出てしまう。「やあっ!!」

箒は寸分違わずはたての頭に振り下ろされる。

当のはたては、特にそちらに目もくれず素早くしゃがんでそれを躲す。事もなげに。

「邪魔」

そして、しゃがんだ状態から全身をバネとして使い、強烈な力の籠もった蹴りを後ろに見舞う。

「があっ……、けあ、はあ……」

その蹴りは、履いた下駄の一本歯が響子のみぞおちに見舞われ、深々とめり込むほど。

離れていたドツピオにも、その衝撃で体中の空気が口から漏れ出てくる音が聞こえてくるかのようにだった。

一瞬、時間が止まったのかもしれない。蹴りの瞬間の二人。それを見るだけしかできないドツピオ。

わかっていたのは彼ひとり。それが映し出された『予知』。

その一瞬を照らし合わせたのを確認したかのように、時が再び刻み始める。

響子は捨てられたボロ人形のように吹っ飛び、後方に落ちた。

「てめええええええええええええええええ!!!!」

咆哮し、一気に駆け寄り拳を振りかざす。

それを確認すると、微笑を浮かべて手をくいくいと動かし挑発行動をとるはたて。

「仕掛けさせるなら最初からこうやってればよかったかもね。自分で言い出した手前あまりやろうとは思わなかったけど。

まさか、あっちから仕掛けてくれるだなんてね。最初に言った通り、私から仕掛けてないんだから正当だよ」

「何言ってやがる! あいつは関係なかっただろうがよオーツ!!」

激情に駆られたドツピオの、あまりに真っ直ぐな攻撃。

はたては上体を反らしてそれを避けると、そのまま後ろに倒れるかのように身体を倒し、その勢いで右足を振り上げ、拳を振るいガード

の開いた右脇腹に蹴りを入れる。

しつかり予知を見ていれば躲せたかもしれないその一撃は、ドツピオの体にめりめりと悲鳴を上げさせるに十分な一撃。

その蹴りの勢いでドツピオは倒れる。はたてはそのまま後ろに手をついて後転し立ち上がる。余裕の表情を浮かべながら。

未だ、ドツピオははたてに一撃ほども喰らわせていないのだから。

「ぐぐ、てめえ……」

「さっきからそれしか聞いてないんですけどー？ 啖呵切った割にはその程度だなんてあんまりおもしろく……ん？」

瞬間、はたての周りに影が覆ったかと思うと、巨大な錨が降ってくる。

それが轟音を立てて参道の石畳を破壊すると、続けてその錨を投擲した者だろう。水蜜が同じく巨大な錨を携えてはたて目掛けて振り下ろす。

はたてはそれを回避するが、反撃に出ることはできない。

回避をしたその先を追うかのように、水蜜は錨の前方へ飛んでは回転、錨を振り上げはたてに目掛け叩きつける。

「ちよ、ちよつとちよつとー！ わ、たった」

ドツピオのそれとは全く違う攻勢にはたてもたじろぐ。

水蜜の表情は先のドツピオと同じく怒りの一色に染まっている。

「村紗、もうやめなさい。ドツピオ、はたても」

本堂の方から声が聞こえる。威厳を備えた、澄んだ声。

右手に宝塔を携え、左手には自分の身長を超える鉾を構えるその姿。

「最初の経緯は詳しく見ていたわけではありません。ですが、これ以上ここで迷惑を起こすようならば寺のものとして、あなた達を罰さなければなりません」

もはやあなた達の行動はどちらが善かどちらが悪かでの範疇を越えている。それでも続けたいというのであれば、この寅丸星が相手を致しましょう」

それは通告。ドツピオだけで見ればもうやめろで済む。

しかしはたてにはそれだけじゃない。

はたては妖怪の山に住む天狗たちの組織の一員だ。そして、非常に排他的であり内にも外にもその目は厳しい。

新聞記者として外に飛び回り、様々な人妖に話を聞きまわるはたて。その者が命蓮寺に迷惑をかけ、さらに敵対行動をとったらはたてがどういう扱いを受けるか。山の天狗はどう動くか。

……それを踏まえたくらう。はたてはやれやれといった感じで肩を竦める。

「何度も言うけど、私からは何もしていない。全ては受け身の対応。けれどやりすぎたことには変わりなし。」

「ここはその非を認めて引き下がることにしますわ」

「ッ、あんたねえ、それだけで済むと思ってるの?」

口ではそう出るが、所作には謝罪の意が全く含まれていない。

それに反感を感じ、水蜜が口をはさむ。

「済むと思ってるよ。済まないのはあんただけでしょ? 寺のトップがそう言ったんだし、あとはあの子がそれで納得すればいいのよ」

「ん〜!!」

「ここはそれで納まってくれ、村紗」

納得のいかない表情の水蜜に対して、ドツピオは冷静に返す。顔は伏せたままで、その表情はわからない。

攻撃の受けた脇腹にはまだ痛みが走っている。骨の一つや二つ、ヒビが入っている可能性がある。

戦いは続けられないだろう。それでも、続けるものは一つある。

「力比べでは僕の負けだ、完全に。そこは認めよう」

「おん?」

「だからここからは交渉だ。……僕とてその写真の男について知りたい。そして、君も写真について知りたいんだらう?」

それを、どこかここではない場所で話したい。誰からに聞かれてもつまらないだろうし、ここでは冷静には話し合えないだろうからな」
まだ顔は上げない。

そんな状態のドツピオを、呆けている者を見るような眼ではたては見つめる。

「……なんで、敗者の提案に乗らないといけないわけ？ どう見ても私があんたに勝ってたでしようが」

当然の返答。声色を一層低くし、不快だという態度をありありと示している。

そんなはたてに対して、

「なら勝負は続行だ。さっきの発言を撤回して戦いを続ける」

「なつ、ドツピオ、何を！」

「今はまだ、一輪や星たちが横槍に入ったただけだ。まだ終わっていない」

顔を上げ、右手でまっすぐに相手を指す。

先ほどの一撃が腕を動かすことで刺激されるが、それをものともせず。

二人の間に立とうとしていた星が、思わずドツピオの方を振り返り、そちらに寄る。

「今私が言ったでしょう!! これ以上の戦いは私が認めないと！」

「……だそうだ、天狗。僕が戦おうとすれば、その戦いを止める者がいる。僕の交渉に乗らないのならば、戦いを挑み、敗れる。お前は知りたいことを手に入れられない。

乗ってくれるのであれば、互いに利益が出る。今は、そういう状態だ」

制止する星を無視し、堂々とはたてに宣言する。

一步、痛みが走る体で、ふらつく足取りで、前に進む。

その前を、星は手を広げて制止する。

「何を……何を言っているのですか!! 既に傷ついているあなたをこれ以上戦わせるわけにはいきません！」

何より人間と妖怪が弾幕ごっこではなく生身で戦いあうだなんて、愚かしいにも程がある！死ぬかもしれないのですよ!!」

「うるせえぞ!! だから何だっつてんだ!! お前らが勝手に割り込んできただけだろーがッ!! 善者ぶって邪魔すんじゃねーぜ！」

それに、あつちが素直に聞いてくれればお前らの思惑も通るだろうよ、黙って見ていることもできねーのかッ！」

突然の豹変。星にとつては再びの豹変。

一輪も水蜜も、はたてもそれには一様に驚きの表情を出す。

今回は急の一撃はないが、それでも彼が何をしでかすかわからない。わずかに体に緊張が走る。

……ドツピオの荒い息だけが、間を吹く僅かな風だけがその場を支配する。

一拍おいて、最初に口を開いたのははたてだった。

「うんうん。いいねえ、そういう啖呵。痺れるねえ」

それは、称賛の言葉。

「口だけだと思っていたし、実力的には口だけだったけど……芯の強さは相当ってこと、よくわかった。気に入ったよ。」

そういう鬼先輩の様な頑固なところは嫌いじゃあない。下に見るなら可愛いもんだからね」

そう言うと、腰に下げていた葉団扇を取り出し、それで口元を覆う。

葉団扇を取り出したその時から、不自然に彼女の周りに風が舞い始める。

「午後まで」

「……何？」

「我らの山の麓に今日の午後までは私の遣いの者を置く。もし被写体の話をしたいのなら午後までに山まで来なさい。今ここでゆっくり話せそうな雰囲気ではないしねー。」

それを過ぎたら話はなし。いい、私はあなたを測っているのよ」

一方的に喋りつくすと、一瞬の屈伸後、突風が巻き起こる。

その突風と同時に、彼女は飛び出していった。

「見抜けッ！」

それを追おうと、ドツピオは叫ぶ。しかし、いつも通りに展開されるはずの雲が、この時は現れない。

顔を上げる。その先には金輪を掲げてそれを制する一輪と雲山、そ

して雲山に抱えられている響子の姿。

その顔は苦悶に歪んでいる。後に引く苦痛が顔を歪ませているようだ。

「……落ち着きなさい、ドツピオ。何があったかわからないって私たち何度も言っているでしょう？」

……怪我人もいる。あなたも怪我をしている。少しはそれを治してからでいいんじゃない？ 時間はまだあるんだから」

そういうと、雲山の腕が伸びてきてドツピオの体を包む。

移動に負担がかからないように持ち上げようとしているのだろう。体を上方に引っ張り上げる様な浮遊感が周りを包む。

「……」

「響子は無事よ。……けど、しばらくはお休みね」

蹴飛ばされた彼女は苦しげに「けばっ、けばっ……」と息を吐いている。顔色も青く、しばらくは動けないだろう。

作り出したのは自分だ。それに対する罪悪感はないというわけではない。

「……わかったよ。今は休む。だけど午後、山に着くくらいには解放させてくれ。……どうしても、知りたいんだ」

「それは、その、『あの人』のことですか？」

「……そう、だ。そういうえば、星にはあの時に言っちゃまってるからな」

一輪と水蜜は疑問の表情を浮かべる。

それを確認すると、ドツピオは二人にも向かって話す。

「今知っているのは星だけだったし、僕も外ではあまり言わないようにしている。」

僕には探し人がいて、そしてその人はきつと僕の事を探している。

……それが誰か、周りには言えない。自然と話してしまった、星だけしか知らないようにして欲しい」

「……その秘密人の為に、仲間がやられちゃってるんだけど？」

「それについては悪いと思ってる。けれど……怒るかもしれないが、

僕はそうまでしてもその人の情報を得たいんだ」

頼む、と最後に一言を添えて、ドツピオは頭を深々と下げる。

それを見ても、すぐには誰も、何も言い出せなかった。

―風に流れる諧謔曲のように 3―

ドツピオと響子の二人は雲山に抱えられ、命蓮寺の一室に連れてこられる。

部屋には先に向かった水蜜によって布団が敷かれてあり、その上へゆつくりと下ろされる。

「か、はあ……か、はあ……」

自分の傷跡に手を当てたまま、先ほどと変わらず苦しげな呼吸をするだけの響子。

その痛々しげな様子を、辛そうに一輪が見つめる。

「妖怪というものは総じて人間と比べ物にならないほどの身体能力を持つてる。遥かに強靱で、遥かに頑健で。

……でも、いま彼女はすごく苦しんでいる。酷いダメージを受けているの。……何故だと思う？」

ドツピオの方を向かないまま、言葉をかける。それは要因を作った彼を責める様な声ではなく、理解を求める優しい口調。

「簡単な話。相手も妖怪で、響子より強い妖怪だったから。人間が妖怪を退治する場合、対妖怪に特化したようなものでもないとならぬと傷すら負わすことはできない。

どんなに切れ味の鋭い刃でも、ただの人間が妖怪を傷つけることはできないの。それが、人間と妖怪の本来の差。

妖怪と妖怪同士だったら、話は単純になる。より強い方が勝つ。鋭い刃を持つている方が勝つ。

あなたが戦っていた相手は……それほどの差があるの、天狗という種族は」

「……………」

「責めているわけじゃあ、ないの。けれど、あまりに無茶なことをしていて……もし、あの一撃を喰らっていたのがあなただったなら、胴体が吹き飛んでいたでしょうね。

蘇生のしようもないほどの損傷で、冥界行きだったと思うの」

「……………めん」

怒りを通り越した心配に変わったのだろう。どれほどの無茶をしているのか。どれほどの理解があつたのか。

また、それとは別の疑問も持っていることを感じさせる口調でもあつた。

「分かつてくれたのならいいんだけど。……はたてがあなたを甦るつもりもあつたのかもしれないけれど、それでもあなたは無事だった。」

「そこも不思議なの。……上脱いで、触るわよ?」

一輪に促され、上着を脱ごうとする。

「……ツツ」

自力で動かそうとするが、体に痛みが走り思うように動かせない。それを見た水蜜がドツピオの傍らに寄り添い、脱衣を手伝う。

「痛みはあるけど、自分で動かすよりは痛くないはずよ。手を前に出して、そのまま置いて。私そのまま引つ張るから」

「……ありがとう、つツ!」

水蜜に促されるまま、上衣を脱ぐ。

切れ目の入った服の下には網がかつた肌着。それも共に脱いでいく。

はたてに加えられた一撃は、ドツピオの脇腹を青く染めていた。

「うわ、いたそ……でも、これだけなのよね。不思議」

「さつきからそういうけど、これだけなのがそんなに気になるの? これだけっていうには十分痛いんだけど……」

水蜜も一輪と同じく、外傷に対して意外そうな反応を見せる。

その傷痕を一輪は指一本で優しくなでるように触れる。

「……うん、うん。強打による肉の損傷。骨は……折れては、いないよね。姐さんなら何とかできる範囲」

「うーん、やっぱり。あの勢いでまともに入ったからえぐり取られてもおかしくない一撃だと思っただけけど」

「え、そこまでだったの!?!」

「そう。どれだけ頑健なのあなた。さつきも一輪が言ったようにはたてが遊んでただけかもしれないけどさ」

触診する一輪と、説明する水蜜。二人とも疑問は最後の一言に集約されていた。

常人と比べての高い頑健さ。確かな一撃が入っていても不思議とそれに耐えうる身体。

上衣を脱いだその肉体からは、とてもではないが想像できぬほど。そう思えるほどには彼の身体は華奢であった。

「そう言われても……自分がそこまで強いとは思ってはいないよ。男としてこういうのはアレだけど」

「うん。今触つてみてもとても鍛えられた身体とは思えない。年相応、それよりか細かい位で、特別筋肉がついているわけじゃない。尚更不思議よ、外傷が小さいことはいいいことなんだけど」

「だよねだよね。渡ってくる人たちっていうのは変に力を持つてくるから渡つてくるのかな？」

「……………僕には、特に変わった力とかはないよ」

「？ まあ、あちらから迷い込んでくるのは八雲の手引きか網に掛ることくらいだろうからね。そればかりは検証を挟まないと断定できないわよ。それに、今考えることではない」

「そーだけだね。ありがと、また横になるよ。頭支えてあげるから力を入れないで体を倒しな」

ドツピオの肩を抱き、もう片手は頭に添える。水蜜の言葉通りに体の力を抜いて全てを委ねる。

丁寧に枕まで頭を下ろし、視界はまた水平へと戻った。

隣には響子が変わらぬ様子で苦しんでいる。

「ねえ、響子は診ないのかい？」

「ええ。診ない。私には診れないのよ」

「診れない…………？」

一輪は何もできないことを歯がゆく思い、唇を噛む。

「妖怪の身体は人間とは違う。だから治し方も違う。そもそも、妖怪は身体を損傷しても自然治癒に任せることの方が多から、他の治し方を知らないことの方が多いの。」

響子も同じ。ヤマビコの身体の治し方はヤマビコくらいにしかわ

からない。私には……どうすることもできないの。彼女も、分かっていると思うわ」

「……そう、か」

「私は元々人間だったからあなたの身体がどうなっているかはわかる。けれど、妖怪になったからといって他の妖怪の身体まで詳しくわかるわけじゃないの」

「だから、妖怪のお医者さんみたいなのが重要がられてるんだよね。竹林の医者」

「なんだって、そういうのいるんじゃないか！　なら早くその人にてっ」

「あーもう、動かない興奮しない。大丈夫だって。一輪も不安にさせすぎー！」

思わぬ言葉に体が動き、痛む。

それを諫めた水蜜は一輪にも注意をする。

「そうね、ごめんなさい。とりあえずここでは大丈夫よ、響子も、ドツピオも。安静にしてそれを治す手段がある。命蓮寺にはね」

「直接的に治すわけじゃないけど、自分の回復力を高めるとかいう魔法。だから、さつきから聖を待ってるのさ」

二人を運ぶ際に、星は二人に指示しその場を離れた。

今彼女がないのも、それが理由。

「ある程度経ったしそろそろ来るんじゃないかな。準備も終わっただろうし——」

「お待たせしました！」

騒々しく襖が開かれ、そこには星と、彼女に手を引かれた白蓮。

「ちよつと、星。そんなに荒々しく入っては二人に迷惑でしょう。あなたはそういうところがそっかしいんだから」

「う、すいません聖……もう二人が心配で心配で。ああ、もつと早くに止めればよかった恰好つけずに変なこと言わないで、そうすればこんなことにい」

「寅、うるさい」

「はう」

慌てふためき、気もそぞろな彼女に突っ込む水蜜。

対照的に落ち着いた様子で、白蓮はまずは響子に寄って行った。

「はひゅー……は、ひゅー……」
「……………」

響子の身体に手をかざし、静かにその手を全身をなでるように動かしていく。

一通りすると、巻物を取り出して自らの眼前に掲げる。

この一連の所作は、傷ついて泣いている子供を優しくなで、あやす母のような、そんな様子に見えた。

そして、掲げた巻物から奇妙な文様が浮かび上がる。それが白蓮と響子の周りを包む。

その文様は緩やかな淡い光を放ち、ゆつくりと辺りを回ると響子の患部である腹部に吸い込まれていく。

「あれが、魔法？」

「その通り。聖は身体強化の魔法を得意としている大魔法使い。その力は普段は自らの強化に使用しているけど、その気になればああいいう風に他人に応用することもできる。」

黒白のただパワーだけを追求したものじゃあない、何よりも繊細で優しい力だよ」

集中して、ぶつぶつと小さく呪言を唱える。その横顔には一筋の汗が垂れる。

それを拭うこともせず、一心に治療の魔法に専念している。

やがて、巻物から浮かんでいた文様が全て腹部に入り込むと、白蓮は立ち上がり、袖で額を拭う。

「やりました！」

すっごいやり遂げた表情。

「終わりましたか！」

「さすが姐さん、私たちではできないことを平然と成し遂げる！」

「そこに痺れる！ 尊敬する!!」

「え、何このノリ」

魔法が成功したのだろう、それは雰囲気でわかるが急な周りの持ち

上げ具合にドツピオは追いつくことができない。

まだ治療対象が残っているのに、終わったかのようなその空気。

「ひゅー、ひゅー……」

「あと6時間ほどすれば自然と目が覚めるでしょう。その時はたっぷりの粥と汁を食べさせてあげてください。治療の一環で熱が出るかもしれないので、村紗は響子について対応してあげてください。」

次はドツピオ、あなたですね」

「あ、はい」

くるとこちらに振り向き、同じように傍らに寄り添う。

先ほどから脱いだままの上半身を、響子と同じように手をかざして全身をみる。

その手のひらからは、何かじんわりと暖かいものが体の中を通っていく感覚があった。

そして、全身を見おわると、自らの膝の上にドツピオの手を取り、その両の手で包む。

「……あの、何か？ 別に手は痛んでないし、もつと酷いところはあるけれど……」

できればすぐにでも治療してもらいたい。

そう思っているが、してもらおう手前そこまでは言えない。

白蓮はドツピオの手を包み、愛おしい物のようにさする。その表情は柔らかい笑みを浮かべている。

だが、どこか奥が知れない微笑み。自分の知らない何かを知っていて、それを嘲るような気味の悪い笑みにも感じられた。

「……ツツ」

反射的に手を引こうとするが、どこにそんな力があるのか全く動かすことができない。

白蓮は、ドツピオの手をとったまま、上半身を屈めて顔を近くまで寄せる。

「なんて、かわいいそうなんでしょう。何も知らないまま、届かぬものに手を伸ばし続けることは」

「……離せ」

鼻と鼻がつきそうなほどに顔を近づける。表情は変わらぬまま、囁くような小さな声で、子をあやす様な優しい口調で語りかける。「なんて、愚かなんでしよう。見えない目のまま、手探りで進む姿を見つめられるということは」

「……離してくれッ」

抜け出そうとするが、手を固められて動かない。無理に動こうにもその力を痛みで出しきれない。それでも。

「それでも、あなたは歩み続ける。強い意志を持ちながら。道は違えどその姿、まるで——」

「離せエツ!!」

渾身の力を持って引きはがそうとする。

それに合わせたか、白蓮が手を離しドツピオはあっさりと束縛から抜けだし、その勢いは止められず布団を転げる。

「え?」

「ちよ、何やってるの?」

その身体を一輪が受け止める。

相当力を込めたからか、勢いはそれなりについてぶつかった。

だが、特に体に走る痛みは感じられない。

「あ、あれ……?」

「どうやらあなたの方は思いのほか大きな怪我ではなかったようです。少しの休憩を挟めばすぐに完治するでしょう。」

何か、怖いものでも見ましたか? 初めての魔力通過を体験して、体が驚いているのかもしれないよ」

にこにこことたおやかな笑みを浮かべながら白蓮は経過を話す。

表情こそ変わらないがそこには先の気味の悪さは感じられない。

「え、姐さんそんな効果なんてありましたっけ? 聞いたことないんですけど」

「私も能力の無い者にこういった力を使ったことが初めてです。大丈夫だとは思いますが」

……違う、そうじゃない。

そう言っつてやりたい気持ちを押さえ込む。

けれど、きつと周りはそれを理解しないだろうから。

現に、ドツピオに対して行った行為を誰も追求しようとせず、周りはまだ眠る響子に対しての準備を始めている。

自分の心音がまだ高く体を揺らしている。得体の知れない恐怖に、まだ体も心も落ち着かない。

「そう言うことだそうなので。ドツピオ、あなたも少し休んでなさい。朝食はもう食べた？ 軽いの作ってくるから、もうしばらく寝てなさい」

「……わかった。そうさせてもらおうよ」

脱いだ上衣を再び着込み、布団へ横になる。

「すうー……すうー……」

「でもホントよかった無事で、自らの私利で信徒にこれほどの傷を負わせてしまい、これで再起不能なほどであれば私は何で詫びればよかったのかと、ああいえ自分の保身を考えていたわけではなくて今も代償を」

「寅、うるさいって」

「はう」

隣の布団で響子を挟み、誰にともなく謝罪している星とそれを適当にあしらう水蜜。……最初の威厳などどこにもなく。

少し休むには騒がしすぎるが、体に疲労は残っている。少しの休眠を取ることにした。

「ねえ、起きてる？ ねえ」

小さく聞こえる声。

浅い眠りだった意識を取り戻すにはそれで十分。

「もう大丈夫、なの？」

その声の方に振り向く。

隣の布団からは、体を起こしてこちらを見つめる響子の姿。

まだ少し体は痛むのか、顔色はいつもの様な明るい状態ではない。手は腹を押さえており、違和感が残ることを表している。

「うん、いくらかは大丈夫。……迷惑かけちゃったね、ごめんなさい」
その顔は、自分が原因で相手を怪我させてしまったことを悔いる、本当に申し訳なきような顔。

「そんなことはないよ。それに、君の方が大きな怪我をしている」
「だっ、大丈夫だよこれくらい！……てて」

声を張るが、それで力が入るからだろう。顔を歪めて強く腹を押さえてしまう。

「無茶しないで、僕だって大丈夫だから。横にならないでいいのかい？」

「うん、一言、ちゃんとお礼が言いたくって」

そういうと、少し布団を這い出し、しっかりとドツピオの方を向く。
「私が勝手に出てったんだけど、そのあと攻撃された後、私を心配してくれたよね。私の為に怒ってくれたよね」

「ありがとう」

にこやかにほほ笑む少女。自分への思いの精一杯の返却。

「……ツツ！」

ドツピオの頭に一瞬ノイズが走る。

目の前が歪んだかと思うと、脳裏に走る似た笑みを浮かべる少女。

薄い青の髪、同じ色をした右眼、赤い左眼。

そんな見たことの無いはずの情景。

金の髪、燃え尽き燻る炭にまだ宿るような火のような、暗い赤の両眼。

精一杯の感謝を伝えたがる、無垢な瞳たち。

「……？ どうしたの？」

「いや、なんでもない。まあ、無事ならそれでよかったよ。僕には、あいつに結局何もできなかったから」

「え、そうなの？ ……どうやって追いやったの？」

「あー、まあいろいろと」

なんだか説明もしづらいし、適当にはぐらかす。

その様子を不思議そうに眺めていたが、くすりと少し笑うと再び響子は横になった。

「私、自分がダメだなー、とかは元々あんまり思わないけど、他人を巻き込むとやっぱりに来るもんなんだね」

「誰だって、そういうものじゃないかな。僕もできるのなら他人をそんなに巻き込んで何かやるのは嫌なものだし」

「そっかー。お寺の教えもよくわかんないけど、そういったものなのかな。みんなそうなのかな」

「教えも、っていう部分ではよくわからないけど。みんなそうなんじゃないかな。誰だって、自分の事に他人を大きく巻き込むのは嫌じゃないかと思うよ」

とりとめのめない会話を続ける。

響子もそうかそうか、と一人納得したように相槌を打つと、ドツピオに軽く手を振ると布団を深く被った。

「……行くかな」

無事を見た。治療も済んだ。もはやここに留まる理由は自分にはない。

周りが留めるだろうが……それならば、静かに出ていくのが一番だろう。

起こさないよう、静かに布団からはい出る。

隣の布団を通るときに顔を見るが、僅かに見える隙間からは眠っているような表情は見れる。

だが歩くたびに軋む床から、その犬のような耳は聞き取っているのかもしれない。

それでも、彼を止めずに静かに寝息を立てていた。

「行かれるのですか」

外へ向かう襖を開けたその先に、星が佇んでいた。

先の様な情けない姿ではなく、怒っているような悩んでいるような難しい表情を浮かべている。

「元々止まる気はなかったからな」

無感情に言い放つ。無理に考えを挟ませれば、それを察知し余計な口を挟まれる。

それをするほど愚かではない。それくらいはわかっている。

「見抜け」

いつもの言葉を口に出すと、それを止める者はいないからか。いつも通りに雲が出る。

まだ数回しか使っていないが、彼はもはやこれを日常と化していた。

「もはや止めることはできないでしょう。……死に行くわけじゃありませんし、本気で止めるわけではありません。その顔を、見たかったです」

そういうと、横にずれて道を開ける。

「忘れないでください。あなたはもう一人で歩いているわけではないと。歩いたために、誰かの手を借りていることを。あの時、聖と何を話していたかはわかりません。」

けれどおおよその予想はつきます。そして、その予想だけで私は動いている。きつと、その予想は間違っていないのでしよう。あなたの今朝と今とで、私は確信しています」

確かに、自分の考えに納得が入っている、迷いの無い言葉だった。

「そうか……そうか。わかった」

一瞬振り返る。

その時、星は声をかけたことを後悔するほど、言い知れぬ感情を身に受ける。

「覚えておく」

そのような感情を向けられることは初めてではない。聖白蓮を悪とみなし、討ち取ろうとするものを撃退したこともある。

それ以前に、崇めている物こそが悪とみて、自らに襲いかかってきたこともある。

そういった者たちが相手に込める感情。

「あなたは……あなたは一体、何者なんですか？ その少年と、あなたは、一体……」

星を半歩下がらせるのには十分な威圧。

言葉も、何も返さず、そのまま雲に乗り込む。

「妖怪の山を目指せ」

時間だけが、何の感情も抱かず動いていた。

ディアボロは思考する。

ドツピオの中で、表に出ていないときは直接見聞きできているわけではない。それと近い何かを感じているだけだ。

それでも、ドツピオが気づかない物でもディアボロなら気付けるものがある。最強の暗殺者にいち早く気付くことができたのもそのためだ。

ディアボロの意識が目覚めているのなら、ドツピオの時に感じた物を把握することができる。

逆に、ドツピオはディアボロの身体で起きたことは何も把握していない。

当然だ。ディアボロが表に出てきているときは、ドツピオは深い眠りにについているようなもの。意識は無いに等しいのだから。

あの一瞬、ディアボロの記憶の中だけにあるものが、ドツピオにも蘇った。

確かにあの顔を見たとき、小傘の表情がディアボロにも思い浮かんだ。

だが、特に強く連想するものを見たときに、自分しか知らない物までドツピオが思い浮かぶことはなかった。

これが何を意味するか、それは今はわからない。が、忘れない方がいいことだろう。

ここで起きた初めては、すべて覚えておくに限る。

そしてもう一つ、見たことの無い記憶。自らの記憶にない金髪の少女。

死に行く全てを覚えているわけではない。……覚えていたら、発狂してしまうだろう。

しかし覚えているものももちろんあるわけで。その中にはないというだけの事。

それでも、金髪赤眼など、現実にはありえない。

先の天狗は1週間前に自分を撮影したと言っていた。自分が幻想郷に来たと理解したのは2日前。

本当はそれ以前から幻想郷に存在しており、そのまま死を繰り返していたのかもしれない。

真偽はわからぬ。それに繋がるものかもしれない。

ディアボロは試行する。

ドツピオは完全に行使していたキングクリムゾンの腕と、エピタフ。

今は完全に表に出ているわけではないが、意識を表に出しているときはスタンドを使用できる、はず。

「……」

傍らに浮かぶ、薄くささくれたようなその姿。全てを制することのできる王の力は未だくすみがかんている。

『画面』に二人の妖精が、楽しそうに空を飛ぶ。

そちらに目をやると、確かに二人の妖精が、同じように空を飛んでいた。

問題なし。

あの時に見えた予知は、確かなものだった。精神が高ぶる危機的状況は人間を強くさせる。

それと関係ない平時でもそれが見えるのなら問題はない。

時を吹っ飛ばす力は、今誰かに気付かれてもつまらない。試すべきではないだろう。

姿をそのままに、表の人格を出していた状態を解除し、ドツピオの人格を表に出す。

「……？」

今ボスが傍らにいたような。

そう思っただけを見回すが、特に何も無い。

なだらかな草原は人里を超えるとまばらに木が生えて、人の通りが少なくなっただけの嫌でも感じさせる。

その前には巨大な山が視認できる。

何百、何千年と人を寄せ付けず、自分の力だけで生きてきた。

そんな自然の力を感じさせる、天然の山。

「貴公か、ドツピオという外来人は」

その山を見る視線の先に、空を飛ぶ一人の少女。

かなりの距離があるが、それでも装備がはつきりと見て取れる。

右手には体と同じほどの大きさの大剣、半身を隠す紅葉の文様が描かれた盾。

「わが名は犬走椋。烏天狗、姫海棠はたての命により、貴公の山の案内と監視を務める者だ」

「先に言っておく。ここより先は今までと同じところと思うな」
先を進む椀が後ろからドツピオがついてくることを確認しながら話しかける。

顔を上げ、その先を待つ表情を確認すると再び前を向き、振り返らずにそのまま続ける。

「基本的に群れることの無い、自分一人で生きるのが妖怪だが、天狗はそれとは別。社会性を保つ集団だ。ここより先は外とは違うコミュニケーションティとなる。

そして人間など妖怪の餌食にすぎない。今回は姫海棠からの招待があつたからこそ、私の監視の下の案内だからこそ入れるのだ。

みだりに入ることは許されない。また、興味で私から離れ下がったり逸れようと思うなよ。たちどころに喰われることになる。

私は貴公を案内することは任されたが、守ることは任されていない。『ドツピオは来なかつた』と報告するだけでもいいのだからな」

口調から十分に感じ取れる、人間への軽蔑と、招き入れている事実に対する不快感。

「わかつた」

今のドツピオが、その程度では止まらない、止められない。

短くも強く肯定の返事を返す。

求める物がその危険な山に存在しているのだから。

「……………ふん」

その返事を一瞥し、そのまま飛行する。

覚悟を受け取った椀は妖怪の山へ彼を誘った。

妖怪の山に入るといっても、結局は飛行しながらなのでいつも地を歩くドツピオにはそれと変わるものをあまり感じない。

しかし、話に聞いた通りの、今までの幻想郷とは違う空気は嫌でも感じ取れる。

どこかのどかで、気が抜けていて。それでいて危険が目の前にある

という……矛盾したような、そんな世界。

だが山の中はそんな空気は感じられない。

木の陰、草の影、岩の影。そのどこからも感じられる、粘りつくような視線。潜めた息遣い。

興味や好奇心といったもの。不安や恐怖といったもの。殺意と侮蔑といったもの。

かつて人間と妖怪の間で何かあったからか。それとも妖怪の本質がこういうものであり、幻想郷に色濃く残っている唯一の地なのか。それは今ドツピオにはわからない。

確かなのは、ここに人間は存在しない奇異の者であり、良くも、悪くも思われているということ。

「……………」

最初に聞いたから覚悟はあったものの、実際に浴びる視線は堪えがたいものがある。

善意であれ悪意であれ、これほどの衆目を集めることはそうそうない。それこそ、組織の長でもない限り。

「怖いか？」

わざわざ木々の合間を縫い、山の地表、沢の流れる森の中を進む椀は意地の悪そうに、声をかける。

「幻想郷には各所に強大な勢力が存在している。その中で最も強い勢力がここ、妖怪の山だ。」

他の者は主を筆頭に置いただけ、その下は低級な妖怪と人間が占めるばかり。ただ我儘に指示を出すだけの上、そぞろに言うことを聞いてればいいだけと思っている下。

いわば上の独断だけで動かしているようなものだ。

だがここは違う。多数の妖怪を収容できる土地、そこに存在する多数の妖怪たちを統制しうる天狗たち。もちろん天狗たちもただ胡坐をかいているだけではない。

徹底した上下の関係と、それを管理統制しうる統治体制。そして、それらを行うことを納得させる圧倒的力」

ゆつくりと振り返り、何かを期待するような眼でドツピオを見つめ

る。

椀が語っている間に周りの視線もそれに呼応する様に、同じ期待を秘めた視線へと変わる。

「少年よ。まだ年若い人間よ。貴公は踏み入れたことはあるか？ 多数の害悪にまみれた沼に。自分を庇護する者の無い領域に。」

ここでは貴公の発言を聞き入れる者もない。貴公の存在を認める者もない。帰りを待つ者がいれば、それに届ける術もない。

周りに誰も手を差し伸べる者はいない。喜んで剣を刺しだすものばかり。そんな空間に——」

「言いたいことはそれだけか？」

脅し怯える心を楽しもうとする椀の発言を、バツサリと切り捨てる。

そこには僅かな感情に揺れる少年の瞳は存在しなかった。

「暇つぶしなら他でやってくれ。時間の枷はなくなったけど僕は急ぎたいんだ。君の任務は案内だろうか？ 言われた事をできない事で二番目に困るのは君じゃないのか」

「……言うじゃないか、少年」

その言葉を聞き、椀の目つきが険しくなる。周囲の視線も害意を望むようなものから、与えるものに変化する。

「ここまでしても退きもしないのはよほどの意思か呆けているか……我々の力をちよいとでも見せればその顔も変わるか？」

「……」

武装を構え、明確に敵対の姿勢を取る。

それに対しても、ドツピオは特に身構えもしない。

これは、予知を見るまでもない過程だから。

「どうやら後者か……自分が本当に殺されないと未だに高を括っているんじゃないだろうね？ その考え、断ち切って」

「おい、もうよせよ」

下の沢から、ざんぶと何かが上がってくる。

上がってきたそれは、ゆったりと浮上すると椀の横に並んだ。

「確かに魔理沙とかとは違う、普通の人間だけど、こいつは怯えどころ

かひるみもしないじゃない。これ以上やっても変わんないよ、きつと」

「……ぬー」

「まあ私が出ちゃったからもう終わりなんだけどさ。これ以上やると楯本当に噛みついちゃうじゃん」

水の中から現れた、青い服に緑のリュックサックを背負った少女―河城にとり―は、相手を戒めるように話す。

「なーんだー」「結構持ったなー」「つまんね」「若いのに根性あるー」「はたて、良いの釣ってるじゃないの」

それと共に周りから感じていた視線が、複数聞こえる眩きと共に消えていく。

まだいくらか値踏みするようなものが残っているが、先の居心地悪い感覚はだいぶ薄れた。

「ねね、人間。よく脅しに屈してなかったね。なんで？ 怖くなかった？」

「にとりい……そう言う聞き方は無いだろう。地味に傷つくぞそれ」

「え、えーと。まず、仕込みだよね完全に」

「仕込みは半分だが、事実に変わりはないぞ。さつき貴公に話した通り妖怪の山は他者が容易に足を踏み入れることはできない。妖怪ばかりの住処」

「そこ、そこだよ」

彼に興味を持ったのか、目を輝かせて話しかけるにとり。

ドツピオはその話に乗れ、楯を指摘する。

「あのはたてってやつがどういう立ち位置かはわからないけど奴はここに僕を招いた。そして、招かれた先に案内役の君がいた。」

ここの概要は詳しくは聞いてなかったけど、最初に君が教えてくれたから恐ろしいところだというのは理解した。

君は、与えられた任務に忠実なタイプ、規律正しい性格だろうか？」「そうだが……だから、何故そう思った？ そんなに話はしていないだろうに」

「第一に。最初から、僕に対する敬称が変わらなかった。本当に取っ

て喰おうと思っっているのなら君たちより下の人間に対して敬称なんか使わないはずだ。

でも、最後に武器を突きつける時までそれが取れなかったからね。第二に、奴は遣いの者を置くと言っていた。つまり、君より立場が上だということも推測できる。君が脅しで使った言葉から察するに、部下は上司に逆らえない、立派な組織だ。……そうだろうか？」

権もにとりも、少し驚いた顔をしていた。

確かにその通りなのだ。自分の雄弁が、相手を委縮させるどころか逆に情報を与えて有利にしまっている。

「確かに、そうだが……」

「最後に。本当に相手が怯え屈服するのを見たくて脅したいのならこんな回りくどいことをせずに」

そこで一旦口を止めると顔を伏せ、少しの間を置いた後に伏せた顔を上げ。

「傷つけるか、拉致してしまえばいい。それを行わずに脅すには君には経験が少なすぎる」

驚きで目が丸くなる。そのようなことを考え口に出す様な人間には見えなかったから。

自分たちの数分の一しか生きていない人間に『経験が少ない』と言われ、それを納得できるかのような雰囲気。

「……よくも、言ったものだな貴公。さすがにその言葉は侮辱とするぞ？」

「確かに僕が言うには、生きている経験で考えたら君には及ばないだろう。だけど事実だ。きつと、君は『兵士』であって『幹部』じゃない。そこまでの舞台まで連れて行く立場だけど、その舞台の上で何かする立場の人間ではないだろうか？」

「ぬー……」

「人間じゃないよ、天狗だよ」

にとりがどうでもいいフォローを入れるが、権の表情はよくなならない。

彼女の中で、たかが人間にここまで澱まらずに見抜かれたことによる

思いがそのまま顔に表れている。

「ああ、うんそうだった。ごめん。……とりあえず、これが君たちの遊びなのか奴の指令なのかは知らないけれど、案内してもらえらるなら早くしてもらえらるかな？ さつきも言ったけど僕急いでいるんだ」

「そうだな……悔しいが。命を遂行するには変わらない。先を急ごう」

「ねえねえ、私もついて行っていいかい？ 途中まででもいいからさ。盟友の話、聞いてみたいんだ。一体外では何をやってたんだい？」

「にとり、やめておけ。彼は客人なんだぞ、あんな扱いしたが」

「だからだろ？ 別に今更いいじゃんか」

「いや、僕が困る。そんなに自分のことを人に話したい人間じゃない」

ドツピオに興味を持ったか、喰いかかるように話しかけるにとり。それに対して、二人であしらう。

過去、組織に忠誠を従い命令であれば奉仕活動でも暗躍でも自分に行きることなら何でも行った男がいた。

普段は穏やかな物腰だが、知識や技術には光るものがありそれを生かす頭脳も持っている。

表の顔は午前の仕事を終え、優雅とまではいかずとも、満足のいく昼食をとり午後は余暇に当てる。そんな、どこにでもいる初老の男。

ひとたび事態に当たれば培ってきた経験と持ち前の感、自分から前に出ることは無くてもそれらによって得た信頼で收拾していく。

本人は笑って否定したが、組織の一員の中には『パツシヨネのボスとして立っていてもおかしくはない』とも評した。

ヌンツイオ・ペリーコロ。

パツシヨネの中でも高い地位にあり、実力者とその実績を見抜き同じ地位である幹部の昇進を決定づける権利も持つ。

自身にとって不利にしかならないスタンダード能力についての知識も持ち、それでもこの地位に存在し続けられたことが彼の能力の高さの証明といえよう。

ボスの命に忠実に働き、ボスの命に殉じた男。

ボスからの指令を伝える伝令として、一度彼に会いに行つたことがある。

その時の彼はまさしく今の楯と似たような状況、組織の恐怖を伝えている状態だった。

若い男が3人。声だけは聞こえるが姿は見えず、そんな3つの小部屋に一人ずつ入れられ監禁、暴行されている状態。

3人がカメラで捉えられて観ることのできる一室で、彼と話したことがある。

「すまないね、こんなところで」

そう話しかけた彼は、カメラに映っている若者たちを颯る元締めとは思えないほどだった。

直前に、一室ごとに回つてぼそぼそと耳打ちをしていた。

その言葉を聞きたびに、一人は怯え、一人は安堵し、一人は許しを請うように大きな声を上げていた。

「何を話していたか、気になるかね？」

本当のことを言えばそれほど興味はなかった。3人の若者たちが組織の顔に泥を塗るようなこと―例えば、知らずにシマを荒らしたか女に手を出したか―をしたのだろう。

けれども上に立つ者の言葉は興味ないの一言できることは許されない。

「一言、こう言つたんじゃよ。『2時間たつたら解放してやる』とな」ただあつたことをそのまま話している。それがドツピオの感想だった。

けれど、あの状況でそれを聞くことがどんな状態になるのか。「あと2時間あるのか」「もう2時間でいいのか」そのどちらかから生まれる感情が身体を支配するだろう。

ただ痛めつけたり強い言葉だけで脅すだけではない。精神的にも肉体的にも追い込み徹底的に反抗心を奪い、「逆らえない、逆らつてはいけない」という認識を確立させる。

「ドツピオ、君は優秀な若者だ。他人の手を介すこともできないような指令を伝える者として君ほど信頼されている者はいないだろう。

「これからも期待しているよ」

そう言つてドツピオの肩を叩いたペリーコロの手は、孫を思う祖父のように優しい手とも感じられた。その手は先まで闇に染められたものなのに。

「この滝を越えた先が邂逅場所だ。変わらず、着いてきてくれ」

椀が指したその先は下から見上げれば首をどこまで傾けても上が見えないような大瀑布。

「ごうごうと大きな音を立てる滝壺の間近では彼女の声はほとんど聞こえない。」

携えていた巨大な刀を物指しに使っているから意図は理解できるが。

「まさかこんな形で日本の滝を上ることになるなんてね……」

見慣れたものだろう彼女は気に留めることなく進んでいくが、自然の生み出した芸術を黙ってみていけるほど無感動な心ではない。

生み出す腹の中を揺さぶるような音と育みも削り取りもする勇ましい始原の源。それが今、観光地の柵などに仕切られることなく手に触れようと思えば触れられる距離にある。

もちろん触れれば自力で飛行できる身ではないので、真つ直ぐ滝壺に流されてしまうだろう。

それほどの勢いにもかかわらず、傍らで妖精が滝の中から出たり入ったりを繰り返している。

……辛くないのだろうか。

「見えてきたぞ、御山の頂点が」

「え、頂点なの？」

そんな人目の付きそうな所に――

そう言いかけた口が、開いたままになる。

未開の山を抜けたその先にあったものは、その場にふさわしいとも思える荘厳な建物。

その建物に向けた一つの石畳の道、その最奥に佇む鳥居。

「……………」

「山のお騒がせさん、守矢神社よ。この神社は本殿まで行けばいろいろうるさいのも多いけど、この辺りは空白地帯。天狗も神様も目に入らない」

その先の建物から一筋黒い点が見えたかと思うと、それは一つの影となつてドツピオの前に形どる。

その姿を確認すると刀を背負い、椀は敬礼する。

「姫海棠、命により外来人ドツピオの護送終了した。これより通常任務に戻らせてもらう」

「はいはいどーも」

「……あれで護送だったの?」

疑問を投げかけるが、それに答えるべき者はさっさと下がつてしまった。

「いやはや、ホントによく来たね。来ないか逃げ帰つてるかと思つたのに」

「てことは、やっぱりあれはお前の指図だったのか」

指摘すると、ドツピオの前に着地し、目を細めて笑みを浮かべる。

「やり方は自由に任せただね。激情だけの奴には絡む必要ないし。それどころか」

少し窺うように、ドツピオを覗き込むように見つめる。

どうにもはたてのこのような視線には慣れない。

「少ししか経つてないのに……なんか変わった感じがするね。寺では猫かぶりでもしてたの?」

「……何言つてるんだ? とにかく、話にしないかい?」

「んー、まあそうね。ほら、これが例の写真」

そういうと、はたては先に見せた3つの写真をドツピオに手渡した。

写真を受け取ったドツピオは、雲から降りて石畳の傍らに適当に座り込む。

手にしたものを、じつと見つめる。

一つは森の中。ほとんど光がないことから夜なのかもしれない。もちろん単純に深い森の中という可能性もある。

中の男はカメラに向かって恐怖の表情と悲鳴をあげている。物言わぬ写真越しにもそれは伝わってくる。

二つは湖のほとり。写真のメインは緑髪の羽の生えた少女なのだろう。少しはにかむ顔のその後ろ、湖の中から這い上がるように。

中の男は何か岸に着いたといった疲れ切った表情。湖に浮いた氷から察するにかなりの低温を泳いできたに違いない。

三つは建物のそば。朽ちた建物にもたれかかり、追いつて立てられたウサギのように怯えている。

中の男は頭を抱え、少しでも隠れようと陰に逃げ込んだのだろう。そこを撮影した、と考えられる。

どの写真にもその男は写っており、一様に恐怖の感情を浮かべている。

だが、一つ目の写真は『これから起こることに対しての恐怖』に対して二つ、三つ目は『既に起きた事柄に対しての恐怖』であるようにも感じられる。

時間帯、場所はどれもバラバラとしており写真からは読み取ることが難しい。

「……ねえ」

「この写真はどこで撮ったんだい？」

「この写真はどこで……あ？」

手に持った自分のカメラをいじりながら顔を合わせずにはたてはドツピオの質問を先取りする。

「情報は交換よ、交換。あなたが何か提供したら私も一つ提供する。先に出すのはあなた」

「……なんでさ」

「負けたじゃん」

確かにほとんど敗北していた。が、ここまで来たもののドツピオは彼については全く知らない。見たことも、会ったこともないのだ。

何故あの時にあそこまで会ったことの無い男が写っている写真を思ったのかはわからない。

何故かはわからないが、知らなくてはいけない。こみ上げてくる使命感の理由はわからない。

「……こいつは僕と同じ国の人間だろう。たぶん、イタリア人」

とりあえずわかる情報をひねり出す。自分で言っても苦し紛れの情報とは思えるが。

人種が同じであれど、自国の人間はどこかわかる。色や種別が同じでも国によっては生活の習慣が違う。そこから生まれる人間性は長らく過ごした者なら感じ取れる。

「……えー、それだけ?」

「何か提供してるだろう」

「まーねー。まー……じゃあ、どっち聞きたい?」

不服そうだが、一度自分が言ったこと、撤回する気はないらしい。意外と義理堅いというか。

彼女は自分のカメラと写真を交互に目をやりドツピオに尋ねる。

「その写真をどこで撮ったか。それとも写真についてか。最初の質問かそうじゃないか。どうする?」

「……うーん」

悩む。どちらも知りたいが、これ以上こちらから提供するものもない。

次も納得できるような情報でなければ話が打ち切られてしまう可能性もあるだろう。

「……じゃあ、その写真はどこで撮ったか。それを教えてくれないか?」

少しの逡巡、前者の質問を選択した。

もしこれ以上答えることができずに情報を得ることができなくて

も、その場所に行けば何かつかめるかもしれない。

また、写っている人物、特にこの緑髪の少女。この者に何かを聞くことができる、かもしれない。

「はいよ。まー、こういうのもあれだけどこれ、厳密には私が撮ったわけじゃないんだよね」

「え？」

自分が撮ったわけじゃない。どうということか。

その疑問が表情に出たのだろう。うんうんと頷くとはたては一つの箱状の物をドツピオに放る。

受け取った手のひら大のそれは、ドツピオでも、誰でも見知ったもの。

「……カメラ」

「そ。ちよつと前に結構な量が幻想郷に入ってきたからね。これを適当な奴に配って写真を撮ってもらってるんよ」

ドツピオの手の中に入ってきたものはインスタントカメラだった。

撮影すればその場で写真が現像される。手渡されたそれは安物で精度の高いものではないが、初心者の写真撮影には十分に足りうるだろう。

「で？ それで撮った写真をわざわざ手元に集めて、結果これが手に入ったってこと？ 自分のカメラがあるっていうのに」

「いいえ。そこからさらに」

そう言っただけで自分のカメラをいじりだす。

そして、手元から特に動かさずにカメラのシャッター音を出す。

「うし、ほら、これ見て」

自信ありげにはたてはカメラの中を見せつける。

そこには縁側で茶を飲んでいる霊夢が画面に映っている。

「これはちよつと前に文が撮った写真かな？ 今適当なワード入れて見せたげたの。他にはねー」

やや早口で語る。その姿はどこか楽しんでいるようにも見えた。

自分の事を喋るのは好きなのだろうか。最初のやや愛想の無い時とどうしても比べてしまう。

「ほれ。今度は『外来人』をワードに探してみた」

再び見せつけた画面にはドツピオに手渡した写真のうち一つが現れている。

「……えーと、つまりどういうこと？」

「わかんないの？」

「全然わからん。説明に言葉が抜けすぎてる」

正直に思いをぶつけると、後頭部を掻きながら面倒くさそうな表情を浮かべる。

見せつけて、理解しなければ腐れて。その態度にドツピオも苛立ちを感じてしまう。

「まだ聞きたい言葉が一言も出てきてないぞ。そっちがいろいろ教えてくれるのはありがたいことではあるけれど質問にはそれに合った答えを返してほしいな」

「察せよ、そのくらい……私はね、念写ができるの。わかる？ キーワードを添えて使えば、過去に撮影された写真を私の手元にそれにちなんだ写真が見つかる」

ドツピオの手からインスタントカメラをひったくり、それでドツピオを撮影する。

シャッターが切られる音が鳴ると少し後からカメラの前面に備えられた口から一枚の写真が出てくる。

その写真をドツピオへ投げ渡すと、再びはたては自分のカメラをいじくる。

「……あ」

「こういうこと」

まだ写真は完全に現像されきっていない、黒ぼけた紙切れだがはたてのカメラにはドツピオの何をしているのかわからない呆けた顔が写っている。

このカメラはドツピオに対しては一度も向けられていないし、そもそも写真撮影された覚えは一度もない。

「流れ着いたそれらをそのまま腐らせるのもあれだし？ てきとーな雑魚に渡したのよ。面白そうな何かを撮って楽しみなさいって。」

で、撮られた写真は興味あるものは自然と手元に流れ着く。そう、私の能力ならね」

「……つまり、これは自分が撮影したわけじゃないからどこで撮ったかわからないってことか？ 最初に言った通りに」

「あ、でも地名くらいはわかるよ？ ほら、この妖精……名前あったかな？ こいつの居る場所は霧の湖。山から流れてる川を追ってきや着くよ」

「……ちほっ」

「情報」

手のひらを見せつけるように差し出し、開示できる物はここまでと意思表示をする。

もちろん何も出せるものはないのだが、フリでも、写真を見つめ続ける。

……その中で、ふとした疑問。

今の今まで、先に調べる重要事項があったので後回しにしていた。後回しにしても問題ないと思っていたから。

……今のはたての話の中に、とんでもないことを話していなかったか？

元々写真は何かに駆り立てられるように調べようとしたこと。それよりも前にも疑問を抱いた、もつと根幹的な事――

「……ねえ、確認なんだけどさ。このカメラって最近幻想郷に、多量に、流れ着いたって言ったよな」

「ん？」

来たばかりに、聖から聞いた説明を思い出す。噛み締めるように、ゆっくりと。

「こういうったものは基本的には幻想郷になく使える者も少ない。けれど外の世界で不要になった、忘れられた物がこちらに流れ着く……簡単だけど、そう聞いた」

「んー、それで合ってるけど……それが？」

「僕が外に居た頃はこれはそれなりに値が張って、それでも便利だからと流行したものだ。」

……時間が経つに連れて改良されより廉価に、より使いやすく。一般に一回っていった」

淡々と、それでも自分の中の記憶を探るように。開いてはいけない箱のカギを開けているかのような、恐怖と使命感。

元々感度の高い種族。はたてもそれに気づき、鋭くドツピオを見つめる。

そんなはたてに継るかのように、ドツピオは顔を上げ、潤み始める瞳を晒した。

「なあ……答えてくれよ」

声が震え、視界の端がわずかに歪む。

「ここは、今は、『いつ』なんだ？ 僕が知っていた物が、誰もが持っていた物が忘れられるほど……時間が経っているのなら……」

「悪いけど」

腰を上げ、乞うように願うドツピオ。

それとは対照的に、冷たく見下すような視線で射抜くはたて。

「あんたがそれに満足するような答えは持ち得ていないし答える必要もないと私は考える。今この場の交渉は写真の男に対してであり、それをわしむぎゆ!？」

瞬間、眼前には立ち上がったドツピオ、彼ははたての口を覆うように顔を掴んでいる。

注意はそちらに向けていたのにもかかわらず、この結果になるまで気づくこともできなかった。

「そんな答えを聞いているんじゃないツ!! 今は一体いつなのか、忘れられるほどの時間が経ったことが……2001年から一体どれだけ経っているんだツ!？」

上ずった、かすれた声。喉からしぼり出てくるような声量。涙を流しながらの崩れた表情。

気づいてしまった、恐るべき疑問に対する恐怖ともしそれが是であつたとするなら悲しみ。そして、それに対する彼の意にそぐわぬ解答による怒り。

全てが合わさり合った、不安定な感情。

「むぐ、ぐ、うう……!!」

そして、はたての顎を今にも砕かんとするほどの握力。人間が、これほどの力を発することができるか？

だが、はたてはドツピオ本人の手の感触の他に、覆いかぶさるように『目には見えないし皮膚で感じ取れないけれども感覚で理解できる何か』が掴みかかっているのがわかる。

「聞いているかッ!? 答えるのか、知らないのか。はつきり言ってくれるのかッ!？」

「んむー、むー！ むー!!」

たんたん腕をタップし、離してほしいと意を伝える。

それを感じると、彼ははつとした表情を取り、急に身体力が抜けたかのように膝を、手を着きうなだれる。

「ふあ、はつ、はあ……」

「……ごめん。本当に……こんなことしたってあんたがどうしてくれるってわけでもないのに……」

後ずさりするはたてに対して、素直な感情をもう一度ドツピオはぶつける。

「けれど、あんたが言ったことと、僕が知っていることを合わせたなら、それが本当ならば、僕という存在は、ボスは……」

もう一度。先の覇気もなく、哀れな弱者のように涙を流しながら乞う。

ただ一人でここに現れたという虚無感だけではなく、自らの知らぬうちに幾年も経っていた『かもしれない』という事実。

知る者の安否もわからず、それを知ろうにも忘れられるほどの歲月。

「う、うう……っ、ぐ、ひ、っぐ……」

まだ何もわからない。はたてが間違えているのかもしれない。命蓮寺の者たちが嘘をついているだけかもしれない。そもそも、ここが現実ではない何かなのかも――

溢れ出る、今を否定する感情。それが表現するのは、ただとめどなく流れる涙。

「……………手を貸して」

「……………え？」

差し出されたのは手のひら一つ。

そこには無感情にねだるような感情はなく、救いを差し伸べようとする慈悲と自尊。

「あんと同じ苦しみを抱えている奴を知っている。私が直接答えを言ってもいいけれど結局あんたはさつきみたいになるかもしれないし、そんな湿っぽいのをここで共有する気にはならない」

「……………」

「行くよ、守矢神社まで」

はたてに連れられ、石畳の先に行く。

道中、互いに言葉一つ発しなかった。

守矢神社、聞き覚えはある。あの時は大した紹介もなかったが、博麗神社にいた早苗の家、というか早苗が巫女を務めている神社というのは聞いている。

あの時は通信機の人形や、ここまでの自分の話で終始していて。その時は特に早苗は何か思っている様子はなかった。

もし自分と同じ苦しみを抱えているのなら、自分と同じ境遇を前にしてあのようになれるのか。底抜けに明るいだけなのか。

真実とは一体。

「何用ですか!? ……ここは神聖なる領域、穢れた……………あ、はたてさんこんにちわ」

「ちっす」

微細な風が吹き抜けたかと思うと、それに乗って舞うかのように早苗が現れる。

「前も似たこと言ってたけどもしかして毎回口上言ってんの？ 穢れたって、妖怪の山であんた」

「だいたいそうじゃありません？ 緊迫感とか出ていいじゃないですか」

「あ、そ。ところでさ、早苗に話を聞いてもらいたい奴がいるんだけど」

「? あ、ドツピオさん!」

はたての少し後ろに居たからか、今ドツピオの存在に気付いた早苗。

「昨日は霊夢さんの所にいるかと思えば今日はこちらまで……やはり最初の紹介が心に響いたということでしょうか! やはり博麗よりやはり守矢ですね……今回の事でよくわかりましたよ。ドツピオさん感謝します」

「いや、それは関係ないんだけど」

相も変わらず勢いだけは良い少女だ。

ドツピオがどう切り出そうか考えたとき、はた、と早苗が止まりドツピオを見つめる。

「……なんか、雰囲気違いますね。こう、言いづらいですけど……表面もそうだけど内面とかもなんだか……」

「ああ、それは」

先ほどまで泣いていたから。まだ自身の鼻もぐずぐずと濡れていて、涙を流したばかりの顔だと一目で見えてわかるだろう。

それを説明しようとした矢先、

「……ッ!!」

突然、何かに気付いたかのように驚いた表情をする。あまりの驚きなのか、漏れ出る声すらも出せぬかのように。

同時に頬を染め、ありえないといった表情でドツピオの顔を見る。

「ま、まさか一晩で、霊夢さんと、その、いわゆる階段を上ったとか……!」

「は??」

「は??」

頬を染め顔を背け、それでも目線だけは確認のようにちらちらとよこす。

突拍子もないその言動に、ドツピオもはたても呆れを隠せない。

「だとしたらあり得ます、男の人がというか男の子が男になった時の

変わりようというか、夏休みが終わったらなんというか垢抜けてない同級生の男女が十二をどうやったとかで急にさっぱり全てを理解したかのようなのになつてるとかそういう………」

「おーい」

「でもそんなことを霊夢さんが乗るとは思えないけどもしかしたら家族のいない一人身として人肌に恋しかつたからとかボーイミーツガール的な一つ屋根の下の雰囲気飲み込まれてしまったとか……ああでも神に仕える身としてそーいうのはよくないはずなのにだがしかし逆にそれがいい的なそーいうノリで……」

「早苗ー、聞いてる？ 別にそういうのじゃ」

一人でトランス状態に陥ってしまい、終いには顔面全体を手で隠し何やらぶつぶつと唱えている。

最初にあつた時にも自分の事だけ話すやや勝手な所があつたが、あの時はこれほどまでとは思っていなかった。

「……はたて。早苗に会うのは二度目なんだけど。一度目もここまでとは言わなかつたけど、とてもさつき聞いたようには思えないんだけど」

「今の顔だつてももしかしてすでに自分には相手をしてくれる人がいるっていうのはたてさんに無理やり手籠まれたとか、そんなことはないでしょうけどどうせやつぱり所詮は天狗で結局女なんですし……アクティブ引きこもりですし若い男が見つかったからって……」
「……今割と自分で言ったことを疑うような感覚に私も陥ってる。ていうか私に対してものすごい失礼なこと言わなかつたか今」

「ドッピオさんッ!!」

急に顔を起こし、強い決意をしたような表情をこちらに向ける。といても目は完全にパニックに陥っている。おそらく自分で今まで口走っていたこともこれからいうことも本当に理解していないんだろう。

そんな推測が一目でわかる。そんな決意。

「そ、その、二番煎じになりますですけど、あ、わ、私と、……婚前、こ、こつこつ……」

噛みながらも、ドツピオの手を取り自分の胸に寄せながら、距離を詰めて話す。

もしこれが平常時で、何度も通じ合っていたのなら立派な告白だったろう。

「早苗」

そんな早苗の背面に回り込んでいたはたては彼女を引きはがし、くると自分の方へ体を向けさせる。

「な、なんですか!?! 私は霊夢さんにも追いつくため追い越すためにもドツピオさんに手伝ってもらいたくって、それに女同士で、その、その、そう言った行為は」

「少し眠れ」

優しく、とてもいい表情で。全てを知ってそれで論す姉の様な。

それでいて小さく引いた右腕は、圧倒的な速度を持って正確に早苗の腹部を突く。

「ふぐっ」

小さく呻いた後は、はたてにしなだれかかりそのまま動かなくなつた。

「……何これ」

「この手に限る」

無重力な巫女に負けず劣らずの風祝。彼女が先陣を切り先までの空気を吹き飛ばした。

その彼女が自分と近い存在、のはずなのだが。

「……とても、そうとは思えなくなっただけど……」

「お騒がせしました」

「まったくだよ」

守矢神社本殿の前で、早苗は深々と頭を下げ、謝罪する。

その姿を見せられては、さすがにドツピオも何も言えない。

「あんたは普段からまじめ口調のいい子ちゃんみたいなのにすぐ暴走するんだから」

「返す言葉もありません……」

「……はは、は」

気落ちした早苗に対して気の利いた言葉も出てこない。

もし自身が普段と変わらない状況であるなら慰めの言葉も浮かんだのであろうが。

「……して、今日はどういったご用件で？ あ、アリスさんは今朝帰られましたよ」

「いや、アリスに用はないけど」

「ん、何であるの人影遣いが出るの？」

「昨日は霊夢さんの所にアリスさんを訪ねてきましたので。神社あるところにアリスさんがいる、と言うわけではないことを」

「アリスには用はないって言ってるだろ」

「あ、はい」

それに早苗は特に気づかない。気づく素振りもないその姿をみると、今の自分の気持ちを共有させようとする心が引ける。

「私がこいつをここに連れてきたのは、早苗の話聞かせてやりたいからだよ」

その空気を切ったのははたてだった。

けしてからかう空気はなく、実直に彼の為に動いていた。

「私の話……ですか？ ええ、良いですけど、何を聞きたいんです？ 神奈子様の伝説？」

「早苗がここに来た時の話と、それからどれくらい経っているか。その前後を、ドツピオに聞かせてほしい」

はたてが強く、はつきりとした口調で言い切る。

その言葉を聞くと、早苗は明らかに体を強張らせ、目を丸くしてこちらを見やる。

「……………どういう、ことですか?」

「僕の一番新しい記憶では、僕が現実には……外の世界に居た頃は2001年だったはずだ。それは絶対に間違いない」

はたてに続き、ドツピオを同じく語気を強めて話す。その言葉には、現実を強く認識し乗り越えようとする意志がある。

「早苗、君は元は外の世界の人間なんだろう? 誰かから、それこそはたてからしっかり聞いたわけじゃあないが、流れからそれは推測できる。」

ならば知っているんだろう。『今』が何年なのか。どれほどの時間が経っているのか、その答えを!」

だんだんと語調が強くなる。息を吐ききってもまだ出るかのような感覚。

言い切ったころには浅く、肩で息をしているその状態。

事実を認めるのは辛くとも、それは確かにしなくてはならないという気持ちだが、彼の心拍数を速めている。

「……………そんなこと、あるわけじゃないですか」

早苗は、そんな彼に目を細め異物を見る様な視線を向ける。

小さく漏れ出たその返答は、明らかに彼を異常と思った答えだった。

「……………何だった?」

「来たのはつい最近って言っていたのに、そんな前の事……時間が歪みでもない限り、そんなことはあり得ません」

そこまで言うとき早苗は踵を返し、本殿の中へ向かう。

「ちよつと待て、どこに行くんだ?! どういう意味だ、今のは!!」

何も言わずに去ろうとする早苗に喰ってかかる。

返答次第では手が出してしまう、それほどの勢いで。

「……………? ありましたよね、分からないはずがない。ここだけでなく、外でも同じことがあったはずです。それで忘れてるだけじゃない

です？

……そういつても納得しないでしょう、ドツピオさん。だから、証しを見せてあげます。……しばしお待ちを。本当に心当たりがないならはたてさんにも聞いてください」

そんな彼を少し振り返り、目線だけやると奥へと向かっていく。

残された二人は、向けるべき対象がいなくなってしまうことで、矛先を変えるだけ。

「どういうことだ……何が何やらわからない。何があったか、だと？

それはいちばん僕が聞きたいっていうのに……！」

「……やっぱり、怒るよなあ。けれど、説明だけなら誰でもできるが……」

「はたて、お前もだぞ！ 何かあるっていうならそれをまず言うべきじゃあなかったのか!？」

「いや、それはそれでしょ！ とうか、まさかそれを知らないと思っ
てなかったし……！」 第127季、今年の二月程度前の話だ、あんた
本当に知らないの!？」

本殿の前で置いて行かれた二人は、大きな声で互いに責めあう。

ドツピオは知らないこと増加とそれを知らされていたなかつた
ことに対する怒り、はたては知っていて当然の話を知らないことによ
る驚き。

その二つの感情が、発せられる音量が二人を熱する。

「知らないね、何があったかわかりやあしないッ！ 僕が目覚めたそ
の時から、それほど経っているだなんて思ってもいなかった！ 想像
もしなかった!!」

「まさかその間中ずっと眠っていたんじゃないの!? あんだけ大規模
な事件、知らないはずがない！ 結果的には大したことなかつたけれ
ども、どう考えたってそれはこの中だけの話！

隔絶されているとはいえ時の流れまでは変わってはいない！ 外
の技術が時空間まで播るがそのような空想を実現させているとは到底
思えない！ だったら知ってるはずでしょ!？」

「だから、それが何かかって聞いているんだッ!!」

「おーいー、あなた達何話してるの、人の寝床の前で」

熱くなった二人の前に、大きくあくびをしながら小さな少女が現れる。

ふわわ、と間延びした声を上げながら、けだるげな眼で二人を見据える。

「……あ」

「客人がうるさいと思ったら、早苗は早苗でどんより自室に戻ってるし……その理由はお前たちの痴話ゲンカかい？ いけないなあ、いけないなあ」

「……何だ、ガキが仲裁に入ることは何もねえぞ」

「子供じゃないって、この方は洩矢諏訪子。ここの主神の片割れだよ」
「うす」

その紹介を受けた少女―洩矢諏訪子―は左手を軽く挙げ、頭を同時に小さく下げる。

「神奈子は大天狗と昼間から酒盛りしてるし、早苗は人形遣いと遊んでるしで暇々だったから寝てたらさー、あんたらがちやがちやこんなところで……クツワムシか」

「こんなのが、神?」

「幻想郷じゃあ大体こんなものだよ、そこは突っ込まないであげて。洩矢様は」

「いいよ別に、立てなくても。……ところで、何話していたんだい?」

二度聞きになりそうだけど、私が納得できない話だったなら静かにさせてもらうよ」

口調は柔らかいし、本当にそれをやるかどうかといえば、やれないだろう。見た目や発せられる声色は完全に幼女レベルのそれである。

だがその自信に満ちた堂々とした物言いは確かにただの子供のそれではない……が、にわかにはやはり信じられない。

そんな空気を感じ取ったのか、あわてて取り繕うようにはたては弁舌をふるう。

「いやいや、大したことじゃないんですよ、本当に。私たちが熱くなりすぎただけで。」

こいつ、ドツピオって言うんですけどね。外人だけどよくわからないところがあつて。それで早苗に聞いてみればわかるかなーって。ほら、私ら幻想郷出身の者は外の世界の年号とかあまりに興味湧かないんでほとんど知らない、けれど彼がそれと今を照らし合わせたくつて。だからー、早苗さんをねー」

「……ああ、なるほど。それで。……ふーん」

はたての口が動いたたび、諏訪子の表情が曇り、目の色が暗くなる。それは明らかに不快の印。

その顔がふ、とドツピオの方に向けられ、すぐさまはたての方に変わる。

ひゅ、と息を飲む声は確かにドツピオの耳に聞こえた。

「……怒られて、マス？」

「怒つて、ます。以前言つたよね、早苗そのこと思ひ出すの辛いから触れないで欲しいって。神奈子はともかく、早苗にそんな思ひをさせる奴を不快に思うって。」

わざわざ思ひ出したくない物を掘り出そうとする、気の触れた盗掘師の様な事、してほしくないって。言つたよね、天狗」

「ええ、ええ。言われましたとも。でもですね……」

「まだその口を回すのかい？ 不敬とまで取つてあげようかね。それとも鼻から下を取つてあげようか」

冷めた目で見つめられているのははたてだが、それでもその刺すような空気に巻かれるのがドツピオにも感じる。

確かに小さな成りをしていても、なるほど神と言われれば納得できるような場数を踏んでいるだろう。

だからといって自分の前に転がる真実を見逃すわけにいくだろうか。

そう抗議しようとして一歩を踏み出そうとするドツピオの前を、はたての手が遮る。

「不敬と取られても結構です。早苗の過去を尋ねるのも、それを嫌う者がいることも承知の上。承知の上で外人人であり出自に悩む彼を連れてきたのはこの姫海棠はたて。」

もちろん他の方法もあるでしょうが、一番彼の望む答えを待つ道はこの道のみ。早苗はまだこのことを理解せずとも道を指そうとしてくれています。それを邪魔するのであれば洩矢神であろうと」
そこから先は言わない。まだそこまでならポーズで済むから。

そして、そのポーズは一代の賭けとも思うほどに。
思わずドツピオはたての表情を見やる。とても、こんなことをする者ではないはずだと思っていたから。

諏訪子を見据えるはたての顔は、どこまでも真剣で、どこまでも強情で、そして、ドツピオにだけは優しさを感じる顔だった。

「……………」

「……………」

数秒のにらみ合い。

二人ともその点では固かった。

共に譲る気の無い一点。

「諏訪子様、起きられていたのですか」

その合間に割り入る早苗。胸に、少し擦り切れ、色褪せた本を抱いていた。

「早苗。今聞いたが、いいのかい？ 私はいつだって反対だ。自分で辛いと思うのならやめればいい。前へ進むことではなく、後ろに振り返ることならば。」

もし嫌ならば、私が早苗の代わりに断ろう。早苗は嫌だと言えないタイプだ、同情とかそういう気持ちであるのなら——」

「大丈夫です」

早苗は無表情に答える。その姿は強がり、にしか見えない。

「早苗……………」

「待たせてしまつてすみません。…………お話ししましょうか。さっきの事はもう聞きました？」

「あー、いや、まだだ。…………それに少し時間をもらつていいかい」
「わかりました」

二人の間に飛んでいた火花は早苗が入ったことで鎮まる。

はたては改めてドツピオに振り向き、自分より頭一つ下にある彼の

顔に高さを合わせた。

「というわけで、まずは話しておこう。既に起きた事実、幻想郷だけでなく、この宇宙を巻き込んだという事変を。」

真相は一部の大妖しかわかっていない。私もなぜ起きたか、その結果幻想郷の外はどうなっているか。それを全てはわかっていない。だから、事実だけを話そう」

第127季、3月21日。

時間は、始まりはいつかはわからない。大体、昼過ぎだったはずだ。それが始まるまでは別段何も無い時間だった。普通に雲は流れて、花も蝶も風に揺られて。何も変わらない平凡な一日になるはずだった。

だけど、「何か」をきっかけに狂い始めた。……ん、ああ。「何か」はわからない。もちろん私は後にこの「何か」について調べまわったよ。だけど、何も掴めなかった。文とか、他の天狗もね。

私の気づきは、少し風が強くなったかな、と感じたときだった。自室で次の花果子念報の記事を執筆しているとき、窓を叩く風の音が強くなったかな？ そう感じたんだよ。

でも、最初は何も思わなかったけど、だんだん違和感を感じてきた。1分と経たず、その音がおかしいことに気付いたの。

風が強くなり、窓を叩いて音を出すならその音と振動はだんだんと大きく強くなっていくはず。けれど、音と振動は強くならず、叩く間隔だけが早くなっていった。

それはおかしいと思って、急いで外に出ようとしたさ。その時にあまりに急いで、書きかけの記事にインクをぶちまけてしまった。

しまった、と思う前に起きた事実にとつとしたよ。そのこぼしたインクは「既に乾いていた」。

……何を言っているのかわからないでしょう？ 私もその時は何が起きたかわからなかった。久しぶりに、何百年振りに理解が追いつ

かない瞬間を目にしたよ。

とにかく家から出て、山の全体を確認しようとした。そのために飛行しようと思っただけで、全く飛ぶことができなかった。

恐ろしく風が強いのだ。

他の人たちはどう飛んでるかは知らないけどさ、私たち天狗は元は鳥類。風を利用した飛行を主としている。

だから強風の時はだいたい飛びづらい。……さつきも外の風が強かったから当然だろう、と思うでしょ？

でも周りの木はそよ風に揺れる程度。全然、風の強さを受けていない。ただ、ゆらゆらと揺れているだけ。

それでも、その揺れはすごい小刻み。まるで高熱でぶるぶる震える子どもみたいに、ゆらゆらじゃないね、ぶるぶると、ぐらぐらと。

頭が痛くなりそうになりながらも、大急ぎで空を飛んださ。ごうごうと吹き付ける風を何とか御しながら。

途中で文とも出会った。状態は全く同じで、大天狗様たち……ああ、上司ね。も同じ様子みたいで。

すわどうしたもんか、考えようとした矢先にまたおかしな事実気付く。

さつき昼過ぎだった、て言ったでしょ？ で、この頭がどうにかなりそうな出来事、どれくらいかかっているとと思う？

体感で言いたいけれど、それは私の体感だから言わないでおく。お天道様がどこにいるかで事実を伝えよう。

さつきまで頭の上にあった太陽はすでに山の中に入ろうとしてた。私たちが見た時には半分くらいしか見えていなかった。

そしてその太陽は、私たちの目の前ですると沈んでいき、辺りはあつという間に暗くなった。

もう夜になったのさ。数分と経たずにね。

……少し話は変わるが、以前にも夜を止めて月を隠すという異変があった。……ん、違うな。月を隠されたから夜を止めてく、だったかな？

まあそれはいいや。夜を止めて、っていうのが重要。時間を停滞さ

せることはできないことはない。その異変の最後は停滞された夜が解放されて、圧縮された時が一気に進み、朝になった。

パンパンに空気を詰めた袋の口を押えて、力いっぱい押ししてから口を放した時のように、一気に時間が過ぎていった。それがその異変の最後。

だから、今回もそれをやった吸血鬼の仕業かな、と思ったんだよ。そう思ったその時には、反対側からまたお天道様が昇ってきた。

わかる？ その時の背筋の凍るような思いが。私は直感的に思ったよ。『これは幻想郷の中だけじゃない』って。

だって、いたずらに時間を進めてどうしたい？ それも、皆が困るようにするなんて。

確かに似たような異変はもう一つ、春を集めたが故にいつまでも冬だった、なんて異変もあった。

その時も、先の永夜異変、あ、さっきの異変ね。冬がく、っていうのは春雪異変。とかは、どこか当然とも思えて。『幻想郷だから』というおちやらけた様な感覚。

だけど、この時はそうは思わなかった。幻想郷も含めたこの世界全てがこの事変に巻き込まれていると。

なんでかわからないけどとにかくそう思ったし、隣にいた文も顔を青ざめながらそう思ったみたい。

この時、すでに太陽は視認できるほどの速さで動いていた。間もなく正午になるような高さになった時、突然、全てが暗闇一色に染まった。

また何か、と困惑したよ。時間がどんどん早くなっていく次は、光でも失われるのかと。

世界が突然終わったのかと。

全然追いつかない頭の中で、そうぼんやり思った時、暗闇が晴れたと思ったら、いつもの昼間に戻っていた。

風が無く、嘘みたいに普通に飛べる。木々のざわめきが普通に聞こえる。パツと見、揺れを感じないほど小さく小さくゆっくり揺れている。

しばらく私は眼をぱちぱちさせてたよ。いつの間にかくつついてる文を引つpegがそうともせず。

それでも、何も起きない、何も変わらない。さつきまでの出来事が嘘みたいのように。

夢じやないか、と思つて文の顔をひつぱたいてみたけど、乾いた音と共に手のひらに残る痛みは、何か起きたけど、元通りになりましたよーって言ってる。

事変自体は、本当にその一瞬だけで終わってしまったんだ。

「……もちろん幻想郷の中にはそれくらいができる芸当の奴が何人かいる。でもそれらは一樣に知らないわからないの一点。

全てを知つてそうな八雲紫もこの件に関しては本気で口を開けようとしな。……もともと奴はそういうの喋らないし、のらりくらりとかわすけど。

嘘の付けない半獣の賢者は、『八雲もこの件は調査中、だそうだ』と。……幻想郷の異変じゃない、外の世界の異変なの。ここは、ただ巻き込まれただけ」

そこまで話すと、ふう、とはたては一息つく。

すでにそれを体験した二人はともかく、とてもではないが話に追いつくことができているドツピオ。

ぽかんと口を半開きにして、ただそれを聞くだけだった。

「……」

「嘘だろ、と言いたげな顔だけど。それは全てが事実。この幻想郷の外で『何か』が世界、宇宙全ての時間を加速させた。

それがどうして終わったかはわからないけど……起こす奴がいれば止めることができてもおかしくない奴が何人かいる。そいつらが何とかしてくれたのかもしれない。

該当者に話を聞きに行つても、みんな知らない、だったけどね。明らかに箝口令にしか見えなかったけど」

自分の耳をかりかりと搔き、最後にそれを伝える。

それを聞き終ると、次は早苗が前に出て、ドツピオに見えるように

本を見せた。

その本には『日記　　～2005年から2008年～』と書かれていた。

「今の話は今年の3月、今は5月なので少し前の話。私たち守矢がこの地に渡ったのは第122季。2007年の話です。……あなたの言う2001年は、6年前に過ぎていきます。現在からは、11年」

「……………!!」

まるで、直接剣で身体を貫かれたような衝撃が走る。

10年以上前、現在は10年の月日が流れている。先の絶望的な事変はその間。

一瞬で頭に世界の全てを叩き込まれたような感覚が眩暈となって襲いかかる。

「……………嘘だ」

「嘘ではありません。もしこれらが嘘だったら私たちは何も知らぬ人を精神的に追い詰めるよんだ悪人ですし、あなたが嘘と決めつけるのならそれは少なくとも私たちを否定することになります。……嘘では、ありません」

感情を押し殺した、低く震えた声で早苗は話す。

中ほどより後ろに定めて開き、一枚一枚探すようにページをめくる。

あつた、と小声でつぶやいたそのページの日付は2007年の9月を指している。

「ここからです。この幻想郷に移る過程を一番詳しく書き込んでいた時が。……同時に、今のあなたに関係はないでしょうが、その時の苦悩を」

彼女の言葉通り、丸みを帯びたかわいらしい字体には似つかわしくない、八坂神奈子の提案と自分の今との執着と悩みが混同して書き込まれていた。

信仰が薄れ消えゆく神の唯一の救いの手段。幼い早苗のあまりに厳しすぎる二者択一。

今までの生活を取れば人間として早苗は生きていくだろう。信仰

の対象を失って。心の拠り所が自分の所から立ち去って。

今までの生活を捨てれば神として早苗は神奈子と共にあるだろう。生みの親を失って。今までの思い出の全ての形に触れることを全て捨てて。

その悩みを書き連ねた文章は1日1日経つごとに、ある日は短く叩きつけるように。ある日は全てを吐き出したような長い言葉で。

……そこにあるのは嘘ではなく、確かな現実のものとして。

「あなたに同情してもらいたくて見せているわけではない、ということとは理解していますよね。……これ、は」

その日記を持つ手が震え、書かれている文字が水滴で軽くにじむ。ページにはいくつも似たようなにじみがあった。

「ここに書かれていることは、確かな記憶。たし、ぐず、確かな記録です。……遡ります、その前」

涙が出そうなのをこらえて、それでも漏れ出す。

声が今は大きく上げていたい、その感情を押し殺して早苗はドツピオに説明の言葉を続ける。

「2006年、サッカーのワールドカップがイタリアで開催されました。クラスのみんなで、それを、話していました。」

2005年、はやぶさという宇宙探査機が惑星イトカワに着陸して、そのの探索を行いました。それが戻ってくるのが楽しみでした。……それらがどうなったかを知ることが、もう、できません」

「……」

「どちらも、大きく取り上げられた話題です。……知らない、のですね」

涙にぬれながらも、ドツピオが本当にそれらを知らないという事実を憐れむような目を向ける。

目を鼻を赤らめながらも、確かに彼を見据えた。

「まだ、話しますか？ まだ必要、ですか？ いいですよ、何度も、つ、……」

「……早苗、もういいだろう。お前も、知らないことを知りえた、もういいだろう!!」

自棄になつて投げやりに話す早苗を、諏訪子がかばう様に止める。これ以上彼女が自らの傷を広げることには耐えられなくなつたのだろう。理解を求めるその視線。

そんな諏訪子に、早苗の膝は崩れ、そのまま諏訪子の背中に顔をうずめる。

「ううう、つ、うええ……すわこ、さまあ……寂しいよお……みんなに、みんなあ……」

押さえていた涙が堰を切つたようにあふれ、消え入りそうな声と共に流れ出る。

それに諏訪子は振り返り、改めて早苗の頭を胸に、優しく抱き留める。

「直接的な、お前が2001年にいた住人だという証明にはなっていないが、お前の知らぬ過程を経て、今に至る。それを知らないお前は、何の因果かここまで『飛んだ』んだ。それが事実！」

分かつたなら、もう早苗を苦しめる様な事は聞かないでくれ！」

その諏訪子の声には怒りと悲しみが混じっていた。

ドツピオにはそれがなぜかわからない。が、それは神奈子と共に彼女を巻き込んだ原因の一つだから。

「……なんだよ、それ。なんなんだよ……」

全てを知りえず、絶望的な事実のみを与えられたドツピオは、どうすることも、できなかつた。

「そんなこと、勝手なことを、言いやがって、言うだけ言つて泣いて終わりかよ！ そんなに勝手に、お前らはツ！ 僕は、僕は、どうすれば……ツ!!」

「ドツピオ」

やり場のない感情が怒りとなって溢れ出る。その溢れた感情の表現も、あまりの大きさに制御できず、声を詰まらせて震えるのみ。

そんな彼を、はたては優しく抱きしめる。

「出会つて間もないし、あんたは私の事を嫌っているだろう。……でも、もし今の気持ちを落ち着きたいなら、胸を貸してあげる。今だけでも。落ち着いてから何だつて聞いてあげるから」

抱きしめた彼の頭を優しく撫でる。イタズラや打算などのどうでもいい感情はない、その行為は母性の表れともいえるそれだった。

「う、う……」

「誰にだって泣きたいときはある。あんたのそれは今さ。別に恥ずかしいことでもない。私で良ければ、ぶつけてよ」

「……う、ああ……うあああああああああ!!!」

大きな声を上げ、あらんかぎりの力で。

早苗の泣き声を上から塗りつぶすかのようにな。

守矢神社に、二つの泣き声が混ざって鳴り響いた。

長い長い数分が経ち、改めて4人は顔を合わせる。

泣き腫らした二人の顔はどこも赤く染まり、昂った感情の大きさを物語る。

もつとも、それ以外に『人の前で泣いたこと』が大きいことは事実だが。

「……すみませんね、みなさん。あんなに、子供のように泣いてしまつて……人前に立つ身なのに、これじゃあいけませんよね」

「……いや、早苗は悪くないよ、しょうがないよ。一番悪いのはなんだからんだ理由をつけて自己保身に走ろうとするはたてだ、そういうことにしよう」

「マジっすか」

「マジです」

同性同士だからか、受け止める側だったからか。すぐにいつも通りに話し始めているはたてと諏訪子、そしてそれは早苗の落ちた気を上げようとも見える。

だが、その空気もドツピオには少々心苦しい。

状況がどうであれ、人前で、女性の胸を借りて泣き喚いたことによる恥が彼の心で暴れ出す。

「……………」

できることなら、今すぐにも逃げ出したい。

先に聞いた話を改めて自分の中で反芻して納得しようとする時間ももちろん欲しい。

しかし一番大きいのはその話の前まで敵対していた、少なくとも自分はその思っていたはたての胸の中で泣いてしまったこと。

まだ一人で泣いていた方が、自分の精神的にも楽だったんじゃないか。

「いやまあ、しかしはたても隅に置けないね！ まさかこんな子どもを手籠めにするたあね。利己的な輩が多いという天狗なのに、どういう風の吹き回しなのやら」

「ちよ、洩矢様、何も目の前でそういうの言わなくてもいいでしょうよ、ねえ」

「……ふあ、そういうえばそこは気になりますね」

そんな彼に追い討ちをかけるように諏訪子は話を持ち上げる。

早苗もそれを聞いて少し明るい声を出す。まだくぐもった声だが、諏訪子の狙いは成功している。

「……やめてくれよ……」

もつとも、それがドツピオにとって良いことではないことも確か。

今一番触れられたくない点に早々に食らいつく彼女らに恨みがましい感情しか湧いてこない。

はたてがどう思っているかは知らないが、どう思っていようが、その点にドツピオは触れられたくはない。

「そつちが先に聞かれたくないことを聞いたんだからそれくらいいいだろう？ 恥は掻き捨て、世は情け」

「今この状態のどこに情けがあるのさ……」

「十分有情だよ、ドツピオとやら。女を泣かせた男なんだってことを覚えておきな？ それに、君は気にならないのかい？」

そう言われてしまえば、いいえと答えたら嘘になる。ドツピオ自身も、急な彼女の心変わりが気にならないわけではない。

だが、それを何も直後に本人の前で聞かなくてもいいだろうに、この神様は笑顔で訪ねてくる。

その姿は、昼下がりにゴシツプを見て楽しむ姿。

「いつもはくだるかくだらしないかの瀬戸際新聞くらいなのに、当の本人が記事に乗っちゃいそうなことしちゃってさー」

「いやまあ、洩矢様。そのー、ねえ。聞きます？」

対して、割合まんざらでもない様子のはたての姿。

「なんていうか、私と似てたんですよね、コイツ。八方塞がりなところに救いの手を求めている姿。……あの時はこんなに女々しくしていたつもりはなかったんですけど、きつとあいつからしてみたらこんな顔をしていたのか、なー、なんて」

少々の恥ずかしさを顔にだし、目線を外して頬を掻く仕草。小さな

仕草は彼女の癖なのかもしれない。

はたての回答に対して合点のいった顔をして頷く早苗と諏訪子。そして二人は、声に出さずとも先を促している。

「あー、それに、あいつは口が悪くても何だかんだでこっちの面倒を見たりしてるし。憧憬みたいなもの、ちよつと持ってたのかも。もちろんこういう男の子好みだけど……もういいでしょ？」

「えー」

「えー」

話を打ち切ろうとするはたてに対して、二人は口をとがらせる。

「中々のインパクトもあつたので、もつと聞いてみたいですね。私のいない間にどこまで仲睦まじくなったのか」

「おかんか」

「おい、それは絶対に言いふらさないでくれよ」

これ以上三人に喋らせていては何にもならない。

けれど、この茶化しあいは自分の心を抑える要因にもなつた。別の心が浮かび上がってきているが、それはもうどうでもいい。

「せつかくの天狗の恋バナなんだから、もつと聞いておきたいじゃないですかー。幻想郷ってそういうの全然ないんですよ？　ちよつとみんな自分に生き急ぎすぎてるというか」

「別に、そういった話題なら人里とか行けばあるだろうし、山の鼻高天狗とかはいつも発情、年中女募集してるけど？」

「そんな愛の無い男女関係なんていりません!!!」

「おい」

痛くなつてくる頭を押さえながらドツピオはまた声をかける。

これ以上彼女たちの好き勝手を許してしまえば、自分の知らぬところでおもちやにされてしまうに違いないだろう。

「そういうのはもういいからさ……気になることが」

「よくありませんよ!!　ドツピオさんさつき気になるって言ったじゃないですか!!」

「言つてない!　……じゃなくつて、さつきの話で気になる点があるから、それを答えてくれないか」

むつとした表情で話す早苗は、先の悲しみが大分薄れていることを窺える。

悲しいことがあったとしても昔の話。そこにいつまでも捕らわれていてはいけない、と考えていることがわかる。

だが、ドツピオはそうではない。

「今から11年前って言うてたよね、2001年が。……いや、そこじゃないな。今が127季、早苗たちは122季にここに来た、と」「そーですよ?」

「……早苗は、何歳だ? あの日記の内容から垣間見るに学生だったろうけど、ここに来てから5年でその成りだとしたら随分小さいころに来たことになる。……その割には漢字も使っていたし」

そこまで自分で話し、自分で口走った内容に違和感を感じる。

何故イタリアでしか過ごしていなかった自分が日本語を読める?

思い返してみれば、命蓮寺でも人里でも違和感なく読み取れていた。

今口に出している言語も、気がついてみれば日本語だ。

「……」

そこで押し黙った彼を、鋭く見つめる諏訪子。

それに気づいたのは、この中にはいなかった。

「……とにかく、5年の歳月にしては早苗は成長しなすぎている、と感じるんだ。それはどうなってる? まさかそれで成長期は過ぎているだなんて言わないよな?」

「い、言いますねドツピオさん……!」

先ほどまでとは違う、それはドツピオが表に出していた恥の感情。

その感情が早苗の顔を赤くし、胸を隠すように腕を組む。……別に

そこは指摘をしていないのだが。

「あー、それは幻想郷の癖というか。長く楽しむコツというか」

「そ。永く永く楽しむという、外でできないそれがここでは行える」

問の回答ははたてと諏訪子から出た。

「どういうことだい、それは」

「厳密に言うとう違うが、分かりやすく言ってしまうばここでは歳は取

りたいときに取るのさ。妖怪は当然ながら、人間も少なからずね」

諏訪子が答えると、はたての腰をポンとたたく。

はたてはわかっていたかのように手帳から一枚の写真を取り出す。

そこには蝙蝠のような羽が生えた少女と髪型以外は今とほとんど変わらない巫女の姿。赤く輝く満月を背景に、二人が激しく弾幕ごっこをしている写真。

「これ、紅霧異変の頃。今から9年くらい前かな？」

「……本当に？」

さすがに10年近くも経っていると言われて今と変わらぬ姿を取っているとすれば、理解の前に納得がいかない。

「誰だって、楽しいことはずっと楽しみたいじゃない？ 妖怪がそれを願い、人間もそれを享受すれば肉体の衰えは僅かに歪む。その結果、肉体も精神もそれ相応に維持されるのさ。」

もちろん、だからといって成長しないわけじゃない。遊んでばかりの子供の時代はいつか終わる、その終焉をどちらかが理解すれば、人間は自然と周りに追いつくようになる」

諏訪子が指を立てて解説するが、ドツピオの表情は変わらず理解に苦しんでいることを窺える。

「まだ遊びたいという『想い』が、外の世界で忘れられた『想い』がここで実っているというわけ。私たちが外に居た頃から既に友と日が暮れるまで遊んでいられるという時代ではなかった。」

子供でも、大人でも、風習や因習、慣習といった要因でその想いは踏みにじられ忘れられていった。幻想郷は、そんな『想い』も受け入れられる」

そこまで話し、諏訪子はドツピオの胸をトン、と叩く。

その言葉と行為で、何か忘れていた物を思い出したような、そんな風が吹きとおったような感覚が身体を走る。

「誰かに教わったわけでもなく、誰かから教えられたわけでもなく、この皆はおのずとそれを理解している。もはや、それが常識。」

幻想の壁とは常識の壁。全てが逆になるわけではないけれど、『あるはずの無い希望』位ならあるかもしれない。……こんなところかな

？」

はたてが諏訪子に続き、話を締めくくる。

もちろんそれに完全に納得したわけではないが、自分が雲に乗って移動する、といった彼女らの言う『あるはずの無い希望』に触れている以上、そういったものだと思え受け止めるしかないこともわかっている。

「……いずれ大きくなるからいいんです」

口をとがらせながら、早苗は呟いていた。

「さて、ドツピオとやら。ここから麓まで降りるには大分時間がかかる。悪いがここは赤色しかない神社と違って色立つことは苦手でね、男を泊めるわけにはいかない。

さっきの話が本当ならば天狗に送らせるのも不安だから私がその役を引き受けてあげよう」

「へっ？ いやいやいや、洩矢様にそのようなこと。それに、んなことするわけがないでしょうよ、この私が」

諏訪子が急にドツピオの手を引き、下山を促そうとする。

確かに山の麓で棍と会ったのが正午ごろ、そこからそれなりに時間は経っている。もしそのまま下山に時間を使えば日は落ちてしまうだろう。

……あの時棍にはああ言ったものの、確かに妖怪の腹の中と変わらないこの中、夜闇を動くには危険かもしれない。

先の発言があつた以上、はたても何をするか、分からなくなってくる。

「天狗って若い男の子を攫って自分のものにするって聞きましたよ」

早苗がにこやかに、ドツピオに説明するかにように話す。多分に意を含んだその言葉。

「それに、はたてにはウチの早苗を自分の我欲の為に利用した罰を与える必要があるからね。狂王の試練場クリアするまで返さないよ」

「え、勘弁してくださいよそういうの。それなんですその珍妙な名前の物は」

「諏訪子様それ好きですよね……何周してるかわからないくらいやりこんでますし。……まあ、ドツピオさん。言うとおりさすがに夜に一人で行くのは危険ですよ。……ちよつとお泊めになるのは、その」にぎわう外野をよそに、確かに早苗は彼の身を案じてはいるらしい。そして、霊夢と違い『そういつたこと』に抵抗があるらしい。

「さあさ、時間は待ってくれないよ。行くなら急いだ方がいい。早苗ははたてを確保しておいてくれ。逃がさん、お前だけは」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ、まだ」

そう言うのと諏訪子は強引にドツピオの手を引き神社を出ようとする。

傍から見れば幼子の我儘に手を取られ、強引に連れまわされているようにも見える。が、ドツピオとて勝手に決められては困る。

「君の本当に知りたいことはここでは言えない」

抗議の声を上げようとしたとき、それを見越したかのように、小さな声で諏訪子が呟く。

そこから感じた印象は先までの得体の知れない神のような存在でもなく、早苗の保護者としての彼女でもない。甘言で人を墮へ突き落とす悪魔の様な。

その先を聞けば、もう戻れなくなってしまふような囁き。まだ、何も始まっていないというのに。

「……………」

その言葉を聞いた時、ドツピオの中で何かざわめく。

自分の中で抗いたい行動なのに、その何かは足を止めずに動かしている。そんな、矛盾。

「洩矢様、そんなに無理にやらないで私に任せれば、っ、がっ」

「諏訪子様の言うとおりに！ ……大丈夫ですよ、諏訪子様は取って喰ったりしないですって。たぶん」

何か鈍い音と共に早苗の大きく送り出す声が辺りに響く。おそろく、それは最初のやり取りとは逆になっているのだろう。

ドツピオは、それに振り向くこともせず諏訪子に手を引かれるままに足を運んで行った。

「……どういふこと？」

諏訪子に手を引かれるがまま、石段を下りて進む。

繋いだ手から伝わる温度が運動からかじわりじわりと温かくなつていくのを感じて。

「言葉通りの意味さ。さっきのはたての話、不完全だったろう？ その空いたスキマは私が知っているということさ」

石段を降り切ったあたりで諏訪子は答える。

「肝心な所はわからない……大妖は知っているかもしれない……奴はそんなことを言っていたはずだ。そしてそれは正しい。外の者が幻想郷をも喰らい尽くす様な力を持っているとするならば、幻想は何のためにある？」

妖怪は人に恐れられる存在でなければならぬ。すごく簡単に言ってしまうえばそれが存在理由。それよりも恐ろしい力を持つ者が外に居るとわかってしまえばこちらの世界の存在理由が危ぶまれる。長らくその存在を知っていながらも、誰も詳しくは知らなかった。『それ』がここまで大きな力を持つと思っていなかった」

手を大きく広げ、仰々しい口調と身振りで演説する。その姿は、先に感じた違和感を強調させる、支配階級の頂点に立つ者の纏う雰囲気。

……それを察知した瞬間、ドツピオは諏訪子に向かって駆け出し距離を詰めていた。

「わかつてるじゃあないか、少年」

と、と諏訪子が後ろに下がるように跳ねると、それと共に先ほどまでドツピオの居た場所に多数の木々が生えてくる。何かしてくる、その予感が働いきいち早く駆けだしていたからこそ、ドツピオはそれを躲すことができた。

もし自分の予感を信じずにおとなしく聞いていたなら木々に囲まれ身動きが取れなくなっていたか貫かれていただろう。

僅かな距離を完全に無くそうと、その離れた距離をさらに詰める。彼女に、息つく暇を与えずに。

そんな彼を嘲るかのように、後ろに下がった諏訪子はそのまま地面に倒れこむ。

「何?！」

諏訪子は地面に潜り込んでいった。まるで、水面にそのまま飛び込んだかのように吸い込まれていった。

想像を超えた出来事に一瞬、隙が生まれてしまう。

「ゾツとしたみたいね」

背後から、右後方左後方の両方から諏訪子の声が聞こえる。

それとほぼ同時に、背後から飛び掛かるように両腕を抱え込まれ、その勢いで地面に叩きつけられる。先ほどの諏訪子とは違い、地面に潜ることはない。そこは固い固い石畳のままだった。

「がふっ！」

身体の前面に衝撃が走り、体内の空気が吐き出される。

冷たい石畳に這うドツピオの眼前に、ずるずると、諏訪子は這い出てくる。沼から現れる蛇のように。

全身を浮上させると、うつぶせになっているドツピオを見下ろしながら、

『宝永四年の赤蛙』

そう呟くと、両腕から押さえて拘束していた二人がドツピオを仰向けにするようにひっくり返す。

二人の諏訪子は、赤い霊体の様にうつすらと色を帯び、実際に存在しないように揺らいでいる。

三人の諏訪子は、くすくす、くすくすと静かな笑みを湛えていた。

「……何をする気だ? 憂さ晴らしのつもりか?」

「そんな! そんな頭の悪いことをしたいわけじゃないよ。もつとも、人によつてはもつと頭の悪いことと言いかもしれないけどね」

そう言うと、本体である諏訪子がドツピオの胸に顔をうずめる。

「んっ……すう、んはあ……!! んんっ、はっ……!」

彼の服の上から、激しく、それを貪りつくすかのように香りを味わい始める。

聞こえる吐息から、熱くなり抑えきれない劣情をありありと感じら

れる。

その姿からは、外側だけ同じで中身は全くの別人であるかのように、見た目は幼い子供にしか見えないが、本質はまるで別であることを嫌でも感じさせた。

「はあ、あ、久しぶりだ、長らく味わっていなかったよ。この雄の香りと、どれだけ落としても拭いきれない、染み着いた血の香り。……興奮する」

顔を上げた彼女は、顔を紅く上気させ、求める様な上ずった声で語りかける。

薄く開いた目、唇から出る舌は上唇をなめずり、

「だが、まだ足りない」

「!? つ、がつ」

変貌にあっけにとられていたドツピオの首にその小さな両の手を伸ばし、へし折るかのように力を入れる。

「ぐ、あつ……!! ぎ、あ……あ!!」

「絞められて、落ちる瞬間が最も気持ちいい。……知らないでしょう？ 少しでもいいから、頭から抜けていく気力と共に最後の抵抗を示してみなさいな」

ぎりぎりと、容赦など全くなく。

その細腕にどれだけの力がこもっているのかと、もし当人でなければ何の感情も抱かず考えてしまうほどに。

今、ドツピオの両腕は変わらず赤い霊体の様な諏訪子に押しさえつけられ全く動かすことができない。

それでも、このまま、こんなところで。

「ぎ、ん、ぐうっ!!」

動かない両腕の代わりに、見えない何かが諏訪子の手首を掴み、そのまま握りつぶすかのように力を加える。

視覚として存在しないにも関わらず、確かにある何かは万力の様な力で細い腕を砕こうとする。

「出したね、『スタンド』を」

そのまま両の腕を潰されることを受け入れるかのように、諏訪子は

特に何もしなかった。ただ何もせず、ドツピオの首を絞め続けた。

「ようやく出してくれたというべきかな。……存在しえない、認知の無い、そんな外の力。幻想郷をも揺るがすことのできる……こんなものじゃないはずだ。さあ、私に見せてみてよ」

「ぐ、そお……っ!! が……っ!!」

「確かに感じるんだよ、でも違う。『この身体なのに人を殺した事があるのは君じゃない』。それは確かなんだ！

さあ!! もっと! もっと!! 私が一番だ、私は見たいんだ、君の力を、味わいたいんだ、君の身体を!! 偽りの身体なんぎ捨てて、私に感じ てちょうだい!」

一声ごとに、諏訪子の力が強まっていく。身体もどんどん前へのめり、自らの体重全てがその両腕に掛るように、その苦しむ顔の全てを収めようとなる。

対して、ドツピオは視界がぼやけ、徐々にスタンドの力も薄れていく。諏訪子の両の腕に刻む腕の痕も、それに合わせて薄くなっていく。

そして、体の力も抜けていき、意識も薄れ、やがて閉じていく。

絶頂に達しようとしていた諏訪子が気が付いた時、そこには地面に手をつけている自分の姿だった。

そしてそれは自分の分身も同じ。押さえつけていた少年の姿はどこにも存在しなかった。

次に気が付いたことは三つ。自分を覆うような影、それにより自分の背後に誰かが立っていること。

もう一つは、その誰かが自分の首根をがちりと掴んでいること。先まで自分がやっていたように。

最後の一つは、ドツピオの首を折らんばかりに握っていた両腕、その腕を砕かんばかりに掴んでいたスタンドによる痕。そして、それに合わせて砕けきった自分の腕。

「……う。がぶふつ、……」

わからないまま、自らの腹部が何かに貫かれる様。

大量の血と臓物が前面に飛び散り、ドツピオが倒れていた地面を汚す。

貫かれた穴から飛び散るには足らず、衝撃で顔まで逆流してきた血が口や鼻から飛び出、垂れる。

そこまでして、分身の視界に入り、ようやく共有している感覚が自分を攻撃してきた正体を知る。

そこにいたのは、逞しい肉体、どこまでも深い闇を堕ち、その行程を見てきた暗い瞳、それでも淵から立ち上がるうと、前に進もうとする覚悟の意志。

「……キングクリムゾン」

今までの様なふらついた足取りではない。明確な意志を持って目的の為に歩く、そのための足。

ディアボロは、そこに立っていた。

「……なん、て……いつか、ら……」

わずかに残る体内の空気が、諏訪子の血でかすれた声から漏れる。そんな明らかな重傷状態でもディアボロは全く警戒を解かずに見つめる。

それは当然。本体である身体が傷ついてもその分身は全く傷ついていないから。ディアボロからすれば、その分身たちからいつ次の攻撃が来てもおかしくはない状態。

だが、諏訪子からすれば『当人が何もしていない状態』で『質量をもった何かで攻撃を行った』という状態。

「このまま殺してもよかったが……おそらく人間とは違いこの程度では死なないだろう。その点においては信用する。それより、聞いておきたいことがあるからな」

掴んでいる諏訪子ごとスタンドを手近に戻し、その左手は首、右手は背中。足で腰を踏みつけて、そのまま地面に押さえつける。

立場は完全に逆転した。

「……確か、に。神殺しには及ばないけど、このままじゃあ抵抗すら

も、ぼほっ、できない、ね……」

「……想像以上に元気そうだな。恐ろしいものだ」

「あは、口だけね。……答えるのも辛い。そういった意味での抵抗はもうしない。だから、あれを戻してもいいかな？　少しは力が戻って、話しやすくはなる」

「……………許可する」

どうも、というのと二つと分身が消え失せる。そして、その力は諏訪子に戻ったのだろう。僅かだが、押さえつけている諏訪子の体が力を増したように感じる。もつとも、傷は戻っておらず確かに抵抗しきる力まではないようだ。

ディアボロは辺りを見回す。周囲は閑散としており人気は感じないが、同時に隠れる所も見当たらず尋問をするには不向きである。

一連の流れをもし最初から見られていたのならば——もちろんそれはディアボロが良しとするわけではないが——まだ諏訪子から仕掛けてきたと言いつきはできるがここだけを見てしまえばどうにも弁解はできない。

「……安心しなよ。ここは妖怪の山と守矢神社との領域の空間地帯だ。本当に通りすがりが無い限りは誰の目にも止まらない。私と一部の天狗以外は空間の存在を知らないし、ここで何があっても咎めない。悪巧みには便利でしょ？」

その考えを察したのか、血に濡れた顔を歪めて諏訪子が話す。

確かにはたても同じことを言っていた。一部の天狗が既に知った顔なのも、近隣に知っていることを知ったことも、それはいい都合である。

「聞きたいことが多すぎる。何から聞けばいいか整理する必要があるが……まず聞こう。お前は私をどこまで知っていた？」

少なくとも命蓮寺の者たちは知っているようには見えなかったし、知っていてそれを隠しているようにも見えなかった。白蓮以外は。

「お前は『スタンド』の事を知っているようだ。だが、どうやら名前だけらしい。……私がそれを持っていることを知っているなら、他には何を知っている？」

「……答える前に聞いておきたいけど、私も君の事で聞いてみたいことがある。それは、いつ、ぎゃああああ!?!」

「答えてもいいなら答えてやるが、自分は相手の事を知らないのに、相手は自分を知っている事が私は嫌いなのでな。仕返しはこれだけだ。お互い仲良くしようじゃあないか」

諏訪子の腹の傷を踏み躪りながら、ディアボロはそれを解答とした。

自分に対しての冷酷な瞳、手段を選ばぬ残忍な心。

「……あつ、……いい、ね、え……責められるのが趣味ってわけではないけど」

「……答えるのか、答えないのか、どちらだ?」

「ぐあああ!?! 答える、はつ、答えるから、足どけてよお!」

再び踏み躪り、そのたび諏訪子の悲鳴が辺りに響く。……確かに、聞かれてしまうのはまずいことではある。

まだ罰を与えなければ気は済まないが、それより用件を済ますことが先ではある。

「うう……、ああ……。どこから、話そうかな……」

「時間稼ぎなどを考えるなよ。解放されるのが遅れて困るのは自分自身なのだからな」

「解放してくれる気なのは助かるけど……いや、そうじゃないね。……ざっくりだけど、はたての話の続きから話そうか」

躪る程、開くごとに口から血が垂れ、辺りを塗らす。

「幻想郷の中で、スタンドを知っている者はほとんどいない。今までにスタンド能力を持ってここにきた者も少なくとも私は知らない。伝聞でもね。」

そんな中、先の事変だ。……知っている者は皆それをスタンドによるものだと考えていた。……だから、そのケースを呼び込んだんだ、ここにね」

「……続ける」

「……続けるって言っても、私が知ってるのは大体それだけ。君がその呼び込まれたケースだって気づいたのは実際に会ってからさ。呼

び込まれたケースがどのような人物かは知らされていない……私は外の世界の極悪人、とだけ聞いていた。

だからあんなちんちくりんが来たときは全く気付かなかったけど、話や素振りを見てそれだと気づいた。……まだ外見しか見てないが、良い男じゃあないか」

「いったいに首を回し、視線を片寄らせてなんとかその顔を見ようとしている。」

倒れた状態では見えていないのだが、分身から共有したその姿と、今僅かに見える逆光で見えないディアボロの表情は彼女に十分の好奇を感じさせている。

「スタンド、については確かに私はよくわかっていない。使用者の精神に依る像、それによる特殊な力。それがベースであり君がどんな能力を持っているかは知らない。……さっき見た感じだと、知り合いと同じような能力みたいだがね。」

過去、私たちがまだ外に居た時代、早苗の生まれる前。それを示唆した老婆が早苗の父にその力と、それを使う何かの集団に誘っていたよ。あまりの不気味さから断っていたけどね」

説明を聞きながら、過去を顧みる。

スタンド能力を開花させる矢。早苗が生まれる前。示唆する老婆。それがどれだけ離れていたかはわからないが、一応符号は合致しなくはない。

「そこまで正直に話してくれることには感謝するぞ。……次の質問だ。私をここに呼び込んだ者は、どこにいる？ ……おそらく、ヤクモユカリ、という人物だが……いや、妖怪か」

今までいくらか話に上がってきた、八雲紫。博麗神社で聞いた時にはアリスより力のある者、程度の認識だったがはたての話ぶりから『有名で、知っていて当然』と思えるほどの者。

また、先の事変について『全て知ってそう』と表現していた。おそらく、その事変に類する、対抗する力を持つ者の一端であるはず。

「それについては、上手い答えを持っていない。奴はどこにも存在しているようで、どこにも存在していない。神出鬼没の妖怪だ。探そう

として会える者でないが、会いたくないときには顔を出す。……そんな奴だ。ただ」

「ただ？」

「この空よりさらに上……冥界の中、白玉楼には奴の友人、西行寺幽々子がいる。同じ程度に喰えない奴だけ……紫に近づくのであればそいつに近づくのが一番、かなあ」

「……………冥界、まであるのか……………」

さすがに様々な出来事が起き、やや感覚が麻痺してきていると思えるほどだが、さすがに死後の世界まであるということには驚かされる。

もつとも、ディアボロにとってそこはたどり着くことすらできない世界だったのだが。

「…………最後の質問にしよう。私の能力は、そのユカリが解除したと考えてよいのか、それとも別の者が解除したのか」

一番知りたいこと。

それを感じ付かれたくないからという心が、この質問を最後まで持ってきた。

自分を縛り続けていた鎮魂歌の力。死ねばまた再発するのか、という疑問もあるが、そもそも死に至ることがないまま時間が過ぎていく。

人間を越えた力だが、それを超える者がいくらかでも存在するこの世界。……現に今足元で転がっているのも神の一柱であるという。その力を解除したものがいるのかどうか。

「…………能力？ 解除？ ……何のこと？」

だが、その質問に対しては諏訪子は知らなそうな素振りを見せる。

今まで素直に答えていた態度と同じく、素直に知らないといったような態度だ。

「隠すことは許可しない」

「いや、ほんとに知らないって！ 何が君を縛っていたのか知らないけど……もし何か、それに境界を設けられそうなものなら奴はそれを弄れるだろうね。紫は境界を操る程度の能力を持つ。」

空と海といった、物理的な境界から現と夢、そう言った概念的境界まで。幻想郷を作り出した本人だ、何ができてもおかしくはない」

「……想像以上、だな……その、ヤクモユカリの事実」

舐めていた、正直に。心のどこかでは、自分の力を用いればどのような事態も予測し回避できる。故の自信があった。

もしその話をそのまま受け入れるのであれば、自分は全くの勝ち目はない。また、今までに聞いた全てのおかしな事柄には納得できる。

言うなれば、鎮魂歌の能力は生と死の境界を操り、あやふやのままにしておいた、といったところか。言葉の壁、とも言われるほどの言語の問題もその力を使えば簡単な設問だ。……サービスのつもりだろうか？

だからといって、それに恐れて足を止めることはないのだが。

「……お前から聞くことは、以上だな。最後に」

「……？」

「私の事は誰にも言うな。私に関する、全ての事を。今以前に知っていたことも、不用意に広めるな……できるな？」

できなければ、今ここで殺す。

その意図は十全に詰めた。つもりだが、元よりこの状態で生きていられる存在だ。自分に、本当に彼女を死に至らしめることができるかはわからない。

そして、本心は消せるのであれば消し去りたいが、その先を考えるのと少々骨が折れる。諏訪子はドツピオと離れ、そして帰ってこない。

天狗は支配下に置いてあり、並の妖怪では天狗には適わないとと權の談。

諏訪子に従う早苗と、まだ見ていないが同格であろう神奈子という神。それら全てをドツピオの状態で敵に回すことはしておきたくない。

「……してもいいよ。だけど、それは約束。脅しているつもりなら今ここで必死の抵抗をしてあげるよ？」

それを読めたか、諏訪子は顔を歪ませて答える。その歪みは、悦楽を含んだ、敵対の意志も感じ取れる。

こう出てくるのが、ディアボロにとっては好機だ。その先を促すように、口を開かず待つ。

「抱いてよ、君を私に感じさせてよ。久しぶりなんだ、私が満足できるような男が来たのは。……ねえ、いいだろう？ それとも、私の見た目じゃ君が満足できない？」

提案した見返りは、予想は付いていた。……本当に要求してくるとは思わなかったが。

確かに今まで男性で力のある者は少なかった。人里であった霖之助も線が細く、この女が喜ぶような人間ではないだろう。

「……悪いが、女に対してそのようなことはしないことにしている。痛い目を見たのでな」

諏訪子に対して、外見だけであれば何の感情も抱かないが、精神や振る舞いはおそらく一流の娼婦に劣ることはないだろう。おそらく、欲求を全て叶え自らに陥らせるくらいはできると見える。

だが、あの忌まわしき出来事が、過去の過ちこそが全ての原因。行きずりのあの女に。あの娘さえ生まれていなければ。

「……子供の心配なんてしなくていいよ？ もう年中安全日だ、気に入ったら作れる」

「そういう問題じゃあない」
「……じゃあさ、せめて顔を見せてよ。誰にも言わない。君を、私の心に刻んでおきたい」

これには、少しの間を置いてからスタンドによる拘束をやめる。そして、今までほとんど動かしていなかった自身の身体で、諏訪子の身体を仰向けにする。

その顔は血にまみれてとても見れた顔じゃないが、それでも、喜びと悦びの表情をしているのがわかる。

「……ああ、理解した。さっきの違和感。何でさっき感じ取れなかったのか。……そっちの身体が本当の身体。だから、どこか見せかけの様な感じだったんだね。」

……自らの為ならばいくらでも他人を使い捨てられる。いくらでも手に血を染めることができる。拭い去れなくなるほどの血の匂い

……ふふふっ」

実際に相手にしなくても、『自分に気を向けていてくれる』だけで舞い上がる女もいる。

最後に見せた諏訪子の笑みも、それに近い物だった。

「……行きなよ。私の事は放っておいてくれていい。むしろその方が互いに助かると思うよ。君が欲するであろうものは私は全て出したし、私は、まあ、満足ということにしておいてあげる、から」

見れば、腹の傷は少しずつ蠢き小さくなってきている。それでも十分すぎる大穴は空いているが、やはり殺すには足りず、殺しきれるか
はわからないといったところか。

彼女を欲求を叶え、籠絡し手持ちにすることができれば、まさに最高の駒になることだろう。

「……当然だが、そこではないな……」

ここにいとだんだん自分も違うものになっていく気がする、と
ディアボロは感じた。今までの現実から乖離しすぎたそれは、やはり
感覚を鈍らせてきている。

相手は神だ。自分は人だ。神を求めようとして天に向かい、地に落ちる逸話は、なんであつたか。

そんな逸話では苦勞して手に入れた翼を、いともたやすく自分は扱えるようになっていいるが、それは違う。

違うのだ。

「見抜け」

そんな矛盾を持ちながら、その先を向く。それは、高い山よりさらに高い、彼方空、雲の上を目指していた。

「ただいまー」

「お帰りなさい、諏訪子様……どうしたんですか、その服！」

「あーうー、転んだ？」

「なんで疑問形なんです!?! もう……お着替えなさってください。」

私、繕いますから」

「助かるねえ。はたては？」

「サイコロ何度も振って、今のうちに強いキャラ作らないとー、って頑張ってますよ。ボーナスポイント13でた、ってさっき喜んでました。私にはよくわからないですけど」

「一発振りだ」

「あ、はい。伝えておきます」

「よろしく。……ごめん、私少し寝るよ。服は本殿の前に置いておくから」

「え、また寝るんです？ ……まあ、諏訪子様がそういうなら」

「うん、お休み」

あくまで普段通りに、あくまで普通に。

元々欺くのは得意だから、早苗もそれには気づかなかった。

本殿の中に入り、誰もいないことを確認してから。

腹を抱え、うずくまる。額には小さく汗が浮かび始める。その抱えた腕からも、不協和音が全身に響き渡る。

「ぐう、うう……」

身体を苛む猛烈な痛み。肉体だけではなく精神から削られる苦痛。

あの時、嘘を言った。もし彼がそれを知ってしまったえば最悪自分の手のひらだけで収まらないだろうから。

スタンドは、神殺しの武器に十分になりうる。神といかなくても、精神を憑代とした妖怪たちを滅ぼす退魔と十分になりうるだろう。

精神から成り立つ像。単純な力をどれだけ持っているかを試してみたが、これほどとは。

「うぐ、う……へ、へへへ……」

笑みがこぼれる。

神遊び、巫女との弾幕ごっこも楽しい物だった。ごっことはいえ、誰も彼もその一瞬では自分の存在を賭けて戦っているのだ。

でも、彼の力は違う。同じだが、それはごっこ遊びではない。真剣な、命のやり取りなのだ。互いに交わしたのは一撃、けれどその一つにどれほどの存在を賭けていたか。

「どうだ、八雲の……!! 私が一番だ、睡付けたのは私だ、女狐めえ」
スタンド能力がどれほどの脅威を持つか。それを調べるのは元々
藍の役目であり、主人のそれとは違い、純粹に危惧していた。

が、その別諏訪子と同じような劣情をディアボロに抱いているのを
隠していた。同じ考えを持つ者、互いに腹に一物抱えている者だ、何
かを隠そうとしていることがわかるのだ。

諏訪子はその細腕で大樹をちぎり取れる様な力を加えても、首を折
るにも至らなかった。

生半可な攻撃では傷つかぬこの身体をも、やすやすと貫いた。

精神性を織り交ぜた、妖力や巫力といった力を交えた攻撃は効果が
薄くなる。また、逆に相手にはそれらで守れた盾を破る力がある。

……違う、精神そのものが像となっっているのだ。それが無意識に肉
体を守っている。物理的な力だけから外れている妖怪の力では、圧倒
することができない。対等に至れる。

試していないが、精神の像同士がぶつかり合えば、きつとそのダ
メージは肉体に反映される。もつとも、砕けきつたこの両腕、握られ
ているという感覚は全くなかった。感じ取れもしなかった。

「……どうでもいいや、今は」

そう言ったことを考えるのは今を担いたがる奴らだし、それは既に
行っているだろう。

確かに幻想郷の脅威になりうる、が彼がその器足るかはわからな
い。……そんな、ことより。

「……あ」

自分の胸に手をやる。痛みとは違う甘い感覚がぴりぴりと走る。
身体を治すための鼓動とは違う、もつと別の感情が体幹を駆け巡るか
ら。鼓動も早くなっているのがわかる。

——久しぶりに、一人でしようかな。

す、とわずかに夕日が差す本殿が暗くなる。諏訪子が周りとは隔絶さ
せ、一人の空間を作り、その中で横になる。

時間が、また経った。

うつすらと、閉じた雨戸の僅かな隙間から日が差し込み、自分の手を明るくする。

同じ仕事を担当していたランプの勤務時間は、太陽が上がってきたことを指し示す光で終了の時間を告げた。

手元の本と、自分の考察をまとめた紙が机の上に散乱している。用意していた墨入れも底が見えるほど使ってしまったようだ。

少々時間をかけすぎてしまったかもしれない、と霖之助は一人ごちる。

いくら魔理沙が代わりに行ってくれるとはいえ、あまり時間をかけすぎては彼女は怒るだろう。……彼女も元々乗り気ではなかったし、ほとんど物で釣ったようなものだが。

今から人里に向かえば、開店の準備の終わりくらいで到着できるだろう。魔理沙にもそのくらいに着けると説明したし、『それ位に終わるのであればなら乗ってやるぜ』と答えていた。元々遅めに着くかもしれないと思っていたので遅めの時間で話していたが、まあ結果は良好だ。

だった。

「……それなのに、君はいつまでそれをやっているんだい」

店の奥で書き物をしていた霖之助の近くで、薬箱の中身を整理する、一人の少女。

外の世界で学生が使っているという、ブレザーと呼ばれる洋服を着ている少女は頭から生えているウサミミを揺らしながら返事を返す。

「あと10分から15分つてところかしら。……あなたの常備薬、型の古い物から期限切れまで……まるで小さな博物館みたいだね。しつかりチェックしておかないと緊急時に何の役にも立たない」

ぶつくさ言いながら少女―鈴仙・優曇華院・イナバ―は自分の荷物から出した薬と霖之助の薬箱の整理、入れ替えを行っている。

「そうは言うがね、何分妖怪とも人間とも半分同士だからあまり薬に頼らなくても大丈夫なんだ、だからそんなことしてもらわなくても―

「でも、この常備薬点検も毎月もらっている料金の一環に入っているから。しっかりやらないとあなたの無駄になる」

「なるほど、言っていることは最もだ。確かにこちらが料金を支払ってサービスを受け取っているのだから。……だが、僕はもう出掛ける時間なんだが」

『あなたのもしもの時！ 助けてくれる人はいますか？ 永遠亭のまごころ巡回サービス！ 薬の事から診察、回診、積みば料理や洗濯といった家事、あんなことやこんなことまでお手伝い！』

そう書かれたいかにもいかかわしいチラシを配っていたのは今日の前にいるウサミミとはまた別のウサミミ少女。

その時に居合わせた魔理沙が面白半分ですれに契約をしてしまった。『お試し期間で一月分は半額だ、お買い得だな』と、自分の身銭を切ることなく。

契約を機に、確かに3日に1度のペースで鈴仙がこの店を訪ねるようになったが、店の戸を叩いて対応の声が聞こえると、

「生きてる」

と、極めて事務的に、一言の確認をしたらさっさと行ってしまおう、何とも冷たいものだった。

いつもはそんな業務的なものであったが、今回に限って家の中まで入ってきて、勝手に薬箱の整理を始めていた。

「そう？ でももうすぐ終わるから、もう少し待っててちょうだい。

さすがに主のいない部屋でやるのはアレだし、鍵もかけられないし」「君が残りをやるのを後日に回してくれればいいんじゃないか？」

「私の仕事のペースが狂ってしまうので。次に早く行きすぎても問題だし」

「……魔理沙を待たせているんだ。あんまり待たせるとどう面倒になるかわかるだろう」

「魔理沙を？ ……帰る場所があるんだから、変に意固地にならなければいいのにねえ……」

永遠亭のウサギたちも変わっているのが多いが彼女はその中でも

常識的、だと聞いていたがそんなことはなかったようだ。

職務に忠実なのはいいことなのだが、そこに相手の都合を合わせるということとはしない。これはこれで営業には向いているのかもしれないが、今の霖之助には迷惑千万である。

「ごめんくださいーい」

そんな霖之助に追い討ちをかけるかのごとく。

表には営業中の看板を掛けていないにもかかわらず、来店の声が上がる。この声は聞き覚えがあり、その声の持ち主はまじめの一辺倒で聞かれることが多いはずなのだが。

「今は営業していないよ、僕はそろそろ出かけるんだ」

顔こそは入口の方に向けるが、一番言いたいののは前にいるウサミミに対してだ。とにかく、今は出て行ってほしい。

その思いが言葉の端に見える、冷たい口調で言葉を告げる。

「え？ えーつと……、え、営業時間を知らない方が自分の都合のいい時間に來れるので……」

その言葉に対して、戸惑いながらたどたどしく、どこかで聞き覚えのある答えを返す。

その言葉を最初に使ったメイドはさもそれが当たり前だというように使っていたが、どうやら彼女は元々それはおかしいと思っっているのだろう。だから、使用に抵抗が生じてしまう。

はあ、と霖之助は深くため息を吐く。鈴仙よりも遥かに扱いやすい彼女だが、結局目的の為なら意固地に付きまとうタイプでもある。さつさと欲しい物を手渡し帰ってもらうのが賢明だろう。

「……すぐに済む要件であるなら対応しよう。何だい、妖夢」

店頭で顔を出し、言葉と同じく感情の揺れた表情をしている少女――魂魄妖夢――の相手をする。妖夢は、主人が顔を出したことにほっとして、近くの半霊をゆらゆらと揺らめかせながら話す。

「実は、今度白玉楼で懇談会があるから、それに見合うものを用意しろって幽々子様がおっしゃられたので、それっぽい物を探しているんです」

「なるほど、今度にしてくれ」

非常に手間がかかりそうであったので、断ることにした。以前に来店した時の様に目的がはっきりしているなら良いが、今回の様な曖昧なものとはかく時間がかかる。

それに、懇談会に見合うものなんて言われても、幽霊屋敷に似合うものが古道具店にあるはずがない。それこそ、人里の道具屋に行つた方がいだろう。そこでまた会うことになるだろうが。

「そんなあ！ ダメなんです、すぐに用意しないとまた幽々子様に叱られてしまうんですよう！」

「それは君の事情であつて、僕の事情とは擦り合わない、それだけの事。それに、別に何もここで探さなくてもいいだろう」

「でも、まだ人里の道具店は開いていないじゃないですか、すぐにつて言われたからすぐに用意しなきゃいけないんです！」

「でもその懇談会？ は今日やるのではないだろうか？ それにあのお姫様が準備するんじゃないやなくて君が準備するんだから、少しくらい時間をかけても大丈夫なんじゃないか。それに、もてなすつもりならそんな急ごしらえをだすのがいいことなのかい？」

「うっ……ううっ」

コロコロと表情を変えながら、慌てふためく彼女は前と変わらず幼いままだった。前言撤回、まじめというよりは愚直だろう。

「妖夢じゃない、どうしたの？」

「鈴仙！ どうしてこんなところに……まあいいや、助けてください、この人いじめる！」

「誤解を招く言い方はやめてくれ」

呆れた声と感情を出しながら奥から鈴仙が顔を出す。

「君も用件は済んだか？ 済んだなら何時までも居ないでさっさと僕を解放させてくれ。妖夢以上に急いでいるんだ」

「まだ終わってないけれど、なんか問題が起きてるみたいだから。保証期間中だし一応……」

サービスの一環はどこまでなのか。チラシには特に書いていなかったが解釈は彼女に一任されているらしい。本当に必要としている人物には非常にありがたいサービスだろう。霖之助には完全に不

必要だが。

鈴仙は右手の親指と人差し指を伸ばして、その先に力を溜めている、明らかに武力行使の構えをしながら出てきている。もし妖夢がその得物よろしく本当の強盗であったのなら彼女は迷わず撃つていただろう。

もちろんそんなことはなく、鈴仙も妖夢と確認すると手を下ろし力を解放する。

「……保証期間？ また永遠亭は怪しいことをしているんですか？」

「構えるな、撃つと動くよ」

「どちらもここでやるなら出てっつてくれ、やらなくても出てっつてくれ」

鈴仙の言葉に反応して自然と構える妖夢、それに合わせて再び臨戦態勢に入る鈴仙。そこに割って入り、ややも大きな声で二人を諫める霖之助。

それは、全く進まない展開にいら立ちを隠せなくなってきた様。様。

「……そうね、あんまり遅れてもあれだし。妖夢も静かに見繕ってたら？ 結局私の仕事の加減具合にしか左右されないし。お冠になっちゃやう前に終わらせた方が得よ」

「君が言うか」

「……そうですね！ というわけですいませんが見させてもらいますね。あ、今回はちゃんと小遣いもらってますから！」

満面の笑みを浮かべながら、桜の花びらの刺繍の入ったがま口を取り出し大層自慢げに見せつける。

その時点で、霖之助は全てを諦めた。

「えーつと……これなんてどうだろう……」

「それは石仮面。曰く、人間をやめる程度の道具だ。被ってみてもなんとかなかったが、少なくとも懇談会向けではないだろう」

「そ、そうですね。今にも動き出しそうで怖いし……これは？」

「見ての通り、矢だ。何となく気の入った装飾だが特に変わりはない

物だよ。……本気で探す気はあるのかい」

「いまいち、よくわかってないんです。幽々子様の無茶ぶりはいつも頭を悩ませられます……」

店内を見回りながら、あれでもないこれでもない妖夢は品物を見続ける。

もはや二人を魔理沙や霊夢などの客ではない存在と捉え、そして同じように言っても自分が納得するまでこちらの言うことを聞かないようなタイプ。そう認識した霖之助は適当に解説を入れることにした。

それでも、別にそこに関して手を抜くつもりはない。妖夢が見ているのはおおよそ霖之助も興味を持っていない物が多く置かれている所。久しぶりの商売らしく、買い取ってもらうのもいいかもしれないと考えていた。

「……あれ、これは？」

「……おや？」

そう言つて妖夢が取り上げたのは、さらに包まれた細長い何か。もちろん霖之助はそれが何かを理解している。だが、彼は何故それがそこにあるのかわからなかった。

「それは折れた刀の刃だ。真つ赤に赤錆びていて、とても刃物としての使い道はなかったんだが……用途がとても興味深くてね」

「刀、でしょうか？ 切る以外に何に使うんです？」

「その通りなんだが、能力で見たところ、どうやら『どんな物でも絶対に切れる』らしい。……それがどういう意味なのかは分からないがね」

そこまで説明すると、思案顔でそのさらに包まれた刀を見やる。

「……しかし、あとで包丁にでも加工しようと錆取りだけして奥にしまっておいたはずなんだが……？」

「包丁ですって、もったいないですよそれは……みても、いいですか？」

刀剣と言われ、少し目を輝かせて妖夢はそれを見つめる。

蒐集家の多い幻想郷だが、実際に武器として使っている者は数少な

い。扱いに難しい、地味、可愛くないなどよく言われるが、そんな中でも使用する者の中、数少ない一人が妖夢である。

美しい、という意味ではなくて実用的な用途を醸し出すその魅力を理解する、数少ない理解者だろう。

「ああ、構わないよ。ただし、素手で触らないでくれよ」

「そんなくらいわかってますよう」

そういった者であるなら、見せるのもやぶさかではない。物の価値は、理解している者同士でないと語り合えないからだ。

はらりはらりと、少しずつ外の空気に触れさせる。それは楽しみにしていた包みを開くその瞬間に等しい。

「……わあ」

解かれたその刀身は、まだわずかに汚れが残っているものの、元は美しい刀剣としてあったということを感じさせる気風があった。

まるで、冷たい水で濡れているような、静かな輝きを秘めていた。

「元はかなりの業物ですね。楼観剣と比べれば全然ですが」

「やはりわかるものだね。けれど見ての通り、刀剣として使うにはもう無理だろう」

確かに、中本から完全に折られていて、切っ先の側が残っている。つまり、振るうための柄が無いのだ。

「その部分が存在せず、それを新たに他の者が付け加えてしまえばそれはもはや元の製作者が意図して作ったものではない、別の存在と化してしまうだろう。」

一般的な人間の倫理と道具のそれに当てはめるのは滑稽だが、相手のそれとは違う身体を他人が勝手につけて弄っているのと等しいからな」

「うーん、そうですね……包丁には惜しいような……?」

そこまで話して、妖夢は急に辺りをきよろきよろ見回す。

「どうした?」

「今、誰かの声が聞こえたような……」

——まさか、あの絶望の底から出られる時が来るとは……

「ほら、今確かに聞こえましたよ。誰か他にいるんです?」

「いいや、僕と君と奥のウサギだけだ」

失礼ねー、と奥から声が飛んでくる。確かに、その3人だけだ。

「……まさか、幽霊!？」

「それは君だろう」

「私は幽霊じゃないです、半分だけです！ そんな括りだと霖之助さんも妖怪になっちゃうじゃないですか」

「半分だけだよ」

——ここは、どこか……わからない……

「また聞こえた！ また聞こえた！ どこだ、出てこい！」

「涙目になりながら言うものじゃないよ。それに幽霊が声を出せるはずないだろう」

——まあいい、久しぶりの運動といくか

「……もしかして、ここから……?」

そう言うと、妖夢は持っている折れた刃を見つめる。

その姿は、何かに魅入られているかのような虚ろな瞳をしていた。

「……妖夢?」

怪しげに思い、霖之助が立ち上がろうとする。

「シツツツ!!」

それを、制する。いや、それどころではない。

明確に霖之助に危害を加えようとした、正確な突きが妖夢から繰り出された。

「なっ……!?!」

何とか、後ろに体を反らしてそれを回避する。急に動いた体は重心を失い、そのまま後ろに倒れこんでしまう。

「久しぶりの外だ……お前には何の恨みもないが、おれの力試しのため、その命貰い受ける!!」

折れた刃を突きつけながら、高らかに妖夢は宣言する。

その瞳は先ほどまでの穏やかな幼い瞳と違い、相手を切ることにのみ快感を覚えている狂人の瞳をしていた。

「妖夢……? 一体、どういうことだ?」

「のんびり答えを待つ時間などお前には存在しないッ!」

そう答えながら、その瞬刃を煌めかせる。狭い店内で、その短い刃は霖之助を捉えようと一つ、また一つと近づいていく。

「くっ!!」

対峙する霖之助も、ただなすがまま避けているだけでない。回避しながらも対抗しうる得物の元へ近づいていく。

再び彼を切り裂く一刃を、一振りの刃が受け止める。

草薙の剣。外の世界の変革に共にあったと言われる剣。

もちろん彼自身がそれを使い切れる力があると思っっているわけではない。が、今対峙する刃を受け止めるに至る武器はこれしかない。

金属と金属がぶつかり合い、火花を散らして辺りに音を響かせる。

「この刃を受け止めるか……だが、受け止めるに一杯と見た! 容易い相手だ、運動にすらならないな!」

確かに、と霖之助は口の中でつぶやく。今の動きで息は上がり、肩で呼吸をしているようなものだ。

「しかし素晴らしいぞ、この肉体は! 幼いながら体術、技術……過去に肩を並べたものとは比べ物にならない! そしてッ!!」

再び刃を霖之助に突きつける。霖之助もそれを受け、青眼に刀を構える。

「お前の動きは今ので『憶えた』。絶対に」

「絶~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ対に! 負けん……!!」

謎の振りをした時、店内に銃声が響く。それに気づいた妖夢が的確に刃を振るう。

「……どういうことだろ、これ。すごく妖夢らしいけど、だいぶ違う」
「お前もおれに斬られたいというのか」

鈴仙の銃弾は全て斬り落とされていて、命中には至らない。

その妖夢は、新しい相手に喜びの感情を出していた。

「その意気は良いぞ。この男は弱者とも見える。だが女、お前の攻撃には確かな殺意が込められていた! あの拳銃使いの様に! お前も戦いに身を置く者、相手に不足はない!」

「……ずいぶん正統派な剣士みたいになってる、んだけど……イメ

チエン、じゃないよね」

「気を付けてくれ、鈴仙……とてもじゃないが僕には抑えきれない。恐らく、妖夢は幽霊か何か、あの刀に宿る悪霊に操られているようだ」
「それは『視れば』わかる。あの刀から見えるの、明らかに波長が違うもの。それに何より、ここであんな波長を示すのって、姫様とその相手くらい」

少々矛盾はしているが、ごっこ上での明確な殺意は少女たちの遊びにはよくある話だった。

だが、今の妖夢は違う。あの鬼の異変の時に廻り回った時もこれほどの殺気は出していなかったはず。

「下がってて。これもサービスの一つだから」

この期に及んでサービスの一環というのも滑稽なものだが、それでも頼りにはなる一言だった。

決して気を緩めず、少しずつに霖之助は足を下がらせる。

「見たところスタンドでの撃ち込みではないようだが……どこかに隠し持っているな？　だが問題ない、今の弾丸は『憶えた』ぜ」

「そう？　ならばこそ」

鈴仙の瞳が赤く輝く。それと共に、頭痛が走るかのような音と、赤いヒビが入った様な店内がその瞳に、妖夢と霖之助の瞳にも映し出される。

「これは……!?!」

「初見殺し。憶えられる前に終わらせてもらおうツ!!」

鈴仙が店内を走る。その像は、すでに二人には違うように見えてしまっている。彼女が右に走れば上に走るかのように。飛び離れれば近づいてくるかのように。

その動きに翻弄され、困惑する妖夢に対し、八方から銃弾が撃ち込まれる。

「だが無駄だツ！　その攻撃は『憶えた』と言ったろーがツ!!」

その掛け声とともに、全ての銃弾が斬り落とされる。位相によって僅かにずれたその攻撃すらも明確に。

「初見殺しだって。もっとも、あなたは私を認識していないけれど」

その振るわれた後の刃を持った手を掴み、指だけで支えられている
それをはたきおとす。その見事な不意打ちは、持っていた本人にも気
づかせないほど鮮やかだった。

妖夢の手から刃が離れると共に、ぷつんと糸が切れたように張りつ
めた空気はなくなり、同時に妖夢はその場に倒れる。

「……鈴仙？ 終わったのか？」

「まあ、一応。……もしあれも『憶えられた』のなら、私結構へこむか
も」

そう、鈴仙は崩れた髪をいじりながら、何て事の無いように呟いた。

勝負こそ鈴仙の機略によって一瞬で終わったものの、その後は凄惨
たるものだった。元々片づけられていない店内を少しでも暴れ回っ
た中。

辺りの物は散乱し、下敷きになったものは壊れてかけらが飛び散っ
ている物も見られる。

「……さすがに、この状態を放っておくわけにはいかないかな」

霖之助も目の前に倒れている妖夢ではなく、その散らばった区画を
見て呟いた。

「え、この子は？ 妖夢放っておくの？」

割と大きめの目をさらに丸くし、さすがに非難するかのよう
に鈴仙は答える。

「怪我人は医者に連れて行った方がいいだろうからな。もつとも、見
たところ怪我はないと思うが」

そこにはただ見捨てるわけではなく、専門外なので専門家に任せた
いという心も見えたが、前者の放置も僅かに見える。

ひどく呆れた顔をして、侮蔑の目で見られるが霖之助は気にしな
い。同じく、専門家として事態の解決をしたいだけなのだ。

落とされた、折れた刀に近づき、触らないように注意しながら検分
する。

と言っても注視するくらいなのだが……それでも特に変わったものは見られないし、直前に妖夢が言っていた霊の言葉とやらも聞こえなかった。

「……触って調べてみたいところだが、おそらくそれが起動の合図になっっているんだろうな。……箸か何かでつまめるだろうか」

「……んう……みゆ……ひよあっ!？」

ちようど目が覚めた妖夢。不自然なほどに近い男性の顔に思わず驚き飛び退く。

霖之助も、目が覚めたときにまだ何かあることを考え、剣を持ったままであったので、一応その構えをする。が、目が覚めた妖夢はあたふたするばかりで、特に何も起きなさそうであった。

「……何があつたか覚えてはいるかい?」

「少しだけ、まあ。心に乗っ取られるなんて……さつきと斬ればよかったのに、未熟ですみません」

自害でもするつもりか? と言いかけたか、さつきと同じく口の中に留めておいた。災いの元は無闇に出さない方が身のためだ。

草薙の剣はもう不要になったかもしれないと思い近くに立てかけようとするが、それを妖夢が止める。

「すみませんが、また一悶着起こさせてください。……さつきの人、もう一度呼ばせてください」

「本気か? 君が冗談を言う人間ではないからそうではないと思いたいが」

「そうよ、それにもし何かあつたら、あれが言ったことが本当なら私でも止められないかもしれないのよ? 通常弾だって、2回目には幻覚の中でも見切られていたし」

二人がそれを止めようとすると、妖夢は手で二人を制し、その傍らに浮かんでいる霊体を自分の身に寄せた。

妖夢の半霊は、すぐに妖夢と同じ姿を取る。違う点は、楼観剣と白楼剣を持っていない、の2点。

形取ると、二人が制止する暇なく、半霊の方で刃を拾い上げた。

「……………ッ! ええ、大丈夫ッ! はい、それは、ダメですッ! ツ

!!

半霊の方の妖夢も、現体の妖夢も共に、何かに耐えるように齒を食いしばりながら、何も聞こえぬ声に返事をする。

概要こそはわからないものの、その成功を見据えるしかなかった。

二人はもしものため、霖之助は草薙の剣を構え、鈴仙は同じく手にいつでも発射できるように力を込めて。

……妖夢は目をつぶりながら、出てくる声は小さくなり、つぶやくような声になる。

「……そうです。おそらく、あなたの言う人物は存在しません。……はい、ありました。確かにそれは」

そこまで言うのと、二人の妖夢は何やら気の抜けたような表情となり、鈴仙と霖之助の方を向く。

半霊の妖夢は恭しく頭を下げると、口をパクパクと動かす。

「あ、ごめんなさい。そっちの身体は喋れないんです。私から説明します、アヌビスさん」

「何だって？」

アヌビスと呼ばれた、半霊の妖夢は、現体のそれとは違い、鋭い目つきは変わらない。

それが元々の彼？ の性分なのか。口を開くと共に、追隨して妖夢が説明を加える。

「刀に宿っている、えー、すたんど？ 悪霊みたいな方で、刀を抜いた人に憑りついて操れる程度の……え、憑りついているわけじゃない？

いいじゃないですか、それくらいは簡単に言わせてくれたって」

「な、なんか随分フレンドリーになってるわね。一応あなたは私たち殺そうとしていたのよ？」

「それはまあ、許してほしいし、納得いかないなら斬らせてもらう、ですって。戦うのは好きみたいですよ？」

「君と思考回路はあんまり変わらないみたいだな」

丁寧な頭を下げるアヌビス。確かに、攻撃性がなくなると紳士的な対応はできるみたいだ。

「しかし、何で今度は乗っ取られたりしないんだ？ それに、あまりに急な変化だ、油断させているようにも見える」

それでも、すぐには疑いが晴れるわけではない。霖之助が訝しげに見ると、アヌビスもそれは当然ともいえる表情を浮かべ口を開く。

「あー、はいはい。まず私の方から説明しますけど……見ての通り私には半人半霊なので、体が二つあるんです。主に使っているのは人間の方なので、そっちで持ってしまったからそっちの身体が使われてしまったんですが……」

半霊の方なら基本的には私の手足みたいなもの、身体の一部なのでそこだけなら使われても互いに干渉しあえます。相手が完全に制御できるわけではないので少し安心できます。でしよう？」

「確かに、僕ら半分の血筋とは違って半人半霊はそれそのものが種族、一つの精神と二つの身体で成されると以前奴から聞いたことはあるが……」

「で、攻撃してこないのは、言ったとは思いますが、って言ってますけど言ってみました？ とにかく長年使えなかった体の動かしをしたかったからですって。」

斬ることに抵抗がないのは私は良くないことだと思いますけど、真の目的意識があるなら続けるが、今はないからやめておく、ですって」

「……聞けば聞くほど、妖夢とあんまり変わらないわね、そのアヌビスさん」

「どこがですかっ!？」

驚きの表情をする妖夢と、うんうんと合点が言ったようにうなづく霖之助。アヌビスも、それに合わせて苦笑している。

戦いが終われば後腐れなし。その空気が、ここでも感じられるようになっていた。

「……しまった、もうさすがに行かないと。予定の時間よりだいぶ遅れてしまっている……」

「え？ ……ああ、私も次の巡回に間に合わなくなっちゃう！ ここ

で薬の確認なんてやってられない！」

それほど時間が経っているわけではないが、二人ともに用事が詰まっている。その割には鈴仙はのんびりとしていたように見えるが。

二人とも荷物をまとめると、二人の妖夢を連れて外に出ていく。

「わっ、私の用事！ 私ここで刀拾うしかやってないです！」

「さすがにもう時間もない。その刀は僕には持て余すから差し上げよう。適当にお姫様への言い訳を考えておいた方がいい」

そういつて店の戸にカギをかけると、さっさと走って行ってしま

う。

鈴仙も鈴仙で、荷物をまとめると、

「彼……でいいのよね？ についてまたあとでゆっくり聞きたいけど、私もちよつと外さなきやいけないの。妖夢、アヌビスさん。いいかしら？」

そう問いかける鈴仙に、妖夢は恐る恐る片割れを見つめる。

その片割れは、少女の容貌に似つかぬ笑みを浮かべ、言葉は上げずとも、了承の意を示した。

それを見ると、鈴仙も微笑みを返す。

「ありがとう。それじゃあねー！」

そう言うと、鈴仙もふわりと飛行し、森の外側へと向かう。どうやら紅魔館の方へ向かっていくようだ。

「……いったん、お屋敷に戻りましょうか。私はあなたを、わが主に紹介しなくてはなりません」

そう言うと、アヌビスは渋い顔をし、難色を示す。

「大丈夫ですよ。幽々子様は寛大な方です。幽霊仲間として一緒に認めてくれますよ。……え、幽霊じゃない？ だからあ、そのすたんどってというのがよくわからないんですってばあ。

アヌビス、じゃなくてアヌビス神が正しいって？ でも、神様じゃないでしょう？ ええ、いますよ。幻想郷には神様だって。あなたの所にもいたんです？ 神様じゃないけど、それに近い吸血鬼……

うーん、吸血鬼……いえ、確かに怖いんですけど……幻想郷にもいますけど、どこか間が抜けてるんですね、あの人たち。いや、あな

たの所の方を馬鹿にしたわけじゃなく！ あー、転びますよ！」

興奮したアヌビスは、人間の身体とは違う霊体の身体に慣れないのか、思うように動かずに体勢を崩す。

それを支えながらも、妖夢は一旦の家路に着く。

「外の世界の事も、あなたの事もいろいろ聞いてみたいです。貴方にもいろいろ答えてあげます。ようこそ、幻想郷へ！」

―飛べよ、踊れよ、円舞曲と共に 1―

「冥界……ですか」

『そうだ。冥界に赴き、その主である西行寺幽々子とコンタクトを取れ。死後の世界、というの良い物ではないが、あの尼僧の言う通りならば幻想郷では現界と冥界、それほど境の無い物と認識してもよいだろう』

「……僕が知っている冥府と東洋の宗教で謳われる死後の世界は違いがありますが、そこは幻想郷特有の世界、とでもいうのでしょうか。地の底と一般に言われるところへ、今天を目指して向かっているのですから」

『それについてはこちらも未知の状態だ。お前がその場で感じ取り、理解するのだ』

「了解しました」

『お前の手元にも電話があつたようで助かつたぞ。もしお前に連絡がつかないのならば、任せる者がいないのならば。私自らがその地へ赴くことになるどころだったからな』

「そうですね。命蓮寺でも借り物でしたし、今使っている物も借り物。こちらにトランシーバーの様な、……ちよつと、男性が持つには不自然ですが、器具を所持していますのでそれを渡せばボスにも手間を取らせずに伝達が行えるのですが……」

『文明が中途半端な発達を遂げた世界だ、現状に存在しない物を嘆いてもしようがあるまい。良くも悪くもここは異世界だ、新たな世界に順応しなければ生きることができない。これはどこでも同じだろう』

「その通りでした。失言をお許しく下さい」

『構わん。では任せたぞ、私のドッピオよ』

「了解しました。……ボス、最後に一つ、僕の戯言を聞いていただけないでしょうか？」

『………なんだ？』

「最初に電話した時には、今にも死んでしまいそうな、消え去ってしまったような……脆い炎の様な印象でした。でも、今のボスからは以前と

同じ、威厳と力強さを感じられます。何があつたかは聞きませんが、安心しました。それだけです」

『……………そうか、そうだな。あの時はあまりに唐突な出来事ですがの私でも動転していた、とても考えておけ。あまりの展開には人間隙が生まれる。前の下っ端のカスどもにギリギリまで追い詰められたように。』

我がスタンドでも読み切れぬ運命に気が持たなかった……………それを弱さとして、私は受け止めた。ドツピオ、私たちはまだ成長する必要がある。それをここで私は認識したのだ。……………以上だ』

幻想郷の空を、一人の少年が行く。

ドツピオはボスとの『電話』を行いながら冥界へ、空の彼方まで飛んでいた。

「すまなかつたね、長く電話を使つてしまつて」

「あ、あ……………はい」

そう言つて、ドツピオは大きく咲いた花を妖精の一人に返す。

受け取つた妖精は、何事もなかつたかのように花を電話と言つて返すドツピオに対して戸惑いを隠せない。

無理もない。急に一人の少年が雲を操り近づいてきたかと思えば、『とうるるるるるるるるるるん、るるるん。……………ボスからの電話だ、取らせてもらつてもいいかな』

と、かなりドスを効かせた声と、有無を言わせない恐ろしい表情で話しかけてきたからだ。あまりに怪しく、恐怖を覚えるその行動に、何も言わずに渡してしまうのは精神の幼い妖精では無理も無い行動だった。

花を手渡された妖精と、その取り巻きの妖精。不気味さからさつきと逃げ出そうとしている姿に、

「あー、電話ついでにすまないけど……………冥界？　つていうのはこの先でいいんだよね？」

そう、ドツピオは確認の質問を尋ねる。

元々指示通りに雲は動くため、ドツピオの知らぬ土地でも幻想郷の中、地名が定められているのなら問題なく向かえるのだが、一人での

知らぬ土地、先には案内人もいない。

そんな状態で向かうのは心もとないため、つい出た質問だった。

「え？ うん、お屋敷はこの先ですよ？」

「白玉楼はこの雲越えたら、おつきいおつきい門があるから、それを越えればすぐだよ」

「そう、ありがとう。何にもお礼はないけれど」

答えも安心を得られる答えであり、問題はなさそうだった。

あいさつを済ませると、雲もそれを理解したかのように速度を出し、冥界へと向かっていく。

「……変わった人だったねー」

「頭が春です？」

空を進み、高度を増すごとにだんだんと空気が冷え込んでくる。が、山を見下ろすほどの高所になっても酸素が薄くなることによる息苦しさは感じられない。

向かっている途中でそのことを想像の外から置いていたことに対して後悔していただけであり、ドツピオは胸をなでおろす。

生身でここまでの高さまで来ると、もはや下を見ても恐怖の感情は浮かんでこない。現実離れた所に存在しているという、どこか感慨深い感情が浮かび上がってくる。

上を見ても下を見ても死の世界。そんな通路で身を守る物は預かり物のこの雲だけ。こんなもの、幻想と言わずになんというだろうか。

「……!! あれ、か……?」

その中を進んでいくと、上も下も果ての無い、とてつもなく巨大な門が現れる。

傍らにはいくつもの柱が浮かび、門自体にも大きな紋様が浮かんでいる。

どこを基点として建造されているのか、それともこれほど巨大な物が浮かんでいるのか。その先を見せぬように、沿うように建っている

壁らが、大地から見えないのはどういうことか——
様々な疑問が入り組み浮かび上がるも、そのすべてを昇華させる、
感動。

それが、たどり着いての第一印象だった。

「……けれど、どうすればいいんだろう」

勝手知ったるように、乗っている雲は進んでいくが、ドツピオ自身は先の通りここについては何も知らない。

一見通れるようには思えない門を、どうするつもりなのか、どうすればいいのか。

そう考えている間にも、ぐんぐんと門に近づいていく。

「……………、わ」

少し身を乗り出せば紋様に手の届きそうになる距離まで近づいた時、石を投げ込まれた水面に浮かぶ波紋のように、紋様が揺れ動く。

その投げ込まれた石のごとく、ドツピオの全てを飲み込む。

一声上げる前に、身体が入り込むと、そこには最初から何もなかったかのように。荘厳な門だけが建っていた。

「わわあっ?!」

その出来事に驚き、身を縮めて構えるが、そのころには辺りは一変していた。

先ほどまでの雲海ではなく、目の前に広がるのは長い長い階段。門と同じく、その上は果ての見えない、守矢神社の前にも長い階段が積まれていたが、その比ではなかった。

そして、先ほどまでに感じていた空気の冷え込みとはまた違う、体の芯から身震いを無理やりに引き起こされるようなうすら寒さ。

ドツピオには馴染みはない、死者を供養するための卒塔婆が階段の脇にいくつも、いくつも、いくつも立っておりその周りをうつすらと不定形の白い気体の様な物が漂っている。

まるで、ここに踏み入れた彼を仲間へ導こうかと値踏みをしているように。

「……………つ、ここが、冥界、か」

妖怪の山とは違う、人間の本質の恐怖を突き動かしているかのよう
な恐怖感が感じられる。

もし何もなしにここに来たのであれば今すぐにも逃げ出したい
と思えただろう。

ボスの指令が無ければ。ボスの無事が聞けなかったのならば。
ディアボロがここにはいないと知っているから。

その事実があるからこそ、彼はその先へ踏み出すことができた。

「そのまま階段を上って、でいいんだよな……頼むよ」

ドツピオの声と共に、雲は再び移動を開始する。ふわりふわり、冥
界の奥へ向かって。

(生まれ……と言っても聞こえてはいないだろうが)

階段を上っていると、妙な感覚と共に声が聞こえる。

直接話しかけられているわけではなく、頭に響くような、感覚が声
を感じ取る様な、そんな響き。

(ここより先は冥界の主、西行寺の屋敷。許可の無く侵入することは
許されぬ。これは警告だ)

視線の先、はるか遠くにぼんやりと見える人影。

幼さを残した少女のようだが、その右手は一言でいえば異様であつ
た。

柄の無い刃をぐるぐると布で包んで無理矢理に持ち手を作り、さら
にその持ち手を同じく布で右手に縛り付けて固定している。これも
また、無理矢理に。

そのせいで本来の長さよりかなり短くなってしまっているが、それ
でも、二度と手放さなすものか、と過剰に思えるほどに。

「……誰だ？」

(もう一度だけ、だ。ここより先には進ません……聞こえていないだ
ろうが)

少女の方から一つ一つと階段を下り、その姿を明確にしていく。

それは、まるで色の無い世界から出てきたような、無色の造形、輪
郭の淡い姿。異様な右手の刃だけが色彩を保っていて、そこだけが現

実感を感じさせ、ちぐはぐな印象を与える。

その刃を見せつけるかのようにドツピオの方に向けて、斬りおとされるか退がるか、を選ばせてくる。

「……西行寺の屋敷であつていることは確かみたいだけど……いわゆる警備の人間かい、君は。後、聞こえてるよ」

(なに?)

ドツピオの言葉に一瞬少女は目を丸くする。

(そうか……くくく、ふっはははははは)

何がおかしいのか、左手で顔を隠すように、声を抑えるようにしているが感情と共にあふれてしまうのを止められないかのよう。

その怪しい雰囲気から、何をしてくるかわからない相手に対してすぐに行動を取れるよう、雲から降りて警戒を強める。

一仕切に笑い終わると、鋭い切っ先とよく似た、人を斬り殺すことに何のためらいもない目をドツピオに向ける。

幻想郷には合わない、弾幕ごっこで見る様な真剣さではない。ドツピオが生きていた世界でよく見た、頭の冷えた狂気の眼からの真剣さだった。

(まさかスタンド使いがおれの他にいるとはな！ ならばその実力みせてもらおう！)

その頭に響く声と共に、刃を構えて戦いの意を示す。

「ちよつと待て！ なんでそうなる!」

(この先に行きたくば、このおれを倒してから、ということだ!! 強者との戦いこそ我が愉悦、軟弱な女の遊びなど性には合わん!)

「女じゃん!」

(これには事情があるが、今はそんなのどうでもいいだろう! さあどうする、闘るか、退くか!)

滾り、血走するような眼差して少女はドツピオを見据える。そして、闘い以外には認めないという意思を強く伝えている。

ドツピオは髪をかき上げ、エピタフの予知を映しながら。

「……………こんなことに無駄な時間を費やしたくはないんだけど」

そう言いながら、階段を上り間を詰める。

スタンド使いという以上、何らかの像があるとは思うが今はそれが見えない。何か手の内があるだろうが、そもそも自分が近距離型なので、いかにして近づけるか、が戦いの胆となる。

姿も異様だが、最も異質なのはあの刀。その注視と、予知の確認。(スタンドとは闘いの才能、精神の根本、本能！　そしてそれを自由に操れるものが立ち会えば起こる事柄はただ一つ！　お前はこの先には行けん、いつまでたつてもない!!)

少女は宣言をすると、階段から飛び、上段からドツピオに斬りかかる。

相手は刃物、自分は肉体。拳で刃を受けては無傷では済まないだろう。防御行動は基本的に回避となる。

そして、最初の行動だけでも敏捷性はかなりのものだ。そのまま潜って逃げ切ることもできない、とみえる。

そこまで判断し、階段の外、卒塔婆の並ぶ整備のされていない地に逃げるように避ける。

いかにして虚を突いて近づき一撃を喰らわせられるか。そこが戦いの要。

(シヤアーツ!!)

「……くっ！」

もちろん、少女は事を簡単には進ませない。その驚異の脚力でドツピオを追う。

攻撃が届きそうになる度、周りの物を気にせず刃を振るう。攻撃を回避する度、刃に触れた物は斬られ、地に転がり落ちる。

異様な持ち方により、正規の剣術とは違う構えになるだろう。それを踏まえても、詳しくないドツピオでも少女の立ち振る舞いは素人風にも取れる。ただ、闇雲に振るわれているだけ。

ぞんざいに取り扱われているその刃は、その使い手からは結びつかないほど実によく研ぎ澄まされた一品だということを、その斬撃は知らしめるに十分であった。

その攻撃を、予知で見ながら躲しつつ、反撃の機会を待ち続ける。予知を利用した、基本的な戦い方。

その猛攻に、守勢が回りきれず、追えなくなった一撃が、時間が緩やかに、その中を通るように肩口から胴まで振り下ろされる。それだけでは終わらず、返す刀で少女はドツピオの胸を正確に貫く。

「……………あ、え、あれ」

一瞬。全てが終わったと思つた。こんなところで。

大量の血と味わったことの無い痛み。心の臓を貫く痛みとは違う冷たい感覚。

それらが襲い来る、と思つたが何も起こらない。

むしろ、身体には確かに通つた感覚があつたにもかかわらず、一切の怪我をしていなかった。

へな、とその場にへたり込むドツピオ。それに対し、少女は姿勢を維持したまま。胸に突き刺された刃はそのままドツピオの体の中を通り、座り込んだときに肩口から離れる。刃とドツピオの身体には、一切の汚れはなつた。

(……………拍子抜けだな。全く持つて。おれの障害にも経験にもならん)

そう言つて近場の木に目掛けて2, 3と刃を振るう。一振りはそのまま木を切り裂いたが、二振り、三振りと振るつた刃の軌道は木の中を通るが、驚くことに少しも切り口が作られていない。

少女は興が失せたかのように、再び階段の方へと向かう。

「ちよ、ちよつと……………」

(修練のための人斬りは主の許可はあるが、本気の殺しはない。それまでの事よ。最もお前の様な雑魚を殺したところで何にもならないが)

振り返り、そう冷たく言い放つ。ドツピオの事を全く歯牙に掛けないその態度。

もし、その後ろ姿を見せつけたならそのまま攻撃してみれば一矢報いられるかもしれない。

一瞬そんな考えがよぎるが、嫌になるほど途端に響き始めた心臓の鼓動とあまりにも情けない自分の現状が足を震えさせて動かさなくさせる。

予知を、見ることも躊躇われた。今の惨めな自分を映しているにすぎなさそうだから。

「あー！！！！ アンったらこんなにめっちゃめっちゃにしてー！！」

去る少女の視線の先に、今度はその少女に色を付けたような瓜二つの、もう一人の少女。

こちらは先の者とは違い、見るからに幼い印象を与える。色の無い、アンと呼ばれた少女と違って柔らかい、人間味を感じる表情を出している。浮かべる表情が怒りでも、先ほどまでと比べれば。

「いくら何でもやりすぎよ、あとで綺麗にするの手伝ってよね」

(御意)

妖夢はアンを叱りつける。その命も、アンは素直に返事をする。

その光景は、小さくも主従の繋がりに見える。……見た雰囲気では、妖夢を主とは思えないが。

「お、おい……」

「……へ、ど、どなた様？」

ドツピオが視界に入っていなかったのか、妖夢は驚いたように返事を返す。

(客人だ。西行寺幽々子に用件があるようだ)

「幽々子様には？ 何の御用事でしようか」

「いや、……その、君らは、一体……」

色々言いたいことはあるが、二人を見比べ、指を指す。

妖夢は一瞬自分の身体を見てどこか変な所がないかを見渡すが、合点がいったように笑顔を浮かべて答える。

「西行寺家の剣術指導兼庭師、魂魄妖夢です。こちらは私の一番弟子のアン。アヌビス神のアンです。もつとも、神様とは違うみたいですけど」

「違う、そこを聞きたいんじゃない」

返答に対して、呆れた顔しか出なかった。

白玉楼。冥界の中に位置する西行寺家の広い屋敷。

それ以外には特に何があるというわけではない。ただ、広い広い空間に所狭しと墓標と樹木が立ち並ぶ。

そんな中にある、一つだからこそ目を引くその屋敷と、それに沿うように並ぶ桜の木。

時期が過ぎて花は散り、広々と緑の葉が冥界と呼ぶにはあまりにも眩しすぎる太陽の光を覆い隠す。

明るすぎなければ、暗すぎず。そんな、爽やかな光が白玉楼の門を照らしていた。

「どうぞ」

ぎ、と小さくきしむ音を立てて門扉が開く。

妖夢の先導で、一応客人としてドツピオは屋敷に招かれた。

彼の後ろには、先ほどまで斬り結んだアンが控えている。……そんな気はないようだが、抜き身の刃を持った者に後ろに立たれるのはあまりいい感じではない。

それを見越しているのかいないのか、無表情のままについていく。

「私の後についてきてください」

その後、妖夢は合点がいったかのような態度を取ると、真っ直ぐに屋敷を案内した。

彼女曰く、『主が懇談会を行う、あなたはきつとその来賓だろう』と話してくれた。

すなわち、自分が来ることを知っていたということ。それについて妖夢に問うても『自分にはよくわからない』と返された。

その時の困り顔からは、主が聡いのか従者が鈍いのかはわからなかったが、彼女の中での真相はそうであるらしい。

結局、当の主に聞くしか解答は得られないようだった。

「……、おお……」

通路の角を曲がって、思わずドツピオの口から嘆息が漏れる。

曲がった先にある、開いた部屋のその先に見える中庭。日本、というものを表す様な美しい景色。

流れが作られているかのように敷き詰められた玉砂利と、その中に植えられた力強さをも感じさせる美の表現、松。

もつとこれを間近で見たい、という衝動に嫌でも駆られる引力があった。

見とれて足が遅くなっているのを妖夢は感じ、振り返ると自慢げな表情を浮かべる。

「美しいでしょう？ 外も中も、庭師である私が剪定してるんですよ」
誇らしげに語る少女がもし人間であったのなら軽い気持ちで褒めることができるが、目の前の少女は立派な人外。

それを語る技術と実行しうる腕が実際に備わっているのだろう。

芸術家。

そう、彼女を表してもいいかもしれない。

「素晴らしいね……僕らの国の庭園技術に負けず劣らずだ。君みたいな子がイタリアにいたなら、美術史に名を残せたかもしれない」

「えっへん。ですが、私の腕は幽々子様の物なので、残念ながら別国の為に振るうわけにはいきませんね。幽々子様が仰るなら別ですけど」

「慕っているんだね、主を」

「もちろんです」

妖夢に素直な感想をぶつけるが、本人はその言葉を主へと飛ばす。

彼女の忠誠の証が、そこからも感じ取れる。

少し後ろに目を配るが、アンはそこに思うことはないのか、表情変わらず後ろについてくるだけだった。

「ここですね。えーっと、和室の入り方とかって知ってます？」

見た目他と変わらぬ部屋の前で、妖夢が足を止めて説明する。

今まで通った、最初以外の全ての部屋は障子が閉まっており中の様子はわからなかった。

ここも同じように閉まっているが、その薄い紙は中にいる誰かの影を映している。

「いや、初めてだしよくわからないけど……博麗神社と似たようだけど、あそこでは特に何も」

「霊夢は……まあいいです。私の真似して入ってくださいね。そんなに気負わなくてもいいですけど、一応」

中からはぱちり、ぱちりと何か木と木が小さく打たれるような音が聞こえてくる。

その戸の前で、妖夢は膝を着き、

「幽々子様、客人を連れてまいりました」

先ほどまでと違い、硬く丁寧な語調で話す。

中からは、「はくい」と間延びした声が聞こえる。散った花びらが空を舞うような、ゆるくふわりとした声。

それを聞くと、す、と障子を開き

「失礼します」

中にいる者に一礼した後、ドツピオを率いて部屋の中に入る。

「よくいらっしやいました。長い旅路でお疲れかしら？」

部屋の中で将棋盤へ、傍らの本を参考に駒を並べている。

その途中にあったのだろう。その作業を続けたまま目線だけをこちらに向けてドツピオを労う。

一見、妖夢のそれとは違い招いた客に対して無礼にも見えるその行為は彼女の持つ雰囲気すべて打消し、上塗りしている。

姿勢を崩さず、それでも迎えようとする意志を送り。彼女の持っている生来の気品がドツピオを迎えていた。

「ごめんなさいね。一度目を離すとどこまで置いたかわからなくなっちゃうから……すぐ終わるからそこで待っててね」

「幽々子様、そういうことは来る前までに終わらせておいてくださいよ……」

「そうしようと思ったのだけれども、字が細かくて……歳かしら」

「取らないでしょう」

ぱちり、とまた小さく将棋盤から音が鳴る。
上からの態度だが、それは従者である妖夢との彼女なりのコミュニケーションなのかもしれない。

ぱち、と三度小さく音が鳴り、それが終わりの合図となって、主である亡霊―西行寺幽々子―はドッピオに体を向ける。

『お久しぶり』ね。無事でここまで来られたことを歓迎します」

三つ指をつけ、深々と頭を下げる。

慣れたようなその動きは、しかし優雅さを持つ、もてなす心のあらわれであった。

「……何？」

「どういうことです、幽々子様？」

しかし、裏腹につかれた言葉が頭に残る。

冗談にしては上手ではない。頭を上げたその顔からは妖夢が知る自分を困らせる様な事を言っつて楽しむ顔ではない。

「妖夢、歓待の準備をしておいて。私はこの方とお話しているから」

「……はい。っ、て、男女二人を一つの間にはいけませんよ」

「あら、どうして？ この方はお客人よ。主がもてなさないこと、失礼に当たらないとでも？」

「だって、間違いが起こるからつて言われてますし」

「間違いって、なあに？」

「えーっと……クイズ？」

「おぼか」

その落差が、ドッピオにも理解できる。

それほどに、彼女は何かを隠していることを伝えてきた。

とぼけた返答をしている妖夢を、幽々子は窘めると、

「妖夢が心配だというのなら、アンを外に置いておけばいいじゃない。それでも納得がいかなくて？」

と別案を上げる。

「うーん、多分それならきつと大丈夫です。アン、ドッピオさんや幽々子様が何か間違えたら教えてあげてね」

(……わかった)

「頼んだわよ！ それでは、失礼させていただきます」

納得がいった表情で、二人は退室する。

部屋の中から見た二人の姿は、濃い影はそのまま離れの方に向か

い。薄い影は開いた障子から少し動き腰を下ろす。

中には、幽々子とドツピオの二人のみ。

「ふふ、ごめんなさい。幾つになってもあの子はああい子なの。真面目で、未熟で、実直で」

「……………まあ、それは感じ取れます。それより」

「妖夢が戻ってくるまで、時間つぶしでもしましょうか。あなた、将棋はできますか？ 最近頭を動かす機会が少なくて久しぶりに引っ張ってきたのだけれど……………」

そういうながら、盤の上に駒を並べる。この部屋に入った時から盤を中心に座布団が二つ、用意されていた。

「外国ではチェスの方が有名と聞いています。もし将棋を知らずこちらをご存じであるならば、それほど覚え辛いルールではありませんが」

「いや、さっきのは一体どういう」

「その答えを聞きたければ、まずはこちらの質問にお答えください。

……………判断材料として。今、あなたは多くの者に」

その答えを聞く前に、ドツピオの身体が動く。

幽々子の首元に掴み掛り、そのまま締め上げる様に彼女の身体を引き上げる。

ドツピオより小さいその身体は容易く持ち上げられる。掴んだその手から布越しに感じる体温は生きている者とは思えぬほどに、冷たかった。

「なら先に答えてやろう、答えはNOだ。オレは今、幻想郷に来て感じた、散りばめられた謎の全てを知る、その者に出会っている。

ボスはお前に会えと言っていたが、お前と認識があったようには思えない。そしてお前は、まるでオレの事をあつたことのある相手のように対応した。

お前は何を知っている？ オレ達の何を知っている？ ボスは会えとだけ言っていたが……………お前がボスに繋がったのであれば、その情報を吟味し、必要であれば断たなければならぬ！」

対してドツピオにはこれまでにないほどの熱が手に宿る。

本来知りえない、知ってはいけない謎。それに至る者は悉く消されてきた。

今、常に彼を動かす忠義が、幽々子の首に手をかけようとしている。それに対して、怒りに満ちた彼の表情を見ても、掴み寄られて崩れた着物とは違い少しも崩れぬ表情の幽々子。

別段彼に対して暴挙に怒りを向けるわけでもなく、憐れみを出すわけでもなく。

「ならば、全てを話します。ですが、そのための道具として。過去を並べた盤に向かい合わなくてはなりません。私の言葉の続きを話しましょう。」

あなたは今、多くの者に計られているのです。あなたがどう至るのかを。……もし、今ここで私を殺すことができたのであれば、今のあなたなら再び永劫の鎮魂の中に身を任せるしかない」

真っ直ぐな瞳で、ドツピオに話しかける。

それは、彼の中にある『何か』に向かって語りかけているような、そんな話し方。

「……随分ともつたいぶるじゃないか、ああ？　ところどころ、分かっているような口を。ここの奴らは皆そう話す、自分勝手に、相手を理解せずにツ！」

「いいえ、それは違います。全ては、理解をしているから。理解とは物事を知ること、相手を知ること。知ることが過程を理解すること。……皆があなたを知っているからこそ、あなたにはそう聞こえる」

鼻と鼻が触れ合うほどの距離でも、幽々子は冷静にドツピオへ返す。

如何に自分の気持ち伝えても、それを諭すように、自らの域へ引き込むかのように受けられる。

振り上げた感情の腕は、そのまま振り下ろされることなくやや乱暴に、叩きつけるように幽々子を手放すこととなる。

「きゃ」

「……………いいだろ、そこまで言うのなら。知ってることを洗いざらい話すのなら」

「ありがとう。この西行寺、平時に嘘を吐くことはあっても今ここに偽ることはしないことを約束するわ」

崩れた着物を整え、聴く姿勢になったことに感謝の意を述べる。

二人は対面し、それぞれに20の駒が並べられた盤を挟む。

騒ぎの中、外の薄影は動かさず。流れを知っていたかのように。

「……以上が将棋の駒の動きとルールよ。わかった？」

「ああ。何となく、は」

駒を動かしながら、幽々子からの説明を聞くドツピオ。

確かにチェスとは似ているが、差異はそれなりにある。

盤面が広く、その分多い駒。縦横無尽に動き回るチェスとは違い、堅実に立ち回るかの小さな動き。

「そして、取られた駒はこちらの駒として使用できる、か」

「ええ。これがこの遊びの妙味。味方が敵となって現れ場を混沌とさせる……これもお国柄の違いかしら？」

「……キャスリングもない。チェスは攻め入るゲームだけれど、こっちは似たようで既に刃が喉元に届きそうな、違いがあるな」

手番を使い、結局壁にしかならなそうな一手が多く見えそうなルールでしかないように見えるが、それがドツピオの第一印象。

飛車や角行といった強力な動きをする駒をもし取っても自分が取られたら対等に戻る。状況にもよるが、二つを持たれてしまえば太刀打ちできないだろう。

チェスでは取った駒は盤面から取り除かれ、それまでだ。どんどんと消耗していく駒を、どれを使っていくか。そこで頭を悩ませていく。

「……確認だけど」

「はい？」

「具体的にどうすれば、お前は話をする気になる？ 将棋で勝て、というのとは実質的に喋る気はないという意味でとるけれど」

声色を低くして幽々子に語りかける。そのはず、彼にはほとんど経験の無いゲーム。チェスも、ルールは知っているが数えるほどしかやっていない。

「そちらから持ちかけてきている以上、お前が未経験、もしくは苦手としていないとは思わないぞ。甲子園優勝チームがバットを持ったことの無い茶道部に勝負を持ちかけているようなものだ、と思っているか

らな」

「あらあら……」

それに対し、幽々子は困ったような表情を浮かべて笑う。

その行動も半分苛立っている彼にとつては感情を煽る行動にしかならない。

「どうなんだ？ 付き合うだけでいいのか？ それとも条件があるのか？ 言ってみろ」

青筋が立つのをこらえながら、改めて問いかける。

「はぐらかしたら殴られかねない雰囲気ね。怖いわ。……さつきも言った通り。あなたが過去と向き合う盤面。それを感じ取れればいいのです」

「……ッ!! だからッ、どういう」

「お付き合いしてくれませんか？ してくれませんか？」

どうやら、その点については問答を行う気がない様子。ありありと、見て取れる。

選択肢を選ぶ以外、例えば選択肢を増やすことやそれについて質問すること。それらは行わないと言っている。

「……相変わらず、分かったようなことばかり……」

口元に笑みを湛え、何処吹く風と自分の感情を受け流している。押し問答をしても、一点の答えしか返ってこないだろう。

相手の感情を読み取り逆撫でする技術では勝ち目は無い。それを持った相手に対して口で挑むのは至難。

その行き着く先は、自軍の歩を一つ動かすことで始まった。

「それならば、さつきとはじめよう」

実際にこのゲームがどう動くかはわからない。ただ、最初の一回で終わることはないだろう。彼女の言葉を信じるなら、将棋盤は過去であり、それと向き合うことが重要。

理解の行き着く先にまで付き合わされると、ドッピオは予測した。この戦いは、幾度も繰り返されることで自分に何らかの意図を認識させるものと。

「どうぞ、よろしくお願いいたします」

その通りか、別の思惑か。読み取ることにはできないものの幽々子は手を進め、ゲームの開始を受ける。

「……………」

「これで終わり、です」

盤上に残っている物はほとんどがドツピオに切つ先を向けた駒であり、自分の駒はほとんどが失われているか、動かすことも無意味な状態にあった。

そこに飛び込むように置かれた歩。元々はドツピオの駒だった歩を盤上に指し、幽々子は彼の敗北を告げる。

まだ直接王手に至るわけではないが、どう動かしても次か、その次の一手で王手と至るだろう。詰みの状態だ。

「ん、やっぱり初めてさんには難しいかしら？」

「言つたら、やったことないって。それに、あんまりこういう遊びは得意じゃないから」

少し負け惜しんでいるように、幽々子に返す。

一戦目は動きの確認と、彼女の実際の強さを図るためのものと考えていた。

駒の動きと有効な活用方法。相手が使う戦略からの定石の推理。いわば勝つための手段を。

そして、幽々子は実際に強いという確認。こちらのレベルに合わせて手加減をして、それを匂わせないようにする程度にはできる技量だということ。

「さあ、次へと参りましょう」

盤上を片付け、駒を並べ直す。言葉の通り、再戦の合図。

「……………そう、しようか」

ドツピオも盤面に目を下ろし、その戦いに興じる。

否、視線はそちらに向けていても意識は別方向に向いている。

駒を持つ手におぼろげにもう一つの陰が現れ、共にドツピオの視界

の端に映像が浮かび上がる。

断片的ながらも、そこに映るのはこれから先の未来。

「あら、……あらあ」

ぱちぱちと、手の進むごとに幽々子の手の勢いが陰る。

先ほどまでの様に慣れぬ手つきで進めていたとは思えぬ、道筋が見えているかのようなドツピオの打ち筋。

「随分呑み込みが早いよね？」

「そうかい？」

彼女のペースに付き合わず、自分の勢いを重視して手を進めていく。

いつの間にか、互いの技量が逆転したかのようにも見えた。

「……じゃあ、こーこういうのはどうかしら」

ぴち、とドツピオの王将の前に桂馬が指される。この駒も、先に後続が幽々子を刺すため、ドツピオが捨て駒として使用した物。

予知に従った今回の盤上は初めの頃こそドツピオが攻勢であったが手が進むごとに彼の包囲を抜けるかのごとく勢いを躲し、気づけば逆転していた。

目前に置かれた桂馬を取るのはたやすい。だが、それを取れば後続が彼の王将を刺す。かといって退けばそのまま追い詰められ、戦いは終わりを迎えるだろう。

「……くっ」

頭の中から、響くように痛みが走る。

画面には、そのまま変わらぬ盤上で手を震わせている自分が写っている。……予知を見るまでもなく、自分の考えでも敗北は見えていく。

お前の予知も所詮は小手先だけなのだと言わんばかりの、彼女の打ち筋。一寸先の未来も、ぽつかりと開いた穴に進む道しか映していなかった。

その道しか映しておらず、それに頼れば落ちるは必然。

「二回目だというのに、ずいぶん上手になったわね。苦手だつて言っていた割には……まるで、先が見えていたかのような指し方だったわ」

その言葉に対して、ドツピオは何も言い返せない。実際に見えていた。その通りに進んでいた。

エピタフによる予知があるから、ある程度は余裕を持っていた。相手より先が見えていれば、その相手を打ち崩す策を持って予知は答えてくれるのだと思っていた。

だが実際はどうか。がむしやらに進む自分の周りを囲うかのように策を張り、罠をかけて待つ手筋に嵌っただけ。

先が見えても大局が見えていない。よく使われる言葉ではあるが、予知を用いた状態でそれにはまるとは考えてもいなかった。

頭の中から、血管が潰れるような痛みが走る。

「さあ、次へと……どうしました？　ずいぶんと顔色が悪そうだけれど……」

「え？　ああ、そんなことはない。次を」

びりびりと走る痛みを抱えながら、幽々子に倣い再び駒を並べ始める。

「では、よろしくお願いいたします」

その言葉と共に、ドツピオは歩を動かす。

まだ予知通りでもいい。でも、どこかに転機がある。そこで予知を裏切るような動きをすればもしかしたら……何か、変わるかもしれない。

一瞬その考えがよぎり、それを頭を振ってごまかす。

ボスから借り得た能力を信じきれないという自分の愚かな感情と、それでもしないと彼女から優勢を奪えず、先を進めないのではないかという閉塞感。

この二戦の僅かな時間で、ドツピオは精神に確実に疲弊していた。

日は落ち始め、地上より高所に位置した冥界は日差しの影響を強く受ける。白から橙に変わり始めた日光は、二人の居室の隅まで照ら

す。

外で佇むアンの薄い影が盤の上にまで掛かろうとしていた。

ひとつひとつ、駒を進めていく度に考える。目の前の女の言ったことを。

過去、とはなんだろうか。彼女の言う過去とは。

歩を進める。命令。攻撃。進軍。場合によっては戦果を出して報告に上がる。そして……

取られる。撤退、敗北。だが、死んではない。

取られた駒を使う。それは、新しい駒が生まれたのか、かつて自分の駒であった者が寝返り、反旗を掲げて進むのか。

盤上を進めるごとに、そのようなことを考えるたびに嫌でも想起される。

絶頂であった自分と、その転落の苦い過去を。

「一つ、聞きたいのだが」

飛車が歩の隙間を通り、奥にある金の少し手前まで動いていく。

「何でしょうか？」

それに合わせて、銀を飛車の前にと動かす。

「お前は、この盤のことを『過去を並べた盤』と言っていたな。それに向かい合う必要があると」

「そう言えば、そんなことを言ってたような気がします」

少し思考の間を開けながら、動かした飛車の後ろに幽々子から奪った歩を差しこむ。

頭痛は、いつの間にか消えていた。

「それに対する答えを考えていた……聞いてくれるか？」

その言葉を聞き、幽々子はぴたりと動きを止め、彼を見やる。

幾分か鋭い眼差しを、ここに来てから出したことの無いような、慎

重に何かを察知するための気を相手に配りながら。

「……三回、ですか。ではお答ひえ」

喋りかける幽々子の舌が、何かに摘ままれる。それには危害を加えるための強さなどは入っておらず、行動を阻止する、けれど傷つけない程度の力。

見えない『何か』は、盤の傍らから、その手の柔らかさとは別に、ぎらつく強い眼差しで彼女を睨みつけている。

対する幽々子は、それに驚きの表情はするものの、特別抵抗をすることはなく、その唇には柔らかさを保たせている。

「……あの従者を置いている以上知ってはいるとは思っていたが……見えては、いないのか？ それとも敢えて呆けているのか」

「ふあい」

どちらともつかぬ、気の抜けた返事が幽々子の唇から洩れる。

キングクリムゾン左手で幽々子の舌を掴みながら、右手を触れるか触れないかの距離で彼女の眼球に近づける。

どれほど自らの意志により押さえ込もうとしても制御しきれぬ防衛の反応。見えても感じて居なければ、実際に触れない限りは気づかない故に反射は何も起きていない。

もちろん相手は人間ではなく妖怪であるのでそっくり同じように返ってくるとは思えないが、この顔がよくできた作り物ではない限り似たような構造ではあると感じていた。

舌は、口内を保護するぬめりと生体維持のための空気の流れに沿うような僅かな上下を繰り返している。

「先に調べたい意は今取れた。……お前からの回答をする前に、いくつか質問をさせてもらおう。それについては答えたければ答えるで、いい」

幽々子の口から手を放し、ディアボロはキングクリムゾンを戻す。姿はドツピオのそれとはまったく変わらないが、その精神は逆転していた。

「見えないっていうのは嫌だね。……では、どうぞ。お答えする気になつたらお答えしますわ」

「お前達は。敢えて達を使わせてもらおう。お前達は私の事について知っているな。おそらく、全てを」

一瞬、沈黙。

幽々子は王の傍らにある銀で、ディアボロの飛車を取る。

「はい」

「……私の経緯も、私の最期も。全てを知っていて、この世界に導いた……そうだな」

その銀を、後ろに控えていた歩が刺す。それと共に歩は成り上がり、赤く刻まれた文字を盤面に表わした。

「その上で、ここまで……そうだな、辿り着いた。辿り着いた私にあの時の事をこのボードゲームを用いて振り返らせている」

「……はい」

「チェスと似ていると言っていた。まさしくこれは戦いの縮図。違いは、己の味方が寝返ること。かつて、私がいた組織の様に」

ディアボロは、盤面から目を離して幽々子を見据える。それは、返事を待つという声なき呼びかけ。

「……厳密に言えば最初は敵などいなかった。味方だと、部下だと。……いいや、私自身もそう取ってはいなかった。まさしく駒だと」

返事が返ってこないことを感じ、言葉を続ける。

先ほど成った歩を自分の方に向き直させると、盤面の自分の駒を全て盤外へ放る。残ったものは中央、自分の手前に置かれた王将のみ。

「敵も味方もいなかった。全ては駒だった。だが、その駒は次第に意思を持ちこちらに向かってきた。その意志を、強さを、私は見抜けなかった」

その言葉に対する返事として、幽々子は先ほど取った飛車を、王たるディアボロの二つ前に置く。距離はあるが、すぐにとれる位置ではない。

それに合わせ、彼の王将を一步前に進ませる。それにより、次に前進させれば飛車を取り戻せるだろう。

幽々子は、先まで彼女の王将のそばにあった、元は彼の陣営である成金を大きく動かし、飛車の後ろに置く。

「私は今も自分が行ってきたことが間違っているとは思っていない。奴が間違っているとも思っていない。自分たちの基準で言えば、どちらも正義だ。」

だが、ボードゲームでも僅かな均衡で崩れる様に。思想による争いも、思いもよらないことで均衡が崩れ、勝敗が決まる」

ディアボロは王将に指を寄せ、進ませようとする。飛車を取り、その後の敗北を示すように。自ら、取れというように。もし彼がその駒を取ったなら、背後の成金が彼を取るだろう。

「お前に答えよう。最初から全て話していた。このゲームは私の過去であり、それに向き合わせるための道具。」

多くの者は……私に姿を見せていない、ユカリの関係者は。私を知っている、理解している。その上で、私の動向を見張り何をするかを探っている。そうだな？」

そこまで言い切った彼に対して、幽々子は手を合わせてそれに感嘆の意を示す。

「その通りです。あなたがここでどう至るか。過去の罪人は何をもたらずか。……ただの罪人であるならばここまでしなかった。あなたは異質の力を持っている。いえ、あなた達は」

「スタンド能力、か」

「ええ。きつと貴方は聞いているでしょう、かつて宇宙を巻き込んだ事変を。幻想に至らぬ人間がそれほどの力を所有している事……それを紫は危惧している。」

そのテストケースとしてあなたは招待されたのです。この、幻想郷に」

幽々子は真っ直ぐな瞳が彼を見つめ、幻想郷の大意が彼女の口から伝えられた。

「二つ、スタンド使いであること。」

一つ、いなくなっても問題ない人物であること。

一つ、その二つの条件を見たし、かつ大きな力を持つこと。

そこまで満たさなければ、あの事変に匹敵しうとは思えず。かといつてそこまでの条件を満たすものがあるかどうか、これが悩みだっ

た。

事変をきつかけに外は違う世界線に飛んでしまい、大幅に条件を満たすものが減ってしまった。……さすがにそこまでは、当人しか知りえないのだけれど」

「その中、何時から居たのかはわからない。死を繰り返す男の話。輪廻から放逐され、宇宙の引力から逸脱した存在がこの幻想郷に流れ着いた。」

……そんな人間を、手を加えて観察対象として、受け入れたの。いつもは何でも受け入れるって言っているけれど、その時はだいぶ悩んだみたいよ、あの子」

「それがあなた。永遠の放浪者として彷徨っていたあなたを取り巻く鎖も同じくスタンドによるもの。それもあなたを招待する理由として大きかった。」

あれほどの騒乱の後でも変わらずあなたを縛りつづけていた。縛っている者があなたと違う世界線に行ってしまったというのに、それでもあなたの魂に纏わされていた鎮魂歌はずっとあなたに寄り添っていた。それが、一番の理由なのかもしれない」

とうとうと、幽々子は澄み渡る声を辺りに響かせる。

ディアボロがここに来てから持っていた疑問が、ゆっくりと解消されていく。

もちろん、聞けば聞くほど新たな疑問も現れていくが、今は静かにその声に集中していた。

「あなたが過去に何をしたか。これから先どうするか。それについては自由にすれば良いでしょう。それに肯定する者は付いていくし、反発する者は立ちふさがる。何も変わりはありません。」

幻想郷は全てを受け入れる。それはとてもとても慈愛に満ちたことです」

白玉楼、厨房。

これから催される宴の準備として、霊たちが右往左往としている。各々が器具を持ち、立派な料理を作っているのだが。どうにも半透明の之魂状の物に器具が刺さっているだけの様にしか見えず、その光景は異様としか言えない。

「はい、肉と野菜持ってきたよ」

その中、倉から食材を持ってきた人型、妖夢がその場に荷を下ろす。彼女も料理はできるが、大掛かりになると荷物の持ち運びには不便な幽霊たちの代わりを行う。

持ち出した食材は優に5人前はあるだろうか。そして、すでにあつたものを数えると7、8人分ほどになる。賑やかな会場に合うのは大量の料理と主の言葉だ。それを常に胸に入れ、ここの従者たちは動いている。

持ち込まれた食材が下されると、やれ霊たちがこぞつてそれを取り、自分の担当する料理へと調理を開始する。

「……う・ねえ、ちよつとそれ貸して」

妖夢は何かに気付いたかのように入り口に視線を送り、半ば強引に近場にいた霊の包丁を取り上げる。

それを右手に、正しく刀を持つように携え、

「曲者ッ!!!」

自身の感じた違和感を信じ、全力を持って斬りかかる。

ここにいる霊たちとは違う、実体を持った何か。最もそれに近い幽々子も今はあの少年との歓談でいいはず。そうなれば、侵入者以外何者でもない。

知り合いの大体は勝手に入ってくるのだが、もしそうであるのなら楼観剣でもないこの一撃位なんてことはない。そう、妖夢は考えていた。何でもいいから斬るのである。

「おいおいおいおいおいおいおいおい」

だが、それは達成されなかった。妖夢の身体能力を持つての全力の

居合は、まるで時空が歪められたかのように進むことが適わなかった。

妖夢からすれば、果てない距離を全力で詰めようとしたように感じられる。だが、他所から見れば急に妖夢が失速してその場に留まるほどになったように見えた。

「……おまえさん、違和感を感じたら本当に斬りかかってくるね。あたいやなかったらどうなっていたことか」

入り口の陰から、妖夢より二回りほど大きい姿が現れる。

死神の装束を纏い、その身よりも大きな鎌を背中に備えた女性―小野塚小町―は手を頭の後ろで組み、呆れたように息をつく。

「何だ、小町さんでしたか。どうしたんですか、こんなところに。つまり食いはダメですよ」

「違うよ。あたいがつまみ食いするようなキャラに見えるかい」

「見えますよ？ 以前仕事のための燃料補給だー、とか言いながら里でお団子食べてたじゃないですか」

「あれはその通り仕事に向かうための物であってつまみ食いとは無関係」

小町と認識した時から、先ほどの警戒は薄れていつも通りの緩い雰囲気に戻る。

「それで、何の御用ですか？ ……というか、お出迎えもできませんでしたね、すみません」

「いんや、それは気にしないでいいさ。あたいらの仲だろう。それに、この新人がちやんと出迎えてくれたさ」

ありがとね、と小町は傍らに寄り添う霊をつんつんとつつく。それは、嬉しそうに体を震わせるとそそくさとその場を離れる。

「まだここに来たばかりみたいだね。初々しくてなによりなにより。……んで、用件だけど。お客が増えるんで、あと一人分追加してもらえるか？」

「……お客？」

「四季様だよ。なーんか、あんまり話してくれないんだけどさ。急にここで話があるからあたいに連れて行ってくれーって。」

仕事を放棄して場を離れるのは不安だからあんまり……って言うとうとしたけど、かなり真面目な内容みたいでそんなこと言ってられない雰囲気です」

小町の能力は距離を操る程度の能力。先ほどの妖夢の突撃を留めたのもそれによるもの。

三途の川から冥界まで、至るとするならそれなりの時間がかかるが小町力ならば瞬間とまでは言わなくともかなりの速さで到達できる。それを、映姫は頼ったのだろう。

「妖夢のその顔もわかるけど、どうやら西行寺との内緒話みたいだ。急いできた理由もわからん。けれど、その後の宴に謝礼がわりに参加してもよいつて言われてね。そういうことで、あたいの分もよろしく頼むよ」

「はあ。……で、二人なのに一人分？」

「四季様はあんまり食べないからね。その大がかりな一人分から摘まむんじゃないかな」

目的も、理由もわからないが、上司同士の話は介入しない方が身のため。言われたことをやればいい。

言外に小町はそういつており、それは彼女の平常時の仕事スタイルでもある。サボっているが。

最初に言われた時は妖夢も疑問が浮かんでいたが、そのことを知っているのもあり、納得をすることにした。

「わかりました。作っておきますのでどこかで暇つぶしでもしておいてください」

「冷たいな……相手してくれないのかい？」

「料理できます？ 小町さんっていつつも出来合いの物しか食べてないイメージじゃないですよ」

困ったように妖夢は目線を向けると、小町はすぐに視線をそらし、「お、いい酒があるね。落ちる日でも見ながら一杯やってるかな」

「どーぞ」

「……あたいもできなくはないんだけどね。どうしてもおまえさんと比較されると、ちよいとねー」

近くにあった酒瓶を取り、言い訳をしながら厨房を抜けていく。

「……………にしても、閻魔が何の用事だろう？ 場の空気を悪くするだけだから、懇談会ならば必要とされるような空気ではないと思うのに」

残った妖夢は、仕分けの手を進めながらもほんの少しの疑問を口から滑らせた。

室内は、奇妙な静寂が場を支配していた。

幽々子はずっと同じ、神秘的な表情を浮かべ続けていて、対するディアボロは姿こそは少年の、ドツピオの身体のままだがその姿では浮かべたことの無いような、深淵の先を見る様な表情で、深く物事を噛み締めている。

自分が今ここに存在する理由。そして、この世界の成り立ち。そして、自分たちのその後。

そのままの意味で受け取れば、もう帰る世界はない。ここでなければ一笑に付す出来事だった、世界線が違うという事実。

もつとも、すでに帰る場所は失われていたし、故郷を想うようなセンチメンタルな感情は存在しない。縁は感じるが、思い出など必要はない。

自分の過程を聞いたのであれば、自分の今後はどうするか。

「仮に、ですけれども」

「……………ん？」

幽々子は目を細めてやや下、将棋盤を見つめながら口を開く。

その雰囲気は、今を直視せず、その盤の上に見える風景を思い描きながら語っているようでもあった。

「もし、あなたが外の世界で行ってきたことと同じことをしたのならば。

私はそれを止めはしないでしよう。紫も、それを止めはしないでしよう。けれど、それを悪しと思う者があなたを止めるし、賛同する者が協力するでしょう。

それがたとえ、幻想郷という小さなコミュニティを崩壊させる未来しか見えなくても」

「……………」

「あなたの犯した罪は、外の世界の尺度で言えばそれは大きなものでしょう。けれど、それと比べれば私はどうでしょう。」

あなたの行った事柄など、結局は人間個人で行ったもの。あなたよりも永く永く生きたここの住人にとっては些細なことです。

知っているかもしれませんが、幻想郷はこれまでも2, 3ほど、もしそれが成されたのならば人の住めなくなることになるであろう異変が起きています。

しかし、今ではその首謀者を交えてまるで旧知の仲の様に過ごしている。そんな、世界。だからあなたが何をしようと」

「だからといって、何をしてもいいわけではありません」

そこまで話していた幽々子の言葉を、また別の声が遮る。

外の方からであった。何事かと向くディアボロと、少し笑みを浮かべる幽々子。

障子に映っていたアンの薄い影が立ち上がり、礼をする。それを横切るように小さな実体を持った影が通り、

「お邪魔させていただきます」

静かに、ではあるが妖夢が行ったような所作ではない。勝手を知る友人の部屋に入る様な、そんな所作で部屋に立ち入る。

「あら、来られたのですね閻魔様」

「遣いの者が来ましたからね。それにしても西行寺、そうやすやすと人の過去に付け込んで誑かすのではありません」

入るなりに口を滑らかに動かす、閻魔と呼ばれた少女―四季映姫―。

その幼い容姿とはそぐわず、幽々子に対しても怖じもせず食って掛かる。対する幽々子はおどけた様に耳を塞ぎ、頭を抱えている。

「こら、聞きなさい。あの世の者がこの世の者に関わることは生と死の境を曖昧にさせる。本来ならばあなたはこの世の者と関わってはならない。そのための従者がいるわけでしょう。そう、あなたは少し

生に触れすぎている」

「きやく、聞こえない聞こえない」

「……閻魔……?」

ディアボロも知らないわけではない。仏教の、死者を裁く神、程度は知っている。

だが、どうしても日本の書物でよく表されるいかつい姿とは似ても似つかぬ姿に対して、驚きを隠せない。

「……そうですね、西行寺への説教は後にしましょう。『お久しぶり』です、ディアボロ。と言つても、姿は少年のままですが。……憶えていますか?」

幽々子と同じように、再開としての挨拶を交わす。

「……お前は、いや、お前の声は……」

それは、最初に星に見つけられる前の、何かの声。

「いいです、あなたを裁きます。もつとも、そこから先は知りませんけどね」

『、、そこから先は知りませんけどね』

それは確かに、おぼろに残る記憶の声と同一している。

聞き取れなかった前半の言葉も、彼女の小さな唇から放たれる。

「別の者に裁かれたあなたを、生と死の境に永遠に彷徨う曖昧な存在だったあなたを明確にしたのはこの私。

度重なる死の果てに初めて精神の底から願った、死を拒む思いを汲み取ったのはこの私。他にも、あなたの過去を見たりともしました
が」

「……つまり、お前がああ呪縛から解き放った者だということか?」

「正確には、解き放ったわけではないのですが。まあ、おおむねその通りです」

小さく頭を振る映姫。

「どう、いうことだ?」

ディアボロの当然の質問に対し、映姫は手鏡を取り出す。質素な、飾り気はないが優れた意匠が凝らされている鏡。

それをディアボロに向けると、そこには彼の姿が写らない。写っているのはドツピオの姿ではないディアボロと、それに対峙する——
「ッ、ジヨルノ……!!!」

矢のパワーを得て覚醒したジヨルノと、それに寄り付き添うゴールドエクスペリエンス・レクイエム。

鏡越しにでも伝わる、彼自身が信じる『正義』の精神と、それに誰しもが惹かれてしまう様な圧倒感。

自分はどうだ。今まで張っていたものがすべて虚仮のよう。神に挑む愚かな人間のようにも感じられるほどに、矮小に感じられた。

「この鏡は浄玻璃の鏡。映した物の過去の全てを晒し出す。普段は相手の罪を確認させ反省を促すための物なのですが……」

「わあ、かつこいいわねこの人。くるくる頭の幼い顔立ちだというのに」

「お静かに。スタンド、と言いましたか。あの八雲さえも危惧させた力。彼もあの事変に類する力を持っているのでしよう、きつと。」

その力は、10年以上の歳月を得て、世界を越えてもあなたを縛りつづけた。その力を、私は完全に御しきれていない」

鏡の中はあの時を再現し、真実に到達できなくなった決定的な瞬間を映し出す。

「人が人を裁くことなど驕りの極み。ですが、あなたに対する、あなたを通じての個人の思惑を超えた感情が力となってあなたを縛り続けている。」

本来私は死者を裁く者。生者を裁く権利はない。私があなたを裁くには、あなたが死ななくてはいけないのにあなたは死ねない。

生者を完全に裁くことのできない私には、生きている者の影響を白黒はつきりさせることはできないのよ。あなたが死を繰り返さないのは、精々幻想郷の中だけでしよう」

鏡の中は、その後辿り着いた水路に逃げ込む自分の姿。すぐ後に刺されるだろうその姿は、映姫が鏡をしまうことで終わりを告げた。

「あなたという人物の聡さを理解しての行動です。全てを知った後にこの事実を告げることは。それが、八雲の提示した案。」

曖昧、流転、不形。そんなものの象徴ともいえる彼女は自身があなたに影響を与えることを避けたかったのでしょうか。故にあなたに会うはずにいる。

嘘を好まず全てを包み隠さない私というものを使いながらね。……まったく、あれにも生を見つめ直してもらいたいものです」

はあ、とため息をつき、一区切りを入れる。

彼女から与えられた事実に対して、再び思考材料が増え顔を強張らせることしかできない。

立ちながら説明を続けてきた映姫は、将棋盤の前にかがむとディアボロの進めた王将の前に、自分の人差し指を突き立てる。

「……以降、私はあなたを裁くことはないでしょう。あなたがもし死に、それを裁くことになるならばそれはあなたの世界の閻魔によるから。私は幻想郷の担当であり、幻想郷で生まれた者しか死後に私の元に集わない。

あなたの犯した罪は、紛うことなく地獄行きでしょう。私利私欲、自らの為に犯し続けた罪の数は述べるだけで一苦労です。更生の予知はありません。

それでもここで何かを犯すのであれば、それを私に止めることはできません。ごっこ遊びならともかく、現界に手を出す力は私にはないのでから」

もう片方の手でディアボロの片手を借りると、その手で自分の指を弾いた。その小さな手は、確かに年嵩の無い少女の柔らかい皮膚に包まれていた。

最も、今までそのような容姿で強力な力を持つ者達に何人も出会っているのですそれが信頼の証になるわけではないのだが。

「そして最後にもう一つ」

さらに続けて、指を一つ立て注目を集めながら映姫は話す。

「ですがその前に問いかけです。ディアボロよ、あなたははたして人間なのでしょうか?」

「何だど?」

「え?」

その問いかけには意外だったのか、幽々子も目を丸くして反応を
する。

問われたとしても、漠然としすぎていて質問の意図を掴めない。そ
れ故に、返事はそれだけしかできなかった。

「凡そにして、人間とは肉体・精神・魂の3つから成り立ちます。これ
については特に議論を必要としないでしょう。ディアボロ、あなたも
かつてはただの人間でしたのでしょうか。」

しかし、今のあなたは一つの肉体に二つの精神、二つの魂が存在し
ている。もしあなたが一般的な『多重人格者』であるならば、精神は
二つ三つに分裂していようが、魂は変わりありません。

「何故あなたが」

「少し、待て」

滔々と語りかける映姫に対して、手のひらを向けて止めるように示
す。

それと共に、ディアボロの肉体が、ドツピオの物である少年の身体
からぐぐ、ぐぐと、遅しい成人の身体へと少しずつ変態していく。

「……あら、あらあら、まあ」

少年の姿に合わせて作られた衣服は、変わっていく中身に引かれて
ややも隠す部位が減っていき、隙間から見られる精悍な肉体は久しく
異性の素肌を見ていない幽々子の頬を赤らめさせる。

数刻の間をおいて、そこに少年の姿はなくなっていた。

「確かに私の今の肉体には二つの精神がある。自分の精神と、もう一
つの精神。魂がどうのこうのとは理解が進まないから後で聞くとし
て……」

ドツピオにはこの肉体を扱えず、私の時でしか使えない。こうも変
貌をするのであるなら、肉体も二つと同義ではないのか？」

「いいえ。どれほど変わろうと一つは一つです。……精神の有様に
よって僅かな変化を起こすことはよくあることですが、こうも変わる
ものを間近で見ると……驚きです」

覚悟を決めたら顔つきが変わる。意志を明確にすれば体に力が入
る。人格とは関係なしに、人間心持ちで肉体は変わる。

それはほとんどの場合において印象のみであり、彼の様に風貌まで変わる例はそうそうない。が、ゼロではない。

「肉体が二つとは、それこそ文字通りのものであるべきです。そのよ
うな存在は、私は魂魄の者くらいにしか見たことがあります。」

あなたの、そこまでの顕著な変化はあまり見られないですが、そこ
に二種の差異は私には視えません。ですが、それでも。

ただ人格が複数あるならば、その人格が成長を重ねることに一つの
精神として成り立つこともあるでしょう。ですが、魂が成ることはほ
とんどを以て起こることではない。何か、心当たりはありますか？」

どうでもいい話だ、ともディアボロは感じるが、彼女の迫及する態
度には、徹底したものを感ずる。だが、それと共に不自然にも感じる。

先ほど取り出した鏡を使えば、自分の過去を全て見ることができ
るという。それがあつたらば、彼女の言う心当たりは彼女で探せるだろ
う。当人さえいれば。

今相対していて鏡を盗み見るような真似をしているわけではない。
そして、彼女の役職から考えられる符号。

「……………ある。先ほどの出来事、その直前に起きた片鱗。その時、私
とドツピオは確かに離れた」

それはおそらく、自覚と承認。他者に言われるのではなく、自ら顧
みて出来事を見つめさせること。

今更この者の前で過去を隠すことなど愚行に等しい。故に、自分に
起きた出来事を話す。

「奴があつた力に目覚める前の、失敗例。それにより近くの者全ての、生
き物すべての人格が、精神が入れ替わつた。人も犬も鳥も関係なく。

その時、無闇に引つ張られることに危険を感じた私はあえて娘の肉
体に精神を滑り込ませた。一番近い者であるなら、気取られること
はないと考えて。

その時は精神と魂は同一の物であると考えていたが」

「そもそも、あなたは自らの精神、魂を自在に表に出したり、裏に潜め
たりすることができると。それが、他者の肉体であろうと。

さすがに相手の肉体そのものを支配できるわけではないようです

が……それすらもできるようなのであるならば、すでにそれは人間の枠を超えているでしょう」

「ドッピオにはできないが、私にはできる。自分の身体は自分で思い通りに動かすことはできるが、他者の身体ではできない。それは確かだ」

「本題に戻ります。ディアボロ。あなたがもし自分の精神を他者に渡したまま自分の肉体が死んだ場合、あなたはディアボロなのでしょうか？ もしそうであるならば、あなたは『人間』なのでしょうか？」

長い解説を話して、改めて映姫に問われる。

彼女がどういう答えを期待しているかはわからないし、結局振り返ってみても答えはわからない。正解がそもそもないようにも思える。

他にその答えを考える者がいるならば、それが十人居れば答えは十通り出てくるだろう。

「私は『帝王』^{ディアボロ}だ、それ以外の何者でもない。生まれ落ちた時からの逸脱の身、今更そのことで悩むつもりはさらさら無い」

映姫に突き付けた一つの答え。それが、これからの自分を示す決意の言葉でもある。

ここに来た理由、その過程。それを知ったからこそ、ここに来たべき理由を自分に刻むために。

それを聞いた映姫は肩と溜めた息を下ろし、

「この問いに答えを見つけなさい。それが今のあなたに求められる最後の善行よ」

その言葉には、理解されなかったようなややも呆れたような感情が籠もっていた。

日は落ちた。部屋に射し込む日光は既になく、外に僅かながらに点在する灯籠からの漏れる灯りと、柔らかな月の光が部屋を照らしていた。

その光を遮る障子がか細い光をさらに細め、急にこの部屋に入った

者ならどこに何があるのかわからなくなるだろう。

中にいた3人には、ずっと部屋の中にいてその光に慣れているのもあってそのようなことは起きないのだが。

ほ、と幽々子が手を掲げるとその周りに光を纏った蝶の輪郭が現れる。

その蝶は意志を持つように部屋の隅に置かれている行燈に向かう。その中に入り込むと、同じような色の明りが行燈に点く。

「お話は終わったかしら」

日常の夜として使うには暗すぎる光源が、ここが、彼女が、亡霊の園とその主だということを思い知らされる。

吹けば飛びそうな幽かな明かりが彼女の顔を照らし、妖しさと儂さを表していた。

「夜も更けて、お腹も空いてきたでしょう？ 妖夢たちが作った美味しいごはんにしましょう。そうしましょう」

「……あなた、それを待っていただけでは？」

「さあ、聞こえませ〜ん」

うきうきと、先ほどの印象を払拭するような声を出し二人を促す。

「二つ隣の部屋に、今頃皆が用意した晚餐の準備ができています。さあ、お立ちください。ご案内しますわ」

先に立ちあがり、外への境を開いて二人を誘うように手招きをしながら、幽々子は先に行く。外は、部屋の中よりも明るく庭を照らしていて夕暮れとは違う印象を植え付ける。

映姫もそれに続いて外に行こうとする。が、その後続はなかった。

「……どうしました？」

映姫が、動こうとしないディアボロに問いかける。その表情は、途中にも見せた何かを考え込むような顔。

「先ほどの事を考えているのですか？ それはまだまだ早いこと。至らぬ事に時間を費やすより、目の前の事に集中してはどうでしょうか？」

「……こういうのもなんですが、あなたは十分に理知聡い。その事をわからないとは思っていません。相手の誘いは受けるのも善ですよ」

「……………いや、それはわかっている。だが、一人の時間が欲しいのだ」

にこりと、先ほどまでの雰囲気からは想像できない優しい笑みを浮かべて彼を誘う映姫だが、その善意を敢えて跳ね返す。

あまり強く言っても効果はないだろう。どうしたものかと映姫が考えた時、

「二つ隣の部屋です。わからなかったらアンに聞いてください。さ、閻魔様。行きましょう」

「……………ええ。わかりました。西行寺、あなたには山ほど言いたいことがあります。この機会に満足するまで聞いていただきましょう」

「耳まで一杯にされちゃうのね。楽しみだわ。それでは、また今度ね」
幽々子が彼に目配せをしながら、引つ張るように映姫を連れ出す。

二人の少女はややも騒ぐように、その部屋を後にした。
「…………………………」

残された、静寂。

その中でまた、一人で考える。何かを思案するときには、こうした孤独が心地よい。

もつとも、厳密には一人ではないのだが。彼からは霊ゆえか息遣いも衣擦れも、気配の欠片もほとんどない。

気にならない、というわけではないが、黙って見られているよりははるかに良い。

(……………)

もちろん、先ほど言われたことが何よりも項目である。まさか、人間かどうかまで問われるとは思っていなかった。

だが、それと共に見せられた記憶の残滓。それにより一つ気にかかることがあった。

確かにあの時に切り捨てたドツピオの存在。最後まで見ていなかったが、ドツピオはブチャラテイの肉体に引きずられて死んだ、はずだ。

それを最後まで見届けてはいない。だが、肉体が死んだらその魂は共に死ぬ。それはナランチャの魂が入ったジヨルノの身体で確かめ

られた。

魂の消滅した空洞の肉体を修復、機能を再開させその中の元の魂が戻れば元の通りに戻る。スタンド使いだからこそ、できる事だろう。あの時、ジヨルノもあの娘もまた同じように戻ってこれたのだから。……それが、ドツピオにも起きたのだろうか？ 自分が鎮魂歌に捕らわれ、幾年の歳月を経て、全てを置いていく時間の加速が起きて。挙句にここに行き着いて。……それで？

その可能性はあまりにも低すぎる。死んだ彼の魂が10数年、自分の周りについていたとでも言うのだろうか。破綻していたとはいえ、自分という肉体の受け皿はずっとあったというのに？

すでにオカルトじみた考えになってきているが、可能性を提示された以上、浮かぶものは全て留めておく。

何故、今。ドツピオは自分の身体に戻ってきたのだろうか。昨日の夜にも気に掛けたこと。他の要因で途切れさせられたが、理解するべき項目としては高い位置にある。

(……もし。客人よ。話を一つ聞いてもらえだろうか。いや、聞きたくなければ戯言として聞き流していい)

ふと、外から聞こえる声。それは鼓膜から響くのではなくスタンドを介して聞こえる心の言葉。

(どうしてもこの位置からでは中の話も聞こえてしまうからな。何、中の内容は他言しない。我が主にもオレから話そうとしない限り伝わらない。して、話だが)

彼も中に向けて話しているわけではないし、ディアボロもそちらに目をくれるわけではない。

(王、という単語を使ったな。久しい、言葉だ。かつてオレが忠誠を誓った方も、王という器にふさわしい人物だった。世間には暴君と呼ばれる支配欲にまみれた方だったがな。

そんな方だったが、それでも忠誠を誓う者は大勢いた。あの方に仕え、モノとして捨てられても良いと考える者も居た)

「……………」

(オレがスタンド使いとして差し向けられた時と、客人が生きていた

年代は違うだろう。それに伴い人間も変わる。10年あれば、感性は変わる。

それでも、客人にそうした誓いを立てる者はいただろう。雰囲気から察するに、あの少年がそうなのだろう」

「……」

（再び巡り会えたことに感謝せよ。その逢着に偶然はない。巡り合えたことが当然なのだ。引力とはそういうものなのだ。これは、その方がよく口にしていたことだ。

オレには頭はない。安っぽいが、そのことを伝えたかった。ただ、どうしてもそうしたかった。……それだけだ）

そういうと、アンは立ち上がり二人の進んだ側に歩き出す。彼を完全に一人にしておきたい、それを願っていることを読み取ったのだろうか。

それの方が都合がいい。

「……引力、か」

再び出会うことが当然というのであれば。それが当然の帰着というのであれば。

思い出す。過去にディアボロとして生まれたこと。ドツピオとして生まれたこと。

多重人格とは、心の傷の埋め合わせ。行ってしまえば、過剰な防衛本能。

今までは死ぬ直前まで心は裂け続け、死んでしまえばその状態は全て治り再び死ぬ。

実際に裂けきった二度目は、ごく最近。あの閻魔が『裁いた』のち、再び死ぬと錯覚したあの時。

「感謝、か。そうだな……ありがとう。それしか言う言葉が思い出せない」

この感情こそ、いつ以来だろうか。相手を尊重すること、無条件の謝の気持ち。

口から出すことはあっても、本意で言ったことなどあっただろうか。相手からのその気持ちを、受けたと感じたことがあっただろうか。

か。

それは、彼にとって初めてだったのかもしれない。

「それで終わりか？ そんな、三文芝居は」

突如、部屋に声が響く。

素早く辺りを見回すが、誰も……いる。部屋の片隅に置かれた行燈が、その影を照らしている。

揺らめく影は人の姿をしているが、その元にいるはずだろう影の主は姿が見えない。ただ、影だけが見えている。

「私はそんなお前を見たことがない。そんなお前を見ていたわけではない。お前は悪辣だ、お前は害悪だ、お前は吐き気を催す邪悪だ」

その影は形を変えてディアボロに近づく。人の形から、一つ、二つと何かが増えて影の形を変えていく。

何者、だろうか。侵入者がいればあの従者が、あの半霊が察知するだろう。悪霊？ の類であるならば、亡霊姫が対処できるだろう。

それらに何もかからない、侵入者。口ぶりからは、対象は自分自身。「何者だ」

そんな安っぽい言葉を求めているのではないだろう。『それ』からすれば、自分は被食者、相手が捕食者だ。

もちろん、それで終わるつもりはない。立ち上がり、その影に向けてスタンドを差し向けながらも一步を踏み出す。

「そんなことを答える必要もないんだよ。あんなことを考える必要もないんだよ。お前は相変わらず、手の平に転がされ続ければいい。主に、私に」

にじり寄る様に、ゆっくりと歩み寄る。部屋はそれほど広くもないため、ディアボロが一步を踏み出せば、そのまま影に足を踏み込める、はずだった。

突然、背後から自分の両腕を巻き込んで抱きつかれる感触。突然の触感に、心臓の鼓動が高く響く感覚と頭頂部まで一気に血流が昇っていく感覚。

背後のそれから感じるのは、圧倒的な肉食獣の気配。まるで自分の

事を強く示すかのような、身に着けている衣服に阻まれてもわかるほどの肉感的な感触とそれに伴う早い鼓動。耳元に被せられる妖艶さをも感じる吐息。

「なああああ、ディアボロ？」

―真実へ向かうための行進曲 1―

からら、と障子を引く音がすると、開かれた先から香る宴の匂い。座敷には、幾多の料理が並べられていた。とりどりの色が、視覚からも食欲を誘う。

「お待ちしておりました。準備はすでに出来上がっています！」

客人を招くために待機していた妖夢は現れた二人を出迎える。床に指を着け丁寧な頭を下げ、満面の笑み。

「ありがとう妖夢。まあ、今日もおいしそうねー。みんなの作る料理はいつもおいしいけれど」

「お褒めいただきありがとうございます！ 閻魔様もどうぞ召し上がってください。おかわりはたくさんありますよ」

「うん、見ればわかります。……相も変わらず面白い量ですね」

それぞれの席の前に並んでいる料理の中、上座にはその何倍もの量が並べられている。

いそいそと幽々子とその前に着くと、先の妖夢の様な満面の笑みを浮かべ、

「さあさ皆さん、召し上がりましょう。今宵の邂逅に感謝をこめて」

その言葉と共に、映姫も小町も席に着く。……が、卓を囲むに歪な、空席。

「……あれ、あの子は？」

ようやくドッピオがいらないことに気付いた妖夢は、外を見てきよろきよろと見回す。

周りには彼の姿はなく、幽々子たちが居た先ほどまでの部屋にはアーンが立っているばかり。

厠にでもいったのか、とも思える不自然な消失に、彼女は思わず声を出す。

「何でも、一人で考えたいことがあるそうです。おなかが減ったら来ると言っていましたよ。……むしろ小町はどこですか」

「小町さん？ ああ、もう少し飲むものが欲しいってことで取りに行っています。お客様にそのようなことをさせられないって言った

んですが気にすんなの一点で」

そう言うと、彼女らの入ってきた側とは反対の襖ががらと開く。

「うえーい、妖夢、持ってきたよ、のものも……」

多量の瓶を抱え込むように持った小町が襖を開いた。その手は使えず、かといつてそれを下ろした形跡はなく。

「あ、あはは……お揃いでして？　ならば妖夢も呼んどくれよ、そうすりゃちゃんとやったのに」

「……何をちゃんとやるのかは知りませんが、そんなに焦るようなことではないでしょう、小町。さ、魂魄が用意したのです。食べようじゃありませんか。ほら、閉めて」

「あっはい」

言われるがまま、バツの悪そうにその両手の物を下ろそうとし、

「何をやってるんですか？　先ほどの様に閉めてみなさい。足で開いたように」

「いや、その、とつかかりとか無いし開きはまだしも閉めるのはちよつと、その、すいま」

「閉めなさい」

「あっはい」

その様子に、幽々子は堪えられず吹き出し、妖夢は我慢しようと顔を伏せているが、肩の小刻みを隠しきれしていない。

楽しい時間は始まったところだった。

その空席を、空けたままに。

最初に感じた思いは驚愕だったが、次に感じた思いは淫靡さだった。

背後から抱きつき、自らの胸と局部を押し付けるような動きを交えながら、自分の体の線をなでるその手つき。

「私はなあ、お前が嫌いだよ。嫌い嫌いでしょうがないよ。存在も疎ましく、思っているんだよ」

顔の真横からかけられる言葉こそ呪詛だが、口調は情欲を掻きたて

る様な熱く甘い囁き。

「だけど紫様はそんなお前を視ていろうと言う。害悪の末を視ていろう命じる。お前の様な存在する価値もない屑を……なあ、何でだと思う」

興奮し、上気した体温が肩元を通して感じられる。蕩けきったような目線が自分を突き刺す。

「わからないよなあ。あの御方の考えられることなど。私も同じだ、お前なんかと同じなのだよ。……主の考えを察せない従者など、存在する価値もない」

それは、求愛行動。いや、その先の互いを高め合う行為そのものだった。

「そう思った時には、お前を求めていたんだよ。わかるよな、出来損ないの部下などいらぬ。お前なら、わかるよなあ」

唇の動きが耳の僅かな感覚から通して理解でき、そこから脳を溶かし虜にする様なその声の響きには、性を手玉に取ることに長けた手練れさを含む。

だから、ディアボロは。

「ああ……わかるツ!!」

顔面のあるべき所へ、スタンドの拳を撃ち込む。これ以上彼女のペースに付き合う必要はないし、付き合えば墮とされてしまうだろう。

実際、行動に至るまでは時間をかけさせられた。未だあの甘い余韻が頭に響く感覚が残る。身体をなでる感触が、無理やり引きはがすことに後悔を感じるほどに。

撃ち込んだ拳は確かな手ごたえを感じ、そこにあつたものが影や幻、もしくは幽霊の何かでないことを理解させる。

だが、浅い。

「……………くっ、くっくっく」

素早く後ろを振り向き、その撃ち込んだ顔に視線を向ける。

倒れた音はしなかった。引きはがしたその女は、撃ち込んだ顔を手で隠し、薄く笑いを浮かべている。

特異なのはその姿。頭部には動物の、狐の耳と背後に広がる九つの尾。

「そうだよなあ、そうするしかないよなあ。素直になるわけがない。お前が、お前ほどの者が……なああ？」

正確には撃てなかったが、それでも声の質に変わりはない。……あの一瞬から、不意を読み切り最小限のダメージに留めたのだろう。

すり足でわずかに下がり、一步で拳の届くよう距離を調整しておく。その不気味な反応と、自らの得意とする距離として。

「ああ、ああ……ああ！ 嬉しいよ、予想通りで。私の思いがお前をなぞっているようで。もつと見せてくれよ、私はお前を知らなくてはならないんだ。」

次はどうしてくれる？ どう攻めれば、どう返す？」

大仰な音はしなかったが、それでも自分と相手の声、部屋に響く打撃音で、部屋の異常は察知できるだろう。半霊も庭師も、そこまで愚鈍とは思えない。

だが、この部屋に様子を見に来るものは誰もいない。女も奇妙であったが、その点も不思議であった。

亡霊姫か閻魔に嵌められたか、その二人の裏をかけるほどの実力を持つ者と対峙しているのか。

後者の方が確実だろう。この者の妄言の様な口ぶりを信じるならば、彼女はユカリの従者であり、実力者には相応の右腕が付くものでなければ、従えられない。

「その瞳、その眼差し……ああ、本当にお前を軽蔑するよ。その手を侮蔑する眼つき。……くくつ。けれど、なあ。不思議だよ。全く嫌な気分がしないんだよ。」

お前の鼻につくようなその態度を屈服させられたら。私がお前を服従させられたら。さぞ紫様はお怒りになるだろう。命じられたこととは違うことをやっているのだから。最高の従者と認めたはずの者が、自分勝手に物事を取り進めているのだから。

切られるかもしれない。捨てられるかもしれない。二度と、あの御

方に目をかけられることがなくなるかもしれない。……それでも、なあ？ 墮落とは常に蜜の味だもの、なあ？」

ひたすらに同意を求めてくるその眼は、自らの狂信を相手に強要するような狂った瞳。相手は自分の事を理解していて当然と思っっている濁った眼。

「ふふ、ふふふふふ。うふふ、ふう。……汗をかいているな。手の中、首元、背中にかけて」

その言葉を聞き、ディアボロは再び心臓を鷲掴みにされたような感触を味わう。明かりがついているとはいえ、相手の細かいところまで見えるほどの明りではない。

その言葉は自分ではなく女自身に対しての言葉かもしれないが、自分も同じなのだ。相手に見えないところ、うつすらと汗ばんでいるのを感じている。

自分の中に残っている常識が、目の前の非常識に対して未知の恐怖を味わわせている。自らの弱点を思わせるその点においても、驚きを隠せない。

「どうしてわかるっていう顔をしているな？ また少し発汗が増えたな。どうしてそう思った？ 何を感じた？ 汗を舐めれば、それもわかるんだがなあ。心に対して、体は正直だからな」

まだ顔を隠し、指の隙間から垣間見える歪んだ瞳は、的確に言葉で自分を追い詰めようとする。空いた手でこちらを指すその手が嫌に大きく、圧倒してくるように感じる。

「何者だ、いや、何が目的だ？ ……目的と行動が一致していない、矛盾しながらも、忠誠を裏切っていないながらも承知で行動を起こす、理解ができない」

声を張り、自らを奮い立たせる。決して相手を圧倒させる必要はない。自らの地盤を、足を震わせないように。虚勢を張るのは弱者。自分を下に見てしまっている証だ。

「私を服従させたいのか？ 支配下に置きたいのか？ 力での屈服を望んでいるのか」

「そうだよおおおおお!!」

突然、叫びだす。その方向は、辺りを震わせ、肉食獣の圧倒さを感じさせた。今そこにいるのはただの女ではなく、獣を元にした妖怪なのだ。

人間を襲う、妖の者だと。

「この世界に不要な汚点！ 理想郷に邪悪はいらん！ そんなこと、分かりきっているはずなのに!! 何故!! 居るだけで腐敗を感染させるような貴様を!!」

何かあってからでは遅いのだ！ 管理者として、支配者として……取り除くべき存在だとわかっているだろうに!!

……けどなあ、紫様は聡い方だ。私なんぞ到底及ばない。それを理解している自分もいる。けれど、そんな臓腑の煮える様な危険を放置できない。

貴様に言われなくとも理解しているんだよ、矛盾で焼き切れたこの脳でも」

頭をガリガリとひっかきながら、辺りに毛を散らしながら、自らに言い聞かせるように吐露し続ける。

血に濡れた爪先を突き出しながらも、その思いは止まらない。

「主に従うことのできない従者など必要ない。主の手をいずれ煩わせることに繋がる、忠誠があるなら尚のことだ。私は自らを抑えきれなくなった。従者失格だ。御傍にいる資格はない。

ならば消えてしまおう。それが最も主の為であるし、自分の為である。不要だとわかっていて縋る様な醜い真似などしない。自らの誇りを最後まで持つて。

………くく、んくく。違うよな、八雲藍。そうじゃないだろう、藍」

自虐するかののように、その行動は止まらない。彼女―八雲藍―の血は爪先から手へ、顔を濡らしていく。

「ああ、そうだよ。頭で理解していても、その心が止められないのさ。お前という存在を知ってしまったから。経歴も過去も未来も、主も幻想郷も関係なく。たまらなく。どうしようもなく。

この齢になって種の生存本能を掻きたてられるとは思わなかった

のさ。式神として仕える様になってから、そんなもの捨てたと思っ
いたのに。

何もされていなければそのまま抑えきれていたというのに、あの蛙
が井の中で世界を収めていればよかつたというのに」

ぴた、と頭を掻き塗る手が止まる。一瞬、全てが切れたような虚脱
の眼。

それが逆に恐ろしかった。吐き出して、思いの丈が止まったわけ
はない。心情を言い聞かせて満足させたわけではない。

こちらにも注意していたからわかる、感情の転換の一瞬の隙間。

そう、一瞬でも感じたディアボロは即座に、彼女から間合いを離し
た。

「あああああ!!! そうだよ、お前が欲しいんだよおお!!!
!!!」

「もぐもぐ、はふふ、もぐ、もぐ」

「いやあ、西行寺！ 相変わらず見てて気持ちのいい食べっぷりだ
ねえ！ なんだかあたかも負けじと飲まざるを得ない感じになるよ」

「小町、それはあなたが飲みたいだけでしよう。仕事中にも飲んで
ここでも飲んで。鬼ではないんだからそんなことばかりしていると」

「おかわりお持ちしましたよ！ 閻魔様、どうぞ」

「……いただきます」

「ようむー。ごはんー」

「はいはいー」

アンが宴の部屋に入ったころには、すでに盛り上がっている状態
だった。

幽々子の周りには大量の空き皿、小町の周りには酒瓶が転がってい
る。映姫は体格からか少しずつのようなうだ。

妖夢は、大量の霊たちが運んでくる料理を個人に合わせて並べ、空
いた皿を片付けてと、忙しそうに回っている。

(……どうにも、慣れん。この空気は)

500年以上前に生まれ、スタンドとして今も残っている精神。か

つては刀剣を作ること生きがいとし、その生きがいは次第に優れた刀剣を証明することに走っていった。

それはスタンドとなっても変わらず、倉庫の奥底から呼び出された時でも、時を渡って新たな主に就いても彼の本心は変わらない。

故に、この皆で楽しむ、享樂を分かち合うという空気はどうにも馴染めなかった。

妖夢も『次第にあなたも馴染めますよ。馴染めなさい、命令です』と師気取りで語っていた。そしてそれが今の世であるし、自分に必要な物。

だが、戦闘兵器として変わっていった精神は、容易にその現実を受け入れられなかった。

だから、今はこの場に存在はするが、少し離れた所にて皆を観察していよう。そう思っていた矢先。

「おー、来た来た。えーっと、アンだっけ？ 半霊さん。珍しい存在だって聞いたから話してみたかったんだ。ほら、こっち来て座りなよ」

顔を自分の毛髪と同じくらいに赤らめた死神が手招きをする。ばばふと埃を立てながら座布団を叩き、来いと呼びかける。

一瞬どうしたものか、断ろうかとも思ったが主の主が招いた客人。自分の意思で無碍にはしてはなるまい。

そう思い妖夢の方に視線を送るが、当の妖夢は忙しそうで気づいていない。

「来ないのかい？ なら私がそっちに行っちゃおうかなつと」

まごついているとあちらの方からやってきた。関係を保ちたくはないと表情に出すが、酒飲み相手には全く効果が無いようだった。

「……へー。近くで見ると確かに妖夢だ。妖夢の半霊なんだから当然だが……こう、漂う雰囲気は違っているのに気配として感じられるのは知人であるならば妖夢が強くなったようにしか見えないだろう。面白い」

ぐにぐにと、小町はアンの顔をいじる。話を聞きに来たんではなかったのだろうか。

不快そうな表情が表に出てくるが、小町はそれを笑い、

「そう嫌がるなつて。おまえさんが可愛らしくてつい、な。触った感じは霊らしいが……中身、男なんだろう？ 居づらくはないのかね」
「びいやああああっ!!」

「んあ」

そのいじる手つきは身体の下の方に降り、鎖骨あたりを触れたところで離れたところから叫ぶ声が聞こえる。

共に、空気の割れる様な高い、多量の皿が壊れる音。

その後すぐに、顔を赤く染めて妖夢が小町に詰め寄る。その赤みは酒ではなく、羞恥だろう。

「ど、ど、どこ触ってるんですか！ 変な所触らないでくださいよ!!」

「え？ あれ、そんなに繋がってるのかい？」

「私の身体です、当然じゃないですか！」

「えー、いつも丸っこい時に触ってもそんなにならなかつたじゃん」

「この時は、ダメなんです！ 似通っちゃうから、敏感な所は敏感なんですよ！ そんなところ、まだ誰にも触らせたことないのに！」

「落ち着け、発言がヤバイ」

真つ赤になりながら小町に追い詰め畳み掛ける。もし武器を構えていたならば、そのまま使ってしまうような勢いで。

「あらあら、妖夢もまだまだねえ。……そういえば、……うふふ♪」

「……何ですか、その眼は」

一方の幽々子と映姫。幽々子はゆっくりでありながらもペースを落とすことなく食事が続いていたが、配給役がいなくなり惜しむように少しずつ食べる様になっている。それでも、まだまだ残っているが。

映姫はそれに惑わされることなく、少量ずつ飲んでいる。それほど強くないのだろうか、朱が刺した頬と少々とろんとした目が幽々子を睨む。

「身体を触ったとかでちよつと思ひ出しちゃって。彼、なかなか素敵だったわね。虜になる人が増えるのもわかるわ。映姫ちゃんはどうだった？」

「何ちゃん付けしてるんですか。というかさつき私が言ったこと忘れ
ました？　そもそもあなたは亡霊なんだから種が違っているんだか
らそれなりの趣に」

「今更に妖怪と人間の差もないわよ。半獣、半神、半霊……昔から間柄
を持った者はいたわ。今のはそれを否定しているのではなくって？」
「それは拡大解釈しすぎです。あくまで一般的な趣について話しただ
けですから。そもそも、私は閻魔です。そのようなことに現を抜かし
ている暇など」

眠たそうに頭を傾げながら説教とは違う多弁さで反論をする映姫。
そんな姿を見て、小町が引つづく妖夢を押さええて引きはがしなが
ら、

「あつはっはー。違うでしょボス。相手が誰だかあたいは知らんけど
あれでしょ、シヨタじやな　らでしゅえ」

その言葉最後まで発されることはなかった。その場に小町はいな
かった。

その場に居たのは悔悟の棒を振りきっている映姫がいた。完璧な
フォームだった。

それを皆が認識した時、向かいの壁から肉がぶつかる様な音が宴の
席に響く。

「速度×重さ＝破壊力。なるほど、確かなようですね」
「……ぐえ」

振り切ったその先には、逆さまになって壁にもたれる小町の姿。ア
ンや妖夢を弾き飛ばし、かなりの衝撃を喰らっているよう。

「小町、私は今罪を感じている。身の丈に合わぬ者に焦がれることを、
その思いを周りに周知されたことではありません。それを抑え昇華
させることは少なからず善行に繋がりますから。」

ではなぜ罪を感じているか？　答えは明白。問われるべきでない
罪を、自らの勝手で裁こうとしている。いわば、私刑をしようとして
いるから」

悔悟の棒で自らの手のひらを叩き、強く威圧するような見下ろした
目で小町を見つめる。

一つ、二つと手のひらを叩くごとに、その音が重く強く強くなっていく。その様、まさしく閻魔。

「悔悟の棒がどんどん重たくなっているのを感じます。ただ道を示すだけの説教ではない。これは勝手な司法だ。後に、私は罪を償いましょう。」

そう思えば何でも許される。それこそ最も嫌悪すべき思考。自らをそれに染めれば染めるほど重さを増す。……小町、次に私が何をやるかわかりますか」

「……………あ、あの、すみません」

「わかりますか」

重力に従い、ずるりと床に突っ伏すように倒れ。その後顔を上げて謝罪の言葉を述べるがそれは閻魔に通じない。

縫るように妖夢に目を向けるが、「当然です」と怒った顔をしてそっぽを向く。

幽々子と言えば、再び肩を震わせて笑いを堪えているばかり。

「……………み、右からですか」

答えない。

「ひ、左からですか」

答えない。

「りよ、両方ですか!?!」

それに対し、にっこりと笑みを浮かべる。小町は、こんなサデイスティックに笑う映姫を見たことはなかった。

「た、たすけ」

「小町。あなたの罪を数えなさい!!!」

顔面に棒が飛んでくる。様々な思いが走馬灯のように駆け巡った。

悔悟の棒は相手の罪によって重さが変わるから自分の罪関係ないだろとか、そういうえばあんな顔見たことあるけどその時もあたいは叩かれてたっけとか。

右からの一撃を喰らい、破裂音と幽々子が我慢の限界で嘔き出す音。一瞬見えた完全に恍惚の表情を浮かべている映姫の顔。

全てがスローモーションに感じる。激しい痛みが一気に襲ってくる

る前に、左から棒が飛んでくる。あ、これ風見がたまに見せる顔だ。間抜けな想像が頭をよぎる。

右の痛みをはつきりと脳が感じる間もなく、左の一撃で小町は昏倒した。

「……あれ？」

ふと疑問に思うのは妖夢だけ。『自分はいつ跳ね飛ばされた？』

結果的にはそうなっていたが……あまりの迫力で気づかなかつただけだろうか？

少し疑問に思えたが、いたずらをした小町がのされたことによつて確かにスツとしたことと、散らばった皿の破片を考えるとその疑問はすぐに消えていった。

能力は、気づかれなければそれでいい。知られば、時間をかけるほどに対策されるから。

能力が枝葉のように多岐に分かれるのであるならば、わずかなら知られてもいいかもしれない。そう思うのは素人だ。

僅かな情報だけでも、得られることが多い。まして、戦闘であるならばなおの事。

なるべくなら使いたくはなかった。一撃で仕留められなければ、情報を持たれてしまう。

そう思っていたが、

「ぐうっ……！」

「ははは、はあ。そつちに逃げるか。15%くらいだったな」

肩口から血が噴き出す。藍自らが塗りたくった血ではなく真新しい、自分の身体の傷。

恐るべき身体能力を以て、直に飛び込んできた彼女から逃げるために、0.7秒『吹っ飛ばした』。飛ばさざるを得なかった。

が、それでも直前にはすでに彼女の爪は肉をえぐりこんでいて、完全な回避には至らなかつた。

「知っているぞ。お前の能力は。どこで生まれて何処で育ち、どんな

時を過ごしたのかを知っているように。些細なことでも私はなあんでも、お前の事は知っている。

飛ばしたな？ 何秒だ？ 正確には感知できなかったが……1秒にも満たない時間だよな？」

そして、すでに知っている。なるほど、確かにここに来てからは天狗の時と山の神の時、2回だがキングクリムゾンの能力は使っている。

先ほど確かにこいつは自分の事を『視ている』と言っていた。二人は空白地帯で誰も見ていないと言っていたが、その予想を超える実力。

相手は傷つけたその指を、自分の血を舐め、興奮した様子で、

「あは、はははあ！ 舐め取れないよなあ！ あんなヒキガエルのなまっちよろいやり方じゃあ!! 私にはできるぞ、最も冴えたやり方だ！」

……所詮私は主の手足だ。意にそぐわぬ行動を取ればその力は半分も出すことはできない。それでも、どうだ。追いつけたか？ 見切れたか？ ……くくっ」

上機嫌に、魅せつけるように語りかける。赤く濡れた指を愛おしい物を愛でる様に。興奮からか同じように赤みの強くなった唇に寄せ。

狂ったようで、それでもどこか芸術品を思わせる様な蠱惑的な瞳。その瞳が、ディアボロを見つめる。

その姿を見ただけで、世界の中心が彼女であるかのように。そこに惹きつけられてしまうような。そんな魅力さえも感じられる。

「……色狂い共め……揃いも揃って……」

経験がないわけではない。それでも、その一線を優に超えた愛の表現には辟易する。なぜこうも、寄ってくるものはこんな者共ばかりなのか。

知らなくてもいい事を知ろうとし、あまつさえ自らをも手中に収めようとしてくる。

かつての自らの貪欲さを、そのまま味わわされているかのようにも思えるほどに。だからといって、それに流されるつもりは毛頭ない。

だ。
相手が調子づいているその間に、自分も整える。闘いは、ここから

―真実へ向かうための行進曲 2―

戦いの始まりはいつも静。それがいつ切れるか、その程度の話。スポーツであれば、審判を務める者が合図を出す。それをきっかけにする。その程度の話。

一旦は始まった二人の対峙は、互いの挙動を見つめ合い出方を窺う攻防に変わっていた。

ディアボロには『エピタフ』がある。『キングクリムゾン』がある。相手の行動を予知し、その行動を時間ごと吹っ飛ばし、なかつたことにできる。

藍はそれを知っている。不用意に仕掛ければそれを躲される。無駄な労を行う必要はない。

何より二人とも、相手のデータが欲しい。

未知の相手に対する情報。動きの癖、目線の配り方、得意な足運び、色々、色々。武術に特別造詣のあるわけではないディアボロだが、戦いに少なからず身を置いた者、策無しに突撃することほど愚かな行動だと知っている。

既知の相手に対する情報。前例は少ない、完璧な動きは把握していない。ましてや技術以外の特異な能力を持っている。戦いとは、可能性の潰し合いだ。理詰めの一つ一つ可能性を潰していけば、王手などたやすい。そのため、道標。

先に出した方が負ける。互いにわかっているからこそその静寂。正解とは言えないが間違いとも言えない、数ある答えの一つ。

「……………!!」

結果、先に動いたのはディアボロ。

いや、先に動かされたというべきか。藍との僅かな距離を攻撃のために詰めるその行動は、彼のいた所が何かによって炸裂する、その回避行動でもあった。

足元から伸びる影から、無数の触手ともいうべきものが彼を犯そうとその手を伸ばす。一度目標を見失ったその腕は再度目標を補足すると再びその腕を伸ばし始める。

藍も、向かってくるディアボロに対して手を顔の前で交差させ迎撃つ。僅かな距離、行えた行動はそれ一つ。

「ッ、ふっ!!」

一瞬、確かに意識を注視していたはずなのに認識がずれる。

正面から向かってきていたディアボロは視界の端に映り、彼に向けた触手が自身に向かつてくる網膜からの情報。

迎撃の為に構えた腕は振るわれており、彼女の二重の迎撃が行われようとしている、事に気付く。

振るわれた軌跡に沿うように苦無型の青みがかつた弾が生成され、そのまま切っ先を変えず真っ直ぐに飛んでいく。結果、それは彼女の盾となり近づこうとするディアボロを寄せ付けない。

再び、距離の離れた位置に二人は行き着く。薄暗い部屋の中、藍の影が主の元へと帰っていく。

「意識を集中させつつ、並列して不意を狙うか。……常套だが、それを感じさせない技術がある。見事なものだ」

「お褒めいただき恐悅至極。そちらも悠々と回避してくれて助かるよ。求めたいものが得られていく……くくっ」

互いにその技術を皮肉りあい、探り合いは進んでいく。

やはり、よく知っている。長所も、弱点も。ディアボロが抱いたのはその印象。

時間を吹っ飛ばしているときは、ディアボロは基本的に世界の事柄に干渉できない。その間は、ディアボロもスタンドのキングクリムゾンも、存在しないかのように扱われる。

それによって攻撃を回避したり拘束から抜けるといったこともできるが、絶対の攻撃には繋げられない。故に動転からの不意打ちを得意とする。

藍もそのことを理解しているように、飛ばした後のフォローを兼ねた二重の攻撃を最初から行っている。飛んだ後を見てからの対処ではないため不用意に飛ばしすぎれば喰らってしまったという結果に行き着いてしまう。

予知も、その未来を映しだしている。そこに至らぬよう、飛ばすこ

とさえも慎重さを持たなければならぬ。

「よく私の事を調べ上げたものだ。招いた者の右腕と自身で言っていたが……その程度は容易いものか？」

「ああ、容易いさ。紫様の命とあれば冥府の底に沈む大罪人の下着の色も街の浄化に勤しむ為政者の愛人との歪んだ性癖でも何だって……ああ、全てはあの方のため。そう思っていたのになあ」

再び笑みを浮かべながら、彼女の周りに青白い炎が四つ、五つと浮かび上がる。

それは一つ一つがぐねぐねと生理的嫌悪をもたらすように蠢き、まるでそれそのものが生きているかのように錯覚をもさせる、そんな動き。

「この程度しか作れないが、圧倒するには十分だろう。さあ、行け」

藍が命じると、意志を持ったかのように炎が動き出す。一つは素早く、一つはゆっくりと。一つは回り込むように、一つは上からかぶさるように。

それぞれが同じようには動かず、不規則な動きを以てディアボロに襲いかかる。

ディアボロはそれらが向かってくるのを確認すると、目を瞑り念じる。

その瞬間、彼だけに理解できること。世界が崩れ落ち、深紅に彩られた空間へと塗り替えられる。

「キングクリムゾン」

(……!! まただ！)

「……ッ！ アン、感じた？ 今のははっきりとわかった。見て、幽々子様の食事が減ってる」

(……ああ、ああ)

先ほどの騒動から落ち着き、宴は終わりを迎えている。

多量に並べられた食事はほとんど空き、それらを配膳を担当している幽霊たちが片付けている。無論妖夢もその一人。

散らばってしまった食器類も綺麗に片づけられ、最後に幽々子が食べている甘味が終われば今宵の宴は終わりとなるだろう。

「……ですからね、小町。あなたはサボりをしないでちゃんと働いてくれればできる子なんですから。査定も高くして給金も上げられるのに。休みもちゃんと取らせてあげられるのに。あなたがサボってまで得ようとするもの、大体与えられるというのに。」

あなたが真面目に働けばその見返りを用意してあげられるのに何でやらないんでしょうか。ねえ小町。聞いていますかー」

「むぎゅ〜……」

騒ぎの主は小町に膝枕をしながら、手に持った棒で彼女の腹や胸を叩きつつ呟いている。

当の本人は聞きなれた内容だからか。またその顔の示す打撃痕によるものからか。顔面に酒によるものではない紅潮を浮かべながら眠っている。

彼女の身体に悔悟の棒が振り下ろされるたびにぺこたんぽこたんとか間抜けな音が辺りに沁みいる。

「幽々子様は食事を続けていて、箸が口に入ったままだというのに皿の中身が減っている。確かに少し見てないだけで全部食べちゃったりすることはあるけど注意してみればさすがにそれは私でも気づける」

(そうか)

「新しいおちよくり方か何かかと思ったけど……この感覚の隙間。明らかにおかしい。私だけじゃあないってというのが一番の疑問点」

(主も気づき、自分も気づけた。漫然と過ごしていれば気づかないだろう。脳で考える者ならこういった感覚の隙間はあるものだ)

アンは遠い昔を思い出しながらも、『生きていた』頃の共通認識を語る。ほんの一瞬、1秒にも満たないような『自分が何をしていたのかわからない時間』

大抵であれば直前に続けていた行動を再び続ければ誰も疑問は持たないし、もしそれが起きた時、毎日行うことの最中であつたとしてから無意識に手が進められた、程度にしか感じないだろう。

それを同時期に、別の人間が感じ取れたことが奇妙なのだ。

「アン、あの子を連れてきて」

（……わかった。主は？）

「幽々子様を視ながら、賊を探す。いつまでも帰ってこない彼も心配だけど、私はここを離れられないわ。頼んだよ」

（御意）

「幽々子様の事だから、気づいてはいるのかもしれないけれど……私は」

（力量を理解していること、手を伸ばせる範囲を知っている事は悪い事ではない）

「……ありがとう」

同じ姿に話しかけるその姿、はたから見ればそばの前後不覚の少女と同じように虚空に呟いているのみにしか見えない。

短い間に培われた、主従の絆。まだ謝罪の言葉が出てくるようでは完全ではないだろうか。

右手の刃を煌めかせ、アンは部屋を出る。向かうは彼の居た部屋。

アン自身は、賊ではなく彼の男。ドツピオではなくディアボロの力と、そう考えている。先ほどの会話から、この現象においても彼に干渉すべきではないとも考えていた。

だが主の命に反すればそれは道理に反する。もし何事もなければそこで彼に事情を説明し戻ってくればいい。

しかし、何もないのにこのような能力を使う必要があるだろうか？ それはつまり何かのサインに他ならない。それでも個人的には干渉する気はさらさらなかったが。

「……あら、どうしたの妖夢？ 何かあったの？」

その様に、幽々子は当然の疑問をぶつける。手には花の蜜を混ぜた氷菓を携えながら。

「幽々子様、お気づきになりませんでしたか？ なんかも妙です」

「みよん？」

「ええ、妙です。今アンにドツピオさんを連れてきてもらってます。

注意してください」

真剣な面持ちで話す妖夢に対し、幽々子は変わらず表情を崩したまままで。

「そうねー、確かに魅力的ではあるもの。けれど私には釣り合わないわ。一緒にいるならあなたみたいのがちよーどいいわ」

「……………え？」

と、茶を啜りながら話していた。

深紅に彩られた世界で、ディアボロは一人考える。「何故自分が選ばれなかったのだろうか？」

深紅に彩られた世界で、ディアボロは一人考える。「選ばれるとするならば、自分に何が足りなかったのか？」

目の前には先ほど出された青白い炎が統率のとれていない速度で向かってくる。出した本人も姿勢を低く構え、反撃の用意をしているのがわかる。

次にどうなるか、分からないなんてことはない。自分の能力さえあれば。

堂々巡りなのはわかっている。今更考えたことではない。死の輪廻の中、何度だって考えた。そして答えに行き着くことなく一種の諦観が思考を止める。

『自分の為に動いていた者』と『誰かの為に動いていた者』。ジヨルノとの大きな差があるとすればそこだ。

自分の絶頂の為に戦っていた。弱者を救うために戦っていた。どちらが悪い、どちらが良いなどと考えれば、人の本質で考えれば差はない。どちらでも、正義だ。

だが、自分は誰かの為に動くなんて、できないだろう。献身と犠牲の為に動いていた右腕、目の前にいる女の様になれないように。

炎の中を突き進むように歩く。それに触れても、自分には何も影響はない。到達した先で、屈みこみスタンドにそれを拾わせようとする。

「時は再び刻み始める」

言葉と同時に世界に色が戻る。崩れた景色が戻り、そこは月明かりと薄い灯りが部屋を照らす和室へと戻っていった。

世界が戻るのと同時にキングクリムゾンには先ほどまで自分が座っていた座布団を握らせ、藍に目掛けて投げつける。

「、シッ!!」

かなりの勢いで飛んでくる座布団を認識する前に攻撃したか、裂かれたそれは勢いそのままに中の綿をぶちまける。

「何だっ、目眩ましのつも、……」

藍の言葉が一瞬詰まる。理由は驚愕と狼狽。それは、理で攻める彼女にとっては理解しがたい行動だった。

綿による僅かに不明瞭な視界の先に見えたのは、逞しい男の肉体。ドツピオの体に合わせられていた上衣を脱ぎ去り、網目状の肌着だけとなる。

わざわざ隙を作って攻撃に転じないこと。戦闘における無意味な行動。その二点が彼女の計算に狂いを生む。

だが、何より目当てにしていた物、男性らしさというものをそのまま具現化したかのようなその身体。より高みを目指そうと、前の障害を蹴散らそうとする、先ほど垣間見えた恐怖を乗り越えようとする意志を感じる眼。

自らが貪り、蹂躪させようと一目見た時から心を煉らせてきた火の心材。それが突然目の前に現れたことによる喜びが、最初に頭を支配した。

「……ほう、何のつもりだ」

脳から走る下卑た信号を抑えつつも、不可解なその行動に対して問う。

「答える必要はない」

実際、ディアボロ本人もそれほど意味のある行為だとは思っていない。だが、それはある意味必要である行為。

ドツピオの精神からディアボロの精神を表に出すこと。その時、肉体もディアボロのものが表に現れる。

そこからさらにドツピオの身に着けていた物を捨て去ることで、僅かな残滓をも身に纏わさせない。

既に知られている以上行う必要はないのだが、ドツピオからディアボロに変わるといいう、ある種の精神的なスイッチの一つでもあった。

「そうか？ 色を出して精神的に攪乱させようとかでも考えていたのかとも思ったが……」

「……………」

「違うようだな。不可か」

その口は最後まで動かさない。ディアボロは動き始めの初動の間を『消し去った』。

相手の動きを見てから反応をする。強者にのみ許されたセンスでも引き金を引く機会を失われては使用することはできない。

向かってくる男の身体は既に構えから一撃を繰り出す動きとなっている。その右手は不意に空いた胸まで延びようと。

「くっ、」

藍の対応は後ろに下がりながらも右手を頭の後ろへ、左手は背後から急所の位置を守るように伸ばす。

最大の注意は、背後。時間を飛ばすことによる不意打ちがこの男の常套手段。破壊力のあるスタンドと違いあくまで生身の一撃はそれより軽い。

事実、後頭部に回した右手から強い衝撃が走る。そのまま頭部に食らっていたら悪ければ破壊、良くて一時不能ともなるほどの衝撃。

「ぐっ！、うっ」

右手がクツションになりながらも、その勢いを押し切れず頭に衝撃が響く。

だが、それでも彼女の思考は止められない。

ディアボロの貫手が藍の服を貫き、肌を刺すその手を左手で止める。右手を強く掴み、その不思議な感触を握りしめる。男性の手のようであるが、温度の無い氷か、固められた空気と言うべきか、その感触。

「女の胸につ、手を突っ込むとは、なかなか、どうして気が早いじゃないか」

「ふっ、一番楽な、手段を取った、だけだッ！」

ギリギリと互いが互いをしめつけ合う。キングクリムゾンが藍の右手に拘束されているが、それは片手を拘束していることと同義。

藍の左手はディアボロの右手を握りつぶそうと力を加える。その手を引きはがさんと、ディアボロも必死。

スタンドの感覚を通して分かる、自分の背後。ゆらめいた炎が新たな獲物を探し求めてふらふらと寄ってきている。

「ウオオオオオオオッ!!」

雄叫びの様に声を上げ、全身に力を漲らせる。共に、スタンドにも力が入り彼女の抵抗を無に帰す。

背からはぶすぶすと焦げる音と直接焼きごてを当てられ、そしてそれがそのまま背筋をなぞるような苦痛が走る。

だが、止めない。

引いて仕切り直すことも容易だろう。しかしそれでは時間がかかる。自分を知られてしまうことよりは、さっさと殺してしまえばそれでいい。

「うああ、あああッ！」

苦悶の入り交じった声が藍の口から漏れ出る。

いくらかは弱化の入った身としても、ここまで圧倒されるとは。彼の力強さにも、爆発力にも称賛に値するものがあつた。

……だからこそ、ふさわしい！ だからこそ、惹かれたのだ！

彼に秘める底力にも、思わず舌なめずりをしてしまう。次に彼女の取った行動は、彼と交差する力の加減を変えるだけであつた。

ずぶり、ずぶりと音が聞こえる。焦がれる男の手が自分に触れる。

ああ、何て甘美な響きだろう。いつだって挿すのは男で、受けるのは女なのだ。

「ぶぐ、か、あ……」

残ったキングクリムゾンの左手が、藍の顔面に撃ち込まれ、同時に

ディアボロの貫手が右胸を突く。

その身体は力なく崩れ落ち、ディアボロの足もとへ仰向けに倒れる。

防がれた最初とは違う、確かな一撃。壊さずに終わったのは藍の、妖怪としての力の証明か。

一見すればディアボロの勝利だが、当の彼はその余韻に浸る暇はなかった。

「……う？、はあ、はあ……」

呼吸が荒い。心音が響く。同時に、血流が速く流れるのがわかる。

敵を倒したことによる興奮とは違う。おぞましい恐怖に竦む感覚とは違う。いや、しいて言うならば彼女の執念に恐怖するともいえるのが、自分でわかる。

先ほどに使った自分の右手。そこから香る血の匂い。だが、そのむせる様な匂いに僅かにこびり付く別の匂い。

最後、藍は止めようとする力を、ずらす力へと変えた。故に勢いは止まることなく、左胸、心臓を狙っていた一撃は右胸へと移っていった。

平時であれば、戦闘中でもあるし、そうでなくても女性の胸に触ろうが特に何も思うことはない。

だが、今は。不思議と、そのために触れたわけではないのにあの感触が忘れられない。残った彼女の匂いに溺れたい。

「……………」

横たわる女の肢体。服が破れ右胸からは絶え間なく出血している。倒れた衝撃か、破れ穴の開いた箇所反対側にはこぼれそうな柔らかい肉。

投げ出されたその脚の、美しい線と柔らかな肌。その元へといく度に湿りけの帯びている様。

自分の部位も、もはや興奮を隠しきれなくなっている。

「おい、何を、した？」

彼女の髪の毛を掴み引き上げる。片目は潰れ鼻は拉げ血に染まっ

たその顔でも、男の本能を、嗜虐心を、征服感を満たすための。揺さぶる何かを感じられる。

歯の欠け血の流れるその口がにやりと歪むと、

「……さあな。どうした、止めを、刺せばいい」

その顔と声色は、とてもじゃないが運命を諦めた顔ではない。死を受け入れた顔でもない。

「ああ、何だ……そんな顔を、するなよな。勝利を、刻みなければ、刻めばいい。征服は男の性だろう」

ぜいぜいと声を出すたび胸から出血する。揺れる乳房が、艶やかな唇が、見据える瞳が、……どれも崩れているにもかかわらず、ディアポロの脳を刺激する。

魅了。異性を、時には同性をも自らの虜にし、相手に至上の快楽を与えることと引き換えに彼の者の理を支配する。

藍の策謀としても、妖術としても得意とする一つであり、相手との体液の交換、自らの体に触れさせての魅惑の段階を踏めばたとえ式という枷があらうと術中に落とすことができる。

もし自分がその力を最大限に発揮させることができるのであれば、視界に居れば注目させ、肌を晒せば理性を崩し、声をかければ至らすこともできるだろう。

……ディアポロも、今野生を晒せばどれほど楽になろう。獣欲を満たそうとすれば、今までにない快楽が身を包むだろう。

どちらの本懐も、それで満たせるだろう。

「……ッ」

「!! ……ん、はあ」

彼の取った行動は、その赤い果実を貪ることだった。

煩わしい、だがひどく蠱惑的である彼女の。衣服を強引に破りさり、熱を帯びた互いの身体を直に密着させる。

身体に、顔面に彼女の血液が付着する。口内の鉄の味が共有される。ほの甘い液が、背の焼けた痛みをも忘れさせる。

全てを忘れて、彼女を得たい。力無いその肉体を自分に寄せ、強く強く抱き。

「んう……ん、っ、……………」

強く抱き合い寄せ合う故にわかるのは二人の体温のみ。表情を窺えるほどの隙間もないほどに。

ディアボロから、求めさせた。彼の欲を煽り、征服『させた』。その一歩を藍は味わう。

脳が溶ける様な得難いその味わい。主を裏切り、自らを捨て得たこのひと時。

彼女はほくそ笑む。これは、永遠となるだろうと……

口内を蹂躪する彼の舌が、こちらへ来いと誘う。それを追う様に、雌の根を這わせる。

「ぶあ……ちゅ、る……ッ!! ギッ!!」

突然の熱に目を見開き、動転する。抵抗するその脳に、身体は反応しない。

ぎちぎちと、絡めた舌が猛烈に危険信号を放つ。

同時に、ディアボロは背後に回っていたその手を胴体に回し、そのまま突き飛ばすように彼女を放る。

その衝撃と、強く押さえられた舌は耳に残る不快音を残しつつ。

「ばがっ、ああ……!! あっ、っ……………!!」

ディアボロは紅い小さな肉塊を吐き出す。共に、多量の唾液と混じった血液と。

「……恐ろしいな、妖怪というものは……そうだな、その程度では死なないのであれば、己が身を捨ててそういうことかもしれないということか……」

敏感な苦痛と全身の痛みから混乱する。魅了が、効いていないことに。

単純に抗えたのか、それとも? そう考えるにも、時間が、状態が。

「……ッ、あ……ッ!!」

「同じだよ、気を取り戻そうと私もした。危なかったよ女狐。魔性の女」

薄れゆく意識の中に、ディアボロは藍に左手を見せる。

その左手の小指、薬指はあまりに不自然なふくらみをしている。

「二本折る程度では意識は戻らない。戻しは苦痛だが……その点はお前と一緒だ。死なない程度に苦しめればいい」

最後まで、自分を驚かせる奴だ。苦悶の中にもそのような表情を浮かべる。

おかしいと感じながらも、それに乗った振りをして。同じように、自分を痛めつけて。

多量の出血と舌が切れたことによる呼吸困難で、藍の意識は徐々に霞んでいく。

(……!! 開く、無事か、客人!)

今まで音沙汰もなかった部屋の外より、声なき声が響く。同時に、アンが中に入ろうと障子を開こうとする。

(待て、開けるな)

彼が障子に手をかけた、その行動に対し、ディアボロは声を出さずにスタンドで話しかける。

(……何があった? 先ほどまで開けようにも開かなかった戸だ、何かあったのだろうか!?)

疑問に対し、答える声はない。

返答がないことを確認、制止を無視して障子を勢いよく開く。

(っ、なんだ、これは)

アンが見たものは、散らばった将棋盤、焼け焦げた跡の残る畳、荒れた和室。その中ほどに広がる血だまり、横たわる女。

中に居たはずのディアボロの姿は形無く、苦しげに呻くその女の声だけが部屋に木霊する。

「どうしたのアン、急に呼ん……って、いつの間に、いええええっ!」

妖夢が遅れて駆け付け、中を見て絶叫する。

「……お、う……」

「藍さん!? どうして!? やっぱり賊!? 紫様!? 幽々子様ーっ!!」

(落ちつけ主！ とりあえず嬢を！)

「へあつ、はい！」

浅く呼吸しようとするも、切り取られた舌による不随意が氣道を塞ぐ。口内にあるはずのそれが外に転がっているのを確認すると、アンは自身の能力を使って喉に対して静かに刃を沈める。血に濡れた首だが、その刃ではその肌は新しい血を生み出さない。

自分の能力を、自分から、人助けのために使うなんて、自分でも思いましなかったが、勝手に体が動いていた。

詰まったその後ろに、僅かな隙間だけを作る。そうイメージして沈めた刃は首元と、その間に通る大事な血管を傷つけずに小さな傷穴のみを作りだす。その傷に対して自らの指、元は妖夢の細い指を突き刺し広げ、無理やりに氣道を確保する。

そうしながらも、三度の疑問。突然に面食らったが、扉を開けようとしたら既に中に入っていた。呼んだ覚えのない主を既に呼んでいた。

そして、ここにいたはずの彼がない理由。これらの符号が示す事実。

(やはり、あの男が……これは、D I O様と同等、いやそれ以上の……)

白玉楼へと続く石段。長い長い石段をただただ降りる。

ユカリに会うという当初の目的は果たせなかったが、果たせないということを知った。

彼女が、正確にはどれほどの規模かは知らぬが。彼女らが自分を見定めた暁には姿を現すだろう。

そして、右腕と言っていた者に対しての蛮行。どう評価されたことやら。

ならば、自らの為に動こう。いつまでも続いた堂々巡りに決着をつけてみよう。他者の目を気にするという、びくびくと形をひそめた行動を、今は忘れてみよう。

この世界には自分が知っている以上に、既に自身を知る者が多くいる。今更隠れる理由もない。

ならば、何をする？

昔何かに聞いたことがある。『男には地図が必要だ』と。信念が必要だと。

ただこの平和な世界で生を費やすか。不確定な外へ希望を持ち出すか。

あの女が来る前に、心は既に決まっていたはず。ならばそれを胸に進むべきではないのか？ デイアボロよ。

石段の果ては見えない。だが、辺りの冷え込んだ、いわば生気の無い空気がそれとは違う、ただ澄んだだけの空気変わっているのを感じる。

ここを過ぎれば、あの結界の外へ出るのだろう。

普通なら、幻想郷の住人は空を飛ぶ。だから踏み込んで特にも思わない。だが、自分は違う。普通の飛べない人間だ。

だから踏み込めば死ぬ。空に投げ出され、成す術もなく落ちて死ぬだろう。それを避けるべく、もらったものがあるからこれまでなんとかあった。

『だから』あえて踏み込んだ。

恐怖とは何か。それは過去より去来する事実。それ以外の本能的な恐怖など、些細なことに過ぎない。

捨て去れ。耐え抜け。不必要に足を止めるな。もちろんただの死にたがりにはなるな。打算を持って進め。確信した道を。

矮小な身が、大空へと投げ出される。だが、不思議と何も感じない。パラシュートの無いスカイダイビングが、これほどまでに気持ちのいいものだ。

「……………ははっ、はははははははははははは!!!」

思わず笑いがこぼれる。何がおかしいのか、自分でもわからない。狂っているのだろうか。

だが、それでもいいのかもしれない。死んで死んで死んで死んで死んで死んでこれほど新しいことに気が付けるだなんて、脳が灼き切れ

てもおかしくはない。

自分の命が切れる前に、この精神の高揚が収まっていればそれでいい。それくらいにしか、考えなかった。

「いやあ、驚いたよ。あはは、死体ならともかく生きている人間が空から降ってくるとはね」

幻想郷の夜を、ディアボロは一人の少女と行く。

猫の妖怪であろう、赤い三つ編みの頭にはそのまま黒い猫の耳がついており、押し車を携えたその少女。

彼女の証言通り、空から落ちてくるディアボロを偶然に見かけ、さぞ何か、と思いい駆けつけてくれた。

「あんまり壊れちゃうとアレだし急いで受け止めてみたら生きているんだし、そりゃあ驚いたよ。あはは」

彼女が笑うと共に、能力で呼び出したのか、赤ん坊の頭程の大きさの青白く燃える髑髏が笑っているかのように震える。

不気味な外見だが、それが月明かりしかない道に更なる明かりをもたらしている。

「血濡れは大体拭き取れたけど、背中の傷はあたいにやあどうしようもないねえ。痛まないかい？」

「痛まないと言えは嘘になるが、里で手当てをすれば問題ないだろう」
どうしようもないと言われた以上、これ以上干渉されないように答

えるが、処置もしていない灼かれた痕が痛まないはずがない。
今の彼には、ただ耐えることしかできなかった。それでも弱みを見

せない辺りはさすがというべきだろうか。
「ふーん……見た感じ、死にたがりって顔でもないし……どうして

こんな傷を負いながらも落下散歩してたのか、あたい気になるなあ
？」

「人里は、こつちでいいのか？」

「……いけずう」

まさしく猫なで声、と言わんばかりの声色で彼女はディアボロに問うが、それについては答えない。単純に、話しても理解を得られないと思っただから。

自分の考えの通り、死ななかつた事を頭の中で反芻をしている。

死のうと思つて行動をすれば死ぬだろう。しかし、『死なない』と思つて行つたものならば死なないと思つた。白玉楼から飛び降りるという奇行は結局のところこの点に集約される。

死なないと思つていても、どこかに不安を抱えていたからこそその予知。今までの自分の心の抛り所の一つを敢えて捨て去つた行動。

結果それは功を奏しディアボロに一種の自信を植え付けた。

「んー……まあいいか。いやあね？ あたいは火車つて言つてさ、死体運びがお仕事なのさ。好きものこそうまくなれーつて、生きているより死んでいる方がお好きなわけでー」

「……………」

「あはは、安心してちようだいよ。生きてるのをわざわざ殺す様な品の無いことはしないさ。あたいはこれでも行儀のいい方で通つてい
るんだよ？」

「品が無いのか？ それは」

「無い」

少女はキリツとした表情をディアボロに向ける。どうやら、そのあたりは火車と呼ばれる妖怪の矜持の一つらしい。

まあ、生きている人間に興味はないのは何よりである。先ほどもで、ディアボロの生に執着した者と戦つていたのでから。

「……まあ、お兄さんは何かしら訳ありみたいだからね。あたいもそういうのには慣れてるからわかるよ。ここは深く突つ込まないであげよう」

「そうしてもらえると助かる」

「でもあたいの恩を受けた以上、まともな葬式は迎えられないことだねえ？ お兄さんの匂い、覚えちゃったから」

「……そうだな。私にはそれくらいがふさわしいのかもしれない？」

「へっ？」

煽つたはずなのに、それを受け返されて少々困惑の表情を少女は浮かべる。

元より、ベッドの上で死ぬことなんて考えていないし、式を上げられるとも思っていない。安穩とした生活を送れるとは思っていない

かった。

そんな彼の表情をじろじろと見つめ、

「ふくん……お兄さん、面白いこと言うね。勇儀とは合わなそうだけどあの橋姫とは気が合いそうな気がする。なんとなく。

ねえねえお兄さん、もし今度気が向いたら地底にでも遊びに来ないかい？ きつと楽しめると思うんだよ」

「……歓楽街の一種かそこは」

「今は使われてない地獄跡で嫌われ者の妖怪が潜んでいる場所さ。けれど住めば都ってね？ 幻想郷の中で唯一の眠らない街さ。退屈はしないよ」

「遠慮しておく。少なくとも今は、な」

彼女がディアボロの本質をうつすらと感付いている様子と、ディアボロも少女の雰囲気はややも穏やかではないことを感じられたこと。

なるほど、どこの世界にも隅に追いやられた弱者の吹き溜まりは存在するらしい。死体に興味を持つ彼女のも、妖怪の中では異端とされるのだろう。

嗅ぎ慣れた匂いに感付かれた、ただそれだけの事。そんなスラムのような場所に興味が無いわけではないが。

「……灯りだな。あそこが人里か」

「お、だねえ。道はないが、もうここからは案内が無くても行けるだろうね。そしてちようどあたいはこの辺りでおさらば」

夜もだいぶ過ぎたというのに、ぽつぽつと灯っている小さな光。その光が人の住処と理解させる。

少女はそことは違う方角を示す。記憶が正しければ、その先は博麗神社だっただろうか。

「神社に用が、つてわけじゃないよ。その近くが地底の入り口なのさ。地底はいいところ、一度はおいで」

「機会があつたらな」

「また会うと思うよ、必ずね」

ことごとこと、押し車が轍を作る。

その様を見届けると、ディアボロも人里へと歩き出す。

ふと後ろを振り返る。今まで通っていた道は妖怪はわからないが野獣は潜んでいたはずだ。

それを己の血の匂いにもかかわらず全く襲ってくる気配がなかったということは彼女も相応の実力者だったということだろう。

これは運か、天命か。

「……そのの、証明の為に」

人里はその周辺を囲う様に、塀が存在している。そのどこかにある入口に村の若者が駐在しており、有事の際に皆を知らせる役を務める。

だが、もちろん妖怪に対してはほとんど効果はない。そもそも飛べるので塀など意味を持たないし、悪意を持って里の中まで襲ってくる妖怪はほとんどいないからだ。

それでも、敢えて形式を違えて人を襲う妖怪もいないわけではないし、そういった考えを持たない野生の動物が村に襲ってこないわけではない。

とにかく、可能性としては0ではないのだが……当然、限りなく少ない可能性に依る者は多いわけではなく。

「すー……すー……」

そこにいた若者は無防備にも門にもたれかかったまま寝こけていた。

まだ寒い時分でもない、そのまま身体に支障をきたすことはないだろう。

「……気楽なものだな」

穏やかそうに眠っている彼をわざわざ起こす理由もない。いろいろ聞かれても面倒ではある。聞きたいこともあるのだが。

それよりはまだ活動的である里の中、あの喧噪に紛れた方がいいだろう。

「……でさ、俺は気になって気になってしょうがなかったんだよ。だからさ、聞いてみたんだ」

「ほんとか？ 本当に聞いちゃったのか？」

「ああ。意を決して聞いてみたんだ。慧音先生、何で今日はいつもの帽子じゃなくて赤い洗面器を頭に載せているんですかって」

里の入り口の近く、離れていても聞こえる賑わいの発端では初老の客が卓を挟んで話に盛り上がっている。

店の入り口から中をぎっと見渡したが、妖怪らしき姿はなく、老若男女区別なく、夜が更けてもその手を止めずに歓談に盛り上がっているようだ。

もつとも、妖怪と言われても見た目が変わらない者が多いからディアボロに区別がつくわけではない。

「いらつしやい、お客さん初めてかな？ とうか見ない顔だね。どうしたい、こんな夜更けに」

禿げ上がった店主がカウンター内からディアボロに声をかける。そんな彼を妖怪と判断する術を持っていない。

とはいえ、依然ドツピオの姿で里を歩いた時、日中であったが妖怪と人間が平和に暮らしていた。夜半でもそれは変わるまい。

「ああ、それはだ、……………」

言葉を紡ごうとしたところで、不意に意識が薄れ始める。頭が何かを思考する前に脱力感に襲われる。

「おい、兄ちゃん!？」

「どうした、わ、こりゃひでえ」

「水、水もってこい!!」

騒ぎの声が聞こえるが、彼の耳にはうつすらとしか届かない。それより大きなまどろみが、彼を包んでいた。

——どしや どしや どしや

土をかける音。掘った穴の中に『彼女』を入れる。

——ぶち ぶち ぶち ぶち

縫い合わせる音。『彼女』が救いを求めないように

——がつ がつ がつ がつ

殴りつける音。自らの罪を『彼女』が理解するため。

ひどく滑稽な光景だった。小さな子供がいつまでも起きない母親にじやれつくような光景だった。

子供が大きく手を振り上げ、女の顔を拳で殴る。その度に、耳障りな衝撃音が辺りを支配する。

そんな力を、子供が持っているとは思えなかった。だが、辺りに血しぶきが舞い、女の意識を消しては覚まし、消しては覚ます。

互いに、表情はなかった。子供の顔は、まるで無感情な機械の様に。女は、表情というものが既に消失してしまったかのように。

一切の言葉もなく、ただただ肉を殴る不快な音だけがその場を埋め尽くしていた。

「何故、僕を生んだ」

女は答えない。否、答えられないというのが正しいだろう。度重なる殴打によって肉体、精神共に負傷し反抗どころか応答すらままならなくなっている。

「何故、僕を生んだ」

子供が顔を近づけ、口づけを行えるかの距離で問う。浅く上下する胸から押し出される息が彼の顔を掠める。

「二人か？ 三人か？」

脳裏に浮かぶ、この目の前の女と養父が行った汚らわしい姿。それはどこまでも欲望に忠実な姿。

己を信じていた、己が信じていた姿を汚し蹂躪する、何も考えていない瞳。

その瞳に映る姿は、……

「……………」

温かく軽い何かに包まれる感触と、自分を射す強い光。

まどろみの頭を溶かす様な温かさ。その誘惑は再び目を閉じれば味わえそうな。

「ッ、(ニ)、は……!？」

働かない頭から急に電気信号が送られ、身体全体に熱が送り込まれたかのように、徐々に稼働し始める。

周りは幻想郷ではよく見た家造り。手入れはしつかりされていて、人間の住居、その一室というのは間違いない。

自らが横たわっていた布団の傍らには軽食と水、綺麗に畳まれた自分の衣服が置かれていて、いつ目が覚めても問題ないように配慮されている。

それを認識した所で自分の身体を見回す。……血や汗で汚れていたらどう身体は清潔を保たれており、背中の傷も痛みが消失している。今来ている衣服はこの家の者の物だろうか、やや古びてはいるものの決して不潔な感情をもたらすものではない。

時計といったものが存在しないが、陽の射す角度からして9時から10時ほどであろうか。

部屋を別ける戸の先からは、自分を介抱した人間か。何人かの穏やかな談笑が聞こえる。男も女も、そしてどうやら中年から。

「おう、あんちゃん起きたのか!」

自らの衣服に着替えてその戸の先に向かうと、どうやら昨日の盛り場で間違いないようだった。声をかけた店主も同じであり、店の構造も変わっていない。

だが、雰囲気は違う。昨日の様な酒にまつわる場ではなく軽食や時間を過ごすカフェの様だ。

「来るなり倒れちまってよ、大丈夫かい? 背中にひどい傷もあつたし、妖怪にでも襲われたか?」

言われて改めて背中を擦るが、あれほどの傷がすぐに治っている事にも少し驚く。

「ああ、怪我の具合なら大丈夫だろうって! 永遠印の塗り薬はよく効くからなあ。けれど、少しは休んでいた方がいいってよ。うどんげちゃん曰くあんちゃんが倒れたのは傷より疲労具合だろうからって」
「ディアボロが口を挟もうとする前に、その禿げ上がった店主が聞こうと思っていたことを話す。大きな声には不快感はなく、確かにこれ

が店主なら昨日の盛り上がりも理解できる。

「……すまないな、急な来訪者だというのに」

「はははっ、いいってことよ！ あんちゃん、腹減ってねえか？ 起き抜けにムスビをおいといたけど足りなかつたら何か作ってやるぜ！」

こういった、世話になることも、ディアポロには新鮮だった。

打算無しの甘えに浸るといふ、何とも言えないむずがゆさもないわけじゃない。だが、不純物の無い善意というものに触れるのも悪いものじゃない。

こうした空気に晒され続けていれば、幻想郷の常識と博麗の巫女が言っただろうか。戦いが終わった後杯を交わすという訳の分からなかった理論も理解できる、気がする。

「ならば、お願いしよう」

そういつて、手近な席に座る。

店主は威勢よく返事をする、その奥へ引つ込んでいった。

店の入り口近くには、凡そ中年客の喧騒にまぎれて若い者も居る。年相応の格好をして、仲睦まじく話しているその姿。

最もその声は自分の近くの席に座る中年女性の団体にかき消され何を話しているかはわからないが。

傍らに目をやると、長年陽の光にさらされていたのか、色あせの見える本棚には同じく褪せた本。見える表紙には見たことの無い文字だが、それでも頭に意味が伝わってくる。

新聞掛けには2、3週間ほど前の日付の記事が載っており、内容も取り立てて見る物もないようだ。

「……………ここは、本当に明るいな……」

自分が知らないだけであろうが、そしていくつか暗い部分にも触れることになったが、それでも外の世界と違い、幻想郷は明るすぎる。交わることの無い者達が混じり合い、疑うことも忘れてしまったかのように。

ユカリたちの情勢を省みるに、そのような闇を落とさぬように闇が支配していたとでもいうのであろうか。

もしかしたら、ジョルノやブチャラティが考えているようなギャン

グの立ち位置とは、ユカリ達と同じ様な位置であったのだろうか。

「邪魔するよ、主人」

「おや、らっしやいなズーリン様」

「様付けはよしてくれよ、私はあくまで一介のダウザーにすぎないのだから」

「そんなこと言われましてもねえ、あの毘沙門天様の直属って言われましちやあ……」

「なら直属として君に命令しよう。畏まらないこと。その分本尊であるご主人や聖にその誠意を向けてもらおう。いいね？」

店の入り口から、聞き覚えのある声が聞こえる。どうやら、そんな思いに耽っても、やはり穏やかには進まないらしい。

「して、今日は何用で？　いつものを用意しましょうか？」

「このチーズまんも魅力的だが、今日は違う用事だ。人探しの手伝いをしてもらいたい。情報提供者の募集をしている。これを」

そう言って、彼女は手元のポシエツトから数枚、丸まった紙を渡す。

「……んー、俺は見たことねえなあ。狭い幻想郷、こんな姿の奴……外来人の坊主なのか？」

「そうなんだ。昨日は命蓮寺に居たんだが怪我を負ってね。その治療中に居なくなつて、今に至るといふことさ。ご主人がやたらに気に掛けるんでね。」

それで私の能力で探そうとしたんだが……どうにも見つからない。物探しと人探しは大差ないと思っていたが……何故だか、ね」

気落ちした声が聞こえる。強気な彼女も、自分の力不足にはさすがに嘆くということか。

……そろそろ、だろうか。

「そういえば、昨日も外来人の人が倒れてたんだよ。ほらそこ」
「ふむ、ど　えっ」

ナズーリンがこちらに視線を向けようとしたその時、すでにディアボロの目の前にはナズーリンが座っていた。

唐突な出来事に、彼女は驚きを隠せず周りを視ようとするが、首こそ動くものの身体は肩をがっちりとかかに掴まれて動かせない。

「えっ、むうっ」

声を出そうとするが、それも何か口を覆うようにして遮る。

何が起きたかわからず、動転から涙目になるナズーリン。

「久しぶりだな……過去の証言から、お前は私の姿を知っているからな。まだ朝だろう？ 静かに話がしたい」

そう言いながら、傍らにある褪せた本を一つ取り出す。幻想郷縁起と書かれたそれは、シリーズ物らしく同じタイトルの古いものかいくつか並んでいた。

それと共にスタンドによる拘束のうち、口の拘束を解除する。だが肩にはまだ手をかけており、少女の小さな体には見合わない重圧が強く彼女を締め付ける。

「おや、あんちゃん。ナズーリンさんの知り合いで？」

「ああ。以前は命蓮寺に行ったことがあってな。良かったよ、知り合いに会えて。……なあ？」

「ええっ、あ、ああ」

ほとんど恐怖からの嗚咽に近かったが、その表情は店主が配膳してくれた軽食をディアボロが敢えて直接手に取りながら話したため、見られていない。

「ははははっ！ あんちゃんにそんなに頼りになる伝手があるなら拾ったこつちも一安心だ！ それはあんちゃんの快復祝いだ、食べてくれよ！」

そう言いながら店の中で、他の客に話し始める。どうやら、先ほどナズーリンから受け取ったその紙の詳細を、他の客にも伝えているようだ。

「……何を、した？」

絞り出すように、視線は机の下に送ったままにディアボロに尋ねる。

表紙を開く。……中身は周りにある文字をさらに崩した古い言語で書かれているようで、とてもじゃないが読める物ではなかった。印刷等はしっかりしており古いものという印象はなかったが。

「お前は私を知っている。話の限りでは探している少年とはドツピオ

だろう」

「……いや、そうじゃなく。何をした、って聞いているんだ、私は」

それはどこまでいっても虚勢だった。だが、そこに食らいつこうとするあたり、これも先に言っていた位の高さから来る矜持がそうさせるのだろうか。

次は最新であろう、一番号数の大きい九巻に手を伸ばす。先ほどの物と同じく印刷等はしっかりしている。……あくまでここの文化レベルに相応して、だが。

「私はそういう能力を持っている。ただそれだけだ。それに、騒がれるのは性には合わない」

キングクリムゾンの能力は時間を吹っ飛ばすこと。それ自体も長所だが、弱点としてその間は自分は干渉できないという欠点が存在する。

それにより飛ばしている最中に攻撃などはできないのだが、それを補う方法はいくつかある。

その一つとして『自分もその飛ばす対象に入れること』。それを行うことにより、吹っ飛ばしている間の事柄に干渉ができる。

もちろん、その間に何が起きているのか、過程は全部飛ばされ理解はできない。だが、それにより自分の行動を相手に悟らせないまま完了させることもできる。

あの瞬間、ナズーリンをひつつかみ、席に座らせるところまでを自分で行くと『予定』してから、ふっ飛ばした。周りに妨害をする因子が無ければ、定まった結果は変わらない。

「放っておけばこの場で声を出し、詰問を始めていただろう。そんなものは御免蒙る」

淡々とありのままを話し、出された茶を飲む。

そういえば、このように出された物をそのまま食べることも随分久しぶりだと思いだした。ドツピオの姿ではよくやっていたが、この姿の時にはいつも密閉された物から、異物が混入されていないか確かめてから食べていたものである。

「……お前は、一体……」

「お前の主人からもそれを聞いた、お前から聞くのは二回目だな」

特に気にすることなく、幻想郷縁起の九巻目の表紙を開く。やはり文字は見慣れないものだが、すらすらと意味は入ってくる。

不思議なものだと思いつながら、その文章を読み始める。内容から察するに、それはまさしくディアボロの求めていた幻想郷についての、その歴史と有名人についての知識のようだ。

「私は一介の外来人でそれ以上でもそれ以下でもない。この世界で何かを行うわけでも、何かを脅かすつもりもない」

その言葉に、ナズーリンは怒りと疑惑の眼を向ける。それは、明らかに相手に信用を置かず、攻め入ろうとする意志。

だが悲しいかな、それを行うには絶対的に力も度胸も足りていない。それがあつからこその眼だった。声を出していないのが、知性の高さの証だろう。

「嘘をついているつもりはない。そして、その言葉はそのまま送ろう。あの寅髪の女の心までは知れぬが、お前自身はドツピオをどうするつもりだった？ 保護か？ 捕縛か？」

読み進めていくと、妖精についての成り立ち、風貌や評価のページに行き着く。作者の個人的意見というか感想というか……ずいぶん悪辣な描かれ方をしているがあくまで見た目が似通っているというだけで、種として見ているという良い書き方だろう。

もしこの妖精が実在していたら、彼女らの意志に関わらず勝手に尊厳が、権利がどうという人間が現れるに違いない。動物と違い、コミュニケーションができるにも関わらず。

「そ、それは……」

「経歴による感覚でな。お前はあの場で最後まで私を疑っていたし、先までもその考えを改めずに居た。ドツピオに対しても同じだろう。一方的に決めつけるのはやめていただきたいものだ」

そういうと、彼女の肩に置いていたスタンドの手を離す。騒がれる心配も、とりあえず言いたかった事も伝えられた。

「ふはあ、はあ、はあつ……」

ずっと息を止めていたかのように、急な呼吸を始める。顔も真っ赤になっており、彼女のやり取りに対する不慣れ感を物語る。

その顔は今にも逃げ出したいという恐怖の表情で満たされている。だが、

「て、て、店主。やはり注文いいか？ チーズまんこ、珈琲を」

「ん？ ああ、はいよう！」

怯えた心を押しとどめ、この場に居座ろうという意思を示す。

「どうしたんだ、急に」

「お、お前が怪しい者に変わりはないし、ドツピオと比べるとそれは尚更だ。……しばらくは、監視させて」

「好きにしろ」

それに対しては特に異論はない。今更、見られて何か変わるわけでもないし、とつくに監視の目は付いているとのことだ。

仮に、これから行おうとしていることが、その対象に自分を見る者がいなければ意味がない。

妖精ではダメだ。チルノと呼ばれる力のある者も居るようだが所詮は子供。幽霊。魂魄妖夢も強いようだが見た限りではそうとは思えなかった。それに、今はあの別の者が憑いていたから変わっているかもしれない。

それらにも関わらず、常たる強者であるもの。……やはりそういった者は本の後半に入るだろうか。

そう思いながらも読み進めていくと、現れる項目。妖怪のページ。

項目には、確かにいつかに聞いた妖怪の特徴を人間の視点から書かれていた。

「……いやにご執心だね。妖怪にでも、襲われたのかい？」

「最初に襲ってきたのはお前だな」

「あれは正当防衛だ！」

じとつとした眼つきを向けるナズーリンに応答を返す。そう言われればそうだった気もするが、些細な差だろう。

肉体の頑強さ、精神による脆さ。人間に対する危険性。過去に道具屋の魔法使いが言っていたように人間の視点からすれば恐怖の対象

ではあるようだ。

妖怪は妖怪の専門家に任せの方がいい。一文はそういった結論で締めくくられている。

「むうー……………」

「へい、…………どうしたいナズーリンさん？ ずいぶん難しい顔してんけど…………さつき声も上げてたし、ケンカかい？」

店主が心配そうな顔をして、注文の二品を持ちながら彼女の顔を覗きこむ。

「あ、いや…………そんなことは」

「その通りだ。まあ、私が悪かったし、それについては決着がついた。迷惑かけてすまなかつたな」

言い訳をしようとしたところに、ディアボロはフォローを入れる。

それがナズーリンに驚きだったのか、声を出さずとも崩れた表情を彼の方に目を向けた。

「なんだ、あんちゃんそんなに仲良し様だったのか！ ならもうウチで何か心配するようなことはないなあ！」

「すまないな、確かにもう大丈夫だ。…………悪いが、この本を少し読んでいたい。場所を借りていいか？」

「かまわねえぜ！ 日が暮れる程度に店替えの準備があるから一旦抜けてもらうが、それまではゆっくり過ごしていつてくれよ」

ナズーリンの目の前にほかほかと温かい湯気の立つ大きな蒸し饅頭とコーヒーが置かれる。

それにかぶりつきながらも、不快と不信の目を向け続ける。

ページは妖怪の項目、その前に乗っていた花の妖怪という者も恐ろしい様子であったが、自分は会わずともその歯車を調整した人物に行き当たる。

内容を読み解くにあたり、その確かな実力を持っていることが伝わってくる。

能力とその実力、幻想郷に与えた実績、その痕跡。

「……………ふむ」

強いという人と成りだけが口頭で伝えられてきていたが、数代にも

伝えられているこの縁起にもたびたび出ているようだ。後ほど見返すつもりだが、以前に綴られた物にも挿絵で確認の取れる物はあるのではないだろうか。

最も、この妖怪は探している対象にはならないだろう。

「……さつきから、お前は何を探しているんだ」

はくはくと口を動かしながらも、眼つきは変わらない彼女が話しかける。

別に話しても構わないだろう。彼女がそれを妨害することも、自分に得することもないだろうから。

「足掛かりだ。その足掛かりを見つけられれば、それは停滞した自身自身の現状を打破できる、未来への遺産となるだろう」

― 真実へ向かうための行進曲 4 ―

「足掛かり……？ 一体、どういうことだい」

饅頭をほおぼるナズーリンからの当然の質問。深く答える気はないが、それを答えなければ不必要にまわりつかれるだろう。

「……そうだな、お前は何のために生きる？」

「え、何だつて……？」

ペーヅを繰ると魔法使いの欄に当たる。てつきり人形遣いも道具屋も相当に同じ魔法使いだと思っていたが、種で分けられているというのも驚きだ。

「幻想郷に至る前、私は一国の社会を担う一端だった。……お前の想像通り非合法だがな」

「……だろうね。もしそういうのでなければとてもじゃないが君の立ち振る舞いを想像できない」

「その地位に至るために、またその地位の継続の為に様々なことを行つた。お前たちの様な人間……妖怪か。あの尼僧の元に集う者であれば忌避するようなことばかりな」

相手の視線は、縁起に集中しており対面をみていないが、それでも琴線に触れている不快な視線だということにはわかる。

今の言葉を事実と受け止めようが受け止めまいが、不信で動く彼女の燃料を注いでいることは確かだ。

「今その行為が是か非かを問うつもりはない。お前にとって是不快なことであろうとな。私が言いたいことは、人間には生きていくための標が必要であり、そのためならば何をしてもよいという、まあ大雑把に言ってしまうばそういうことだ」

語るディアボロを、ナズーリンは珈琲に3個目の角砂糖を入れてかき混ぜながら見つめる。

「随分なことを語るな……生きるためなら何をやってもいい、そんなことが許されるなら共同体なんて出来やしない。その標に至ろうとする者、大勢いるだろう。それらの削りあいだ」

「そう、その通りだ。私はその戦いに敗れた。が、何の因果か今は再起

している。ならば再びその舞台上に上がったことを感謝し、その道を駆けるのは道理だろう」

「何を言う」

更にナズーリンの声色が冷える。危険因子として見ていた者が、その性情を表したその瞬間に。

ディアボロは少し感心をした。先ほどまでは、自分の意思に抗いながらも、恐怖を抑えながらも監視しようとした姿勢から、相手の力量を測ったうえで身を滅ぼしても関与し続けようとする姿勢に。

彼女の能力を細かくは理解していないが、ネズミを眷属に使っているのは覚えている。……自分の知らぬように広められても困る。

「先ほども言ったが、騒がれるのは性に合わない。自分から騒動を起こすわけではない。最も、その当事者だけで解決できない場合はその限りではないが」

「だから？」

「だから、足掛かりを探しているのだ。強者であり、賢者でもある者を。その者を代理人として、私は己という過去を乗り越えなければならぬ」

魔法使いの項目の二人目、その者の所属に目を引く。妖怪の項目にも載っていた武術を使う妖怪と同じ所属であり、両者ともに実力は相応。

「私の仇敵は外に居る。ここに今再び自由を受けたことは好機だ。この機を得た上で、幻想郷でのうのうと余生を過ごすことなど考えられない」

「……ふん、なかなか言うようだね。さつき戦いに敗れたと言っていたけど、それで死んで生き返ったわけではあるまいにそんな風に言うとは」

蔑み憐れむような少女の言葉を聞き、少しディアボロには硬直が走る。

彼の言葉を信用していないのは飛ぶ雰囲気から理解できるが、もし実際にそうであったなら、どうすれば信じさせられるだろうか？

過去の凶星を突かれた彼に走った僅かな動揺を、もし注視している

わけでは無かったらナズーリンは見逃していただろう。

「……………？ まさか、本当に死んで生き返ったわけじゃあないだろうか？

どこぞの医者たちではないのだから、身体は一つ、生命は一つだ」

「……………そうだな。むしろ、死なない者も居るのか幻想郷は」

「妖怪ではそれなりに居るが、人間でもそれなりに居る。広義の意味なら、聖も不死に近いよ。もつとも、老化による寿命が無い程度で刺されれば死ぬけど」

刺せばね、と起きつつまた珈琲を一口すすする。

不死でも、長い戦闘の末に力尽きることはあるのだろうか。そういう意味では勝利することはできるが、最も自分よりその弱点について耐性を持つようにするだろう、それは難しいかもしれない。

ともかく、ページを少し飛ばして言われた者を探してみる。種族の項を飛ばしていくうちに英雄伝と打たれた項から、その存在は載っているようだ。

博麗の巫女や道具屋の、普通の魔法使い。時を操るメイドに古道具屋の主人。

その先に載っている三人が、どうやらその不死であるようだ。

「……………」

偉人伝として評価はされているが、ややも漠然としていてどうにも掴むことができない、といったところだった。

むしろ、興味を引くのはさつきから目にする所属の一つ。それは、時を操るメイドの所にも記述があった。

その不死の三人もどうやら同じ、永遠亭の所属のようだが、それより先に気の付いたところを探すために、またページを戻す。

魔法使い。妖獣。獣人。……………そして。

「……………、吸血、鬼……………」

そこに書かれていた内容は、外に当たる自分たちの世界でもよく言われている吸血鬼のイメージ。

人間の血液を食料とし、驚異的な能力を備えるが弱点は多い。その項目の最初の紹介者こそ、今までに気にかかった紅魔館の主。

「……………」

今更幼い少女だということには驚きを持たないし、嘘っぱちな伝承でも若年の姿でやれ百年だか千年だかと言われている。

そんなことはどうだっていい。今重要なのはそこに書かれている内容。

急速に動いていた手は止まり、そこに食い入るように動かない。新しい玩具が手に入り、その取扱説明書を読んでいる少年の様な、そんな姿。

「スカーレット姉妹かい？ そいつが相手なら、さぞかし楽しめるだろうね」

少し安堵の色の入った様子でナズーリンが口を開く。問題を起こす対象が、問題をよく起こす巣窟に向いたことだろう。縁起にも凡そ問題を起こす中核の様にも書かれている。

それでも、ディアボロはその二人が気にかかった。何より、実在する吸血鬼という存在。

『それは本当にあの吸血鬼なのだろうか？』

この一点が、彼の思考を支配していた。

「……ネズミよ」

「ナズーリン、だ。呼ぶならちゃんと呼びたまえ」

「ならばナズーリン。……いや」

思わず尋ねてしまったが、彼女には自分の質問に答える義理もないしそれをさせる術もない。また、『あれ』について知ってしまえば、また新たな火種になる恐れもある。

もつとも、この幻想郷に存在するのは幻想に実在する吸血鬼。そして、自分が知っている『実在した吸血鬼』とはまた別の存在なのだろう。そう信じたいだけであって、至る証拠はないが。

……対面の少女の怪訝な目が、変わらない内に続きを聞いた方がいいだろう。

「……今、何時だかわかるか？」

「？ 昼近くの一、二時ごろだが」

適当な相槌を交わして、再び本に目を戻す。もし自分の思い描く通りであれば、恐れられた存在の証明であるし、なければないで何も変

わらない。

だが、確かに自らが最も興味を引き、かつ打ち倒すに足る器の持ち主。その者が、ようやく見つかった。

「レミリア、スカーレット、か」

記述にはやたら幼さを強調されており、見た目通りの精神構造しかない様にも書かれているが、そもその種の特徴として王たる資質の具現と書かれている。

他の者の記述はまだ詳しく目を通していないが、あの武術の妖怪はまずまずの手練れと書かれていた。時を操るメイドは幻想郷の主たる妖怪の退治屋と並んで書かれていた。妖怪の一角の主に使えるメイド、という点は不可思議だが、それについてはすぐに判明するだろう。

ディアボロが知っている吸血鬼の『現実』については、多くはない。それを詳しく調べ上げることについては、当時の権力をもってしても探ることは難しかった。

その力について調べれば必ずスピードワゴン財団の名前が引っかり、その先に進むことを困難にさせる。

19世紀に設立され、医学と経済界に大きく発展させた、そして今もなおその方面に高い影響力のあるその財団は、その実スタンダードや石仮面に関わる何かを研究している。

何故彼らがそれについて研究しているのか？　そこまではとてもじゃないが突き止めることはできなかった。が、その高い秘匿性も別の角度で見れば掴める物がある。

二次大戦でナチスドイツが研究していた、石仮面。隠されていたその存在と、そのもたらす効能。もちろんそれを調べ上げるのにも苦労は要ったが、そこまでは調べられたし、そこまで知れば十分であった。

人間の未知の可能性を引き出し、超然たる能力を与えること……ナチスドイツが所持していた過去の文献による記述に則れば『吸血鬼』と化すその仮面。

裏組織を治めるディアボロにとって、もしそれが他所に渡ったら必

ず厄介事になるし、自分で持っていてもそれを得ようとした内乱が起きかねない。ましてや、大きなデメリツトも存在する仮面の力をおいそれと自らに使用することは論外だった。

故に、幾人かの幹部にのみそれを伝え、有事のあった際に回収する様に姿勢を整えていた。

「あの『吸血鬼』をいつか従える必要があるかとも思っていたが、幻想の吸血鬼に先に出会うことになりそうだとはな」

実際にそれを使用した者がいたかどうかはわからない。だが、それを使ったとしか考えられない体質の持ち主である男に心当たりがある。

矢を発掘した時、それを買い取った老婆。その後、その資金を元手に立ち上げた組織で行った、その老婆の調査。

それによると、その老婆はその男に神性を見出し、以降をその者に全て捧げたという。その男は極端な太陽アレルギーを持っていて滅多に表には現れないが、人を惹きつける尊大な何かによって、その他信者を集めていた。

……そこまでが、ディアボロの知っている範囲。

「今、何か言ったかい？」

「……特には」

小さくなってきた饅頭を口に放りながらも、その少女は動こうとしない。こちらから行動を起こすまでは意地でも動かないつもりだろうか。

今更見られながらも構わないが、周りはそうは見えていないとはわかっていてもいつまでも幼子に難癖をつけられたような状態にいるのも居心地はよくない。

「……ですよ、……お！ 前に言ってた美味しいスイーツのできたカフェー！」

「いや、甘味処って言ったら……こともう一か所くらいしかないじゃない」

「細かいことは気にしないでください！ おじさーん、霧の湖付近で妖精が適当に育てたけどそれでも形が綺麗なイチゴとか太陽の花の

隣側で毒人形と花の大妖が丁寧に育て上げたヨモギなどをふんだんに使ったその甘さは私が初めて食べた小豆大福のような味の各種大福5個入りセット　そして幸せが訪れる、2つくださいー!」

「澱みなく詰んじたわね、正直感嘆に値するレベルよ」

「お、早苗ちゃんとアリスちゃんじゃねえか!　あいよ、大福セット2つな!」

「おじさん、略さないでくださいよお!　雰囲気欠けちゃいます!」
入り口からは新しい来店者と共に、そぞろに騒がしさが増してくる。

確かに昼時と言っていたし、それ目当ての来客も幾分か来るだろうか。……もはやカフェの様相を成していない。よろずの憩い場と訂正しよう。

何かを入れるにしても、頼む金もないしそろそろ好意の域も外れるだろう。この書籍を読むことさえ確保できればいいのだが。

「すまないね、お二人さん。店が混んできたから相席で頼みたいんだけどいいかな?」

店主と同じ年くらいの女中が二人の席に声をかけてくる。確かに他に座れる席はなく、店の入り口には席を開くのを待機している組もいくらか見える。

「む……まあ、構わないよ」

ディアボロに尋ねる前に、ナズーリンが答える。そこに意見は聞く気はない様子だ。ナズーリンからすれば断る理由はないということだろう。

「こちらも、自分にあまりに干渉するわけではないならどうでもいい。」

「よかった!　お客さん、こちらへどうぞ」

「ふむ、すまないね。……おや」
「げ」

そこに現れたのはメガネをかけた線の細い男性。その顔を見るなり、先ほどまでとは違う苦々しい顔をナズーリンが浮かべる。

彼にはドツピオの時には応対している。そして先ほどの偉人伝に

もその名前は載っていた。そこを開き、顔を見比べる。

「人の顔を見るなりにそんな顔をするのはやめてくれないか？ ……君は？」

「人の物を勝手に商品扱いして吹っかけたくせに何を。聞いた話だと庭師にも同じことをしていたみたいじゃないか」

霖之助とナズーリンはどうやらあまり相性が良くないらしい。が、以前の彼を省みるにそれほど自分に立ち入ることはしないだろう。

ナズーリンと相席していることもあって気にはかかるようだが。

「以前に彼女に助けてもらったことがあるだけだ。今は席が無くたまに相席している」

そちらに関心はないと言外に詰め、読書に戻る。

「そうかい、妖怪に助けられるとは災難だったね。僕は霖之助だ。それを読んでいるならそこに載っているからわかるだろうが、まあ古道具を扱っている。外から流れ着いた者も多いから何か興味があれば顔を出してくれ。」

店主、えーつと……霧の湖の……この能書きのやたら長い大福をくれないか」

想像通り、大したことの無く読書が続けることはできる。

「おや、男性でも甘い物には興味が出てくるものなのかな」

「どうも頭を使う仕事をしているとそういったものが欲しくなる傾向だね。嗜好の問題以前に体が欲するんだ。そこに男も女も関係はないだろう。」

それに、幽香が手にかけて子どもたちが使われているとの話だから、その感想の提出を求められている。彼女にしては珍しいが、乗らなきゃそれはそれで面倒があるからな。文では信用できないらしい「捲し立てる様に、というわけではないが開いた口はなかなか止まらない。弁の立つ人物のようだ。……そういえばあの時も入道使いに止められていた記憶がある。」

「元々大福は腹持ちの良さから男女問わず食べられていたからね。餡や砂糖などを使った甘い物が女性の嗜好品として目立ち始めたのはごく最近さ。」

食に不自由していた昔だからこそ、そういった目的で食されてきたが今では外もここも飢饉で苦しむことなんてほとんど起きえない。大規模な水害や日照りなどもしばらくの間起きてはいないからね、貯蓄しなくても良いというわけではないがそういった傾向はむしろ吉の方向だろう」

「あーはいはい……結構おいしそうだね」

二人が話している内容も、興味はない。こちらに気に掛けないのであればそれでいい。

紅い悪魔、その妹。大図書館に華人。人間ながらに妖怪の館のメイドをしている少女。

読み進めれば進めるほど、興味は尽きない。ここまでの奇人たちを集めた館と、その主。

そればかりでなく、他の項目の妖怪にも目を通す。かつて目を通した、閻魔や亡霊姫。九尾や天狗。必ずしも全てが載っているわけではないようで、例えば河童の項目には大まかな種の記述はあるが個人の記述は何もない。

「……どうなんだい、それは。おいしいの、かな」

——これ……すぐくおいしいです。生地のお餅もさることながら餡の大粒小豆が噛んでいる、食べているということを度々に協調して……その上でこのイチゴ。敢えて、でしょうねこのイチゴのすっぱさ。甘さの中にさらに甘さを加えてもそれは激流に身を任せているだけ。何も変わりはない。そのままお口の中を上つ滑りしていくだけでしよう。だけどこれは違う。まるであんこという甘さの流れを逆らうイチゴという鮭のような。いえ、もはや鯉。滝を上りきり龍と化す鯉です。その結果現れる、天を上る龍。コイキング。これ、きつと画竜点睛の故事ですよ。これが元ですよ、きつと……尊い……ほんとこれ尊い……

——早苗は本当においしそうに食べるわね。見てて飽きないわ

——これほどの深い味わいを生み出すハーモニー……これは奇跡

です……いえ、そんな生半可なものでは……もはや崇拜しかありません……ここに神殿を建てましょう

——神棚から蹴落とされる神奈子と諏訪子、その代わりに鎮座する大福の姿を想像してから言いなさいね？

「だ、そうだ。悪くないよ」
「う」

霧の湖と、その湖畔に建つその者達の拠点、紅魔館。危険度の高さが謳われているが、その記述ではほとんどわからない。最も、以前の妖怪たちが住んでいるから危険だろう、ということなのだろうが。

そこを尋ねるにはその湖を越えなければいけないようだが、それもそれなりの苦労は必要のようであった。

おもしろい。道のりが平坦では得る物も小さくなる。困難を好むほどのマゾヒストではないが、道程を超えるための、能力だ。

「……頼むべきか、頼まざるべきか……これ以上の無駄遣いは……」
「なるほど、確かに仏教は自分には合わないな。欲望の発散のさせ方にまで制限をかけることに理解ができない。欲を満たすのが生でありそれを生きる以外のものにまで手を伸ばすのが知性を持った生き物だとは思うが。……でもそういつて以前あの邪仙に付きまとわれたかあ……」

……そういえば、寺を出る直前に脳裏に走ったあの少女は、この中に載っているのだろうか？

ふと思つて少し見返すが、白黒で印刷されたこの書籍ではどの者も似たような顔に見える。あの小僧と同様幼そうな印象であったが、そうであるなら妖精や妖怪の最初の方に載っていた者だったのだろうか？

「悪くない出来だったな、素材だけではなさそうだけれど。店主、会計を」

霖之助が支払いを行おうと、懐から巾着を取り出したときに、小さな何かがそこから落ちる。

それは机の下に転がり、ディアボロの足を小突く。

「……あれ？」

特に何も言うこともなく足元に転がった何かを拾い上げようとするが、それを見た一瞬、時が止まったかのような感覚に襲われる。

本来であれば、相手に傷をつけるためのその形状。しかし、その本質を知ればそれだけではないということ。

「……何でそれがここに？ ……もしかして」

何を思ったのか、霖之助は辺りをきよろきよろと見回す。それは何か不審な点を探しているように見えるが、すぐにそれは見つからなかったと見える。

その様子を見ることもなく、ディアボロは足元に転がった、その鏝を拾い上げる。

……それは間違いなく、過去に発掘したあの鏝。

「妖精のイタズラかと思ったが……あの三妖精はいないようだね」

「ん、どうかしたのかい」

二人の声も、すぐには耳に入ってこない。

あの鏝がどのような経緯で流れていったかはわからない。明確な足取りを掴むことは不可能と判断し、途中で打ち切った。必要もないと思っていた。

だが、何かの為に、その外見と気づくものくらいにしか気づかない、小さな傷をつけておいた。……遠い記憶、自分の記憶と一致する。

まぎれもなく、自身が発掘したあの鏝。

「いや、最近にも同じことがあってね。触ったはずの無い物が自分の近くに出てきたり……すまないね、拾ってもらって」

「……………」

「…………… ええと、どうか、したのかな？」

あの時手にしたような、高揚感は今では感じられない。結局は鏝はゴルドエキスperiエンスを選んだが、その因果が再び自分に選択を迫っている。

だが、あの時予知が表したような、鏝に拒否される光景が、何となく目に浮かぶ。エピタフによる予知ではなく、自身の感。

黒く、全ての光を吸い込むような光沢。……今の自分には過ぎた代物に感じてしまう。

「これは、どこで手に入れた？」

「その矢かい？ ……家にあつた時は篋の部分が元々ついていたんだが、何故今無くなってるのか……まあいい、少し前にあつた出来事、外人の様だけどそれはわかるかな？」

「ああ、知っている。時が考えられないほど早く過ぎていった、だったか」

「その通り。あの出来事に関しては僕も色々考えられることがあつたが、失礼、とにかくその事変の後に拾ってきたものだ。外の物がよく流れ着く場所があるんでね。……それについて、何か知っているのかい？」

先ほどまでの穏やかな市井の眼から、商人の眼に変わる。縁起によれば見ただけで道具の名前と用途はわかるがその使い方まではわからないといった能力を持っているらしいが。

「……これは、かつて私が手に入れたものだ。古い時代に作られたこれを発掘した。その証拠を提示することはできないが、これと似たような文様の物を4つ、それぞれに私だけがわかるように目印をつけて売却した。これは、確かにその一つだ」

取り繕う嘘も今は必要ない。

「商人、お前には用途が見える能力がある、らしいな。どう、見えた？」
「ふむ……僕には『素質を目覚めさせる』程度の力をもたらすように視えたよ。どう使うかはわからないがね」

「そうか。……その用途には間違いはない。これには自分の持つ才能を目覚めさせる力がある。もしもそれが無い場合、死ぬ。リスクのある物だ」

変に黙っていてもそれは逆に怪しまれる。

「なるほど。矢の形状なのだから、それで相手を傷つける必要があるのかな。ややも魅力的だが野蛮な物だね。神事に弓矢が使われるこ

とは多いからその系譜だろうか」

「かもしれないね。そら、君も速くそれを返してあげたらどうだ？ さっさと返さないといらん事を延々と聞かされる羽目になるよ」

ナズーリンが返却を急かすが、そのための手が、心が揺れる。

「……もしかして、その矢を欲しいのか？」

その行動から、気づかれてもおかしくはない。

「……その通りだ。最も、今の私には支払う物が無い。これは、お前の店の商品なのだろう」

「確かに、その通りだ。それに、今の話を聞いてしまえばおいそれと売るわけにはいなくなつたね。相手を見極めないと、返り討ちにあつて文句を言われても困るからな」

「……………」

当然の帰結ではある。どうにかする方法を模索する必要がある

……

「それを、借り受けることはできるか？」

「貸す？」

「ああ。そうだな、2日ほどでいい。その間、そのネズミが私を監視している。これは貸し借りに関係なくそのつもりらしい」

「ネズミ言うな、そして勝手に私を使おうとするな！」

ややも苦しいが、妥協案。もしこれも断られれば、『今』は諦めるしかないだろう。

「……参考までに聞きたいんだが、なぜ君はナズーリンに付きまとわられている？」

「私を外来人というだけで危険視扱っているからだ。そうではないということ伝えるために、周りをうろつかせている」

「その私を徹底的にのけもの扱いするスタイルやめろ」

霖之助は、顎に手を当てて目を落とす、思索する。

「……いいだろう。命蓮寺なら信頼に置けるし、君が何かしてもそこに請求すればいい。君を知っているわけではないが、もし君がそれを悪用するようであれば聖ならば止めるのも容易だろう」

「おい!!」

「君を信頼につなげることにはならないが、商品という点では非常にニツチなものだからね。元々の持ち主である君なら正しい何かの使い方を知っているということだろうし。もし使ったのなら感想を聞かせてほしい。死なない程度にね」

「有難い、善処する」

「一体どういふつもりだ！ 私の事をガン無視しているいろ決めて！ 私はお前のお守りをするためについているわけじゃあないんだぞ！」

「……ならば好きにすればいいだろう。既にあの男はいないのだから、お前を見張る者も契約を反故しようとしてそれを見る者も居ない」
「それはそうだが、勝手にとはいえずでに交わされた契約を簡単に破れるか！ 私が一番怒っていることは私を勝手に使った話を進めたことだと言っているんだ！」

霖之助との会話後、自分たちも店を出たが、ディアボロの後ろを歩いて歩きながら足と口を共に動かすナズーリン。

彼らとの、自分を利用した勝手な契約に対して腹を立てその事をぼやきながら付いて回る。

「お前がついて周ると言っていたから話も進めやすかったから、こちらとしては非常にありがたかったのだがな」

「だったら一言でも私の話も聞いたらいいだろう。そうすればまだ私はこんなに言うことはなかった！」

「……話に介入させていれば私を監視するつもりはなくなっていたのか？ とんだ意志だな……」

「そういう意味じゃない……!! ああいえばこういふ……!!」

そんな彼女をあしらいながらに、里の中を歩く。本人からすれば堪ったものではないと思うが。

得たい情報は十分に得た。思いがけない僥倖により、力の先へ至る道も手に入った。後はこの行使に至るのみ。

空を見上げる。

ややも下りに差し掛かった太陽は、それでも強く輝いて自分を、大地を照らしている。それを遮る雲もなく、夜には月も美しく姿を見せるだろう。

月齢まで頭に入っていないが、さすがにそれはしようがないだろう。もし望みの月齢が遠すぎるとしても、ああ言った以上吐いた唾は

飲み込無つもりはない。

「お前は危険だとは思っているが、そもそもあの悪魔相手に何をしに行くつもりだ？ 物見遊山、暇つぶしで行くにはあまり面白い所ではないんだよ？」

十分、とは言ったが……過去の自分を考えるとそれすらおかしいとも思える。本で名前を知っただけ。パーソナリテイはほとんど知らない。戦うとして、対策も敢えて取ろうともせずに。

それでも。敢えて過去の小心な自分を捨て自分は死なないという妄信を盾に進む自分。

そう考えるのも今更な気分にもなるが、相も変わらずそれはとても滑稽なものだ。

「……なあ、聞いているのかい？」

「聞いているが」

適当に流している。

「なあなあ、昨日聞いたんだよ、前に慧音さんがいつもの帽子じゃなくて赤い洗面器を頭に載せてる理由」

「あー？ ああ、そんなことあったなあ。あれどういう心境だったんだ？ 今晩はOKとかのサイン？」

「いや、そういうのじゃなくてだな、実はもつとすごい意味が……」

里の外、警備をしている若者は昨日の晩とは違い起きてはいるが仲間との会話に興じていてあまりこちらを気に掛けない。

出る者に対して軽く手を上げて対応するだけだ。本当に、様式的なものだろう。

そんな彼らの傍らを通り、姿が見えなくなったあたりでディアポロは、

「見抜け」

唱えると、目の前には一人乗れる程度の雲が現れる。

「……やはり、あの少年は君なのだな」

「ああ。以前には街中で展開したことがあったからな。この辺りまで

くれば気づかれることはないだろう」

その雲に乗ろうとして……足を止める。

「おい、霧の湖の方面はあっちでいいのか？」

「ん？ ……まあ、そうだが。どうした？」

方角を聞き、そちらの目的がわかると雲をナズーリンに押し付ける。

「わ、何を」

「これには世話になった。返却しよう。扱い方がわからないからあの尼僧に返しておいてくれ」

「う、わかったわかった、とりあえず君の言葉で反応するからとりあえず仕舞ってくれ。それからだ」

そう言われてまた同じように唱えて戻す。

戻った雲は跡形も無くなった。そのあつた場所にナズーリンが立ち、ディアボロの手を取ってぶつぶつと小さく囁く。

特に何か変わった様子は無いが、それで終わったかのようだ。

「とりあえずこれで権利は移った。雲山には今度返しておこう。持ち主が移ったことには本人も気付くからね」

「わかった」

それを聞くと、ディアボロは歩みを進める。

対してナズーリンは、彼と取った自分の手をまじまじと眺める。

「……何だ？」

「……血の、匂いがする。僅かに、でも確かに染めつづけたからこそその匂いだ。でも、ドツピオの身体からはそんな匂いはしなかった。……どういふ身体なんだ、どういふことなんだ……？」

腑に落ちない、といった表情を浮かべる。九尾に蛙と呼ばれていたあの神も似たようなことを言っていたが、それほどのものだろうか。

確かに、自分とて同じ身、幾度も闇に手を染めた相手を視れば直感的にわかる者はわかるが……人間の感覚とは遠い彼女達にはそう映るものなのだろうか。

「私はそれについて悩んだことはないがな。他が気にしたところでどうにもなるまい」

「……そうかい。……………」

気に留めず歩く男と、三步離れた位置から訝しげについていく少女。

いくらか名前のあるであろう妖怪が後ろについているからとしても、異様なまでに彼らに寄ろうとする者はいない。

ドツピオの時には頭の弱そうの妖精共が興味本位で寄ってきていたが、ディアボロの姿、その雰囲気に近寄りがたいというのだろうか。

5月にもなるといいうのに、霧の湖と呼ばれるこの地域一帯には確かに肌寒さを感じる。

天狗から見せてもらった写真にはあの場から這い上がろうとする自分が写っていた。そして湖に浮かぶ氷の姿。

水面に手を浸してみようと近づけたところで、それをしなくてもわかるほどには冷えた水だというのはわかる。だが、氷ができるほどの冷たさではないようだ。

……縁起に載っていたあの氷の妖精とやらの仕業だったというのであろうか。

「……抜けるのなら早い所行った方がいいよ。陸路でチルノに絡まれても楽しくないだろう」

ナズーリンからも注意を促す言葉が漏れる。好戦的な妖精であれば、確かに地の自分に空から攻め立てる構図になるのも想像に難くない。

周回するのに1時間ほどだという、大きくもない湖。早めに向かった方がいいだろう。

それに、時間も頃合いとなってきた。

現在の視界は光源が乏しいという理由を覗けば良好だ。昼に発生すると言われる霧はなく、自分たちを照らすのは落ちかかった太陽の出す夕焼けの色。

時刻が過ぎるにつれて視覚外からの舐める様な目線が強くなって

くる。それは天狗の山で感じたような値踏みをする目線。

「随分血の気のある者がこの辺りには居るようだな」

「そうだよ。人里から離れたこの紅魔館近辺、人がいなくなってもおかしくはないからね。妖怪の原則は人を襲うこと。特に外来人は『何処から必要とされていない人間』という印象が強い。だから攫う以上の事を行う輩もこの辺りから増えてくる」

この目線は、追剥や恐喝を生業とし、最後には殺すことも辞さないような人間たちの飛ばす目線とよく似ている。

相手を同じ人間とみていない。自分とよく似た獲物だという認識。それと、よく似ている。

「……本質はどこも変わらないということか」

「……そうかな。多様性があるのが人間の本質だと私は思うけど」

呟いた内容に、ナズーリンは反応する。

「私だってこの妖怪たちの様な、いやもつと自分の利だけに固執した浅ましい人間を見たこともある。それとは逆に清廉潔白な人間も同じほど見た。妖怪にだってそのように善から生まれた者だっている。……あまり一部分だけで決めつけないでほしいね」

その態度は、昼間の茶屋でみた怒りとはまた違う、理解を求める様な感情だった。

仏教に関連する者だからこそその矜持があり、それを伝えたがるような、そんな感情。

彼女の言いたいこともわからないでもない。最も、それを取って喰らっていたという過去の事実もある。

「わかっている。ただ、自分がそちら側にいる以上闇の方が濃く見える。それだけのことだ」

歩み続けるその先には、紅い光を漏らす館がおぼろげに見えている。

落ちる陽の中、明かりに寄ろうとする虫の様にその歩みは速度を増していく。

自分でも気づいている。このどこかに興奮しているその自身に。

「ここはおおさんー！」

「さんー！」

深紅の館を守るかのように立つ塀と、そこにのみ存在する受け入れ口。

その門の前には小さな羽の生えた二人の少女がふんぞり返って待ち構えていた。

その一方は写真に写っていた少女であり、天狗の教えた情報と一致する。霧の湖に住み着く、妖精の一人。

……もう一人、門扉にもたれかかってその二人と、自分たち来訪者の二人を見つめる女性が一人。

「……………」

「……………湖じゃなくてここにいたのか、チルノは……………」

「さんー！」

「よんー！」

ふんぞり返った二人の妖精は言葉を繰り返しこちらを牽制している。が、それはどう見ても子供の遊び。まだ昨夜の眠っていた里の門番の方が仕事ができそうだ。

奥にいる者が、恐らく本来の門番である紅美鈴であろう。縁起に載っている見た目の特徴と一致する。

外の妖怪たちの視線と同じく、こちらを値踏みするような鋭い視線を飛ばしているが、ディアボロの事を一通り上から下まで見ると、妖精の片割れ、氷の羽を持つ方に小さく耳打ちをする。

「え？ うんうん。おい、男の方は許可が下りた！ お前は通っていないぞ！ あたいが許す！」

「ゆるされたー！」

「……………」

思わず頭痛が生じそうな、それでいて不可解な展開に頭が重たくなる。

どういうことか、と顔を上げると美鈴がその様子に気づき、門を開

きながら説明する。

「外来人の来訪者よ。よくぞ参りました。主君の命により紅魔館はあなたを歓迎致します」

ぎ、と鈍い音を立てながら太い鉄製の門は開いていく。

見た様子では開くための機構はなく、もし人間の力で開けるのならば大の男が2、3は必要な扉を片手で開いていく。

そんな彼女に倣って二人の妖精ももう片方の門扉に手をかけるが、全く動かず早々に諦めて門の奥に行け、というような指さしのジェスチャーを行っている。

「……私の事を知っているのか？」

「私はお嬢様の命に従うだけ。あなたがどこのだれか、何故お嬢様があなたが来ることを知り迎え入れることを命じたか。

私は一切の理解はしておりませんが一介の兵としてはそれで十分かと」

一礼、その礼は客人を迎え入れる様式の礼ではなく拳法の演武の前に行われる開始の礼。それに対してさしたる知識をディアボロは持ち得ていないが少なくとも歓待の為に招き入れたのではなくこれから起こる波乱を敢えて受け入れたかのような、そんな印象を与える。

事実、ここまで気の緩みの様な隙らしい隙は一切見せていない。既に、この場は戦場と本人は考えているかのよう。

門が完全に開ききると、着いてくるようにと促す。その先からは異空間の様な、立ち入ってはいけないと警告するかのような空気が感じられる。

今までの外もそうだったが、それと同じ空気をより一点に濃縮させたような。そんな妖しさが立ち込めている。

今なら引くこともできるだろう。どうするか。それを、問いかけているかのよう。

「安心してください。いきなし取って喰えとの命令は受けておりません。それに、私の仕事は正面から来るものを打ち破る事であり後ろから刺すのは流儀に反します。よほどのことをしない限りは手出ししませんよ」

「……………」

「来ることがわかっていっているというのが不思議でしょうか？ 私も同じです。ですが、お嬢様曰くそれが『運命』。その広大な回転の中にある一粒の金を逃したら承知しないと言われましてね」

答えるまでもない。その魔窟へと、一步を踏み出していく。

「……………まあ、通してもらえないならいいんだろうが……………」

「ちよつとまった、あんたは通していいとはいってないよ！」

「ないよ！」

「……………あ、そう……………」

番外 — BGM2 三枚の写真 —

「あー、おなかへったー。ねえ、まだつかないの？」

「この辺りだけど……そもそも捕まってるのかなあ。最近はうろついでるのもレアだし」

暗闇の森の中を、二人の少女が木の間に縫うように飛んでいる。

夜の闇、照らす星の明りさえも木々に阻まれほとんど見えていないはずなのにそれを障害とすることなく飛行する。

「久しぶりの人間でしょ？ 私が先に見つけたら多めにもらうからね」

「それはいいけど、それでも頭は残しておいてほしいかなー。あの子たちのいい食事兼寝床になるからさ。できればお腹がいいんだけど……」

「お腹はいちばんお肉たっぷりだからダメだよーう」

「だよねえ……」

不満そうな顔をして答える金髪の少女、それに対して当然かと苦笑いを浮かべる緑の触覚、緑髪の少女、そんな二人。

『人間の消える道』とも呼ばれる道の一つ、そんなところを飛ぶ二人の妖怪。

「お墓の周りには外から来る人が多いから狙い目なんだけどねえ」

「なんだけどねえ。じゃないよ、そっちはちゃんと探してるの？」

「見えないからあんたに頼ってるんじゃない」

会話からも、人間の捕食を目的とした、本当にただそれだけの内容。人間が家畜を食す自らに何も異議を持たない様に、彼女たちが人間を食す自らに何も異議を持たない。

「……はあ。私のはあんたと同じくらいにはよく食べる子たちが多いんだから。私の分はなくても問題ないけど、強い蟲になってもらわないと」

「前から思ってたけど、蟲に食べさせてどうするの？ 食べるものなら草でも何でもいいじゃん、蟲なんだし」

「蟲だからってなめないでよね。自分より強い者を喰らえば生き物と

しての位が上がる。より強い妖怪蟲の何かになれるかもしれないこと。地位向上には強い人間や妖怪を食べさせるのが一番だわ。

そっちだって、前に里の桃色を食べようとしてとつちめられたじゃない。その時に言われてなかった？」

「忘れた」

「……はあ。……んん？」

緑の触覚がぴくぴくと動く。

「対象を発見、10時の方向！」

「おー！ どっち？」

「んー、あっち？」

「よーしっ！」

方角を指さすと、金髪の少女から黒い何かが広がる。

その黒は辺りを包み、木々を、草を、大地を、夜を闇に染め上げる。

「掴まって！ そっちまでまつすぐ進むから。見えなくなっても大丈夫！」

「木には注意してね、ぶつかるよと痛いよー」

「そんなドジ踏まないよ！ 先に行った子たちの後についていけばそんなの平気なもの」

言うなり、全く恐れずその暗闇の中を飛行する。一寸先の、それこそ自分の身体すらも認識できないほどの闇の中を。

視覚を完全に遮るその暗闇も、緑髪の少女には何か別の感覚にて辺りの把握を行えているのだろうか。

「あてっ、いてっ、ちよっ、私の事も気に掛けて飛んでよー！」

そんな彼女に引かれて飛ぶ相方は見えない中の木の枝や葉による擦り傷が増えていく。それは、尚更緑髪の少女の不気味さを醸し出していく。

構わず進んでいくと、小さな何かがざわめく音と、それを散らそうと恐怖の中取り払う男の声が聞こえる。

突然の暗闇の中、見えない何かが自分の身体を蝕んでいく、そんな恐怖に喚き散らされる絶叫。

「見つけたッ!!」

暗闇の中に捉えた被食者が手元に来たことを確信した、闇を放った少女が片割れの手を離してそちらに寄る。

視認はできないが、男の声がひととき大きな叫びに変わる。先ほどまでのじわじわとした苦しみから、直下に襲いかかる直接的な暴力。辺りに漂う血の匂いが、より一層に強くなる。かなりの出血が、音でわかるほどに。

「うまい! これはまさしく私の好きな人肉の味!」

「ちよつと! 見つけたのは私が先でしょこれー!」

捕食と共に闇を解き、辺りの状態は一変、夜の森の中に戻る。

男の下半身には大量の蟲が這い、覆う。脇腹からは血がとめどなく溢れ、赤い肉と臓腑が見え隠れし、その源泉を貪るために蟲たちが入り込んでいく。

「そだ」

「どうしたの? 何でもいいけど、私が見つけたから頭は私のだからね」

「んー、それはしようがないなー。一口だけちようだいね」

「もう……で、それなに?」

金髪の少女が小さな箱を取り出す。

「市松様様の天狗からもらったの。なんか面白い物があつたらそれに向けてここを押しなさいって」

そうやって箱と顔を男に向ける。

男もそれに気付いてその顔を見る。飛行する人間、鼻から下半分、そして少女の身体に濡れた赤が異端を認識させる。

脳が身体に信号を送ったその時に、箱から光があふれる。

「わっ?」

「ひえっ」

突然の光に二人は驚く。それは一瞬の光だったが、それだけだった。

「……終わりかな?」

「わかんないよ」

「んー、まあいいかー」

言いながら、二人の少女は男の近くに寄る。逃げようにも、下半身は既に骨が露出するほどに喰われ動かすことすらままならない。

そんな彼に近寄って、一人は満面の笑みを、一人は申し訳なさそうに手を合わせる。

「悪いね。ここはそういう『決まり』なの」

「ありがとうございます、いただきまーす」

「……おや、どうしました？ あなたから私に頼みごととは珍しい」

「あら。わかってしまいます？」

「もちろんです。今のあなたほどに余裕の無い顔は今まで見たことありません。その表情の裏、天敵である私に頭を下げようとする姿勢、普通ではありませんよ。わからない方がおかしいです」

「……閻魔さまは優秀ね。家の式もそこまで考えが及ぶようになると思います頼もしくなるのだけれど。霊夢とまではいかなくてもいいのだから」

「娘自慢はいいですから。用件は何ですか？」

「閻魔さまに視てもらいたい方がいますね。正式な手段に則っていないので仕事中に話すとそのまま還してしまいそうなので」

「私用で私を、いや、鏡を借りたいと」

「……だーめ？」

「なんでそこで媚びるんですか、気持ち悪い」

「とある信頼できる情報筋からそういうのも好みと聞きました。嫌でした？」

「ええ。すつごく。信頼できる情報筋の者、なんとというか割と大柄で大きな鎌を持った死神装束で胸の大きいサボり好きな女性じゃありませんでした？」

「さあ、鏡を見れば思い出すかもしれません」

「あなたは鏡に写るんですか？」

「……20歳は過ぎてますので」

「何年前に」

「へへー！ みてみて！ 大ちゃん見てみて！」

「わー、すごい！ 何それ？」

霧の湖のほとり、小さな二人の妖精が戯れ合う。

「んつとねー、カメだかメラだかそんな名前。文が使ってるのと同じなんだって！」

「へーえ、小さくってかわいいね！ てことは、それを使えば新聞が作れるの？」

「うーんと、これで写真を撮るだけだから、新聞はできないけど、新聞のタネにはなるって言った」

「じゃあこれを植えれば新聞ができるの？」

「違うよ、これを押すと、わっ！」

教えてもらった通りにスイッチを押すと、まばゆい光が漏れ、その驚きにカメラを落とす。

それでもしつかりシャッターは切られており、レンズの下の口からは写真が印刷されて出てくる。

「お、おとお??」

「ほんとだ、チルノちゃん写ってる！」

適当に押ししたその時に写っていた、カメラを持っていた妖精の顔が、ブレて、ピントもぼやけているがそれでもはつきりとした色合いで浮かび上がっている。

「どおーだ！ これで妖精でも天狗の仲間入りつてもものよ！」

「すごいね！ ねえチルノちゃん、私も撮ってよ！」

友人が写っていることに感動した妖精は、目を輝かせて自分も被写体になることを願う。

「もちろん！ 大ちゃんもたくさん撮るから、あたいのもたくさん

撮ってよね！」

そう告げると、被写体の妖精は小さく笑みを浮かべて撮影を待つ姿勢に入る。

撮影者の妖精はにこやかなブイサインと共にシャッターを切った。同じようににこやか、少しとられることに恥ずかしがるその顔は、年相応の優しい笑顔だった。

一瞬の溢れる光に驚き、やや目を瞑るができた写真ではそんな瞑った顔ではない直前の笑顔の写真。

「わ、すごい、でた、あたしだー」

「おー、すげー！ 動かなかつたら写真も動いてない！ ……あれ」

写真の端に写る異物に目が移る。それは湖から這い上がる人間。

「あれれ？ 人魚？」

「え〜っ？」

そう言っつて湖の端に目を向けると、確かにその人間はいた。

霧の湖の水温はやや低い。が、普通に水生生物が生存するには問題ない。

だがこの氷の妖精が遊び場になっているときには、その影響でどうしても水温が下がる。それこそ、真冬の海のように。

ところどころに氷が浮かび上がるその湖面を、懸命に生きのびようとものがくその姿。

「よーっし、人魚が凍るかやってみる!! 魚やカエルと同じかどうかやってみる！」

その意志が成ることは、なかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「死にましたね」

「……あの子は……妖精に道理を説くのも間違いなのかと思っ
てしま
います」

「チルノを他の妖精と同じに見てくれているのね、うれしいわ」

「ですから説教しているのですけどね。はあ。存外早くあの子を裁く
ことになるかもしれない」

「お勤め、ご苦労様」

「で、彼が話の男ですか。……なんというか、見ただけで伝わるものが
ありますね」

「何ですか？」

「説教したい。更生させたい。悔い改めさせたい」

「お勤め、ご苦労様」

「それに、彼を取り巻く呪縛も気になるわ。これほどの強力な呪い、見
たことありません。そして、それは人の負の思いから生まれたもので
はなく、救いの為に悪を律する生の思い。」

私の観点からすればそれは黒なのですが、その対象者はきつと彼を
追放した功績で称えられているでしょうね」

「一目でそこまでわかるなんて、やっぱり閻魔様ってすごいわねえ」

「あなたがそうやって褒めるの気持ち悪いのでやめてもらえませ
ん
か」

「ぐすん」

「うわ……」

「ごめんなさい、さすがにそこまで引かれると辛いです」

「じゃあやめなさい」

「そうさせていただきます。……とところで」

「ええ。それについては請け負いましょう。あの事変は我々でも手に
負える物ではなかった。裁かれる魂が裁きを受ける前に消滅してし
まって騒いだ区もあつたそうだし」

「お勤め、ご苦労様」

「いいよ！ 姉さんすごくいい！ そのポーズがすごく『イイ』!!」

「そう!? そうよね!! 輝いてる? ねえ私輝いてる!」

「輝いてる輝いてる！ すっごく輝いてる！ メル姉さん、ここらでそのボタンも外してみようか!」

「いいえリリカ！ ここはそんなすつトロイことをしている場合ではないわ！ 全部『脱ぐ』ツ!!」

「うおーい姉さんマジ!? そりやマジ?? いいのそんなにしちやつて！ 麗しいメルランボディーがまつさらだよ！ 初雪積る山の様なそのボディー!」

「ああっ、いい！ すごくいいわ！ 興奮してきた！ リリカ、あなたも脱ぎなさい!」

「え? いやそれはないわ」

洋館の一部屋、卓の上に少女が一人立ち、その姿を撮影しているもう一人。

彼女たちの周りにはトランペットやトロンボーン、ホルンなどの金管楽器が宙を舞い、卓上の少女が何か動いたり喋ったりするたびに音を奏でる。

一見めちやくちやな音に聞こえるが、それは妙につながった音にも聞こえ、人間が効いたら否応にも気が周ってくるような、そんな音。

「そんなこと言わないで！ 姉さんはリリカと一緒に写真が撮りたいの！ 姉妹が揃って仲睦まじく卓上で踊っている姿を記録に残したいのよ!」

「だからといって脱ぐのではないわー」

「そんなことない！ これからは暑くもなるのだし姉妹同士で仲睦まじく卓上で踊っている姿が流行になるわ！ 次のライブのチラシにするの!」

「ルナ姉にそういうの振って」

卓上の半裸の姉が、撮影していた妹の体を揺すって訴えかけるが、先ほどまでの高いテンションとは打って変わって完全に冷めた目に対応する。

先ほどまでののはただの合わせだったのだろうか。しかしもし彼女を知る者がいたらまさしくその通りだというだろう。

「……お茶、置いておくわよ。こぼさないでね」

黒い衣装に身を包んだもう一人の少女が、戸を少しだけ開けると中にお盆だけを入れて退場した。

二人になるべく気取られない様に、ということだろうか。

「……まったく。新しいおもちゃを手に入れたからって……二人はまだまだ子供ね」

そう言いながら黒い衣装の少女は洋館の外に出る。傍らには卓上の少女の周りに浮いていた金管楽器の様に、ヴァイオリンが宙を舞う。

空いた手にはカメラ。幻想郷の住人である彼女が持つには似つかわしくない、やや大型の機構が付いたポラロイドカメラ。

「……うん、撮るなら人や物事よりこういう自然がいい。人には人の役割がある。妹達ならともかく、私はこれくらいでちょうどいい」

そう呟きながら、洋館の周りに存在する自然を撮影していく。彼女が出てきた洋館はとてもじゃないが人が住んでいるとは思えないほど荒廃しており、その周りの自然も同じように全く手の入っていない原風景。

廃洋館自体は珍しいが、その周りの自然は珍しいわけではない。彼女はそんな二つが入り交じった風景が好きだった。

いつも見られる風景に、いつもは見られないその姿。そんな風景はエンターテイメントを提供する自分たちのようだ。彼女はいつも、そう思っている。

かしゃり、かしゃり。シャッターを切る度にその風景が切り取られて一枚の絵となって現れる。

音楽もいけれど、こういう写真を撮りたためて飾るのもいいかもしれない。ああ、同じ場所を季節ごとに違う風景を切り取るのも美しいかな？

「天狗はこういう使い方をしない。いつも目を引くものにだけにしか使わないから。私がこういうものを撮っていることは記事にして

もその先は記事にはしない」

一枚、また一枚と景色を切り取ってはその写真をアルバムに挟み込む。

この辺りから少し離れたところを撮ろうか、そう思った時に。

「……………」

茂みを歩く音。荒い吐息。倒れる様な音。

中から騒霊らしい音が響きまわる中、そんな音に引き寄せられるには異質な音。

「…………誰か、いるの？」

洋館の影、二人が騒いでいる反対側からその音は聞こえてきた。

そんな来訪者を訪ね、恐る恐ると覗いてみる。

「…………人？」

見たことの無い人間だった。

幻想郷の住人にしては、衣装は違う。外来人ではあるだろうけれど、それなら何に怯えているのだろうか？

確かにここは紅魔館の近くでもあるが、それでも自分たちの館の近くにまでくれば人を襲うような妖怪は出てこない。自分たちの音に影響されて人を襲う場合ではなくなるのがほとんどだから。

何かに襲われてからの来訪だったのだろうか？ それにしては傷は一切ない。攻撃された後ではなく、あれほど肌を露出しているのに、草木に擦れた傷すらも。

そんな、不自然な人と自然の合成に。

「!？」

突然の光にその人間は驚く。

「…………ああ、すまない。驚くよね。急に撮ってしまって。ちよっと、その姿が素敵で」

「うあ、あああ…………!!」

「…………え」

様子がおかしい。

自分は人喰いの様な容姿はしていないし、見た目にそぐわぬ妖怪も今は多いからそれを警戒しているのだろうか？

両手を上げてとりあえず襲わないことをアピールしながら、

「お、落ち着いてほしい。別にあなたを取って喰おうとしているわけじゃない。その、えーっと」

「や、やめろ、こ、来ないでくれ……!!」

「そ、そこまで恐れられなければならないのか……少しへこむ」

表情を曇らせながらも、それでもなんとか距離を縮めようと思うが、男は怯えて下がるのみ。

どうしようかと困っていたその時。

「あつ」

「えつ」

突然、穴に落ちた様に姿を消す。慌ててその場所を探るが、穴どころか何も無い。

「……スキマ妖怪?」

幻想郷では名の知れた彼女、こんな芸当ができるのは彼女くらいしか思い当たらない。

理由はわからないが、彼は、消えた。消されてしまった。

「ふむ……なるほど……これが彼の……」

「なかなかあくどい過去をお持ちね。知らなかったわけじゃないけど改めてみると人間が一番恐ろしいのかもしれない」

「外では恐れられる物が変わってしまった。自然も科学によって統制され災害すらも予期できるようになった」

「あの時にはこれほど人間が早く進歩するとは思ってもいなかった。数々の、人間の戦いが彼らの時代と意識を変えていった。そこに、我々が入る余地はだいぶ少なくなってしまったわ」

「外の流れとこちらの流れはもう完全な別物です。あるがままを受け入れるべきでしょう。それに正当な反発があったからこそ今の彼がいるのでしようし」

「以前の業はここでは顧みません。彼の成すがままを受け入れたいと思っています。その方がかの事変に近い状態になるでしょう。それを私は見るつもりです。閻魔様、あなたはどう思いますか？」

「……私の意見を取り入れるつもりはあるのでしょうかね。それに何か起きてもおあなたの手に負えない事象は起こらないと思います。手元に飼いならしておくわけですから」

「もちろんです。けれど、ここまで手伝ってもらったというのに何も聞かないとあまりにも冷たい女と勘違いされてしまいそうです」

「今更ですなすごく」

「今更ですかすごく」

「私の意見を言うなら、それは反対です。実験のためにわざわざ悪を受け入れ幻想郷をかき乱す。もちろん背後に理由があることを知らないわけではないですが。」

それでも受け入れるのであるならば、私も彼に対していろいろ言いたいことがありますのでそれを考慮してもらえれば」

「構いませんよ。ふふふ」

「すぐには私の力による影響は現れないでしょう。それほどに彼の纏う力は強い。しばらくは彼はここを彷徨うことになるでしょうから、それが終わってからでもいい。私は、彼の異質さを理解させてあげたい」

「彼はここに居着かないかもしれませんよ？ それに、何かの折に得る物もないまま往ぬかもしれないというのに」

「それでもです。知ってしまった以上私の性分ですよ。一つの身体に二つの精神を作り、それを意のままに操っていた彼。その中の精神は既に彼の肉体にある存在ではなくただ入っているだけ。寄り添う精神体こそが自らであるということ、それに気付くべきと考えます」

「……………それ、現状にも未来にも必要の無さそうなタネですね」

「でしょうね。ザナドウのヤマだからではない。一閻魔ではない四季映姫から伝えたいのです。本人の持っていない秘密を知っていることほど気持ち悪い物はないですから」

「……誰？」

「……人？ どうしてこんなところに」

「……妖精メイドじゃない。確かに人だわ。咲夜や魔理沙とかと違う……あなた、男の人？」

「初めて見た。でもどうしてこんなところにいるの？」

「どうでもいいか。ねえねえ、遊びましょう？」

「……ねえ、どうして怯えているの？ 私しかいないのよ？」

「光がないから？ 他に人がいないから？ 血の匂いがするから？

……私が吸血鬼だから？」

「恐いの？ ふふふふふ、褒めてくれてありがとう」

「それなら、遊びましょう？ あなたはあるがままでいいわ。もう底は知れている」

「逃げなくてもいいよ。どうせ死ぬんだから」

「まだ体が壊れる前に、心が認識できる時に言っておくね」

「ありがとう」

「綺麗でしょう、この庭。私が手入れしているんですよ。さすがに白玉楼の彼女には劣りますけど……あくまで彼女とは専門が違いますからね。私は門番の傍ら庭の手入れ、彼女は庭師の傍ら侵入者の掃除ですから」

穏やかに語りかけながらよく手入れされた庭を横切る。

白玉楼で見た物とは大きく様式は違う。あの庭が、あの敷地が和風だったこと。幻想郷自体が日本に存在するということでそれが当然なのだが、この紅魔館の趣向はそんな和とは違う、ディアボロの祖国イタリヤを属する欧州の趣。

故にその様式に美を感じる前にどこかの懐かしさを覚える。もちろん、その剪定技術も並ではないことを感じさせるのだが。

「幻想郷では門番やつても暇が多いですからね。ある程度は門番担当の妖精に任せてこういうことをする時間が取れてしまうんですよ……まー、それでも侵入しようとするのはいないわけじゃないんですけどね。黑白とか魔理沙とか」

特に対話を求めてディアボロに話しかけているわけではない。進行も、美鈴が先を行きその後距離を離して彼がついてきている。

もちろん話にかまけているだけではない。歩きに油断は見えないし、決して顔を合わせるわけではなく後ろに居ることを認識するために話している。

隙はない。

「侵入者は普段から丁重にお帰りいただいているし、扉に囲まれているので普段はこの景色を見せることは少ないのですが、少なくとも宴のときにここが寂しいのでは主の器量が知れてしまいますからね。」

もつとセンスある方が担当できればいいんですけども、咲夜さんも多忙だし、私たちのような存在がいるのに人間に肉体労働させるのはなんですからねえ」

この広さの庭を重機などを用いずに準備をするのは骨が折れるだろう。その後の剪定でも同じ理由で苦勞が見える。白玉楼の庭師の

労力もおそらく相当であっただろう。

そのような会話をしている間に館の扉の前に来る。こちらは門の様な強固な造りには見えず、美鈴もそれを特に力を入れずに開く。

「改めまして。ようこそ、紅魔館へ。主君の命により、館はあなたを歓迎し」

「咲夜ー。どこー?」

扉を開いたその先、エントランスにかかる両階段。その上をとことこと歩く寝間着姿の幼子。

「これはフランの着物よ! サイズは一緒でもこんな着れないわ! 洗った後は妖精メイドに任せないであなたがやるように言ったでしよー!」

ばたん。

「……………」

「……………」

沈黙のみがそこにあった。

扉の先の光景も声もやりとりも、閉めきられば何も見えない。

それを見せた彼女は、表情を引きつらせ冷や汗をかきながら硬直している。

「……………」

「はい、なんででしょう」

声だけは普通だ。気丈を装う精神はあるのだろう。

もつとも、表情はずっと変わらず『やってしまった』という感情のままだが。

「私の情報が確かならばあれが」

ディアボロが口を開いたあたりで、扉がひとりでに開く。

その先には、召使いの衣装に身を包んだ少女が一人。

開いた先の相手を確認すると恭しく頭をさげる。

「ようこそいらっしゃいました、名も知らぬお客様。ここより先、館内

の案内はこの私、十六夜咲夜が務めさせていただきます」

現れたそのメイドは先ほどの光景では確かにその周りにはいなかったし、あの一瞬でどこか影から現れるということも難しいだろう。

それをやりおおせるその力、縁起に載っていた時間を操る能力の一部であろうか。

「お嬢様がお呼びです。どうぞ、私の後へ。……館には何が落ちているかはわかりません。道を外れないようお願いいたします」

紹介もそこそこに案内を始める。門番とは違い不愉快な感じを与えないようにはしているが、ただ淡々と業務をこなすその姿。

冷徹な、機械の様な印象がある。咲夜というメイドは、そんな女に見えた。吸血鬼の傍らに居ても何らおかしくないような。

「……」

美鈴とは違い、余計な言葉は挟まない。着いてきているかどうかの確認も、後に響く足音で理解しているように見える。

刺すような無言が、それは敵地に居るといふ思いを刺激するようだった。

屋敷は外から見えた箇所もその内装も、目がおかしくなるような紅一色であり、窓から射し込む明かりが一色の濃淡を操作している。

時折頭を下げる妖精のメイドたちは外で見た妖精たちとは違う、好機で動く子供たちの様な印象はみえない。今は余計なことを言えば仕置きが待ち、それを恐れて頭を下げている、様に見える。

外でも何を恐れてか妖精たちは自分たちの前に出てこなかったが、それと似ている。恐れる方向が今は違うだけで。

「……」

屋敷を歩いている内に嫌でも気づく違和感。外観から判断できる以上の広さ。階段を上る距離はそれに合っているが、通らずにいる通路の先は見えないことの方が多い。

時間を操り空間を弄るとのことだが、眉唾に見えるその力も直面す

れば恐ろしい。ディアボロの能力とは違うその汎用さ。

自分以外の限定的使用を行える目の前の女、それを従える吸血鬼。普通に考えれば、スタンドの存在を知っていてもなお常識外の力を持つ者の巣窟だ。

……自然と、歩みにも、拳にも、強張りが入る。

直接的にはないが、窓から射し込む夕日が日没を示し始める。

「お嬢様、失礼いたします。客人をお連れ致しました」

その大扉の辺りには窓はなく、燭台に点された蝋燭の炎が揺らめき辺りを照らしている。

今までの幻想郷の明りは当然それに依る物が多かったのだが、ここはまた趣が違い、生活のための灯というよりは人外の環境、誘蛾のための灯。

「入れ」

中の返事をこちらが確認すると同時に、扉が開く。中はこちらの光のみが射し込む暗い空間。

その先僅かながら見える、玉座の間ともいわんばかりの豪華な部屋。その奥、その間にふさわしい装飾の椅子に座っている幼子。

こちらが彼女を認識したあたりで、ぼう、ぼう、と部屋の中に明かりが灯る。入り口から、一つ一つ、その奥の主に向かって。

「よく来たな、外来人の来訪者よ。私がこの館の主、レミリア・スカーレットだ」

わざわざの演出を重ね堂々と名乗るその姿は、その生まれから、その生き様から、相応に振る舞うことが当然である貫禄がある。

見た目は幼子だが、確かに500の齢を重ねていてもおかしくない、そう思わせる高貴な気風、眼光。

「なるほど、初めて見たが私の想像以上には気骨があるようだ。嬉しいよ。少なくとも、私を見て怖気づいたり侮ったり……心が揺れ動くならば期待外れだったからね」

眩く主を目の前に、中ほどまで歩みを進めて拝謁の礼をする。これも、幻想郷でなかったら行うことはなかっただろう。

「へえ、礼儀は弁えているんだな。こここの所そういった対応をするよ

うな客人は迎え入れてないからねえ。久しぶりに見た、いい気分だよ。

……さて、あえて問おうか。客人よ、お前は何をしにここへ来た？」
札を終え頭を上げると、レミリアの傍らに咲夜が移動していた。案内を終え主の傍に立つその姿はメイドというより執事にも近い。

人間と妖怪、共存のする幻想郷でもとりわけ奇妙な関係だと感じられる。

「お前が来ることはわかっていたけれど、何を目的かはわからなかったからね。調べればそれでわかるんだけど、そんなんじや面白くはないだろう？」

娯楽の少ない幻想郷だ。せつかくの楽しみは直接味わうに限るだろう。……で、どうなんだ？」

レミリアは身を乗り出して訪ねてくる。その根底は、妖精と同じような好奇心。

それでいて、凡その答えとそれに対する返答を準備しているのだろう。そのような余裕も感じられる。

「期待に沿えないようできて悪いが……」

だから、始まりは詫びの言葉。

「人は……一生のうちに『浮き沈み』があるものだ。そして、その一時の境遇に対して笑い、泣く。今の私は、その『絶頂』から突き落とされた」

一瞬に訝しげな表情を浮かべるレミリアの双眸を見つめながら。

「普通ならば死で表現されるその落下は、私の重ねた罪ゆえに永遠に繰り返される死として私を縛りつづけた。最底辺を延々と芋虫の様に這いつくばり踏み躪られる、そんな呪縛。

その折に、何の興味か因果か私を拾い上げる者が居た。幻想郷の者なら誰でも知っている和聞いている。ユカリなるものに」

「その者に踊らされていようが、なんであろうが、私をこの地に救い上げたことは事実。聞いた話によればこの世界で私たちが外の者がここに現れることは少ないことではないと。そして、その者達が元の世界に戻ることも可能だと。」

例外はあるだろう。自分がそれに必ず合うとは思っていない。それでも、その一縷の希望にかけて」

「私には野望がある。再び『絶頂』に至るために、今までに立ち会った中で最大の障害であったあの男を超えるために。」

人間には必ず立ち向かわなければならぬ『試練』がある。試練は必ず戦いが起こり、その質は『生贄』の流される血で決まる」

「……………」

「試練は、あの男に打ち勝つために重ねられる。恐怖を砕き、己の過去を乗り越えるために。その試金石として」

「もういい」

語っていたディアボロに、興味を失ったかの表情を浮かべてレミリアが口を挟む。

「つまるところ、唯の力試し程度なのだろうか？ 私も見縊られたものだ……それとも、あまりに現実離れたこの地に馴染み、私たちのような妖怪に対する認識がぐらついているのか……」

どちらにしろ、面白い来客だと思っていたのにその程度とは。……
興醒めだよ」

レミリアが手の叩き、乾いた音が響く。それと同時に、ディアボロの右手が何者かに掴まれる。

取った相手は、着いてきていなかったはずの門番。「残念ですが」と、彼女の唇から小声で紡がれる。

「美鈴、そいつはもうここに用はないみたいだ。丁重に送ってあげてぐいと手を引かれ、退室を促される。

当然だ。自分より格下の者に、同じ人間同士の戦いのための踏み台になれと言われているのだ。……吸血鬼でなくても、怒りにも呆れにもとられるだろう。

しかし、だからとてそこを偽るつもりはない。こちらの真意を伝えたい。向かってもらわねば、到底奴に太刀打ちできるとは思えない。

あの敗北が、レクイエムの呪縛が、自分の中のジヨルノを大きくしているのだらうとはわかっている。が、それほどの相手だと、今まで

の自分の積み上げた物を一瞬で崩したあの男が、目の前の吸血鬼に比類しないとは思えない。

「っ」

引かれる手を弾き、自らの意志を再度示す。

「……何のつもりだ？」

「今言ったとおりだ。これから起こる出来事は、私にとつての岐路となる。己の野望を燻らしたままに生きていくことは有り得ない。

もしこのまま元の世界に戻ったとしても、幻想郷で過ごしていくとしても、過去を忘れて生きていくことなど、私にはできはしない」

先ほどの射るような目線に返すがごとくレミリアを睨み返す。

強大な相手への宣戦布告。それでも、あの女狐に相對した時の様な恐怖感を、少なくともこの時は感じない。

「……お嬢様？」

美鈴が問う。発したのはその一言だけだが、その意味合いは今は一つ。

「変わらないよ。丁重に送り出してやりな」

その言葉が発せられた瞬間に、ディアボロと美鈴の間に火花が散る。

一瞬の目線のやり取りは、美鈴に下がらせることを選択させた。

「っとお。……頂けませんね、その顔は。少々痛い目を見ることになりますか……よろしいのですね？」

「……」

「二言は無いということですか。……？」

レミリアの眼前の広間にて対峙する。

肩幅よりやや広めに足を開き構える美鈴に対して、何をするわけでもなくただ歩いて距離を詰めるディアボロ。

どう見ても、美鈴と渡り合えるようには見えない振る舞い。少なくとも、道としての武の研鑽を積んでいるようには見えぬ、人間と比べれば対なきほどの経験を重ねた彼女には太刀打ちできそうもない、印象。

「……………」

そんな彼女の意を介すことなく、詰め寄る彼の姿に美鈴は防御の選択肢を取る。

あそこまでの大口を叩くほどの実力が、策が、彼にはあるのだろう。その自信を打ち砕くには先じて潰すより受けて潰す方がいい。

もしも当たれば勝てた、などという思いあがり潰すために。

……詰め寄る流れは、ディアボロが易々と美鈴の間合いに侵入する形となる。

一足で詰め寄れる間合いとしては人間の達人より広く、無防備に侵入してきた彼を討ち取るにはすでに十分の距離。

それを敢えて受けるために、神経を、精神を集中させる。

……さあ、来い。その牙を我が身体に打ちて見ろ。

美鈴が念じた一瞬、ディアボロが強く踏み込み、両腕を突き出す。

矛先は顔面、人中。そこを狙う右腕と、それを守る左腕。

正確に急所を狙う技術と度胸は及第点だ。だが、やはり自分を相手するには無謀すぎる。

わざとそのまま受けて効かないことを見せつけようか。何が来ても問題ない様、全身に『気』を集中させたその時。

「ッッ!!!」

レミリアが目を見開く。咲夜が息を飲む。辺り一面に、遅れて打音が響く。

強い衝撃を受けた美鈴の身体は、その慣性のままに飛び、落ちる。

誰もが見切れなかったその一撃、それは彼の精神像による見えざる一撃。ややも仰角気味に美鈴の腹部を撃った一撃は、彼女の踏ん張りを振り切り肉体を空へ打ち上げる。

勢い、受け身を取れないほどではないが、

「がっ、ほっ、」

着地と同時に喉奥からせり上がる血と液を吐き出す。やや青ざめるほどの、腹部にかけた彼女の皮膚。

まるで、厚いゴムに包まれた鉄板を殴っているような感覚だ。

それが彼の感覚。

「……なるほど、最前線に率先するほどの実力を十分に持っているの

だな」

「へっ、当然ですよ。やや予想以上でしたが何も問題はありません」

一撃後の処理を終え、再び立ち会う。

ディアボロに寄り添うスタンド、キングクリムゾンは確かな意志を持ち彼女を見据えていた。

「今の一撃、かなりの威力がありました。そうですねー、魔理沙のナロースパーク……いや萃香さんの生パンくらいありましたかね」

ストレッチ……というには大仰な、ゆつくりとした柔軟運動を重ねながら美鈴は評価する。

「ためらいもありませんでした、『相手が死んだって構わない』というのが十分に感じ取れましたよ。……だからこそ、少し解せないものがあります。

何か兼ねていたのでしょうか？ それとも慢心でしたか？ 私が思いの外強かった……なんてものではないですよね？」

その流れるような動きを重ねる度、彼女の身体から、目には見えないうが知覚できるような『何か』を感じ取れる。

あれは中国拳法にてよく見られる動きか。そして気を遣う程度と称された彼女の能力。

人間の力には科学では証明しきれないような不思議な現象を起こせるものがある。一説には己の能力を何倍にも引き出すことができたり、傷の再生を速め、痛みを鈍らせることができたり。

他者に流用すれば触れた者の病や負傷を癒し、逆に溢れる過剰な力は相手を破壊する力に転ずる。

そういった物に近い『何か』であろうか。

「……あの力量で、より正確に良い急所を狙えば即死、あるいは戦闘不能だった。それをしなかったのは何故か……覚悟と行動にややも矛盾を感じられます。殺人に抵抗を感じられるような人間ではないと思いましたが」

だん、と力強く地を踏み鳴らす。同時に、先ほどまで感じられた『何か』が目に見える形となつてその踏み鳴らした場から吹き上がる。

その確かな奔流は周辺に強い風圧を巻きディアボロの身体を激しく撫ぜ、美鈴自身の身体も衣装も激しく揺らす。

先ほどに打った腹部は普通と変わらない、健常な色がちらと見える。

不意を打てたとはいえ、神の身体を貫けた一打を気を廻すことによつてここまで抑えられることができるという証明だった。

「その程度であるならば、紅魔の門を潜れはしない！ 陽の当たる舞台へお帰り願おう！」

見得を切るのと同時に、高らかに足を振り上げる。同時に、虹色に輝く、彼女より二回りほど大きな気塊が放たれ、それが円を成してディアボロを襲う。

一瞬の光景にややも面を喰らうが、ゆつくりと前進するそれは回避、防御には余裕がある。

……つまり。

「せえいつ!!」

その気塊を突き破るように、拳に同じく虹色の気を纏った美鈴が突っ込んでくる。

初段は目くらまし、その後の追撃が本命。そのことは『視えて』いたことだ。

その拳をキングクリムゾンの手で受け、流す。それはディアボロの本体の動きに合わせて動き、あたかも自身の力のみでそれをやりおこなったように見せかけて。

「ふっ、はっ、いやあっ!!」

そのまま、流れるような連撃がディアボロを追い詰めようとする。右の拳が彼を討とうと振るわれ、それを避ければ回転、左脚、右脚と独楽のように回り追撃の手を緩めない。

一挙一挙を受け、躲す。最初の突撃のように、難なく防御できているように。

美鈴が虹色の気を脚に纏いながら小さく空を舞い、弧を描くようにそれを振り下ろす。予定されていた一撃を、後ろに避け躲す。

明確な大振りの一撃、それを避けたことによる機。美鈴の着地に生まれる僅かな姿勢の揺らぎ。

「かああああっ!!」

わざと隙を生じさせ、近づいてきた敵を狩る。行えればそれは理想の流れだろう。

攻勢を重ね続け、最後と思える一撃を。当たれば仕留められるも、当たらなければ復帰の難しい技を。それでも、命中に至るまでの布石を敷いて。

もしそれが避けられ、反撃されたとして誰が彼女を責めようか。それはもう相手を優秀だと認めるしかない蹴りだった。

そんな彼女の、妄執のように敵を討とうとする追の秘撃、紅寸勁。一歩踏み込んでくるであろうディアボロを捉えようと放った拳は、今までの虹色のそれと違い、彼女の姓を表すかのごとく紅かった。

空気が振動し、辺り一帯に破裂音が響く。

「……ッ！ あなた、どこまで……」

その一撃すら、ディアボロには届かない。彼の身体に届く寸前で、彼の動きが止まる。全ての攻撃が、まるで読まれているかのようにいなされる、空を切る。

美鈴が当たると思った、思っていた彼の動きも彼女の追撃を誘い出すためのフェイク。そして、それをわざわざさせたうえで、反撃に移らない。

それが、美鈴の癪に障る。

「……何故、戦おうとしないのです？」

ディアボロの表情は変わらない。最初の一撃の以降から。あの時は、美鈴を少しは評価していた、そんな表情だった。

だが、そこからはただ起こりうる事柄を予定された行動で対処をしている、何の感情もない表情のまま。いかに見に周り防御に徹したとしても、今までにいくらかは感情に揺さぶりをかける様な立ち合いをしてきたはずだ。

少なくとも彼女はそうしてきていた。その上で、最善手を取るよう攻めていた。

なのに、彼の動き、表情からはそれに対する恐怖も感嘆も驚きも、何も無い。

「……気づかせるつもりはなかったのだが、な」

「だったら何故」

「この戦い、私にとっては何の意味もない。……いや、得る物が少ない

と言うべきか。対してお前たちにとっては『私』という者がどれほどのものが見えるだろう。計ることは重要だ。私が知られれば知られるほど、次を超えることは苦となる」

ややも激する感情の美鈴に対して、ディアボロは最初から変わらず律そのもの。

「紅美鈴、お前が職務に忠実な『部下』であることは認めよう。事実、主から与えられた役割は十分に遂行しているし、これから完遂をするだろう。」

お前が先ほど言った言葉をそのまま返す。殺しに抵抗がない妖怪が、何故私を殺しにかからない？ 決まっている、お前が私を殺しては主を楽しませることはできないからだ。私と同じように、篩落としが目的」

「……………」

「ならば、まともに取り合う必要などない」

その一言をきっかけに、爆発したかのような加速で美鈴が間合いを詰める。

勢いに任せたまま彼に肘打とうとするが、ディアボロはそれを受け止める。

「決してお前が弱いというわけではない。むしろ私が見た中では並ぶ者が少ないほどだ。…………しかし、それは命のやり取りをする上でのもの。」

今のように生半可な気概で来るつもりなら、路傍の石を気に掛けないことと同じ」

接近姿勢から組み合いに持ち込もうとするが、ディアボロは彼女を突き飛ばし距離を離す。

「ッ！…………なるほど、確かにそうかもしれませんがね。あなたの言うとおり、お嬢様の望み通りに私は動いていました。私が宛がわれたのはあなたの力量を窺う点が大きい。」

生を殺さず、気を殺さず。といって相手に失望させず。…………もつとも、失敗しちゃいましたかね」

へら、と美鈴は表情を崩す。しかし、目の奥からは変わらず睨み刺

すような闘志は消えていない。

むしろ、思惑を敢えて吐露させたことで尚彼女の意志を固くさせた様にも感じさせる。

「いや、それについては変わらん。結局のところお前を倒さなくては何もすすめないのだから」

壇上のレミリアを、眼前に立ちはだかる美鈴を越して見据える。

手を組み不敵に笑う彼女は、気づいた彼をそれとなく称賛しているようにも見える。

弱者がいたぶられる様を喜んで見るため、その思惑が成されず不貞ている様ではない。それも、彼の考えの正答を肯定している。

「ですよ、そうですね。なら、もつと踊りましょうよ」

そう言い放つと、片足を軸に回転、全身から虹色の光を放つ。

光は粒となり辺りを滞留し、彼女を中心に渦巻くように動きだす。

幻想的な光景だ。中心の彼女が艶やかな舞を踊ったとしたならば、それは何物にも比べられない優雅な舞を演出できるだろう。

だが、今それと異なる点はその光の粒は全て攻勢を伴った『弾幕』であること。

彼女の周りをゆったりと漂うその光弾はディアボロに向かう刃と彼女を守る盾と二つに分かれより広く舞い始める。

「第二陣、行かせてもらおうわ」

「……望みとならば」

ディアボロが一步を踏み出す時、美鈴は回転を止め、空に向かい飛び上がる。

半分ほどの光弾が彼女に付随していき、残りにはばらばらと不規則に彼の元へと向かう。

彼の周りに向かう物、彼自身を狙う物、明後日の方向に飛び出す物……それらの規則性の無い動きと目を惑わす七つの色。

「いちいち半身下がってだなんて、やめちやいな。私は直接やり合いたいんだ」

光弾が彼に殺到するとともに、一瞬の遅れで美鈴も飛び掛かる。移動の制限をさせた上で、相手を彼女の檻へと誘う術。

至り来る一つ一つは殺傷能力は拳銃の弾のそれと比べれば小さなものだ。防御することは容易いが、

「くっ、」

何分の数、容易には抜け出しきれない。

そうこうする内にも、彼女は迫りくる。

自分を捕らえに。決を着けに。

「ッー」

「させるかッ!!」

被弾覚悟で中心の彼女から逸れるようにその極彩颯風から逃れようとするが、それに喰らいつくよう空中で急転しつつ足を半月上に振り下ろす。

意地でも喰らいつこうとする、その気概。

「……下の者でも、意地と気合で上に喰らう動きを取るか。あの銃使いのように」

決して厄介な相手ではなかったが、それでも最後まで『奴』と共に居た仲間。カスと吐き捨てたあの男も、少なからずこのような心構えがあつたのだろうか。

いや、あつたのだろうか。あのチームの全員が、その心にあつたのだろうか。

肉と肉同士ではなく、まるで鋼同士がぶつかり合ったような音が響く。

気で極限まで硬められた美鈴の脚と、ディアボロの気骨から生まれた精神像の腕。

派手に散った火花は、周りに揺蕩う光と同じく虹色に視覚を燃やす。

「なるほど、見えはしないけど……あなたに取り巻く、人間の様な、悪霊の様な『何か』。それが、あなたの能力」

もはや腕一本ほどの近接の間合い、そこに美鈴がぼつりと話す。足先から流れる血が、靴に伝わり床を濡らす。

受けたその腕には傷は見えない。だが能力者の本人の腕からは打撃に焼かれた跡が浮かぶ。

「最も、それだけとは思わないけどッ!!」

ほんの一呼吸にも満たぬ間、鋭い手刀の連続がディアボロを襲い始める。

今回は、そこから下がる空間もなく、必然回避ではなく防御を選択されてしまう。

「せえええええええッッッ!!」

息を飲む。

一手一手に威力を高めた気が纏った突きの連打は、それぞれに当たれば重撃となるだろう。部位によつては、致命にも至る。

スタンドで受ける分には問題はない。だがディアボロの肉体を突き破ることも問題ない。

焦れによる打開を狙うかの如く、彼女の片手は空いている。

手をこまねいている暇はない。一つ、二つ、三つ――

「やッ!!」

「シッ!!!」

反撃に合わせるかのごとく、美鈴の片手は握りこまれ、甲を打ち付けんと迫る。

今までに観察を重ねた彼女の動き、与えられた時間は短かったが、まどわりつく彼女の癖という名の歴史は偽らない。

奇しくもその手は、同じく彼のスタンド、キングクリムゾンも同じ握りを、同じ部位で打とうとしていた。

互いの形は同じ、決める手は、

「うあっ」

より、強打の行えた側。

渾身の撃ち合いに競り負けた美鈴の身体が、大きく揺れる。それは、敗北を意味するほどの動き。

自分の意思から逸れる腕のそれは、彼の動きに対応できず、
「終わりだ」

二度目は、ない。

肉体を容易く貫けるほどの膂力を持ったその腕は、見た目に似つかわしくないほどの経歴を持った彼女の胸を文字通り突き破る。

先ほどは耐えられた身体も、戦いの末に緩んだ間隙には耐えられない。

肉体の代わりにその内側が勢いに任せて散っていく。が、

「……、何!?!」

「捉え、ましたよ」

その腕を引き抜く前に、臓物と共に飛び散るはずの意識が飛ぶ前に。

辺りで二人を包んでいた虹が、その一点へ集中する。

「ようやく、その顔、歪ませられたわ!」

予期せぬ行動、二度はないと思っていた致命への捨身。納骨堂で起きた、『彼』と同じ覚悟。

「大鵬ツ!!」

自らの身体を省みず、彼女には見えないはずの腕を筋肉と気で捉えたまま。

至近からの全霊を込めた震脚は、彼自身が逃げる前に、その足を封じる。

「墜、撃ツ!!」

そのまま、ディアボロを拘束したまま、美鈴の渾身を繰り出す。

その様は、かの国の伝説の大鳥をも打ち落とすかのごとし一撃。

その三連は、敵を受け、それを刈り取ることに特化した

「……え」

捉えたはずの男の姿はなく、呆けたように腕を掲げた自身の姿が残るのみ。

咲夜もレミリアも、美鈴の打ち破られることの無い布陣から、彼が敗北に繋がるであった一瞬を見ることはできなかった。もちろん、一番近くにいた彼女自身も。

まるで、一瞬時が止まったような。

「後ろツ!!!」

幼い声が辺りに響く。この館で日常的に使われているその力とはまた異質の力を感じ取ったレミリアの、彼女を憂う必死の声。

「――は」

彼女の声は届かず、美鈴の言葉は口に届かず。

発せられる声は、美鈴の頭を砕くがごとし歪な響きでかき消される。

「……用件は一件。レミリア・スカーレットに謁見を願いたい」

ディアボロは立つ。その場に、確かなる意志を持って。

倒れた美鈴は、今は返事ができないだろう。それほど重傷だが、死にはしないだろう。神も、女狐も、死にはしなかった。

「……………お嬢様」

「咲夜。パチエの所に美鈴を連れて行ってあげて」

「……………畏まりました」

咲夜に僅かに走る不穩を、レミリアは一蹴する。手元から鳴った小さな金属音を逃すことはない。

「部下が身体を張ってくれたんだ。ならば雇い主も丁重にもてなさないといけないよなあ？ 訂正するよ、人間。やはり我々吸血鬼の障害はいつだって人間だ。」

戦いは『生贄』の流れる血で決まる……だったか？ 成程、お前の

血もおいしそうだ」

「ごおん、ごおん、ごおん、ごおん、ごおん、ごおん、ごおん、ごおん——」

瞬間、付き添っていた咲夜と、ディアボロの足元に横たわる美鈴が消え失せると共に、広間に時を知らせる時計の音が響く。

スカーレットの姓にふさわしい、その緋色の悪魔が玉座から立ち上がったその時、後ろに広がるグラスからは赤い月の上弦が見え始めた。

「……我ら、血によって人となり、人を超え、また人を失う」

薄い照明の点いただけの、澱んだ空間。

必要最小限と称するにはあまりに暗く、紙に支配された場はその物が発する独特の匂いのみで侵されている。

そんな空間の中、一人本を読み進める少女。その董色は、自らの存在をこの閉鎖された世界に溶け込ませるための色なのかもしれない。

「人よ、かねてより血を恐れたまえ」

書に記された警句を、血の通っていないような青い唇が紡ぐ。

その少女の唇以外の顔も、本をめくる傷の無い指も、全てがまるで血の通っていないかのごとく。

「……思っていた物と違うわ、これ」

ビルゲンワースの学び舎は過去にも訪れたことはある。しかし、当時の隆盛は既に過ぎ去っており、そこで得た遺物にかつて研究していた情報はほとんど手に入らなかった。

それでも、変貌と支配を研究していたと思われていた……自身がそうだったと記憶していたが、改めて読み返してみると全然違う内容である。

「……魔理沙には早すぎるわね。この高みは……瞳を得て、自らの内なる獣を理解してから……」

「おい」

「どうされました？」

書を閉じ、ぶつぶつと呟きながら内容を反芻する彼女―パチュリー・ノーレッジの背後に、何者かが足音なく近づき声をかける。単純な話、声の主の背部には一対の、記号として悪魔を連想させるような翼。

両の手で抱えた本をパチュリーの傍らにそっと置くと、彼女が呼んでいた書の表紙を見る。

「あー、最後は瞳に寄りて散ったあの先生の。パチュリー様、魔理沙さんにアドバイスするための本を探してたんですね？ これはまた

違うジャンルですよ、私たちの様な者に近づくための」

「そのようみたいね。久しぶりに読んだから私と内容に齟齬が生じた」

「魔理沙さんには早すぎますよ。今はまだ瞳は二つで大丈夫です」

パチュリーの声は細く、早く。周りの紙の束に相まってすぐに空気に溶けてゆく。対照的に翼を持つ彼女の声は少女特有の高さのある、大きめの透き通る声であり薄暗い世界に彼女だけが喋っているようにも聞こえてくる。

紅魔館、その地下に存在する大図書館。

その空間を支配するパチュリーと、彼女の従者だけの異空。他の何者も存在しない、二人だけの空間。

「……おい」

「……ねえ、パチュリー？」

先ほどの明るく、幼さを残した声は、その声質を変えないながらも淫靡で蠱惑的な印象へと変わる。身体に似合わぬ豊かな双丘を、もたれ掛かる自らと主の背中押し挟む。

「あの子には必要ないけれど、そんなにあなたが高め合いたいっていうなら……私はいつだって、受け入れるわよ？」

またか。

肝心のパチュリーは、そんな彼女の声掛けをうんざりとした顔で受ける。

彼女はいつもこうだ。自分の仕事を終えたら後は指示があるまで自らの欲に従って行動する、優秀な怠け者。早急に終えようとする努力は素晴らしいが、彼女が求めるのは、魔女たる自分の身体、悪魔として魔女の身体を糧とすること。

「獣……ね？ 今日あなたの調子も悪くはない。きつと最後まで……イケるわよ？」

「うるさい」

耳元で唇を舐める音がする。その色は、パチュリーとは違い艶やかで肉感的な、緋い色。彼女の髪色と同じそれは元の顔立ちの良さもあつて異性同性構わず目を惹くだろう。

しかし、この悪魔が興味があるのはこの魔女だけ。使い魔として彼女に従い、悪魔として彼女を墮落させる、それだけの為に色香を振る舞う。

「あんたみたいなクソソレズに付き合うほどこちらは欲求不満じゃないの。というより生殖として、快楽としての性行為には興味もない、稚児の遊戯ほどにしか見てないわ」

「つれないこと言わないでよお、この顔も、身体も。身も心もあなたに尽くしたいと思つての出来なんだからあ」

「それに何度も言つているでしょ、魔女は愛に靡かない。愛に溺れる恥晒しになるつもりなんてないって」

「喜怒哀楽つてあるじゃない？ 楽しみと愛は別。私はあなたに恋をしろとは言わないわ？ 私の身体には恋をして欲しいけど」

「だったらこのネズミでも味わつてなさいよ、小さいけれど私よりも肉は付いてそうよ」

「ちよっ」

「……………アリかも」

否。同性であれば割と誰でもよい。彼女はパチュリーの従者であり、契約に縛られているため可能な範囲を自分の好き勝手に動くだけ。もし契約が無ければ彼女の友人である吸血鬼さえも手を出さだろう。実際に出せるかどうかは二の次に。

結局、女の子であれば誰でもよいのだ。可愛いは正義。

「現れるなり怪しい雰囲気出したかと思えば何なんだ一体!? 紅魔館は何の巣窟になつているんだ!？」

「今も昔も悪魔の館。哀れな迷い子はペロリとただかれちゃうわ？ 大丈夫、怖いのは一瞬だけ。知つちやえばもうそれしか見えなくなつちやう。それに、ネズミは子宝の象徴。だから好きなんでしょう？ そういうの」

「青娥みたいなやつがこんなところにもいた……………面倒くさい……………」
くり、と顔を対面で赤くなっているナズーリンに向け、狩人の目で値踏みをする。パチュリーは、何処吹く風で運ばれた新しい本の頁をめくる。

「とにもかくにも面倒くさい館だと知っているでしょうに。今、レミイは取り込み中。美鈴が門番できないときは咲夜のお手製コスミックキューブで図書館にご案内。……ここは排水溝の出口じゃないんだけど、まあしようがないわね、緊急事態」

「……だから私みたいなのが堂々歩いていても咎めなし、上つていたはずなのに地下にたどり着くわけか」

「可愛い女の子はみーんなここに集められてしまうんです」

「うるさいっ！」

「うるさい」

「あらあら、うふふ」

大声を浴びせられ、そばの本の山に隠れるように悪魔は逃げ込む。目的はからかいたかっただけか、はたまた。

「……で、あなたは何の用で紅魔館に来たのかしら」

一通りのやり取りを行った後に、パチュリーはナズーリンに問う。その顔は、変わらず本に向いたままであるが。

「さつきも言ったけど、今は面倒な客が来ているはず。私にはどうでもいいことだから蚊帳の外に居させてもらったけど……もしあなたが魔理沙みたいなのをたくらんでいるっていうなら水の中に沈めるしかない」

「随分古典的なことで。……私の目的も、その面倒な客に対するものさ。彼は何をしでかすかわからない。それこそ、この幼子を殺すかもしれないし、殺されるかもしれない」

「なあんだ、男かあ」

「……少なくとも私の監視対象、私の前で生殺どうのこうのはやめてもらいたいからね。……君は、親友が傷つくのが、嫌じゃないのか？

人間とはいえ、万が一の可能性もあるだろう」

「別に、どうとも思わない」

言葉通りの表情のまま、本の内容に目を動かす。

その表情と彼女の天然の声色は、まるで本当は親友とも思っていないような、突き放したような声。

「一般的な言葉を借りるなら確かに私とレミイは親友という関係。そ

して対峙者もどんな人間かはわからないけど、昔ならいざ知らず今は
咲夜をはじめ巫女や魔理沙、あと……ええとなんだっけ……あの、巫
女っぽいのか、人間だからと侮れないことは理解してる」

「……それならばこそ、心配にはならないのか？ あの男は、実力を比
肩する対象が思いつかないが幻想郷の人間と違い、かといって外の世
界の人間と違い……手を汚すことに躊躇がない」

「それがどうしたというの。魔女は運命を信じない、魔力の信者には
後悔はないわ」

「……………」

自身の言葉に理解の及んでいないことを見て溜息をつきながら、

「レミイを信じている、とでも言えればいいかしら。あんまりらしくな
いから言語で表したくはないのだけれど」

「パチュリー様は恥ずかしがり屋ですからね」

「うるさい。それに、あんたみたいなどぼけたネズミや他の野良妖怪
と違って、レミイが戦う以上敗北を覚悟していないと思ってる？ より
紅い方が勝つに決まってるわ」

本に顔をうずめ、全体を隠す。しかし、その声に変調はなく。

「……なるほど、その程度の事に理解が及ばず悪かった、謝罪しよう。
……で、できれば私を」

「それは無理ね。管理は私ではなく咲夜。頼みたいなら直接、あれ」
「どうした？」

ナズーリンは気づかない。従者の彼女もパチュリーの疑問符に対
しての疑問の顔を浮かべている。

パチュリーの手の中の本、書かれている内容が変わっている。違
う、今まで取り込んでいた知識の次の段階への例文に置き換わってい
る。

前のページには、確かに自分が先ほどまで目で追っていた内容が記
されている。

妖精のイタズラ？ この場の誰にも気づかれず？ 先ほど自分で
言ったはずだ、部外者は全てここに来る、がそれでやってきた者はネ
ズミ一匹。

そして、この手の事象には心当たりがある。最も、そんなつまらぬイタズラをするメイドでは。

「はあつ、パチユリー様っ！ 無礼をお許してください！」

突然の声、僅かな図書館全体の光量の変化。開け放たれた戸から入る光は、目前に立つ少女に塞がれる。

「どうし、美鈴」

「は、来訪者との『面接』が終わりました。はあ……美鈴は、大丈夫でしようか」

読んでいた本を置き、簡易的な寝台を生成。何も言わずとも、咲夜はそこに美鈴を横にする。

彼女の想像とは大きく違う結果だったのだろう。戸も開けっ放しであるし、彼女より一回り大きく、出血多量の彼女を抱えていたといえども、平時であれば自らのメイド服を汚すような真似はしないだろう。

「猫も驚くと意外とぞんざいね。12点」

「……申し訳ありません、心に刻んでおきます」

「ッ、あいつ、やっぱり」

血液の付着したエプロンを、衣服を、濡れた腕を、反省の一礼と共に一瞬で綺麗にする。時を操るメイドの早着替えの手品。それができるからこそ、彼女は万一に汚れることはあってもそのまま人前に姿を現すことはない。また、床に垂れた血もそのままにすることはないだろう。

今はそれを拭う暇も惜しいのか、自分の整容のみに止め倒れた家族の心配にまわる。

「問題ない、彼女用の回復術式はいつも通り組んであるし、この怪我もそれで十分。首が落ちても繋げることは可能だから」

「しかし、くつつくだけでは回復とは呼べません」

「……美鈴の肉体を使用したフレッシュゴーレムでも考えようかしら。レミイが喜びそう」

「ああ、それはサボったりしなくて便利そうですね。家だけではなく閻魔にも技術提供してみてもどうでしょう」

「……………なんでそんなに余裕なんだ、やっぱり頭おかしい」

重症の美鈴を治療しながら、閑話を挟みながら。……それでも、少なくとも咲夜はわずかながらの興奮があるのだろう。血に馴染む、紅い瞳。

「では、私はお嬢様の元に戻ります。美鈴の治療をよろしくお願い致します」

「一週間は妖精門番隊に頼りきりね。はあ、ネコイラズ」

「あ、おい待て、私を連れて」

「申し訳ありませんが、部外者の立ち入りは禁じます。何者であろうと、例外はありません」

「けれども！」

「……………や、さん」

言い争いを始める二人の耳元に、治療を受ける美鈴が小さく口を開き、運んできた彼女を呼ぶ。

「ばか、あまり喋らないで。治る傷も治らない」

「……………お嬢様に、……………お伝えを……………」

「……………美鈴？」

苦しみに喘ぐ彼女の、吐息の様なかな声はそれでも主の為に。

その意志を継ぐため、彼女の口元に耳を寄せる。

「人型のエネルギー体、咲夜さんと似た力……………それと、運命が『視』えているような……………」

「キマシ」

「うるさい」

「一つ、尋ねておきたいことができた」

所は暗き女王の間、揺らめく炎と月の明かりが何処までも紅いその部屋を照らす。

返り血を浴び染まったディアボロの身体も、それを拭わなければ溶け込み悪魔の館の一つとなりそうなの、そんな中に純白の衣装が座に煌めく。

「お前たちの尺度ではつまらないことかもしれないが、まあそこは人ならざる者として気になることだ。語りたく無くば語らなくてもいい」

「……」

「くく……いい眼をしている。血に酔った眼でも、死に場所を求める眼でもない。先ほどのお前の演説が嘘ではないという証拠だよ。……だからこそ、訪ねたい」

ディアボロは何も答えない。

「沈黙は肯定とみなすよ。……お前の安寧は、本当にその先にあるのか？ 人は、いや生きる者は全てにおいて安寧を求めて生きている。その先に安寧があるからこそ、人は苦の道を歩むことも多々あるだろう。……お前の事だよ」

「……それについては否定はしない。生きるということとは、『恐怖』を打ち砕くこと。それを超えた先を求めることだ」

「その通りだ。……だが、その先に待つ物は本当にお前の求める物に値するのか？ 安寧を求める道の上で志半ばにして倒れる。それはそれはよく聞く話。あまりにありふれた失敗譚」

幼い喉から響く声は、いつまでも聞いていたい魅力がある。内容の如何に関わらず、優れた音楽のようにいつまでも耳に流しておきたい誘惑がある。

その中に、自分の全てを見通しながら、自分の苦痛を知りながら、それを解きほぐして優しく包んでくれるような、そんな別の見方も。

「もちろん私はお前の事を知っているわけではない。お前の半生を理解していない、ということがお前もわかっているだろう。何を言うかと思うだろう。……むしろそれが普通の反応だ。だからこそお前に尋ねたい」

「もったいぶらずにさっさと話せばいい」

彼女の自分に纏わりつくような甘い響きも、その口元から覗く牙と紅い瞳から感じられるアンバランスな恐怖も、何者も彼を縛ることはない。

「お前の求める安寧、私が与えてやろう」

そんな彼に送る、部屋に沁みる彼女の手。

「いつ果てるかもわからない、先の見えぬ道を歩ませ失うにはもったいない。私はお前に興味を持ったよ。別にだからといってこの後に付き合わないわけでもない。隷属もお前は嫌うだろう。だから、対等に。互いに友として生きる気はないか？ この地を終着とし、私と共に生きる気はないか？」

それは、余りに蠱惑的な、抗いがたき言葉。恐怖の圧から、逃げ出したいほどの重圧から差しのべられた蜘蛛の糸、それどころか自分を高みに引き上げる、耐えがたき引力。

「……なるほど、それは確かに魅力的だ。お前ほどの実力者が共に並ぼうと申し出ることは、それほどの価値を見出したということ、それに誉れを見出せるだろうと」

「その通りだ。弱者も狂人も興味はない。強者とは、理解者と同列者を求める者よ、強くなればなるほどにね」

「断る」

レミリアは口角を吊り上げ笑みをこぼす。人間には不必要な牙がよく見えるほどに。目を見開き、満面に期待通りの言葉が出てきた喜びを表す。

座したままに右腕を振るうと、その軌跡に空が赤く引かれ、魔法陣が4つ、5つと形成されていく。

「ふん、ならば死ぬしかないッ！ 最もッ!!」

陣から血のような暗い赤に塗られたコウモリが現れる。陣の一つ一つからそれは大量に現れ主を守るように浮遊する。

その様を見たディアボロも身構え、いつ来るかもわからぬ攻撃に備える。眼前に映る像には、まだ。

「私の元にたどり着けるかどうか、そこからだけどね！」

肘掛けに頬杖をついたまま、空いた左手に自身の頭よりも大きな紅弾を生み出す。弾に血管を通る血液のように脈打つ魔力が、いつそうにその破壊力を想像させる。

それを、屑籠にゴミを投げ入れるかのように軽い動作で放る。それを合図に、多数のコウモリたちが、ディアボロと共に向かう。

単純な、数の暴力。絶えず生成されるコウモリたちは等しくディアボロを襲い、緩急をつける様にレミリアは紅弾を放る。

「避けるも耐えるも、いずれは崩れる。使ってみなよ、咲夜みたいな『能力』を！ 時を操れる人間が咲夜以外に居たことには驚くけど、それははたしてどこまでできる？ 一秒か、五秒か？ 私の喉元に届きうる刃なのか!？」

飛ばした時間はわずかではあったが、あの決定的な瞬間の回避に使用したことは知られている。当然ではあるが、それを引き出した門番は優秀だったということだろう。ただの『部下』という評価は改めねばなるまい。

しかし、身近に似た能力を持っている者が居るからこそ、それだけということに気付かないか。

キングクリムゾンも強力な力を持ち、時を吹っ飛ばすことのできる『帝王』の能力。だが、それだけでは振り回されてしまうだろう。

それを補う、光栄の未来も残酷な現実も映し出すエピタフ。その予知を併せ持つてこそその能力。

自らの運命を捻じ曲げ、強引にでも負を打消し正を得る、王のためのスタンド。

「どうした、いつまで逃げ回っている！ この程度で終わることはないだろう!？ 死ぬべきではないと告げているよ、運命も、ここっ！」
大量のコウモリに囲まれ、迫りくる紅弾を避ける術なく。もはや絶望ともいえる窮地にあっても彼の表情は変わらない。

レミリアは作りだした。彼が使わざるを得ない状況に。もし使ったとしたら、次に来るのは自らの首を取りに近づくだろう。背後か、横か。死角はいくらでもある。移動したと感じてから、手をかける。

持ち前の反射で身の丈ほどの槍状に魔力を固め、その刃を感じた方向に向ける。

「……………あ？」

そこに居たのはいつから戻ってきたであろう、完全なる従者の姿。彼女を人質にとるかのように、咲夜の首元にナイフを突きつけながら背後に立つディアボロ。ナイフは、形状からしてそのまま咲夜の物

を奪ったのだろうか。

「この女を下がらせる、一秒待つ」

普通に考えれば、それはただの死刑宣告。恐怖も駆け引きも存在しない。だが、彼女は無限に時を操作できる。それこそ、こんな脅迫など意味もないほどに。

故に、どちらも呆ける。隙ができた、というわけではないが、彼の行動に理解が及ばない。

透き通った首筋からぶつ、と僅かな痛みが走る。咲夜は感じる。なるほど、確かに美鈴への容赦の通り、自分へも容赦をすることはないわけだと。一秒は確かに経過した。

だが、その時は進まない。

世界に色が消え、存在するのは咲夜のみ。

男に拘束されるのは初めてではないし、その抜け方を知らないわけではない。相手の抵抗が無ければ、それは容易に行える。

首に刃物を突きつけられているが故にすぐに大きくは動けない。少しずつ体をにじり、その拘束から外れる。抜け出してしまえば後は簡単だ。動かぬ的を適当に料理すればいい。

元々咲夜は傍には居るものの手を出すつもりはなかった。これは主が望んだ決闘であり、自らが入ることは無粋であるから。

しかし、主を差し置いて自信を攻撃するとは。可能性として考えていなかったわけではないのだが。

——ともあれ、手を出されたからには返さないのはメイドの義に反しますわ

首元を擦るが、その傷はほんのわずか。さしたる痕も残らないだろう。先ほどまで首元に当てられていたナイフを取り、眼前に目掛けて配置しておく。そうすれば、時が動き出したときに自らの行いを呪うだろう。

そう思考し、すわ行動に移るとき。

——……っ!?

咲夜は違和感を感じる。行動としては間違いではない。むしろ先ほどの自分の思考通りに動いている。改めて彼に向き直り、そつと手のナイフを取ると、彼の眼前に向かう様に投げつける。

だが、それを行う自分の身体が、まるで誰かに操られているかの様。自分が身体を動かしているはずなのに、その場面を別の場所から見ている様。

馬鹿な、と思い違う行動を取ろうとするも、身体は動かない。決められた最善の行動を、イレギュラーが無い時に限る最善の行動を『してしまふ』。

―動け、いえ、止まって！ 何か異常なの、お願い

咲夜の意志に反し、身体は行動を完了する。もしこの異常がなければ取っていたであろう相手への離脱と軽い仕返し。

少々のアピールを加えながらも、時間操作を解除しようとするその刹那、

―……っ!?

ほんの一瞬、こちらを追うように動くディアボロの目。錯覚かと思い確かめようにも、身体はそれを確認に向かわない。

心だけでも、解除後にすぐに止められるように咲夜は構えておく。が、

―馬鹿な……何、これは……

世界が崩れる。紅魔の世界とは違う、咲夜の世界とも違う、別の何かに塗りつぶされていく。

その中を、自分が行った時と同じように、その男は悠然と目の前のナイフを避けるとレミリアの事を相手にせず自らの元へ向かってくる。

咲夜の世界との違いは、ゆっくりとであるが時が進んでいる事、同じことは、その中で世界の支配者のみが行動を支配できるということ。

レミリアは武器を突きつけながら余裕の表情で、未だに咲夜を拘束した所を見つめている。満ちたその表情は目の前で起きてくる出来

事を全く認識できていないかのよう。自分の従者が、自分の想定通りの結果をもたらすことを当然と思わんばかりに。

咲夜は再び、自らの動きが自分の意志と無関係に動く恐怖を味わわれる。その行動は先ほどと同じく、この異常に気付いていなければとつていたであろう、時を止めた結果を見てその慌てふためく姿を楽しもうとする自らの姿。

「飛んだ時の中でお前が時を止めると……お前の目にはどう映る？」

それは私が知ることはないが……その顔、どうやら見えているようだな。やはりお前がこの場にいることは私に不都合でしかない」

ゆっくりと背後に周ると、太腿に忍ばせてあるナイフに手をかける。

「時は再び刻み始める、お前の意志ではなく私の意志で！」

世界に色が戻る。それは、よく見た館の紅。

ほんの一瞬であっただろう。だが、その未知の体験は咲夜の体感時間を何倍にも引き伸ばしている。

かつ、と空中に急に現れたナイフが壁にぶつかる、間抜けが音が響くころには再び咲夜は、ディアボロに拘束されていた。

「……くっ!?!」

「もう一度言う、この女を下がらせろ」

感覚としては、咲夜が時を止めたはずだ。だが、何かが違う。咲夜の世界の中に異質の色が混じったような。

現に、咲夜の背後を容易く取り、その後移動した先で再び同じように拘束している。

レミリアが僅かに逡巡するその前に、ディアボロはこれも先ほどと同じように彼女の首筋に紅い滴を作る。

「止めろ」

武器を下ろし、咲夜を解放するよう眼で訴える。

それを確認したディアボロは、一瞬の後に咲夜を拘束する手の力を緩める。

身を翻し、素早く距離を取る咲夜。普通であるならば止められるは

ずの時も、一度の妨害を経て心理的に使えない。

初めての体験だった。時を止めた『後』で、潰されるのは何度か体験している。しかし時を止めた『中』で潰されたことは過去に一度も、無い。

「咲夜は下がってて。どうやらこいつはそこまで徹底して『場』を作りたいみたいだから」

「……ですが、……いえ、畏まりました」

咲夜の訴えたい危険は、レミアアもわかるはず。そう思っているも、実際に体験した彼女の口では僅かに言い淀んでしまう。

だけれども。主に身を案じられることこそ自らの恥辱の極み。許されるのであるならば自死してでも清算したいほどに。

やや後ろ髪を引かれる様に、駆け足で部屋を去る。そこにはいつも時を操ることのできる、瀟洒な姿はなかった。

「……くふふ。咲夜が敵に背を向けて走るなんて久しぶりに見た。やるね、やっぱり」

賛辞の言葉を贈る。だが、それにディアボロは笑みも油断も返さない。

「私の事は広く知れ渡っているからね。その前に美鈴宛がってお前を知り、対等にしようと思っただけ。なかなかそう簡単にはいかないねえ。……くく、霊夢の時とはまた違う。滾るよ、血が騒ぐ」

「……排除は終わった。対時には十分だろう」

「二つ一つの可能性を潰して。それを私に応じればそのまま終わるかもしれないなかったのにそうしなかったのは何か理由でもあるの？

……ふふ、どちらでもいいわ。楽しい人間」

「……いつだって同じだ。人には、立ち向かわなければならぬ『試練』がある」

「夜の闇に溶けなさい」

「夜の冥に散っていけ」

スカーレットは自負している。己の強さも、弱さも。一芸に秀でていない、その凡庸さも。

私たちには鬼の様な力強さもない。天狗の様な俊敏さもない。魔法使いの様な知識もない。蓬莱人の様な不死でもない。人間の様な多様性もない。

一極、尖つたものがあればそれを人が見て羨望と嫉妬、恐怖の目を向けるだろう。力を持つ者とは、知性を持つ者とは。生きる者、比べたがるものとはそういうものだ。

吸血鬼とは、なんとも凡庸で目の無い種族だろうと。そんなわけあるか！

鬼に俊敏さも知識も不死性も多様性もあるか？

天狗に力も知識も不死性も多様性もないだろう？

魔法使いが力も不死性も多様性も持たないだろう？

蓬莱人に身体能力と知識で負けるか？

人間に、どこか一つとして劣るところがあるか？

そんなはずないだろう！

己に誇りを持って。その血も、その種も、その命を。

持ちうるすべてを傲慢に振るえ。歩けば、自ずと道になる。それは、彼の者達にはできぬ業。進めば自ずと臣下は歩く。それが、私たちに許された業。

あいつらにできて、自分にはできないことなど何も無い。

……だからこそ、だからこそ。

「くっつ、はははははー！」

戦いの最中、自然と笑みがこぼれる。目の前の、この世界で一番矮小であるはずの人間と立ち向かうたびに。

近づかずに攻めるのはやめた。僅かな思考を与える程度の弾幕では、悉く避けられる。通常のスペルカードルールでは使用しない、逃げ場のない密度でさえも、気づけば彼はそれを抜け、こちらに刃を向

けるのだ。

以前に立ち会った天狗の写真機とは違い、弾幕を無視して『すり抜けて』いる様な。咲夜のように時を止めて抜けることとは、少し違う。どれほどの厚い幕にも、僅かな隙間を瞬時に把握し、そこから漏れ出てくる。

弾幕の防御は行うが、反撃を行わずに詰め寄ってくる以上、おそろく相手は遠距離に対応できるような技術はない。相手の心が折れるまで、いつまでもいつまでも追い払うのは簡単だが、血肉はそれでは湧き立たない。

「ふっー！」

愚かな弱者を踏み躪るため、蹂躪するためならばそのような手を汚さない方法が大多数の精神に打撃を与えられるために有効だが、勇敢な単騎を落とすには自らで手掛けた方がいい。ただ殺すためではなく、互いに相手を認め合い、真っ向から称賛を浴びせあう。

何もいらぬ、ただそれだけで。煩わしい全てを削ぎ落した、最もシンプルな解答方法。

彼の答えの一つ一つを、自分の問いの一つ一つを。境を経て、それは逆転してぶつかり合う。

今もまた、速度を乗せた重打を『何か』で逸らして受け流された。並の盾なら、例えば美鈴の気塊ならそのまま砕き爆ぜる程度には力はこめていたというのに。

眼前にナイフが迫り来る。咲夜が使う、銀製の投げナイフ。彼女が扱うものとして、直接使用することもあるためむしろ普通のナイフのような重さと大きさ。元々女性用であり、相手が使う分には少々小さい。

だがそのバランスにもすぐに適応し、余計に振り回すことなく的確に急所を狙う。

本体として、能力は並の人間、もしくはそれを上回るが少なくとも自分の様な、妖怪を相手取る力はないのだろう。並の妖怪にすら歯が立つかどうかもわからない。

補うかのように彼の身体を中心に取り巻いている人型の『何か』。

美鈴相手時に感じていた違和感。相對してみればその存在は明らかだ。自分自身には隠す余裕がないのかもしれない。頼りになる部下だが、それでも力の差は圧倒的だから。

自分の攻撃を受けた時の肉打つ感触。自分に攻撃をする拳、脚。全く見えてはいないが、物理的干渉は行えるのだろう。その挙動に關連して、音や風圧は隠されていない。

そんな『何か』こそが彼をここまでの高みにあげる存在。それこそが彼の懐刀。

「ハアツ!!」

一瞬に身を潜め、自身にも見切れない速さでナイフを振るわれる。顔面に振るわれたそれを右腕で防御するが、衝撃。

左側頭部に頭蓋を直接砕き中を覗きみるための一撃が響く。骨にヒビが入るその音が、中から軋んで鼓膜を揺らす。

「っ、ぐううういいいっ—」

右手には深い裂傷があるが、そんなものは気にならない。頭に受けた腕を残した左腕で振り払う。

後手で先も取れないが、直接に触れて払うことができるという確かなこと。

受けた負傷を持ちながらも、全身をバネに後ろに飛び跳ね、距離を離す。彼の追撃はなく、一旦の膠着になる。

「ははは、今のは危なかったかな？ いかなものでも、頭を砕けば続行は危ういからね。死にはしないけど」

不思議に思うことは一つ。徹底して彼は追撃を嫌う。機会の後続を狙おうとしない。……もつとも、今の一撃でもそんなことをしようものならとつくに彼の首は永遠に治らない傷痕を負うことになっていただろうけど。

深くはない右腕の傷、その他衣服と共に僅かに切り裂いた小さな肌から滲む赤は塞がっていない。だが、その他殴打した痕は僅かな時間を置いた後には再生している。

不死身の吸血鬼。話にならないほどに優れた存在をまざまざと見せつけられているよう。

均整のとれた幼顔を崩すことは神が許しはしないというかの如くに頭の傷は塞がり、ずれたキャップに噴き出た血が染み着くのみとなる。

目星は付いていたので調達の予定は完了しており、回収ができた吸血鬼ハンターの武器が無ければ、館の紅の一部になっていたかもしれない。あっけなく。

あまりにも無謀で、あまりにもお粗末で。……そんな滑稽さに、酔っているのかもしれない。

『それ』

未来の様を垣間見ようとしたときに、まさしくその行動を咎めるように、レミリアから声が発せられる。

「何かに付けてちらちらと『何か』見てるね。お前には一体何が見えているんだ？ いやいや、純粹な興味だよ。けれども、命を懸けたやりとりで相手から目を逸らす瞬間がある方がおかしいだろう？ それも一度や二度ではない」

気付かれたところでそれを上回る力を自分が持つてしているとわかっているならば、そのまま何も知らずにいたことを幸せに思えるようにするのが。彼女相手に、こと幻想郷にてそれは通らない。

早くに気付かれる、どうしても外せないエピタフの『予知』。それを見ることで得られるものは大きい、そこを見切るレミリアの才覚。

「お前に取り巻く、人型を見ているのか？ 私の周りにまだ何かいなか、探しているのか？ ……んー、違うな。お前」

もったいぶった、大仰な様子で悩み、考え、わざとらしくたどり着いた結論。

「運命や未来が、見えているんじゃないやなくて？」

発せられるのは、僅かに自分の鼓動を速め冷えた汗を伝わらせる現実。

「大方はそれで納得ができる。不可能弾幕も、人間の目には捕らえきれない私の動きも、全て『視えて』いたのなら。結末がわかっていた

のなら。視えているのは残酷な運命か？ それともそれを回避した未来か？ 『絶頂』に固執していたが……。なるほど、そんな眼を持っているならいかに矮小なものでも野望は持つだろう。感覚ではなく、視覚として展開しているのがやや不便そうだが……」

小さな締め括りを持って自分への疑問の答え合わせを求める。浮かべている笑みは、彼女自身の推察への確信。

短い時間ではあったが、その濃密さゆえに嗅ぎ取られたことへ、僅かながらに称賛の気が湧き出る。

自分と対峙し、生き残ることができればその能力への強大さと全貌に気付くことは容易だろう。故に、今まで知っている者を逃しはしなかった。

だが、ここでは知られてからが本番だろう。知らぬ者は恐れるが、端から土俵の違う生物に対して、その溝を埋めるだけだったのだから。

「操れると聞いているが、お前には視えないのか？ 自分の運命が」「滅多なことで視るものじゃないんだよ。お前も百を超えれば理解できるさ、そんなものに振り回される自分の醜さが」

ディアボロへの返答を共する行動で返す。彼女の言の末尾は既に後ろから聞こえていた。

やり取りで確認の遅れた未来は、全身を走る衝撃と打撃音で現実となる。

「ぐうっ!?」

吹き飛び、もんどり打って倒れてしまう。

そんな吹き飛ぶ自分とは別、かすかに聞こえる空を切る音。

「……ふむ、やはり時を止めるだけではない。なにがしか、世界を歪めているな」

一瞬の答えは、飛ばされた自分に追い討ちをかける、レミリアの強襲の後。持ち前の神速でディアボロの真上の天井まで移動するとその尋常ならざる身体能力を用いて急降下。

時を飛ばしていなかったのなら。天井の崩落に巻き込まれるか、砕

けた床の一部に混ざるか。

「私の身体は記憶している。が、その『過程』はなく『結果』だけが残っている。お前が回避したという結果だけが。もし時を止めて回避しているのなら。攻撃を回避しているのなら私がそれを認識できるはず。……にもかかわらず、その認識は欠けている」

その場から翻り、足音もなく地に着く。その優雅な姿勢は吹き飛ばされよろよろと立ち上がる自分とは正反対。戦闘不能のほどではないが、それでも負った傷は大きい。

だが、この程度の負傷は幾度もあった。いつしか、その程度と称せる様に。薄々と気づいていた、精神の成長と共にどこか現実離れていく自らに。

「未来を視る能力、世界を歪め認識を曖昧にする能力、見えぬ人型を操る能力。それらを一つにまとめ操る精神力。……外の人間にしては多彩だ。そして肉体も十分に洗練されている。……」

言葉の途中で、しばし何やら考える顔になる。もし怪我が無ければ、その場で攻め入ることを選択していたかもしれない。

「……あー、それらは何ていうんだ？」

「……………何？」

「名前だよ、名前。いつまでもそれとかあれとかだところっちも言いつらいじゃないか」

怪訝な表情が浮かんでしまう。今までに気にしたこともないし、それも命を懸けて戦っていた一瞬だというのに。

「……呆れた。名付けは重要な儀式だ。名付けるそれに対して生命として、役割として生み出した者から初めてのを与える物、全ての始まり。それらを行い始めて生まれたものは意味を持つ。……いいだろう。外因にして好敵手、お前を表してこのレミリアが名付け親になってやろうー！」

「……何を言っているんだ？」

「そうだな……お前の意気や信念、野望の為に自ら困難に立ち向かう精神ッ！ それに基づくそばに立ち寄る者！ 『スタンド』というのはどうかなッ!!」

会心の出来と言わんばかりに、得意げな笑みをディアボロに向けてくる。それは、その見た目相応の、親に成功を褒めてもらいたい子ども顔。

何も言い返せない。急に言い出す突拍子もないことも、すでにその名前、というか種として呼ばれているという事実も。

「ふふふ……自分のセンスに高さが怖い………ああ、言っておくが使っても使わなくても構わない。けれど、名を持つことで『それ』は存在する意味を持つ。敵に塩を送ったつもりはない。長く生きるほどに好敵手を求めるものだ、贄の流れる血の質を求めることはお前に言われなくても同じなのさ」

そのままに空で手と足を組み、今か今かとこちらの返事を待つ。

結果としては確かに既についている名前を再び呼ばれただけだが、その意味を省みることは今までは確かになかった。通称として呼ばれていることを風に知って、そのままにそれを使っていた。

いや、名付けが怖かった。その意味を、そのやり取りを自分に重ねてしまつて。自分の、

「……それは敵に送る余裕ではあるが、軽視や侮蔑の意味で送っているわけではないことは認めよう。『スタンド』……立ち向かうものか。おもしろい」

「そしてオレにこれ以上近づくな。フランドール・スカーレット」

この場にはいない少女の名前。

それを聞くにレミリアの顔は苦々しく曇る。その者が現れることを好ましく思わない表情。

「……へえ、お兄さんどこがおかしいの？ それとも、感がいいだけなのかな？」

全てを受け入れる門が開く。その先に居たのは、姉と同じ吸血鬼。レミリアの髪を月と称すなら、彼女は太陽を称するほどの明るい金。

だが、背後に連なる7つの色を模した結晶羽は何物に類する物がなく、否応が無く悪魔を連想させる。

「なーんて。聞こえていたわ。お姉様のくだらない名付けも、その前の解析も。……面白そうね、人間」

「なんだと」

同じ距離を保つように、自分を挟んで対極にいる姉妹。双方どちらも夜の王にふさわしい、その覇気を感じ取れる。

「……ところで、何で私は遠ざけられるのかしら？」

純粋な少女の疑問。何も他意はなく、唯ある物を聞いただけの様な疑問文。

だが、その言葉はそれだけの意味では終わらない。彼女の眼が、発する気が、全身から漏れ出る波が、ディアボロの精神をくすぐる。

燻る先に見える火のような紅い眼は、狂気を日常として受け入れたような、そんな瞳をしている。

ディアボロには見覚えがあった。もはや中毒と化し、ソレが切れていることが非日常となった麻薬患者。

「お姉様とは遊びに付き合ってあげて、私とは付き合わない理由は？」

同じ吸血鬼、同じスカーレットよ、お兄さん」

よく似た姉妹だ。浮かべる蠱惑の表情は幼さを残しながらも生きた長さを物語る血の貴さを感じさせる。しかし、姉と比べるとややも上に立つ者としての威厳が足りていない。

「オレがこの館で求めるものはこの世界の先への足掛かり。先へ行くための力を得るため。レミリアはそれに釣りあう相手だがお前にはそれはない。」

下がれ、フランドール・スカーレット。お前はオレにとって試練の前に転がる小石ともならない」

明らかかな挑発。姉には付き合うが妹には付き合わない。理由は単純、劣っているから。

フランドールの事は当然先に読んだ縁起にて理解している。狂気を持つこと、幽閉されていたこと、今は少し、表に出ている事。

「……………」

「…………へええ？」

もちろん、レミリア相手でも苦戦を避けられない自分が、本当にフ

ランドール相手に余裕を出せるとも思っていない。

だが一番の悪手は二人を相手取ること。そうなってしまうえば、抵抗することなく、何回ともわからないあの瞬間に戻されるだろう。

「……面白いことを言うのね、今まで巫女にも、魔理沙にもそんなこと言われなかったのに。私が弱い？ お姉様より？ 脆弱な、人間風情が」

紅い瞳が揺らぐ。周りに溶け込むかのように、彼女の周りに紅い霧が纏う。

それは力の表れ。自分を知っていてなお、姉と比べて劣る妹と、何も知らないはずの男に評されたこと、その事実に対する怒り。

「フラン」

「止めないでよね、お姉様。子供っぽいこと言うけれど、初対面の人間にああ言われて黙ってられる程私、気が長くなれないわ」

右手に持つ歪に曲がった杖に漂う霧が纏い、美しくも禍々しい、赤く燃える巨大な杖を作り出す。

その熱量は距離のあるディアボロの身体を舐める様に漂い、気力体力を奪っていく。噴き出る汗の一つ一つを乾かしていく。

「しっかりと認識させてから、壊してあげる。災いは自らが招くものだってことを、絶対強者の証明を」

転進、即座に時を吹っ飛ばしてその場を離脱する。自分の行動を彼女たちが認識する前に行えば、悟られることも咎められることもない。逃げた、という事実だけがその場に残るだろう。

ランドールによって開け放たれたままの扉の先、館の中を駆ける。

「……、は？ なに、それ」

彼女の力は姉に劣らず脅威。類することの無い赤い凶器を取り出した時点で十分に理解できた。あの場も十分な広さがあったが、吟味を行う時間もないだろう。ランドールには、楽しむ余裕がない。挑発を挟んでいようといなかりうと、全力が彼女の幼さの表れだ。

予知を垣間見る。見えぬ撃も自分にとっては――

「!？」

自分の居る僅か先。一瞬のきらめきの後に頑丈な建物ごと、壁も床も天井も。瞬間が走った後には何も残っていないかった。ただ、膨大な熱量によって切り裂かれたという結果のみが事態を物語っている。

歩いた道程を顧みる。その戻り道の行き着く先は一つしかない。

「あは」

再び時を飛ばす。何が起きたか理解していたわけではない。ただ、身の危険がこれから起きるということだけは感じていた。

事実、自分の懐には既に虹色に煌めく羽と、あどけなさを残した狂気の微笑み。フランドールがディアボロの臓腑に直接接触している事。時を飛ばしたその空間でなければ、今は感触を感じているわけではないが、自らの内臓をかき混ぜられ。その放る軌跡に命を散らしていただろう。

レミリアとは違う戦いの臨み方に、同じく背筋が震える。まだ人同士に思える姉と違い、獣の暴虐さを感じられる妹。

同一なのは、どちらも致命を与えたと確信した時に浮かべるその笑顔だろうか。

「はははっ……あー。厄介。お兄さん、ホント逃げることは得意なんだね。咲夜とは違う。どちらも十全理解しているみたいだけど、用い方が全然違う。楽しませようとしてない。ただ使うことしか考えてない。はー」

濡れるはずだった自分の手を握ったり開いたり動かしながら、虚空に向かって一人語る。

「徹底するつもりなのか、それとも違いを悟ってくれたのか。わからないけど立ち向かってくれなきゃ困るのに。私はどうすればいいの？ 持ちかけたのはお兄さんだっていうのに」

「フラン、あんまりはしやぎすぎるなよ。館を直すのもタダじゃないんだからな！ ……で、来訪者よ。どうするつもりなんだ？」

館に二人の声が響き渡る。

「言った手前に逃げ出すのも戦況判断、経験の故だろう。そこは認める」

「私は認めないけどね。つまんないし」

「静かにしな、喋ってんのは私だよ」

「……………ぶー」

「ふん。……………しかし、逃げてどうするつもりだ？ お前のその力を用いたとして、私の庭から逃れられるとでも？ それともまだ何か隠した手があるのか、フランが現れ、背を向けたその状態で？」

その問いかけに答えるつもりはないが、確かに先ほどと比べて状態は悪くなった。逃げが有効と考えたが、逆効果。最も、あの力を前にして目前に立つのみというのも無謀である。

今はまだその時ではない。浮き沈みは、誰にでもある。

「……………ぎゅー」

フランドールの、ほんのわずかに拾える程度の声。それと共に映る未来は、残忍な結末。

何も無い一瞬の後、自分の身体が爆散し崩れ去ったままの画面。誤解の生じるものでもない、そのままの結論、フランドールの能力。

三度の世界の暗転。ただ保身考えたのみの能力の使用。進まぬ展開の苛立ちよりも、危機への焦燥が心をより強く支配する。

「……………くっ」

だが、簡単には好転しない。死への秒針は止まらない。

吹き飛ばしている最中にも、自分の身体が崩れていく感覚。外傷も、衝撃も、痛みも何も感じはしないが、唯攻撃は続いているという感覚だけは理解できる。

能力による破壊は、瞬間ではないのだろう。『破壊されている』という結果が時を飛ばしきるその時まで続いていけば、自分は死から逃れられない。『破壊された』という結果まで、逃げ切らなければならぬ。

吹き飛ばすのも永遠ではない。人間が自発的にいつまでも呼吸を止められないのと同様、この能力も限界がある。

全ての音が消え、自分の鼓動のみが世界の形を作り出す。自然と、胸を握るように手が動く。二秒、一秒。

「っ。……………ふふ」

「またか……………しかし、今回は随分長かったみたいだな」

限界を迎えたその先は、何とか自分の身体は無事を保っていた。レーヴァテインを出された時とは違う、冷えた汗が全身を覆っている。

「ねえ、どうするお兄さん？ さすがに鈍感な私でもわかつちやうよ。ねえ？ お姉さま」

「お前が鈍感だなんて聞いたことないが」

二人の少女の何気ない会話。表情が易々と目に浮かんでくる。秘密事を共有する姉妹の、誰にも告げない共通点を手に入れた時の甘い顔。

だが、それはディアボロにとっては絶望でしかない。既に、生殺の自由を握られたことと同意だから。

「私は十分と思つて勝手に放しちやつたけど、きつとずーつとぐりぐりぐずぐずにしていたら、どれほど世界を歪めてもお兄さんは逃げきれない。お兄さんのその力は限界がある。咲夜と違ってほんの数秒」自分の周囲の壁が、再び赤熱し吹き飛ぶ。こちらの位置がわかつているように、自分の隠れ場所を燻りだすかのように。無理に動けば、その餌食になるだろう。

「あなたの命は私の手のひらの上。右手にはもう、お兄さんの『目』がコロコロ転がっているの。一度触つて壊れなかつたのは初めてだけど……もし他と一緒にやつたら、どつちを取るの？」

放たれた青い光弾が、壁に床に反射し、所せましと飛び回る。

長く尾を引くその弾は、ディアボロの最期の場所を追い立てようと近づいてくる。

「……ちっ」

もはや一刻の猶予もなかつた。現れた自分を狙うこと。共に、その『目』を砕き、ディアボロを破壊すること。

同時に行われれば、回避する術はない。全てが無為になる。……それならば。

「あははははは！ ようやく出てきたね、お兄さん！」

隠れていた壁から飛び出す。すぐ後ろでは反射する光弾が、元居た場所を塗りつぶしていた。

紅い杖を携えた妹は、同じほどに紅い衣装を揺らしながら、右手を使い煽るようにキスを投げる。

「これは私からの贈り物。受け取ってくれる？」

言葉がディアボロの耳に届く前に、フランドールの全身から辺りの空間全てを彩るように、大小さまざまな弾が放たれる。

パターンを伴った彩りは美しく、受けるものでなければ迷路のようなその弾幕に心囚われてしまうだろう。

「キングクリムゾンッ！」

一つの壁のように飛んでくる弾、自分を遮る物を弾き、耐え、強引に突き進んでいく。ごっこでは済まない衝撃は、スタンドによるガードも貫きディアボロの肉をえぐっていく。

強引に、止まることなく。

「時をフツ飛ばせッ！」

「」

彼女が何かを口走ろうとするちょうどその時、世界が崩れていく。短い時間での、濃密な酷使。肉体だけでないダメージが、吐き気を催すかのごとく脳に響く。

何を口走っているかわからない。どこまで飛ばすか、予知も見えない。今あるのは、その右手を封じること。その為の肉薄。

死刑執行のスイッチをフランドールが手にしている以上、何としてもそれだけは防ぎきらなければならない。

遮るものはなくなった。血が噴き出すのも構わず、残った力を脚に込める。

惨めな疾走だ。成功するかもわからない、安全かの予測もない。それでも一縷にかけ全力を駆けるその姿。まるで、ディアボロの最もなりたくなかった、ゴミのような弱者の立ち回りではないか。

しかし、想起する。そんなやつらが、自分の絶頂を揺らがし、引きずり落としたことを。何度も、何度も再確認する。

「オラァッ!!」

眼前、そのまま速度を乗せたまま。勢いづいたスタンドの一撃は迷うことなく小さな右手へ。自分の手に光るナイフも、同じくその手を

斬り落とすために振り下ろす。

命中する寸前に、世界は再び彩りをもたらす。……逃がしはしない。

「きゅっ」

砕き、爆ぜる。

フランドールの、ディアボロの、目の前で飛び散るのは人間の血。触れるか否かのその瞬間に、握りしめる動きの方が早かった。その小さな動きの方が早かった。

振り下ろされるはずだった右肘から半ばは血袋が破裂し、ゆっくりと二人と、床を濡らしていく。

握られた右手を、自然落下するナイフがほんの少しの傷を作り、そのまま多分に水分を含んだ床で、べちゃと音を立てる。続けて、肉の落ちる音。

「……うあ、ああ、あ」

ほんの僅か、足りなかった。それを認識しようとして反応が遅れる。竦んだ脚が、小さく相手から離れようとする。

その身体を、僅かに残っている服の切れ端を近づけ、フランドールはディアボロの顔を強引に近づける。

近づいた、困惑を多分に、恐怖に徐々に彩られていく直前の彼の頬に、小さく口付けをして。

「おしまー」

投げ捨てる様に、床面へ叩きつける。空気の揺れ、走るヒビは、唯の人間に耐えられるものではない威力を証明する。

横たわる肉体に、後ろに大きく振り上げた足を勢いよくぶつけ、吹き飛ばす。

椅子に戻っていたレミリアの方へ吹き飛んでいくそれは、脇の壁へ衝突し、それでもなお余る勢いは壁の崩落を持って分散していく。

「……んんん、はあー。すつとしたー」

「………やりすぎてない？ フラン。私の分が無いんだけど」

「先にやってたからもういいでしょ？ 可愛い妹の分も残してあげ

るってというのが筋つてものでしょ年長者。でも面白かった！ 目を取られると宿ったそこに移るだけなのね。奪い取ろうとする人なんて初めてだったから知らなかった」

「ああそうかい。……私の中には退かなかつたのに、フランには退くっていうのもなんだかなあ」

「それにさそれにさ。あの人、以前あったことあるわ。前にも話した、恐怖の消える人間。近くで見たらその通りだったの、本当よ。きつと、今頃死体は消えているはず」

「あー、あんたの与太話。嘘でしょ？ ……死体が残ってればわかるし、無くなっても証明か。確定しちゃうじゃない」

まるで遠くで話されているような。それも、どんどんと遠ざかっていくような。

わずかに繋ぎ止められた何かが、しかし流れ出ていって消えていく。

まだだ、まだ……。そう思っても、温かく小さな光が、差しては消え、差しては消えていく。

でも、何か、小さく、それでも聞こえてくる。忘れてはいけない、最初の、最後の声が。

「誰からも証明されなかったちよつと前の波紋がいま証明される時よ。あ、遺品。これも消えるのかな」

転がった右腕を、ひよいと持ち上げる。まだわずかに流れ出る血は、口づけした時に付いた食事と同じ物。

「……さすがに行儀悪いなー、あいつと同じになるのはヤだし」

「ふむ、しかし紫が言っていた奴も、こんなものか……楽しかったけど、いい勝負、とまでは行かなかつたなー」

がたがたと、瓦礫をどかし遺体となった彼の肉体を探す。

「楽しかった？ 私にとっては裏切られた感じ。驚きはしたけど、あれじゃ魔理沙とかの方が全然強いし面白かった……え」

「それはそれ、これはこれ。少なくとも当時の咲夜並には強かつたっ

てあれ。……あれ？」

血に濡れた壁材を見つけ、そのあたりをどかすとそこには動かなくなった彼の肉体があった。

それを持ち出そうとさらに細かく除くと、あったのは。

「……子ども？」

自分たちよりかは肉体の成長はしているが、それは確かに先ほどまでの男の身体ではない。

示すものは失われた右腕、来ていた衣服、重傷の傷跡。全てが先ほどまで存在していた来訪者だと告げている。

不審に思い、その身体を持ち上げる。自分より圧倒的に大きかったその身体は、今は何とか手を上げればつま先を引きずる程度までには持ち上げられるほどに小さい。

持ち上げた拍子に、からと小さく。履いていたズボンのポケットが破れ何かが落ちる。

「何だろ、タリスマンかしら？」

鏝の形をしたそれを不審に思ったその時。

「ぎいいいいいいいい、やあああああああああああ
「!!!!!!!」
フランドールの慟哭が、レミリアを、紅魔館を揺らした。!!!!!!!」

……それは、単なる行為。生きるため、種の存続の為に遺伝子レベルで刻み込まれた、食べるような、眠るような、なんでもない行為。しかし、長い年月の中にその行為は他の生物と違い、種の存続の為とは違う、別の意味を有するようになった。そのような例は、人間以外では見られない。誰も彼も、この地に生を受け、そして次代に続くために生きているのだから。

人間は違う。その本来の意味を持ちながらも、自分の欲を、他人の欲を満たすために。そのとき、種の存続、繁栄を全く介さない行為と化す。

彼が見たのもそうだった。神の膝元と教えられた、教会の真ん中で。聖像に見守られながら。自分を育ててくれた、厳格な神父と見知らぬ女。

彼とて、その行為を知らないわけではなかった。むしろ、その自然の摂理とは違う見方、年齢を考えればごく一般的な見方しか知らなかった。島の友人たちとその話で盛り上がったことがある。伝え聞きながらも、一人で行ったこともある。

……だからこそ、知りたくなかった。見たくなかった。全てを裏切られたような。自分の世界が崩れていくような。静かな、しかしいつも心に強いものを秘めているようにも感じられた。誰からも好かれる、ということはなくともその好漢には嫌う者はいないだろう養父が、そう若くも魅力的なわけでもない、昨日まで村に居なかった知らぬ女を自分に跨らせているなど。

彼の住む村は小さな村だった。地中海に浮かぶこの島はイタリあの観光地として名を馳せているが、その名所とは離れた、言うなれば自然しか見どころの無い地域だった。主要の地を見飽きた者がふりやってきて、一宿借りたらそのまま去っていくような、その程度の出入り。だから、知らぬ者が居ればたちどころに村中に伝わった。

女は彼が寝付くその直前にやってきて、神父と何かを交わしたのだ

ろう。そして今、身体を交わらせている。

酷く不快だった。こみ上げてくる感情がなんと呼べばいいのか、彼は説明できなかった。神父をかどわかし、汚したあの女への怒りか？常に人前に立つあの人格者が、過ちを犯したことへの失望か？どちらかが悪なのか、それとも両方が悪なのか。それすらもわからない。

一つ確かなのは、彼自身も興奮していたということ。

女を攫うことは容易だった。事後、何かの密約を交わした後には荷物をまとめ、何を警戒するわけでもなくそのままこの場を立ち去ろうとしたからだ。もつとも、島民全員が互いに顔を覚えられる程度に小さい村に、警戒するものもないからそれは当然ともいえるが。

教会から出て、何処に向かうつもりだったのだろうか？夜闇の中を車で行くつもりだったか、それとも一応存在しているペンションにでも宿泊するつもりだったのだろうか？それはわからなかったし、どうでもよかった。

養父に聞こえない程度の距離まで離れたことを確認した後、堂々と近づき殴打する。気付き声を上げる前に、容赦なく。それだけで、彼女は昏倒する。

彼には幼いころから不思議な力があつた。感情が昂ると、常に何かに寄り添うように彼の傍に現れた。『それ』はいつも自分と共に怒りを表し、涙を流した。周りからは『それ』は見えなかったが、幼い彼にはそのことが一般だと感じていた。養父に聞いた時も子どもの戯れと思つたか、「自分と共にいてくれる存在を大事にしろ」と、半ばまともに取り合わなかった。

彼は賢かった。元々同じ年ごろの子供に聞いても同意を得られないうし、唯一である養父もまともに取り合わなかったこと。全てが自分に見えるこの者が異常ということを示すことに気付いていた。

彼は避けられていた。実際には知らなくとも、その特異な素性に村の大人が感じるものがあつたのだろう。言葉にしなくてもそれらは

子供に伝わり、彼に伝播していく。同郷の者が罪を犯し、服役中の刑務所でどこのものかわからぬ種を得て受胎したこと。囚人も看守もすべて女性の刑務所で、それでも隠れてどこかの男と通じていた売女。噂は水のように、人々の心に沁み込んでいく。真意がわからぬとも、その真意すら確かめられない謎の出生。そんな彼を、村人はつけられた名前のごとく嫌悪していた。決して彼と、養父である神父の前では出さずとも、そのどこかには異端の者とみていた。

自覚、無自覚、両方の奇異の目に晒され続けていた彼は、それでもしようがないと、自分は悪くないと。悪いのは、こんな目に合わせる母親だと思っていた。表には出さず、少し感の悪い、臆病な性格を装い標的となることを避け続けた。

その鬱屈した思いの源泉を。こみ上げる全ての感情を、しかし抑えながらそのまま自宅のガレージまで運んでいった。星の見えぬ深夜、照らす月の明かりもなく、誰もそれを見ていなかった。見ているのは、昂りに答える浮かぶ何か。

「何故、僕を生んだ」

村と共にあり、代々見守ってきた教会、それに伴う小さなガレージ。歴史と同じように年季の入ったその床に女は転がされ、彼女に跨り物心と共にあつた疑問をぶつける。

何の証拠もないが、あの時顔を見て、今ここに連れてきて、近づいてみて初めて分かる。直感で、血の繋がりがわかる。村の誰とも、一番身近にいた養父とも違う、繋がっている感覚。この女こそ、自分の母親なのだ。

表には出さなくとも、自分の出生と存在を彼は呪っていた。生まれながらにして負わされた枷を、不自由な自分を、その根源と共に。「何故、僕を生んだ」

感情と共に拳をぶつける。それに伴い自分の感情を表す人型も女を殴る。自分より大柄なそれは、今の自分には震えないほどの力を持つて女の身体と心を削り取る。

答えは求めていても、どこかに知りたくはないという感情もあった。多数の色を溶いた絵の具のようにぐちゃぐちゃな心は、訪ねながらもこたえられる環境に女を置かない。少し待てば口から洩れる答えを、それを聞きたくないと言わんばかりに殴りつけ押さえつける。「二人か、三人か？」

幼稚な自分でもわかる、あれは子作りではない。相手とのギブアンドテイク。運ぶ時に落ちた封筒からはどこに溜めこんでいたかは知らない金額が見えた。金銭を受け取って、代償として肉体を提供する。そのような在り方があるということは知っていた。

だからこそ、許せなかった。自分という存在を作っておきながら、自分を育てた、聖職者を。

何が正しいかわからない。ただただ、感情を発露させていくだけ。それは、子供の駄々だった。

口づけのできるほどの近い距離で、呟いた彼の首に冷たい何かに触れる。

ぞつとした。彼の熱を奪うかのように這うそれは、拘束もせず力無く垂れていたはずの女の腕だった。

そのまま引き寄せられる。奇しくもそれは、我が子を抱く母親のようでもあった。

「おお……私の可愛いディアボロよ……やめておくれ……助けておくれ……」

頭の前からつま先まで、雷が走ったような。それがそのまま、自分の脳や心臓や何から何まで、全てをミキサーにかけてしまったような激しい痺れが、耳から、首から、全身へ駆け巡る。

単純に助けを乞うただけかもしれない。話し合えば分ってくれると思うていたのかもしれない。ほんのわずかに残った意識が、ただ無自覚に手を伸ばしただけかもしれない。

だが、光の無い瞳は虚空を虚ろに見つめながらも、ただぼつりとつぶやいたことが事実。

「……………ツツツ!!! や、めろ」

十分だった。その一言で、彼は顔を歪めながら一瞬の解放を認め

る。ずっと心に在った、全ての元凶。彼を苦しめていた楔の一つを大きく揺るがされる。

どこかで求めていた、母親への愛情。それを受けるにはあまりに歪んでしまった受け皿。神の御許で育った彼は、反する自身に常に苦しんでいた。

「僕を、呼ぶなッ 悪魔に、助けを乞うなあ!!」

それでも離さない手は、死者が自分の世界に引き込むような、そんなおどろおどろしさもあるが、それに元々属しているのが自分なのだ。だから、親から子の名前を賜った。自分の生まれを、自分のこれからを定めるために。養父は賜った名を大事にしろと言いつけてきた。それは、存在の罪を認めさせるために。忌まわしき自分を示すために。

彼の思いは噴出し、その夜はそれでも終わらなかった。

「何をしたッ!? 妹に何をした、答えろッ!!」

馬鹿なことをしている、とレミリアは頭の中でつぶやく。当然だ。手の中にあるまだぬくもりを残した死体に何ができる? 場の状況をかき乱すことも、それを抑えることも……出来はしない。

だけど、先ほどにフランにやられ、その妹に置き土産を残していったのは間違いなくコイツなのだ。コイツのはず、なのだ。

「あう、あうううああああ……」

苦悶の呻きが止まらない。頭を押さえつけ、ガチガチと歯を鳴らし、丸い大きな瞳からは耐えず涙が流れ出る。身体の振るえは治まらず、いつその場に倒れ伏してもおかしくない。

何が彼女を犯しているのか、彼女に何が引き起こされたのか。レミリアは逡巡する。突然の慟哭、来訪者の変化、それから落ちた、鏟。

「これか、これのせいなのか!？」

少年の肉体から手を放し、転がる鍔を拾い上げる。鉄のような石のような、冷たく硬いその感触。鋭利に研ぎ澄まされているがそれは傷つける武器として使うにはあまりにも小さすぎる。

友ほどに魔導精機に詳しくはないレミリアだが、それでも何か特別な力を持っているとは実際に手にしてみても感じない。本当にこれが原因なのだろうか？ 自問は尽きない。

「ッ、くあッ!!」

それでも、妹を救うのは姉の義務だ。勢いよく握り込んだそれは、吸血鬼の握力にはあまりにも脆弱だった。音も立てず、砂のように崩れていく。

崩れたそれを投げ捨て、妹に駆け寄る。

「ひっ……っ、ごめんなさい……ごめん……ゆるして、ください……」

すすり泣く姿は変わらない。床に落ちた視線はあらぬ何かを見ているかのように一点に集中している。漏れ出た言葉の通り、縋り許しを乞うようにさめざめと、さめざめと。

「フラン、フランッ！ しっかりして、何が」

レミリアの言葉が言い激む。それは涙が溢れ続けるフランドールの眼が彼女を向いたから、500年以上ついぞ見たことの無い、本当の助けを求める顔だったから、……ゆっくりと、細く小さなその腕が、フランドールが自分自身の首を絞め始めていたから。

「……ぎゅえ……えう、……あ……!!」

「やめろッ!!」

なぜ彼女が凶行に至ったのかはわからない。けれど、こちらに助けを求めるその顔と、嫌々と少しでも逃れようと首を振る抵抗。明らかに何かに操られているか誘導されているか、不本意な自傷なのは見て取れる。

急ぎその両の腕を掴みあげようし、その考えは確かなものとなる。

何かに強引に押さえつけられているような力の入り具合、フランドールが自身で拒否しているにもかかわらず、目に見えない何かを腕を首に、首にかかった手をさらに押し付け……へし折るかのごとく締

め付けている。締め付けられた箇所は圧で薄い肌色をさらに醜く歪めている。

「ふっ、ぬっ、あああああああああああ!!!」

妹の両手首を握りしめ、ありったけの力を込めて彼女を締め付ける恐怖から解放しようとして試みる。それに気付いたように首にかけられる力も強くなり、同時に自身の持つ箇所からもヒビが入る音が手に響く。

「ぎいつ、い、……………ああつ……………!!」

「フランク、耐えろ、究極には、斬りおとすよ、覚悟してて」

「……………あう」

片や空気と血の欠乏で青い顔、片や激しいいきみで紅潮した赤い顔。紅い姉妹は協同は続き、それを阻害する何かは変わらずに。

「……………探していた道は、もう既に、通り過ぎていた……………」

「ああ!？」

既に二人しかいないはずの世界に、聞き慣れぬ人の声。咲夜に人払いはさせていたはずなのに、当の本人を下がらせたからか。いや、いくら美鈴も下がらせているとはいえこの館に侵入者が。

……………いる、一人。先ほどはあそこまでの負傷、死んだものと思っていた。思っていたから、フランドールの異常も相まって正確に調べていなかった。本当に、奴が死んでいるのかどうか。

背筋が震える。凡そあの負傷で生きていられる人間はいない。腕が吹っ飛ばされ出血は絶えない、壁面に叩きつけられ骨は砕けている、何より、吸血鬼の一撃をまともに喰らって、正常でいられるはずが――

「本当の近道は、遠回りだった……………冷静に考えれば、おかしいことだらけだったんだ……………」

その発想は愚かしいとすぐに捨て去る。あの男の戦いは、最初から幻想郷との戦いとも、通常の戦いとも何にも違っていった。運命を垣間見、操る。虚仮とは違う真なる能力。

あの男を取り巻く見えぬ人型。死んだはずのあの男の元に居た子

供。

あり得ない話ではない。自分たちと似たような人非ず。妖怪の中にも身体は取り巻き、その精神こそが本体というものもいる。

人間だから。その先入観、可能性の一つを捨て去っていた。もしそれが合っているのだとすれば、私は!!

「……………えて、にげ、……………えうっ」

「ッ、だからどうした! このレミアアが、家族を捨てて背を晒すとも思ったかああ!!」

裂帛、共に発せられるは紅い炎。フランドールと共に包まれるその紅気は十字架を様し立ち上る。自らの二つ名を名づけたスペルは彼女の確固たる意志による解放され、見えぬ、けど傍らで妹を害する者を焼き尽くすために。

見えぬ者よ、知れ。我の力を、あまねく災禍の炎を!

……………それもつかの間、襲い来る脱力感が、噴出した力の終わりを告げる。それはあまりにもあっけなく、あまりにも短い。気付いたら、電源を切り忘れていて電池の切れたおもちゃのように。

手元にある妹を抱きしめる。尽くされた手の中に残る、それでも守れるものを包むように。

「ボス……………ずっと、そばにいてくれていたんですね。……………そして、今は『そいつ』のそばに」

結果は、レミアアの、フランドールの。スカーレット姉妹の勝利であっただろう。だが、その足掻きは克明に刻まれる。

少女の顔が血に濡れる。近くにある、いつも近くにいた、近くで遠かった姉の血で。

少女の顔が血に濡れる。丸い小さな顔は、いたずらに針を刺されて割られる風船のように、右の眼から空気が出てしぼんでいくように、噴出していく。

「ぐああああああああっ!!!」

「あ、ああ、……………あああああ!!」

叫び声をあげても、フランドールは動けなかった。目の前で苦しむ姉を前に、頭を何かで小突かれそのまま押されているかのよう。少し

の力で振り払えるだろうそれを、今一歩手を出す勇気を彼女は持ち合わせていなかった。

「……あ、ああ、……やめて、やめてよう……もう、こんな……わたし、みたくない……」

目の前で倒れ伏す姉。守ろうとしてくれたのに、それをできなかつた惨めな姿。それを引き起こしたのは自分。

頭の中がざわめく。震えが止まらない。何かが動いたたびに、自身の心がズタズタに引き千切られ引き摺り回され荒らされていく。

自分が出しやばらなければ。羨ましがって、かまわれたくって、姉のやることに足を踏み入れなければ。頭を冷やして、素直に地下に籠もっていけば。

ぐるぐると頭の中をかきまわし、自らを崩していく。溶けて形の保てなくなったそれは、再び首に手をかけていく。

500年前から続いている狂気、自分は何も変わらない。自分が関わればすべてが壊れていく。全てが……自分さえ、いなければ。

「フラン、変なこと、考えるなよ」

暗澹とする心に、それでも腐らぬ血の呼び声。酷く傷を負った、再生の追いつかない顔。『スカーレットデビル』の全力、不死の体力が追いつかないほどの消耗。

明らかに追い詰められていても、姉は心折れていなかった。

「手酷くやったのは、間違いなくフランだ。にも関わらずフランは傷つけられていない……寄生先が傷つくことは、お前も傷つけられるから、じゃないのか？ ええ、来訪者よ！」

「おねえ、さま………ひっ」

「私たち妖怪は精神に重きを置く。一つの身体に不躰にもう一つ精神が押し入ればたまらなく不快だろう、それを私のかわいい妹にやりやがって……気分はどうだ、さぞかしい気分だろうなあ！」

フランドールに対して、その向こうにいるであろう来訪者に対して言葉をかける。どこまでも、自分との戦いとして、周りの者を排除し

てきた彼がここまで来てフランドールを撤退させようと考えないはずがない。にも拘らず彼女を傷つけず自分に挑もうとする。もし宿主をそのまま殺すことができるのであれば、レミリア自身に乗っ取り、そのまま斃せばいいはずなのだ。

推理を押し付ける様に言葉を叩きつけると、フランドールの、姉の庇護に入った安堵が崩れる。

「ひゃ……ああ、うごかないで……頭が、ず、ずう……!!」

再び頭を押さえ、脳を、心を蠢く激しい嫌悪感に耐える。恐怖におびえた顔は、喉の奥に溜まった異物を吐き出すかのごとくに舌を出し、声帯を無理やり震わせる。

同じく、死に体の少年の口も、訪れる安堵を受け入れる様に。

「せい、か、い、嫌、もう、私はもうしませんからあああああああああ!!」

「ボス、ああ、敬愛せし我が帝王。僕はもう二度と、あなたの傍を離れません!!」

二人の声が木霊する。反響する。

少女は力尽き、受け止められた深い愛情の中で眠るように倒れる。

少年は傷つき果てた体を、それでも愛する者を、畏れ多くも、しかし知らぬ地で探求を続けていた主君の帰還を称えて。

「……異形か……。……いや、人間か」

死んだと思つた身体に精気が宿る。細い小さな身体に筋肉が滾り、背格好も増していく。少し大きめの衣服もその体格に合っていく。負傷した箇所はそのまま、肉体の変化と共に音を立て生命が消えていく。

生と死が共存した逡巡、死んだはずの男が。ディアボロは、帰ってきた。

「ハァー、ハァー、ハァーッ」

「はぁ、はぁ、……ふっ」

ほんの数分前からは想像し難いほどに崩れたその広間に、二人の荒い吐息が木霊する。

ディアボロは右腕を失い、全身も痛めつけられ立っているのが不可解なほどの満身創痍。レミリアもスペルに注ぎ込んだ力を無駄に消費させられ、右眼に刻まれた傷は深い。

優劣をつけるならば、レミリアのほうに軍配は上がるだろう。だがそれを知ってか、彼女は自身のこめかみに指を突きたてる。

「はぁっ……血を、抜いたんだよ。興奮し沸騰しそうな血を抜いて冷静を取り戻す。昔、知り合いに教えてもらったものでね」

引き抜いた指の軌跡に紅い液体がなぞっていく。少量に流れた後、その傷痕はゆっくりと塞がっていく。この程度なら問題はない、と言いたげに治癒していくが、それでも失われた右眼の回復は至らない。

「……で、どうする気だ」

血の匂いでむせるほどの中、傷ついた2人。

「もはや勝負は決した。フランはお前に止めこそ刺さなかったが、戦闘不能にまで追い込んだ。その後、その傷ついた体で、それでも本性を曝け出して、フランをつ、私を共に追い詰めた」

語り口が動いて、時間が動いて、血が流れ出るのは止まらない。

「その点は認めよう。お前の足掻きはただ死ぬだけ道から活路を見つけ、フランを戦闘から離脱させ、私にも一撃を喰らわせた。……それで十分だろうか？ 今お前が立っていても、お前が戦闘不能なことには、変わらないんだ」

目が回る様な長い時間、それは常態では考える時間もないほど短い時間。

「私はまだ、少なくとも今のお前の、ボロボロの雑巾よりひどいお前な

んかよりかは余力がある。もしお前と同じ損傷を負っていても、相手を倒すのに労苦はないだろう。……それほどの力の差、分らないはずなのに、なんでっ、立つ」

受ける相手の、荒い息は変わらない。

「……もし、自分が死のうとも意志を継いでくれる者が居るのなら、それに殉じる者も居るだろう……」

「……ッー」

口からも、溢れ零れる血液が、彼の言葉を濁す。力強さを感じさせない、たどたどしい声。

「私にはそれがいない……彼らとは違い、私は常に孤独だった。それを良しに思っていた……皮肉かな。私が今ここで戦いを終えても、そのまま続けて死んでも、『私』を継ぐ者はいない。そのまま、過去になると思っていた……」

どこか虚ろに響く声は、まるで自分に言い聞かせているようでもあつて。

「そう、思っていた。……あいつが、ドツピオが、私を認識するまでは」
「……あの子どもか」

「最も傍にいて、最も信頼を寄せていて、……最も利用した忠実な部下。それでも切り捨てるだけの手駒。……だが、それでもあいつは付いてきた。死んだ先でも、この果てでも。その先で、『私』を見出した」

一通りの旨を話すと、その眼に覇気が宿る。始まりの、傷のついていないときと同じ、それ以上に。

「今をドツピオは見えていなくとも。私は……人は、一人では何もできないことを理解した。ここで敗北を認めることを咎めるものも、笑う者も居ないだろう。……しかし、そろそろ報いてもいいのではないか？」

残った左腕で、明確な意志を持ってレミリアに挑戦を突きつける。彼女に見えていない像もまた、同じく。

「守るためか。……くだらない見栄だ。だが、その虚栄心も持たないようでは、持たざる者では頂点に立つことなどできやしない。……い

い眼だよ、相変わらず。今まで幾多の敵に出会ってきたけれど、そんな眼をした者達にはどんなに弱くても全力で相手をしたよ。そして、その者達に勝利したからこそ、今の私がいる」

レミリアの周りに一瞬紅い霧が舞うと、それはコウモリの形を成して抱いていたフランドールの姿を包む。彼女の身体もそれに溶けるかのようにコウモリへと変わり、そして館の奥へ消える。

「改めて、一対一だ。引いた瞬間に散る閃光のような一瞬を期待するよ」

「こちらこそそれを期待する。……結果だけだ。一瞬の、結果だけが残る」

辺りに散った自分の魔力の残滓をかき集める様にレミリアの右手がうねり、それに呼応して紅い塊が最初は歪に、やがて正しく模られる。神々の闘争にもたらされた神槍と自称し、それを是と周りに認知させるほどの彼女の力。戦いの終結にふさわしい、今までより紅い紅い武器。

対峙は変わらない。痛む身体もほとんど認識できず、しかしそれは脳の信号を遅らされているだけ。明確に鈍くなった体を引きずるだけ。だが、そこに絶望も自棄も見えない。滑稽に見えるほどの意志の籠もった瞳と共に。

一歩。

一歩。

突きつけられた神槍の間合いに入る瞬間、

「、くそっ！」

予期していた展開、既に振るわれていた槍を素早く背後へ振り回し認識を追いかける。

自分を通り過ぎる様に彼は立っており、その様を見るが為に振る舞ったのではないかと思うかの如く、ゆっくり振り返る。

「……どこが一瞬だよ、泥沼じゃあないか。飛ばしきれれるとは思っていなかったけど」

「……………」

悪態を吐くレミリアに対し、余裕ない表情で返すディアボロ。

「……当たり前前、だ。確実な機会を、逸すれば到底叶う相手ではないのだから……」

「まあそうだろう、けどっ、さっき言ったこと、もう忘れてんじゃないだろうね！」

疲労と裏切りの苛立ちからか、レミリアの言葉尻が投げ捨てられるように強くなる。

時の同じくフランを下がらせた分身がふわりと彼女の周りに飛び回ると、元の形に戻るようにさらさらと溶け込んでいく。

「……なら、強制的にでもそうさせてあげようじゃないの！」

神槍にまとめられていた魔力を解放し、その全てを自分の周りへ漂わせる。先ほどフランを守るため、いるはずの人型を狙ったスペルと似た、暴力的破壊の象徴。

その力を滾らせ全身に張り巡らせ、レミリアの周りの空気がびりびりと震える。床板もそれに耐えきれず、削れ、砕け散る。

「私の最後の全身全霊よ、受けて立ってみなさい!!」

同時に、背後の壁まで一瞬で飛び退くと、崩落と同時に突っ込んでくる。先ほどまでいた彼女の地点、床と壁がほとんど同時に壊れ崩れた様に。紅い閃光はディアボロの感覚より圧倒的に早く、速く、
「うあっ!!」

彼の隣を破壊する。それを認識した直後、閃光は辺りを右へ左へ、目まぐるしく飛び回る。

一本の紅いペンを、白紙でぐしやぐしやと塗りつぶしたような、その目に映る勢いは圧倒的な速度と破壊。館が壊れることを省みず、夜闇を照らす赤い月が遮ることなく二人を照らす。

直接衝突していないのは、奇跡か偶然か。彼女の明確な意志によるものか。それでも飛び回り破碎される瓦礫のカケラは彼の視界を瞬く間に塞ぎ、その粉塵は呼吸さえ塞ぎ、絶え間なく響く破壊の振動は足元さえもぐらつかせる。

これが紅い悪魔の本性。いや、違う。最初から彼女はこうだった。どうあれども、自分の物を守りたかったから。それは概念も家族も。自分の城を賭けるほどの相手ではないとどこかで思っていたから。

だからここまでやらなかった。

そんな悪魔の、最後の駆け引き。じやれつく妹を離してでも向き合う自分への最初で最後の真摯な対峙。矜持以外の何かを守るものを得た自分に対する、悪魔なりの優しさ。強者なりの理解。守るものを一つ手放し、自分に改めて対峙してくれた。

どこで仕掛けるかを、選ばせてくれている。その絶対的な瞬間を掴んでみせろと挑発している。これほどのお膳立てをしてくれることに、感謝を見いだせないはずがない。

時を飛ばし、その中でレミリアを見出さなくては。音と光だけでは、もはや人間の感覚を越えられてしまった。全身にぶつかる飛礫が、あまりに傷ついた体を揺さぶる。赤子の力で切れてしまうほど細い糸の上で立たされている彼の心は、熱くも、冷たくもなっていない。

「……時よ」

(まだですッ！)

その心を揺さぶる、どこかから聞こえる幼い声。

(僕が合図をしたら、時を消し飛ばしてください、いいですか、合図を待つんです！ 僕ができるのはそれだけ、行えるのはボスだけです(ら！)

今まで聞くことの無い声だった。聞こえるはずがない、自分が目覚めているときは彼は意識の奥底、揺り籠の中に沈んでいたはずだから。

破碎した礫が足をえぐる。残った腕を傷つける。認識不能なほどに砕かれた身体を刺激する。それでも、驚愕の心は振るえを止めない。

「……おまえ」

(視え、2、1ッ!!!)

暗転。

そういえば、レミリアが辺りを飛び回り始めたのはどれほど前だった

ただろうか？ 5秒か、10秒か？ もっと前だっただろうか。

崩れ去った自分だけが見ている世界は、生あるものだけを映しこみ、阻害する何物も排除する。今ここで見る『予知』は、確実に自分を抉り去ろうとする彼女の姿。それも一つだけではない。

期を示した彼女は一撃を皮切りに、反転と破壊を、自分の一点に幾度も繰り出そうとしている。いかな方向に逃げようと収められるように、周りから少しずつ、その機動を小さく細かく。

先ほどの行使からどれほど止まっている間に動けるかを推測しての行動だろう。自分が五体満足であれば余裕のある距離を、今の肉体では到底向かいきれない距離は捨ててその最後の―撃に特化するために。

もし、先ほどの声が無ければ機会を得ることはできず、不完全な状態での衝突は免れない。回避もできない。チェスや将棋でいう『詰み』の状態に陥っていた。

「……」

変わらず、この世界は無音だ。必ず生じる空気の振動が、遙かどこかの虚空で起きているような錯覚を覚える。その感覚だけを、受け止めている。いつもの通り、いつものごとく。

あの声が聞こえないのはこの中だからだろうか？ それとも限界状態からの研ぎ澄まされた感覚が、自分の都合に合わせて変換していっただけ？ その答えは、ここではわからない。聞こえないのだから。

一本の線を選ぶ。映し出される像は、映し出される画はその最適解。

一つ、二つ。一瞬のうちに掠めていく線を一つ一つ避け、その戦前に立つ。

勝負は一瞬。

光速で、床を壁を天井を鏡に反射する光のように飛び跳ね続け、もはや自身さえも音も光も感じ取れなくなるほどの中、それでも何か、

感覚で敵の位置を掴み続けてきた。

その認識が大幅にずれる。レミリアはそれで理解する。時を吹っ飛ばされたことに。

精神を摩耗するかのその集中力の中、感覚を飛ばして敵の位置を探る。

背後か？ 側面か？ 上か？ 下か？

吹っ飛ばされた結果は常に回避、それに伴う反撃。だから、それは心理的な死角。

「な」

一番最後に認識した正面。そこにディアボロは立っていた。

秒以下の単位での認識のずれ。だが、今はそれが致命に至る決定的な瞬間になりうる。

彼は飛ばしきれずに眼前にいるわけではない。『迎え撃つ』ために、正面に立っているのだと!!

「あああああああああああつ!!!!!!

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

もはや、言葉にならない、ただただ腹の底から響かせるだけ。それだけの力が何処に残っていたのか、両者の衝突はその振るえから始まる。

飛び回った最後の、愚直な故に全力の籠もった体当たり。

それを迎え撃つ盾は、残された最後の左腕。

ディアボロはキングクリムゾンの左腕を、レミリアを『流す』ことに使用した。

最初に言った通りに、二人とも弱っているとはいえ力はレミリアに分がある。いくら不意を突いても衝突を行えば、敗北は必至。

強引なレミリアの軌道は、その実壁との反射の時の精密な、あるいは強引など言える受け身に依る物。軌道を反らし、不利な体勢を強要させればその力ごと、悪魔の紅に突っ込むことになる。

それによる衝撃も、最初で最後の追撃にも、そのためにも。

レミリアの頭を鷲掴みにしようと、見えぬその手が迫る。認識の遅れた邂逅に気付けぬも、その推進力は変わらない。

目前にして、隕石が近づこうかという光と音の圧迫感。その手に触れ、溶けた鉄に手をつ突っ込んだような激しい熱。

触れただけで発狂してしまいそんな苦痛をスタンドの左腕はなおも受け、反映して自身の左腕も肉が焦げ皮膚が裂け血が噴出しそのまま蒸発する。一瞬にして繋がっていることが奇跡ともいえるほどの傷が刻まれる。

「ぎいやあああああああああああああああつ!!!!!!」
「グウイイイイイイイイイイイイイイイイイイツ!!!!!!」

一瞬にして視界が歪み、自身を殺さず逸らすという手段に気付いても。その勢いは留まらせず魔力の奔流を重ねてそのまま強引に突き破ろうと。

最初はただの暇つぶしだった。次第にそれは相手のプライドを満たすための遊びになり、妹を虐げた怒りの矛先になり、気づけば自分のプライドも互いに突きつける貴族の泥遊び。

それらが自身を構成していることを大いに理解している。もしどちらかが安易な敗北を選べば、自分も相手も互いに尊厳を傷つけよう、下らぬ自傷行為に成り果てる。

それだけは避けたかった。気づけばそう思っていた。おそらく相手も同じだろう。……違う所は、相手は賭けるプライドが最初は一つ、今は二つ。

それは自分と比べれば少ないだろう。だが、数の問題ではない。こちらからすれば戦う相手が倍になった、そんな印象。決してそんなことは有り得ないはずなのに、けれど目の前に事実がある。

認めないのは礼を失する。それを認めたくえであえて叩き潰そう。それが彼の望みであり、自身の誇りなのだから。

「うあああ！あああああああああああああああああああああああ
あつつつ！！！！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アツツツ！！！！！！！！」

ディアボロの肉体が傷ついていく。踏ん張る両脚、太腿から体幹へ、頭部の血管からも、失われた右腕痕からも、食いしばられ欠けた歯が口内を傷つけ、負荷に耐えきれない損傷した内臓が血液が、出口を求めてありとあらゆる隙間を駆け巡る。

レミアアの勢いが衰えを見せ始める。並はずれたその力の貯蔵ももはや底を突き、雄大な流れ星を思わせる輝きも尾を失い光量が落ちて。右眼から滴る血液が、自身の力に耐えきれなかったはずの血がほんの少しその在り方を取り戻して。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああつつつ！！！！」

互いに、一步も引かない。もはや再起など望まぬほどに。一縷の勝利を掴むために。

だから勝敗を分けたのは、傷ついても吸血鬼だったからか。最後の最後で欺いた人間だったからか。

——があん。

高い質量が石床にぶつかる。膨大な力を持ったそれも制御しきれない速度をもてあまし、安定を保てず無様に転がる。

轟音が響いただろう。館を破壊し決る主の全力が無作為にまき散らされたのだから。

だが、二人の耳には何も響かない。

脳が現状を理解するまで、神経は何物も捕らえられなかった。

「くあつ」

転がりつづける小さな身体が、壁面に叩きつけられ肺の中身を搾り取る。震えた声帯が、ようやくレミリアの現状を認知し始めるきっかけとなった。

自分が負けた。残滓の全てを使った、吸血鬼の底の底をすくい取られた。自分より傷ついた人間に。称賛はあれど、種の誇りが心に敗北を刻もうとする自分を許さない。

相討ちではないか。あれほどの余力を用いて相手だけ立っているなど。……最後に立っていた方が勝ちなのだ。まだ折れる時では、
「くつ！……あ」

必死の勢いで顔を上げたレミリアに恐怖が宿る。屋根がすべて破壊され、謁見の間には月明かりを遮るものはない。

なのになぜ、あの赤い月は自分を照らさないのか？ 闇の王が、何故闇を恐れなければならないのか？
簡単だ。

「……終わらせて、やろう」

男が、彼が。ディアボロが手を振り上げる。全身が血濡れになり、動く死体のようにも見える。残された左腕は、もはやぶら下がっているだけ、にしか見えない。

何もしていない目の前の男が、おぼろげに、だが確かに自分に手を下そうと。『何か』が戦いの終結を告げるために手を振り上げている。

目を瞑った。縛られたレミリアには、それくらいしか抵抗はできなかった。

穏やかな日差しが、軒先と自分を照らす。正午を迎えた時分、春から夏に変わりゆくこの季節、今のスーツではもう暑いかもしれない。くあ、と気の抜けたあくびが出て、身体の中に酸素を巡らせる。昼は休憩の時間だ、ブティックも本屋も休憩する。身体が、気を休めることを求めている。

「お待たせいたしました」

注文したピッツアをもったウェイトレスがやってくる。遅い時間もあり、客は自分だけだし店員も彼女だけだった。ありがとう、と感謝をそこそこにかぶりつく。パスタでもよかったが、今はこのまま熱い生地にかぶりつきたい気分だったから。

柔らかい生地とチーズや肉の具の厚さがそれぞれ歯を、舌を通して脳を刺激する。飲み込めば充足した気が、喉を通って胃に伝わり全身へと送る。

ふと目を上げると、先ほどのウェイトレスがこちらを見ながら笑っている。自分の視線に気づいたのか。

「失礼いたしました。とても、お腹が減っていたんでしようね、すごい美味しそうに食べるんですもの」

くすくすと笑みを浮かべながら語りかける。少し拙い面を見せてしまったか、そのことを詫びようとすると、

「良ければ、ご一緒してもいいかしら？ 他のお客様もいないし、少々退屈なの」

意外な誘いもあるものだ、と少々の驚きを持ちながらも、対面の椅子を彼女に勧める。

……近くで見れば、幼さの中に得も言えぬ美しさを持った彼女。誰も眼を惹くきらやかな金の髪を持っているが、顔だけはアジア系の特徴がある。

「あら、お気づきで？ 父方にこちらの血筋の者が居まして。父と母と共に日本に生まれましたが私だけがこのような見てくれで」

物憂げにふわふわとした天然のウェーブを弄る姿には、裏腹の自負

を感じられる。持ったものは仕方ない、それを恥じるか生かすは君次第だ。そう伝えると先ほどと同じように笑みを浮かべる。

「ふふ、お上手。この国の方々はみんな優しい方で飽きませんわ」

静かに椅子を引き、座る。タイトなスカートから見える脚は異性も同性も惹きつけうるだろう。しかし、だからこそ気にかかる。

どこか彼女の動き、一挙手一投足全てが何処か普通に身を置いている者ではない空気を感じる。敢えて、普通を装っているような。それも、高度に――

何を考えているのだろうか。そもそも、自分でさえも普通に身を置いている。昔は漁師を目指そうとも思ったが、今はしがないサラリーマンだ。市場の流通のため、漁港に訪れることもあるがああの頃の気持ちはどこかに行ってしまった。

「……？ どこを、見ているの？」

ずい、と身を乗り出しうつぶく自分の顔を覗きこむように、大きな金の瞳が間近に寄っている。どこか見通しているかのような口ぶり
と表情に、思わずたじろぐ。

決していかがわしいことを考えていたわけではないのだが。途中で
まで口にしたところで失敗ばかりしている自分に少しおかしくなっ
てしまい。

「構いません。楽しいお方とお付き合いできることが有意義な時間に
繋がりますもの。……とところで」

共に笑ってくれる、彼女は珈琲を一口傾けながら。

「ところで、お連れ様は何時になったら来るのでしょうか、ね」

はて、自分に連れはいなかったはずでは……そのはずだった、のだが。目の前の少女の一言で、頭の中にあつたはずの記憶があふれたか
のように。何故忘れていたのだろうか？ そうだ、今日は自分の部下と
会うためにここで待ち合わせをしていたのではないのか。

ずっと自分の為に尽くしてくれていたが、今まで会う機会の無かつ
た唯一の部下。他にも仕事の仲間はいたが、その中でも一番信頼にお
いていた。

いや、仕事の仲間？ 誰の顔も思い出せない。浮かび上がる顔はあ

るが、それはどれも仲間の顔ではない。どれも親しい表情が思い浮かばない。自分の元に寄る理由はおこぼれを得るため。まともに生きていては得られない金、名誉、地位。そのいずれかに僅かにでも継ぐため。

卑しく微笑む醜い顔。何も知らずに心酔する顔。どこかで自分を掠め取ろうとする、それは仲間でも何も無い。

「……あらあら、これだけで気づけてしまうなんて。やはり、侮れないわね」

目の前の少女が席を立つ。飲みかけの珈琲はそのまま捨て置かれた。……いつから、在ったのだろうか？ あのウェイトレスはどこへ。いや、目の前にいたはずの人物が。すり替わるほど目を離すことなどなかったはず。

ここはどこだ？ 風景も、気温も、風も、目を瞑っていても思い出せる郷土の息吹。だが自分がそれを味わうことのできるはずが。

確かなことを思い出せ。自分は、あのバスを降りた後――

「もしも、あなたがあの時のままであったなら。そのままのあなたでいたのなら。その時はここが終着点。でも、夢を想って天を生きる意志があるのなら。お天道様の元を歩み続けるのなら。声の元に向かいなさい」

生ぬるい風が、自分の肌を触る。心地よい潮風は、サルディニアの風はもはや帰ってこない。もし再び味わいたのであれば、相応に足掻くしかない。

そうだ、最後まで足掻いた。彼女の言うとおりに、捨てられぬ野望の為に。夢というやさしい言葉は、今まで忘れてしまっていた。

向かわなければ、そのために。

「所詮現世は夢幻泡影。だからこそ美しい。けれど時にあまりに強い光が現れ、それは対の闇を生む。現がその度に崩れてはたまったものじゃないわね」

よろよると、バス停までたどり着く。引きずるようにしか動かせない脚、既に感覚の無い左腕、そもそも存在のしない右手。もはや健全な個所なぞ存在せず。

どうやってここまで行けたかも、あのカフェテラスの椅子からの短い距離でさえ記憶が曖昧。短期の記憶すらままたまらない。それでも、『アレ』に対して感謝の意を述べねば。

「……とうとう会えたな、ヤクモユカリ」

「初めまして。そして、さようなら」

あと少し、バスに乗り込まなければ。身体は思うように動かず、タラップに足を掛けようにも限界の身体がそこまでの言うことすら聞こうとしない。

ぐ、と力を込めた所に感じる浮遊感。それはただ自分の身体が倒れ込んだだけなのに、それにすぐに気付くこともできず。

「よっ、と」

その身体を支えたのは、小さな、

「……あ、起きた」

「！ 本当か!？」

何か、温かいものに包まれている。それが最初に感じた違和感。何か柔らかいものが頭の下にある。それが第二の違和感。

夢、だったのだろうか。先ほどの光景は。半開きの眼が、まだ霞を残している。目を擦ろうとするが、動かない。

「ばか、動かないで。どうして怪我人ってこう動き回ろうとするの!」
聞き覚えの無い、囁くような声が聞こえる。僅かに動く首を動かすと、その方向に、

「おま、あは、やつ、急に動くとかすぐつたいじゃないの!」

薄く柔らかい、淡い桃色の布が視界を遮る。上質な生地の良い香りの中に、染み着く死臭と血の匂い。

「なんで男なんかがちまつこくてかわいいレミリアちゃんのふんわりやわらかおひぎにクツソ汚い頭なんか乗せてんだ今すぐにでも血袋ぶっ潰して」

「うるさい」

「ごめんなさ〜い、パチュリー様あ〜」

徐々に意識が覚醒していく。広がる視界には、崩れた紅い瓦礫たち、そこから差し込むほんの少しの月明かり。幾人の羽の生えた少女達、夢の中の世界にしかない妖精と言われる者達がその瓦礫を共同して片づけている。……のだが持ち上げられなかったり隠れたり投げつけあったりしていて遊んでいるようにしか見えない。

椅子に座りながら、そんな彼女たちを指揮する頭を保護した華人。そんな空気の中、舞い立つ埃の中をまるでいつも通りと言わんばかりに食卓を用意するメイド。

そして、一番の近くには。

「やあ、おはよう。気分はどう？ 人間的にはまだまだまだこんばんわだし、私からすればお休みなんだけど」

先ほどの夢と、未だ前後不覚の脳が認識を鈍らせる。確か、目の前の少女は先ほどまで死闘を繰り広げていたはず。その証拠、潰した右眼は未だに癒えていない。……言い換えるならば、そこ以外は何も傷ついていない。

「……おれ、は」

「最後まで見なきやあエンディングは終わらない。残念だったね、途中でリセットしたらラスボスは最初から、よ」

にいつ、と吊り上る口角は未熟な歯とわずかにかかる人の平均より大きな犬歯を覗かせる。

徐々に思い出してくる結末。最後、止めを刺そうとした瞬間のレミリアの表情まで思い出されるが、凶手を振り下ろした瞬間は思い出されない。

「馬鹿なことを、レミリアに挑むだなんて……死んだら、どうするんだ」

「……全体の30%の失血、外部、内部ともに重篤な損傷多数。その

ショックを麻痺させるためかの脳内物質の過剰放出による汚染……
良く息を吹き返したわね。そのまま検体として使用した方が有用な
位」

見える位置に、寺の賢将と死人のような顔色をした別の少女がデイ
アボロを見下ろしている。縁記に載っていた、レミリアの友人という
魔法使いが彼女だろうか。

彼女はじつとりと、本来は興味も持っていないだろうと感じられる
路傍の小石を見る様に見下ろし続けながら、言葉を続ける。

「あの子の言うことと似た様にもなるけど、このネズミとレミイの頼
みだから治癒魔法を使ってあげているのよ、妹様に吹き飛ばされた右
手も少し待てば綺麗にくつつく。そうね、もう少しすれば戻るわ。
はあ、何でこう怪我人って動きたがるのかしら」

ちらと妖精たちの指揮を執り続ける美鈴を見やり、そして踵を返
す。自分の視界からは外れるが、柔らかいものに腰を下ろす音が聞こ
えた。

「……………何を、する気だ？」

「んー？」

「結局は、オレは敗者だ。……………助ける理由もないだろう」

「ん……………??？」

わざとらしく、耳に手を当てて言葉を促すようにレミリアは振る舞
う。

「今なんて言った？」

「……………何」

「オレはー、なんだって？」

にやにやと、さぞ嬉しそうに。

「……………」

「ん……………??？」

「……………オレは、敗者だ」

「なあにいく？ 聞こえない」

「……………」

「ん？ 何だって？ ん？」

「……………くっ」

「ほら、早く言ってみなよ。はーやーく、はーやーくー」

「……私は、レミリアに、っ、ま、負けました……………」

「グッド。その言葉が聞きたかった」

「ご満悦、といったように。幼さの残る悪趣味な笑顔を浮かべながら、満足げにレミリアは言い放つ。屈辱に満ちた表情のディアボロを、見たかったのだろう。彼も、敗北を味わったことが無いわけではない。だが、改めて事を強調させられる恥辱は、耐えがたいものがある。

「思いつめた顔が取れたね。私も真剣だった、それに偽りはないよ。だけど、ここは幻想郷。郷に入っては郷に従え、ってね」

「本当だよ、まったく。御主人にも言われたはずだ、君はもう一人ではないと。どのような形であれ、既に幻想郷では君を失うことで情は動く。……何の思いがあるか知らないが、無闇に命を張るんじゃないよ」

おどけて言うレミリアと違い、なんだかんだ言いながら本気でディアボロを心配しているであろうナズーリン。その姿はここに至るまでには向けられなかった、目新しい感情。自分を憂慮してくれる存在など、ほとんどいなかった、ここに来る前は。

「……こほん。それに、私は君を見張る仕事があるからね。何をし出すか」

「何言っつてんだ、このツンデレネズミ」

「だ、誰がだチスイコウモリ！」

「なんだとー！」

だがここでは、すでに多くの者と関わっている。ドツピオが死んだということまで悲しむ者も居るだろう。憐れむ者も居るだろう。ドツピオと自分をイコールにつなげられる者も居る。その者たちは、どう思うだろうか。

「……あー、このネズミはどうでもいいとして。あとはあの子が許せば、私はあんたに何もしないわ」

そういつて指した先、残骸の影に隠れ、皆の輪から離れる様に虹色

の宝石をぶら下げた羽が、その持ち主が窺うようにじつと見ている。「フランを利用したことについて、『私は』今の表情を拝ませてもらったことで無しにする。けれどあの子はあんたが倒れてからずっと近寄ろうとしない。あの体験はもう御免みたいね」

食い入るように見つめる瞳は、恐れと羨望だ。興味はある、輪の中にも入りたい。自分が興味を持った人間と、自分に興味をすこしでも持った人間に触れてみたい。だが、大元を断てていないことへの不信。

「……好きに、すればいい。私が相手をしたものが決着はついたと認めた以上、その者に関わる何かに因縁をつける必要もない。先ほども言ったが敗北したのは私、今は抵抗もできず、もしフランドールに同じことをしたならばお前がすぐにこの首を分かつこともできるだろう」

「つまり？」

「……」

再び、残酷な笑顔を浮かべる。レミアアの心は、本当に死闘と結末とで別なのだろう。否、レミアアだけでなく、幻想郷の住民は。その中でフランドールだけはまだ至っていないということ。相手が幻想郷の住民ではないということ。

「……私はお前にも負けたんだ、フランドール。生殺与奪はお前たちに権利がある。好きにすればいい」

「……………ほんとう？」

「殺させはしないけどな！ 元々は私に挑んできたんだから、今は私が所有しているんだからね」

「おい…………」

おずおずと、影から全身を見せる。

「ほんとうに、もうあんなこと、しない？」

「……今は、できないな。せつかく拾った命をむぎむぎ捨てる行動など」

とたた、と姉の膝元に横たわるディアボロに、フランドールが近づく。自分が吹き飛ばした右手を、今は繋がっているその腕を手に取り

る。

「……大きい手。お父様の手みたい」

「ああああああフランちゃんか男の手を握ってる私だって触れたことが無いのに穢れが、穢れが!!」

「うるさい」

「すいませえくん、パチュリー様あ」

父親。懐かしい響きだ。最も、認識した時から今まで自分がそうであると感じたことはない。だが、生命は必ずどこかで生産者がいる。一つ一つに親が存在する。

だが、自分にはわからない。存在するはずだが、常識では考えられない状況で生まれた身分。そんな男でも、生命を作る行為を行った。それは子を成した。社会としては父として見なされないのであろうが、生き物としては、自分も父親となっていた。

もし、父として娘についていたのなら、このように慕う一面を見せてくれたのだろうか。

「……ふっ、ははは」

「？」

思わず破顔してしまう。そんなことを考えてしまうとは。今まで全く認知するどころか、危険因子としてしか見ていなかった娘を、この異世界の幼子に、それも自分を害した子供に重ねるとは。

そんなものより、今まで自分の子どものように付き合ってきた相手が存在するではないか。

「……すまないが、人形を取ってくれないか？ 私の、ポケットに入っている」

「え……？ っく？」

「可愛いフランちゃんが男のズボン弄ってる……死ぬう」

「死ね」

「パチュリー様、辛辣すぎます」

ズボンに入っていた、小さな人形をフランドールに取り出させる。

「……ドッピオ、の人形？」

「……お前、何でそんなの後生に持ってるの？」

「それに、ボロボロ。……これで、いいんだよね?」

アリスに作らせた人形は、激戦によって保護も間に合わず、一つはほぼ原形を保っておらず、もう一つは傷ついた彼と同じく、全身、特に右腕が酷く損壊している。

「……その波長、アリスの? 何やってるの、あの子は」

「ああ、それでいい。それを、耳元へ」

傷ついた人形が、ディアボロの傍らに置かれる。あの時人形遣いは限りなく精巧に作ってくれた。こんな顔をしていたのか、と思い直してしまふほどに。

「もしもし、ドツピオ……聞こえるか」

「え?」

「??」

二人の吸血鬼は、きよとんとした顔をして見つめてくる。だが、知ったことではない。自分たちの交信は、いつもこうだった。

「聞こえるか? 返事をしてくれ」

今までは一方通行だった。こちらから送る、それだけの交信だった。彼はそれでも、いつでも、何としてでも受信した。

「……もしもし、ドツピオよ。かわいいドツピオ、聞こえるか」

「ちよつと、何急に言ってるの?」

「……?? お兄さん、大丈夫?」

「……地霊騒ぎの時の交信装置、そのアリス版。つまり誰かと交信している可能性がある。最も、波長と同一なのはそこにある二つの人形のみ。壊れて使えないってことを教えてあげた方がいいんじゃないかしら」

「何それ面白そう、パチエそんなのあるなら教えてよ」

「二日で飽きたのはレミイよ」

「……………最初の時の電話、もしかして」

『……………』

「聞こえ、るか」

やはり、こちらからでは答えないか。自分のもう一つの人格、自分の都合の良いように生み出したもの。それをいまさら都合を捻じ曲

げてなど。

だが、閻魔も言っていた。もはや別の魂として存在していると。自分を守るために、自分の為にもう一度生まれてくれたことを。

「もしもし……ドツピオ、聞こえたら電話に出てくれ」

「おーい、聞こえてないって、知識人が言ってるから間違いないよ」

「……脳みそも欠けてたのかな、損傷個所として見なせなかったのかも」

「……静かにしてやってくれ」

外野の声も、自分の耳には入ってこない。

「……ドツピオ」

「えー、じゃあ元通りになるの？ 脳って複雑だからあんまり触りたくないの、美味しくないし」

「そうなの？ お姉様美味しい所持ってたんじゃないの」

「私がそんな意地汚い事するか」

『はい、ボス』

「昔私のケーキのイチゴ勝手に取って食べたじゃない」

「あれは美味しくないから代わりに食べてあげただけよ」

「いや、静かにしてやってくれないか」

「……ありがとう、すまない」

「そいつを治したいんだったらあんまり騒がしくしない方がいいんだけど。義理はないけど、矜持として失敗させたくないから」

「えー、パチエそんなん言うんだったらあの鐘？ 鳴らせばいいんじゃないの、あれ」

「私の血が足りてない」

『謝らないでください、ただ躓いただけ。ただそれだけ。たとえ笑う者が居ても、それを乗り越えてきたのがあなたです』

「それなら私の血を使う？」

「無理ね。あれは血の調整があるからこそ活用される。吸血鬼の血なんて穢れすぎて熱くて使えやしない」

「なんだとー!」

「あのさあ……」

「お嬢様、妹様、そろそろお時間です。こちらを」

「ああ、悪いね咲夜……ちよつと、独り言にすまないけど」

「つつい、とレミアが頬をつつき、その先を外へと指し示す。気付けば遮光の変わりか、傘を携えた咲夜が佇んでいる。

「人間が月を望むことを想うように、私たちもたまにはあれを望む。直射はあんまり好きじゃないけど、あれを見ると、人間が門出という気持ちもわかる気がするよ」

遠くの山間から上る、大きい光の塊。温かい命の恵み。ここには似つかわしくない、太陽の光。

『僕にとっては、いつもあなたは太陽です。いつでも、僕を照らしてくれた。たとえ、あなたの臨む先が陽の射さぬ暗闇でも、それでも僕は貴方と共に、歩み続けたいのです』

「感謝するつもりが、逆に言われるとはな……」

上る朝焼けにはしゃぐ妖精たち、共に回る美鈴。うんざりした顔を少し、その後朝焼けに見入るナズーリン。そつと主たちの傍に佇み、控えめながらも確かに彼女たちを守る咲夜。眩しそうにも、それを細い眼で見入るパチュリーとその従者。そして、

「夜明けだ。これからはお前たちの時間だろう?」

「……ありがとう。あんなこと言っちゃったけど、楽しかったわ」

自分の力量を知らしめた、二人の幼き月と太陽。

ほんの少しの逢瀬を楽しんだ後、一瞬にして一帯に影が満ちる。どうやら、瀟洒な従者による幕引きのようだ。妖精たちと美鈴は急いで明かりをつけて回る作業へと移る。

気付けば、自分の身体も先ほどまでの苦痛の呪縛はなくなっている。ためしに手を動かしてみるが、何も問題ない。

「さすがパチエ！ あれほどの怪我を一晩掛からず治してみせるツ！」

「当たり前」

「ノリ悪っ」

ゆっくり、身体を動かしてみるが問題はない。立ち上がることも、先ほどまでただ眠っていただけののように、重症の後遺もなく行える。「もう問題ないみたいね。それじゃあ、準備もできてるみたいだし、初めよっか」

「……何を、だ？ もう私は」

「朝更かしの始まりだよ、咲夜、準備！」

「できております」

一瞬。丁寧に用意されていたテーブルの上にはいつの間にか豪華な食事が並んでいる。さすがに瓦礫の全てを片付けられたわけではないが、大きいもの以外は撤去されており、少々品はないが宴を催す進行には問題ない。

「申し訳ありませんが、全ての除去はできませんのでご了承くださいませ。後ほど美鈴の手を借りて行います」

「力仕事は任せてくださいね！ ……てて、大声出すと頭に響く」

「ばか」

「パチユリー様のばか好き、セックスしてる時に言わせたい」

「寺の。貴方も参加しなさい！ フランも久しぶりに食べていきなさい。紅魔の宴はどっかの神社とは違うのよ！ みんな、グラスを持ちなさい」

「その必要はないわ」

全員の動きが止まる。闇から染み出るような一声。

この場の者の声ではない。だが、ディアボロはどこかで聞いた覚えのある声。

「……彼女の名は『賢者』。正確にはその呼び名は通称」

ヒールを立てて歩く音だけが、明かりの届かぬ影から聞こえる。敢えてもったいぶらせているように、音だけ。

「本名は、全く以って不詳」

「紫でしょ」

「スキマ妖怪だよね」

「紫」

「紫ですね」

「……不法侵入ですけどこれって私の責任ないですよね？」

「……妖怪の賢者」

「……私が彼と初めて出会ったのは、ある皐月の東雲、寂れた紅魔の館だった……」

「おいコラ、不可抗力に何言ってるんだぶつとばすよ」

ぐにやりと、空間がゆがむ。形容しがたいひびずみの音と共に亀裂が走り、そこから現れる幾百の瞳だけの『隙間』、空間の支配者。

「Buongiorno, piacere di conoscer ti」

その少女は、夢に現れた、八雲紫はそのまま一礼をする。口から出た言葉は、最も聞きなれた国の言葉だった。

「始まりあれば終わりもあり。終わりもまたはじまふっ」

口上を述べ、垂れた頭を上げたその瞬間、紫の前面から膨大な質量を伴った妖魔の槍が炸裂する。

それは戦いの最中何度も使ってきたレミリアの一撃。彼女の氣勢を表す激を伴っている。

一瞬の後、背後の壁に大きな穴を作つて霧散した。もつとも、そこから射す光は暗幕によつて遮られている。良くできた従者だ。

「……いきなり何をするの」

「いや、さつきバカにされた分だけど」

投げた本人も投げて当然という顔をし、受けた本人も投げられて当然といった顔のまま。紫の上半身はスキマを境に消え去り、少し前から新たなスキマを作りそこから出されている。

随所で話に上がっていたが、いともたやすく不可解な現象を引き起こせる。噂に聞いた者だとディアボロは思う。そして、彼女が現れてから身の毛のよだつ空気も感じられる。産毛が逆撫でされ、肌が粟立つような空気が、この緩やかな空気の中でも感じられる。

「相変わらず、いろいろ足りていないわね」

「羨ましいか。若さは武器だ」

「子どもの背伸びほど見苦しいものはないわね」

「わざわざ腰を曲げる必要をまだ感じないなあー」

言いあう二人も微笑ましいが、冷えた空気は変わらない。それは、まだ自分が人間であることを示しているのか。

「……と、貴女と話をしに来たわけじゃあないの。もつとも、楽しい時間とは過ごせたいわね」

「ああ、おかげさまでな。まあしばらくはおとなしくしておいてあげるよ」

少し忌々しげに言い放つレミリア、それを受け微笑を浮かべ、紫はディアボロの方へ向く。

「……賢者、彼に何の用だ？」

一步、ナズーリンが前に出て彼女を窺う。少なからず、何も知らぬであろう彼を守ってやろうという気持ちがあるだろうか。

「……ユカリ、私もお前に言いたいことがある。大丈夫だ……ナズーリン」

「……」

しかし何も知らない彼女を退け、紫に向き合う。今まで、自分の事を測ってきた者達、その頂点。

目と目が合い、わざとらしい笑顔を形作る少女は、確かに夢の少女と変わらない。

「……お前が姿を現したということは、『全ては終わった』……ということか？」

「……ご明察。希望ならば、席を外させますが？」

「ちよつと、あんたたちに何があつたかは知らない。けど吸血鬼の城の中でそんなこと言われる筋合いはないよ」

一番に噛みつくのはレミリア。言葉の中に潜む移動ではなく排除を選ぶセンスに主として怒りを隠さない。傍らにはいつもの通り、咲夜が待機している。いつもの通りの赤い瞳で。

「やめろ。わざわざ争いを起こす必要はない。スカーレット達も私に関わった以上、聞きたければ聞けばいい。今の私に傍聴を止める権利はないし、どこまで行っても、関係の無いものには関係の無い話なのだからな」

一触即発の空気の中を割り入る。ディアボロはすでに受け取っていた。彼女の決意と熱意を。

「お兄さん……どういうこと？」

「私の能力には……スタンド能力には先がある。その力を用いた者が、幻想郷を巻き込む宇宙の事変を巻き起こした。私はその能力のテストケースとしてこの幻想郷に連れてこられた」

彼女の目的をためらうことなくその場に居る全員に向かって話す。事実は、その場に居る数人に少なからずの衝撃を与えていた。

「あら、勝手に話されてしまつては困りますわね。何のための実証でしょう」

「……紫が泣いて請うたあの事変の、原因ですか？」

「泣いてません」

「あ、失礼しました。弄るつもりではなかったのですがつい」

「……とうっかり、と完璧に偽った表情を浮かべる咲夜。先ほどの主へのための意趣返しだろうか。」

「……とにかく。そのためのテストケース。妖怪を恐れる人間たちが、人間を恐れる様になってはいけないの。あの事変が人間同士の争いの結果だとわかってしまえば、この幻想は崩壊する。レミリア、貴女がここに来た理由もそうだったでしょう？」

「……そう、だけどねえ。私には咲夜がいる以上驚きはしなかったが」「だからこそ、貸してくれたのでしょうか？ 本当、痛み入ったわ」

「気持ち悪っ」

「レミイ、突っ込みいれてたらいちいち進まないよ」

他と違い、ほとんど興味なさげなパチュリーの声が間を刺す。

「まったく。……話を戻すわ。貴方を観察し、外に起きた因子を探り。……結論を言うわ。貴方に、いえ、その他の者にあそこまでの事象を起こしうる力は存在しない。100年の歳月とそれにまつわる数奇な運命、そして周到に用意された贄と土地。……そこまでを用意することは二度と、起こらないでしょう」

そういつて紫は一冊の本を取り出す。本、というよりは少し厚い、使い古された黒いノート。それを取り出すや否や、ノートは紫の炎に包まれ消失する。

「あ、何なのよそれ」

「とある男と、その因縁との長い長い結末。届かないが故に手を伸ばし、果てには天国を掴んだ男の話。……今は、それも過去の話。終わった話を不用意に紐を解く必要はない」

「……天国？ それが、何の関係が、……むう」

口を挟むナズーリンに対して、何も言わずに紫は睨みつける。同じことを二度繰り返す必要はない、と言いたげに。まさしくその通りなのだろう、意図を読んだ彼女は諸手を上げて押し黙る。

「いずれにせよ、あのことについて皆が考えることはない。皆が悩む

ことはない。巡り巡って大団円、です。彼が、受け入れるのならば……ね」

眼の先が、ナズーリンからディアボロに移り、自然とその場の者の視線も彼に向けられる。

「幻想郷から貴方を束縛する理由はなくなつた。いくらか貴方が歩む道を敢えて与え、道より先も、貴方は自分の力で歩みを進めた。……結局あの事変でさえ、人の歩む道の先だったのだから。貴方は歩き切り、そして次へ行くのなら」

「……………」

「けれど、一つ付け加えるのなら。幻想郷の外へは……元の世界へ戻るのであるならば、貴方の枷は全て再び嵌められる。幻想の中だけでだけ紡げるものを外へ持ち出すことはできない。万に一つ、良成る可能性を信じることもできますが、期待しない方がいいでしょう」

「……………」

「もし次へ進まず、ここを終点とするならば。外への未練を断ち切るのならば愛した我が子と共に永住するのもいいでしょう。別の形になります。貴方に平穩は訪れる。貴方が手にすることのできなかつたものが、幻想郷なら手に入る」

「……………」

「岐路は訪れた。以後選択はないと心得よ。遷ろう時を澁ませることなど、本来できはしないのだから」

「できますが」

「お静かに」

「ちよ、ちよつと待つてくれ!!」

唐突に突きつけられた選択に、再びナズーリンが声を上げて制止を求め。

「彼が幻想郷に来た理由も、彼が過去に何をしたかも私はよくわかっていない！　だが、それほど事を急かす必要ないだろう！　何故、そこまで急に選択を迫るんだ！」

「黙りなさい。貴女が割り入る事ではありません」

「黙つてられるか!!」

顔色を興奮の赤で染め、体軀に会わぬ大きな声を辺りに響かせる。彼女を知っている者ならわかる、面倒事に積極的に関わろうとはしない姿勢とは異なる姿。

「彼がここに来てからは短い、だけど彼に関わった者も多いはずだ。なのに誰にもさよならも言わずに追い出すつもりか！ 少しでも、考える時間くらい与えてもいいだろう!!」

「ネズミの癖によく吠えるわね。彼を最初から信用もせず怪しんでいたのは、貴女ではなくって？」

「それはっ、そうだけど！ だけど、彼の帰りを待っている人がいる。彼に心配する人がいる！ 彼はもう、一人じゃ」

「やめろ」

喚きたてる彼女を制止する声。しかしそれはいつもの無理矢理にも押し黙らせるような重みのある声ではなく、どこか温かみのある声。

後ろから話しかけられて顔を向ける間もなく、その頭に手が置かれる。優しく、感謝の込められたごわつきを感じられた。

「考える時間を与えてやれ、それができぬならせめて別れの挨拶でもさせてやれ。……よく言うじゃあないか。あの寅柄の女はお前の主人だったな。奴を立てるため、か」

「違っ、そんなんじや……」

「それがお前という人間なのか……私にとってはどちらでもいい。だが、嬉しいよ」

置いた手をそのまま軽く動かす。不器用な自分が、それでも精一杯の労わりを表そうと。

「うわ、な……?!」

「短い間だった。けれどもそれは私という人物を見直すには十分すぎる時間だった。その間に様々な人間と関わった。私の姿でも、ドツピオの姿でも。……レクイエムに囚われるべくして囚われた自分を矯正するかの如しに、出会い、別れ。そしてまた出会い、別れていった」

流れ着いたのは何時かわからない。閻魔の言葉を用いるならば、目

を覚ましてからの四日間だけではない。

彼女らに見つけられてから、一週間と経たずも、その全てが自身を生まれ変わらせるための邂逅だった。

「なんだかんだ言いながらも、結局は恐れていたのではないか？ 私のようなものが幻想郷を犯すことを。悪の心を持った『人間』の行動で、この世界の人間の心に悪意を芽生えさせることを。……人間を一番殺しているのは、他ならぬ人間たちだ。幻想郷で人間同士の争いが起きれば。……妖怪よりも人間を恐れれば、この世界は崩壊する」

どこもかしこも作画的だった。何か筋道を与えられているようだった。その事実先ほど目の前の本人によつて伝えられた。

前から知らされていた。全てを知らされていない、それでも智慧溢れる獣から。

「……だからこそだろうか。最も、と言えればいいのか。ヤクモユカリ、お前の与えた道筋に乗って、私はここまで来た。もし乗らなくても、結論は同じ地点だろう。私は、奪われ、囚われたのだから」

名指した彼女の瞳が自分を定める様に舐めつける。

「金も、地位も、名誉も。何もかもを奪われた。奪う者と奪われる者の関係、今まで自分の存在を確立するために奪ってきた私を、奪うことを完了させた男が出てきたという話。……だからといって、それを行つたものが本当に奪うだけの者だったのかはわからない。私が奪ってきたものを、元に戻しただけなのかもしれない」

「な、何を言っている！ 君がどんなやつだって、今はここで過ごした人間であることに変わりはない」

「だから言っているだろう、どちらでもいいと。私の中で、答えは既に決まっている」

紫の瞳は、全てをわかっているかのように。

「この世界で過ごすことも魅力的だ。全てを忘れ、安寧を求めて。スカーレットにも言われた時、僅かに心が揺らめくほどに。だが、私に

は」

「「諦めきれぬ野望がある」」

「……だろう？」

自分の言葉に被さる二つの声。片一方は紫から、もう片方は先ほど名の出たレミリアから。

「さっきの戦いからのお前の固執、滲み出る執念は並々ならないものだった。百の言葉よりも濃密に語り合ったから、もしあの場に居たら誰でもわかるよ。最初に語った時から、既にお前の心は外に向いていた」

「……かの閻魔から聞いているでしょうが、貴方を取り巻く呪いに対する感情、貴方自身の思い。それからは普通に過ごしているだけでは感じられないほどの執着。ふふ、筋道は決まっていたようなものでした。男の人って、不器用ね」

互いが、示し合わせたようにディアボロの未来を肯定する。

「……ふたり、とも……」

「その通りだ。私の心は既に決まっているのだから、今更に何を言われようとも揺るがない。……こうも、引き留めることに心動かされることも、無かったかもしれないがな、以前の私には」

「………はは、何だ、私が馬鹿みたいじゃないか。心決めた相手に、がなり立てて。急なことで熱に浮かれていたのは私だけじゃないか」
目を伏せるナズーリンの小さな頭を、再びくしゃりと撫でまわす。

「だから言っただろう、嬉しい、と」

「……ふん」

そのまま顔を逸らしたまま、その場を動かず。

「終わったかしら？」

「ああ。私からは、もう何もない」

二人のやり取りを終えた後、再び紫は語りかける。終わりへの一歩を。

「私たちからも何もないよ、既に言葉は不要。そうだろうか？」

「……少し名残惜しいけど、思い出には留めておく。だから、お兄さん

も忘れないでね?」

「見たこともない時空間能力でしたが、世界のひとつとして心得ておきます」

「ノーコメント」

「えーっと。まあ、幻想の境がもし無くなったらまた会いましょう」

紅の者達が、不要と言いつつも言葉を投げかける。

「……………君は、なんて言うんだ」

床に落ちたままの顔が、僅かに聞こえる程度に声を出す。

「何がだ?」

「……………名前。あの少年はドツピオだ。なら、今の君はなんと呼べばいい」

自分の名前、と言われてふと思い出す。そういえば、誰にも名乗っていない。ドツピオの時はともかく、誰も彼にも。既に自分を知っている者は名を呼んでいたから片隅にも置いていなかったが、それらを除けば自分の姿を知る者はいても名を知る者はいない。

顔を出すことすら禁忌とし、知る者全てを消してきた自分にとってそれが普通であった。だから、改めて聞かれる事に戸惑いを覚える。

「私はお前たちに二度と会うことはない。名を覚えることなど、無用だろう」

「違う。憶えることは……………別れる者の責務だ。君が私の事を知っているのなら、私も君の事を知らなくてはいけない」

顔は上がらないが、言葉はそれでも強い。自分の中の常識には当てはまらないが、おそらく、彼女にとつての意志であり義務なのだろう。

……………自分がこれから帰ることができる以上、自分を知る者が外の世界、元の世界に来る可能性もゼロじゃない。それなら、話すべきではない。

「……………ディアボロだ」

けれども、ディアボロは名乗った。今までに寄せられていなかった、自分もしていなかった。部下の一人は組織に必要なものだとして強く謳っていた、信頼。それに任せ、名を口にする。

「ディア、ボロ……………確か、……………悪魔、だったか」

「ああ。私を産んだ者からもらった唯一の贈り物。……名は体を表すと言ったか。それに違わぬ者となったな」

少々自嘲気味に付け加え、彼女に名を告げる。……凡そ振り返って、それは初めての行為だった。身を隠すようになってから、こと幻想に至るまで。

「そう、か。……ドツピオは見つからなかった。そう、伝えておくよ。不意に来る外来人が不意に帰ることも、珍しくはないからね」

小さな縁者が、ちうとそのまた小さい縁者と共に小さくつぶやく。

「……………それでは、私の手を取ってください。夢と現の境界へと、導いてさしあげます」

差し出された小さな手は、禍々しきさをも感じられるほど、決断すべき岐路。それほどの重みがあるとは見ただけでは想像できないが、街角のどこにでもいるような、強く握れば容易く砕けてしまいそうな幼子の手は、確かに自分の運命を決定するもの。

だからこそ躊躇なく。だからこそ力強く。存在を確かめる様にその手を握りしめる。

その瞬間、両脚は確かに地面についているが、それでも落下するような浮遊感が襲う。同時に、視界は紅魔の館から無数の何かに睨まれている、暗色に包まれた空間に変わっている。

確固たるのは自分と、目の前の少女だけ。辺りを振り返ろうとする心が僅かに芽吹くも、それを意志で押しとどめる。それをすれば、心が揺らいでしまうから。

「その通り。人生の分かれ道に『もしも』は存在致しません。この場で貴方が振り返ったのなら、私はこの手を放し永遠にこの空間の放浪者にしていただきます」

「……何も言わないで、人の悪い女だな」

「ふふ、ヒトではないので。貴方なら、そうするでしょうと思っていましたから」

笑顔を向ける紫の顔は、どこか狂気じみた、この世ならざる人外の

眼をしていた。殺しに快樂を置く者、脳を汚してでも悅樂に浸る者、他者を歪めて悅樂に浸る者。そういつた者達とはまるで違う瞳。

「……妖怪。悪魔か、化物か」

「もう、神秘的な邂逅は終わり。……ありがとう、さようなら」

徐々に声が遠くなり、繋いでいる手の確かさ以外の全てが曖昧になっていく。薄れ、今まで取り巻いていた幻想の空気が元の世界と同じ空気を漂わせていく。今までどこか当たり前になっていた、それが違うということを感じさせる。

「……本当。貴方の言うとおり、藍の言うとおり。あんなことを言いながらも貴方という人間を危惧していた。自分で幻想に招いた者が幻葬へ導いてしまうことへ。自らの責を自らで拭うことに。……無責任なの、嫌いですから」

もはや残された確かな感触もあやふやになってきたその時の、少女の独白。世界を守るために、危険因子を持ち込むことの矛盾。

伝え聞く彼女の力が言葉通りであれば一人の人間などたやすいはずなのに、それは彼女の操れない唯一の境界だろうか。

「……だ　ら、ありが　」

消えゆく、声。自分というものも曖昧になり、意識だけが柔らかい水の中で揺蕩っているかのような感覚。上下も前後もすべて不覚、ただひたすらに深く沈んでいく。

本当にこれで良かったのだろうか。

死の輪廻の果て、再び得た命をまた死の輪廻へ持ち込もうとしている。

おそらく、いやきつと、勝てないだろう。ジョルノ・ジョバアーナに。

自分の背負っているもの、奴の背負っているもの。どこまでも自分のため、どこまでも他人のため。それは、幻想郷で知り得た。人間の強さ、その限界値はそこにある。

それに気づいたといえ、ならばそこに付け入る隙はあるか？ 自分が並べるほど他人に心を回せるか？ ……どちらもノーだ。

生まれてから積み上げてきた使命が違う。出生を呪い、環境を呪い、全てを自分色に塗り替えるための奪い続けた自分。奴のそれはわからないが、あの時の虫唾が走る様などこまでも気高い瞳は受け継ぎ守るものの意志の表れ。

5日に満たない程度の滞在、それでどこまで人間が変わるか。自分は理解しただけ、何も変わりはないだろう。その程度で変われば、聖人など、自分のような存在などあるはずがない。

何故、自分はそれだというのに深みにまた墮ちようというのか――

「がぼっ、が、ごぼぶっ」

思考の波が、急に現実の身体へと引き戻される。酷く苦しくもがく要因は、周りに不快にまわりつき頭の先まで満たす水。温かくもなく冷たくもない適当な水温は、関係なく自分の身体を苛んでいた。

どこか掴まるところは、とにかく呼吸を、上へ、上へ。胃も肺も水で満ちそうなか、ひたすらにもがき続ける。

めちやくちやに動きまわしていた腕に肌を斬る衝撃、それを頼りにひたすらそれを上る。

「がぼぼ、ごぼっ、はあ、はあっ」

突然の水中と動転に相当の体力の消耗を感じつつも、何とか水面へ上がる。足りない酸素が、まだ水に浸かる身体を重く引きずる。

それを持ち上げようとするも、全く動こうとしない。両腕に力を込めても、燃料の切れた車をいくら叩いても動かないのと同じ、浮力という車があつたから進めた道も、もう進めそうにない。

「……おいつ！ 大丈夫か!? 誰か、手を貸してくれ！」

崩れ落ちそうな自分の身体を、不意に誰かが掴みあげる。

「しっかりしろよ！ 一人じゃ上げらんねえけどすぐに他の手が来る！ ……おい、こつちだこつち！ 行くぞっ！」

「「セーのっ!!」」

誰だかわからない、なのに男たちは無償で手を差し伸べた。自分を救おうと必死になっている。

……何だつていい。残りの力を振り絞って自分も上がろうとする。いくら何でも、こんなところで死にたくはない。

「……がっ、はっ！ げほっ、ごっふおっ!!」

「大丈夫か？ 水吐け、水、おい、拭く物！ 後、ゆすぐ水となんか簡単に食べそうなもん持って来い！ 息は大丈夫そうだ！」

介抱され、徐々に周りを見る余裕が生まれ始める。言っていることはわかる、ということとはここは祖国だろう。まさかここにまで言語の壁を取り払う計らいをしているとは思えない。

周りの様式も、幻想郷とはかけ離れている。よく見た、石造りの整備された下水脇。集まってたむろうとも表だつて集まらない者達がここに集う、そんな場所。

介抱した男たちが来ている者はみすぼらしい、というよりは汚れても問題ない古びた作業着のようだ。自分の身体を拭いたタオルも身体を拭くための大きい物ではなく、作業中にかいた汗など拭くための小さなもの。自分に暖を与えた上着も先ほどのそれだろう。

集まっている者達は男性、という点以外に共通点はない。作業着も制服というわけではない、誰も彼も適当に着こなしている。

「……なッ」

そこまでして、ドキリとした。自分を介抱した男の顔。いくらか年嵩は増えているものの間違いはない。

「……ん？ 俺っちの顔に何かついてるか？ あ、冷えてるだろ、俺っちの上着かけろや」

上着を差し出す彼の顔は、確かにあのとき、レクイエムの攻撃を喰らった後、かろうじて這い上がった先に自分を刺したごろつきの顔。

レクイエムを認識させた、全ての始まり。

何故その男がここに、中毒症状はどこへ？ 何故こんな活動をしている？ 他の男たちは？

「……………こは、何処だ？ 今、いつだ？」

「へ？ テイベレ川脇の排水溝だよ。いつつて……………頭でも打ったか？ 今は2012年の5月だよ。……………食えるか？」

差し出された携行食を受け取り、ゆつくりと噛み締める。共に、伝えられた状況も。確か、月日は山の上の神社で聞いた通り。まさかここで嘘を言われることはないだろう。

「……………お前たちは、何故ここに……………？ 助けてもらつて言うのも何だが、こんなところに……………おかしいだらう」

「おかしくなんかねえよ、俺つちみたいなのやつらはまだこれくらいしか仕事割り振られねえからなあ、へへへ」

みたいな、やつら。歳を重ねても下水漁り程度の仕事しかできず、けれどそれを不満に思わず遂行している。

「……………更生、か？ 薬物中毒の、社会復帰」

本来なら後ろめたい事。それを指摘しても、全くそんなことを感じさせず、変わらず浮ついた笑みを浮かべたまま男は話す。

「ああ、そうだよそうだよ。俺つちも以前は使ってたんだけどよお、今のパツショーネ、ボスがジョジョつてわかってから正反対にそういうの抱えなくなつてさ……………へへへ、最初は反発もしたけど今じゃ元ヤク中達が集まって綺麗に奉仕活動よ。へへ、俺つち達も真面目に戻れたもんだなあ」

悪意の無い、紹介。自分に与えられた施し。それらを受けられた要因は、かつて自分を粛清した者。

確かに、疑似麻薬による快感は純度の高いそれと変わらず高い昂揚感をもたらし、脳の汚染も変わらない。だが、奴の能力を持つてすれば。失ったものを作り出せるジョルノのスタンドならそれを取り扱うこともできるだろう。

10年以上も経っている。もはや自分の築いたルートも、麻薬を生み出していたマッシモも存在しないだろう。仮に生きていたとして

も、再起不能かジヨルノ側に移っているだろう。そのどちらかの可能性があるのなら、中毒者の再起も十分に考えられる。

自分が、自分の為に汚したこの街を、この国を、奴は再起させている。

「……ふ、ふ」

なんということだろうか。それほど男に、再び立ち向かおうとしている事。彼によって生かされたようなものなのに、それでも向かう考えていたこと。

普通に考えれば、なんて馬鹿なことを考えているのだと思ってしまう。支配者を争っていた時代は、すでに終わっているようだ。裏社会を浄化し、表社会に復帰させようと考えている。そんな相手に、一人過去に負けた男が再び立ち向かえるか。

「お？、お、おい！」

そんなもの、関係ない。失ったものを取り戻すことに、理由はない。落とし穴に落ちた。マイナスになった。落とし穴から上がる。ゼロに戻る。それだけ。誰しもが求めることだ。

被せられた上着を、拭いたタオルを投げ返す。一步、また一步と踏みしめる。

自分の傍に立つ者、キングクリムゾンはそのころと変わらずに立ち続ける。

……だが、あそこと違い、足りないものがある。

最後にユカリは言っていた。幻想で紡げるものは幻想の中でだけ。始まりの時、意識を取り戻し再び恐怖に落ちたその際に再び生み出したドツピオは、こちらには来れなかったのだろう。あそこで得られたものはあっても、持ち帰れるものは何もないということか。

どうでもいい。それでも、ドツピオは見ているだろう。私という存在が消え、幻想でも消え去っていたとしても。自分の思いが消えておらず、ならばそこに彼は存在する。

鎮魂歌は未だ耳に響いている。ならば、それを上書きしよう。我が子と奏でる、最初で最後の協奏曲。

「帝王はディアボロだ……依然、変わらずに」

— ここから始まる幻想曲 —

「はうう〜」

「彼、ですか？ そうですね……。弟のような存在、でしょうか」

「姐さんに男性のこと聞いても無駄ですよ。何でもどこかに弟との共通点を見つけて弟みたい、っていうんですから」

「ま、酷いこと言うわね一輪ったら。けど、ねえ……」

「ねえ、じゃないですつて。え、私？ うーん、頼りがいもないただの子どもだし、無鉄砲だし、けど何かやるつて決めたらできるできないにかかわらずやろうという意志は感じられてー」

「ほら、命蓮みたい」

「でーすーかーらー！ 話聞いている限り命蓮様は無鉄砲要素特になかったでしょ!？」

「えう〜、はうう〜」

「んえ、御本尊？ あー、なんでも心配してた相手が勝手に帰っちゃつて、顔も見せずに行っちゃったことが悲しいんですつて。自分の事が嫌いになったかー、つて。ナズーも所用で香霖堂さんに取られてるしで、ちよつと機能してないんですよ」

「やつぱりあんなこと言うんじゃないかな、私が無責任にやつちやうからこうなるんだ……いつもそうです、私つてホント馬鹿」

「寅でしょ」

「寅ですねえ」

「はう〜」

「あいつ？ 外来人の割には珍しく働き者で学習意欲の高い奴だったな。嫌な時に遭遇しちまったけど、特に気にしてくれてなかったのはポイント高い」

「……悪かったから、いい加減機嫌を直してくれないかな」

「い・や・だ・ぜ」

「……まさか君たち、そこまで仲がいいというか、飼いならされているというか」

「当たり前だ。こういう奴はちゃんと管理してやらないといつどこでくたばっているかわからないから、私みたいなしつかり者が面倒を見てやらないとな」

「しつかり、ねえ。可愛いもんだ」

「所でお前は何時まで雇われしてなきやいけないんだっけ？ 香霖は乳製品嫌いだからチーズでないだろ」

「……………彼の気が済むまで。もっと無理にでも止めればよかった……………」

「うわ、さすがの私でもそれは引くぜ、香霖……………」

「…………勝手に言っていてくれ。君たちが話を聞かないのは知っているから。そう言えば、あれの解説は満足いく結果だったかい？」

「いかにも魔法使いらしくかったが、あれは私の領域じゃなかったぜ…………全然可愛げなかった。魅魔様曰く、魔法というのはだなー」

「凡夫」

「あの、霊夢さん。今いないからってそんな言い方」

「あの時も私そう評した記憶があるけど。そうだったわよね、アリス？」

「そんなこと言ってたと思う。たぶんその後二人で泊まったことを聞きたいんじゃない？」

「たつてー、わ、二人とも急に寄ってくんない！ 別に何も無いわよ、ご飯食べて寝ただけ」

「それだけですか!? ボーイミーツガールの夜の展開はないんですか!? 本当に!」

「食いつくわね、早苗」

「だってその後私の神社に来たとき少し大人になったみたい感じがあったんでこれは確実に霊夢さんに先越されたって焦ったくらい!」

「何にもないっての! 気づいたら外で寝てたくらい」

「野外プレイ!」

「はったおすぞ!!」

「えー？ 別に、私からはそんなに接触してないからどうというわけも……しいて言えば、霊夢さんや魔理沙さんや早苗とは違うタイプだけど、覚悟決まってる奴って感じでしたねえ」

「といつかなんであんたがそんなこと聞きまわってるの？ あの子に對しては前に話して盛り上がったじゃん」

「そうなんです？ だったらなおさら私程度に聞いてもしようがないんじゃない？ 他に？ ……んーと、んーと、権より強そう」

「……………」

「どこが？ て、あー、そういえばそんな話もあつたんだっけ。私が連れてくるように頼んでただけど」

「そうですよ。権が脅しても全然怯まない奴でしたよ。権、顔が可愛いから恐くないからもあるんでしょうけど」

「……………今回はにとりもぶん殴っていいよな」

「……申し訳ないんですけど、私は特に触れてないのでわからないんですよね。咲夜さんとかパチュリー様、お嬢様ならあるいは、って感じですけど。……正式な許可取ってます？ なければ蹴り飛ばしますが」

「……で、私の所に来たの？ 魔力のカケラもないただの子どもなんかに興味はない」

「天狗って色々いますよね。やっぱり精力尽きないんですか？ やることやってるんでしょう、教えてくださいよ。ちよつと前に男に頭撫でられるだけで顔を赤らめるレズの風上にも置けないネズミが居たんでムツとしてるんです」

「うるさいよ、やるなら妹様の見えない所でやりな」

「許可キタコぶぎゅっ」

「……なんか、ごめん」

「彼、ですか？ うーん、どう評価してもただの子どもって言うだけでした。けれど、ちよつと面白い手品を持ってましたので、教わりました。やってみましようか？ はい。……ええ、使い道ないです。先の見通しを十全に整えないと誰にも干渉できないしきれないので意

味なし手品です」

「あいつ？ ああ、最も勇気があつて、最も愚かしくて、それでいて無謀。どれもいいバランスに持っていた面白い奴だったよ。どうしても弾幕ごっこに嵌っちゃうとそういうのに飢えるからね。美味しいものばかり食べてないで野菜も食べなさい、つてこと。私？ いないもん、あんな緑色」

「あ、天狗だ珍しい。え、男の子？ ……大人の人なら来たけど、子どもは来てないわ。来ていたとしても、帰れるはずないでしょう？ 他の人はいたって言ってる？ また私だけ仲間外れにされてるのかな。あなたは私の仲間になってくれる？ 天狗のお姉さん」

「逃がさないよー」

「逃げられないよー」

「あややややー、つていつも言ってるけどそれってギャグ？ 天狗特有の口癖みたいなの？ 前は聞かれたただけだったから、今度は一方的に聞きたいなー？」

……ふー、最後は酷い目に遭いましたけど何とかかなりましたよ。妹さんは手加減知らないですからね。ホント、ごっこ遊びじゃなかったらぞつとします、ぶるぶる。

で、ここまで集めたんです。私にとつてもいいネタになるんですよ、その子？ ……関係ない？ な、なんだってー。

いや、だと思いましたよ。受け入れのための根回しみたいなものでしょう？ 相変わらずやるのがそつない、というより慎重ですよね。あなたは。はたてみたいにもつと大雑把に生きていて欲しいですけれど。

ええ、ええ。嫌われてもいませんでしたし、寺の人たちとそのネズミさん以外は特別力いれて好まれている様子も特には見られませんでしたよ。あー、はたてはこう、シヨタ喰いなんで。閻魔様とは違う方向ですけど。でも特別入れ込んでるわけじゃないし大丈夫でしょう。釘刺しておきます？ いらない、はいはい。

依代は……すでにあると。アリスさんの。ほうほう、むしろそれならアリスさんの、いらない、はいはい。

……あの、ここまで用意されているのなら私別にいらなかったんじゃないですかね？ 外来人が一人増えたところ、妖怪もどきが一人増えたって別に何も面白くないんですけど。うーん、提示されたそれはありがたいんですが……

まあいいか。目を瞑っておきます。それでは、私はこれで。

「……遅くなったわね。こんな小さな入れ物に居ただけだから、つまらなかつたでしょう？ 人間の身体ではないけれど、それでもあなたが生きることに誰も問題は持たないわ。だって、そのための、幻想郷なのだから。」

あなたは外に行けないけれど、あなたが生きていけば。たとえどれだけ離れていても心が通じ合っていれば。それだけで理解しあえる。今の彼には、必要でしょう？ だから、ね」

———ようこそ、幻想郷へ。

それでももしもが存在するなら

―無意識に奏でられる即興曲 1―

森の中を歩く。ただの一言もなく。話すこともない。ディアボロとナズーリンの間には。ひたすらに進む男と、その後ろで訝しげに思いながらも懸命に続く少女。

「……」

「……」

ここを抜けた先が霧の湖、そこを経て紅魔館へとたどり着く。だが、いつ着くともわからぬ道を行くのは辟易する。

「……なんだい？」

「いや……なんだ」

何か目印になる物があればいいのだが、それを聞こうと思うと軽く振り向いたその時、異変に気付く。

先ほどから妖怪の気配はあった。しかし彼ら二人を遠巻きに見つめているだけで手を出してこようとはしていなかった。その内の一人だろうか、今までも見てきた妖怪の外見、幼い人間の女の風貌。つばの広い黒の帽子と身体を取り巻く青いコード、その終着点は同じ色の、胸に付けられた閉じた瞳。

それにしては妙な様子だ。ナズーリンの背後をこそそと歩いていく姿を、彼女は全く認知していないように見える。尻尾にぶら下がる、子ネズミも。

「……気づいていない、のか？」

もつとも、自分も先ほどまで気づかなかった。だが理解してしまえば明らかだ。興味深々と覗いているその瞳は尻尾の先に向いており、手を伸ばしてもナズーリンとその子ネズミは、全く気づいていない。

「だから、何だっけ聞いてるんだ」

「……後ろの、ネズミの事だが」

「ネズミじゃない、ダニーだ……わあっ!？」

声をかけられ振り向いた時に初めてその気配の正体に気付く。少

女は今まさにダニーと呼ばれた子ネズミの尻尾を掴んで、

「あーん」

「何やってんだあああああああああああああああああああ
!?!」

くわえようとしていた。

「えへへ、ごめんなさーい」

衝動的に手を出され、頭を抑えながらも笑みを絶やさず謝罪の言葉
を漏らす。ゆるく癖のついた髪が頭の動きと共に揺れる。

「……まあ、君の行動に対して何を言っても無駄だろうけど。おなか
でも空いているのかい、こいし」

「そういうわけじゃないんだけど、どんな味なのかなーと思って。り
ありていの追及よ」

見た目に反省した様子はなく、もし機会があればまた手を出しそう
な無邪気さを感じられる。まったく気配を感じないことには驚いた
が、そういった種類の妖怪なのだろう。認識してしまえばその存在は
明らかだ。

先に見た縁起には見かけなかったが、あれはあくまで紹介程度で全
ての妖怪が載っているわけではない、目の前の少女―古明地こいし―
も載せるほどの無い妖怪の一種なのだろう。そう決めつけ、再び歩を
進めようとしたとき。

「……あー、おにいさん、ちよつと待って!」

どん、という衝撃が自分の背後から響く。

「貴方でしょう? お隣の言ってた空から落ちてきた男の人って。探し
てたの、こんなに早く会えると思わなかった!」

恐怖を感じた。先ほど知り、気配を消す程度で害する者ではないと
決め、それでも最低限の注意は払おうと思った矢先。視界から外れ
た、それだけで少女の行動が読めなかった。

ナズーリンの近くにいたからある程度距離はある。妖怪だから当
然空も飛べるのかもしれないが、いずれにしろ動きに対する音を聞き

取れなかった。

ただ意味なく、彼女からすれば当たり前前のコミュニケーション方法かもしれない。

「ッ!!」

だがそれはディアボロを動かすに十分に足りた。大きく土を蹴って距離を離し、キングクリムゾンを出して自身も構える。抱きしめようとしたり腕は強引に振り払い、結果こいしはべたんとその場にしりもちをつく。バラのコサージュがあしらわれた帽子がその傍らに落ちた。

確かに一度死んだ。あの抱き着きのどこか一つに殺意が込められていたら、今頃自分は血を流し再び捕らわれてしまっただろう。これから成すことのための確認の前に。

「ちよつと、どうしたんだい?」

「……………いや……………」

汗が横顔を濡らす。

不思議そうに見つめるナズーリンに対して、こいしは振り払われ、地に腰付けていてもそのままにこにこと笑っている。その反応を待っていたかのように。

服に着いた土汚れを払うと、落ちた帽子も同じようにはたく。それを被りなおすと、

「お隣から話を聞いて、会ってみたいと思ったの。お姉ちゃんもきつとそう言うわ。地底の誰もがあなたみたいな人間をもてなしてくれる、面白い人なら尚更ね」

まるで焦点のあっていないような眼でこちらを見つめながら話す。ちゃんとこちらを見ているだろう。ディアボロと目を合わせているつもりだろう。だが、彼には目の前の少女がどこか、自分の先に居る何かを見ながら話しているようにしか見えない。

こいしをみて、ディアボロは改めて感じる。

この幻想郷は闇だ。

人里の人間たちは小さいコミュニケーションながらも楽しく生きている。

妖怪に襲われる可能性があっても、自分から過度に逸脱せねばそれをどうにかしてくれる退治屋がいる。巫女がいる。

それは現代の社会の小さなモデルケースだ。人間たちは生きる。法に守られ、それを遵守する者に守られ。だが、その及ばぬところではどうなろうと関与できず。

人里で、妖怪の山で、冥界で。目的は他所にあり、本気でこちらを害さないからこそ僅かずつに薄れていた。だから、馴染むにつれて考えの隅に追いやられていった。

地底は違うのだろう。

嫌われ者の妖怪たち。縁起に追記のように書かれていた情報では、かつての地獄、鬼と怨霊の住まい。冥界から降りた時に会った少女、こいしからお燐と呼ばれているであろうあの猫の妖怪。彼女のもたらすスラム街のようなその地の印象。

照らされた闇の中、その中にできる影。妖怪と人間の本当の関係。『そういう解釈で大体間違っていないぜ』

道具屋の魔法使いの言葉を思い出す。人間の恐怖の対象、権化。彼女のような者たちに庇護されているから、ある程度に自分で立ち向かえる能力を持っていたから。……それは、相手も同じなのだ。少し、気を向けなかつただけ。

「どう、来てくれる？ ついてきてくれるよね」

ほんの少しの思案をかき消すようにディアボロの手を取り今までと反対の方向、人里を越え博麗神社の方向へと駆けだそうとするこいし。彼女の中では、ついてきてくれることは決定しているのだろう。ディアボロの脚は重く動かない。心の奥底、誰もが無意識に持つ恐怖を改めて感じたのも理由の一つ、自らを試すための行軍であったことも一つ。

「こいし。悪いがきつと彼は動かないよ。私だけでなく彼に迷惑をかける前に……」

こいしの身勝手をナズーリンは止める。

「いや……行こう、その地底とやらに」

「ええっ!？」

だがそれに反し、引かれるままに歩を進める。小さな興味もあるが、それだけではない。

自分の性は結局は闇だ。どれほどの理解をしようと、その本質は変わらない。それをもう一度、思い出すべきと感じた。

今までのあり方を省みて、そして『奴』の精神を省みて。……そして、今一度自分のこれからの思い出すために。もし生きるのであれば、再び晒そう。自分は、死ににいくのではないのだから。

全ては幻想の先の為に。

自分の手にある体温は、どこか惹かれるようなぬくもりを感じ、その持ち主はついてきてくれることを当然と思い、再び笑顔を浮かべる。

―無意識に奏でられる即興曲　　2―

「いったい何を考えているんだ君は！　地底は忌み嫌われた妖怪たちの住処、幻想郷の中でもはみ出し者の集落だ！」

「違いますーっ！　ちよつと変わり者のいい人たちだらけでーす！」

「それはこいしの主観だからそう見えるだけだ！　今は少し緩くなつたとはいえ基本的には行き来は禁じられている場所だ！　思い付きでおいそれと入るわけにはいかないんだぞー！」

「けどお隣もお空も行ったたり来たりしてるし、霊夢の所に行ってるけど何にも言われてないもん」

「あの不良巫女め……！　それはあの風船巫女が何も言わないからで本当はダメなんだぞー！」

ディアボロの歩く後ろで、少女特有の甲高い声が辺りを賑わわせる。子供の言い争いなど久しく見てはいなかったが、ここまでうるさいものだっただろうか？

いつまでも続きそうなその声に一喝を入れてやりたくなる気持ちもあるが、おそらくそんなことでとどまりはせず、むしろその熱意は加速するだろう。

「君もだ！　よくもやすやすと心変わりするものだ！　スカーレット姉妹に何か見出したんじゃないのか!?　だから紅魔館に行くんじゃないのか!?　足掛かりとか仇敵を乗り越えるためのどのようなのはいったいどうした!?!」

「……」

「これから行くところは地の底の底だ、人間もいなければ君一人で抜け出せることもできない！　一体どうするつもりなんだ！」

「もー、ネズミさん、そんなに大きな声出したらみんなが起きちゃうよー」

「そんな時間かっ!!」

ふと空を見上げる。橙に染まりゆく空の色、元々の目的地への出発と到着の予想は日が暮れる少し前だった。博麗神社の近辺にあると聞いている地底への入り口、おそらくそこへの到着は月が見えるころ

だろう。夜分には妖怪も活動的になるし、神社の近辺にも傘の妖怪がいたように、こちらに害を成そうとする妖怪が現れる可能性はある。

向かうとするのなら、少し急ぐべきだろうか……？

「ねえ、そんなにゆつくりじゃあ日が暮れちゃうよ」

考えた矢先に、こいしが自分の片腕に組み付いている。

「ッ!!」

「わぁ」

条件反射に素早く振りほどいてしまう。もつとも、飛ばされた本人も傷んだり驚いたりしている様子はない。そうされるのが当然の反応と思えるような笑みを浮かべたまま倒れる。

あの夜にあった傘の妖怪より、よっほど驚かすのは上手なようだ。現に、ディアボロは少しの隙に再び心臓を跳ね上がらせているのだから。

「……黙って抱き着くのはやめろ」

「でへへ」

知ってか知らずか、その表情に反省の色は見られない。

「おにいさん、歩いたままじゃあ日が暮れちゃう。飛んでいかないの？ 人間だから飛べないの？」

「そうだよ、彼は飛べない、というか普通の人間は空を飛べないだろう。修業した退魔師とかならともかく」

「ああ。オリン……あの猫の妖怪から聞いてはいないのか？」

「しようがないな」

立ち上がり、姿勢を整えたこいしは両腕両肩をぐるぐると回す。さしずめ準備体操と言わんばかりに。

「両手を持つっちゃうと腕が抜けちゃうから、肩車でいいよね」

その屈託ない笑顔は、逆にディアボロの嫌な予感を誘う。

「……おい、まさか」

「大丈夫、私も妖怪！ おにいさん位わけないわ」

「……っつ」

意図を理解し、吹き出すのをこらえるナズーリン、対象に慌て始めるディアボロ。

『それ』を行われることは、ある意味死よりも辛いことだろう。良識があり、プライドを持つているのならなおさら。

「やめろ、急ぐ道でもない、歩きで行くッ！」

「観念しろー！」

素早く身を屈めるとヘッドスライディングの要領でディアボロの足の間へ滑り込もうとする。

彼もそれをさせるわけにはいかない。大の大人が、実年齢はともかく見た目少女に肩車をされることなど、彼のプライドが許さない。しかもそのままに空を飛ばれてしまえば、途中に通る人里でも夜中とはいえ目が向かれる可能性がある。

何としても避けたかった。その恥辱は筆舌に尽くしがたいだろう。

「く、くくくっ、か、観念したらどうだい」

ふわりとナズーリンの体が宙に浮かぶ。わざわざ歩くという非効率なことをせず、素直に飛んでいけばいいじゃあないか。そういうわんばかりに。

別に空を飛ぶことに抵抗があるわけではない。ただ、幼子に肩車されるのが、かつて帝王と呼ばれた自分の誇りを汚すことに変わりはないということと同義であること。

幻想郷、子供で溢れている世界で大人が混じって戯れることは珍しくはないかもしれないが、彼の心はそこまで染まっていなかった。

「あつ、まてー！」

だから、走り出す。醜態をさらす前に。

視界から外れたこいしの気配は、変わらず感じ取れない。走る音も、小さな衣擦れさえも。もちろん自身の走る音もあり聞き取りづらいのもあるだろうし、そもそも飛ばれてしまえばそれもより少なくなるだろう。

垣間見える『予知』の画面は、問題なく像として映っている。絵に映り込んだ像は、もはや気配とは関係ない。

しかし、今は彼女を意識しているから映し出される像から情報を取り込めているのだろう。もし彼女の存在に気づいていない状態で『予知』を見たら、果たして気づけるだろうか。必死ながらも、それを考

える冷静さは保っていた。

「痛いことするわけじゃないからー！」

「私にとっては十分に『痛い』ぞッ！ 晒しは相手を屈服させる十分な手段の一つだ！」

「ははは！ 確かにそうだ！ ドツピオなら似合ったるうに、お前では曲芸の真似事にも見えないな！」

走る。走る。走る。正直に言ってしまうえばこの状況ですら見られることは酷なのだが、それでも行き着く結果よりはましな過程だ。

おそらく、結局はどちらかの体を借りて地上から地底に向かうことになるのだろう。生身の人間、空を飛べない人間が問題なく降りれる地形ではないだろう、ナズーリンの言い分からディアボロも十分に推測できる。

人目に見えなければ、直前であれば。それならばまだ耐えられる。自分を知るものが、今は地上には多すぎる。

やはり最初から姿を隠すべきだったのかもしれない。あるいはドツピオの姿で、今からでも交代していけば。

ドツピオに説明する手間と時間、その間にあのこいしはおとなしくするだろうか。『ディアボロ』に興味を持つ彼女が、『ドツピオ』にどこまで理解を示すか。

「鬼ごっこなら負けないわ！ 私を捕まえられた人なんて誰もいなかったもの！」

「追う側のセリフか、それじゃあ本末転倒だろうがッ!!」

「最初から勝っていたから私の勝率は100%だった！」

わけのわからないことを口走りながらも追い続けてくることに変わりはない。舗装のない道を走るための装備をしていない状態と何物も影響を受けない飛行では、速度も疲労感も違うのかその差は徐々に狭まっている。こいしの手がディアボロに伸びる回数が増えている。

いつそ諦めるという選択肢がよぎるが、その度愚かな考えを捨て去る。諦観は敗者の論理だ。全てを諦め敗北という鎖に繋がれる安寧は、まさしく唾棄すべき理想。

必死の逃走は時間の流れを曖昧にし、行程の感覚を乱す。

「……おや、どうやらまんまとこいしに嵌められていたのかな」

「ハア、何、だと」

視界に広がるのは、森を抜け、道を超え。まばらに岩が目立つ空間。どこかで嗅いだことがあるような匂いが鼻につく。

「はあはあ、到着！ 地底の入り口までもうすぐよ、おにいさん」

「……ハア、そうか……で」

気づかぬほどに走っていたこと、それを示す体から噴き出る汗が火照った体を冷やそうとする。そんな汗ばんだ顔を、同じく帽子を脱いでかいた汗を袖で拭うこいしに向ける。

「……どうやって『降りる』んだ？ その地底へ」

にいーつ、と唇が横に伸びる。そのいたずら心を理解し、やはりかとディアボロは肩を下す。

同時に全身の疲労も感じられる。近場の手ごろな岩に腰を掛け、膝に肘をつけて体を落ち着かせる。

「少し休ませろ……お前たちにはなんてことないかもしれないが」

「そんなことない、私だってただ飛んでばっかじゃなかったからもうへとへと」

「……後ろから着いてくる分には何も問題なかったけどね。……私の飲みかけでよければ、飲むかい」

「わーい」

ナズーリンがポシエットから小さな水入れを取り出すと、二人のほうへとむける。それをこいしは喜んで受け取り一気に飲み込む。

「ちよ、それじゃ彼の分が」

「……いや、私は遠慮しておく」

もつとも、ディアボロからすれば先ほどの店の件があったとはいえ、人の飲みかけに口をつけようとまでは考えられなかった。

「ぷはーっ！ ……はっ、ネズミの水、ねずみずー！」

「ネズミだからって不衛生とか考えていると怒るよ」

そのことが頭をよぎったことも原因の一つではない。

「休憩おしまい！　で、おにいさん。上からがいい？　後ろからがいい？」

「何がだ」

給水を終え、いち早く立ち直ったこいしがディアボロに提案をする。

「何って、これから降りるんだから。私にしっかり掴まってないと落ちちゃうもの。私のどこから掴まっていたいの」

「こいし、なんでそんな聞き方するかね。普通に彼を背負ってあげればいいと思うよ。肩車なんかしたらどこかに頭をぶつけそうだ、君はそういうところは無意識に動くんだから」

「同感だ。少し見ただけで感じたが、とてもじゃないがお前にそんなことされて命と頭がいくつあっても足りなさそうだ。私を負ったまま自分ほどこかくぐれなさそうな隙間に気にせず入りそうだよ……というか、いや、難しいか」

改めてナズーリンのほうにも目を向けるが、彼女はこいしよりもさらに小さい。幾分か理性的には動いてくれるであろうが、大柄な自身の身体を担ぎ上げるとしたら、安定しきるかどうかも怪しい。

それに気づいたように。当然と言わんばかりに息をつきながら肩をすくめる。

「私には君を抱えるのも背負うのも無理だ。期待に沿えなくて悪いが。……そうまでして、本当に地底に行きたいのかい」

「超えるべき障害は誰にでも存在する。……それに最も近いのは紅魔館ではあったが、超えるだけではダメだ。その先も考えて——」
「んー！」

見ると、ディアボロの前には腰を下ろして背を向け、首をひねらせこちらを見るこいしの姿。ここに乘れ、というように添えられた両手の先をピコピコと動かす。

話を打ち切るように現れる彼女を見ると、語るのも馬鹿馬鹿しくなる。夢を、野望を語ろうとする男がこれから少女の背中に身体を預けようとするのだから。

その姿を想像し、僅かに震えを覚えるとディアボロは立ち上がる。

「まだ入り口ではないのだろう、歩いていく！」

「あーん」

くすくすと笑うナズーリンの声を聴きながら、その先の匂いの元へ。……知らずに足を踏み出すが、止める声もないということは間違いないのだろう。

やや速足で進むとその先を導くようにこいしが飛び、急かすように前を指す。

そこには確かに、地から煙を吐く大穴が開いていた。

「……まるで火口付近だな」

火山性のガスの匂いが辺りに充満しており、これがもつと強ければ、近くなれば昏倒を起こすことも考えられるだろう。

まさか目の前の大穴そのものに突っ込むわけではないだろう。……そんなことになればさすがに死ぬのでご免被る。

問いたださそうとしたときには、そこから少し離れた横穴の付近に二人は向っていた。

「こつちこつち」

「さすがにそこからは、私たちでもいけないよ。聖ならいけるかもしれないが」

少しの装飾と丁寧な舗装のされた入り口は、ある程度の行き来を感じさせる利便性があり、多用されているのは間違いないだろう。案内が少ないのが不満ではあるが、そもそも知ったものしか通らず興味本位で迎え入れるほどではないのかもしれない。

そこに立ち寄って中をのぞいてみれば。

「……意外と近代的だな」

長い長い縦穴と底から吹きあげる風が身体を触る。壁に沿うように螺旋に階段が設置されており、足元には動力は不明だが照らすに十分な明かりがついている。

「違う違う、こつちこつち」

「こつちはまた別の施設へつながっている。一応こいしのいう地底に繋がっていないわけじゃあないが……旧都に向かうのであれば、その隣から、だよ」

見ると、そちらにはまた別に何も手付かずな縦穴が存在している。覗き込んでみるが、先ほどのものとは違い階段も明かりも存在しない。

「……がっかりしたかな？」

「……………だいぶ、な」

一瞬でもやはりこいしに背負われるような真似がなくなるかと思っただが、どうしてそういうことはなかった。スタンドを繰り返して降りきれそうかといえば、先の見えているものならともかくいつ終わるともわからぬ暗闇の中では無理だろう。

思わずため息が漏れる。

「……………観念するよ。それに、ここからなら私を知る者の目もないだろう」

「よしよし、聞き分けいい子は好きよ」

「やめろ」

わざとらしく撫でようとこいしの手を払い、彼女の肩に首にと手をかける。

傍らではナズーリンが首からかけているペンデュラムを外し、文言とともにそれを掲げる。するとそれは見る間に光り輝き、あたりの土くれの続きを照らし出す。

「くくく、よく似合ってるよ。さ、行くなら行くといい。こいしにしつかりと掴まっているんだよ……………私は後ろから着いていくから」

「……………」

「ぎゅつとしててね、おにいさん」

「、ぐおツ!？」

心構えた矢先、こいしは『飛び込んだ』。そのまま頭を下に、自由落下するように。下向きに飛んでいるのではなく、まさしくそのまま落下していく。

昨晩に冥界から飛び降りたのとはわけが違う。あの空の上では前後の環境もあったためか、どこか人を高揚とさせる効果を持ちながらに飛び込めたがこの暗闇の穴は、自分が気付くより早く死を与えてくるような、そのような後ろ暗い焦燥感を覚える。

死の世界から生の世界へ移るからか、そして今度は生の世界から死の世界へと。あの時ほどに、安易には考えられなかった。自分という根幹を、今は別の者に委ねているから大きいだろう。

鼻歌交じりに、朝の散歩と変わらぬ気兼ねさで飛んでいる少女の細い肩と首に依っていないければそのまま離れ光のない闇の中へ消えてしまいうさだ。……思わず、その量の腕に力がこもる。

「あは、やっとしっかりつかんでくれた」

その腕を、柔らかくいとおしそうにさすろうとする腕がある。

ディアボロには、それがひどく不気味に思えた。感触、伝わる温度は確かに人の手のひらそのものだが、小さな、無数の毒蛇が量の腕をはい回るような不快感。無意識のうちに、それらは感じ取られた。思わず、肌が粟立ち身震いを起こす。

「さ、一気にいくよー!!」

知ってか知らずか、はたまた押し殺すためか。速度を上げて落下、飛翔する。重力に従った高速の移動、直下型のエンターテイメントに五感が、脳が揺さぶられる。

「おまつ、なぜスピードを上げるッ!」

「こんな真つ暗なところじゃつまらないもの。早く着きたいでしょ？」

ナズーリンの照らす明かりから逃れるように、その速度はぐいぐいと上がっていき、直下に落ちていく様についてはこいしの帽子は耐え切れず、ディアボロの顔を打って彼方に残る。

目をつぶってしまいそうな相対的な風量をあびながら、それでもこらえて暗闇に落ちるさまを眺めていると、

「、あれは、なんだ」

「もうすぐ到着でーす」

先に広がる緑の光。先ほどまで照らしていたナズーリンの蒼い明かりとは違う、どこか陰鬱とした印象を与える暗い緑の光。何も無いはずだが、それが自然であるかのように、どこからも射さぬ光の代替となつて辺りを照らし始める。

ぐんぐんと迫りくる地面を確認すると、ディアボロはこいしから手

を放す。

「あつ」

降りる速度のままにほぼ直角に曲がろうとした彼女が急な重量の減速にバランスを崩してその場にとどまろうとする。

対してディアボロはその速度のままに地面に向かう。人が死ぬには十分な速度だが、間に自分のスタンドを挟み、それをクッションとして衝撃を和らげる。

辺りを見回す。上には確かに長い竪穴が続き、見えるものはほとんどない。うすぼんやりと青い光が漂っているが、おそらくはナズーリのペンデュラムだろう。

近辺にはそれ自身が輝く植物が繁茂しているようだ。そしてそれとは別に石造りの灯籠が緑の火を灯して点々と続き、来訪者を導いている。

その先には一つの和様建築の立派な橋が見え、奥には闇の中に集いを表す光が見える。

「もう、あぶないよー!」

「……歩かなくてよさそうに見えたからな」

心配しているのか離れたことに対する怒りか、頬を膨らませながら両手を上げて感情をアピールする。……しかし、それでも彼女の瞳はどこか空をさまよっているような、こちらを見ていないように感じる。

もともとそういうものだろうか。視線を合わせていながらも、一度も通じた記憶はない。

「この先は嫌なのがいるから急いで行ったほうがいいの、だから行くなら急いで」

「嫌なの、って誰のことかしらね」

ディアボロの手を引いて行こうとするこいしの前に、一人の声があるのを止める。

よく見れば、橋の欄干にもたれるように、一人の少女が佇んでいるのが見える。

「好き好んで近づく者のいない隔世の橋、寄り付く輩にそんなことを

言われてしまうのではしようがないわね、妬ましい」

「パルスィ……」

橋の上に佇むその少女―水橋パルスィ―は目線を合わせないまま、手に持った煙草を含み、辺りの空気に散らす。

辺りに、幻想に似つかわしくない、不快ともとられそうな匂いが立ち込めていく。

「煙草やめてよって言ったじゃん……私、好きじゃない」

「あなたに何を言われようと関心はないわ。自分だけが通るとでも思っているのかしら」

「むむむ」

「地上と地下への行き来にもほとんど使われなくなった、渡る者の途絶えた橋。使うのは後ろ暗い心を持つもの位。……さて、あなたはどうなのかしらね」

彼女の口から紫煙が噴かれ、その後ディアボロのほうへ向かれる。こいしのような明るい緑の瞳が、しかし悪意と敵意に満ちた目がこちらに刺さる。

横にいる当の彼女は、今は確かにディアボロを見つめていた。

「行こう、おにいさん。パルスィに構われたらいつまで経っても進めない」

「心外ね。私は橋姫、ここを通るものを祝福する立場だっていうのに。気に入らなければ打ち倒していけばいいじゃないの、妬ましいように」

「なんだっていいもん、行こう」

彼女を振り切るように、無視するようにと強引にディアボロの手を引く。僅かに姿勢も崩れるが、すぐに持ち直し、

「お前……パルスィ、と聞いたか」

「何かしら？ ああ、別に私は今更人間が入ろうが咎めないわ。どうせすぐに帰りたいというのがオチだから」

「かも、しれないが。……その『煙草』は、地下でしか作られていないのか？」

それを聞くと、見た目の年齢相応にこりと微笑んだ。しかし、覗

き込まれているようなその瞳にはこちらも共に引き込まれるような感覚はない。

「また会うと思うわ、必ずね」

「……それは地底では流行っているのか？　あの猫も言っていたが」
「かも、しれないわ」

離している間に留まっていたことに不満なのか、引く手は強くなり、振り返るその瞳はややも不満そう……パルスイと話をすることを妬むような感情のこもった瞳をしていた。

大股に手を引くこいしの後に着いていき、その行先には人里と同じ光、月も空も見えないが確かに夜の中の眠らない光が灯っている。

……どうしてこうなったのだろうか。

目の前には鬼と称される、日本にて強大な種族と語り継がれる者。その最たる中で『力』を司るともいわれている、四天王の一角。

比較的大柄な自分よりも一回り大きなその女傑は、盃をくいと傾け中を呷りながら、今か今かとこちらを待ち続けている。

どうにかならないものか、と天を仰ぐも、そこには光も何もなかったただ土くれと岩で作られた屋根がその身を主張している。

「どうした、来ないのかい？」

鬼――星熊勇儀――は挑発するように声を上げる。周りの者たちもそれに合わせて野次を上げる。彼女の部下、慕う若者、ただの飲み客、着にする見物客。

勝ちを期待しているのか、戦いを期待しているのか、わからない。少なくとも、自分についているのは後ろで縮こまっているネズミだけ。厄介な夢遊病患者はいずこかへ消えている。

……どうしてこうなったのだろうか。

こいしに手を引かれるままに地底の都へ向かうディアボロ。閉ざされ太陽も月もない、宇宙の光源がない中でも自然の灯りが十分な光を視界に提供している。

地底の都は人間の都と建築様式はほとんど変わらないように見えるが、限られたスペースを活用するためか、目に余るほどの積み上げるような増築が目立つ。

「地獄へよおこそー！」

改めて振り返り、手をいっぱいに広げて歓迎の意を表すこいし。声の先には人里の夜と変わらない風景が広がっている。時刻はおそらく、宴の頂点。地上であるなら夜の歓待に盛り上がることだろう。そ

れはここでもあまり変わらないのか、はたまたより活発なのか。通りにはそれなりの人数が往来している。

姿こそは人間のような者が多いが、それこそ妖怪の類なのだろう。人間に角や翼など装飾をつけたような者、獣の様相を隠さないもの、完全な異形……申し訳程度に人間を残した姿が、そこから中に広がっている。

闇に輝く都の灯りは、地上のどことも知れぬ闇に溶けることなく、限りある世界を照らしだす。

「……なるほど、眠らない街、か」

「や、いー！ おにいさん」

自分の手を離さない少女は、勢いに任せるままにぐいぐいと引つ張り続ける。衰えることなく、街門のないその中へと誘うように。

感じ取れる空気は洞窟の中の冷たく、気だるい空気から生き物の熱を乗せた動きのある空気へと変わっていく。嫌が応にも光に安寧を求める者たちの空気、そしてどこかそれに刃向かうような矛盾を持ち合わせた感情たち。

「いかがかな？ 禁制の蛇を潰け込んだ上等なものだよ。飲めば並みならあつという間にコロリさ。けど、あなたなら問題ないだろう？」

「……人間？ 外の空気を感じる……」

「掘っても掘っても終わらない、だからやめられねえんだよなあ、なあそう思うだろ？」

「いい臭いだねお客さん。何を求めて？ ……血、青ざめた血だつて？」

「今日はどうする？ またあの赤河童の所にでも……」

そこかしこから聞こえる喧噪、そしてこちらを舐めるように見つめている数多の目線。人間が珍しいのか、餌が歩いてきたことへの興味か。会話、手を止めてこちらを見る者もいれば、眼だけで追う者もある。もちろん、気にしない者もいる。

妖怪の山で感じた、ただただ不快な感覚。

「みんな、おにいさんのこと見てるね」

僅かに振り返り、こいしは小さな目から視線だけを送って話しかけ

る。

「わざとじゃあないのか」

それに対しての悪態を用意した中、その言葉は発されることはなかった。

「ぐっ」

「んがっ!？」

突然衝撃が走り、視点がぐらりと歪む。全身に走る反動、たたらを踏む自らの足。壁にでもぶつかったか、しかしこいしが前に走っていたはず、そんなはずは。

歪みが戻れば、目の前には自分を上回る背丈の男たち。自分の握られていた手は今は空になっており、感じていたぬくもりはなくなっていた。

「ぐうーッ!? んげ、げげえーッ!!」

「おいっ、大丈夫かあーッ!？」

男は一人ではなかったようだ。彼の周りを囲んでいた3人がぶつかった男を取り囲む。

せき込む声には粘性の音も交じっており、それは次第に嗚咽も交じり激しくなる。

「……あいつ、どこに行った?」

周りを見回してみるが、こいしの姿はどこにも見当たらない。人ごみに紛れたか、それともそばの家屋に隠れたか? 彼女の能力を考えれば、見落とした以上、再度探すことは困難だろう。

目の前にもう一度視線を向ける。先ほどぶつかった男に周りが介抱をしているがこの集団を横切ること、こいしにならできるだろうかそれを言う理由がわからない。

「二人とも、速すぎだ! 追いつくのが……ひっ」

後ろからようやく追いついたナズーリンの声が届くが、急にそれが低く戦慄く。

ディアボロの目の前に、ぶつかったであろう男とその周りが怒りに満ちた目で見下ろしている。

「……おいてめえ、どこ見て歩いてんだコラ」

「まさか俺たち4人が見えなかったなんてことはないだろう？」

「なあ、答えてくれよ兄ちゃん、ついでに怪我したコイツ、どうすればいいと思う？」

「がうつぶ、ぶえっ」

一人一人が大木を思わせるほどの肉体、自分の力量に裏打ちされた自信、髪をかき分けるように生える揃いの角。

見たことはないが、日本のイメージ、伝承に伝わる有名な姿、縁起に乗っていた情報。今日の前にいるのは地上から消えた鬼、だろうか。

なるほど、風格はある。人間にもこれくらいの体格を持つ者もいるだろうが、ここまで威圧感を出すものもないだろう。群れているから、後ろ盾があるから、武器を隠し持っているから……そういった自身の力以外による強者の余裕ではなく、純粋な自負。

それらが4人。ぶつかった男はまだ肉の残っている串を地面に捨て口の中に残った血を吐き出し改めて前に出る。

「……お前、人間じゃあないか。しかも、博麗や霧雨とも違う、『ただの』人間。都で何をしていやがる？」

怒りの中に疑問を持ちながら、何とか拳を抑えながらといった面持ちでディアボロの顔を覗く。鼻息も荒く顔面も紅潮している。癖だろうか、左目の瞼がピクピクと痙攣している。

返答次第ではただでは済まさない。それも、正論ではなく感情を優先とさせた答えを出せ。それを、言葉なくとも雄弁と語っている。

「……ナズーリン、あの子供を見なかったか？ いなければ探してくれ」

「えっ？ ……えっ？」

「……んだとおおお？」

その中で、彼は何事もないように後ろを振り返り身体を縮こまらせているナズーリンに話しかける。彼女の目が怯えから困惑に変わり、再び焦燥へとぐるぐると変わる。

「え、今、なんて」

「おい、誰か探してんのか？ その前に探すべきがいると思うだが

なあ、ええ?」

困惑した声に被せるように男の声、共にディアボロの肩を両の手で掴みよせる。ずいと引き寄せられ、相手も顔を近づけ視界一面に男の顔が映る。

「まず一つ、これは簡単だ。お前の謝る相手だ。それは目の前にいる。二つ目、これも簡単だ。お前の理解する相手。目の前に一人、周りにもたくさーんいる。何の目的か知らねえが、分を弁えなきやあいけない。わかるよな、なあ?」

「……勘違いしているようだが」

「ああ? ……ぐっ!」

ディアボロの肩を押さえつけていた手の指のひとつが、ゆっくりとはがされ、逆関節へと折れていく。

「私は被害者であり、悪意を持って衝突したわけでもなければ不注意であったわけでもない」

「てめっ、ぎっ」

小気味のいい音共に、向きを変えた一本はぴったりと手の甲に張り付く。それが終わるとまた次の一本がゆっくりと折れていく。

痛みにゆがんだ顔のまま、意趣返しにディアボロの肩に力を入れ、肉を、骨をギシギシと潰していく。

だが、彼は怯まない。

「本来であれば謝罪はどうあれ、怪我に対して憐れむくらいはするが……そちらが来るのであるなら、こちらとしても対応せざるを得ない。何せ、『ただの』人間だからだ」

「な、なんだその力は……! てめえ、俺の指をツ!」

「降りかかる火の粉は払わねばならない、さあどうするんだ」

二本目が折れ、力の抜けた、肩に付いた手を勢いよく取り払う。目の前の男は後ずさる、先ほどぶつかつたディアボロのように。

「ページ、大丈夫か!」

「なんてことあるかッ、やってくれるじゃねえか人間ツ!!」

着物の端をちぎると、そのまま折れた二本を力づくで戻し残りの指と巻き合わせ固定する。痛みに顔をゆがめる間もなく一瞬で。

折れぬ意志を行動と瞳から感じ取れ、それに呼応するためディアボロはスタンドを構えなおす。

「普通じゃないことは認めてやる！　だが鬼に弓引いたこと、後悔するんじゃないぞ！」

大声を上げ啖呵を切るその姿に、辺りの目もいい加減に集まってくる。そこには奇異と好奇が多く、不安がる様子はどこにもない。

まるで地底の住人たちの見世物になっているようで、いい気分ではない。

「私はこいしが見つければそれでいいんだが……」

目線は外さず、それでも思わず漏れた言葉。なんてことのないつぶやきだった。

だが、確かにそれが引き金となる。

「……なに？」

「……こいし？」

「さとりの妹の……？」

「今あいつ、こいし様の名前を出したのか？」

「……まさか……」

途端に辺りの空気がざわめき始める。小さな声を拾われ、それが辺りに拡散、広大に伝播していく。

目の前の男も、驚愕の表情を浮かべたまま、もう一度こちらを探るように口を開く。

「……おまえ、なぜこいし……様、の名を知っている？　……なぜ、地底に来た？」

「その質問にわざわざ答えなくてはいけないのか？」

返事を返すも、それは待っていた答えではないからか。彼と組んでいた残りの男たちは、がやがやと声を上げるとその場を急いで立ち去る。逃げたのではないのだろう。去り際に残した男に送った目線は信頼だった。

「……こいし様が連れてきたっていうなら確かに納得だ。なんで連れてこられたのかわからないっていうなら尚更だ。……俺たちを見て何も動じないってことは……外の人間とやらか、お前は？」

「……上では大体が一つ見ただけで気づいたものだが」「こつちには人間が流れてこないからな。死体でない奴なんて初めて見る者もいると思うぜ」

……構えは変わらず、だがそれでも口は止まらない。

攻め入る姿勢のままだが、その心は受動に変わっている。去った男たちは、おそらく誰かを呼びに行ったか。それも、この事態を確実に解決できるレベルの。

一体何を恐れているのか？ こいしの行動と自分に何の関係するのか？ 気にはなる。ただ闇に身を浸すだけと考えていた地底旅行は存外面倒の塊のようだ。

今の自分に必要なのはあくまで自らの境遇を、戻った後を考えてのこと。引き返す暇があるのなら今のうちに引き返し、当初の通り、スカーレットに出向いたほうが。

「退くなよ」

機先を封じるようなその声は、対峙する男の声。

「勝手だと俺も思うよ、だがすでに、少なくとも俺程度じゃあどうしようもないんだよ。だがな、一番困るのはお前がこの地底からいなくなることだ、こいし様の意に反して。これは試練だ、あんたにとっては強制だが、乗り越えなくっちゃあならねえ、乗り越えてもらわなきゃならねえ。さもなきゃ此処ごと道連れさ」

「き、君たちはさつきから何を、こいしが何だって」

「てめえは黙ってるドブネズミがよおツツ!!」

「ひうつ」

再びやり込められた少女は置いておくとして、どうにも相手はディアボロを測ろうとしている様子だ。それも、聞き覚えのある言葉を用いて。自分の想定の外に置かれてそのまま何かを課すなど勝手の極みだ。

一番解せないのは、その内容を何も言わないこと。自分に関係のな

い場所であるなら、勝手に滅びればいい。だが、男の言葉を信じるのなら道連れに自分も滅びる。

「……私にどうしろと言いたいんだ、お前たちは？」

「簡単だよ。折れない心を見せてほしいんだよ」

再度の問いかけに、外れのほうから声がかけられる。今までと違う女の声。

男が顔を向けたのを見てからそちらに振り向けば、屋根の上に盃を携えた女が立っていた。彼らと同じ、額には一本赤い角が主張している。

こちらが女を認識したとき、盃の一口を運んでから跳躍する。込めた足の力で、脆い家屋のように崩れていった。

「ジョーンズが知らせてくれたよ、こいつが件の男かい？」

「そうです、星熊の姉御」

「わかった。……下がってな」

彼女の登場で再び辺りの空気が変わる。緊張が安心に変わり、そしてこれから起こる出来事に強く興奮することを抑えている。

もう少し見渡せば、そこかしこに頭に角を持った者がいて、現れた彼女に送る目線は畏敬を携えている。

女性の身体だからか、体格は先ほどの男たちに劣るがそれでもデアポロを上回り、角の大きさは他の者を逸している。

頭目か、それに類する地位の者。

「自己紹介をさせてもらおう。私は山の四天王の一人、星熊勇儀。そしてこれから起こる騒ぎの始まりを担うものだ」

「……」

「納得がいかないという顔をしているし、それもしようがないと思う。だが人間、少なくともお前は地霊殿に向かいそこで腐らないようにならないといけない。じゃないと、お前は死ぬだろう。こいしに取り込まれてその魂は成仏することもなく囚われ続ける。脅しじゃあないよ、鬼は嘘をつかない」

同じようなことを言う。自分の口の中だけにそれは響く。

「……ならば……お前たちは私に何を望む？」

呆れた表情を抑えられない。こいつらは全ての解決を外から来た男に委ねている。自分たちで解決しようとせず。

脅してはない、だと。死んで、魂が囚われ続けるだと。笑い話にもほどがある。

……だが、覚えがある。自分には。永遠の苦しみ、ゼロに戻され続ける魂の牢獄。

まさか、味わったことのある結果を、回避するために立ち向かうとは。

なるほど、男が試練と称したことは偶然だろうが、過去と同じ結末。過程を見せつけろと言わんばかりに。それを回避しろと言わんばかりに。

「こいしがこちらの騒ぎの真意を理解しているかどうかはわからない。だけど、きつとこう思っているだろうさ。みんながお前に注目している、とね」

再び杯を傾け、中身を減らす。

注目を浴びているのだとするならば、そこから見えぬものに『与える』必要があるのだろう。

……まるで古代の闘技場、コロッセオに立つ剣闘士の気分だ。決して、いい気分ではない。

「さあ、見せてやるといい！ 力の勇儀、それに挑む男の姿を！」

……どうしてこうなったのだろうか。

―ただ一人に送られた詠嘆曲 1―

「勇儀の攻撃を直接受けてはいけないよ」

自分の後ろに隠れたナズーリンが囁く。

「君は、茶屋の時のように何がしかの力があるのだろうけど……それでも限度はあるだろう。鬼の、特に彼女の力は格が違う。怪力乱神、説明にならないほどの力の持ち主。拳を振るった風圧でも、張り上げた声でさえもその勢いは立派な武器になりうる」

「説明」苦勞！

その声が聞こえていたのか、終わり次第に直面している勇儀が声を放つ。普通の大声としか感じられないが、顔をひっこめた後ろの様子では詳しくはわからない。

杯をいっばいに傾け全てを口に運び、力強い動作で腕を下す。空になったそれを見せつけると、その様子に気づいた外野の一人が中身を酒でなみなみと満たす。

「私としては直接殴りあってくれたほうが嬉しいがね！ だが強さとは単純な腕っぷしだけではないはずだ。かつて多くの者が私を私に教えてくれた。お前は何を見せてくれるんだい？」

「……」

注がれた中身を呷りながらも、ディアボロへの視線は外さない。

無然としていた彼の表情は変わらないままに、辺りを見回し、そしてすぐに一点に到達する。

囲む外野の傍ら、光の射さぬ地底を灯す、地に刺さった篝火。今までも変わらず赤々と燃える火が今は熱狂を映しているかのよう。

そこに近づいていき、自らのスタンドで刺さっている松明を一つ、おもむろに取り出す。傍目には、それは近づいた彼が何も使わず浮き上がらせたように映っているだろう。

「……念動力の類かな？ 霊力や魔力なんかを微塵も感じない、外の人間も変わった力を持っているものだ」

「……そうだな。お前たちの目にはそのように映るらしい。この力を知らぬものは皆そう解釈した」

浮き上がったように見えるそれは、火を勇儀に向けるとややもたつく挙動ののちに一直線へと向かっていく。

人が単純に投げたような挙動ではあるが、その速度は一般的なそれと比べ物にならないほど早く、並の肉体であれば十分すぎるほどの衝撃を与えられる。……だが、

「ほう！ なかなかの勢いだ！ だけどこんなものか？」

空いた左手でそれはたやすく弾き飛ばされ砕け散る。勇儀の周りに火の粉が、残骸が飛び散る。何ら障害にもならないことを、その身をもって知らしめた。

投げた当人も、それを特に不思議と思わない。固く、確かに突き立てられた篝火を、次はそれごと引き抜く。

少し揺られた程度では籠の中は散らばらぬほどの深さを持つ。確認すると火の先を勇儀に向け、ままに篝火ごと射出される。重量と速度が乗り、松明単体とは比ではない。

それを認識した勇儀は肺を一気に満たし、

「喝ッッ!!!!」

勇ましく踏み込んだ一步とともに、足元が、大気が激しく揺れ動く。近場の火は消え、多数は轟く声に耳を抑え、頼りの無い者は吹き飛ばされるものまでもいる。

直撃を喰らった篝火は中身を盛大にまき散らし、吹き飛ばされ、灯火はわずかに種を残すのみとなって残骸と化した。

立ち込める砂煙の中、再び勇儀は杯に口をつける。視認できないほどではないその奥、投擲と共に駆ける姿勢を確認しながら。

「そらあああっ!!」

先に踏み込めた一步を軸に、高らかに蹴り上げる。目標はその顎下、まともに受け入れれば人の形は保てない。

もちろん、ディアボロもその程度は読んでいる。予知を使うまでもなく、勇儀の右手側、杯に埋まった先へ身体をずらして回避を試みる。

轟音。

自分のほんの僅か隣で死を呼ぶ柱が通り過ぎる。暴走した自動車が自分へ突っ込み、ギリギリで当たらなかったような、圧倒的な速度

と質量。そして遅れてくる風が大地に広がる砂を、残骸の木くずを、散らばる火種を巻き上げる。舞い上がるそれらが身体に衝突することも確かなダメージとなって積み重なる。

だが、確かな未来はこの直後。杯を高く持ち上げ自らの身体の捻じれによる不利を省みず、鬼の左手は固く握られている。

「わ、わっ……ちよ、大丈夫か、あっ!!」

声の一撃で姿勢が崩れ、煙の中勇儀に向かった彼を満足に見届けられず、持ち直した先に見えたのは回避した先で、勇儀の拳を今にも喰らいそうな姿。ナズーリンは思わず目を覆う。どのようなものであれ、死の姿は見たくない。彼が何か力を持っていることはわかるが、それが及ぶものとは思えていない。鬼とは、それほどの格なのだ。なぜ真つ向から、と思いつつもながらも僅かに目を開け指の隙間から先を見る。

「……へえ、やるじゃないか」

「……」

その目に映ったのは、姿勢はわずかに崩れながらも、袂れ陥没した地面の淵に立つディアボロ、崩れしやがみ込み、埋まった手を抜く勇儀。

左手には強く殴打された痕が見られる。

「鬼の肌に傷をつけるとは。ただの念動力じゃあないね。……というか、そもそもの前提が違うのかな?」

「さて、どうだろうか」

声と共に立ち上がり、近い距離のまま。どちらも、構えらしき構えは取らず、勇儀は腰に手を当てたまま、ディアボロはただ立ち尽くし。「さあ、次は何を見せてくれるのかな?」

「悪いが」

互いが少し手を伸ばせば届く間合い、勇儀は相手を見据えながらも、人間だからと見下げた視点は持たなかった。そのつもりであった。

それでいて、次の手合いには何をしでかしてくれるか楽しみにして

いた。それは、鬼の持つささやかな慢心。

「これ以上はない」

ばしやり、と水のかかる音がする。他所から聞こえる音ではない、周りはそれ以上の喧騒に包まれているから。

酒精の香りが鼻につく。誰かが興奮でこちらに酒をまき散らしたか。否、勝負中の、地位のある自分に対してそのような真似をする間抜けはいない。

目の前の男が、消えた。……がらん、と自分の足元に、星熊杯が落ちる。

「……あ？」

全員が認識に時間を要した。僅かな静寂はディアボロが地を踏みしめる音と共に、勇儀の口から発せられる呆けた言葉で分かたれる。

「……あいつ、一瞬で」

「誰か、見えたか？ ……いや、それよりも」

「星熊様が、杯を落とした」

「……なんで、どうなっている」

「それよりも、あの男、背を向けたぞ」

「姐さんとの戦いを、背中を向けて……」

事態を認識するにつれて、中心の二人を囲むように声上がり始める。

「戦いの最中に背を向けるのかッ！」

「恐れたかッ、臆したかあ!!」

「戦いを諦めたつもりかッ!!」

「こつちを向け！」

どれもが戦いを放棄したように見えるディアボロへの侮蔑。臆病者への非難。矮小者への罵詈。

だがそれはとある事実へ目を背けているだけのこと。それは鬼にとっての屈辱、他の者では何ものも感じないはずの感情。

勇儀の顔が赤く、赤くなっていく。酔うはずのない鬼の、しかしまるで酒に酔ったような朱色。

「おまえ」

「こいし、どこだ!!!」

声を張り上げる。後ろに広がる声と光景を無視して。

「鬼は下した」

地が響き、空気が揺れる。声にならぬ叫びが辺りを振動する。勇儀の物言わぬ屈辱感が辺りを支配する。誰も何も言えなかった、ディアポロ以外は。

鬼の怒りが大気を震わせる、彼女の震えるほど握りしめられた右手と共に。

「鬼よ。初めから試すようなことなどせず、真つ向に挑むんだつたな。だから足元を掬われる……この場合、手元かな」

「……」

「いつから気づいたか、とでも聞きたそうだな。……よほどの愚鈍でなければ、最初から気づく。鬼は嘘を吐かない、と記述されていたが。どうやらそれは言わずとも心に定めていればその通りらしいな」

一度も振り返らず、目も合わせずに地底の奥へと足を運ぶ。

行為全てが勇儀を、周りを逆上させるに十分なプライドへの冒瀆。だが、その手が彼に伸びることはない。もし回りが伸ばしてしまえばそれは他ならぬ勇儀への侮辱となるし、勇儀自身も自らの精神に反することになる。

「……なるほど、奇術使いか、はたまた詐欺師か。そういう可能性、頭から抜けていたよ。そんな奴でも、正面から叩き潰す。それが私というものだからな……」

「知らんな」

「ツ!!、また会おうな、人間。次に闘りあう時はその首を抜いて舌を引きちぎって殺してやる、必ずだ!!!」

酒で濡れ怒りで震える指先で、その背中を指し示す。去りゆくディアポロには、もはや届いていなかった。

「待て、待ってっば」

「……まだついてくるのか」

やや離れて、その後を討とうとする者が来ないかを確認していると、来たのはナズーリンただ一人。

「当り前だ。何をしたのかわかっているのかい？ ……少しでも君が生きていけるように手伝っているんだよ、私は」

おそらくあの場から息を潜め、急いでこちらまで駆け付けたのだろう。少々息は荒いが顔は少し青白さが残っている。

「さっきの戦いで君は完全に鬼たちを敵に回した。勇儀の前だからこそ、彼女の顔を立てるために手を出す者がいなかったけどもし君が目のない場所に言ったらそのまま殺され」

「だろうな」

「……わかつているつもりなのか？ 死にたい、とでもいうのか？」

顔色を、真意を伺うように顔を覗きこんでくる。逆に見返せば、そこには心配と疑いの色。

「健闘の勝利でも敗北による撤退でもその後は変わらないだろう。あの子供のいうことならば注目を集められればそれでよかった。何より、あの女のことより前の男の言っていたことのほうが気にはなる。……私に、何をさせる気なのか」

「……まあ、確かに。はつきり言って異常だ、あの反応は。話に聞いた程度とはいえ、私の知っている地底ではないみたいだよ」

そういうと、顔を下に向け思案するナズーリン。耳をゆらゆら揺らしながら呟くように、

「元々こいしは……古明地こいしは覚えられていることが珍しい妖怪だ。無意識を操り、無意識に支配されたあの子は他の者の目に映っても意識外に映る。だから認識できない、記憶に残らない。私のように余所から教えられたとかなら別だがね」

「その割には全員が知っているように見えたが」

「だから妙なんだと言っているんだ。……あの姉がわざわざ知らせた？　こいしの事をわざわざ、全員に？　要の人物だけじゃなく……地底は何を隠している……？　そもそも、何が起るといふんだ……」

「……それを、確かめる必要もあるな。私としても投げ出す気にはなれん。後ろからいつまでも見つめ続けられるのはまっぴらだ」

辺りを見回す。先ほどの喧騒が嘘のように静まり、こちらを陰ながら伺う視線が増えてきた。先ほどの現場から引き揚げ、自分たちを追っているか。

そんなものは関係ない。それより、あの子供を視界に収めること。……できるかは、不安だが。

「……地霊殿は、もうすぐだ。それほどかからないと思う。あそこに近ければ近いほど目もなくなるよ。……さとり、こいしの姉について、何か知っているかい？」

「いや……何も知らない」

「……さとり、名前と一緒にだけど種族としてのサトリ。人の、心を読む妖怪だ。こちらの思っていること、考えをすべて読みとることができる。話し合いの舞台が違う、誰からも好かれな妖怪だよ。余程の変わり者じゃない限り、好意的には受け入れられない。相手もそれをわかっているのか、誰とも相手をしない」

「なるほど……気に入らない能力だ」

つい、と先を指さす。辺りから家を灯す光が消えた先、僅かな熱気を感じられるその方向には様式と規模の違う屋敷が経っている。洋装の館は地底の天井が見えないようにその高さを測れない。

ここに至るまでに人の姿は垣間見えたものの、こいしの姿は見当たらなかった。

いつに現れるか、いずれに出てくるだろうか？　そう思った矢先に、

「おにーさんっ！」

後ろから声をかけられる。振り返るとそこには飾られた包みを持った彼女の姿。

振り返るディアボロの姿を不思議そうに見て、釣られて振り向くナ

ズーリンは、ややあつてこいしを認識したようだ。

「現れたね……厄介者」

「すごかったね、おにーさん。みんながあなたを見てたわ。あんなにみんなが夢中になることなんてここではなかった、おにーさんの注目度は最高ね!」

二人や、他の者たちと違い熱に浮かされ頬を染めながら興奮を露わにする。両の腕をパタパタと振りながら自身の感情を伝えている。

「きつとお姉ちゃんもおにーさんのことを好きになる。地霊殿のみんなもおにーさんのこと好きになってくれる、きつと!」

今まで以上に笑顔を浮かべ、ディアボロの腕をとりながら先を指す。ナズーリンと同じ方向、地霊殿。

……その先にまた一人影が見える。

「呼ばれてじゃじゃーん、あたいにじゃじゃーん、とお。……おやあ?」

こちらからは遠くてしつかりは見えていないが、身を乗り出す姿と見覚えのある手押し車。

「おやおやあ! 空から落ちてきたお兄さんじゃあないか。昨日はあんなこと言ってたのに来るだなんて、いやあ好きものだねお兄さんも」

がらがらと音を立て、目を細めて笑顔を浮かべている。火車の少女

——火焰猫燐——はのんきな顔のままこちらへ近づく。

「それにおいしそうな仲間もいたもので……隅に置けないねお兄さんも」

「べ、別に、そういう関係じゃないぞ! それにおいしそうってなんだおいしそうって、私のことをなんだと思っっているんだ」

「ネズミでしょ」

「いやまあ、そうだけど」

ニコニコと調子の良い上辺を繕いながら近づいてくる。その様子は腕にまとわりつくこいしとほとんど変わらない。

「まあネズミさんはいいのさ。地底までの道案内ありがとう、かな?」

「……私は、こいしとやらからここまで誘われたのだが」

「えっ」

そのものの名前を出すと、先程までの笑みは消え、引きつり青ざめた顔を浮かべる。

「こいし、さまに」

「お前も、何かを知っているようだな」

隠すことも忘れていいのか、それとも先程の者たちのようにそこまですで予想外であったのか。

「やつほー、お隣」

「へにゃ！ こいし様もそちらにいらしたんで!? いやあ、いつものことだけどあたしや気づきませんで」

あはは、と隠すように笑みを張り付けその感情を隠す。だが、動物の習性が隠せないか、しつぽをだらりと垂らし足元に巻き付けている。確か、恐怖と怯えの印。

「みんなが好きになってくれるおにーさんが来てくれたの！ お姉ちゃんもきつと好きになってくれると思うの。お隣もそう思うよね」「ええ、ええ。あたいもそう思いますよ。さとり様にも紹介しましょ」「でしょ！ 私、先にお姉ちゃんに言ってくるね」

自身の感情を覆い隠し、ただただ主の意見に賛成している様はかつて見たことある光景。答えに機嫌の良くなつたこいしは入口へ向かって先に駆け出す。

その場に残された三人。隣は大きいため息をついて、

「こいし様は目をつけられていただなんて……そんなつもりじゃあなかつたんだけど……」

「何か、知っているようだな」

「ひえー！ あたいが呼び水になつたわけじゃあないと思う、けど……こいし様だから、わかんない。……申し訳ないけど」

仮面が外れ、ディアボロに対する恐怖とこいしに対する畏怖が浮かぶ。

「お兄さんの事助けてあげたいけど……あたいはペットだから。さとり様と、こいし様のペットだから。言う事は、聞かないといけない。ただ……」

服の裾をいじりながら、いっぱい言葉を選んでいるのだろう。自分の心を裏切らないように。

「なにか、追い詰められそうになったら橋姫に頼るといい。あたいもよく知らないけど……さとり様が地底で唯一関係を持っている相手だ、きつと何か関係しているから」

「……………そう、か。わかったよ」

地霊殿に足向けながらディアボロは話す。

「お前たちがどれほど、自分勝手に他人を顧みないかを。……自分の身は、自分で守る」

「え、ちよつと、お兄さん、そんなつもりじゃ！」

「……………いや、今の話し方じゃあ誰だってそう思うよ、火車の猫」

「なんでさー！」

抗議の声を上げながら地霊殿に至る門をくぐる。蝶番も錆び、長く動かされた形跡が見当たらない。

扉を開いて中に誘われる。動物の匂いが鼻につき、逆に人間の生活間の匂いが感じられない。

「さとり様ー！ お客様ですよー！」

大声を出して帰りの挨拶。周りにわらわらと先ほどの存在を示した動物たちが寄ってくる。犬、猫、鳥、爬虫類……

そんな中、エントランスの奥からぺたぺたと、人間らしい足音。

「ありがとう、お隣。……客人、ですか」

外見はよく似ている。短いながらも癖のある毛、胸を中心に全身に伸びるコードと赤く開かれた瞳。こいしと全体的に対照的な色合いが目立つ。

地霊殿の主——古明地さとり——が姿を現す。寝ぼけたような瞳を向けながら、しかし胸に付いた瞳は、じつとこちらを凝視していた。

―ただ一人に送られた詠嘆曲 2―

半分に開かれた人間の瞳と、確かな意思を感じ取れる動きを持つて見つめてくる胸の瞳。

何者かを見定めようと、必死に目を凝らしている。初めて会うものすべてを疑うように。

「そりやそうですよ。顔見知りの訪問者でさえ、年単位で片手で数えられるほどしか此処には来ません。施設に用がある人たちでさえ、担当のペットの元へ皆流れていきます。……お寺の人ならともかくそれを知らないあなた、私は非常に興味を持ちます」

周りの動物たちも釣られたように、こちらをじつくりと見つめている。だが、それらの視線も目の前の妖怪の視線と比べれば細いものだ。

自分の心の内側をえぐり、知られたくない記憶でさえも掘り起こしてしまいそうなの。

「……そこまでは読めませんよ。私は心を読むだけで眠る記憶まで読むことはできません。手順を踏めば別ですけど。……どうやら、私のことを話には聞いているようですね。ようこそ、地霊殿へ」

一瞥し終えたのか、目を閉じ顔を背ける……胸の瞳はまだこちらを見つめている。

「お燐、あなたは下がりがりなさい。彼らの対応は私でやります」

「にや、さ、さとり様、あたいは」

「お燐」

ぴしやりと言葉で締めると、燐は首をうなだれその場を下がろうとする。

「お兄さんとかいしと私を会わせてはいけない、面倒事が起こる……ですか。でしょうね。ですがお燐、これは私とかいしの問題です。あなたたちペットには関係ない」

「え、でも！ それならあたいたい達だって」

「ペットも家族のようなもの、だとは言いましたが家族ではありません。あなたたちとかいしでは圧倒的に序列が違うのです。……下が

りなさいお燐。あなたにはあとで罰を与える」

冷徹な言葉は、確かに心に響いたのだろう。再び伏せた頭を上げることなく、去っていく姿にはわずかに涙が浮かんでいた。

「……会ったのは初めてだが、予想以上に厳しい主人だな、さとり」
「当り前です。あなたたちの関係とは違います。主従と、愛玩物の違いです。……あなたも愛玩のようなものじゃあないですか？ 違いますか、すみませんね、侮辱してしまつて」

顔を合わせても、目を合わせることはなく。言葉を交わすのもほんの僅か。なのに自分の考えは伝わっており相手の心はわからない。

「それが『覚』というものです。……立ち話もなんですね。客間へ案内します、どうぞこちらへ」

そう言つて彼女は奥へと下がっていく。周りの動物たちはディアポロたちを興味深そうに見つめるもの、さとりを追つて奥に下がっていくもの、どちらも興味なくその場に留まるもの……それぞれの反応を返す。

「……実際に対峙すると気味が悪いなあ。……でも、行くんだろう」

「ああ」

追従しないわけがない。しなくていいならそれに越したことはないが、それは何も解決しない。彼女からは何も聞けていないし、彼女はそれを知つてなお此方へ誘つているのだ。

歩を進める。そこかしこに動物のいた名残が存在していてやはり人が使っている館、というような気配は感じられない。動物たちそれぞれが悠然と過ごしていることで、生き物の気配には事欠かさないのが乗じて廃墟の空虚を感じさせる。

足元を照らすステンドグラスの模様はその上に立ってみれば、光源自体は床のほうからであり壁には何もあらず。厚いグラスに刻まれた模様の底、目も眩むほどの熱が漂っている様。

その先を、後ろを付いて来ていることを確認して振り返る地底の主。来ないのか、来ないでよいのか。言葉なくともそう尋ねている。

「……」

「……君が入らないなら私から入るよ」

「どうぞ」

客間の入り口から中を見通しているとその後ろからナズーリンが先に入る。中では主自ら、あらかじめ用意してあったのか、ポットでお茶を用意している。

「警戒する気もわからないではありませんが、こいし当人ならともかく、私は初対面です。歓待の気持ちはあれど襲う気持ちはありませんよ……座って、どうぞ」

たどたどしい不慣れな手つきでさとり、ナズーリン、ディアボロの3つのセットを卓上に用意する。そしてそのまま席に着き、手を差し出して座るように促す。

「……君が着かないのなら、私は着くよ」

ナズーリンは席に着いた。だが、ディアボロはそのまま扉を背にして着こうとしない。単純に、相手を窺い知れないし、攻め入る相手に歓待されているという心情が納得を得ていない。

「ただくよ、と一声を置いてナズーリンは注がれたお茶を一口飲む。僅かに鼻に届く香りは、どうやらそれは紅茶らしい。」

「……口に合わないようですね。日本茶はあまりうちでは飲まないのです。あなたもどうですか？ ……毒なんて、入ってませんか」

「……構わん。それよりも」

「こいしの事ですか。そうですね、それは残念。……さて、何から話したものでしょうか」

そう言いつつ、さとりはディアボロへ視線を投げかける。陰湿な、穿つような目線は快活だがどこか虚ろなこいしとはまた違う不気味さがある。

「なぜこいしがあなたを狙うか、こいしがあなたに何をするか……ですか。そうですね、その前に軽くですが、こいしがなぜ覚の異端となったか説明しましょうか」

「読みたくない心を読まないよう、閉ざしている、閉ざしてしまつた……と私は聞いているけれど」

口をつけた紅茶に砂糖壺から3杯ほど入れ、ミルクをかき混ぜながらにナズーリンが後に続く。その言葉をうなずいて肯定し、

「その通り、あの子は見たくないものを見ないために、覚としての全てを捨てた。それは妖怪としての自己否定、覚の中の面汚し。もつといろいろやり方もあったでしょうけど、あの子は最も簡単で最も染めてはいけない方法を取ってしまった。……心を読めない覚なぞ、何のため存在しているのやら」

淡々と、起きた事実だけを書類を読むように話す。だが、それは聞いてて耳に良い話ではない。一番近くの、しかめた顔を浮かべた相手に、

「まあ、そう怒らないでください。あなただって、例えば主である虎の方、突然全ての信仰を投げ捨て、野生としての誇りも忘れ、飼いならされた猫のようになってしまったら。それも一番身近な私、いえあなたに何も言う事もなく。……そう、怒りが湧いてくると思います。不信でもいい。そこからさまざまな事象を思い浮かべる」

さとりには言葉にも、表情にも熱がこもっていない。おそらく、その裏切りはディアボロが生を受ける以前の、人間の尺度でいえばしばらく以前、それこそ感慨に至る程度に過去の事なのだろう。

目の前でころころと、一点を中心に変わる表情と違い、椅子に座ることもなく慥然とした表情のままに聞いていた。

「そうして、こいしは心を閉ざし、私は今はあの子を憂い心配している。だけど、その心配はこいしに届かない。……伝わらない恋心のよう。おしまいです。……いかがですか」

「それで？」

此方の反応を伺うように話を途切らせ、実際に見つめてくる。だが、話の要点には全く触れても、至つてもいない。

そして、返事に対していかにも合点のいくように、うれしそうな笑みをさとりは浮かべる。

「ふふ。こいしは閉じた心で、しかしそれでもどこかに縋る心を持っている。きっと私が一番迷惑を被ったとどこか記憶に残しているのでしょう。姉に頼りきりだった自分が、他に依る人を見つけたと話したいんでしょう。……以前にもありました。基準はわかりませんが……どこか、何か。引き寄せるものを持つ者に惹かれます。そして、

私に話そうとする。……まるで、つがいを紹介するかのようね」
「つがっ、ええ……」

心底驚き、そして信じられないものを見るような眼でナズーリンが振り返る。

「そんな顔しないであげてください。基準はあの子の基準ですから、私もよくはわかってませんし、私もあの子の言葉を思って推測しているだけです。まあ、ナズーリンさんがあなたを快く思っていないのはよくわかりますがね」

「私がそいつにどう思われているかなんかどうでもいい。……ここに至るまでに、そのような節は思い当たる。それで、奴は何をする？」

外の者が恐れていた、あの鬼の長も言及していた。ただそれだけならば、何も起こらないだろう」

本当の理由。ただ付きまとうだけならば、それほどの恐怖は抱かれない。

「ええ。もともと、あの子からすれば何かしているわけではないのですが……」

「……」

「早くしろ、ですか。すみませんね、悪い癖です。過去の事例からの想像ですが」

「想像……？ どういうことだい」

「……先ほど言った通り過去の出来事、こいしは以前も同じことをしてかしました。しかし、その時の記憶は私にはないのです。私だけでなく、他の者にも」

表情と心に疑問が浮かぶことを待っているかのように、一拍置いて二人の表情を見比べながら、さとりは続ける。

「あの子は無意識を操ることができる。だけど、それを他の者に使うとは思わない。……思えない。それは、あの子が他者に使おうという意識がないから。それが平常です」

「……それが先程の話とどうつながるんだ？ さとり、さつきからこちらの反応を伺うような話し方ばかりだね」

「くく、すみませんね。覚とはそういう性分なのです。……単純です」

よ。あの子のはつきりと思いを告げる。きっと、それだけなのでしよう。だからこそ、おかしくなる。無意識に支配されたあの子が、唯一『意識する』。自分のことを理解してほしいと、自分のことを受け入れてほしいと。……そこに、無意識の引き金があることを知らずに、ね」

「引き金？」

2杯目のミルクを入れながら、ナズーリンは口を挟む。

「あの子は寄り添い方を知らない。忘れてしまった。相手の傍に立とうとするのではなく、相手を傍に置こうとする。自分が思いを伝えれば、必ず相手が歩み寄ってくれると信じている。そう思って、取ってくれると思って手を出したのでしょうかね」

話し続けの彼女は、そこで自らの入れたお茶をすすする。

「……おいしくないですねこれ」

「……続きは？」

「ごめんなさい。……あの子が自分を知ってほしいと思ったとき、あの子の力は発動する。意識して『無意識を操る』時、その歯止めをあの子は知らない。……わかる？ その意味が」

ナズーリンの一瞬呆けた顔がすぐに引き締まるのを、頭越しにでもわかる。

「ご明察です。無意識の伝播をあの子は理解できないし、それを止めようとも思わない。あの子の眼には相手の心しか映っていないのだから。周りのことなど映っていない。あの子は視野が狭いから。……相手が無意識に自分を愛するよう願ったとき。結果、無意識のパンデミックはコミュニケーションの機能不全をもたらす。表層の意識が抑えられ、無意識の行動が止められなくなる。封じられた心が解き放たれ抑圧された思いをはじき出す。

……これが、こいしがあなたにすることで起きること、です。あの子がすることは、おそらく自分の心を伝えるだけ、です。覚の最も苦手とする、ね。……私でさえも例外ではない」

カチャカチャと砂糖壺から4杯5杯とカップに沈めながら、さとりは結論を話した。わなわなと、ナズーリンが震えている。

彼女の心を読み取ったのか、首をかしげさぞ不思議そうな顔を浮かべた。

「無責任、でしょうか？ それは違います」

「どこが違うというんだ！ 君のやっていることは大勢に危害を加えることを傍観してるに過ぎないっ！ 君がつ、こい、……くっ」

「こいしを抑えておけば……物騒な。口には出さないほうがいいですよ、そのようなことは。幽閉なんて、あまりにも残酷です。それに……」

くすくすと嫌らしい笑みを浮かべる、その言葉を待つていたかのよう。唇の端を歪め半開きの目と、ぎよろり、と音が聞こえるほど胸の瞳を開きながら、

「妹の幸せを願わぬ姉が、いるでしょうか」

空間を震わせる、振動と衝撃音。彼女の卓上のカップが跳ね上がり、遅れて高い音が辺りに響く。

「……当人の付随のくせに、あなたが激昂してどうするのですか」

「っ、おまえは……っ!!」

「前の奴、どうなったんだ。殺された、でいいのか」

「ええ、その通り。経緯はわかりませんが、気づいた時にはゴミとまとめられており、こいしはいつもと変わらず何も知らない様子で。……彼、悪い人ですね」

感情を抑えきれないナズーリンに変わり口を開く。単なる確認、しかし重要な項の一つ。さどりの顔は後ろに立つ者、ディアボロへ向く。対峙している彼女と変わって、彼は表情も変えずそのまま聞いている。

「こいしの止め方、簡単ですよ。……あの子の恋心を止めればいい。もちろん………いいですよ、殺しても」

「なっ」

その言葉を聞き、ナズーリンは振り返る。怒りと、驚愕、信じられないものを見た、という顔を浮かべている。もつとも、ディアボロも予想は着いていた。

「周りに悪意を知らずに振りまき、その飼い主は止めようとせず。

もつともそれを被るのであるのならばまず最初に、排除が浮かぶ。当然だと思うが？」

「だ、だからと言って！」

「くく、くつくつ、私も当然だと、思います。現に過去にあの子がやらかした時も、その意見が大勢でしたよ……星熊童子がその場を抑えてくれましたけど」

笑みを抑えきれず声を漏らしながら、さとりは言葉を紡ぐ。ナズーリンの心を揺さぶるように。ディアボロの提案を肯定する。それが正しいように。

その二人の、突飛な想像に間に立つ彼女の顔はひくついて歪む。

「何もおかしいことではありません。底知れぬ悪意の媒介者、殺すことも普通。どうにかして殺さず何とかしたいと思うことも普通。そのどちらに立つか……そちらは、前者だったこと。彼が善人であればそんなこと考えもしなかったでしょう。ですが、彼の心の声はずつと、自らにかかる危機の排除しかなかった」

それに、と一度言葉を止め、再びさとりは続ける。

「彼からは私の能力を不気味とは思えど否定する声は聞かれなかった……手中にあればとも思っていた。……悪い人です、面白い人ですよ。覚はそのような人間がいるから食いつばぐれない……」

くつくつと抑えながら笑い、またカップに一口つける。

「……あつま」

まるで気の入っていない、今まで一本調子だったさとりの声。確認のためだけ、動揺することなく口を開いたディアボロ。ただ一人、ナズーリンだけが振り上げた手を下すこともできずに立ち尽くしていた。

「それで……どうしますか？ こいしが現れるまで、ここに滞在しますか？ ここは広いですから、過ごす部屋はいくらでもあります。もちろん、ペットの部屋じゃあないですよ」

「……こいしはもうここにいるんじゃないのか？ さつき、地霊殿に向かったはずだったんだが」

ナズーリンが自分が落としたカップを拾いながら、疑問を投げかける。まだ言葉の端々にとげは残ったままだが。

「……ええ。ですがここで見えない者を探すのも大変でしょうから。話に聞いていますが上の吸血鬼の館と遜色ないくらいには広いですよ、ここも」

「そうか……君は、どうするんだ？」

ディアボロに振り返るその顔は、やはりこちらにも思うところがあるのだろう。さとりにへと向けられたとげは同じく残っている。

「……その女の言う通り、奴を探し出すのは容易いことではない。ただ何もせず待つ、というわけではないが……どうせ、お前は殺さないよう、私を見張るつもりだろう。……こいしの部屋は、どこにある」

「……わかりました、案内をつけます」

そういつて手を叩くと、黒い小さな猫が入口から顔を覗かせる。「お燐とは別の猫です。黒い猫、だけならうちにはまだまだいますが、人型になれる2尾はあの子だけですよ」

「……また猫かあ」

小さく声を上げると、手と尻尾で器用に扉の外を指す。ついて来い、と言っているかのように。

「……」

「……行こうか。……さとりに、君を見ていると聖の思想、到達への長い道を改めて感じるよ」

「お褒めの言葉、どうもありがとうございます。あのような方がいるからこそ、私たちは繁栄し続ける。つまはじき者は、互いに傷を舐めあうことを良しとし、手を取られることを拒むのですから」

その場を後にする者に、最後の言葉が投げかけられる。背中で受け取った二人は、しかし互いも変わらず表情だった。

二人とも顔を合わせることなく、長い廊下を歩いていく。動物たちの息遣いと、僅かに聞こえる足音が、二人の足に合わせて響く音を裝飾している。

「……本当に、殺すつもりかい？」

正面、猫のしっぽを見ながらナズーリンは隣のディアボロに尋ねる。

「必要ならな」

端的に、それに返答する。

彼女はもう理解できる。短い間で、かつ会話はあの喫茶だけでだが、それでも彼は殺すといえ、殺すだろう。

やや考えを巡らせた小さな手は、ポシエットにあった水入れを取り彼に向ける。

「……何も飲んでいないだろう。さとりたちを信用しないのであるならば、私くらいは信じてくれ。君が殺しをしてほしくはないが、君に死んでほしくもない」

それは彼女の固い芯の一つなのだろう。そして、間に立ち入ることもできないことを理解してだろう。

元来の容量も少なく、さらに飲みかけだ。乾いた体を完全に癒すには程遠い量。

「……」

何も言わず受け取り、飲み干す。このような形で人から貰い受ける、こと躍進を始めてからなかったかもしれない。

飲み終えたそれを返すと、彼女は何も言わずに受け取った。

なう、と目の前の黒猫が鳴き声を発する。扉が二つ開いており、中は小さな寝室。

「……私はここで待っている。君は自由にすればいいさ」

言い放つ彼女はこちらに目もくれず部屋の中へ入っていく。落ちた肩は、何も追いつけていないことに対して苛立っているのかもしれない。

みい、と再び猫の鳴き声。前足をくいくいとさらに先へと伸ばしている。

歩みを進めようとしたその時、

「彼は殺しに行く。彼女は殺すかもしれない。私はどちらに付けばいいか、わからない。1000年経っても、それはわからない」

頭に声が響く。耳からの声ではない。まるで、精神に直接響くような。

「聖なら、ご主人なら、すぐに答えを見つけないことができるだろうか。……私は未熟だ。彼に考えさせることもできない。……彼の、名前も知らない」

先ほど分かれたはずのナズーリンの声。だが、振り返ってもとうに扉は閉じ切っている。

わざわざ扉越しに？ 理由がつかない。何より、聞こえる声に説明がつけられない。これは、ディアボロに語り掛けているのではなく、まるで自分に語り掛けている様。

「私に何ができるだろうか？ 私は監視者、傍観者だ。……何も、できはしない。このまま、全てを忘れて眠りたい。祈ることしかできない自分を、さらに追い詰めるように」

まさか、と思い部屋前に駆ける。ノブを破壊するかの如く、勢いに任せて押し開く。

「これ、は……!?!」

すぐそばの壁にもたれかかり、虚ろな目のままに床に伸びるナズーリン。そして、そのすぐ上に立つはおぼろげな、色合いの薄いささくれた、それも同じナズーリン。

存在感の類似は、まさしく自分の傍ら、スタンドに近い。

ぶつぶつとうわごとを呟いているのは、おぼろげな方。今の立ち入りでかなりの音が発せられたが、まるでそれが聞こえていなかったように何も反応を示さない。

……そして裏に足音とまた新たな人の気配。動物ではなく、人。

「……恋物語のような恋がしたい」

存在を理解できる。まるで、自分から誇示しているかのよう。姿は見えなくとも、その声でどこにいるのか理解できる。

「気持ちを伝えるには、まず相手の目を見て話さなきゃ。応援してね、

帽子さん」

廊下の先、倒れた猫の奥。果てに見えるその姿……整容したか、少し小ぎれいになった衣装に変わった、古明地こいし当人。

―ただ一人に送られた詠嘆曲 3―

不思議な空間だ。

足元の転がっている猫には、その近くによろよると歩き始める同じ姿のささくれた猫。

傍らには、被っている帽子をいじくりながら、少し顔を伏せて自信づけるためか床面に話し続ける少女。

……そして、それを警戒している自分自身。

もはや姿を隠すには背を向けて逃げるか袋小路の部屋の中へ逃げるのみ。

「自分の心に負けてはダメ。アイを伝えるには相手に伝わるまで押しつけて押しつけてあげなきゃ」

よしっ、と最後に締めくくりながら、こいしは改めて顔を上げディアポロと目を合わせようとする。

踏み出すのは、彼女が顔を上げきる前。

「お、うふうっ」

眼前に広がった顔は確かに淡い恋心を抱き、秘めた思いを相手に伝えようとする、小さな少女の顔だった。意志がありありと感じ取れ、見る者ならば頬を緩めてしまいそうな花があった。

だがそんなものはディアポロにとっては関係なく、むしろ好機ですらあり、ゆえにその一撃は確かなものになった。

キングクリムゾンの一撃はその花を一瞬で散らし、一瞬開いた小さな唇からは詰められていた空気が唾液と共に飛び散る。勢いは彼女を応援してくれる……らしい帽子と整えた衣装を崩し汚す。

「あっ……くぁ、げ……」

腹部に加えられた衝撃は体をくの字に折り曲げそのままじめじめに倒れ伏させる。とき、とゆつくりと降下した帽子が床とこすれて小さな音を立てた。

目の前に転がる小さな頭。ディアポロはそれを踏みつける。道の真ん中に転がる小石をどかすように、何も感情が込められていない。

「やめろ」

地べたに縛り付けられたこいしに対して、刃物を突き付けるように言葉をかける。

「お前は私に特別な感情を抱いているようだが……私はお前ごときに何も抱かない。恋愛対象とも、庇護対象とも。噂を聞き、きつかけがあつたからここに来たが、それはお前のちっぽけな欲を満たすためではない」

言葉の一つ一つを発するごとに、強く踏みこむ。足元からは骨のきしむ音と力を入れるたびに隙間から漏れる呻くようなつぶやき。

「諦めるんだな。実らぬものに手を伸ばし続けることなど無駄なことだ」

最後の一言と共に、その幼い小石を力強く蹴り捨てる。尋常であれば首の骨が折れてもおかしくない程度には力を込めたが、妖怪である彼女には問題はないだろう、とディアボロは考えていた。彼にとつては、死んでくれてもかまわなかつた。

廊下を転がるその軌跡には点々と血が飛び、踏みつけていた箇所には漏れ出る、には多すぎる血の跡がついている。

そんな、壁に転がりついたこいしの襟首を掴み上げ、無理矢理に立ち上がらせる。同じ高さに揃えられた頭部は、先程まで告白を思っていた少女の顔ではない。

小さな鼻はひしゃげ何本か折れた口の中、蹴り入れられた左頬は青く醜く崩れている。開いてるか開いてないのかわからない瞼の奥は、まだ混乱が見えた。

どうしてこんなことするの。どうしてこんなことするの。わたしはなにもしていない。わたしはあなたをおもっていたのに。

そんな声が聞こえるようだった。

「……力を解除しろ。面倒をわけさせるな」

鉄の匂いが鼻を衝く。人に似せた姿は血の匂いまで似るものなのか、ディアボロからすればみてくれだけでは幻想郷の妖怪と人間の差が分からない。わかっているのは人間での致命傷に至る負傷でも、十分に生きていること。以前の戦いがそれを記憶している。今のこいしの状態も、人間であれば意識混濁しているだろうが妖怪ならそうで

はないだろう。

だから問うた。十分に注意はしていた。そのつもりだった。

「……おにいさん、私の能力を知っているの？」

顔の色が入れ替わった。先程までの不安と苦悶の顔ではなく、好奇心を得た顔に。紅に塗れたそれは変わらず、それでも笑みを浮かべている。

「うれしいなあ、私のことを知ってくれて。うれしいなあ。……でも、どこで知ったの？」

顔周りと違い傷のついてない手が一つ二つと首元の、ディアボロの手と重なる。固く骨ばった自分の手と違い、先まで整えられた華奢さと未成熟な肉感。

「私のことを知っている人はいないの。誰も私のことを知らない。……ううん、違う。一人知っている。なんで、おにいさんが知ってるの」

それらが根付いている元の袖から一つ、二つ、三つ四つと青色の管が伸び、主の手と同じく彼の手を包み込もうとする。それは、違いなく彼女の閉じた瞳と同じ色に染まっている。

「またお姉ちゃんね、またお姉ちゃんが余計なことをしてくれたのね、また、私の事なんて何もわかって

穏やかさをも湛えた笑みを浮かべていた瞳は徐々に暗く淀み、何かを呪詛のようにぶつぶつと口走り、縋るように組み付いていた手と管は握りしめるように力を籠め始める。いや、籠め始めていた。

その拘束が完全となる前に、地霊殿は崩れだす。それは、ディアボロだけの感じうる感覚。時間を飛ばしている間、自分だけの世界。その中では、あらゆるものが自分を縛らない。

掴んでいた手を放し、纏っている管から手を引き抜く。縛られた枷を失ったこいし当人は緩やかに未来への軌道を描いて落ちていく。数秒もすれば再び床に転がり、対峙している相手がどういうものなのかを理解するだろう。

理解は一瞬でいい。今まで曖昧にしていた彼女の未来を、ディアボロは先ほどの行為で決定させた。

血の繋がりとはいわゆる本来尊いものであり、それを害するものは私刑を持ち出してでも償わせられるほど重いものだ。……その感情を、ディアボロは理解はしても持つていなかったが。

故に、さとりが『殺してもいい』と言つてはいたがすぐには実行していなかった。実際の亡骸を見て意志を変えるものなど、腐るほどに見てきた。

だが、こいしは彼の領域にやすやすと踏み込んできた。
だから、殺す。

ゆつくりとこいしの側面に回り込みながら、キングクリムゾンの拳を握りこむ。刻み始めた時、頭蓋を砕いたらさすがに妖怪でも死ぬだろう。脳をすり潰せば思考の元は絶たれるはずだ。

「……………何ッ!？」

相手の頭を注視していなかったら気づかなかったかもしれない。ただの思い込みからの錯覚かもしれない。

しかし、それはディアボロにとつても初めての現象であり、この極限で見過ごすわけにはいかない事実。もし、同じく時間に干渉する能力者がいれば立ち会えたかもしれない。

自分だけの絶対の空間。その常識が崩れ去る。偶然に向いただけ、などと曖昧な答えに縋りつけるほど愚物ではない。

僅かに、しかし確かに引き下がる。相對していればなんてことないと思つていた相手に、半歩、引き下がらせられる。その姿も、確かに追っている。

一瞬の瞬きも許さなまま、崩れた世界は元の形に戻る。べちゃり、と支えを失つたこいしの身体は床に落ちる。その体は、此方と視線を合わせようと不自然に捻じれている。

確かに、目が動いていた。自分だけの世界の中、認識の外にあるはずの眼が自分を追い、刻み始めたその時、首が、身体が自身を追つて

いた。

「……おにいさん、どこ行つてたの？ どうして、こいしを見てくれないの？」

ゆつくりと起き上がりながら、それでも顔はこちらを見つめ続けたまま……汚れた顔を袖で擦り少しでも綺麗であろうとする姿はいじましい。

しかし、それ以上に得体の知れない恐怖がディアボロを包み込んでいく。

こちらを認識していることは確かだ。この場で吐いた適当な空言だとしても、それを事実として受け止めなければならぬ。

キングクリムゾンの世界の中、彼女はどこまで動けるのか？ 敢えてただ見ていただけか、こちらを弄する罠か。下がって状況を確実にしたくも、地の利は自分ではなくあちらにある。館の中も、外も。

……今までの動向だけで考えるならば、こいしは感情的で短絡だ。翻られた直後だとて、恋の相手が自身を知っていることだけで高揚した。まだ、知りえることの少ないうちに潰すべき、か。

逡巡しつつも、意志を固めるために足を一步、踏み出す。

踏み出そうとする。ずずり、僅かな音が振動と共に靴裏から通じる。

「……、」

固めるための前進のはず。だが現実には僅かな後退を選択していた。自分の意志と裏腹の行動をとる身体に異変を感じる。

痛めつけたぼろぼろの顔の少女に対峙して、殺して進むと定めて、そのために踏み出したはずが、その足はわずかに下がっている。

共に自覚する、湧き上げようとしたはずの気概を包み込むように、本能の警鐘が鳴り響く。こいつは危険だ、こいつは相手にするべきではない、と。

「!?、ば、かなッ」

手のひらは小刻みに震え、足先は冷え、じつとりと肌が汗ばんでくる。

確かに未知の恐怖はあったが、それでもここまで心を縛る相手では

ない、はず。けれども、確かに蝕んでいる。

一步踏み出そうとすればきゆうときつく、離れようとするばやさしく解かれる。生殺与奪を握られ、相手の気分を損なえば自分が失われる。まるで、支配されているようだった。これから殺す相手に！

「……あー、おにいさん、私の事、とても強く思ってくれてるのね。わかるわ、心が読めなくなつて！ おにいさんと私はアイし合っているんだから!!」

両の手を広げ蕩けた笑顔を浮かべ歓喜の感情を表に出す。興奮し染まった頬は流れ出る血と裏腹に紅い。

無意識を操る程度の能力。自身を律していたとしてもそれを軽く上書きする。だが、一つ認識を違っていた。相手が持つ無意識を自在に操るわけではない。相手が持たない感情を無理矢理に表へ揺り動かすものではない。……こいしがそう思っている、実際にはそうではない。相手の、無意識を固着しているだけ。

「この私が、恐怖しているだトツ……!?」

諸手を上げてあははあははと壊れた笑い袋のような声を上げ続ける。その笑い声と共に袖から彼女の手を覆い隠さんばかりの青く長い生きている管。

僅かな人間味をも覆い隠し、より恐怖を撫で震わせる異形と化そうとしている。

元々そんなもので怖気づくような精神は持っていない。……だが、目の前の少女を認識し、理解をしようとするほど心が拒む。

「こいつの能力、コカキ爺と同じタイプかツ!!!」

脳裏に浮かぶのはあの老獪。畏怖と信頼に値する老兵。彼自身の歴史と経験もさながら、人生観と共に構築されたスタンド能力も比類して絶大。

彼の前で何かの感覚がよぎれば、それを固着させられる。『足を踏み外した』なら永遠に踏み外し続け、『勝てない』と感じたらもはや勝つ意志はなくなる。ほんの一瞬、それだけでいい。

固着させる方法がコカキにはあつたが、こいしにはそれが無い。あつたとしても、それは気づけなかつた。

……そしていま、笑みを浮かべる少女を前にして、心が退路を求めている。彼の能力では解除の方法はなかった。ならば、こいしならどうであろうか。

つまるところ、選択は逃走だ。機を得るため、一時に退く。

「あつ」

反転、ともに時を飛ばし離脱。崩れ去る世界の中、振り返りこいしを見る。

少々あつげにとられた顔をしているが、それでも確かにこちらを追いつけている。体に動きはないが、やはり認識していることに間違いはないだろう。これも、無意識の産物だろうか。ディアボロを、無意識に感じ取っているのだろうか。

時が飛んでいる間、決して時間の流れが変わっているわけではない。認識のないうちに行動できることで相手の意の裏を搔くことができる、それを予知し対応する。それこそがキングクリムゾンの神髄。認識はできても対応できないのか？ それともあえてしていないだけなのか？ それを調べる必要がある。前者ならまだしも、後者であるならば……一度、相手の意識外に逃れる必要がある。

先ほどまで歩いてきた廊下を逆走する。不本意ながらも追われる者となってしまうた身では、それほどではなかった距離も長く長く感じられる。

駆ける、館の中。名も種別もわからぬ動物たちがそこらそこらで倒れている。……おそらく、ただ眠っているだけではないのだろう。

「……さとり様は言っていた。さとり様に命を受けた。……忘れなさい、お隣に会って聞けば忘れない……」

大柄で、ぼさぼさした長髪の女が、虚ろな瞳で歩いている。ごてごてと人工の異物を装備しながら隠そうともしていない鳥の羽、おそろく隣と同じタイプの妖怪なのだろう。彼女の向かう先は自分たちのいた方角、ディアボロの行く先に寸分違わぬ、ささくれた同じ姿がぶつぶつとつぶやいていた。

あそこにいた者だけでなく、やはり広範囲に巻き散らしている、と

いう事だろう。個々がどういいう行動原理を持つかはわからない。抑えられた無意識、表層ではなく深層に秘めた渴望？　今の女は、抑えられていた者はその程度だという事だろうか？

考えを振り切るかの如く走る。今はまだ、後ろから気配はない。今のこいしは、感じ取れる。それがなぜかはわからないが、とにかく今までと違い近くにいれば存在を理解できる。目や耳を使わなくとも、その気配を感じ取れる。他の者と同じように。何を意味するかは分からないが、ともかく都合だった。退く分にも、転じることができた時にも。

突如、破碎音が聞こえる。それは記憶を頼りに、地霊殿の入り口にまで走ってきた時の事だった。

すわ先回りされたか、調度品に身を隠し様子を伺うと、エントランヌは様々な者たちで溢れかえっていた。男、女、人型、動物型、異形。まさしく外で見た者たち。

暴力という強引な開錠方法で乗り込んだ彼らは皆一様にはつきりとしな目線のまま、各々が手に持った得物、あるいは無手で破壊活動を続ける。者によつてはそこにペットであろう動物がいようが、共に乗り込んだ者がいようが構いもしない。何かを求め、その障害物を気の赴くままに除去しているよう。意図のはつきりとしな暴力は、それだけで眩暈のするような恐怖の光景だ。

だが、ディアボロには何の関係もない。群衆の中にこいしの気配を感じられないのならば、たとえ彼らが此処の住人に対して何か思うことがあつても知らぬ世界の話だ。

彼らの間を縫うように抜けて、それでも道を塞ぐならば自らの力でこじ開ける。元々飾られていたきらびやかな装飾品と同じように、砕けた頭からは血と脳が床を汚した。受け止めた当人も、周りも何も気に留めず、破壊活動を繰り返し続ける。

「……………やはり、か……………!!」

外に出た最初に口から発せられた言葉。

地霊殿の外は燐に案内をされた時とは全く別の世界のように思えるほど荒れ、それを行ったであろう者たちの残骸が辺りに散らばって

いる。その中を大型の獣たちが、小型の動物たちが、欲の赴くままに漁っている。

古明地に想いのある者たちが集い、襲われることに意を介さず、周りの獣たちもそれを止めるわけではなく、腹が空いたから食うように、襲い続けたのだろう。

先の市街でも変わらなかった。地霊殿の周りに特別多い獣が人型に変わっただけだ。人はモノを漁り、男が女を漁り、女が男を漁り。ただひたすらに喰らい、汚れることも構わずに唯々尽きぬ飢えを満たすために動く者たち。そして一様に、その目の色は変わらない。

「腹が減った、腹が減った」「血が流れたい、血を流したい、血に流したい」「いつも貪られるんだ、貪りたいんだ」「ああ、柔らかい、温かい……」

「あつあつあつあつあつあああああ」「暗いんだ、明かりがいるんだ、ここはずっと暗いんだよ」「俺だけこうなのは、全部あいつらが悪いんだ、だからあいつらがこうなっちまえばいいんだ」「肉、肉がいい、こんな筋張ったものじゃあなく」「かね、かねかね、足りない、もつともつと」「世に平穩のあらんことを」「小さいのもいいなあ、大きいのももつといいなあ」「例大祭落ちた」「鬼どもも、覚も、神でもスキマでもなんだっていい、みんななくなっちまえ」

「殴りたい、殴りたい殴りたいなぐなぐぐぐ」「許してくれ、許してくれ、ああ、醜い獣たちがまた……」「みんな認めようとしねえ、兄より優れた弟がいるはずない」「俺は不屈、不屈なんだ」「血晶石を求めよ、狩りを全うするために」「俺のでよがってるんだ、俺のでよくしてるんだ、へへへえへええへ」「何がわかる、何がわかる」「聞こえないの、何も聞こえないの、聞かせてよお」「飯だ、赤い紅い朱い赫い飯だ」「酒、飲まずにはいられない」「私にだつてやればできる、やつてみれば簡単なんだ」「コマドリ、私は飛べるのよ、飛べるのよ、飛べ」「矮小なんだ、卑屈なんだ、だから穴に潜ってたいんだ」「一人じゃ何もできねえ、4人で一つなんだ」「のっかりてー、のっかりてえー」「見ないで、ぼくを見ないで」「沈めたいなあ、沈めたいなあ、血の池地獄に溺れるなあ」

市街に向かつて走り続ける中、ぼんやりと立ち尽くすささくれた外見の者たち。その様々から奥底の欲求が聞こえてくる。自分に言い聞かせるように、周りに言いふらすように。きつと、肉体はその欲望を満たすために勝手に動き回っているのだろう。

火柱が上がり、窮屈に積み上げられていた建物が倒壊する。眠らない街の明かりが、ただむやみに増えていく。

逃げる、離れる、距離を置く。……いつかはその果てにたどり着けるだろうか？ ……それから、どうやって？

答えの見えない逃避に、徐々に芯が潰されていく感覚。だが追いつかれれば終わりという答えからくる焦燥。強大な力を持つ者と対峙したときの底から湧き出る恐怖。

「おにいさん」

頭に声が響く。直下に流れる電気信号は辺りを警戒し、目と耳を最大まで酷使し、浮かび上がる像は安心を求め。

……まだ見えていない。何も見えない。

「おにいさん」

それは先ほどよりも小さく、囁くように、けれど確実に脳内から響いてくる。甘えるような囁き声は、それでも姿が見えず慌てる自分を嗤っているかのようだ。

「おにいさん」

ずっと滴り続ける雨音のように、その声は止まらない。予知に映る像にも、辺りの騒ぎからもこいしの気配は感じ取れない。

……もしも、先程まで感じ取れていた気配は、今に思わせるための撒餌ではないか？ 近くにいないから、そう思わせておいて、

「おにいさん」

「う、あああああああああああああああつっ!!!」

絶叫し、有らん限りの力を振り絞って身体を動かす。周りとは違い、何かに色を染めた表情を浮かべているのはディアボロただ一人。

もはや、向かう場所すら曖昧に、それでも何かに縋るため、駆けた。

—21世紀の精神異常者—

「くそっ、やっぱりこうなっちゃうかねえ！」

悪態を吐きながら、迫りくる暴力、大の男に匹敵する巨大なだんびらを振りかざした鬼の身体に、それを上回る力で返す。

何も表情を浮かべないその男の顔は苦しさを感じているかもわからない。

正面から来るそれをいなせば、また背後から大物を持った男が襲ってくる。

一瞥、力強く後ろ周りに蹴り飛ばせば、また苦しさを吹き出しもせずそのまま砲弾のように吹き飛び、辺りを巻き添えにする。

鬨の音に、炎に飛び込む蛾のように、能面のような顔の者たちが集まってくる。

「私ら鬼ならこれくらいで構わないんだけど……」

今の状態、基本的に地底の妖怪の大部分を占めている鬼たちにとってはあまり変わらない。勇儀の支配下の者たちなら特に。

彼らは足るを知っており、一番の欲求である人と関わる事が今はもうできないことも知っている。だからこそ、地底に居を移しそこで楽園を築いている。

皆、本能的な享楽と自らに成し得る強さへの求道に心を置いている。

故に、今の無意識に支配された地底の空間、首領たる勇儀に力比べを挑まんとする者が後を絶たない。

それ自体には、勇儀も嬉しく思っている。彼女とて常に共に歩む者を求めている。自らに並ぶ者を待っている。いつもは尻込みしているような奴が立ち向かってくるその姿に、ケツを叩かなければ立ち上がってこなかったその姿にこみ上げてくるものがないわけではない。

だが、地底に潜む者はそれだけではない。

「!!、やめ……ときなあっ!!」

また一人、向かう者を引きずり倒し、『それ』に向けてぶん投げる。倒れ伏した同胞に群がる矮小な者たちは、それらを避けようとせずそ

のまま巻き込まれて消えていく。

強者である鬼たちを疎み、しかし群れても立ち向かう事すらできないことを知っており、だから身を寄せ合い傷を舐め合い続ける弱者もいる。

彼らは皆必ず口を揃えるのだ。『あいつらがいなければ俺たちの思うがままなのに』。

そんな彼らを迎え入れようとしても、低姿勢におべっかを使いながら、それでも心の中では舌を出して近づこうともしない。鬼の目には彼らは皆共感に値しない屑どもだ。

しかし、今は別。鬼たちがそんな屑どもを排除しなかったのは、本当に集まり立ち上がれば自分たちに匹敵することを知っているから。弱い者達でも集まり、知恵を集め、立ち向かえば自分たちを下せることを知っているから。

……奴らがまた、死体漁りに襲ってくる。今ならできると。疎んでいる奴らを消してやりたいと思ったその時、すでに行動は終わっている。抑えられていた無意識に、身体を動かされている。

だからと言ってむぎむぎ喰われる訳にも食わせる訳にもいかない。手に届く範囲でなら、それらを蹴散らそうとは努力する。

むなしかな、広い広い地底では、いくら勇儀の大きな身体でも、小さすぎた。

「あつ、お前……こんのおおおお!!」

乱暴ながらも同胞を守ろうとする勇儀を嘲笑うように、また一人と鬼が喰われていく。周りはそれを止めようとしなない。周りの目には、自分の無意識の果てしか見えていないからだ。きつと、己が喰われても思いの先を優先するだろう。

地底を浸す無意識の水を、持ち前の矜持と精神で勇儀は抗っていた。だが、それでも完全ではない。組み合い、競い合い、高め合いたい。同じ歩幅を求めるが故の力比べは、籠めようとしなない力の限りをその両腕に注ぎ込まれていく。

だからこそ手加減ができない、抑えられない。向かう者向かう者すべてに全力で迎撃する。頭でわかっている、自分に負ける者が喰わ

れていく様をみても、どこか心で思ってしまう。無意識の内、弱者は喰われて当然だと。

意識して抑えようとしても、止めどなくあふれ出てくる。歪な容器に蓋をしても、漏れ出る意識が抑えきれない。そして、半端に理解できるこの現状、勇儀は勇儀自身に腹が立つ。

崩れた家屋の材木をそのままに振るわれ、それを片手で受け止める。間髪入れずに他方面からも巨大な丸太のような腕が振るわれ、それも空いた手で受け止める。闘いは、最初から星熊杯を携えていなかった。

「あーもうっ!! 一体いつになったら終わるんだっ!!」

全く無遠慮に打ち込まれた双撃をそれをも上回る、瞬間的に腕が膨れ上がるほどの怪力が、相対者へ振るわれる。互いに違う回転を籠められ、その間に存在する全てをも巻き込んでいく。

前回起きた時も、勇儀には結局待つことしかできなかった。こいしが自身のほうに向くことはなく、また靡いた相手もおそらくはなすがままにされたのだろう。

今回もそうなってしまふのだろうか。もしそれより長かろうと短かろうと、興奮に滾る脳が流れを曖昧にする。終わるまでは長く感じ、終われば短く感じられる。きつとそうなるだろう。

諦観すらも持ちながら、ただただ目の前の対処に勤しんでいたその時、

「禁じる」

遠くから聞こえた小さな声は、しかし確かなものであり、その一言がきつかけに辺りの者たちが感情の無い顔から一変、喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、様々な表情を浮かべた後そのまま倒れ伏す。

声の主は、自分の身の丈ほどの鉄棒とその先に付く白い丸板に赤でマルと斜線が描かれた奇妙な得物を地面に突き立てながら、

「そのまま黙って寝ている、目覚めを禁じる!」

辺りの喧騒に消え入りそうでも、凜とした力強さを感じる掛け声は、そのまま力場の行使となり鎮めていく。

「……勇儀以外は、な」

ウインクをしながら最後に付けたし、勇儀に笑みを投げかける。対する勇儀も少なからず濡れた自らの血と汗を拭きながら。

「……助かったよ。正直、最初に死んでいるかと思っていた」

同じく笑みを返す。冗談めいた口調で、だが彼女との間柄を知る者なら心配と安堵が含まれているのがわかるだろう。

「失礼な奴だな、助けてやる必要なんてなかったかね」

「いや、それについてはありがたいと思っっているさ。だけど、私の知っているお前なら自尽を選んでいても不思議じゃあない」

「ふざけろ」

少女が近づくと勇儀に対して拳を向ける。彼女と違い女性として大柄な勇儀には低い位置だが、それでも優しく、互いに拳をぶつけあう。

「放っておこうとも思っただけど、あまりに一方通行過ぎてね。私の領域にまで侵すのなら容赦はしない。……認めたくないけど、勇儀には借りがあるからね。これでチャラってところかな」

得物を肩に担ぎながら少女は事も無げに語る。だが、その視界の先はまだまだ阿鼻叫喚の絵図が続いている。

勇儀は傍らに転がる酒瓶を拾い上げ、地べたに座る。口をつけて傾けていくが、上を向いても中身は零れ落ちてこない。

ちえ、とぼやきながら投げ捨てる。今の彼女に、先程までの衝動を抑えられない様子はなかった。

「……私にはちよーつとアレを止めるのは無理かなあ。受け止めるのは得意だけど攻めに行くのはー、ねえ。気質に合わない」

「いや、いいさ。ここまでやってくれれば十分。私が抑える」

すぐに立ち上がり、そこかしこボロボロになった衣服を払っていく。

「さつきまで飲まれかけてたザマなのに、全くあんたみたいな奴らはどいつもこいつも真っすぐ押し入ってくる。全く気に入らないね」

「おー？ どの口が言うんだそれはー！」

「私が不利益を被るから利用させてもらっただけさ。……私みたいに、この狂気を抑えられる奴、いんの？」

あくまで前向きな勇儀に、少女は不安げに言葉をかける。

「……いる、と思う。私だつてここ全部を知るわけじゃあないから確
実には言えん」

「ふーん……」

「でも、だからと言つて立ち止まるわけにはいかない。番を張つてい
る以上はね」

ぱん、勇儀の手のひらに拳を合わせる音が響く。その瞳には変わら
ずの強い意志が宿り、地底に似つかわしくない光も携えていた。

赤色の少女は呆れたような顔をしながら、振り返り来た道へと戻
る。

「いいさ、好きにすれば。私の元へは一方通行、あんたの戻る道にはな
りやしない。けれど引き返すという選択肢を選ばない愚直さこそ、あ
んたらしいつてもものさ」

言葉を受けて足を踏み出す。少し離ればまた勇儀を狙う者が現
れ、また少女を介さぬ暴徒に見えるだろう。

けれど、自分の担う重さを知っているから、勇儀の足は止まらない。

ああ。

あああ。

絶え間なく身体が震える。

絶え間なく鼓膜が心を揺さぶる。

絶え間なく視界が頭を刺激する。

いつ来るかわからない恐怖が、常に首元にまとわりついている。

急に後ろから現れるかもしれない。その瓦礫の陰から現れるかも
しれない。突然上から降ってくるかもしれない。

あらゆる可能性が脳裏をよぎり、その都度何も見えていないあの瞳
が、自分だけを見つめてくる。

ディアボロは走り続けながら尚も恐怖に身を支配されていた。すでに体力の限界も見え、それでも足を緩めればすぐに追いつかれてしまう、たとえその存在を感じ取れなくてもそんな妄想に襲われてしまふほどに。

何があつても足を止めてはいけない、とにかく距離を置かなければ。……そう思い、ただひたすらに走り続けてきた。

「おにいーさんっ」

絶えず聞こえていた声が、此度は事実には鼓膜を揺らす。……もつとも、ディアボロには幻聴と真実に区別がつかなかった。

かかる声に更に精神を侵され脚の力を増そうとするが、それは何かに阻まれる。

「ひ、う、ああああ」

そのまま前に倒れてしまい、自らの足を縛る何かに気づき、それを縛る静脈のように青い管に気づき、そしてその先へ目を飛ばして気づいてしまう。

「恋愛小説のような恋がしたいの」

こいしの顔にはまだディアボロのつけた傷が痛ましく残っている。だが、満面の笑みを浮かべている顔からは、そんなものを気にしている様子は見当たらない。むしろ、刻印を喜んでいるような素振りさえも感じられる。

彼女の左腕から伸びるそれらはゆっくりとディアボロの四肢を絡めとる。彼も僅かながらに身を振じらせ抵抗するがそんなもの気にならないというように、絡まるそれは止まらない。

「たまに聞くの。男の人が女の子に暴力を振るうのは好きだからって。本当は離したくないけど、男の人は不器用だから言葉じゃなくて身体で答えちゃうって。一緒だね、私たち」

残された自由の右手で、こいしは自らの上着のボタンを一つ外す。顔から垂れた血が、未成熟な彼女の幼く白い肌をより強調させる。

「もう与えられるだけの子供じゃないの。自分で選んで、自分で進む。私だって覚。お姉ちゃんのお庇護なんて、いらない」

ずるずるとずり落ちる衣服、隠されていた肌には幼さとは相反する

古い傷跡がいくつもいくつも刻まれている。……先にディアボロが刻んだそれよりも多数。斬られた傷、焼かれた傷、穿たれた傷。

小さな桜が見え隠れするほどにはだけでも歯牙にかける様子もなく、拘束するディアボロに跨りその顔に覆いかぶさる。

「物語では男の人からするのが多かつたけど……私みたいなのだったら、逆でもいいでしょ?」

何をする気なのだろう。恐怖の象徴が自分にすり寄り、生の全てを司る自らの頭部にその手を這わせる。

「よ、るな」

自分の顔に刃物を添えるように手を添える。相手の生の温かさが今は自らの優劣を物語っているに過ぎない。

「っ」

ゆっくりとそのまま顔を近づけてくる。細められた目は最後まで自分の抵抗を殺すように見つめてくる。

脳の限界を振り切り、理性が彼方に飛ぶその寸前、

「とうるるるるるるるるるるるん!!!」

「えっ?」

けたたましいコール音が、馬鹿みたいに鳴り響く。悲鳴のように有らん限りに振り絞られたそれは、一瞬目の前の異物を少女に戻した。

変声の終えた喉から振動する空気は、馬鹿馬鹿しいほど本気であり、故に先までの空気を完全に払拭させた。

こいしとは別に、発した当人は雷に打たれたように冷静さを取り戻す。先ほどまで濃霧に包まれていた頭が、視界が一瞬で晴れる。

「時よッ!!!」

問題の無い行使、問題の無い発動。完全に縛られていた鎖は、世界を形どる事で解放を知ることができた。

左手から伸びる雁字搦めの楔も、この世界では意味はない。

だが、まだそれだけだ。今は呆けたあの表情も、わずかな時間だけ、

すぐにこちらに向くことが『予測』できる。ただ、猫だましができただけの事、それだけの事。

しかしそれでも、ディアボロにとっては起点だった。まるで終わりの無い繰り返しの中で思い出させるような束縛からの解放、その第一歩。

今はまだ吹き飛ばした時の中だからか、精神にかかる靄はない。しかし、その予兆は確かだ。距離も何も関係ない、またこいつが気を持ち直せば再び柵に捕らわれるだろう。

……精神が砕けバラバラになりそうなあの時、自分に再び手を差し伸べてくれた忠臣。恐怖の限界に再び助けを求めた時、彼はまた力を貸してくれた。

自分の隠れ蓑、というだけではない存在になりつつある。彼も、自分が思いもしないほどに成長しているのだろうか？

危機を乗り切ったその時には、彼の功績には対する祝福を考えなければならぬだろう。だが、そのためにもあの狂気を超えなければならぬ。

何か、この状況を打開する何か。……それを探らなければ、勝ち目はない。

今は、離脱。予知の示す方向へ。

『動きを読めるのは短い時間だけらしい……先を読んでいない、時間の先を』

『予測できるのは……矢や弾丸の動きだけか？』

かつて対峙した男の声が蘇る。

それらは確かに自分が敗北した要因の一つ、無視できない事実だ。予知は絶対であり、それに行き着く為の道を模索するのは自身の力。どれだけ便利な道具を持っていても使い方を知らなければゴミであるように、知り得た事実に正したがっているだけでは勝ち目はない。……自身は、一人では勝てない。先程、救ってもらった時のように。

「……あれ？ おにいさん？ おにいさん？」

間の抜けた声が背後から聞こえてくる。共に、こちらに意識が向い

たからか、ざわざわと再び心に霞がかかり始める。

ぼやぼやとしている時間はない。一刻も早く打開の元へ行かなくては。

一つだけ、心当たりはある。忌々しいが、それに頼るしかないだろう。

記憶を頼りに進んでいく。倒壊し炎上する家屋たち、眠らない都が燃え上がり月の明かり以上に地底を照らし続けるなか、ただただ暗い暗い道の先へ。

「……あ、あはははは、はは、こつちに行つたんだねー」

わざわざ強調して、こいしはこちらに向かつてくる。とかく一方的に、自身を理解し追えるのだろう。

壊れそうなほどに酷使した身体を、最後の仕事だと鞭打ち動かせる。緊張と疲労で全体が熱く、硬くなっているのが動かすだけでわかる。むしろ、動かないほうが今は辛い。止まってしまえば、次に動くときはないかもしれない。

だから、駆ける。

木造がなくなり、

舗装がなくなり、

人の手がなくなり、

そして最後に行き着く一つの門。

「……なんだ、意外と早かったのね」

橋の上には、変わらず紫煙がくゆっている。その元は今、持ち主の手を離れ橋の下、絶えぬ暗闇へ放り込まれた。

橋の欄干に腰をかけ足をゆらゆらと揺らし、事もなげに語る彼女の瞳は変わらず明るく輝いていて、先程までディアボロ自身を捕らえていた同じ色の瞳と比べると何よりも人間性を保っていた。

それでも一瞬身構えてしまう彼に対して、嘲笑を浮かべ、

「そんな風に見ないでよ。おかしくなってしまうってわかっているなら、誰も私に頼れだなんていわないでしょう？」

「……こんな状況で、正気を保っている奴を警戒しないほうがおかしいだろう」

「……まあ、そうかもね。けど、今普通に会話できてるのが何よりの証明。……こつちに来なさい」

誘うように、パルスイは手を伸ばす。あの時猫が言った言葉。真意は不明だが、彼女は確かに正気のまま、無意識に捕らわれている様子はない。

最低限の警戒を保ったまま、ディアボロは彼女に近づく。

「あの子の暴走、止めるのならばどうするか。さとりから聞いている？」

「……聞いている。あれに限らず、普遍的な方法を。お前が何かできるのか？」

「ふふ。私は橋姫、嫉妬心を操るだけのちっぽけな妖怪。だからこそ、あの子の大暴れを止められるのだけれども」

冷めた笑みを浮かべ、それでも手を伸ばし続ける。

「もったいぶらずにさっさと話せ……あいつがまた、近づいてくるのはわかっているんだ」

「だからこそ、よ。そこじやあ遠すぎる、もつと近くに来なさいよ」
その手の半歩前で止まるディアボロをさらに寄せようと手招きも入れる。

無然とした表情を浮かべて僅かな反抗を表すが、それに彼女は変わらない。仕方なく、その手の元まで歩みを進める。

近づき、受けたその手は人間の温度を模した何かのように感じられる。

「……もう一つ言つてたでしょう、あの子の意識があなたに向かなければいいってことを……」

小さな、耳を近づけないと聞こえないような大ききさで言葉が唇から漏れる。それに僅かに意識を向けると、

「……ッ……」

握っていた手を強く引かれ、不意な引力に崩れる顔を素早く両の手で包み。

驚愕に染まる顔を、僅かに開いた彼の唇に彼女は容易く自身の唇を滑らせる。

無遠慮に挿し込まれる暖かいものは、人間らしさ、生き物らしさという感触を何も感じられなかった。

「ふざけているんじゃないッ!! 何を」

「あらあら、意外と初心なの?」

不意に唇を奪うパルスィを引きはがす。僅かに残った残滓が互いの唇を繋ぎ、渡り、崩れる。

引きはがされてなお垂れるそれを、残るぬくもりを親指で拭い、先程までディアボロの体温を貪っていた舌で舐めとる。

余裕ぶつた笑みをそのまま浮かべながら、ゆっくり、ゆっくりと。

「あの子があなたにご執心なのはよくわかるわ。最初に見た時から、それはもう妬ましいほどに。……その相手のこんな姿を見た時、どう思う? ねえ、こいし!!」

からん。

自分の辿ってきた道の後。

硬質の何かが落ちる音、パルスィの目線の先に向いてみれば、そこには。

「……あ、……あ……お、にい」

信じられないものを見た、現実ではない、だって、あの人は、自分に。

驚愕し、憔悴した表情を浮かべ、こいしはふらりとその場へへたり込む。

「執心した彼はあなたを恐れ、私の元に来てくれたわ。恋い焦がれたあなたの想いは重く彼に押し掛かり、あなたの元から私へ逃げ込んできた。……彼は、あなたを捨てたのよ」

追い打ちをかけるように、パルスィの言葉は止まらない。

言葉をかけられたこいしは、小さく、何かうわ言を呟いている。

「妬ましくもない結果だわ。想い人に身を寄せようと自身の意ばかりを押し付け続け、そして相手は手のひらから逃げていく……本当、ありふれた結末」

「……やだ、やめてよう」

両耳を抑え、いやいやと首を振り、目の前の現実から一杯に否定を

投げかける。

「おにいさんは、私と一緒に居たいんだもん。私と一緒に来てくれたもん。ネズミさんも一緒だったけど、勇儀さんに絡まれてもいいところを見せてくれたもん……」

「……………」

「違う、あなたが勝手に付随していただけ。言われなかった？ どうでもいい、って」

勝手な、そして挑発するような物言いに言葉を返そうとしたディアボロだが、それを緑色の瞳が止める。

そして、まるで見ていたかのように、館内での言葉の意味を改めてこいしに投げつける。

「そんな……こと……」

「言われてない？ そんなはずないでしょう？ もしそんなこと言われないほど繋がれていたのなら、私の元へ来るわけがない」

こいしの行ったこと全てをディアボロの代わりに否定し、ゆっくりと追い詰めていく。

確かに、ディアボロが自身で話をしても全てを愛情だと変換してしまふ脳の構成をしているのなら正気を保っている彼女が語らなければ届かなかったかもしれない。

こいしの言葉全てを自分の幻だと切り捨てたパルスィは、自らの唇を指でなぞり、またそれをディアボロの唇に添える。今はおとなしくして。二人だけに聞こえる声と共に。

「あなたも見ていたんでしょ？ 彼と私の情事の一部。……あなたには早すぎた？」

挑発を続ける緑色の瞳、それを受け、受け止められない涙に濡れた同じ色の瞳。

いつしか、ディアボロの中に降りていた霞の帳は感じられなくなっていた。

「諦めて帰りなさい。こいし、あなたの求める心に彼は存在しない」

最後の言葉をけしかけ、交錯した視線は交わりを亡くす。見えない覚はうつむいたままに、橋姫は男の肩に手を伸ばして。

「……あなたのほうが背が高いんだから屈むくらいしなさいよ」

小さく体を浮かせて再び唇を重ねる。視界が彼女の瞳の色で覆われる。口づけの際に全く目を離さないその姿は、何かを刻み込んでいくようで、こいしの光の無い瞳で見つめられるときと同じような不快感を感じる。

重ねられた唇からは、今回は何も絡ませてこない。相変わらず、人肌の温かさをもった何かを押し付けられているような感覚のまま。

「……………」

突然、多量の吐息が相手から吹き込まれる。揺れる瞳が煌めき開かれる。

自分の腹が何かに濡れる。暖かさを感じる、粘り気のある液体。遅れて何か、硬質な物が僅かに触れた。

肩に回されていた力も抜け、繋がりが無くなった体は一瞬の痙攣を経て崩れ落ちた。

「なっ」

視界が新たに広がる。

遮っていた先に見えたのは、いつの間にかすぐ近くに立っていたこいし。突き立て、押し込むように伸ばす両手、赤い飛沫に濡れた袖。

先程まで感じ取れていたこいしの存在は全く感じ取れなかった。怒りと取れるその瞳は先ほどまで眼前にいた対象に全てを向けていて、その先の自身には全く向いていなかった。

崩れ落ちたパルスに突き立てられていたのは、殺傷用ではないかもしれないが、突き立てれば致命に至らしめるには十分すぎる刃物。

……視界に入ったときに彼女の手から落ちた、刃物。

「……邪魔、しないで」

崩れ、倒れながらも、信じられないといった顔で振り向こうとして……叶わず、一瞬目の前の相手に縋ろうとして、ぐい、とパルスはこいしに引き寄せられる。彼に触るな、と言わんばかりに。

仰向けに倒れたそれを、後ろから通した僅かな穴を開くように、腹から濡れる赤い染みに刃物を突き立てる。何度も、何度も。

「私の邪魔ばっかりして、私を知ったようなこと言っ、初めて見た時

から嫌いだった、人のことを見透かすようにして」

突き立てるたびに肉を切り裂く不快な音と吹き出す水音が辺りを染める。ほんの僅かだが、聞くとび脳に染み入る。

「……………え……………」

「惑わしたのはその口？ 食べちゃったのはペロ？ そんな姿なら、必要、ないよねっ!!」

だらりと開いた口を乱暴に開かせると、相手の血で染まった刃をその中に突き刺す。力任せに動かしたそれは多量の出血、いくらかの歯、そして、肉厚の一部を切り取る。

「それとも、この瞳なの？ もういらぬよね、死ぬんだから!!」

小さな喉が懸命に震えると、一杯に振りかぶった右手が横たわる身体に突き立てられる。頭部の柔らかい眼窩に生やされた土台は、衝撃を受けびくりと震えると、そのまま動かなくなる。

ディアボロは、何もできなかった。

一瞬の出来事だった。

予知に頼ることなく、未来の想像は自身に降りかかるだろうと脳で考えていても、目の前に流れる光景を感慨もなく見つめていた。

そして、後悔をしても遅いと思ったときには、全て手遅れだ。

「……………あはは、おにいさん、汚れちゃった」

無垢な笑顔を向けるのは、先程まで凶行を行っていた少女。

囚われの身は、ただ成す術なく、檻の中からは出られない。

「多幸感にあふれた恋がしたいの。でも、ああいうのはダメ。間違えちゃったら、こうなっちゃうから」

愛らしい笑みを浮かべ、両手を広げて彼女は迎えようとしている。

それは最終宣告だ。今までに並べた現状、最後に突き付けた、彼女の視点の本当の真実。

何もできない。何もできなかった。その虚無感も、全てが上塗りされていく。

目の前の少女はまたディアボロに意識を向け始めたのだろう。彼女の全てを肯定するように。しなれば、先は自壊か、それとも。

「ねえ、おにいさん。おにいさんは私のために笑ってくれるよね、

ねえ」

一步、その両手を広げたまま。

「……笑ってよ、ねえ……」

失われ、得られなくなった感情を求めて。

「笑ってよ！　笑ってって言ってるでしょ!!!　どうしてみんな笑ってくれないの!!!」

急転し、激しい怒りを浮かべながらディアボロにつかみかかる。

叩きつけられるような感情の暴力は、本当は得られないことを知っているのかもしれない。

「私は笑っているの！　みんなに笑ってほしかったから！　みんなと笑っていたかったから！」

否、知っているのだろう。……彼女にとっては少なくとも2回目なのだから。結末しか知られていないその物語は、きつと内容は今日の前に在るような内容だったのだろう。

僅かにでもそれを悟っているから、また得られないから、溢れ出る感情を止められないから。こいしにとつての最高のラブコールは、他者にとつての執行の言葉だったから。

掴みかかったその小さな手、その持ち主に宿るのは愛情に濡れる光ではなく、もはや憎悪にまで歪んだ謂れの無い捨てられた者の炎。

明確な死が目の前に現れている。今までは過程で、結果的に死ぬだろうという未来が見えていた。だが、今の彼女からはそれは感じられない。求めているのは、死の結末。その先の意識はもはや答えのはるか先にある。先ほどくり抜かれた瞳と同じ色、幼い瞳の中は映る全てを焼き尽くそうと言わんばかりに燃え上がっている。

……だからこそ、気づかなかった。炎の宿す瞳の持ち主も、それに焼かれている相手も。

「……ん」

こいしは気づけば足を握られている。

この場にもういない、死んだはずのその身体に。

ほうぼうの体で、それでもこいしの足を掴み、刺されなかった、残

された瞳の一方でこいしを睨みつける。左目に突き立てられた刃物が眼窩の残滓を引き出しながら、からんと音を立てた。

開く度に血の溢れる口からは、ごぼごぼと声にならない濁音を上げながらも、二人には確かに聞き取れた。

「え」

許さない。

互いが理解したその時、緑眼の獣が爆ぜた。

目も眩むほどの閃光は反射的に手で覆い隠しても突き抜けるほどであり、遅れてくる勢いと熱量は、爆発と言っても過言ではない。

それに押されはするものの、ディアボロに対しては危害らしい危害は加わってこなかった。

衝撃と灼けた目に力が戻り、彼の目に晒された光景。……橋は崩れたりはずせず、ただ、こいしだけが見当たらなかった。

「何、だ……何が起きた……？」

疑問の言葉を口にする、それに答えるように足元に刃物が転がってきて存在を強調する。

その先には、力を失い自由に落下していく、先程まで目の前にいたはずの少女。

橋の向こう側、地上の入り口。そちらに吹き飛んでいったこいしを、さらに奥から現れた者が行方を見送る。

先ほど害され、先程多大な衝撃を生み出した彼女は、素知らぬ顔で煙草に火をつけるとその煙を味わい始める。

ぐしゃ、と力なく受け身を取ることもなく墜落したこいしを尻目に、パルスイは紫煙を噴く。

「全てを得ようとするものは最後に全てを手放す。得ようとするならまず手放せよ。妬ましいほど矛盾してるけど……まあ、同情はしておくわ」

橋の上でぐったりとしているこいしに対しての言葉だろうか。次にディアボロに目を向けると、

「……私がするのは……ここまでよ。どうするかはあなたが決めてね。全く、全部私に丸投げするんだからあいつは……」

足元に落ちる刃物を指さし、次にこいしに指をさす。あとはどうでもいいと言わんばかりに。欄干にもたれて煙草を吸う姿は来た時と何も変わっていないかった。さながら、何も起きていない、という様に。転がった、血に濡れた刃物を拾う。触れてみれば、ゆっくりと冷えていく感覚が指先から伝わってくる。

……どうあったか、わからない。確かにその通りなのだが、ただ助けを求めて、何もすることなく解決してしまった。

身を委ねただけの自分に腹が立つ。受け身でいた自分に腹が立つ。何もできていない自分に腹が立つ。だが、今はそれだけでいい。

「……………うあ……………え……………」

何があったかわかっていない。まだ生きてはいるがほとんど死に体だ。

きつと、不器用であっただけなのだろう。彼女なりの、精一杯だったのだろう。

だが、それだけでは片づけられないほどの結果を作ってしまった。

「……………罰を与える」

既に何も言えない身体。自分を認識できず、相手に認識させず。曰く、瞳を閉じてしまったから。

爆発に晒されボロボロになったこいしの身体。辺りから流れ出る血液は閉じた旨の瞳にも飛び、血の涙を流しているようだった。こいしの、本当の叫びなのかもしれない。

「……………それに着き合わされる者は、たまったものではない」

あてがった刃はゆっくりと彼女の身体を辿る。最初に触れた腹。過去を刻む胸。多弁に愛を語る口。……閉じた、代わりの瞳。

何も言わずに、まずは右に。突き刺し、

「う、ああああああああああああああああああ!!!」

抉り取り出す。そのショックに、僅かな意識を取り戻したか大声を上げる。

衝撃と理解不足、反射的に伸ばそうとした手はもはや何も縛れていないディアボロによって容易く止められる。

「ああああああああああ、ぎいいいい!!!」

苦しみの声を上げる中、淡々と、慣れた手つきで左目も抉り取る。抉られた二つの球体は、そのままころころと捨て置かれた。

「ああああああ、いたいよ、いたいよおおおおお!!」

残された力の全てを苦痛を耐えるために使っている。今まで周りにばらまいた悪意を全て自身に受けるように。

仕向けた一人は憐憫の目を送り、そのまま次の火を灯す。

……もう一人は、いまだ胸に霞を残したまま。幾重にも濡れた刃物を橋の下へ投げ捨てる。もう、見ないように。

「あああああ、あああああああ！　なんで、なんで、わたしばかり、いいいいいいあああああああ!!!!」

苦痛の叫びだけが、そこに残った。

「……あ、れ……、私、は……」

不意に目を覚ます。確か、彼はこいしを追うと……

いや、なんで私は眠っていた？　部屋の入り口、戸も開けっ放しで。

……ここはどこだ。地霊殿の一室の……彼は、こいしの騒動は……

？

「……っ!!」

気配がする。『良くない』気配だ。何がどうかはわからないが、生存本能が警鐘を告げる。

戸を閉め、鍵をかける。部屋の中の状態を確認する。……中は変わらない。外からだ。

配下は……ダニーしかない。野良ネズミなら容易く操れるが、この辺りにはいない。……ここは動物の巣窟。小動物に過ぎないネズミたちには天敵だらけだ、住まおうとしないだろう。

床に耳をつけて状態を探る。大きな足音が近づいてくる。人型、一人。……それに隠れて足を忍ばせているもう一人。人型。計二人。大きいほうに注意を向けるように、本命はもう一人。……ここは敵の腹の中だ。正面から抜けることは難しいだろう。

ロッドを持ち、辺りを探る。逃げ道、ネズミ道。相手の正体は何もわからないが、このままでは喰われるだけだ。その程度には害意がある。

「天井っ……！ ダメか、タンスの裏……！ ここもかつ」

探りまわるが、何も無い。完璧な密室だ。管理が行き届いていると褒めるべきか、最初から閉じ込めるつもりだったのかと貶すべきか。抜け出すのは無理なら、しょうがない。隠れて機を伺うしかない。

………ノック音が響く。ノブが回り、鍵がかかっているのがわかるとすぐに開けられる。マスターキーを持っているなら、ノックなど意味もない。

「失礼します」

現れたのは長身長髪、縦にも長いのに存在を誇示しようとしているのか体格に見合う翼を広げる地霊殿の有名人——霊鳥路空——。

一見礼儀は正しくしているが、表情は剣呑としており、やんごとなき事情しか感じられない。

「さとり様がお呼びです。来るように……あれ、寝てる」

一見、部屋の中は変わりなく、布団の中に丸まった何かが入っているだけ。ただ眠っているように見える。

「バタついてたから起きてると思ったけど……意外と寝坊さんなんだ」

のんきなことを言いながらドストドスと部屋に押し入る。ただ歩いているだけだろうが、核を制御するための大きな右足は小動物たちには大きすぎる音を出している。

空が布団に近づき、それをめくろうとしたとき、

「逃げ出す気かな？」

部屋の外から聞こえる声、ぎくりと身体が硬直する。

「お空！ 扉の後ろだ！ 開いたところと壁の間！」

蝶番の隙間からわずかに外を伺おうとしたナズーリンを、肉食の瞳がじろりと舐める。

小柄な彼女を隠したそれを容易く見破り、燐が滑るように部屋に入るとすぐに戸を閉じ、ナズーリンの姿を露わにさせた。

霊鳥路空と火焰猫燐。その二人がナズーリンを部屋の隅に追いやって囲んでいる。

「あたいたちはただ呼びに来ただけなんだけど……なーんで隠れちゃったりするかな？ 何か、気になることでもあったかな？」

にやにやと嫌らしい笑みを浮かべながら話す燐に対して、空はじつと見つめたまま、何も言わない。ただ、右手の制御棒と呼ばれる巨大な角柱は重々しく、彼女自身が大柄なものも相まって小さなナズーリンに対しては、ただ立っているだけでも十分すぎる威圧となる。

「地霊殿の来賓を呼びに来ただけなんだよ、本当にさ……なのにそんなに縮こまられちゃうと困っちゃうよ……？」

「お客さん、さとり様がお呼びだから。何も悪いことはしないよ」

「……なんで、呼びつけるだけなのに良いとか悪いとか出てくるかね……？」

笑みをそのままに撫でるように声をかける燐と、そのまま読み上げるように話す空。

元々慎重なナズーリンからすれば、そんな言葉は微塵も信用できない。まして、燐の浮かべる笑顔は楽しみを隠している卑しい笑顔だ。頬を引きつらせながらも気丈に答える、答えようとする。

「お姉さんがそんなに怯えた顔するからお空もそう言うのさあ……そんな怯えてる姿じゃあ、そう言うしかないでしょ？ ……警戒しないでさあ、仲良くしようよ……？」

舐めまわすような視線、誘うような蠱惑的な声。だがそれは弱者をいたぶろうとする強者の振る舞い。種族の優劣、本能の衝動が駆り立てるのだろう。

部屋の隅のまま、手を伸ばそうとする燐の後頭部に、

「お燐、それ以上危害を加えようとするなら撃つよ」

空の制御棒が押し付けられる。

「さとり様からの命令はお客さんを連れてくること、それを邪魔する者は排除すること。私、お燐を殺したくないよ」

「……なら殺さなければいいんじゃないかなあ」

「だって、お燐の今の行為は連れていくことを邪魔してるよ？」

「……全く、馬鹿だなあお空は。それに、もしこのまま撃つたらお姉さんも巻き添えになっちゃうじゃないか」

「あつ、そっか」

凶器を押し付けられながらも笑いながらに済ませる燐と、あくまで忠実に動く空。後頭部に突き付けた制御棒を、次は側頭部に突き付け、

「これでいいね」

「馬鹿だなあ、にやはは」

朗らかに笑い声をあげている。空は大真面目な顔つきのまま。燐にとってこれはいつものじゃれ合いの一つに過ぎないのかもしれない。

それが尚更ナズーリンの恐怖を煽る。燐のほうはともかく、空は冗談を言えるような性格ではない。間違いなく一撃をぶつ放すだろう。そうすれば巻き添えになるかもしれない。ならなくても、死者は出る。

ナズーリンの性格を見越しての、自分の身を張つての芸だろうか。たまたまだろうか。ともかく、今の手数では反抗もままならない。

「……私を、どうする、つもりだ……」

頭をそれ以上サイズの口径で突き付けられているにも関わらず、それでも冗談めいた顔を浮かべたままのお燐は、さらにニコニコと笑みを浮かべる。

今までの全て、こいしに怯えていたことも、さとりの前で泣いたことも、全部が芝居だったのかとも邪推するくらいに会心した笑みだった。

「何度も言ってるじゃないの、さとり様の元に連れていくだけだった」

―独奏、王に届くこと願ひ 1―

足を引きずりながら、橋から都へとディアボロは戻っていく。

悲鳴の一つもなく、まるで環境音のようになただただ家屋の破壊音が響いていた道程は人々の喧騒が少しずつ戻ってきている。

「担架組めー！ ケガ人は一まとめに集めろ！」

「どこだ、ポーンナム！ 生きているなら返事しやがれ!!」

「火を消すついでに周りのもんまでぶっ飛ばすんじやねーぞ!!」

「さあさあ活気出して活気！ 食べれるのたくさん作ってきたよ！」

こんな時だからお腹に入れておきな！ ちよつとの悪用で元気になれるさー！」

「え、いや私は地上に戻らないとそろそろやばいし……あーもうわかったわかった！ やるから服引っ張らないで！」

大惨事の直後だというのに、すぐに復興へ向かっている。来てすぐに鬼の首魁とのやり取りで、先程の惨事が起こると大々的に知られている。そのための準備をしていたのか。

だが、少ないとは言いい切れないほどの被害もあつたはずだ。それらを容易に受け入れられる土壌があるのか、それとも忘れようと、見つめないようにしているのか。関わり合いになろうとしないディアボロにはわからない。

身を隠すように、物陰に隠れながら一歩、一歩。自分に全く非がないと主張はできるが、感情はそれを容易く理解させない。何の因縁をつけられるかわかったものじゃない現状、誰にも見つからないように進もうと考えていた。幸いにも遮蔽は多い。……皮肉なことだ。

地霊殿へ向けてゆつくりと、ゆつくりと身体を引きずっていく。ただ、首謀の姉に問うために。災禍の中心、そのよく似た姿に問うために。

しかし、意志に反して身体は徐々に動きを鈍くし、次第に立ち上がることに、維持し続けることすら困難となる。

恐怖に捕らわれ、限界を忘れて酷使した身体。負傷はなくとも脚も腕も体幹も、平時なら早急に休息を必要とする状態。

そして、折れかかった心。

幾度も、何もできなかった無力な自分、恐怖という渦に溺れてただ流されただけだった自分。その事実がじくじくと胸を蝕む。

一方的、調子の良い下らぬ期待だったが、それは確かに自分に向けられていた。やり方には難を示すが、それでも住人たちは早期の解決のために名も知らぬ自分に期待を寄せていた。ただの贄として終わるのではなく、解決し、そしてお前も生きろと。

それがどうだ。ただ逃げまどい、たどり着いた先。結局あの橋姫と呼ばれていた女が一人で解決した。あっさり。全てわかっていたように。全く解法を得られなかった自分を嗤う様に、ただ自然に身を任せるように。何てことの無いように。

外部とのコミュニケーションを遮断していたように見えるあの女が実際に言いふらすことはないだろう。自身が生きていたことを知れば、あの男は生き延びて終わらせたと認識されるかもしれない。それでも、事実は違う。立役者は結局あの女だ。……何もできなかった。

その二つがディアボロの足を鈍らせ、ついには膝折り、崩れさせる。

「……はあ、……はあ」

長い溜息が思わず漏れる。早く行かなければ、という焦燥感が頭を支配するが、休息に浸かってしまった身体を動かす為の信号が、首から下へ届かない。

横たわりそうになるのを抑え、何とか崩れた家屋にもたれかかる。そのまま溶けて眠りそうになることを何とか耐える。……こんなところで眠ってしまったら、そのまま目覚めないかもしれない。

休んでいる暇はない。休まなければ持たない。その二つがせめぎ合い、それでも現実には動くことすらできなかった。

「はあ……、……」

なぜ自分はここにいるのだろう。

地に堕ちた自分が垂れた糸につかまり、這い上がり、再起を望むために立ち上がり……しかし、その先を見据えようとしたがために、今躓いている。

こんな様では、もし当初の通りに進んでも立ち上がることもままな

らず、きつと吸血鬼にも相対することができないだろう。……命を拾えたとはいえる。

そう思い、ディアボロは首を振る。こんなことを考えてしまうほど落ちているのか、自分が嫌になる。とてもではないが、帝王と再起するために立ち上がった男の思考ではない。目の前の僅かな生に心を奪われている程度では。

自分の手のひらを見つめる。……必死の中に拾った命を喜ぶように震えている、その手は見慣れていたはずなのにととても小さく見える。ディアボロには、不甲斐ない自分を見つめているようであらなく悔しかった。

そうして目を落としてはじめて気づく。……自分の様子を窺っている存在に。

何もなければただのネズミと気に留めることはなかったろう。路傍の石ころのように、どうでもいい存在だ。この廃屋の陰に存在しているもおおかしくはない。

けれども、そのネズミはまるでこちらの顔色を窺うように、身を隠しながら、それでもしっかりとこちらを見つめている。ただの獣とは違う、意志をしっかりと持っているように。

自分より大きい存在を恐れている、というわけではなさそうだ。そして、その存在が自身を気づいたことを知るとそろりそろりと身体を表す。

小さな体軀を表に晒すと、そのまま器用に後ろ足で立ち上がり、前足でどこかを指す。まるで人間のような動作をして、知性ある獣のよう。

必死に全身を使い、自分の辿ってきた道を指し示す。戻れ戻れという様に。言葉の全く介さないボディランゲージ。

全くその意図を理解できなかった。この地底で、このタイミングで、なぜこのネズミはこんなことをしているのだろう。

動作の気概から、自分に何かを伝えようとしているのはわかる。今まで身体を引きずって歩いてきた道程に戻れと、橋の元、地底の入り口まで戻れと言っているのもわかる。それが、何故なのか。

ネズミといえば、頭に浮かぶのは勝手に付いて来ていたナズーリンだ。そして、彼女もまた災禍に巻き込まれ、何もなければ地霊殿の一室で眠っているだろう。終わってすぐに動けるのならば、その場で待っているか、自分を探しているか。

彼女は探し物が得意な様子だった。であるならば、自分を見つけることに苦はないだろう。なのに、何故このネズミだけが。

簡単だ。『何かあった』から。それ以外の何物でもないだろう。

……問題は、その『何か』だ。

良いことがあり、それを共有させるために自分を探す。それは確かに理がないわけではない。だが、このような状況で、その理があるはずもない。

彼女が危機に瀕している。だから助けに来てほしい。……それは、居るべきであろう場所から離れると伝えようとしている理由が繋がらない。

あるいは、別所に移動したからそこへ来いと。まだ理に適うが、ならば何故移動したのか、新たな疑問が浮かんでしまう。

「……お前は、何を伝えようとしているんだ……?」

脳で吟味する前に、単純な疑問が口から出る。無意識なその動きはネズミにも伝わったのか、一度視線を落とすと、改めてディアボロに近づき、ズボンの端を啜えてその身体を引っ張ろうとする。当然動くはずもなくただたわみが伸びるだけだが、その導こうとする先は確かに先程までの道だった。

そうまでしての必死さには、確かな理由があるのだろう。他でもない、自分自身に伝えるべき事柄なのだろう。

……彼女に明確に恩があるわけではない。少なくとも、自分では感じていない。

だが、彼女は打算なく自分を心配した。相手から全く信用されていないとわかっているにも関わらず、それでもディアボロという存在を気に掛けた。

外、元々の世界では稀有な例であり、幻想郷に来てからは珍しくはなかったが、始まりは疑いから入っていた彼女が、ただ自分に気に掛

けていた。

「……すまないな」

理解はできないかもしれない。だが、ただのネズミではない、妖怪ネズミが存在する世界。本来持ち得ない知恵を十分に持っているネズミかもしれない。だから言葉にして表す。

「今の私では……お前の主人がもし危機にあるのなら、救えないだろう。……だが、約束しよう。陥れられたのなら、報復はする」と

重たい腰を、膝を杖に立ち上がる。筋肉は未だ悲鳴を上げ、筋は休息を訴え、骨は軋みを上げる。

しかし、立ち上がる理由ができた。自分だけでない、という理由が。

……思えば、あれも救いを求めていただけなのかもしれない。……最も、同情こそ、救いとは対極のものだが。

歩き出す身体に、懸命に対抗するも当然敵う訳もなく、ネズミは体ごと引きずられる。僅かな抵抗はすぐ終わり、トボトボと、それでもディアボロの後ろについて歩く。

そのまま歩みを続けようとして……振り返り、手を地面に下ろす。ネズミは最初は戸惑いを見せ、意を理解して消沈しながらもその手に体を委ねた。

「妖怪とは人喰いらしいな……もしお前が抛り所を失ったなら、私の身を捧げよう」

傍からは独り言に見えるそれを伝え、乱暴にポケットに押し込む。

もももぞと腿をくすぐられる感覚を味わい、未だ重く遅い足を地霊殿に引きずり込む。

地霊殿も都と同じように、先の惨事により、最初に訪れた時とは別所のように崩壊が目に見え、それは一見打ち捨てられた廃屋のようにも思えてくる。

だが少なからず建物の住人……動物たちが被害にあっていたように見えたが、その骸はどこにも見当たらない。先に片づけられたのだ

ろうか。それとも……

過ぎた事であり、ディアボロには関係はないことだ。辺りにまだ残る血腥さにこみ上げてくる不快感を抑えながら、崩れた門扉、その奥へと向かう。

自分が抜け出た時と何も変わりはない。ただ、生きているものがないだけ。たったそれだけ、だがそれだけで先程通った都との温度の違いを感じ取れる。

本来これほど大きな建物であるならば、地底の統する者の建造物ならば。誰かしらが第一に来るものだが、その姿は一つも見えない。

どのようなコミュニケーションにも、自分が害されてもその身を捨てて奉仕に尽くす者がいる。統べる、ということの単純な解の一つはそうした者たちの集まりなのだから。

そういった姿がないのは、かつて一つのコミュニケーションを統率していたディアボロには不可解だった。その疑問を、今は全て飲みこむ。

荒れ果てたエントランスホールを通り抜けて、かつての足取りを元に客室へと向かってみる。

ホールを抜けてある程度足を進めれば、そこまで暴徒は来なかったか、急に元の姿と変わらぬ、荘厳だが人の気配の無い不気味な屋城が現れる。

立ち尽くしていた烏羽の女もおらず、開け放たれていたはずの二つの扉は閉まっていて、倒れていた二尾の黒猫もとつくに姿を消している。

扉を開け、中を見る。……誰もいない。それどころか、使われていた形跡もない。誰も使わなかったかのように。

ズボンのポケットからわずかに鳴き声が漏れる。これが、彼の伝えなかった真実なのだろう。

中に入り、軽く物色をする。机、衣装棚、ベッド。簡素に整えられた部屋には何も残っていない。

……唯一、残っている形跡。ベッドに掛けられた整ったシーツに僅かに残るシワ、一度使ったものをそのまま整えて使った、証拠を消そうとした痕跡。

何も問われなければ、相応の嘘をもって答えることを明かしている。無血ではあるが、他者に容易に明かすべきでないやり方で『何か』が起きたのだろう。

それを知ったか、あるいは伝えられて、彼は伝令の役目を果たした。投げ打ったのは、自分だが。

願わくば、無事であるように。それを祈って足を戻す。相手がどこにいるかはわからないが、かつての邂逅、客間へ向かうしかない。

「お帰りなさい、戻られたんですね。……そして、生還おめでとうございます」

ゆつくりと歩き、ホールへ差し掛かろうというところで、ぱちぱちと手を叩く音が静かな地霊殿に響き渡る。

地熱で常に足元を照らされているこの館には影はなく、故にその姿を隠すものはない。正面から歩いてくるのは惨事の元凶、古明地こいのその姉。

記憶の中の彼女と変わらず薄らと開いた眼に僅かな笑みを浮かべ、胸の瞳は先ほどもまでディアボロを追っていた瞳と違い明確に開いている。

「あなたが生き残るかそれとも死ぬか、あまり生きられると思っていなかったのですが。どちらにしても早期解決できたことには感謝申し上げます」

姿勢を整え、丁寧に頭を下げる。その所作は、神経を敢えて逆撫でするかのような慇懃さだ。

「どの面下げて、ですか。そう思うのもわかりますが家族として、地底を治めている者として。私はあなたに感謝しています。不出来な妹ですが、それでも私の掛け替えのない家族でもあります。だから私には手が出せませんでした。それは他の者も同様」

変わらず僅かな笑みを、どこか相手より優位に立っていることに優越を覚えていることを隠せていないような笑みを浮かべながら。さとりはそれでも言葉を続ける。

「きつと、他の者は感謝の程度はあれど、あなたに表立って頭を下げる

ことはないでしょう。星熊童子に対してのあの行為、そして追隨する彼女の仲間たち、以下の者たち……あの状態で幻想郷ではない人間が行う術では最善だと私も思います。だからこそ。私だけでも、あなたの行いを正當に評価する必要があります」

あるいは、彼女なりの誠意の表れなのかもしれない。ただ、絶望的にその作りが苦手なだけで。

ただ、そんなものはどうでもよかった。

問うことがある、と口に出す前に、僅かながら身体を一步踏み出す。

……同時に、僅かにさとりは後ずさる。

「そうですね。何も知らず巻き込まれたのですから、結果だけを押し付けられたのだから。知りたいのは当然です。なんでも、答えましょう。たくさんあるようですし、ゆつくり一つずつ選んでください。全てに、答えましょう。……ここではなんですし、部屋にでも、いいですか、そうですね」

眼を閉じ、笑みが消える。此方の行動を待っているのだろう。聞きたいことが、それが全て既に読み取られているはず。けれど、本人の整理のために口を開かせようとする。

ここでも手のひらの上で転がされているような気分侵され、気持ちのいい物ではない。誰からも好意的に取られないと言われる所以だろうか。

その心を読み取られたのか、くつくつと声を抑えた笑いが、さとりから湧き出ている。

「古明地さとり……お前はすでにアレの明確な解放の仕方を準備し、だが敢えて何も伝えなかった」

「既にお隣から聞いているようでしたので、私から伝えることは何もありませんでした。パルスイとは既知でしたね、もしもの時にはお願いでいたのです。彼女……友達いなので」

眼は閉じたまま、けれどそれが来ることは当然といったように。

「ならば何故初めからあの女を使い止めなかった？ 奴ならば、被害を出すこともなく食い止めることができただろうに」

「くく、言ったじゃあないですか。こいしを縛ることなど、あの子も私

も望んじやいない。私はあの子の幸せを願っていると。選んだ結果は受け入れるべきですが、選ぶための道筋を縛ることはこいしに限らず誰もが望まないことです」

決してこちらを見ようとはせずに笑みを浮かべる。だが、変わらず胸の瞳はこちらを睨み続けている。

「……………アレは事あるごとにお前を引き合いに出していた。過去に、アレに何をした」

第二の疑問を口にする。こいしの暴走の発端、彼女の能力を知っていることを告白した時から付きまとつていた違和感。

それまではいつも姉を第一に置くような物言いが見られてたが、あの最中では、事あるごとにさとりに対して、姉としての尊敬より、何か別の薄ら暗い感情を抱いていたように見える。

「そんなこと、たいして重要ではないと思いますが…………？　そうですね、命が懸かっています。疑問は当然です。端的に言ってしまえば、私の愛があの子には重かった、という事でしょうか。だから、今は手をかけていない。妖怪だって学びます」

引き出された答えは、あまりにもあつけない肯定。それが答えだというのならば、こいしの現状を作り出したのは、なんてことなく答えた目の前の存在。そしてその者がとつた次の策は放任というあまりに無責任な解答。

「ああ、怒らないでください。結果としてあの子は私に愛憎両方を抱くようになってしまいました。あの子の本質は知っての通り。望むは皆の笑顔。私だけがそこからはみ出ている、それでいいのです……………」

一度、閉じた目を開いてこちらの顔を直に伺い、そしてすぐにまた自嘲を秘めた笑みを浮かべながら目を閉じる。

誰からも好かれれない、と周りから評価を置かれている。そして、それを他者から知れてしまう。

そうであることが妖怪として、覚の矜持というものなのだろう。最初に会ったときにこいしの事を話しているとき、その矜持を踏み躪ったとこいしの事を誹っていた。

互いの想いに、過去に、二人の間に何があつたのか、どのようなすれ違ったのか。……ディアボロに興味が全くないわけではない。だが、今はそれに付き合えるほどではなかった。

「……ならば、もういい。人間の私にはこの地の底は暗すぎる。お前たちの歪んだ関係に付き合わされた事は大いに不服だが……解決した今、何も言わない。地上に、戻ることにはしようと思っっている」「そうですね、それは残念です」

口調は確かに遺憾は籠っていた。だが、片目を開けてこちらを見据える彼女からは、敵意とも、悪意とも取れるねばついた空気が湧き出ている。

「……………ですが……………どうやって?」

「……………だからお前に質問しよう。あのネズミを……ナズーリンを、どうした?」

だから、ディアボロの語気にも伝播する。

「……………どう、と言われましたも。あの方は帰られましたよ。この事を巫女に伝えるところで。……まさしく後の祭り、もう終わったことだし、何もないので歓待の用意くらいは考えておきますが」

「……………目撃者が、居る」

「そのポケットのネズミですか? 確かに彼女の使役でしょうが、あなたに彼の声が聞こえているのですか? 言葉を介さない者と、人間とで」

誰の目にとってもわかる、明らかかな嘘。もし前提を知らぬとしても、表情、所作、全てが物語っている。わざと言っているように。

明確な優位に悦を感じている、徹頭徹尾変わらぬさとの表情。心を読むから言葉を発せない動物の意志を理解し、そして目の前の相手の怒りの理由を知っている。向けられた侮蔑の感情も、また覚にとつては賜物なのだ。

「……………」

「信用できない、ですか。そうですね。私に対しては否定しません、特に信用に値することをしていないのでそれでいいでしょう。……………ところで、どうやって地上へ戻られるのでしょうか?」

「……あの縦穴以外に、エレベーターがあるようだが……どうやら、使用させる気は無いようだな」

「くく、決してそういうわけではないのですが。いえ、こちらとしては迷惑をかけた身、もてなしもせずにお帰りいただくのは忍びなくて。何も急いで帰られなくとも、ナズーリンさんが帰られるまでゆっくりして行ってもらおうと思っただけです」

「そこに、私の意志が組み込まれていないようだが？」

「いえいえ、使いたければ使って帰られても結構です。……ああ、その選択はやめておいたほうがいいです。力づくなど、誰も願ってはいない。……それどころか、あなたは私に勝ち目はない。いえ、私もあなたに勝ち目はありませんが」

ふわりと、重力を無視した挙動。僅かに中空へ浮かびながら、ゆっくりと距離を離す。ただでさえ小さな声と姿が、より小さくディアボロの網膜と鼓膜を刺激する。

「私はあなたの心が読める。故にあなたの攻撃は通用しない。あなたは私の未来が見える。故に私の攻撃はあなたに通用しない。……比類のない、素晴らしい能力です。だからこそ永遠に続く、追いかけてこが始まってしまふ。最も、空を飛ばず弾幕も打てやしないあなたがどうなるかは、自明の理です」

離れた距離のまま、ゆっくりとその身を地に下ろす。遠くなった姿でも、変わらずあの表情は浮かんでいた。

「……ならば、何を望む？　これ以上、私に何を躍らせる気だ？」

「一番最初に会ったときに言いました……私はあなたに興味がある。あなたの話を聞かせていただきたい。私は覚。前に生きる者の心の内に隠れた本質、恐れを喰らうもの。私はさとり。個としての趣味として、あなたの言葉を聞いていたい。……迎えが来るまで、ゆっくり語らおうじゃあないですか。あなたの事、私の事。こいしの事、ナズーリンさんの事。あなたが私と心からの会話に付き合ってくれたのならば、私は喜んであなたを送り出します。この古明地さとり、相手の虚を暴くもの。故に、嘘は吐かぬと誓いましょう」

「……断る、といったならば」

「私はこいしのように強制は致しません。あなたの心がこちらに向いた時でいい。……時間は有限ですが、限度まで無為に過ごすであるならば、それでも良いでしょう。その間に何が起ころうが、私の、知る由ではありませんので……」

さとりは振り返り、無防備な背中を曝け出しながら廊下に行く。懐から小さな金属を取り出すと、こちらを見ずに放り投げる。

全く狙いの定められていないそれはディアボロの遙か手前でかちやんと音を立てた。

「私室のカギです。意が固まりましたらいつでも御出てください」

うつすらと、彼女の押し殺した笑い声だけが残された。

―独奏、王に届くこと願ひ 2―

地底の全体は薄暗い。元々光の射さない空間に人工の灯りだけが頼りだから。地霊殿の下には核熱の灯りが恒常的に照らし続け、一線を画すものだった。

だから、先の騒動で破壊され、誰も手をかけていない入口から都市部までの道のりは夜の闇が降りたように暗く、僅かな光を頼りに進むしかない。その先にある、既に喧騒を取り戻しつつある眠らない都まで。

どうしてもすぐに行く気にはなれなかった。上から見下すようなあの傲慢な笑みをすぐにでもすり潰してやりたい気持ちは十二分にある、だが敵の胃の中、それに相手のを知ること少なくとも、決定づける理由に足る読心の能力。

機会の見極めは重要だ。感情だけに任せてしまえば後悔を呼び込むこともあるかもしれない。……まさしく、それはあの敗北を指しているが。

もぞもぞとポケットに突っ込まれた片割れが主張をする。ディアポロの行動に何を思っているか……彼は敢えて確認をしなかった。それは、いくらか残されていた、彼自信の呵責の一つ。

「ケガ人は一か所に集める！ 生きそうなやつから助けていけ!!」

「ポーンナム、どこだー!! 返事しやがれッ!」

「もう私は上戻らないとまずい……から……わかったわかった！ これ以上引つ張つたら脱げちやう!」

「水、食いもの、酒、もつともつと持ってきたよーっ！ 食える奴は食っておくんだよーっ!」

地霊殿から離れ、都市部に近づく度に威勢の良い声が耳に入ってくる。あらかじめ知ることのできた災害だからか、既にそのための準備をしていたのだろうか。一度の往路から考えればその喧騒はいくらか早すぎる。住人たちの生命力もまた、地底を支える力の一つだろうか。

あの空間の中に入るつもりはない。入ろうも、何をされるかわから

ない。彼らはディアボロを騒動を治めた英雄とみるだろうか？ 引き起こした悪魔とみるだろうか？ もちろんその前提に、地底の鬼、その頭領であるあの女のプライドを傷つけている。そんな自分に、都合の良い言葉を押し付けたりするだろうか。

……さとりをたいして何かを聞くのであれば、少なくとも関係のあるのは橋姫だろうか。いや、そもそもあの二人が最初から動いていれば起こらなかった騒動。妹のためと塗り固められた姉のエゴに自分は宛てられ、押し付けられた、簡潔にしまえばそれだけの事。

それでもあの橋姫はそれに組み込まれ、敢えての憎まれ役、汚れ仕事を引き受けている。それを良しとするまでの間柄、それとも。

一度離れた所にまた足を向けるのは癪ではあるが、それでも唯一の情報源に変わりはない。不確かを携えながら都市部を歩き回るよりかはいいだろう。

「……おや？」

陰に隠れつつ再び歩を進めようとしたとき、間の抜けた声が喧噪の中からこちらに向けられる。直接ディアボロを認識したわけではないだろう、隠れる者に向けた疑問の声だ。

「怪我人かー？ 今弱ってるやつを食おうとしているわけじゃあないからこつちに御出で、あんたも大変だろうか？」

特に警戒する様子もなく、ガタガタと瓦礫を踏み越えながら近づいてくる。

その他大勢の一人に関わる気はない。今は負傷者と思い近づいてきているが、それがディアボロだと、災禍の中心に近い人物だとわかればどう出るかわかったものではない。

隠れ離れよう、と意を決し動いた時、

「……あん？ ……なんで逃げる？」

姿を見せていないにも関わらず、その声は猜疑の念を含む。

物音は僅かだが立ってしまっただろう。しかしそれは喧噪に巻き込まれ消えていくはず、かつまだ実際に離れたと称することのできるほどに動いてたわけでもない。小さな足摺りを、それから離れようとする心を読み取っている。

浮かぶのは、僅かな笑みを浮かべた醜悪の体現。先刻出会った屋敷の主の顔。しかし、あれに類する力を持つ者がそれほど頻繁にいるとは考えにくい。

予知に目を通す。……そこには動かず、佇んでいる自分の姿。

「体格、足音、重量……人間かい？　もしかして、勇儀たちとやりあった」

それが示すのは対話。互いに顔を合わせる訳でもなく、しかし情報のやり取りは行う。確かに相手はこちらに気づき、その詳細に手を伸ばそうとしている。

だが、そこまで行き着いたことは認めるが、そこまでなら誰でも行きつける。決して相手だけが特別なものではない。

僅かな期待が湧いてくる。脚を止め息を殺し、動かないことで相手の二の次を待つ。

「……動かないね。凶星かな？　まあちようどいい。さとりから殺すな、逃がすな、とお達しが来てる。あんた一人でそこらをうろつくよりは私の所に来たほうがいいんじゃないかい」

待ちに徹した結果は、想定の一つではあるが面倒な側面を持つ内容。自身との対話を求めていたさとりだが、縛り付ける楔は緩やかだが確実にディアボロの周りを取り囲んでいた。

生け捕りとまで行かないところに疑問が浮かぶ。従属を望まず、あくまでの対等を望んでいるつもりなのだろうか。

そして、殺すなというのに、身を案じる言葉。相手も何を考えているか伺い知れない。

「……………」

「返事がないねえ。まあいいや、私は今からそっちに行く、会うのが嫌ならそのままどこかへ消えな。でもさっきの話を詳しく聞きたいのならそのまま止まりな。酒でも飲みながら軽くお話ししようよ」

こちらの心境とは裏腹に明るい声色でのこのこと近づいてくる音がする。相手が何者かの仮定を自分の中で決定し、疑うこともせず。

近づく相手の様子を伺い見る。黒い下衣から茶色い上衣を身に着けた薄闇の中では溶け込みそうな姿と裏腹に蓄えられた明るい金の

髪が特徴的だ。それは、闇から迫り害なす虫や獣、相手を狙う無感情の瞳を想像させる。

「止まれ」

「おお？ 意外と恥ずかしがり屋さんかな？」

静止の声かけに、相手は素直に応じた。その場で腰を下ろすと懐から何かを取り出そうとする。

「……待て、何を取り出そうとしている？」

「ええ？ 何って、一服やろうとしていたんだけど」

「やめろ、不用意なことはするな」

「……それは脅しのつもりかい？ まあ、やらかしてるんだからあなたが慎重になる気持ちはわからなくもないがねえ。……けどさ、あなたは妖怪を見くびってないか」

懐を探る手は動いたまま、休めるつもりもない。直接に視認はしないが、その様子はこちらを歯牙にもかけていない、という自信の表れだ。

気には食わない。拳から足裏まで、ゆつくりと力が走る。だが、それでも頭までは熱を通さず、そのままディアボロは語り続ける。

「いいや。恐ろしさは身に染みている。自らの領分を超えぬ、踏み入られぬようにするのは当然だろう」

「そこが甘い、って言ってるんだ。姿が見えようが見えまいが、あなたが私を認識できる範囲にいるならあなたを害することなんて造作もないって言ってるの。あんなだけの領分で考えている程度じゃあ、それを容易に踏み越えてくる奴なんてここには大量にいるってんだ。……たく、教えを請おうっていう態度じゃないね」

手のひらに収まるほどの小さな箱から、一本の煙草と打ち金を取り出し、かつかつと打合せ音を立てる。啞えたまま顔を落とし、僅かな目線だけがこちらを窺っている。

「……それで？ お前が話さないのならば他の者にでも尋ねればいい。領分の中で御せるものを見極めればよいのだからな」

「くくつ、まあその通りだ。それに、どうやらあなたに一番最初に話しかけているのは私のようだからねえ、それなら都合がいいってもん

さ。……私はヤマメ、黒谷ヤマメというんだ。本当は酒の一杯くらいは出したいが、まあ煙草の一つくらい、許してくれないかな？」

髪に隠れた二つの眼から線が交わしつつ、その妖怪——黒谷ヤマメ——は打ち金を鳴らし続ける。打ったびに飛ぶ火花が小さく小さく彼女の顔を照らす。

敢えて含ませるような言動を続けるのは、会話による拘束を続ける気だからか。それは、こちらを籠絡するためか単純に会話をしたいだけか。

「……」

「ありがとう、まあ一本で十分だからさ。……ふう」

様子見、無言の返事を肯定と受け取ったのか、打ち続けた金はようやく火を彼女の啞えた紙巻の先に点す。そこから生じる煙を彼女は胸一杯にため込むと先程の苦労を憂う様に虚空へ吐き出す。

いつか、嗅いだことのある香りが辺り一帯を包み込んだ。

「先程、さとりがどうのと言っていたな。何が触れ回られたんだ？」
「ああ、先の人間を殺すなつてこと、地底から出すなどということ。この2点だよ。あの性悪、どうしてもあんたをここに留めておきたいみたいだねえ」

蒔いた種に興じた事に心を良くしたのかヤマメは先ほどまでどこか探るような言葉の色があつたが、返事を皮切りに笑みを浮かべながら話します。

仮にも治める立場の者に対しての言葉とは思えないが、さとりに対する心証として、それを擁護する感情も浮かばない。それが、この地底に住む者の総意でもあるのだろう。

「アレが何を考えているか私にはわからんが……自分でも手に余っていた妹をどうにかした人間なんだ、きつと飼ひ馴らしたいんじゃないかなあ。覚が惹かれる人間なんてこれっぽっちもないんだから」

煙草を時に吸いながら、時に片手で弄びながら、一人友人に語り掛けるように話しかける。その視線の先、向ける煙草の火の先には明確にディアボロを捕らえている。確かに陰に隠れ、姿は見えていない、はずなのだが確実に。

視覚だけでなく体温や呼気など、別の方法で相手の存在を感知できる妖怪なのだろう。そういった存在は、往々にして厄介な存在だ。

「しかし捕らえてこちらに持ってこいとは言っていない。これは私の予想だけど、きつと地底というところを教えたいんだと思うよお？」
一見すれば壁に向かって語り掛けているような状態のまま。

「人間の心の闇、妖怪。人を襲い喰らうための存在、身内同士のはずの妖怪からも爪弾きにされた腐れども。それが私たち地底の民。人間が一人、既に手を出して後に引けない状態。そんな奴らの中に放り込まれて揉まれてき、かき回されてき」

それでも語り口は止まらない。

『心が読まれるだけ』な奴がなんて楽なんだろうって思わせたいんじゃないかね、アレはさ！」

その様は、見えぬ虚空に語り掛けるその姿は、辺りに漂う香りも相まって狂人のようにも感じられた。

だが、それは確かにディアボロ自身に、その内に潜む心に語り掛けていた。人間だから、という疎んじた感情、不意に現れた獲物に向ける喜の感情。計り知れぬところでもがく弱者を嗤う感情。様々なものを入り混ぜてぶつけていた。

ひとしきりに彼女は笑い続ける。小さく、それでも抑えきれず。

……次第に、それは収まっていく。ふくらみ続けた風船がゆっくりとしぼんでいくように。

「……………それは、お前たち全員が、あのさとりと同じだ、と言っているのではないか」

「くくく、くくつ、そうさ私だって同じさ、同じ穴の貉さ。自身では存外善良だとは思っているがねえ？ ……それで、なんだけどさ」

治まった笑みを、新たに煙草の煙で隠してから、やや身を乗り出すようにしてこちらに尋ねてくる。

その好奇に満ちた眼は、かつて、そしてこの幻想郷に来てから何度か向けられた光。その全ては、自分の中と、その身を、

「おまえさん、私に喰われてはみないかい？」

我が身に委ねろという命令だった。いつも形は提案であったが、そ

の実、こちらの意を介さないという強い意志がいつもあった。それは、今回も。

「……妖怪というのは、どいつもこいつも行きがけの人間を喰らおうとするのか」

唐突な言葉も、放たれた内容も、全てにうんざりする。別に自分でもなくともいいだろうに、何故こども輩はにじり寄ってくるのか。

「まあ怒らないで聞きなつて。さつきも言った通りあなたの事は殺すなつて通達がある。だが傷つけるなどは言われてないね」

先の発言に対してこうなるだろうとわかつていたか、笑みは崩さないままにフォローをするヤマメ。

確かに彼女の発言を信じるならば、その2点に無事は問われていない。死ななければ何をしていても大丈夫、という意味は含まれているだろう。……想定内だ。かつて、そのような指令を下したことはゼロではない。

「それに通達は全てに行き渡つていとは思わない。思えない。……それに、事故の可能性はゼロじゃないし」

さとの影響力、行動力。それは確かに治めるもの、過去の自分と同じなのだ。下に並ぶ者は別としても、下した命令に対しては全て合点がいく。

「結局妖怪は人間ありきで成り立っている。あなたは強く逞しく、狂つておらず。……何より、ウマそうじゃあないか。……ああ、話がずれたね。もしあなたが死に、その身体が出てこなくなつても、皆が知らぬ存ぜぬで通せばさすがのあいつも何もできない。でも誰かの庇護に既に入っているのなら、その状況では諍いが生じる。さとりに限らず、ここは、案外そういう不和を嫌うから……結局、あなたを欲しがっているのはさとりだけじゃあないつてことさ。おそらく勇儀も、あんどきや頭に血が上つて堂々と宣言しちゃったけれど、今あなたに会えたらきつと籠絡する。永遠に鬼に目を付けられることと引き換えに、一番安全な位置につけるかもねえ？」

そして、改めて自分の立場を理解した。好奇心は猫を殺す、という言葉もある。闇の中に身を浸そうとだけ思っていたが、地獄の釜の底

は、愚かな人間を容易には登らせないこと、ゆるゆると下るにつれてそれを察し、底で改めて理解した。

甘く見ていたのは確かに自分だ。だが、まだ。

「ふふふ……まあ安心しなよ。私だって若造じゃない。普通の人間ではできないようなこと、たあつくさん、愉しませてあげるよお……？」
肺を満たした空気を換えがえ、その度に煙草の煙と、付随する香りが辺りを占める。その独特な甘くも感じられる香り。

地底の入り口、橋で出迎えたあの香りとよく似た、そしてそれはかつてイタリアでも、いやどこの世界でも表舞台上に上がらないだけでいつもどこかで蔓延していた匂い。

「……お前の色事情には興味はない。だが……度々この地底に来てから気にかかる。橋姫とやらも吸っていたな」

「ああ、これが気になるのかい？ 私が使ってるのは大したものじゃあないけど……これでも、キメれば底なしだよ？ 上とは違ってね。ここには太陽がないから、いろいろと外れてるものが多いさね。……それでも、いやだからこそ、結局はこういうものに頼っちゃうってこと」

吸うかい、と小さく灰を飛ばしながらこちらに向ける。元々こんな場所で、それらが栽培、製造されているとは思えない。聞いた知識、外の忘れられたものが流れ着くと言われても、それらは永遠に流れ着くことはないだろう。正確な定義は以降だが、有史以前からそれは人間たちと共にあったはずなのだから。

幻想郷は、あつて当たり前と言われそうなものはあるものだ。国柄故に島国のそれに依るが、例えば食物などは全く見慣れないものではなく、草木もいずこでも見られるものだった。

それは、最初から幻想の中にも存在していたのだろう。

「知りたいってえなら……あんたの種を受けてからだねえ。それが嫌なら探してみなよ」

これ以上話につき合っていたら、彼女の領分に飲まれるかもしれない。それに、問いたいことより興味のあるものが出た。

あれを下すための物に繋がるかどうか、と言われれば関係ないのか

もしれない。しかし、それは上で見なかった、確かな闇の一つだ。

心を読む者に対する、心の暗幕。

何も言わず、その場を立ち去る。痕跡を残さず、何もいなかったように。

秘匿されているのは当然だろう。だが、暗部を治めたという自負がある。その道にしかわからない匂いを感じ取れる嗅覚がある。

信じるは己だ。

「て、ああ、あらまあ。……あんだ、いつでも見てるよ」

表立って出せないということは、その理由故に隠されているという事。様々な理由があるだろうが、関わっていることに薄ら暗いことを理解していること、それを使用するのが恥だということを理解しているということ。その恥が、後ろめたさが大きいほど、尚更それは暗くなる。

『それ』は隠れて使われているわけではなかった。だが、決して大勢に受け入れられているものでもないのだろう。もしそれが公に出てもよいものであるならば、もう少しあの香りが地底の都市全体に馴染んでいるはずだから。

咎められるわけではないが、表立って使われるものでもない。自治を担っているようにも見える、あの鬼たちには好かれていないのかもしれない。一応統括である、館の主は認めていないのかもしれない。理由はわからないが、とりあえず見える事実だ。

……だからこそ、近づける理由になる。まさしくそれらに浸っていた事実。治めていた経歴。言葉では言い表せないカンが、至る道筋を導き出す。

例えば光。元来堂々と取り扱われていなかったからか、今この荒れた状態でも表立たない。隠されて取り扱われていたものの行方は変わっていないだろう。自然に明るく照らすものはなく、全てが人工の灯りに包まれているこの地底世界、それでも外の世界と比べれば意味合いは大きく異なってくるが……、灯りというものは生き物に安寧を与え、そして必ず影をもたらす。隠されるものは、与えられた安心から目を背けられるように少しずつ、少しずつ、確実に光の外へと追いやられる。望もうが望むまいが。

例えば匂い。目に見えなくなつたものでも、それはどこからか必ず、存在を主張する。追いやられたことを恨むかのように、忘れられない、忘れさせないという様に。目に映る光の像を全て隠せば、僅かに放たれる香りを必ずその場に残す。どれほど密閉して隠そうが、その香りはいずれ小さな綻びを見つけ漏れ出てくる。隠すということ

は、いつまでもそれらに気を配り続けることだ。

今回求めるものが個人のものであれば、それはとても厄介だ。一人の意志は固く、故に秘匿は強固となる。だが、求めるそれは隠され、それでも自分だけでなくその他大勢に求められているもの。決して多数派ではないが、しかし全員の両の手では零れ落ちるくらいには。

綻びを、残り香を、影に潜む闇を。ディアボロはそれを求めて都の外へ外へと進んでいく。地霊殿のほうでもなく、およそ対極の入り口の橋でもなく。土地勘の無い彼にとってまさしく未知、騒動によって崩れてしまった概容は目印にもならず、道を違えれば戻することは困難だろう。

だが、構わず彼はただただ辿って行った。

できるだけ存在を感じつかれないよう、もしこちらに気づかれたのなら痕跡を吹き飛ばし。……ひっそりと佇む一つの扉にたどり着く。

騒ぎがあった中でも、中心を外れれば外れるほど目に見えるほどの被害は少なくなってきた。そんな中の、住居と思しき家屋の中、裏への道を隠すように立っている扉。存在を隠しているわけではない。だが、平時であるならばその先にわざわざ興味を持つこともないだろう。異質さを感じさせることはない、そんなもの。

離れれば離れるほど、人気は薄れ、消えていく。ぽつぽつと漂う生き物の気配は、そんな隠れた扉の奥から滲み出ている。

ゆっくりと手をかける。扉の前から、手の先から、感じ取れる香り。手入れのされていない蝶番が奏でる軋みと共に、確かに濃くなっている。

最初に出迎えたのは、暗闇、地下へと続いていく階段。どこまでもどこまでも飲み込んでしまいそうな闇に点々と小さく道標が灯っている。餌を捕らえるための誘蛾灯、大口を開け構えているようだ。

その腹の底へ。

「……おや、来客かい？」

最初に出迎えたのは、視覚よりも強烈に飛び込んでくる臭気。堆積し凝り固まった老廃物の発する吐き気を催す臭い。それを無理矢理上書きするような葉の燃える甘きとも取れる刺激臭。……それらを少し吸い込んだだけで、脳内が明るくなるようだ。

ディアボロの視界に僅かに知覚できるのは階段から続いている転々とした小さな、ろうそくの灯火程度の光、何かを焼き焦がした時の灯り。

「すまない、香のせいでわからないんだよ。……ここは安全だよ、上とは関係ないから……ヒヒツ」

赤い襪切れをまとったそれが小さく呻くように話す。歓迎しているのかもわからない、ぼそぼそとつぶやいているようにしか聞こえない。薄らと視界に移るその顔は、同じく照らしているはずの光すら認識できていそうにないほどの盲であるようだった。

ただ音がしていた方向に向いてみただけなのかもしれない。現れた者を正確に認識しているかどうかとも怪しい。僅かに震え続けている身体、もはや肌の色もわからないほどに薄汚れた醜態、それに比例する醜悪な顔。理由なく虐げられることに否を上げることすら戸惑わさせる。

「……なあ、あんた、もしかして俺の友達じゃあないか？ いや、友達だなんて不敬だけど、でもきつ」

ナメクジのようににじるよるそれに嫌悪の言葉の一つでもかけようとしたディアボロは、突然の衝撃を予知する。

暗がりからの悪意、ただ目の前の呆けたそれと同じように過ごしていたらその衝撃に巻き込まれ危機に落ちていただろう。妙に痩せ細ばった身体の、ずだ袋を持った男が、その体軀からは想像もできぬほどの膂力をもって襪切れのそれを蹴り飛ばした。その先にいる者を諸共纏めて蹴散らす目的で。

哀れなそれは、小さな呻き声と水分の詰まった袋がつぶれる音と共に闇の中へと消えていった。わざわざ目を凝らせばその結末は知ることのできるだろうが。

「……………人、間。どうして、こんなところにいる」

腐った歯根しか残っていないような口から唾液と共に吐き散らされる言葉は疑問。黒い襷褌を被った男は明確にディアボロを認識し、存在を明かそうとする。

「お前た、ち、なんぞにやるもん、なんてない」

過度に力の籠められた拳はブルブルと震え、襷褌の陰から除く瞳は明らかに視線の焦点が合っていない。やや目の前のものに当たっている程度。その光がわずかに映す姿が何に見えているのかはわからないが、ただ明確な敵意だけを訴えている。

「表がど、うだ、と知った、こつちやない、こ、こ、こまで明、かすのなら」

「……やや品質は悪いな、このような場所ではこの程度か？」

しかしディアボロには関係ない。屈みこみ、散らばる粉末状のそれを一つ摘まみ上げる。少なくとも自分の常識で、という根拠からだが今手元にあるものはあまりよろしいモノではなかった。彼からすれば、目の前の暴力など何の障害にもなりえないと判断できる程度。

質問に答えず、あまつさえ無視を決め込まれた男からすれば、その行動はただの侮辱でしかない。一欠けらの情けの言葉を踏み躪られたその衝動はたやすく頭に血を登らせる。

「ぎ、ぎひゅうういっ!!」

閉じ切らない口から泡とともに激の感情が噴き出てくる。携えたずだ袋を、中に何が入っているかわからない赤く染みた袋を振り上げ、彼をその一部にしようとする。

だがそれは起こりえない。男はディアボロのそばに立つ精神の像を認識できていない。とつくに確認済みであり、そんな大振りをする間にほんの少し、眼球でも突いてしまえばいい、その奥、脳の髄まで。その準備がとうにできているのだから。妖怪という、以下に人間より強大なものであろうと、鬼の首領と僅かながらに交えた彼は、それに劣る者との明確な線引きはできるようになっている。

……だが、それは起こりえない。

「暴れるの、禁止」

幼い声が辺りに響くのと共に目の前の男の動きが止まる。男の身

体で塞がれていた視界の陰には、小さな照明を持ち、中に射線の入った赤い丸のついた得物を携えている少女がこちらを向いている。視線と共に得物を向けて。

おそらく、先ほどの声も彼女だろう。自分の身の丈ほどの得物をこちらに向けているまま、手に持った照明を床に置く。僅かな光でしか灯されていなかった部屋に十分な量の光がもたらされ、辺りの状態を詳しく教えてくれた。

いくつかのごみ溜め、そこに寄り添うように横たわる者。膝を抱え座り込みながら厄介事を避けるようにこちらを見つめるもの。我関せず、眼前の器具から焚かれる煙を吸い続ける者。直接体内に取り入れるための機器と共に倒れ伏している者。

一様にして貧者と形容するにふさわしいまともな状態のものではなく、もはやそれらが生物なのかどうかほども怪しいところだ。……だから猶更健全なディアボロも浮いて見え、また奥から現れた赤の少女も彼らに馴染まない、目立った汚れのない姿だった。

「ここでは厄介事は禁止だろう、何のために私がいると思ってるんだ。傷の舐め合いはいいけど糞のぶつけ合いはやらないだろうか？」

襤褸を着た男の背中をとんとんと突くと、胡乱げな顔のままゆつくりと手を下ろし、威圧するかののように床にずだ袋を叩きつける。辺り一帯に埃と粉塵が舞い上がり、否応にも二人の呼吸器を汚そうとする。

最も、それはディアボロだけであった。少女は顔全体を布で覆い保護している。むせこむせディアボロに対して空いた手で下がるように手を払う。

「お前さんも帰りな。偶然でこんなところまで来るなんてありえない、誰かの紹介だろうが……人間に流す物は無い。お帰りはあちら」少女の素振りは交渉の余地はない、と雄弁に語る。自らの意思とは裏腹に強制されているような感覚をも覚える。

だが、それでおいそれと引き下がるわけにはいかない。それほどことは単純ではないのだ。

「吸煙のものだけかと思ったが……それは一般に出回っているものだ

けか？ そいつらが使っているものは原料は？ ……精製が甘いのは、それは知識がないだけか？」

「……何言ってるんだお前」

顔は半分見えないが、それでも言葉尻と目に浮かぶ表情は疑問。だが、周りの空気は一瞬どよめく。

「察しの通りただの人間だ。妖怪だか何だか知らないがそれらに溺れている姿を見てしまえばお前たちも人間と大差ないように見えるがね」

「だから何が言いたいのさ」

相変わらずわかったような顔をしていない少女だが、周りは聞き耳を立てているのがわかる。

求める理由は様々だろうが、結局のところ更なる快楽を求めているのだ。それは生きる者の全ての欲求の根源。

「……何も。言われた通りここから去ろう。正規は別だということが分かった。お前には何の権限もない、ならば話す必要はない」

だからこそ一度去る。敢えて内側を見せ、周りの反応を窺う。変わらず赤の少女は大きな反応はない。厄介事が去ろうと清々している様子すら感じられる。

周りの者は別だ。より深く、じいつと粘つくような視線を飛ばしてきている。先程の襤褸を着た男も敵意の中に別の意を乗せている。

あとは掛かるのを待つだけ。そう考えたところだった。

「やあやあ、そいつはちよーつと、ちよこーつとだけまずいかなあお兄さん」

入口から声が聞こえる。足音は聞こえない、いやかなりの小さな音。その声は、少ないが聞いた覚えのある高さ。自分に権力が無くとも、自分の仕える者が高みにいることを十全に理解している、笠に着た賢い者がだす猫なで声。

「ここで話すことはないのはいんだけどねえ。それだけならいいんだけどねえ……いやあ、相も変わらず酷い臭い！」

現れる前では常に傍らにあった押し車はさすがに持つてこれなかったのだろう。空いた手は立ち込める悪臭を抑えるための布を持

つのに使われている。

蔑みを込めた声と共に、さとりのペットの一人が顔を出す。

「……おまえ」

「あはは、皆さんお勤めご苦労様です。お兄さんも奇遇だねえ、こんなところで会うなんて。……こんな、場末のところ、さ」

含みを持たせるようにもったいぶり、顔の半分は隠れていてもにやっついているのがわかる。偶然を装って、しかしそれは吹けば飛ぶような演技で。……あの飼い主に似るように。

「……お前だ、ちが、押し込んだくせに……」

ゴミ袋のように縮こまっていた一人がぼつりとつぶやく。突然の喧騒に消え入りそうだが、それは確かに聞き取られたのだろう。燐の頭についている二つの耳がどちらもピクリと動く。

そのまま、しつぽをゆらゆらと揺り動かしながら、そちらには特に気にかけない様子で、

「赤河童さんも大変だろうにねえ。売子だけじゃなくてここにも顔を出さなきゃいけないなんて。あたいは何も言わないけどさ。もちろんさあ！」

「……けー」

より面倒になった、と赤河童と呼ばれた少女は顔をしかめ視線をそらす。燐は変わらず笑みを浮かべ続けたままだ。

彼女の登場で、新たに調べることもできた。また、入手も難しくなっただろう。……もちろん、それが彼女の狙いなのだろうが。

どちらにしろ、今ここで足を止めている必要はなくなつた。入口からこちらに向かって歩いてくる彼女の横を通りこの空間から抜けようとする。

「おっとつとお兄さん、あー、河城さんやいつもの2本もらつていくよ。待ってつてばー」

「あ、おまえー！」

ディアボロを追うように、赤い少女からひったくる様に何かを受け取ると、そのまま後を追ってくる。

結果、二人がああ空間から出る事になった。……ディアボロはま

だ何も得ることはできないままに。

「待ってってってばー」

白々しく笑顔を浮かべて燐が追いかけてきた。少し先の家屋の陰に滑り込み、ディアボロは彼女の出方を伺う。接触が可能であるなら、僅かに離れ、人に見られぬところが良い。

程なくすれば、いつもの押し車を傍らに燐が顔を出す。

「お兄さんったら、まったく面白いところに顔を出すもんだねえ。さとり様に誘われた直後だつてのに、こんなところにまで来るなんて、ねえ。……くふふ」

「……頭の中に引つかかることがあつてな。一応は解放された身だ、自由を得たのなら拭い切れぬ違和感の確認しておくに越したことはない。……あのネズミがいればもつと楽に事は進んだのだが」

「ああ、あのネズミねえ。なんで先に帰っちゃったんだろうねえ」

何も他意がなければ、絶やさぬ笑みは彼女の魅力と捉えることができるだろう。青ざめた意思を持った時も、その表面は笑顔を繕っていた。最初の邂逅でも、心配を過ぎれば同じ笑顔を取れるようにと常に声をかけていた。共に過ごす時間をより良いものであろうとするその努力はそれは良いものだ。

……だが、今はそれだけでは済ませない、終われない。

「いやー、しかしお兄さん、こういうの興味あるんだねえ。まあ都でも使うのはちよこちよこいるんだけどさ、いきなりこつちまで来ると思わなかったよ。土蜘蛛さんとかから仕入れればよかったのに」

「……上では使われているのを見なかったからな。陰では使われていた、のかもしれないがそれでもここほど大っぴらじゃあなかった。……それに、ここは籠りすぎている」

「こもり？」

キョトンと、大きめの目をさらに見開いて愛嬌のある顔をこちらに向ける。

「始めに橋姫とやらが使っていた。そこで気づいてからはもはやこの

街にはその匂いで染まっていることに。随分と簡略的になっている、だからこそ誰も彼もと使われているんだろう？ お前も、その一人ではないのか？」

その猫の瞳に向けて問い詰める。

開いた眼をきつく細めると口の端を少し歪ませ、小袋を車から取り出す。中からは小さな筒状のものが二つ。

「違う違う、あたいはこういうのあんまり好きじゃあないんだよね。たまに使う分にはいいけどさ？」

くるくると手で弄びながら、笑みを作りながら言葉を続ける。その笑みは愛想を振りまく笑顔ではなく、上下を理解させるために見下ろす笑顔、愉悅に浸るための笑みに代わっていた。

「ずっと使うほど病みつきになってはないんだよ。それだったらお酒かマタタビのほうがまだいいなあ。猫っていうのはそういうものね。まー、テキトーな時には使うよ、これは、悪いものじゃあないからね。……で、お兄さん」

燐の雰囲気が変わる。変わった笑みに基づく暗い空気。返答次第で対応が今後大きく変わるぞ、という意味表示。

「随分容易にこういうところまでたどり着いたよね……『知っている』みたいにさ」

「当然だ。馴染みの深いものなのだから。追い詰められた者たちを容易に底辺に張り付け、またそこから利益を吸い上げることができる。雑巾の絞りかすどもは苦しくも恨んでも地べたを這い続け、それでも吸い上げられることしかできない……流通させる一つの面は『ソレ』だ」

「……ほう？」

それを受けて、敢えて饒舌に。臆することなく、押されることなく。かつての経歴をほんの少しさらけ出す。

「奴に相對している以上内面が読まれていることはわかっている。その部下のお前がどういう理由で俺の前に立っているかもおおよそ。こちらを探ってみて、最初から思っていたが、お前の登場で確実となったよ。そういったものの流通が、治める者にとってどれだけの事

案であるかはよくわかっているからな」

「うーん、うーん……」

得たものは僅か、そこから導き出される言葉も論拠に乏しい。ただそこにあるのはそうだろうと思ひ込んでいる自分だけ。

それでも、燐はまた目を丸くし、悩ましげに頭を揺らす。

「一応言っておくけどさー、あたいもあそこは知ってる、けれどどこまで何までやってるかは知らないよ？ ああの河童さんがたまに売り子やりに都まで来るからさ、顔くらいは知ってるけどね」

頭を少し横に倒しながら、同じように饒舌に。元々口に回る女だったからだろう、軽薄な様子は変わりはない。

「それに、形はどうあれさとり様はお兄さんを歓待しているんだからさ、あーいう危ない所に行くのはやめてほしいかなー。お兄さんが傷ついちゃったら、さとり様悲しむよ」

「都合を押し付けるな。あれで歓待していると宣うのなら、お前らの流儀も知れたもの」

「まあまあまあ。とにかく、あれはダメだよ、ダメダメ。けどほら、都で使って平気なのくらいならいいし、他にも何でもしちゃおうよー」

言葉と共に、手に弄んだそれを持ちつつディアボロに飛びつこうとする。わざとらしい抱擁を願う動きを容易く避けると、たたらを踏みながらさらに陰へと入る。

「……いけずう。けどさ、本当。できることなら何でも。……ネズミを連れていたし、お兄さん、小さいほうが好み？ それともやっぱり大きいほうがいい？ お空とか……結構、上手だよきつと」

ただでさえ暗い陰の中、奥よりか細く声を落とす。

「あたいはさ……別にここでも」

小さく、青白い炎が二つ生まれ、その陰の、彼女の姿を照らす。衣のずれる音が、僅かに見える肌の色が、ぼやけた輪郭が煽ることを知っている。

「……この奴らは、みんなそうなのか」

「違うさ、お兄さんだから……だよ」

肯定を待っている。小さな炎が彼女の顔の近くへ飛び、いつの間に

かくわえていた、あの時に受け取っていた紙巻に火をつける。移った火は、いつもと変わらぬ色をしてほんの僅か、唇と僅かに瞳を照らしている。

最初に嗅いだあの匂い。……そういえば、あの時、これを嫌っている者が一人いた。

「そうか、……ならば」

陰に一步、踏み入る。それを見て、一つ炎が消え、また一つ消え、残るのは小さな火ばかり。

僅かに照らされている中で、燐は彼に向けてもう一つの紙巻を差し出し、それを受けて。

ばきん。